仮面ライダー　Episode　DECADE

ホシボシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面ライダー　Ｅｐｉｓｏｄｅ　ＤＥＣＡＤＥ

【Ｎコード】
Ｎ９８２３Ｓ

【作者名】
ホシボシ

【あらすじ】
ヒーローが好きな高校生、司はある日友人の小野寺ユウスケらと共に特別クラスへと移動させられてしまう。
突如現れる怪人、浮かび上がるライダーの紋章、破壊者、世界の崩壊
意味が分からないまま非日常へと引き込まれる１７人の運命は？
彼らは自分達の世界を救う事ができるのだろうか？

第1話（前書き）

注意！
この小説は、原作仮面ライダーディケイドを基準にしています。
しかし、オリジナルキャラクターや、原作と同名のモノでも設定が大きく異なる場合があります。
そう言ったものが苦手な方は申し訳ありませんがお奨めできません。

初小説なのでいろいろおかしな点が多いとは思いますが、少しでも楽しんでいただける様に頑張ります

第1話

声が…聞こえる。

「お前の――」
それは…男。

「お前の――」
それは…女。

「お前のせいで――」

それは・・・
子供、老人、大人。

男とも女とも分からない不思議な声が聞こえてくる。

世界は真っ暗で、俺はどこからソレが聞こえてくるのかが全く分からない。
何も見えない。
何も感じない。

だけどハッキリと俺の耳に聞こえてくる「声」…

「お前のせいだ！」

世界に色が溢れた。世界は形を創り、暗闇からの解放を果たす。

（！）

そこは荒野だった。

何も無い、

何の面白みもない、

ただの荒野。

よく見るとそこに男が立っている、帽子を被っていて顔を見る事は難しいが…。

男はゆっくりと俺の方へ視線を移す。

いや、もしかしたら俺の後ろかもしれない、それとも前だろうか？

（！？）

振り返ろうとして俺は息を呑んだ。

首が無い！

いや…正確に言えば俺自身が存在してない！

声も出せないし、
あると思ってた耳も、
目も存在していなかった。

まずそもそも俺は今、息すらしてない！何だよコレ？

「お前のせいで！」

ビクッとしてしまう。
いきなり男が大声で叫んだからだ、ソレ俺に言ってるんだろうか？

「お前のせいで壊れてしまった！この――」

なんなんだよ、何でそんなにキレてるんだよ俺が何したって・・・

「世界が！」

「・・・ぁ」

目を覚ますと見慣れた天井。

「夢かよ…くそっ」

変な夢だ、早く目が覚めてくれて助かった。
変なおっさんに怒られる夢なんて誰が見たいものか。

今日は学校だしちょうどいい。もう起きよう

「今…何時だ?」

部屋の時計に目を向ける、時計の針が示すのは午前8時50分。学校が始まるのは9時である

「・・・」

あぁ・・・夢ならいっそ覚めないでくれ・・・

「待ってくださいよぉ。司(つかさ)くーん…」

後ろから気の抜けた声が聞こえてくる、仕方ない。俺はやれやれと思いながら走るのを止めて立ち止まった。

「遅いぞ夏ミカン！早くしないと遅刻だぞち・こ・く！」

「誰のせいですか、誰の！あと私は夏ミカンじゃなくて夏美です！」

夏美の言葉に思わず目を反らす。

今日俺達二人が遅刻したのは間違いなく俺のせい。

俺が昨日の夜にアイツを半ば強引に引き込んでＤＶＤを最初から見直してたのが悪かったか…。

おかげで寝坊はするし意味不明な夢までみるし…

気が重い。弟の亘（わたる）からまたお叱りを受ける事になるのか俺は…

「わ…悪かったよ。と、とにかく走るぞ夏ミカン！あと五分しかない！」

ふと自分が手に持っている体操着を入れた袋が目に付く。
赤い体操着入れ、コレは夏美が俺に買ってくれた物だ。

なんだかんだ言って俺はコイツを置いて先に学校にはいかない、
いろいろ世話になったからな。
行くなら二人一緒に行く事にする。

「五分！？あ、あと私は夏美です！」

最後の訂正は無視して走り出す。
遅刻をすれば叱られるだけならまだしも反省文を書かされるかもしれない。

そんなのごめんだ、
今日は見たいテレビのの再放送があるのに、残しとかありえん。もう絶対嫌だ

「司君っ！」

「え？」

「おっと！」

放課後の事考えてたら前が見えてなかった様で、俺は向こうから走ってきた男の人とぶつかってしまった。
そこそこの衝撃で、俺と男の人は持っていた持ち物を地面にぶちまけてしまう。

「あっ、すいません」

「ははっ、気をつけてくれたまえよ」

…偉そうなヤツだな、
まあ絡まれるよか百倍マシか。

あ、この人俺の体操着入れと同じ袋持ってんだな

「って、そんな事考えてる場合じゃないか・・・」

悪いのは俺なんだし、一応もう一度謝っておく。
男はさらりと俺の謝罪を受け流すと、袋を持って走り去って行った。

「司君…」

「え？」

「…あと…二分です」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「全力で」
「走りましょう」

「はぁはぁ・・・オエッ」

「な…なんどが・・・ばにあっだ・・・」

「お前等…どうしたんだよ?」

朝のパンがハイパーキャストオフしそうになるのを堪えて席についた。

なにかクラスメイトの小野寺ユウスケが話し掛けてきたけど…とてもじゃないが喋れる状態じゃない。

「昨日遅くまで二人で仮面ライダーでも見てて、寝坊、そんで遅刻

…違う？」

「おぉ、薫」

ユウスケの後ろから空野（そらの）薫が顔を出す。
薫のヨミが的確すぎて俺は言葉を失った。実際喋れんのだが…

「ちょ、お前またライダーで遅刻かよｗｗ司、自重しろ」

俺の後ろの席で笑い声がする。
同じくクラスメイトの守輪（すわ）椿（つばき）だ。

いつもノートパソコンで何かしていて、
いわゆるオタクと言う奴だ。

「しょうがないだろ、男の子のロマンなんだからッッ！」

「それは認める。俺もいちお龍騎と電王は見たし、
　でも俺はどっちかってと起動戦士ガンパム派なんで」

「ぐっ…、ユウスケはどうだ？分かるだろ？」

「え～、おれは平成ライダー見たことないしなぁ」

「くそが・・・ならしょうがないな」

「え?何か言ったか司?」

「扱いの悪さに定評があるユウスケ乙」

「え?ええ?」

暫くした後、担任がやってきて朝のあいせつを済ませる。
ここからいつもと似た様な学校が始まるのかと思ったが…
いきなり担任が俺達五人に校長室に行けと言ってきた。

だから今はこうして皆と校長室に向かう途中だ。

「なぁ俺ら何かしたっけ？」

「さあ？でも校長に呼び出しくらうって普通じゃないわ、
あ！さてはユウスケ…アンタ…まさか…何かやったんじゃ」

「えぇ？何でおれなんだよ」

「あーアレか、前に全裸で×××とか×××に×××した事ばれたんじゃね？」

「…ゆ、ユウスケが例え変態でも私はとッ…友達ですよ！」

「してない　してない　してないよー！」

下らない事言ってる間に俺達は校長室の前にやってくる。

「き、緊張するな・・・誰が開ける？」

「ユウスケお願い！」

「た、たまには薫がやれよ！」

そう言ってユウスケは薫のポニーテールを掴む。

「きゃ！つ、掴まないでよ！」

若干赤くなった薫がユウスケを軽く小突いた。

いや、

本人は多分軽くだったんだろう、

だがユウスケは回転しながら大きくよろけて、そのまま校長室のドアをドミノ倒しの様にぶち破る

「すいませんすいませんっすいませんッッ！」

俺達の華麗な土下座と、

夏ミカンが必死に謝ったのが良かったのか特に怒られることもなく

事を終えた。

いや、本当に良かった良かった。

「あ、待ったいたよ」

中にいたのは当然校長。俺達は一列に並んで暫く沈黙する。

「あー、今日君達に来てもらったのは…」

校長は若干言いにくそうな感じで俺達を見る。

「な、なんでしょうか？」

沈黙に耐え切れないのか、夏ミカンは校長の言葉を待たずにそう言った。

校長はため息をつき、もう一度俺達を真っ直ぐ見て口を開く。

「君達にはクラスを変わってもらいたい、今いる二年一組から、特別クラスにだ」

一瞬の沈黙…

「はぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

結局俺達は再び校長に土下座する事になるのだった…

第1話（後書き）

すいませんッ、展開は遅いです

更新は頻繁にしていきたいのですが、都合により時間が空く事もあるかもしれません

次もよろしくお願いします

第2話（前書き）

結構登場人物多い＋一気に出てくるんで人物表でも後でつくろうかなと思ってます

第2話

クラス替え

正直この場にいる誰もが校長の言った事を冗談だと思っていただろう。

だがソレから数分も経たない内に俺達はクラスから荷物を全部持っていかれ、
さっきまでいたクラスの名簿から名前を消された。

ソレだけじゃない、その特別クラスで俺達が最初に出会ったのは・・・

「お前っ、なんでここに!?」

「に、兄さんっ?」

「あ…皆さんこんにちは」

そこには弟の亘と亘の友達、相原我夢(あいはらがむ)もいる。
この学校は一貫教育制の為、小中高が一緒になっている訳だ。

尤もだからといって自由に校舎を移動できるわけでは無いが…

「何でこんな所にいるんだ?今は授業中だろ?」

「兄さんもだろ、ボクは校長の指示でココにいるんだ」

「は?」

「いきなり呼び出されてクラス変われって言われたんだよ。意味分からないね正直、特別クラスって言われても実感わかないし…」

「ちょ、まじ?俺らもなんだけどｗｗ」

「え?」

「く、クラス表は?」

薫は教卓の上にあるクラス表に目を通す。

「ちょ、私達同じクラスなんだけど…」

「はぁ!?亘くん達ってまだ中学生だろ?」

「おいおい、いくらなんでも超展開ってレベルじゃねーぞ!

今時ワンクールのアニメでも見ねぇよこんなスピード展開」

「私達の知能レベルが中学生程度だったって事？」

「えぇ？いくらなんでもそれはないんじゃないですか？
私達ってそんなにアホだったんですかぁ！」

夏ミカンが涙目になってクラス表を見る。中学生と同レベル？

「ありえないだろ普通に考えて、俺達より頭が悪いヤツなんて山ほどいる。

我夢、中等部でここに来たのはお前等二人だけなのか？」

「いえ、僕達の他に二人です。里奈ちゃんと、アキラさんもです」

「あ…うん、あったわ。野村里奈ちゃんと天美アキラちゃん」

「あぁ、たしか…里奈って」

「うん、足が…だから、その…車椅子なんだ。だからアキラさんが手伝ってくれてる。もうすぐ来るよ」

そう言えばいつも亘が早起きしているのって里奈を迎えにいくって理由だったな。
この学校は一応バリアフリーの面でも特化はしてるが着替えやらは手伝ってもらわないとキツイと聞く。

「とにかく中等部からは四人だけなんだな薫」

「そうみたいね、あとは高等部…男子八人、女子八人のクラスみたい」

「少なくね？他に誰いんの？みしてみして」

椿はクラス名簿を薫から受け取ると、それに目を通した。

「お！新聞部結構いるじゃんキタコレ！」

椿は新聞部に入っている。
俺達は違うが、椿のおかげでメンバーとある程度交流があった。まあ知り合いが多いのはいい事だな。

「――っ！」

だが椿の顔が一瞬で真っ青になる。
どうしたのかと聞いてみても椿は全く答えない、
いつもの様子ではなく、何かに怯えているようだ。

「嘘…嘘だろコレ…マジありえんから…いやいや嘘だって…」

なにやらブツブツと椿は言っているがイマイチ分からない。

顔はますます青くなり、

まるで陸に打ち上げられた魚の様に口をパクパクさせている。

本当に大丈夫か！？

「嘘じゃない」

「え！？」

後ろから声がして振り向く。

そこには俺達と同じ二年、けっこう美人の生徒がいた。

鋭い目つきと綺麗な黒い髪が凛々しさを引き出している。

少女はつかつかと椿の前に迫っていき思い切り顔を近づけた。

しかし笑みを浮かべていると思いきや目は笑っておらず、

椿は今にも失神しそうだ。

「現実だ」

「ひっ…広瀬ぇ…咲夜ァァ…なんでおまっ…ここにぃ」

こんなに体調の悪い椿は初めてかもしれない。
今のコイツの怯え方は異常と言ってもいい、
そんなにこの咲夜と言う少女が怖いのだろうか？

「ワ・タ・シもっ！このクラスなんだよぉ、
椿ぃィィ嬉しいよ同じクラスになれてぇ。

ワタシはお前と同じクラスになりたかったんだからな」

普通の椿なら泣いて喜びそうな場面だが、とうの本人は白目をむいている。

「ふっ、二人はどんな関係なのかなぁ…なんて、ハハハ…」

この空気に耐えられなくなったのか、ユウスケが遠慮がちに聞いた。
グッジョブだぞユウスケ！

「ああ、すまない。ワタシとコイツは幼馴染みなんだ。ワタシの実家は道場をやっていてな、コイツも通っているんだが…」

「え？そうなの？聞いた事ないけど」

「さぼっているからなぁぁ！」

「ひぃいいいい！」

咲夜はその手を教卓に打ち付ける。椿は思い切り仰け反り床に倒れこむ。

「貴様からやりたいと言い出したのに三日も続かんとはなぁッ！」

「いやだって――っ？」

椿が後ずさりしていると背中に何かが当たった。

「っぁ？」

足だった、ゆっくりと椿が顔を上げる。

そこにいたのはまたも二年の女子と男子だった。

俺は見覚えがあるがいまいち思い出せない。

「ぎゃあああああああ！」

いきなり現れた二人に椿は叫び声を上げて逃げるように後ずさる。

だが逆に咲夜に近づく事になった訳だが・・・

「お帰り椿ィィィ！！」

「ぎゃあああああああ！」

「はぁ・・・」

もういい、ほっとこう。俺はいつのまにか現れた二人に話し掛ける。

「フッ…俺は天王路、天王路双護（てんのうじそうご）だ」

「ボク…天王路真由（てんのうじまゆ）…よろしくね…」

いつもの椿なら間違いなくボクっ娘キターとか厨二キターとか言うだろうが…

「椿貴様ァァァ今あの子のスカートの中を覗いただろうぅぅぅ！」

「もうやだー！この女どうにかしてくれー！」

「・・・・・・・・・・」

まだやっているのかと呆れつつもう一度二人に視線を移す。

「・・・ぐぅ」

さっきまで話してたのに真由は座ったまま寝ていた。

「え？あ・・・寝ちゃったみたいだな・・・？」

兄だろう双護の方を見てみる。

「・・・こいつ等」

双護は目を開けて寝ていた。なんてアクの強い奴等なんだ…

「ここ…みたいだね友里ちゃん」

「うん、あ！もう誰かいるみたいよ拓真」

そんな声と共にまた男女二人が入ってきた。
良く言えばしっかりしてそうな、悪く言えば気の弱そうな男子と
薫と同じくらい気の強そうなツインテールの女子。新聞部でよく話
したことがあるから分かる。

「真志おっそい！」

「待て待て！お前の荷物も持ってるからだろ！」

二人に続くように更に二人、また男女のペアが入ってきた。また新

聞部だ

「おぉ、椿じゃんか！あと司やユウスケもいるんだな！」

条戸真志。

髪は茶色に染めて校則的には危ないかもしれないがソレに反してかなりの常識人だった気がする。

そうそう、もう一人の男子は犬養拓真。

下校中に迷子の子供の面倒を見ていたのを考えると優しいんだろうな。

その時も横には園田友里がいた気がする。

真志の隣りにいるのは・・・白鳥美歩だ。

コイツはよくわからん。

とり合えず真志の横にいる。

コイツも茶髪で服装もだらしないけど悪い奴じゃないからまあいいか

「にぎやかねぇ・・・」

「おれ置いてかれそう…」

「はいぱわーです…」

ユウスケと薫、夏ミカンの意見は尤もだ。
椿と咲夜はまだなにやら言い争いをしているし、まずそもそも事態すら呑み込めてない。

そしてまた扉が開き、皆は一斉にその方向に視線を移す。

「あ・・・」
「あ・・・あの・・・ごめんなさい」

そこには車椅子とソレをおす少女二人。
亘の友達の野村里奈（のむらりな）と我夢の親友、天美アキラ。
里奈は自分のせいで場が静まり返ったのだと思い謝罪する。

「気にすることは無い」

里奈の頭に手が置かれる、咲夜だった。一瞬別人かと思うくらいその目は優しい。

「誰が来たのかと皆、注目しただけだ。」

「あ…咲夜先輩！」

「知ってるの？」

「うん、スロープの無い階段で困ってる時に助けてくれたの」

以外に優しいのだろうか？
まあ椿との争いも椿が悪いような気がするし…

「いらしていたんですね。師匠」

「ああ、君達もこのクラスなんだな。うれしいよ」

なにやら我夢とアキラまで咲夜に駆け寄っていく。こいつ以外に人望が厚いな

「椿先輩も同じクラスですね」

「うぅ…まあな。よろしく頼む、つかこの女から俺を守ってくれ」

椿はそう言うと軽くため息をついて苦笑したのだった

正直俺からしてみれば椿と咲夜は仲がいいようにも見えるんだが・・・

「ぎゃあああああああああああああああ」

いや、やっぱなんでもない

第2話（後書き）

次もよろしくおねがいします！

第3話（前書き）

はい、三話です。
暇つぶしにでも楽しんでってください

第3話

しばらく顔合わせ程度に会話を交わしていたが、なぜか2時間経っても先生一人現れない。
トイレは真横にあるし、向いには良質な自販機もある。

つまり特別クラスがある範囲内から出なくてもなに不自由なくすごせるのだ。

最初は先生を呼びに行こうと言った者もいるが、
どの先生に言っても軽くスルーされるだけだったのでトランプで時間を潰す事にした。

「おっ、遅れました！」

ガラッとせわしなく扉が開いて、スーツを着た青年が入ってきた。

「あれ？兄貴？」

「ゆ、ユウスケか！」

知っている。むしろ何度も会っている、

小野寺翼。ユウスケの兄貴で一週間後にこの学校へと教育実習にやってくる予定

・・・そう聞いた。だが…？

「兄貴、教育実習は来週からじゃ？」

「そっ、それがいきなり電話で今すぐこのクラスに来てくれ、じゃないと実習は無しの方向で・・・

なんて電話がかかってきたんだ。まいったよ。

ハハ…ハァ」

翼は先輩教師がいないのを確認すると、たまらず椅子に腰掛ける。汗がすごく、急いで来たことが分かった。

「さっき校長室にいってきてね、ここの臨時担任になってくれって言われたよ。

なんでもまだ担任の人が決まっていないらしいんだ。

それで私が選ばれたっていう事かな…

とにかく皆、短い間だろうけどよろしくお願いするよハハッ…」

いくらなんでも無茶苦茶じゃないか？まあいいのかな？

それぞれが翼に軽く挨拶をしていく。

まさに、その時だった――

まさに、刹那。

「――――っあああ！」

激しい光、それが教室を包み込んだ。

「熱っ！」

それに何人かは熱を手に感じたらしい、それぞれが苦痛に顔を歪め、床に伏していた。

「くっ・・・、大丈夫かい皆！」

翼はすぐに立ち上がり皆の様子をうかがう。
さすがは教育者を目指すだけあって対応が早く頼もしいな…くそっクラクラする

「っ、真由、平気か？」

「・・・？　何が？」

「何がってお前…今のだ」

「何も・・・おきなかったよ？」

「え？」

天王路兄妹の会話に引っかかるものを感じたがソレが何かは分からなかった。

とにかく今起こったことが非現実すぎて頭が混乱している。

「げっ！何だコレ！」

ユウスケの声が響く。
何事かと思って行ってみると、ユウスケは慌てながら俺に右手を突き出してきた。

「は？」

「てっ、手の甲手の甲！」

「手の甲？・・・」

その言葉で数名のヤツが次々に騒ぎ出す。

「げっ！オレもある！」

「な、なんですかこれ？」

「あ、私にもある・・・」

ユウスケ、翼、真志、拓真、椿、我夢、双護、亘。

まあ早い話俺以外の男だ。

その手の甲に紋章らしき物がくっきりと現れていた。
意味不明な物やスペード、龍の頭部を模した物など分かりやすい物も多い。

「ちょ、どんだけ厨二なんだよｗｗ紋章ってオイオイ」

「むぅ、これは…スペードか？大丈夫なのか椿、痛みは？」

「熱かったくらいで今はなんともない。
彫られたって訳でもないし…そうだ、咲夜、すこし舐めてみてくれ」

「フンッ！」

裏拳が椿を抉るようにしてめり込む。こいつ等は一体何をしているんだ？

「あれぇ？コレどこかでみたような気がします」

「・・・って！あああああああああ！」

「つ、司？」

「どどどどうしたんですかぁ司君！」

どうして俺はこんな簡単な事を忘れていたんだろうかぁああ！

「ライダァアアアア！」

「は、はいぃぃ！？」

「ライダーだよ！仮面ライダー！、今ユウスケ達についた紋章はそれぞれの平成ライダーのマークなんだよ！
くぉおおなぜ分からなかったんだ　俺はぁぁ！」

「仮面ライダーって…まじ？」

「まじまじ大マジだ！ちなみにユウスケがクウガ、先生がアギト、真志が龍騎、
拓真がファイズ、椿がブレイド、我夢が響鬼、双護がカブト、
電王は…いないが、亘はキバだな！というか何で俺にはないんだ！くそがっ！」

暴れる司をほっといて椿は真志の紋章を見る。

「た、たしかに…デッキにこんな紋章あったような
…なかったような」

「あったんだよ！俺が何回龍騎見てると思ってるんだ！
スペシャル版の結末投票で工作に走ったほどだぞ！結果負けたがな！」

「つ、司は本当に仮面ライダーが好きなんだな、オレも今度見てみようかな？」

「と言うか、兄さんはヒーローが好きなんだ。その見すぎで寝坊するんだよ、小学生でもやらないだろそんな事」

「ふふっ、すごいですね司先輩」

興奮しきっている司にそれぞれはいつもの調子を徐々に取り戻していく。

それを見計らって翼が教壇に立つ。

「…どうかな？ここは皆、私の為に自己紹介なんてしてくれないかい？」

「お、いいんじゃん。せっかくだから・・・ホラ、結構私たちって男女ペアになってるから

・・・そう、ライダーの作品順にそれぞれのペアから　自己紹介していきましょう？」

「いい提案だな白鳥、だったら最初はユウスケと薫からになる！」

翼の意見を誰も否定しなかった。

もちろん翼の為もあるが一番は皆自分の為なのかもしれない。
彼らは皆一刻も早く日常生活に戻りたかったのだ。

いきなり現れた紋章が現実味を帯びていない事もあるかもしれないが
普通の生活に基盤を戻す為に、この自己紹介を選んだのかも…知れ
ない

第3話（後書き）

更新はまあバラバラになっちゃうかもしれません
でも一日一回はしたいですね

第４話　自己紹介（前書き）

とまあキャラが多いんで自己紹介編をつくってみました
ではどうぞ

第4話　自己紹介

「えと…小野寺(おのでら)ユウスケです！紋章はクウガ・・・はい」

「終わるな、空野薫(そらのかおる)です。
ユウスケとは小学校からの友達で、家も割りと近いから付き合いは長いわ」

薫のポニーテールが揺れる。

「ん？ああ、そうか私か。

えっと小野寺翼(おのでらつばさ)、
見ての通り教師を目指してる。

ユウスケの兄で・・・趣味は家庭菜園って所かな？紋章はアギト」

翼さんはメガネを掛けているが椿と違って伊達らしい。
なんでかは知らんが…

「条戸真志(じょうどしんじ)、新聞部の部長をやってる。
親の都合上一人暮らしなんで、
もしよかったらいつでも遊びにきて欲しい。

紋章は龍騎、よろしく！」

「おなじく、新聞部の白鳥美歩（しらとり みほ）。
ま、私にできる事が会ったら言ってみてよ
力になるからさ。

今は訳あって真志の家でくらしてる」

茶髪にワックスで髪をセットしてる真志と
同じく茶髪で服装が乱れてる美歩、
どう考えても校則的に問題児だが、中身はいい奴だ。

「なん・・・だと・・・？」

ここで椿の表情が変わる。

「におう、臭うぜ！コイツァ、リア充のかほりだ！
真ちゃんよぉお前さっき一人暮らしとかなんとかほざいてたよなぁ！」

「う・・・あ、ああ」

「だが今！白鳥は確かに言ったぜ！おまえの家で暮ら――」

椿は口を閉じた。おもっくそ咲夜に睨まれている、というか目が語っている。

『人には』『事情がある』『詮索良くない』『ぶち殺すぞ』

「え、えーと…暮らし…」

『ぶち殺すぞ』

「暮ら…」

『ぶち殺すぞ』

「・・・」

『ぶち殺すぞ』

「いや…あの、本当になんか…すいませんでした。はい、あのどうぞ続けてください」

若干最後の言葉は考えすぎだろうなと思いながらも、確かに事情を詮索するのはあまり褒められたものではない。
ここは素直に咲夜の意見に従い、席についた。

「え・・・えっと」

「がんばって！拓真！」

「い、いぬきゃいっ、たきゅまです！」

咳払いを一つ。

「フ、ファイズの犬養拓真（いぬかいたくま）です。

よ、よろしくおねがいします！」

「うん！拓真ナイス！
あ、あたしは園田友里（そのだゆり）

新聞部の副部長です！よろしくね！」

優しそうだが気の弱い拓真とツインテールの友里

「漆黒の夜には煌きの紋章を。
ブレイド、守輪(すわ)ッッ椿(つばき)！」

「こいつは・・・まあいい。
ワタシは広瀬(ひろせ)咲夜(さくや)
実家は日本文学、武術の道場をやっている。私は一応それらを一通りはかじっている。
椿とは幼馴染みで、私は友達だとおもっているよ」

「そりゃあどうも」

椿はすこし照れながら苦笑した。

「響鬼の紋章が出ました、相原(あいはら)我夢(がむ)です。
広瀬先輩の道場で合気道と和音楽を勉強してます」

「天美(あまみ)アキラです。
我夢君と同じく先輩の道場で勉強しています、よろしくお願いします」

礼儀正しい二人は眩しくみえた。ボーイッシュなアキラと、真面目そうな我夢

「天王路双護(てんのうじそうご)、カブトだ」

「天王路真由（てんのうじまゆ）・・・」

クセのある髪の二人。兄妹らしいな

「ん？天王路？」

翼さんは眼の色を変える。

「天王路グループの息子さんかい？」

「ああ！、天王路ってどこかで聞いた事あると思ってたけど！」

天王路グループ、大企業というのは言いすぎだがそれでもそれなりの勢力があるメーカーだった。

つまり、双護はその社長の息子ということになるのか。

「フッ、だが所詮俺は学生、肩書きだけのお子様なのさ」

双護はため息をつく。きっと俺達には理解できない苦労があるのだろう。

「ボクは聖亘（ひじわたる）。
キバの紋章に選ばれたみたいだ」

「野村里奈（のむらりな）です！
あの…皆さんに迷惑を掛けてしまうかもしれないけど…
よろしくお願いします」

「里奈、君は何も心配しなくていい。
私たちは君の足の事は何も気にしていないさ」

「そうですよ里奈、あなたはすこし考えすぎです」

「そ、そうかな？」

「そうだよ里奈ちゃん、おれたちは全然気にしないからさ」

「あ、ありがとう」

皆の言葉に里奈は笑顔で答えた。

「そして亘の兄、聖司（ひじりかさ）だ。
好きなものはヒーロー、
趣味はヒーロー！

今は夏ミカンの家に居候している！」

「夏美です！

あ、あははは。私は光（ひかり）、夏美（なつみ）です。

司君、亘君とは従兄妹なんです」

「そういえばさ、司、ライダー好きなのに紋章ないんだなプププｗｗ」

「吹き飛ばすぞ、きっと主人公補正かかるんだよ！その内かかるんだよ！」

司はそっぽ向いて教室の隅にうずくまった。

その様子に皆緊張感がうすれ、笑い合う。

「アハハハありがとう皆。

でもそれにしても遅いな…もう大分時間が経ってるのに誰もこやしない。

一回校長先生の所に行って来るよ、皆はココにいてね」

そう言って翼は教室を出て行くのだった。

第４話　自己紹介（後書き）

次回か、次々回で変身する…かも！

ここまでお付き合いありがとうございます

次回もよろしく！

第5話（前書き）

更新を
一日一回はしたいですね（キリッ
とか言っておきながら土曜に用事ができて更新できないかもなんで、
今日の内に2話更新しておこうと思います
適当ですいませんｗｗ

第5話

「げっ！何だコレ！」

「？　どうしたんですか司君」

「夏ミカン！コレ…」

司がそういって差し出したのは体操袋。だが、その中に入っていたのは体操着ではなかった。

「夏美ですよー。…え!?なんで?どうして?」

「朝ぶつかった男の人の荷物と入れ替わっちまったって事だろうな…」

司は申し訳なさそうに夏美を見る。
あの体操袋は夏美が買ってくれた物だから…

「でもコレなんなんでしょうねぇ?」

「え?」

夏美の問いかけに答えるために再び袋の中にある物を取り出した。
なかから出てきたのは四角い箱のような機械に、
なにやらカードかなにかを入れるホルダーだった。

「なんだ？玩具か？」

適当に機械を触ってみるが何も起こらないし動きもしない。

「ホルダーの中には何が入ってるんでしょうか？」

「ああ、えっと・・・――ん！」

「え？」

「きたあああああああああああああ！」

「きゃあ！」

いっきに上がった司のテンションに夏美は圧倒される。

「どうしたんですか？またライダーとか？」

「ああ、そうだ！見てみろ夏ミカン！」

そう言って司はホルダーからカードを抜き出す。

「夏・・・おぉ！すごいですね！」

「だろ！」

司の手にあるのは十枚のカード。
それはクウガからキバまでの仮面ライダーと、見たことの無いライダーが写っている。

成る程、司のテンションが上がる訳だ。

「すっげーよ夏ミカン！これ次のライダーなのかな？
まずこのカードはなんなんだろうな？

どうやって遊べばいいんだ？」

「司君、ちゃんと返さないとダメですよ！」

「わ、わかってるよハハ・・・」

司が渋々カードを元に戻す。――と同時に血相を変えた翼が飛び込んできたのだった。
翼は口をぱくぱくさせて確かに言った。

「学校が・・・消えてる」

「は？」

あまりに唐突すぎて、司は体操着の中の機械が光った事に気がつかなかった。

学校が消えた。

教師を目指すものとしてはあまりにも酷い文章だったが、一同はすぐにソレが間違いではない事を知る。
つまり、消えていたのだ、校舎が、校庭が、校門が。

特別クラスの校舎周りは残っているものの、それ以外が消えている

――いや、消えていると言う表現は少し違う、移動しているといったほうがいいか？

校舎の周りは司達が全く知らない場所にあった。
窓を見れば田んぼではなくコンビニが見え、まるで校舎がどこかにワープしたかの様だ。

とうぜん職員室も校長室もなく、特別クラスにいる生徒以外は消えていた。

「なんだよ・・・コレ！」

真志が窓を開けて辺りを見回す。

見知らぬ街、

見知らぬ場所。

そしてさらに、ビルやらなにやらが不自然に壊れていた。

「い、意味わかんね！俺らってどうなった…？」

「こ、怖いです…」

混乱、恐怖、一同のなかでそれらが膨れ上がっていく。
翼はぐっと唇をかんだ、この状況はまずい、と

「とにかく皆はここにいてほしい。私が外に行って様子を見てくるから」

「まってくれ兄貴！おれもいく！」

「…っ、わかった。じゃあ何かあるといけないから一応、双護くん、司くん、夏美ちゃんも来てくれないか？」

それぞれ頷くと、翼に続いていった。

そして…

「・・・どこまでいったんだろうな?」

「分からん、ただこの状況はただ事ではない」

椿と咲夜は窓を背に話し合っている。
この状況のこと、世界の事、答えなど出ない事はわかっているのだが

「ん?」

「ど、どうした?」

「悲鳴が聞こえた…」

「ま、マジ?」

咲夜は窓から身を突き出し、辺りを見回わした。
すると、すこし離れた所で女の子がうずくまって泣いているではないか、

「お、おい！危ないぞ！」
咲夜は叫ぶが全く届いていないようだ。

「くそっ！」
かるく舌打ちをして咲夜は窓から飛び降りる。

「って！おいおい！なにしてんだよ！」
「あの子を助ける！さっきから爆撃の様な音が続いている。あんなところに置いとけるか！」

「師匠！」

「ま、待て待て！俺が行く！」

咲夜の行動にアキラ達が続こうとする。
が、ソレを椿は静止させた。

「まじ、勘弁してくれよ…」

そう言って泣きそうになりながらも、椿は咲夜の後を追うのだった。

「君、大丈夫か？」

咲夜は女の子の所に駆け寄ると、屈んで声をかけた。
しかし女の子は泣き続けるばかりで、会話すら成立しない。

少しして、後を追って来た椿と合流する。

「お、おぉい！咲夜ぁあ！」

「椿か、すまない。すこし手伝ってくれないか？この子を学校まで運ぶ」

「え？　あ、ああ。分かった」

椿が女の子に触れようとした瞬間、女の子はその顔をあげる。女の子はもう泣いていない。

「え？」

女の子は笑っていた。

その顔は、この世のものとは思えない程歪んでいたのだが。

当然だ、もう泣く事なんてない、悲しい事なんてない。

彼女は餌にありつけるのだから

「あなた達！まだこんな所にいたんですか！」

翼たちが街を探索していると、いきなり警官に話し掛けられた
警官の表情は焦りと恐れで強張っている

「は、はい。えっと、すみません。今コレはどう言う状況なんでしょうか？」

「どうしたもこうしたも――・・・」

「？」

警官の言葉が止まる。

「あ、あの・・・大丈夫ですか？」

翼は不思議に思い警官の肩を軽くたたいた。すると、警官は糸の切れた人形のようにばたりと倒れる。

「っ！？」

「うわあああああああああ！」

翼が疑問に思うと同時にユウスケの悲鳴が耳に響く。
つづいて夏美、双護と司は一点を見詰め青ざめていた。

不思議に思い、翼もその方向に目を向ける。

「――――ッッッ！！！！！」

絶句した。見なければ良かった、いやそんな事できるわけなかったが…

「うぅううう！」

目を疑う。

上空に触手の様なものが浮かんでいて、その先端には真っ赤な血を滴らせている心臓があったからだ。

ありえない。普通心臓はこんな事にはならない

「ッ！」

訳が分からぬまま警官にまた視線を戻す、背中には穴があいているではないか。

ああ、間違いない、あの心臓はこの警官のものだ！

急いで触手が何に繋がっているのかを確かめる。

すると、すこし先に人の形をした。だが人ではない何かと繋がっていた。白黒の化け物。

殺された、彼は…

化け物にッッ！

「に・・・」

かろうじて翼は声をだす。

張り裂けそうなほど心臓は鼓動を早めている。
触手は心臓を飽きた玩具を捨てるかのように放り投げると、暫く旋回を続ける。

それはまるで子供が次に食べる料理を見定めるかの様にッ！

「逃げろォォォォおおおおおおッッ！」

司達三人は踵をかえして走り出す。
その顔は恐怖と絶望で染まる、彼らはいまだかつて無い恐怖の中足を動かしていた。

すこし走ったら触手が翼達を追ってきた、それでも彼らは走る事を止めない。
立ち止まったらあの警官の様に・・・死ぬ！

司は走っている間にも一つだけ確信を持つ、あの触手に繋がってい

る怪人には見覚えがあった。

オルフェノク

仮面ライダーファイズに登場するいわゆる怪人。

だから司は必死に祈り続ける、きっとファイズが颯爽と現れてアイツを倒してくれると。

もはや、なぜテレビの中の偶像が出てくるのかなどどうでもいい、警官は確かに死んだのだ。

もはやテレビでも何でもないリアルの話。

これがドッキリなら仕掛けたテレビ局の人間全員ぶん殴ってやる！

「ハァハァ・・・くそ！」

そう思っても、いつまで経ってもファイズは現れてくれない。

所詮俺達は引き立ての為に殺されるモブキャラなのだろうか？司は思う。

しかし、双護は違った。

とても人間とは思えないスピードで走り、ある程度距離をとると石

を投げ、触手の軌道を邪魔する。
その繰り返しだった。
実際双護がいなければ皆既に死んでいただろう。

だが、そんな悪あがきはいつまでも続かない。ついにその時がやって来る。

「ブぅゥうウぅゥウん！」

「ぐぅあぁっ！」

双護に何かが突進してきた。
しかし早すぎて見えない！

――――が、しかし少しその何かが止まったとき、一瞬だけ見えた姿は恐らくワーム

また、化け物。

現れて欲しいと思ったファイズは現れず、代わりに最悪な敵がやってくる。

そう、最悪だった。双護は体勢を崩し倒れる。すぐに起き上がろうとしたが、体が思うように動かない。

「きゃ！」

「夏美ッッ！」

ついに夏美の体力が切れたのだろう、夏美はつまずき、転ぶ。
そこへ触手が襲い掛かる。最悪だ…

「くっそおおおおおおッッ！」

ライダーの世界に行きたいと思った事がある。

そして今その夢が叶ったのか？
その結果がコレなんだぞ！

もっと活躍できると思ってた。
もっとカッコよくできると思っていた。

なのに……きっとこのままいけば皆死ぬだろう、
訳も分からないまま無残に、残酷に…

「っざけんなあああああああああああああああああああああッッッッ！」

夏美との想い出が蘇る、
いつもなんだかんだ言って俺についてきてくれた従兄妹。優しかった…

でも死ぬ。

いつも笑ってた…

でも死ぬ。殺される。

一緒によくライダーを見た…

でも死ぬ、殺される、もう会えなくなる。

――嫌だ。嫌だ。認めない。信じない。許さない。
そんな結末は絶対に認めないっ！ありえないぃぃっ！

・・・てやる。・・・してやる。

壊してやる

第5話（後書き）

他の方のライダー小説も見ていってるんですが
皆さん本当に愛がありますね。すごいです
自分も頑張りたい

第6話　十番目の仮面ライダー（前書き）

注意！
この作品でのクロックアップは原作ディケイド基準です

第6話　十番目の仮面ライダー

手に、感覚があった。持っていた、あの機械を。あのホルダーを。

俺は――確信する…電王がそうだった、イクサがそうだった！

持って居なくても望みさえすれば手元にくる！

俺はその機械を迷うことなく腰の前に持っていく

…そして、手を離した。

機械は落ちない、だろうな。分かってる、だってもう付いてるんだから！

俺はそのホルダーから迷うことなく一枚のカードを引き抜いた、

これが来る事は分かってたのかも知れないし、

単なる偶然だったのかも知れない。

カードの入れ方は直接頭の中に入ってきた、もう分かってる。理解した。

『カメンライド』

電子音が耳に入ってくる。
どこかで聞いた事があるような、ないような…そんな声だった。
いや、そんな事どうでもいい、俺はそのカードをッ――――機械に放り投げた。
あとは閉めるだけ、後悔は無い。夏美が死ぬ事実なんて…
壊れてしまえ
「変ッッ身ンンンッッ！」
『ディケイド！』
エンブレム達が俺に集まり、そして弾けた。

変わる、駆ける、分かる。全てが頭に入ってきた！

『カメンライド――』

「変身！」『５５５！』

来てくれないならッ

「なればいい！」

姿がファイズへと変わる！瞬間、素早くカードを滑らせた。

『アタックライド――』『オートバジン！』

「ッ！　グォオオオ！」

猛スピードでバイクが現れ、オルフェノクを弾き飛ばした。
まだ終わらない、バジンは素早く変形し、ガトリングで辺りを撃ちまくる。

「ッブゥウウバババ！」

すると、その内の何発かがワームに当たり、動きを止めた。
バジンはガトリングによって動きが鈍ったワームを掴み倒し拘束する。

「うおおおッッ！」

「グガァ！」

起き上がるオルフェノクを力任せに殴り倒す。
うつ伏せになったオルフェノクを足で押さえつけ、最後のカードを差し込んだ。

『ファイナル・アタックライド――ファファファ５５５！』

足から紅い閃光が発射され、オルフェノクは地面に貼り付けになる。
終わりだ、もう一度閃光の中に足を入れるようにして踏みつけた！

「ギャアアアアアア！」

オルフェノクは爆発し、そこにはΦのマークしか残っていない。

「変身」

『カメンライド――カブト！』

あとはアイツだけだ。

ファイズの変身が解けた事でバジンも消滅した、するとワームは再び高速移動で辺りを駆ける！

『アタックライド――クロックアップ！』

時が変わり、ワームと同速になる。

だが俺はあえてヤツに背を向けた、

「ぶゥゥゥゥうウウルるルッ！」

ワームはここがチャンスと悟ったのか、真っ直ぐに突進を仕掛けてくる。

おいおい、ソレがどういう結果を生むのか、どうやらその身をもって分かってもらうしかないみたいだな！

『ファイナル・アタックライド――カカカブト！』

「うおおおお！」

「バやアあアアぁぁぁあアアっッ！」

回し蹴り、あっけなくワームは爆発して死んだ。
もういいだろう、俺は変身を解く。

だが勝利の余韻に浸る暇は無い

「夏美！」

いそいで夏美の所に急ぐ。

「づがざぐぅぅん！」

夏美が涙で顔をぐしゃぐしゃにして抱きついてきた。
でもよかった…怪我はしてないみたいだ。

「ごわがっだでずううううう」

「ハハハ…大丈夫か？」

「司君！」

先生が双護を抱えて走ってきた。
よかった、双護もそこまで酷い怪我じゃなさそうだな

「…いろいろ聞きたい事はあるけど、とにかく今は学校に戻ろう！
皆が気になる」

俺は小さく頷いた。

司が変身するすこし前――

椿と咲夜もまた、街の中を走っていた。二人の後ろには無数のワームの幼体（サナギ）が二人を追っている。

「何なんだよ！マジで何なんだよ！ちくしょうっ！
俺達女の子を助けにいっただけじゃないのかよ！

なんでその女の子が化けモンになるんだよ！　訳わかんねぇよ！」

「いいから走れ！死にたいのか！」

「何でお前はそんなに冷静なんだよ！
意味わかんねぇよッ！くそくそくそっ！」

「私だって怖いに決まってるだろ！
どうして…こんな目にあわなきゃいけないんだ…私達が何をしたって…」

「お、おい…」

咲夜はぼろぼろと涙をこぼす。
椿は罪悪感に包まれたが、咲夜を励ましてやれるほどの余裕はなかった。
そして同時に無性に悔しくなる、ぶつけ様の無い理不尽さに

「ヒッ！」

ふと前を見ると、そこには追ってくるのと同じ、幼体ワームがやってきていた。

「う、うわあああああ！」

腰が抜けてしまう。人生で初めて感じる死への恐怖、それは咲夜も同じようで、

腰は抜かさなかったが、足はぶるぶると震えていた。

「つ、椿・・・」

「はあ!?ななななんだよ!」

「空手って・・・アイツ等に効くと思うか?」

「ばっ、馬鹿じゃねーのお前!ししし死ぬぞッ!」

咲夜はその答えを聞く気はなかった。

彼女は思う。ここで何もしないより、足掻いて散った方が自分でも納得がいくだろう。
椿は・・・守りたかったが、今の私にそんな力はないだろう。
私はゆっくり目を閉じて集中する。

「おい、おい!――――が、――るって!」

椿が何かいっているが分からない。
なにか巨大な音がするからだ、咲夜はたまらず目を開けた。するとそこには――

「う、うそだろ・・・で、電車？」

文字通り電車が走って来る！
しかも、その電車は空中を走っており、線路は空間法則を無視して空中に留まっている。

「って、こっち来るぞ！」

電車は空中を旋回しコッチに向かってきた。

一瞬焦る二人だが、電車は二人を囲むワームを蹴散らし、また空に帰って行く。

ふと、電車が通った所に人がいるのが見えた。
亘と同じくらいの年齢だが、目つきがかなり悪い。

赤いメッシュがさらに凶悪さを目立たせている。

「おいおい、主役がいねぇのに盛り上がってくれちまってるじゃねーか」

少年はどこから取り出したのか？
いつの間にかベルトを持っていた。

それを腰に素早く巻きつけると、少年はニヤリと笑って赤いボタンを押す

「変身ッ！」『ＳＷＯＲＤ・ＦＯＲＭ』

少年が一瞬で別の姿に変わる。さらに周りには赤い鎧の様な物が現れ、少年に装填された。

「俺、参上ッ！」

そう言ってポーズをとるが、椿と咲夜は口を開けたまま黙り込むだけだった。
いきなり現れてこんな事言われたら誰だってこうなるだろう

「今日の俺は徹底的にクライマックスなんでな。悪く思うなよ」

そう言って少年はパスのような物をベルトの中央に掲げる。

『ＦＵＬＬ　ＣＨＡＲＧＥ』

ジジジと赤い電気が、持っていた剣に宿った。
少年は軽く鼻を鳴らしてワームの群れに突っ込んでいく。

「おぅりゃあああああ！」

力任せに、かつ豪快にバッタバッタとワームを切り裂いていく、
ワーム達は逃げ様とするが、互いにぶつかり合いうまく逃げられない。

そうこうしている間に少年はワームを全て切り裂く！

「俺の必殺技・・・パート・ワン！」

その声を合図にワーム達は爆発する。

「すげぇ…凄すぎだろ…」
「ああ・・・っ！」

だが咲夜はギョッとする。

「おい！まだいるぞ！」

「あん？」

少年は咲夜が指差した方向を見る。そこには一体だけだがまだワームの幼体がのこっていた。
おそらく運良く先程の攻撃をかわしたのだろう。

「けっ、まぁだ残っていやがったか……ん？」

少年は足を止める。

すこしワームの様子がおかしい、立ち止まったままブルブルと震えている。

――と、つぎの瞬間ワームの背中から新しいワームが出てきた。

「うぉ！な、なんだ！」

『成虫になったんじゃないかな？』

少年から別の声がする。その声どおりワームは成長したのだ、そして・・・

「ブゥぅゥウううウん！」

「のわっ！」

猛スピードで少年を弾き飛ばす。

「はぇええ！」

少年は素早く身を立て直すが、ワームは既に走り去り、いなくなっていた。

「あああああ！逃げられたぁぁああ！」

少年は地団駄を踏んでベルトを乱暴に剥ぎ取った。

なんか…少年から赤い物が一緒に飛んでいった気がする…

「あのぉ・・・」

「え？」

少年の雰囲気がどっと変わって、おとなしそうな感じにかわる。
先程とは別人つうか声も違う気が…

「ここは危険です、だから離れた方がいいです。いい所はありますか？」

「あ…あ、ああ、だったら学校がいい」

「分かりました。じゃあ・・・」

少年が上をみると、再び空間から電車が現れて二人の前に停車する。
ドアが開き、

「さあ、乗って！」

中から気の強そうな女の子と・・・

「さぁさぁ、早く早くー！」

よく分からない紫色の生物が見えた…

第6話　十番目の仮面ライダー（後書き）

ちょっと迷ったんですけどディケイドライバーの音声はカタカナにしました。
でも途中で何の前触れもなく変わるかもしれないのでその時は暖かい目で見てやってください

お付き合いありがとうございました。
次回もよろしく！

第7話　ゼノンとフルーラ（前書き）

明日はやっぱりきついので
できたら二話くらい更新はしたいですね（キリッ

第7話　ゼノンとフルーラ

「つまり…あなた達は何も知らずにココにきたのね？」

「ああ、辺りが光に包まれて・・・気がついたらこの世界にいた。
あと、サインもらっていいっすか？」

「ぼく達もよく分からない状況なんだ。ごめん、この世界の事については何も分からないよ…」

「成る程…
あと、サイン貰っていいっすか？大ファンなんですよ俺」

「うぜぇからｗｗつか多分その人は純粋に野上良太郎だと思う。
信じられないけど」

椿の言った事は確信に近いかも知れない。
もはや俺達の常識は常識ではなくなった、今日を境にして
目の前にいる良太郎というキャラクターは
フィクションでできた偶像ではなく、おそらく独立した生命なのだろう。

良太郎達電王組みは、いつもと変わらず時空間を移動していた時、
異常なオーラを放つ線路を見つけた…らしい。

そしてそこに吸い寄せられてココに来たと言っていう

「オーナーはココもれっきとした世界だって言ってたわ。
ただこの世界がどれだけの完成度なのかは分からない。

数時間前にできた世界だとか、何億年も前にあったのかもしれない。
多世界解釈、無限時空理論、なんとも言えないわね」

「パラレルワールドか・・・」

そんなものが本当にあったとはな、ふと目の前で死んだ警官の顔が脳裏によぎる。

「・・・っ」

胸が痛い。軽く吐きそうにもなる。
彼は、彼の世界は確かにココだった、そしてこの世界で死んだんだ

「考えていても…仕方ないか」

ふと時計を見る。もう夜の十一時を回っていた。
既に女性陣の何人かは下の保健室で眠っていると聞く
まあ仕方ない。いろいろとショックが強かったからな

「…あ！そういえば」

真志がふと口を開く。

「椿達が行った後さ、ここにもワームが来たんだ。
でもさ、この学校には入れないみたいで…」

「入れない？」

「ああ、アタシも見た。なんか入れないってか、
見えてもないし入ってもこない・・・みたいな？」

「…成る程な、もしかしたらこの学校が絶対的安全地帯なのかもしれない」

そう言って司は教室を出て行こうとする。

「どこ行くんだ？」

「すこし空気を吸ってくる、屋上なら襲われる事もないだろ」

そう言って司は屋上へと向かうのだった。

「どうして司君は変身できたんだろうか…」

「わからない、自分でもよく分かってないみたいだからな。ただ変身した瞬間にカードの使い方とか、ある程度の戦い方は頭に入ってきたらしい」

「あの箱…じゃなくてベルトの力か」

しばらくいろいろ考えてみる。しかし何も分からない、そんなやりとりに翼はため息をついたのだった。

「・・・」

自販機で買ったコーヒーを飲みながら空を見上げる。

「じいさんの方が美味いな…やっぱり」

「そうでしょう？」

声がして振り返る。そこには夏ミカンが立っていた、
夏ミカンは俺の隣りにやって来ると同じように空を見上げる。

「司君は命の恩人ですね、感謝です」

「ああ、いや…別にお前が感謝することないぜ」

「そうですか？でも感謝します。ありがとうです」

「ああ…ど、どういたしまし…て」

「おじいちゃん・・・今ごろなにしてるんでしょうねぇ？」

「さあな、新しいコーヒーでも作ってるんじゃないか？」

夏ミカンは両親がいない。ま、俺と亘もだから特に驚かなかったけど…

…夏美のお祖父ちゃんが面倒を見てくれているのだが、
これまた独創的な性格で
何故か写真館を経営しているのに、実態は喫茶店になっている。

「会えますかね？もう一度・・・」

「当たり前だ、絶対にな」

「ムリじゃないかな？」

「！」

突然聞こえる第三者の声、っ、どこから？

「ここだよ、司」
「ここだわ、司」

もう一人違う声がする、
どこかと探してみればなにやら学校の入り口付近に小さな人影が二つ見えたではないか。

あんな所から喋ったのにハッキリ聞こえた…
少し危険かもしれないと思ったが、奴等は何かを知っている。
これは逃すわけにはいかないだろう。

「夏ミカン！隠れてろよ！いいな！」

「え？あ、はっ、はい！」

俺はベルトを取り出し腰に巻く。そして屋上から飛び降りた。

『カメンライド――』「変身！」『ディケイド』

地面に着地した時には既に変身を完了していた。
もし、戦闘になったらクウガに変わろう。

クウガならどんな敵にもある程度対応できるはずだ

「おい！どこだ？」

入り口まで行ってみたが誰もいない。さっきは人影が見えたんだが・・・

「ここさ」「ここよ」

「「破壊者ディケイド」」

「ッ！子供？」

右と左から同時に声が…そこを見てみれば俺よりずっと幼い男女がいた。

男の方はご丁寧にスーツとシルクハットで身を包み、

女の方はフリルのついた服、綺麗な髪、まるで人形の様。

二人はこちらに優雅にお辞儀をする

というか男の方は髪が青く、女の方は髪が真っ赤だ。

どこのアニメキャラだよ…

「はじめまして破壊者ディケイド」

「お会いできて光栄だわ！」

「だ、だれだお前等！」

二人はクルクル回りながら俺の前に移動してくる。
ま、まじ何なんだよこいつ等は

「ボクはゼノン。そしてこちらがボクの愛しいエンジェル、フルーラさ」
「あら嬉しい！でも、嫌だわゼノン。ディケイドがいるのに！」

「ハハッ、フルーラの美しさがいけないのさ」
「ゼノン…」

「かわいいよ、フルーラ」
「・・・・・・」

うぜえええええええええええええ！

う　ざ　す　ぎ　る！

攻撃しちまおうか！
しかもチョイチョイで俺を見てくるのが…っとに！もうッ！

「だあああ！さっき、お前等、俺達がじいさんに会うのはムリとか言ってたな！
あれどういう意味なんだよ？」

いつのまにか抱き合っている二人に軽い殺意を抱きながら、あくまで冷静に問う。
俺は大人だ。うん、子供相手にそんな取り乱しちゃいけない

「そのままの意味だよディケイド？
君達が元の世界に帰るには君達自身の頑張りが結果を左右するという事さ」

「ガンバ・・・何をだ？」

「見ていただいた方が早いわ、ディケイド・・・コレを」

フルーラが指を鳴らすと、灰色の砂で出来たオーロラような壁が現れる。

「っ！」

「あとあの女性も来てもらおうかな。観測者は二人以上いないと意味がないからね」

すこし経って夏ミカンがコッチにやってきた。
一度止めようと思ったが、フルーラとか言うガキに止められる。

「安心していただけないかしら破壊者ディケイド？
ワタシ達はあなた達を傷つけようとは思っていないから…」

正直、その言葉を信じたんじゃない。
このガキ、見た目とは裏腹に殺気が尋常ではなかった。
もし、俺が無理やりにでも夏ミカンを呼ぶのを止めていたなら…

「司君・・・この子達は」

「ははっ、ボクはゼノン！そしてこちらは「いいから早く！」…ああそうかい」

ゼノンはすこし不満げに砂の壁を移動させた。
こいつらの芝居がかった口調にはうんざりだぜ…

「さあ、ご覧になって。あなた方の世界をッ！」

「「・・・」」

砂の壁が俺達を通り抜ける。そこは

「なっ！」

「え！？」

何もなかった・・・文字通り、街も、

人も、

草も。

生命の反応はなく、ただただ荒れ地が広がるだけ

「こ、ここがまさか俺達のいた世界なのか！？」

「お、お祖父ちゃんとか・・・学校の皆とか・・・」

夏ミカンは顔を真っ青にして震えている。

「違うよ、でも正確に言えば、いずれこうなる」

「!?」

ゼノンはコッチの気など知らずにヘラヘラと笑って答えた。

第7話　ゼノンとフルーラ（後書き）

とまあこんな感じの7話でした
次もよろしく！

第8話　崩壊への序曲（前書き）

「アーハッハ！見てごらんフルーラ、前書きを乗っ取ってみたよ！」
「素敵よ！かっこいいわゼノン！」

第8話　崩壊への序曲

「ウフフ、驚いているわねディケイド。そう、あなた達が何もしなかったら…」

フルーラはゼノンの肩に手を添えた。

「あなた達の世界は滅びるのよ」

なっ・・・何を言っているんだこいつ等は！

「なっ、なんで？」

「教える事はできないな、ディケイド。コレはボク達が答えていい問題ではない」

「まあ・・・でも、そんなに気になるなら自分の目で確かめてみてはいかがかしら？」

「？」

ゼノンとフルーラはくすくすと笑い合う。

「君達はこれから様々な世界を巡るだろう。

その中で君達は答えにたどり着く、多分ね？」

「世界を・・・巡る？」

「ああそうさディケイド。

君だけじゃない、これからもっと多くの戦士が生まれるだろう。
いや、もう既に兆候は出ているはず。君は分かっているんじゃないか？」

ふと、今日の双護が脳裏に浮かぶ。アイツはカブトに選ばれていた
そう言えばアイツの走るスピードは凄まじいものがあった様な・・・

「まさか・・・」

「あ、貴方達はどこまで知っているんですか？」

ゼノン達は同時に首を振る。

「君達より少し知っているくらいさ。
とにかく、君達は間もなく別の世界へ転送されるだろう。
放送室にある電子黒板をみてごらん、きっと世界のヒントがある筈だよ？」

「そうそう、言い忘れていたわ。貴方達は全員クウガの
グローイングフォーム程度のステータスを与えられているから。
分かるかしら？夏美。
あの時の触手が刺さっていても多分死にはしなかったわよ？」

「グローイングフォームだと？」

「君に分かりやすい例えを選んだだけさ。
尤も各々の特殊能力も開花してるだろうけどね」

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ！私にはもう訳が…」

「理解しようとしなくてもやがて君達は自然に理解できるようになるだろうね、
もう歯車は回りだしたのさ！誰にも止められない！いや、君達が止めるのさ！」

ゼノンとフルーラは腕を組んでクルクル回りだした。う、うぜぇ

「と、とにかくだ！まず、
何で仮面ライダーが関係しているのか？

次に俺達はどうすばいいのか！

最後にコレを仕組んだ、もしくは空間転移を行なっている奴はだれだ？
なぜ俺達が選ばれた？」

ゼノンとフルーラは動きを止めて耳打ちをし始めた。暫くしてゼノンは仕方ないなぁと言って笑う。

「まずは最初の質問、仮面ライダーが関係している理由、
これと君達の世界が危険にさらされている理由は限りなく近い。
その詳細はボクらもまだ分からないけれどね」

「そして二つめの…あなた達は何をすればいいのか？
これは明日にでもなればきっとわかるわ。
でもねディケイド、貴方が何をすればいいのかは教えてあげる」

そう言ってフルーラは俺の前に寄ってくる。
身長が腰くらいしかないから見上げられる形になるが、なぜか俺が見下されているかのような気分だ

「貴方は破壊すればいい」

「・・・は？」

それだけか？そう言ってもフルーラはくすくすと笑うだけ。
ゼノンの方へと戻り、その腕に自らの腕を絡み合わせる。

「「最後に」」

再び、二人の声が重なる。

「なぜ君たちが選ばれたのか？だね。はっきりいって意味はないよ」

「はぁ！？」

「君たちが選ばれたんじゃない。これから選ばれるんだ」

そう言ってゼノン達は笑う。

しかしすぐにため息をついて頭を抱えた。

「やれやれ、こんな素敵な夜なのに…」

「風情が分かっていないわ。残念」

「――っ、ワーム！」

ゼノン達の後ろにワームの幼体が今にも襲い掛からんとしているではないか！

「お前等逃げ――」

スッと、二人は何かを取り出した。
ゼノンは青い棒の様な物。
フルーラは赤い棒の様な物。

二人は互いに微笑むと…

「あ！司君、見てください。ゼノン君達の腰！」

そこで初めて気付いた。ゼノン達の腰にはいつの間にかベルトがある。あんなベルト見たことないぞ！？

「お、お前等、何者なんだ？」

「ワタシ達かしら？」「ボク達かい？」
『ヒィート！』　『トリガァー！』

二人は棒…ＵＳＢメモリのボタンを押す。

「「ただの『眼』さ」」

二人はメモリをベルトに刺し込み、シンクロするように横に倒す。
その動きはまさにＷの文字

「「変身！」」

『ヒート・トリガー！』

電子音が流れ、二人の体が光に変わる。二つの光は互いに交じり合って、そして人の形を形成した後、弾けた。
そこに立っていたのは、

「仮面・・・ライダー？」

好きだからとか無しにしてもライダーにしか見えないデザインだった。
ただはっきり言って異端過ぎる！体の半分が赤色で、半分が青色・・・

「ださ・・・い？」

「黙っていたほうがいいよピンキーライダー。
形や呼称大した意味は無い、覚えておくんだねピンキーライダー
ピンク、このピンク！アホピンク！」

「おい止めろッ！俺はピンクじゃない！マゼンダだ！
いいか？マゼンダだぞ！しっかりっ覚えてねッ！」

『ちなみにワタシ達はこの姿を『ダブル』と呼んでいるわ。覚えておいてね」

そう言いながらゼノンは銃でワームたちを撃ちまくる。
赤い弾丸は次々にワームを燃やしていき、ワームはどんどん減っていく。

「じゃあもうボク達は行くよ、あまり鑑賞しすぎるとあの方に怒られちゃうんでね」

『それじゃあごきげんよう破壊者ディケイド！

夏美、また会えるのを楽しみにしているわ！

せいぜいそれまで死なないでね？』

ドンっ、と言う音がして振り向くと、巨大な車がダブルの前に現れる。

「ああ、そうだ。最後にコレを」

「ああ？」

ダブルが何かを投げたので慌てて受け取る。

見てみれば、特に普通の指輪だった。一応宝石らしき物はついているが・・・

「な、なんですかコレ？」

「イメージ・リング。

それをつけて『物』を思い浮かべればそれになれる。ただしなれるのは三個まで。

それに変身できたものは消せないし上書きできない。

つまり三種類の物にしかなれないって事。後にも先にもね？」

「どこで手に入れたんだよこんなの！」

『トレジャーハンターとか言うのから頂いたのよ』

「そしてそれを空野薫に渡して欲しい」

薫に?何でなんだ、と聞こうとしたが…もうやつ等はいなかった。

「っ、どこまでも勝手なガキ共だったな」

「あはは…そう言えば結構司君のこと破壊者とか言ってましたけど…」

「ちっ、本当に何も語らずに消えて行ったな。
破壊者?壊せ?意味が分からん」

とにかく考えていても仕方ない。とり合えず今はなるように成れって事だろ。

にしてもダブルか

「フィギュア…でるかな」

「買うんですか…」

二人の声はむなしく夜に溶けていった

第8話　崩壊への序曲（後書き）

ダブルもディケイドも最初見たときは

正直あんまりカッコよくないな

とか思ってたんですけど、放送終了時にはシルエットだけで鳥肌モンのカッコよさになってましたｗｗ

ここまでお付き合いありがとうございました！次回もよろしく！

第9話　新しい世界へ（前書き）

どうも！9話です。この話で最初の世界はさよなら
では、どうぞ！

第9話　新しい世界へ

翌朝、俺達は皆に昨日の事を詳しく話した。
特にゼノンとフルーラが変わってるて事は念入りに・・・

「何コレ？」

「実は――」

「で、なんで私なの？ってか何で私の事知ってたの？」

「知らん、俺はただ渡せって言われたんだ。とり合えずつけとけばいいだろ」

「しかし信じられないな。私たちの世界が滅びてしまうなんて・・・」

「だけど・・・多分本当だ」

俺達は黙り込んでしまう。
その沈黙が耐えられなかったのか、友里が申し訳なさそうに手を上げた。

「あの、何だっけ？グローイングフォーム？それってさ、どれくらい強いの？」

「そうえいば…オレ達それくらいの身体能力になってるんだっけ？どうなんだ司」

「ああ、そうだったな。
でもいくらクウガ最弱のグローイングフォームって言ったってキック力は５ｔくらいあったはずだぞ！」

「え！？マジで！？すっげぇじゃねぇか！」

そう言って椿は窓から中庭に飛び移る。

そしてそこにある石でできたブロックの前に立った。

「５ｔもあればこんな石、豆腐みたいに崩せるって事だろ！？」

「そりゃまあ…」

「うっひょー！名探偵ごっこできんじゃねぇかよ！おいおいテンションあがって来たお！」

「またアイツは下らん事を…」

咲夜はため息をついて呆れるが本人は気にしていない。足を思い切り振り上げて

「ウェーイッ！」

雄たけびを上げてブロックを思い切り蹴るっ！

ゴッ！

「お！・・・おぉ？」

「・・・・・・・」

ブロックは少し移動しただけで砕けてもないし吹き飛んでもいない。
これではまるで普通の人間が蹴ったときと同じだ。

「なぁ…あいつなんか涙目になってないか？」

「あ、ホントだ…」

椿は先ほどとは一転し、涙目になりながら小刻みにぷるぷる震えている。
あれ？顔も青い、これ…まさか

プルルルルルッ！

頭の中で答えがでた瞬間、ポケットの中に入れておいた電話が鳴る。

「も、もしもし…」

『やあ！久しぶりだねディケイド！ボクだよ！』

「お前！な、何の用だ！？」

『聞いてくれよ！フルーラの寝顔がとってもかわいかったんだ、
この素晴らしさを是非君に伝えたくてねッ！
え？写真を見せろ？駄目だよディケイドそれはボクの――』

プチン・・・

「だ、だれからでした？」

「いや、いたずら電話だったよ。それより――」

プルルルルル！！

「・・・はい」

『アハハハハ、おかしいね電波が悪いのかな！切れてしまったよ！
それでねディケイド
昨日言い忘れていた事があるんだ。』

「な…何だよ」

『君達はグローイングフォーム程度の身体能力を与えられたと言っ

たけれどアレはあくまでも防御面だけの話さ、間違ってもキック力とかパンチ力とかが上がってると思って石とか砕こうとしないようにね！痛い目を見るよ？まあでもそんな馬鹿、いや大馬鹿野郎なんて居るわけないよね、ゴメンよディケイド。うん、居るわけないよねそんなアホ！アホ野郎！じゃあね、ディケイド。また会える日を楽しみにしているよ！』

プツリ…

「・・・」

なぜかゼノンに申し訳なく感じる。

「いってぇぇえええええッッ！！」

大馬鹿野郎の悲鳴が空へと吸い込まれていった

「そう言えば双護、お前ってあんなに足が速かったっけ？」

アイツ等が言っていた事が気になる。選ばれた奴は力が目覚めるとか言ってたな…

「ああ、そう言えばそうだな。俺自身あの時は気にしていなかったが…」

「つまり、いつもはあんなに早くないんだな？」

双護はこくりと頷く。時計を見ればまだ朝の八時半だ。

「よし、少し実験をしてみよう」

俺達の学校は特別クラスの周りごと転送されたようなので校庭も完全ではないがちゃんと存在していた。

と、言うわけで双護には手っ取り早く百メートルを走ってもらう事にしたんだが…

「な、七秒六三・・・」

「なん・・・だと・・・？」

結果は明白、双護はカブトのクロックアップを髣髴させるかのように走るスピードが速くなっていた。
あれから教室に戻ってさらに色々調べると、いろいろな事が分かった。どうやら小野寺兄弟は力が強くなったらしく、真志達は…

「のわあああああ！」
「ちょ！真志！って、えええええ！」

真志と美歩は鏡に触れて意識を集中すると、なんと鏡の中に入ることができる様になっていた。
まあ原作でも長くいると危ないので二人は早々に逃げ出したが…

拓真達はなにが変わったのか分からなかったが、
椿は凄かった。

「うおおおおおお！」

椿は次々に飛んで来る石を木の棒で叩き落す。

「はぁ、はあ！」

さすがブレイド、剣術が格段に上がっている。

「今のは・・・嘘ですね」

「おお、正解だ！」

「心音が少しおかしい動きを見せので…」

アキラには音についての力が上がっていた。
一方我夢には相手の怪我を治療できる光をだす、不思議な力が備わっている。

亘たちも今は分からなかったが…

「どうやら・・・いろいろとマジで凄くなってるみたいだな」

「つか、なんかそのロリカップルさ、
放送室の電子黒板見てみろとか言ってたんだろ?見なくていいの？」

「ああ、そうだな。でも、いまあそこには」

「すごーい！ねぇねぇぼくが写ってるよー！ねぇねぇ！あはははは！」

「どうなってんだコリャ！オイどう言うことなんだよ！」

「驚いたなぁ、本当に僕達がテレビになってたんだ」

「ｚｚｚ…」

赤青黄紫・・・カラフルな、
一見すれば敵と間違えなくも無い『イマジン』達がテレビを見ている。

番組は仮面ライダー電王、俺の携帯に数話入っているので、一瞬見せるかどうか迷ったが
今は緊急事態だ。俺達の世界における事情を知っておいてもらいたかった

「こうして見て見るとカメ！お前って出番すくねぇよなぁ、ハハハ！」

「僕はァ…最初こそ、そこそこ頑張ってたけど後々はかませ犬的扱いになったどこぞの誰かとは違　う　ん　で　ねぇ！」

「なにぃ・・・！誰の事だ誰の！」

「さぁ？誰だろうねぇ！」

桃太郎の鬼をモデルにしたモモタロス、
浦島太郎のカメをモデルにしたウラタロス。二人はケンカが絶えない。

「へっへー、その点ぼくは強いよね？答えは聞いてない！」

「坊主！その割にはお前結構負けてんじゃねぇか？」

「うぅううう！」

「ｚｚｚｚｚ」

「・・・・・」

龍の小太郎をモデルにしたリュウタロス、
寝てばっかりのキンタロス。モデルは金太郎の熊…らしい。

良太郎はまだこいつ等とは正式に契約していない。
だからデンライナーの外なら砂になる筈なんだが…まあ、こいつ等は環境が変わってもこのままなんだな。

…サイン欲しいな

「おう、どうしたんだよ？」

「え?ああ、電子黒板を下ろしてくれないか?そこに世界のヒントがあるらしい」

「え?別にいいけど」

そう言ってウラは電子黒板を下ろす。

「!」

そこには映写機で映してもいないのに、はっきりと絵が映されていた。
なにか崩れたビルの絵が描かれている。

「えへへー、誰が書いたのー?ぼくもお絵かきは好きなんだー!」

「いや、これは・・・」

「司!」

呆気にとられていると、ユウスケが慌てた様子で入ってきた。

「また光が…って」

ユウスケの視線を追う。電子黒板?

「え、絵柄が・・・変わった?」

さっきは壊れたビルだったのに、
今は違う。パトカーが至る所に止めてあって街が混乱している。そ

んな感じの絵だ。つまりは…

「世界が変わったのか！？」

「それだけじゃないんだ！」

「え？」

「おれの紋章が消えちゃったんだよぉ！」

ユウスケが手を差し出してくる。本当だ、紋章が消えている・・・

って

「おまえ…影、影見てみろ！」

「え？おわぁッ！」

ユウスケの影はまさにクウガの姿そのものではないか

「どどどどういう・・・」

――――っ、ゼノン達の声が再生される。

『歯車は回りだしたのさ！』

『もっと多くの戦士が生まれる』

「…ユウスケ気合、入れろよ」

「あ、ああ…！」

ベルトを出してみる。

ずっと憧れてたライダーに、
しかも全員になれるのに…手の震えが止まらない。

「ディケイド・・・か」

カードに映るその姿を見て、俺は笑みを浮かべる。

喜びじゃなく恐怖でもない、そんな曖昧な感情を俺は笑みで隠した

第9話　新しい世界へ（後書き）

と、言う感じでした。はい

皆さんはタロスでは誰が一番好きですか？

僕はウラですｗｗ

第１０話　「開幕」（前書き）

当時まだ仮面ライダーはあくまでも子供向けでしたが
そこからのクウガのギャップに驚いた人も多いんじゃないでしょうかね

子供時代僕はクウガを見て、指パッチンが聞こえたら真っ先に逃げる事にしました

第１０話　「開幕」

世界が変わり、重大な問題が発生した。
良太郎達がデンライナーに帰れなくなってしまったのだ。勿論モモタロス達も

「と・・・言う訳でよろしく」

「いや、こっちがありがたいくらいだよ。
　戦力的に安心できるのは司君と良太郎君だけだからね」

窓の外には昨日とは全く違う景色が広がっていた。
絵の様に殺伐とした雰囲気ではなく、普通の景色。

「平和そうな・・・所だね」

「一見はね。で？どうするの？」

「ああ、そうだな。とり合えず外に出ない限り何も変わらないだろ」

そう言って司は何気なくテレビをつけてみる。この世界でも繋がるんだろうか？

『先日、死体で発見された――』

どうやらニュースがやっているようだ。

内容はどこの世界でもある事件の報道、殺人事件と言うのは嫌なものだが

「死体で発見された――――さんは頭部を切り取られており、警察はここ最近頻繁におこっている同一の事件。
それと一連の犯人は同一人物と考えており、捜査を――」

「うえ・・・グロ」

首を切り取って殺す。想像しただけで寒気がしてくる、

「と、とり合えず・・・誰が行く?」

「俺と良太郎、ユウスケは確定だろ。
あとはついて来たい奴がくればいい。
守ってやれる自信は悪いけど無い…ごめん」

「僕らも行きます」

我夢とあきらが前にでる。つづいて双護が無言で前にでた

「私もいくよ、もしもの時があれば私を盾にして逃げるんだよ?」

「兄貴…」

「わ、私も行くわ、一応私もクウガのカテゴリの…筈」

その後も咲夜が加わった。

まあこの雰囲気からして早々戦闘にはならんだろうが・・・

「じゃあ、行こうか」

さて、鬼が出るか?蛇がでるか!

「・・・」

何にもでませんでした。

「へ、平和と言うか、いつもどおりと言うか・・・」

いつ敵が出てもいいように神経を集中していたが、いつまで経っても怪しい奴一人でてきやしない。

「ははっ、とりあえず解散しようか?何かあったら携帯で連絡を…ね?」

そう言って皆はそれぞれ解散していく。

「はぁ…」

ユウスケは自分の足元に目を向ける。

太陽が生み出した影、それは自分の姿ではなく、
古代の戦士、仮面ライダークウガを映している。

しかしそれも何故かほかの人には確認されなかった。まあそっちの方が都合いいんだが

「気になる…わよね。ごめん…」

薫はさっきからユウスケに話し掛けては自重する連続だった。話し掛けては自ら話を終わらせる、それの連続。

「あはは、いいよ薫、気を使わなくても」

「そう?だったらいいわ。何か食べに行かない?」

ユウスケは苦笑しながらも頷く、

「ん？」

ふと気付く、公園の方をたまたま見た時に、女の子がうずくまっているのが見えたのだ。
気になったので、ユウスケは薫と一緒に女の子の所まで行く事にする。

一応ワームが擬態しているかも知れないという考えを捨てずに

「ねえ？どうしたの？」

薫が女の子の目線になって優しく問い掛ける。女の子は薫を見ると、小さな声で呟いた。

「風船…」

「え？」

女の子が上を向く、薫も上を見ると赤い風船が木の枝に引っかかっていた。
それほど高い距離ではないが、女の子にとっては手の届かない場所だろう。ワームじゃない安心感、二人は苦笑し合う

「ユウスケ、お願い」

「ああ！わかった」

ユウスケは木に飛びついてグイグイ登っていく・・・はずだったが

「落ちちゃった…えへへ」

「・・・はぁ」

結局薫が木に登って風船を取る。

「はい、どうぞ」

「わあ！ありがとうお姉ちゃん！」

女の子は笑顔で薫にお礼を言って、抱きついた。

「あれ？おれは？」

「ユウスケは何にもやってないでしょ・・・・」

「うぅん、お兄ちゃんもありがとう！私、桜！お姉ちゃん達お名前は？」

女の子はユウスケにも抱きついてきた。

「おれは小野寺ユウスケ」

「私は空野薫。よろしくね」

女の子は風船が戻ってきた事が嬉しいらしく、御礼をする為に二人

を家に招待したいと言う。

「どうする？」

「いいんじゃない？集合って六時でしょ、まだまだあるしね」

二人は一応翼にメールだけして桜の家に行く事にしたのだった。

「ちょ、マジでやばいって真志ぃ！」

「だから、帰ってろって言っただろ！」

警視庁。正確に言えばこの世界のだが、そこに真志と美歩はやってきていた。

しかも二人がいるのは一般市民が入ることの許されていないフロアだ。だが真志は携帯を確認しながらズンズン前に進んでいく。

「拓真、警備のほうはどうなってる？」

『そっちには誰もいないよ、今は捜査会議が開かれてる。

でもあと二時間で終わるみたいだからそれまでに！』

「わかった。資料室はどうだ？」

『誰もいないけど鍵がかかってるみたいだ。幸い電子ロックみたいだしパスワードを教えるよ。
いい？パスは――――』

真志は頷き、なおも進んでいく。

「真志っ、まさかアレ使ったの！？」

美歩の言葉に真志は動きを止める。

「早く行こうぜ、もうあんまり時間がないから…」
「え？あ、う…うん…」

「大丈夫、この世界はオレ達の世界じゃないから」

「そうじゃなくて…もう使わないって言ったじゃん…」

真志は美歩の言葉を待たずに歩き出す。
美歩も不満を顔にだしていたが、
これ以上いう事はないと悟ったのか、黙って真志の後をついていく事にした。

しばらくして二人は資料室と書かれた部屋についた。

部屋には電子ロックがかかっていたが、
真志は迷うことなく数字を打ち込みドアを開ける。

真志は暫く中をうろついた後、そこら辺にあったパソコンにＵＳＢを差込み、データをコピーし始める。

「ハハハ、コレって犯罪だよね？やばくね？」

「さっきも言ったろ？オレ達の世界じゃないんだから大丈夫さ。確かに気持ちのいい事じゃない、でも俺達の世界を救うのに必要な事なんだよ」

「だけどさ、犯罪は犯罪っしょ！？」

そうだな、そう言って真志は苦い顔をする。

「やばくなったら学校に隠れてればいい。
あそこは多分他の人には見えない…
っていうか干渉を受けないみたいだから」

「？」

「だって考えてもみろよ、この世界にいきなり学校が現れたってのに誰一人としてこの学校を不思議がろうとしない。それってつまりこの学校がこの世界にとってイレギュラーもしくは観測できないって事だと思う。」

「な…なるほど。あ、コピー終わったみたい」

「ああ、じゃあ帰ろう――」

『大変だ！そっちに一人来る！』

「うぇ！マジかよ！」

「ええぇ！や、やばいんじゃ！」

「――――――っ！」

ドアが開く。婦人警官が緊張した様子で入ってきた、
当然だ。ドアが開いているのだから

「・・・？」

警官は暫く辺りを見て回ったが怪しい奴どころか人間の気配が感じられない。警官は安心した様子で部屋から出て行く。

「・・・危なかったな」

「はぁ・・・緊張した」

鏡が光り、二人が出てくる。

「結構便利なんだなこの能力。あはは！」

「笑い事じゃないっての！」

美歩はため息をつくと真志について来た事を軽く後悔するのだった。

第１０話　「開幕」（後書き）

すいません、先に言っておきますが
「振り向くな！」
…とは関係ありません

はい、すみません。トラウマです
ココまでお付き合いありがとうございました。次もよろしく！

第１１話　「威勢」（前書き）

「そう言えば知ってるかいフルーラ」
「何？どうしたのゼノン！」
「この作品に出てくるグロンギ語は、適当らしいよ」
「だと思ったわ！適当な男だものね！」

「「でも皆！寛大な心で許してあげてねッ！」」

第11話　「威勢」

二人が無事に脱出したのを監視カメラで確認すると、拓真はホッと息をついた。

「た、拓真・・・コレって一体」

椿が匠のノートパソコンを指指す。
そこには警視庁の監視カメラ、図面表が全て乗っていた。

だからこそ真志達は警官の目を盗んで忍び込めたのだ。

「僕も…その、よく分からないんだけど…でっかい罪だって…言ってたよ」

「？」

そう言って拓真はパソコンの電源を落とす。

「椿君、お昼にしない？お腹すいちゃったよ」

「？？？ああ、いいけど？？？」

椿は不思議に思いながらも、これ以上の詮索は止めておいた。

一方ユウスケ達は、桜に連れられて彼女の自宅にいた。

幸い公園からそう遠くは無く、歩いて十五分程度の距離だったので二人は安心する。

「へぇ、いい家だね」

「ありがとう、えへへ！」

桜の家は、大きくこそはないが可愛らしい外見の家、二人は桜に連れられて中に入る。

「ママー！ただいまー！」

「あら、おかえり桜」

リビングで桜の母親が桜の帰りを迎える。
桜はさっきあった事を話すと、母親は二人にお礼という事で晩御飯を勧めてきた。

あまり遅くなってはいけないと二人は思ったが、翼に電話してみると・・・

『いいよ、せっかくだからご馳走してもらいな。一応司君を迎えに行かせるから』

そう言ったのでお邪魔する事を決める。ただ電話の向こうで

『おい！何で俺が迎えにいかなくちゃ――』

『幼女の家に行ってるだと！おいふざけんな！俺も呼――――ぎゃあああ…』

「・・・」

「じゃあ桜ちゃん。ご飯まで私たちとあそぼっか？」

「うん！」

そう言って二人は笑いあう。その姿はまるで姉妹のように

それから三人でいろんな事をして遊んだ。

まずはトランプだ

「ババ抜きにしましょ。さあユウスケ、引いて」

「ああ」

そう言ってユウスケは薫の手札から一枚カードを抜く。

（あ、ババ・・・）

その後、ユウスケのババは彼から離れる事はなかった。

「あはは、ユウスケお兄ちゃんの負けだね」
「くぅ…」
「もう一回やりましょうか」
「あ、ああ！次は負けないぞ！」

そう言ってユウスケは薫の手札から一枚カードを抜く。

（ババ・・・）

その後、ユウスケのババは彼から離れる事はなかった

「やったー！勝ったー！」
「まぁたユウスケの負けね！」
「く、くそ！もう一回！」

そう言ってユウスケは薫の手札から一枚カードを抜く。

（ババ・・・）

その後、ユウスケのババは彼から（以下略

「つ、次は席替えしようか！桜ちゃんから引きなさいユウスケは」
「そ、そうだねッ！お兄ちゃん頑張れ！」
「おう！次こそ勝つッ！」

そう言ってユウスケは桜の手札から一枚カードを抜く。

（ババ・・・）

その後、ユウスケの（略

「ユウスケッ！んっ、ンンッ！右ッ！んんっ！右にババ！ンンッ！」

（喉の調子でも悪いのかな？
くっ、しかし、右のカードだけ目立たせている！？
薫、おれに精神的な揺さぶりをかけるつもりなのかッ？
でもな、甘いッ！）

そう言ってユウ（略

（ババ・・・）

そ（略

「・・・・」

「とッ、トランプはやめて他のゲームにしよっか！」

「そうね！ほ、他に何があるの？」

そう言って桜は黒ひげ危機一髪を持ってくる。

「お、おもしろそーっ！さあ、遊ぼうか！」

「ユウスケお兄ちゃん！頑張ってね！」

「よっ、よし！」

ユウスケは剣を樽にむけて一つ刺す。

その瞬間、黒ひげは空中に飛び出した！

ッポォォーンッ！

『ぎゃはは、ばーか！』

「・・・・・・・」

「ささささ最近の黒ひげは当てちゃったら音声がなるんだぁ！も、もう一回！」

「・・・うん」

ユウスケは剣を（略

ッポォォーンッ！

『ぎゃはは、ばーか！』

「・・・」

「そ、そうだぁ！順番を変えましょ！桜ちゃん、私、ユウスケの順

！」

「わ、わかったよ！じゃ、じゃあいくね！」

（黒ひげさん！お願い飛んでッッ！）

さくっ

「わぁい…大丈夫だぁ…」

「次は私ね」

（飛べ飛べ飛べ飛べ飛べ飛べ飛べ飛べッッ！）

さくっ

「はは…セーフだ…うれしいなあ…」

「次、おれ…」

さくっ

ッポォォーンッ！

『ぎゃはは！ばーか！』

「ゆ、ユウスケ…あの…なんていうか…帰りにジュースでも買ってあげようか？」

「薫、今優しくされたら…おれ、駄目かも…」

その後も三人は楽しく遊んで、笑いあう。
ユウスケの眼に涙が浮かんでいたのは
きっと楽しかったからだよ！

「あーあ、薫お姉ちゃんが本当のお姉ちゃんなら良かったのにぃ…」

「っ・・・」

「あれ・・・お姉ちゃん、泣いてるの？」

ふいに薫の目から涙が溢れた。

桜は自分が何かしてしまったのかと黙り込んでしまう。
そうじゃない、ユウスケはそう言おうとしたが…言えなかった。

「あ、ううん。別に桜ちゃんが何かをしたとかっていうんじゃない

の。
ただ…思い出しただけ」
「え？」
「私、お姉ちゃんがいたの。でもね、死んじゃったんだ…」
「あぅ…ごめんなさい」
「あはは、いいよ別に。すこし思い出しただけだから」
「・・・」
ユウスケは思い出す。
薫の姉とは交流が深かったので事故で亡くなった事を聞いた時の悲しみは深かった。
薫も自分も泣いていた、もちろん――
「ユウスケ！」
「え？あっ、何？」
「ご飯、できたって。さあ行こう桜ちゃん！」
「あ、うん！」
薫には…ずっと笑っていて…ほしい

「おいしかったわね」
「ああ。でも結構遅くなっちゃったぞ。はやく帰らないと・・・」

もう既に辺りは暗くなっている。
テレビでやっている様に嫌な事件も多い、二人は自然に走り出した。
何、学校までそう遠くはない。なにも起きないさ

ギャアアアアアアアアアアアアアアッ

男の悲鳴。二人は思わず足を止める。

「な、なに？」

――逃げろ

「さあ…？」

早く！

「悲鳴、だよな」

「う、うん」

今なら間に合う――

「大丈夫・・・かな？」

何をしている！逃げろ！

「助けないと…」

「ああ…そう、だな」

やめろ！逃げろ！本能が叫ぶ。

だが、心のどこかでは大した事はないと…そう、決め付けていた。

「向こうから…聞こえた、薫はココにいて…」

「え…わ、私もいくわよ…」

夜の道、静けさが漂う中にたしかな緊張が感じられる。
茂みの向こうに行きたくないと言う感情と、
悲鳴をあげた男を早く助けなければならないと言う感情。
混ざり合う二つの感情が、より緊張を高める。

「大丈夫、何も無い、何も無い、何も・・・」

そして、知る。やはり…ここは、この世界は…違うんだな。

「うわあああああああああああああああああああああ！」

「ひぃっ！」

倒れているのは男の体、しかし首は無い。その男の首を持っているのは…

『リント？…ジョデギビザバギバ』

「っっ！」

男の首をボールのように扱っているのはクモの顔した人間…のような者だった。
何を喋っているのかは分からなかったが、男を殺し、一連の殺人事件を起こしているのはコイツなのだろうと二人は確信する。

『リラシデバギバダバギ、ボソギデジャス！』

一歩、クモ男が近づいてくる。
ユウスケは恐怖に駆られながらも、足元に目をやる。自分の影、超戦士の影…。

ユウスケは素早く薫の前に立ち、適当に構えた。
既に逃げ出したい感情と、恐怖でおかしくなりそうだったが、後ろにいる薫だけは守らなければならない。

それがユウスケの理性を保つ要因になってくれた。

大丈夫…いける。勝てる、

そう信じて念じる。
いつもは聞き流していた司のライダー話を思い出して、腰に手をかざした。

「っでた！」

光と共にベルトが現れる。あとは…

「変身…」

弱弱しい声で放つ言葉。だがベルトはそれに応じるように光り、ユウスケの姿を変える。

『バビ?ビガラ!バビロボザ!』

「ユウスケ・・・本当に、変わった」

仮面ライダークウガ。古代の超戦士…

「・・・?」

だがユウスケの記憶にあったクウガとは姿と色が違う、色は真っ白、なんだか角も小さく、装飾も少ない。

「うっ、あ・・・うおおおおおおお!」

走り出す。姿なんて気にしてる場合じゃない、とにかくコイツを倒さなければ!
大丈夫、なぜなら
おれは、仮面ライダークウガなんだから

第１１話　「威勢」（後書き）

すいません。はい、グロンギ語ほぼ適当です

更新もそろそろ不定期になりそうですね、なるべく毎日したいんですけどできなかった時はごめんなさい！

次もよろしく！

第１２話　「弱者」

「おらッ！」

殴る、蹴る！クウガは力任せにクモ男を殴り続けた。いけるか！？

「ズブ、ボブバロンバ！」

だがクモ男は何のリアクションも起こさず、
クウガを投げ飛ばす。全く効いていない、涼しげな表情がその言葉を語る。

「うぐっ・・・がっ！」

起き上がろうとしたクウガにクモ男は蹴りをあびせる。
しかし本気ではない、クモ男はクウガを踏み付け、馬鹿にしたように笑う。

「っぉおッッォ！」

クウガはクモ男の足を掴み無理やりに倒す。
なかばやけくそでそこへ馬乗りになり、更に殴る！

「グッ！オオオ！」

流石にコレは効いているのか、クモ男は苦痛に喘ぐ。

このままいけば勝てる！

そうユウスケが確信した時、

「ぐっ！あああああああああ！」

背中に走る一瞬の激痛。

「ユウスケ！」

背中を見てみるとそこにはとても大きな針が刺さっていた。
普通の人間ならば一撃で死んでいただろう。

「うぁっうあああっ！」

クウガはその針を力に任せて引き抜く。
しかし襲ってきたのは痛みではなく異常な程の恐怖、
戦うとはこう言う事なのか？

「ゾビ！ジジャラザ！」
「ヒッ！」

クモ男が口から糸を吐く。それはクウガの首に巻きつき、動きを封じた。

苦しい、

怖い、

苦しい、

怖い苦しい怖い怖い

こわい
こわい
こわい
こわい
こわい
こわい。

パニックになるクウガの頭、すくむ足

「バビゾギデギスンザ、ズ・グムン・バ。」

また訳の分からない言葉が後ろから聞こえる。

声がしている方向を見るとそこにはまた化け物、ハチのような外見の男だった。

手にはボウガンの様な武器、先程の針を撃ったのはコイツだろう。

「ギラバゲゲルンガギヂジュグザスグ、ギギボバ？ククク」

「フン！ババデデギス！」

会話の意味が分からない。それがまた恐怖を加速させていく、クモ男はクウガを蹴り飛ばし立ち上がった。そこへ、さらに二人の怪人がやってくる。

「フハハハ！ゲゲルゾヅズビスンザバ！」

飛翔してくるコウモリ男。

「バセサンロブデビゾバギセスバ！」

今度はイカ…だろうか？

とにかく計四体の怪人がクウガを取り囲む。ユウスケはもはや喪失感とらわれていた。

今の自分では勝つ事はおろか、薫を助ける事も不可能、

薫を見れば真っ青になって震えている。

ユウスケの脳裏に浮かぶ、最初の世界での警官。

目の前で人が死んだリアル、

怖い。

逃げたい。

勝てない・・・

クウガになれたのに・・・誰も、守れないのか？

「ちょっとまてえええええええええええッッ！」

「ぐぅ！ガアアア！」

突如、バイクが走ってきてそのままコウモリ男にぶつかる。

「つ！司！」

「すまん、遅くなった！大丈夫か！ユウスケ、薫！」

「ダセザ！？」

「グロンギか、まあ見せてやる！」

司は素早くカードバインダー、通称ライドブッカーから一枚のカードを抜き取る。
既にベルトは装着されており、司はカードをベルトに放り込む。

『カメンライド――』

「変身！」『ディケイド！』

集い、弾けるエンブレム。司の姿が変わり、ディケイドへと変身する。

「ムゥッ・・・」

怪人たちは一斉に戦闘姿勢にはいる。

「試してやるよ・・・」

そう言ってディケイドはブッカーからカードを一枚抜き取る。―

―だが

「！？」

司が取り出したのはアギトのカード、
しかし肝心のアギトが写っていない。

司はブッカーから他のライダーのカードを抜き取る。しかしそれら
もアギト同様、無地のカード。

「なんで・・・っておわぁ！」

ハチ男が針を発射し、ディケイドは寸前の所で避ける。

「ちくっ…あああもう！仕方ない！」

ディケイドは適当にカードを一枚放り込む。

『アタックライド――ブラスト！』

ブッカーを銃にして撃ちまくる。

「お、意外にディケイドだけでも戦えるな」

ディケイドは四人のグロンギ達を相手に肉弾戦を繰り広げる。いき

なり現れたディケイドに困惑しているのか、グロンギ達の動きが鈍る。

「うらぁっ！」

コウモリ男を蹴り飛ばすと、ブッカーから金色のカードを抜き取った。

「じゃあな！」

『ファイナル・アタックライド――』

「っ！ビゲソ！」

ハチ男は素早く飛翔し、

クモ男は糸を吐きイカ男を連れて、逃げていった。

『ディディディケイド！』

ディケイドの前方に無数のホログラムカードが現れる。

「バンザ？ボセザァ！」

「うおぉおおッ！」

ホログラムカードと共にディケイドは飛び上がり、その中へとび蹴

りで飛び込む。

ディケイドはホログラムカードを通過していき、エネルギーを足に集中させ、そのままコウモリ男を蹴り飛ばした。

「ヤァアアアアッッ！」

「ズウウアアアアアアアアアア！」

爆発するコウモリ男。少しの間沈黙が辺りを包む。

「さて・・・と、大丈夫か？ユウスケ！、薫！」

ディケイドは変身を解き司に戻る。

「ユウスケお前、変身できたんだな！」

「あ、ああ・・・」

「大丈夫か？ま、でも今は帰るか。おい！出てきていいぞ夏ミカン！」

司が合図をすると、茂みの向こうから夏美がでてくる。

「私は夏美です！大丈夫ですか、薫ちゃん、ユウスケ君！」

夏美の隣りにはもう一台のバイクが停めてあった。
薫は恐怖で腰を抜かしていた為、夏美が担ぎ上げて乗せる。
「あ…れ？夏美、あなたバイクの免許なんて持って…た？」
「あはは…それが、あったんです、ポッケの中に。
私免許持ってないのに…
ついでに言うとバイクも乗れるようになってました」
「お前等もあるはずだ。ポケット見てみろ
乗り方は頭の中に入っている筈だぜ」
薫とユウスケはポケットの中を調べる。
「！」
司の言う通り二人のポケットの中には見覚えの無い免許、
「ついでに言えばバイクも校庭に停めてあった。
全く…用意がいいというか…、とんだご都合主義だぜ。
ああ、ちなみにお前のバイクはトライチェイサー２０００。コレはクウガの――」
「司君、帰りましょう！」
「ちっ、ああ・・・そうだな」

そう言って司達は学校へと戻るのであった。

「変身！」

夜の校庭、ユウスケは白いクウガに変わる。

「っ！」

変身を解く。

「変身っ！」

また白に。

「っあああああ！」

変身を解いてまた変身する。だが色は白のまま

「っくしょおおおおおッ！」

地面を殴りつける。何度も、何度も。
思い出すのは無力感、
恐怖心、
底知れぬ悔しさ。

そして虚しさ。

「何も・・・何もできないのかよ！」

あの時と同じなのか？薫の姉が…死んだ時と同じ…

「おれは…ッ、無力なのか…ッ！？」

ユウスケは呟く様に言った。

しかしその問いに答えてくれるものはいない

第１２話　「弱者」（後書き）

ってな訳で終わった１２話でした！

どうなんですかね、グロンギの名前を出すタイミングがつかめませんｗｗ

すいませんッ！もしかしたらずっとクモ男になるかも知れません

ここまでお付き合いありがとう！次もよろしく！

第１３話　「理由」（前書き）

注意！

クウガのグローイングフォームはディケイド版を基準にしています
特定の場合を除いて変身制限は特にありません

あと、空野薫の容姿は八代の姐さんを高校生くらいにしたモノと考えておいてください。
最初はそのまま出そうと思ってたんですが、ちょっとキャラが違うので止めておきました。

第１３話　「理由」

翌日、ユウスケは昨日、何度も司から聞いたクウガの話を思い出していた。

「・・・」

主人公の五代雄介は自分とは大きく違う。
人々の笑顔を守る為に戦い、傷ついても立ち上がる。

ユウスケはそれを素直にカッコいいと思う事が出来た、だがそれと同時により自分の滑稽さが焼きついてくる。

その後も暫くはクウガの話を頭の中で繰り返す

「おれは…こんなカッコよくは、なれない…」

もう一度変身をしてみる。だが相変わらず色は白、

ギリリと歯軋りをする。
だが何をしても、何を祈っても色は変わらなかった。

「何が…足りないって言うんだよ…クソっ！」

「少し・・・外にでようかな」

ユウスケは気分転換に近くの川まで歩く。

あれから何度変身を繰り返しただろう？だが変わるのはいつも白色のグローイングフォーム。これではグロンギ達とはまともに戦えない

「はぁ、五代さんになるにはどうすれば・・・」

川原に座ってため息をつく。

「うっ！」

ぐいっと目の前に飴玉が迫ってきた。思わず仰け反って倒れてしまう。

「えへへへへ！ごめんねぇ！」

「あ・・・桜ちゃん！もがっ！」

目の前で笑っているのは桜だった。桜は驚くユウスケの口に飴玉を突っ込む。

「元気ないよぉお兄ちゃん、コレ食べて元気出してねー」

「はは・・・ありがとう。桜ちゃんはどうしてココに？」

「えへへへ、これからお父さんとお母さんと一緒にお買い物に行くの！
　でもお兄ちゃんを見かけて」

「そうだったんだ。気をつけてね？」

「うん！お兄ちゃんにも何か買ってきてあげるね！」

そう言って桜はパタパタと駆け出して行った。

「まあ切羽つまってもしかたないか…ははは。おれも笑顔を守る為に戦おうかな」

そう言ってユウスケは学校に帰って行く、少しだけだが気分は楽になった

会議室では真志が取ってきたデータを元に会議が開かれている。
警察は既にグロンギの存在を認識していたが、警察の面子を保つ為に公表はしていなかったのだ。

「グロンギが首を切り取る殺人を繰り返しているのは何故だ?」

「多分そういうゲームなんだろうな、
アイツ等は人間を使った殺人ゲームをする種族だから。
ただ今回のゲームは複数のグロンギが関わっている、まるでこのゲームを成功させなければならないと言わんばかりに」

「一刻も早く成功させなければいけないゲーム?それはどちらかと言うと儀式だろう?」

「そう…か、グロンギだからってクウガ本編と同じとは限らないな」

「じゃあ・・・もしゲームが終わったらどうなる・・・の?」

真由の言葉に全員が沈黙する。

「それは、わからないけど、とにかく殺人を止める事が優先されるんじゃないかな?」

「そうは言っても次に、どこで、いつ殺人が行なわれるのかが全く把握できない。
　これでは止めようがないぞ」
双護はチャンネルをこまめに変えていく。すると――
「コレは！」
テレビの中でリポーターが必死に何かを伝えている。その遠くにはどす黒い霧をだしている山が見えた。
『ご覧下さい皆様！松葉山から黒い霧がものすごい勢いで発生しています！
　近隣住民の皆様は今すぐに避難を――きゃあああああ！』
リポーターは物凄い勢いで迫ってきた黒い霧に呑まれる。カメラはブラックアウトし、砂嵐の音しか聞こえなくなった。
「な、なんだ！？」
「まさかッ、すでに！ゲームは既に終了したのか！」
夏美が急いで外の様子を確認する。すると、
「き、霧が！霧が来ます！」
まるで激流のように山から霧が押し寄せてくる。あっという間に学

校を飲み込み、校庭のそとは真っ黒に染まる。

「やはり・・・この学校は安全のようだな」

「まだ霧は街を襲っているんですかね…？」

「司！何だよコレ！」

間一髪、校庭にいたユウスケはいきなりの光景に目を疑った。

「おいおい！どうなってんだよコリャ！」

モモタロス達も異常に気がついたのか、特別クラスに集まってくる。

「今はなんとも言えない…ね。とにかく霧が晴れるのを待とう。」

翼は窓の外を見る。

そしてじょじょに霧が晴れていく。

しかしそこにあった景色は想像を絶するものだった。

ビルは崩れ、まるで竜巻があったかのよう、しかし本当に恐ろしいのは何十人ものグロンギが徘徊している事だった。

逃げ惑う人々、そして上空には異常なまでのオーラを纏ったグロンギがいる。

『聞け！人間共よ！我は大いなる闇！貴様等に裁きを下す絶対の存在！』

「なんだよアイツは！」

「ゲームが成功した結果じゃないかな、早く皆をたすけにいかないと！キンタロス！行くよ！」

「おっしゃ、まかせとき！」

「変身！」『ＡＸ・ＦＯＲＭ』

電王は窓から身を投げると、校庭に着地する。

「くっ、とにかくあの闇とか言う奴がボスだろ？」『カメンライド――』

「おそらくな…だが、アレを倒したからと言ってグロンギが消えるとはかぎらんぞ」

「それでもやらなきゃヤバイだろ！変身！」『ディケイド！』

ディケイドも電王に続いて学校を飛び出していく。

「我夢君、私たちも行きませんか？」

「そうですね。僕達の力があれば少しは救援の助けになるかも知れません」

「…わかった。だけど絶対無理はしないでくれ」

「お、おいおい！皆、まじかよ…」

椿は力なく座り込む。

「ライダーなんて・・・子供向けの作り話の筈なのに……なんで…こんな」

「椿お前、まだそんな事を言っているのか！？」

「っ…わかってるよ！現実だろ！クソッ！」

「・・・？ね、ねぇ！」

「？」

「ユウスケと薫がいないんだけど…」

沈黙。

「く、クウガになれたんだから、戦いにいったんじゃ？」

「そう言えば…この世界で…お友達がいるって…言ってた…よ？」

「じゃあまさか！」

「桜ちゃん！桜ちゃん！」

「お願い！返事をして！桜ちゃん！」

トライチェイサーを走らせるユウスケと薫、途中何度グロンギをあ

しらったかわからない。

二人は必死に桜の名前を叫び続ける。最悪のイメージだけは浮かべない様にしながら・・・

「桜ちゃん、両親と一緒に買い物に行くって言ってたんだ。たぶん家族でいくんだからスーパーとかじゃなくてデパートだと思う。」

そう言ってユウスケは一番近いデパートにやってくる。
そこは既にデパートと呼ぶには余りにも酷く崩壊していた。だがおかげでグロンギ達は全くいない。

ユウスケはトライチェイサーを走らせデパート内を探索していく。
外装は剥がされており、青い空が見えていた。

「っ！今・・・泣き声が聞こえた！」

トライチェイサーを乗り捨てて声がした方向へ二人は走る。

「うえぇぇぇぇぇぇん！！」

「桜ちゃん！」

「桜ぁあああ！」

薫が桜に飛びつく。薫に気付くと桜はさらに大声で泣きじゃくる。

「！」

ユウスケは気付く。

桜の両親が瓦礫に埋もれていたのだ、優しそうな母親、初めて見るが寛大そうな父親。

二人は崩れた瓦礫に埋もれている、顔色は悪いが死んではいないようだ。

しかし、このままにしておけば確実に死ぬだろう

「へ、変身！」

白いクウガになるユウスケ、必死に瓦礫を退かそうとするが・・・

うまくはいかない。

「ダメなのか・・・ダメなのか！くそおおおおおおお！」

変身を解きユウスケはうずくまる。

すでに虚しさと悔しさで頭がおかしくなりそうだった。
瓦礫さえ退かせない自分がとてもちっぽけに思える。

「おどうざん！おがあざん！」

顔をぐしゃぐしゃにして桜は泣きつづける。数時間前まではあんなに笑顔だったのに…

「ユウスケ…」

「ぇ？」

薫の声が震えている。ユウスケからは背中しか見えないが、きっと…

「これが…世界が私たちに架した運命なのか…な？」

「・・・」

なにも答えられない。なにか言おうとしてもそれが正しいのか分か

らなくて口を閉じる。

「だとしたら・・・」

薫はゆっくりと振り向く。見たくないと顔を背けようとするが、視線が…外れなかった。

「悲しいね・・・」

薫もまた涙をながす。最初は静かに泣いていたが、ついに桜と一緒に大きな声で泣き始めた。

「くぅっ…っあああああ！」

もう二度と、薫には泣いて欲しくなかった。

笑っていてほしかった。

薫を泣かせない、薫の姉が事故で亡くなった時、泣き続ける薫になんにもしてやれなかった。

だからもう今度こそ泣かせない。

そう誓ったのに、今自分の目の前で二人が泣いている。

「うくぅ！」

急に桜が静かになる。薫が不思議に思って薫を見ると・・・

「え・・・？」

桜の首には糸が巻きついていた。

いや、腕、足、胴体。

それら全てに糸があった。

食い込んではいない為、そこまできつくはないだろうが

「なんで・・・」

「お…ねえ――きゃあああああああああっ！」

「「桜ちゃんッ！」」

糸は桜を持ち上げ引き離す。

ユウスケは糸の出所を探った、すると、この間のクモ男がいるではないか。

「ククククク、悪いな。人間は全て殺す事になっている、この少女も例外ではない」

いつの間にかグロンギは人の言葉を覚えていた。クモ男は桜を抱えるとその首に爪を突きたてる。

「やめろぉぉおおッッ！！」

こんな時五代さんならどうしてた?

五代さんならどう返していた？
決まってる、変身して戦う！
でもダメだ！おれは・・・

「くくっ、いいだろう。」

「え？」

「今から１０分後にこの娘を殺す。場所はこの近くの教会、助けに来たければくればいい。ククク」

そう言ってクモ男は桜を抱えたまま消えて行った。

「そん…な。は、早く助けにっ！司とか・・・」

「１０分じゃ合わない…あいつ等はソレが分かってるんだ。おれじゃ勝てない事を知ってる。
あいつ等希望だけ与えておいてそれを潰すのが目的なんだろうさ…」

「そ、そんなぁ…」

薫はボロボロと涙をこぼす。
また…なのか、ユウスケは拳を握り締める。
五代さんッ、おれどうすれば――！

『誰かの涙は見たくない』

ふと、五代の言葉が脳裏に浮かぶ。

「・・・」

昔、薫に向けて言った言葉、いや、正確には言葉にしてはいないが
心の中でずっと思っていた言葉

「薫が泣いてるのは見たくない」

「・・・ぇ？」

今日、桜にもらった飴の味を思い出す。

「そうか、そうなんだな・・・」

ずっと、五代雄介にならなければいけないと思っていた。

だが、それじゃ意味はない。だっておれは五代さんじゃないんだから

『誰かの』

もっと根本的な・・・事を思い出す。

今のおれじゃ五代さんのハードルは越えられない。

だったらもっとハードルを下げるんだ…大切な事をおもいだせ！

おれは確かにクウガに変身はできる。

だけど本当におれはクウガ…いや、仮面ライダーになれたんだろうか？

「薫・・・」

「え？」

いや、違う。

ずっと五代さんの真似をすればいいと思っていただけだ。

五代さんの『誰か』と、おれの『誰か』は全然違う。

おれの『誰か』は誰も思い浮べてなかった。

ただの言い訳だ。

同じ理由ですらない。

なら考えろっ、おれはそもそも『誰の』笑顔を守りたいんだよッッ！

ドクンッと胸が鳴る。

その一瞬だけ目の前に視えた

赤い…

戦士

第１３話　「理由」（後書き）

明日、明後日は…まあ、分かりませんが
更新が厳しいので今日中に二話あげておきたいですね

次もよろしく！

第１４話　「二人」

「おれが行ったらすぐに助けを呼んでくれ」

「行くって…教会！？」

そう言ってユウスケはトライチェイサーにまたがる。

「し、死んじゃうわ！」

「それでも・・・」

ユウスケは薫に笑いかける。

「泣いて欲しくない人がいるから…」

「待っ――」

トライチェイサーで走り去るユウスケ。

「そんな…ユウスケ…！――――――ッ！」

薫は助けを呼ぶ為に携帯を取り出す。しかしその時、二つの声が薫

の耳を貫いた。

「「その必要はないよ」」

「？」

刹那、桜の両親の動きを封じていた瓦礫の山が消し飛んだ。

だが両親に怪我は無い。

瓦礫だけが文字通り消し飛んだのだ。

「さあ、こちらのお二人を運んで差し上げるんだ」
『ゲストは丁重に扱ってね』

突如現れたのはクワガタの形をした小さなマシン、しかしその小さなマシンは桜の両親を担ぎ上げ、空へと飛んでいく。

「君達の学校に連れて行ったよ、知っているかな?あそこの保健室には治療マシンがあるんだよ?」

『私達からのささやかなプレゼントよ!受け取ってね?』

薫が振り向くと、そこには体はシンメトリーだが色がアシンメトリーの人物が立っていた。

「だ、ダブル!」

司から聞いていたダブル。ゼノンとフルーラの二人組みだ

「あ・・・ありがとう」

『お礼は後でいいわ。それより今は教会に行くほうがいいのではないかしら?』

「そ、そうだ！ユウスケ！」

ダブルは小さく笑うと指を鳴らす。すると、どこからともなく巨大な車が現れ薫の目の前に止まる。

乗れって事？薫はダブルに視線を送る。
ダブルは頷くと、また小さく笑うのであった。

「決意無き者に覚醒は訪れない」

「え？」

「言葉ではどうとでも言えるわ、思いの強さが力になるの。彼は…悟ったのかしら？」

ドン、と言う音と共に教会の扉が勢いよく開いた。

「来たか、リント」

「ほぅ…成る程、先日のリントか」

「・・・・・・」

教会の中には四人のグロンギがいた。

先日逃げたクモ、イカ、ハチ。
それに加えバッタもいる。

そしてその奥には桜が気を失って倒れていた

「おれさぁ」

ユウスケは白のクウガ、グローイングへと変身する。

「ずっと…迷ってたんだ」

それぞれのグロンギは戦闘態勢に入る。それでも尚、クウガは言葉を続けた。

「世界を守るとか、人を救うとか…分からないんだよね」

肩に鋭い痛みが走る。

見ると針が刺さっていた、だが恐怖は無い。

「だ…からさっ…今はまず「誰」とかじゃなくて大切な友達とか――グッ！」

イカが炎を纏った墨を発射してくる。

それはクウガの腹部に着弾し、猛烈な痛みと衝撃を走らせる。

「ぐぅ…友達とかさぁっ！好きな…人の為にッ！」

クウガは走り出す。もはやこれは戦いですらない、殺し合いなのだろう。

「うらぁあああああああああッッ！！」

決して綺麗とはいえない戦い方。

無茶苦茶に殴ったり、相手の足を掴んだり、

とにかく無茶苦茶だった。当然すぐに形成は逆転される。

「ぐわあああッッ！」

グロンギに弾かれ変身が解かれてしまう。

「あぐぅァ…は、ははは！何度だって…変身して…やるよっ！」

「泣き叫んで命乞いでもすると思えば…
もういい、死ね」

ハチ男がユウスケに照準を合わせる。と、その時、また扉の開く音がした。

「ユウスケっ！」

「薫！？」

ハチ男は標的を薫に変え針を発射する。
しかし薫はそれを紙一重でよけ、もう一度ユウスケの名前を呼んだ。
その言葉がユウスケの目に再び光を灯らせる！

「まて！まずはコイツから血祭りにしてやる！」

クモ男はユウスケの首を掴むと、締め上げる。
ユウスケは苦痛に顔を歪めたが、
すぐに、
しっかりと
笑った。

「薫！おれは…さ、ずっと五代さんみたいに、ヒーローにならなくちゃいけないって思ってた！
人を助ける仮面ライダークウガ！でも…違うんだよ、違ったんだよ！」

「そのシチュエーションは揃ったよ！」

「今こそ覚醒の時はきたのよ！」

突如、教会の上層部から声が聞こえる。
グロンギ達、ユウスケがそこを見るとゼノンとフルーラがこちらを見ていた。

「小野寺ユウスケ！場面はクウガ、五代と同じだ！」

「教会での覚醒！すばらしいわ！」

二人はユウスケに微笑みかける。
しかしユウスケはゆっくりと首をふった。

「違うんだよ…五代さんと一緒じゃ意味無いんだっ！五代さんになろうとしちゃ駄目なんだ！」

ユウスケは力強く声を上げる。

「おれは！こんな奴等の為に！これ以上誰かの涙は見たくない・・・とかッ！」

ユウスケの心音がこちらにまで聞こえてきそうだった。
クモ男はユウスケを殺そうとするが、なぜか出来ない。
殺気とはちがう、何かにさえぎられている様で

「皆に笑顔でいて欲しい・・・とかぁッ！
そんなカッコいい事は言えない！おれは何もかも弱いから！
だけどっ！だけどぉおおお！」

「くッ！？」

この瞬間、クモ男、ズ・グムン・バは確かな恐怖を感じた。

殺そうとするが殺せないっ！

そのジレンマがより恐怖をリアルなものへ変える！

このままでは危険だとッッ！

「せめておれが！せめておれの知っている人達にはこんな事で泣いてほしくない！」

ユウスケはクモ男の腕を掴む。

「おれは弱いかも知れない！

五代さんみたいにはなれないかもしれないぃッ！

だけどなァああッ！おれの好きな人たちを泣かせるっていうなら・・・」

ユウスケはベルトを出現させる。

ズ・グムン・バは彼の眼を直視できない、そうだッユウスケに怯えているのだ！

「ゆるさねえええええええええええッッッ！！！！」

ユウスケはユウスケの理由でクウガにならなくてはならない。
どの様な理由であろうと、彼自身が決めた理由で。

その言葉にゼノンは無邪気に笑う。

「ほぅ！五代とは同一であり異端であると？」

「おれは五代雄介じゃない！小野寺ユウスケなんだッ！変身っ！」

ベルトの中央がまわり、クウガに変身する。

しかし今までの白ではなく、赤いクウガがそこにはいた。

誰かの為に戦う英雄でなく、まずはそこに居る人の為に。
五代ではなく自分としての決意。

その自分なりの解釈が精神にアクセルをかけ、グローイングからの脱却を果たす！

祝福を！邪悪なる者あらば、希望の霊石を身に付け、炎の如く邪悪を打ち倒す戦士あり！

「なれた！マイティフォーム！」

「ウッ！」

ズ・グムン・バの手を引き離す。
あの時はできなかったが今は楽にできる！
それだけじゃない、体が軽くなり、反撃してきたズ・グムン・バの軌道が手にとるように分かった。

「おらァッ！！」

「ぐおおお！」

一発殴る。あの時は効いていなかったのに、ズ・グムン・バは今物凄い勢いで吹き飛んだ。

「うおおおおおおおおッッ！」

驚くグロンギ達を尻目にズ・グムン・バ一点に狙いを絞る。

「これでッ！」
「ヒッ！」

クモ男の肩を掴む。そしてそのまま至近距離でのとび蹴りを叩き込むッ！

「終わりだッッ！」

「ぐっ！ワアアアァァアアアッ！」

炎を纏ってさらにズ・グムン・バは後ずさる。

そして蹴った所にクウガの紋章が浮かび上がる。それをズ・グムン・バは信じられないといった表情で見る！
何故ッ？先程までその男はサンドバッグだった筈！？

それなのに負ける！？

「馬鹿な・・・こんな、こんな事がァァァァアアアア！」

爆発。その衝撃で他のグロンギ達も我に帰る。
油断すれば・・・殺されるッ！

「お、おのれぇッ！」

「早く殺せ！奴は危険だッ！」

バッタ、イカ、ハチがクウガを取り囲む。

バッタは動きが素早く、クウガに攻撃しては離れ、
また攻撃をする連続。

クウガも応戦しようとするが、スピードが速い上にイカの墨が動きを封じる。
しかもこの墨は中々に威力があり、当たれば仰け反らずにはいられない程の衝撃だった。

そして一定時間おきに飛んでくる針、攻撃しているハチは飛翔して攻撃があたらない。

クウガは未だ圧倒的不利な状況だった。

「くそッ！」

薫はそれをただ見ている事しかできない、そんな状況に理不尽さを感じる。

「どうしてユウスケだけが苦しまなくっちゃいけないのよ！」

「本当にそう思うのかい？」

「！」

後ろを振り向くといつのまにかゼノン達がいる。

「空野薫、あなたは既に舞台にあがるチケットをお持ちのはずだわ。覚えていないかしら？」

「え・・・？」

「くくく、ボク等は君を傍観者とは思っていない。
君はいつでも舞台に上がれるのさ、なんのためにチケットを渡したと思っているんだい？」

薫の体に衝撃がはしる。

「邪悪なる者あらば、その技を無に帰し、流水の如く邪悪を薙ぎ払う戦士あり…クスクス」

「そう…か！そうだ！なんで気がつかなかったんだろう！」

薫は自らの指に輝く指輪を撫でた。それを見て二人はニヤリと笑う。
イメージリング。それは彼らが薫に渡したモノ

「ゼノン君！コレの使い方って分かる？」

「念じればいいだけさ。そうすれば念じたものに姿を変えられる」

「でもね気をつけて、命ある者には姿は変えられないわ、
それにビルとかそう言う巨大な物も無理、あくまで貴女の精神力が保つ範囲のものでないとダメ」

「上等っ！ありがとうね！」

そして走り出した。クウガの所へ！

「ユウスケっ！」

「かっ、薫！？あ、危ない！きちゃダメ・・・」

薫はグロンギの攻撃を掻き分けて薫がクウガに抱きつく。

「女も殺せっ！」

「クッ！」

クウガは薫をかばう様に立つ。だが薫は逃げるどころか逆にクウガに詰め寄った。

「薫！お前何やって！」

「ユウスケ！私をッ、つかいなさい！」

「は？」

「へっ、変身！」

薫の体が光り輝く。そしてみるみる姿を変えていき、綺麗な装飾のロッドに変わった。

「へ？へ？うぇえええええ！？」

『いいから！早く！アンタ、司から話聞いたんでしょ！クウガの！』

「・・・あ！」

針が飛んでくる。が、クウガはロッドで素早く弾いた。

「…痛い？」

『全然！早く！』

「ああ！超変身！」

ベルトが青く光ったと思うと、クウガの色もまた青に変わる。

変身したときにクウガの情報がある程度頭に入ってきた。だからこ

そ変わる。ドラゴンへ！

スピードに特化したドラゴンフォーム。
クウガは周りの物で武器を精製しなければならなかった。だが薫の力があればそれはとても楽になる。

薫の姿はクウガの力でドラゴンロッドへと変わった。

「くっ！」

バッタの所まで一気にジャンプ、
先程は早いと思っていたバッタもドラゴンに変わると遅く感じる。
墨も、針も避けるのが楽に感じた。

「止めだッ！」

「ヌァアあああッ！」

ロッドで渾身の一突きを決める。キックと同じく打ち込んだ所に紋章が現れ、バッタは爆散する。

「くそっ！貴様は何なんだ！」

イカ男が無茶苦茶に墨を連射してくる。その様子を滑稽だとゼノン

達は笑った。

「邪悪なる者あらば、鋼の鎧を身に付け、地割れの如く邪悪を斬り裂く戦士あり」

「薫！」

『分かってる！』

『「超変身！」』

紫のクウガ、タイタンフォームに変わる。
防御が格段にあがり、墨を喰らってもなにも感じない、

クウガは剣に姿を変えた薫を構え、
ゆっくりとイカ男の方に歩いていく。

その姿は

まさに、

処刑人

「来るな！来るなァァァ！」

イカは墨を撃ちまくるがクウガの足取りが止まる事はない。

「グッ！ヌウウアアアアア！」

爆煙が巻き起こりクウガの姿を隠す。

イカ、メ・ギイガ・ギはクウガを倒したと油断する。

しかし

「ゴォオオオッ！」

腹部から剣が生える。いや、クウガの持っていた剣がメ・ギイガ・ギを貫いたのだ。

「コッチはな…遊びじゃないんだよ」

『あんたらがゲームの道具としてしか見てない私達にもねぇ、人生ってもんがあんのよ！』

「人間を…」

『「なめるな』」

「ゴッ！！ガァアアアアアアアア！！」

クウガが剣を引き抜くとイカは爆発する。

「ヒッ！」

ハチは自分に勝ち目は無いと悟ったのか上空に飛翔し逃走をはかった。

「さあ、クライマックスを！
　邪悪なる者あらば、その姿を彼方より知りて、疾風の如く邪悪を射抜く戦士あり！」

「薫、ペガサスだ」
「はい！」

『「超変身！」』

薫は自らを銃に変身させる。緑のクウガ、ペガサスフォーム。
視覚、聴力が上がり、集中していてもユウスケの実力では三十秒を超えると能力がコントロールできなくなってしまう

「見える・・・」

ハチは既に豆粒程のサイズまで小さくなっていたが、クウガには関係無い。
ペガサスボウガンへ精錬させた薫を引き絞る。

「ブラスト・・・ペガサスッ！」

風の弓矢がハチを捉える。断末魔さえ上げることなくハチは木っ端微塵に砕けた。

「やった・・・！」

『勝ったのね！』

「ああ！やったんだよおれ達！！」

変身を解く二人。

ゼノンとフルーラは惜しみない拍手を彼らに浴びせるのだった

第１４話　「二人」（後書き）

ええ、もちろんユウスケはやる時はやる男ですよ

次の始めに多分ちょっとした説明入れると思います。

ここまでお付き合いどうもです！次回もよろしく！

第１５話　「破壊」（前書き）

この小野寺クウガをかるくまとめますと

ドラゴン

空中で一度だけ好きな方向にジャンプできます

ペガサス

三十秒を超えると能力が制御できなくなり、
強制変身解除＋３時間変身不能となります

今現在ユウスケが変われるフォームはグローイングを除いて
マイティ、ドラゴン、ペガサス、タイタンです

では本編どうぞ！

第１５話　「破壊」

「おめでとう、素晴らしかったよ」

「おめでとう！素晴らしかったわ！」

ゼノンとフルーラが賞賛の拍手を送っていた。

ゼノンは桜を抱えていて、二人はすぐに駆け寄る。
桜は気絶しているものの外傷は見られず、健康そうだった。ユウスケと薫はホッと胸をなでおろす

「見事クウガに覚醒したようだね、見てごらん。影が戻っている」

その言葉通りユウスケの影はユウスケ本人の物へと戻っていた。

「ははは、まだまだ醜い戦い方だけどね。これから頑張るよ」

ユウスケは自嘲ぎみに笑う。しかし意外な事にゼノン達は真剣な表情でそれを否定した。
思わずユウスケは目を丸くする。

「あら！何を言っているのかしら！

あなたの信念は立派だったわ。

それを笑う者の方がよほど滑稽よ。先程の貴方はとてもカッコよかったわ！」

「その通りさユウスケ、君は強い。もちろん薫、君もね」

「蛍や蝶、カブト虫の幼虫をご存知かしら？
最初は不細工でも成長すれば誰もが認め求めるようになるわ。
あなた達も同じよ、これから成長すればいいの」

「あ、ありがとう！」

なんだ。司はウザイとか言ってたけどむしろ全然いい奴じゃないか！そう二人は思う。

「さあ、ユウスケ、薫！君達にはまだやらなければならない事がある。そうだろう！」

二人は頷き合う。

「桜ちゃんは私たちが責任をもって学校へお送りするわ。
さあ貴方達は舞台の幕に本当のフィナーレをお送りしなければ！」

「ゼノン君、フルーラちゃん！ありがーーーーー」

「あ！ゼノン！」

いきなりフルーラが何かを思い出したかのような顔をする。
ユウスケ達は大事な話かと身を強張らせた。

「さっきユウスケにカッコいいとか言ったけど、アレはゼノンの一億分の一程度だからね？」

「「・・・・・は？」」

「そうだったのかい！あはははは！いやー実は少しへこんでいたんだよ」

「私はゼノン以外の男になんか興味はないわ！
ユウスケはゼノンに比べればカスの様なものなの！ゼノンはどう？」

「わかっているよフルーラ。
ボクも君以外の女性なんかアウトオブ眼中さ。薫？正直、耳クソと見分けがつかないね」

「ゼノン・・・」

「フルーラ・・・」

「ねぇユウスケ…」

「ん…？」

走るトライチェイサー。二人の表情はどこか曇ってる。

「やっぱりさ、少し…ううん、けっこうウザかったね…」

「ああ、いや、かなり…うん。」

「ユウスケは…私と耳クソの見分け…つく？」

「・・・・・・・・・」

「おい、黙るな」

「ぐわぁ！」

『ククク！そんなものなのか貴様の力は』

「うるせぇ・・・な」『アタックライド――ブラスト！』

大いなる闇は小さく笑い指を鳴らす。
すると黒い風が巻き起こり、ディケイドの銃弾を吹き飛ばした。

「くっ、グロンギ達の儀式で現れただけの事はあるか…クウガは三回見たけどお前みたいな奴見た事ないぜ」

『ディケイド・・・と言ったか？』

「っ！」

大いなる闇が一瞬でディケイドの眼前に移動する。

そして一、二発拳を叩き込むとさらに言葉を続けた

『貴様も私ももしかしたら世界にとって、有害な物なのかもしれんな…ククク』

「はぁ？訳わかんねぇ！」『アタックライド――スラッシュ！』

ブッカーを剣に変えて切りかかる、
しかしそれも軽くいなされ逆にカウンターを決められてしまう。

「ぐぉ・・・」

司は内心焦っていた。ン・ガミオ・ゼダ。自らを大いなる闇と名乗ったそいつは、まだ生まれたばかりなのだ。すなわち人間で言うならば赤ん坊、倒すなら今しかない。
しかしその実力はもやは明確、ディケイドは時間がたつにつれて不利になっていくばかり。

二人が戦っているのは崩れかけたビルのヘリポート。そしてその下では電王が無数のグロンギ達と戦っていた。

「むんッ！はっ！」

アックスフォームは自慢の斧でグロンギ達を次々に葬っていく。
しかし空中にいるグロンギ達には対抗できず、キンタロスは渋々紫のボタンを押した。

「やったー！ぼくの出番だぁ！」『ＧＵＮ・ＦＯＲＭ』

ガンフォームに変わる電王。

ステップを踏みながら銃で次々にグロンギを撃ち落していく、
しかし地上にもまだまだグロンギ達は残っている。銃と言う性質上
あまり乱戦は向かない様で・・・

「あーあ、もっと遊びたかったのに！んもー！」

『ＲＯＤ・ＦＯＲＭ』

リュウタロスは渋々ウラタロスに交代する。
ロッドフォームはクスリと笑い、ロッドを振り回した。

「さぁて…そろそろ決めるかな」『ＦＵＬＬ　ＣＨＡＲＧＥ』

ライダーパスをベルトにかざし、エネルギーを集中させる。

「ハッ！」

電王は地面にロッドを突き刺す。

するとロッドは地面に吸い込まれるように消え、代わりに巨大な六
角形の魔方陣を展開させた。
魔方陣の中にいるグロンギ達は皆動きが止まり、苦しそうにもがく。

どうやら魔方陣に拘束されているようだ。
電王はまた軽く笑うとその場で踵落としを繰り出した。
その結果、魔方陣はガラスの様に割れ、グロンギ達は衝撃で一気に爆発して消滅する。

「ふぅ、やっぱり僕ってつよ――ってうわぁああ！」

いきなり空から黒い巨大な弾丸が降ってきて、地面にあたり爆発。
その爆風で電王は吹き飛び、同時に変身も解けてしまう。

『だっ、大丈夫良太郎？』
「う、うん・・・あ！」

弾丸だと思っていたのは闇の炎に覆われたディケイドだった。
さすがにあの高さから落ちたのだから苦しそうにうめいている。

「いっつ・・・くそっ！」

『ククク！破壊者よ、その程度ではこの大いなる闇は崩せぬぞ』

大いなる闇は両手にエネルギーを集中させる。

「逃げてディケイド！」

良太郎が立ち上がろうとしたが、足に痛みを感じ立ち上がれない。
どうやら先程の爆発で足を怪我してしまったようだ。

「うっ・・・あ、ああ」

『死ね！』

立ち上がろうとするディケイドに闇のエネルギーが襲い掛かる。
ヘリポートから地面まではすこし距離がある為、避けようとすれば
避けれたが体が麻痺して動けなかった。

あと二十秒程で着弾するだろう、ディケイドは避けるのを止め防御
の姿勢をとった。

そして、そこにバイクの音が響き渡る。

「ちょっと待ったぁあああ！」

「「ユウスケ（さん）薫（さん）！」」

「『超変身！』」

ドラゴンフォームになり猛スピードでディケイドの前に走っていく。

そして着弾、物凄い爆発がおこり良太郎は思わず目を瞑った。

『ほう・・・耐えるのか』

ディケイドを庇うようにしてタイタンフォームが立つ。

「ユウスケ！お前変身できたんだな！」

「ああ、おれには決意が足りなかったんだ。
五代さんの真似をすればいいと思ってた。
でも今は違う。今はおれはおれの決意で、大切な人の為に戦う！」

『ヌゥッ！貴様等…何故戦うのだ？
リント共を守る為か？だとしたら実におろかな選択だな！
リント・・・人間など守る価値など皆無！
自らの利欲の為、他の者をおとしめ、争いを絶やさない低俗な生き物よ！

いらんのだ！この世界を支配するのは我々グロンギだけでいい！』

「それでも…それでも笑っていて欲しい人がいる！」

『何ぃい！』

「泣いて欲しくない人がいる！
確かに人間はお前等から見たら馬鹿な生き物かもしれないさ！
でもおれ達は生きてるんだ！
その人生のなかで出会った大切な人が…笑っていられる為に、おれは戦う！
その人たちの笑顔を守る為にっ！」

「人間が皆腐ってると思ったら大間違いよ！
たしかにアンタの言ってる事は正しいかも知れないわ。
でもね、
十人中九人が腐ってても一人が輝いていたらその時点でアンタの考えを否定しなきゃならない！
その一人が幸せに死ねるまで、世界は、人間は滅びちゃいけない！
私たちはこの世界でその一人に出会った！だからアンタのやる事を全力で邪魔させてもらうわ！」

『ヌゥウッ！』

「ははっ、お前ら…
じゃあそうだな、俺は、こいつ等が俺達の笑顔を守ってくれるって言うんなら…

俺はこいつ等の笑顔を守る！」

『何！？』

「知ってるか？こいつ等の笑顔、悪くないぜ」

「ははっ、何だよそれ、ははは」
「ま、悪い気はしないけどね」

ライドブッカーが光り、中からカードが飛び出してくる。

それは無地になっていたクウガのカード、だが今は確かにクウガが描かれている。

『き、貴様等！一体何者だ！？』

「仮面ライダークウガ！」

「・・・の武器！」

ディケイドは開放されたカードをベルトに装填させる。

「俺は破壊者なんだろ？だったら俺は――」『ファイナルフォームライド――』

『！』

「この世界の涙を破壊する！」『ククククウガ！』

クウガの体が光り輝くと、同時に姿が変化していく。それは巨大なクワガタの様な姿だった。

第１５話　「破壊」（後書き）

最近、喉の調子が悪いっすわ

皆さんも健康には気をつけて

では次もよろしく！

第１６話　「強者」（前書き）

いずれクロスオーバーとかもやりたいですね

ではどうぞ！

第16話　「強者」

『おわっ！何だこれ！』

「クウガゴウラムだ、俺もお前も能力は頭の中に入ってきただろ？後は好きな様に動け！」

『分かった！薫！』

「うっしゃ！」

薫は銃に変身し、ゴウラムの背中に乗る（？）

それは乗ると言うよりセットと言ったほうが近いが・・・

『良太郎、僕等はどうする？』

「まかせよう・・・多分コレは彼等の戦いだから」

そう言って良太郎達はゆっくりと下がっていった。

『フン！茶番はもういい！消えろぉぉおお！』

大いなる闇はヘリポートを引き剥がし、クウガたちの方へと投げつける。
巨大なヘリポートは圧倒的だが、ゴウラムは恐れることなく突っ込んでいった。

『うおおおおおおおおおおおおおお！』

ゴウラムの角がヘリポートを真っ二つに引き裂く。
大いなる闇はそれを見ても表情を変えることはなく、尚も闇のエネルギーを発射していく

しかしそれもゴウラムは弾くか受け止めて、
大いなる闇の所へと着実に突き進む！

『変身！』

屋上へ着くとゴウラムからクウガに変身する。
薫は銃のままベルトにセットされて、とりあえずは安心だろう。

『ふん・・・』

「・・・」

ヘリポートが剥がされた屋上はボロボロだが、なんとかその形を保っていた。

そこにクウガと大いなる闇は互いに対峙する。

時が止まったかと錯覚するほどの沈黙がながれ、

やがてクウガが走り出した。

「はああッ！！」

『ゼアっ！』

クウガの拳を、大いなる闇は楽々と受け止める。直感的に悟る実力の差、しかしクウガは攻撃を止めない。

「超変身！」

ドラゴンフォームに変わり素早いロッド攻撃を仕掛ける。しかしコレも先程と同様すぐに見切られ、反撃を受けてしまう。

「ぐあっぅ・・・」

『無駄だ・・・あきらめろ！』

「あきらめるのは…死んでからでいい！超変身！」

タイタンフォームに変わるクウガ

『馬鹿な奴だ！――ムッ？』

大いなる闇は素早く黒い障壁を展開させる。するとそこに無数の銃弾が浴びせられた。

「ちっ！」

屋上の入り口からディケイドが姿を見せた。

「おっと、卑怯なんて言うなよ！お前等だってグロンギの大群で襲ってきただろうが！」

『ふん、貴様等程度、何人増えようが同じ事よ！』

「言ってくれるな！」

ブッカーをソードにかえて切りかかり、クウガもまたタイタンソードで応戦する。

『無駄だァッ！』

闇のエネルギーを爆発させ、二人に発射する。

クウガは剣を投げ、
ディケイドを守るように前に立ち、攻撃を真っ向から受けた。

「ユウスケ！」

「タイタンの硬さをなめてもらっちゃ困るなぁ！・・・グゥっ！」

『ハハハハ！終わりだ！』

と、その時、

大いなる闇の視界が真っ暗に変わる。

何が起こったのか？

余りにも唐突で大いなる闇は攻撃を止めてしまった。

だが、すぐに理解する、

誰かに目をふさがれたという事にっ！

「だーれだっ！」

暗黒の視界で確かに聞こえる声と足に走る衝撃、

『あの時！剣を投げたのはこの為かァアアアっっ！』

薫は全身の力を込めてで大いなる闇のバランスを崩す。
一瞬でしかなかったが、それと同時にディケイドの剣が深く腹部に突き刺さった。

『ぐっっ・・・がぁああ！』

薫はジャンプで二人を飛び越えると同時に剣に変身し、
そしてクウガの手に納まる。

「うおおおおおおおおおおおお！」

叫び、クウガは走り出す！

『グォオオオオオッッ！』

カラミティタイタン！
タイタンソードが大いなる闇を貫く！

『あ・・・グッ・・・ガフッ！』

黒い血を流しながらも、大いなる闇は二人の剣をしっかりと掴んだ。

『終わらん・・・ぞぉおおおッッ！』

突如黒い嵐が巻き起こり、クウガやディケイドをビルごと吹き飛ばす！

巨大なビルだったが、黒い嵐によってその形はバラバラに変わってしまった。

「うっおおお！？」

崩れ落ちる瓦礫の山、大いなる闇はその中でクウガの姿を発見する。

『死ぬがいいッ！』

大いなる闇はクウガの所まで一気に飛翔し、その首を掴んだ。

『死――――ッッッ・・・』

ふと、腰の方に目をやる。

そして気付く

ベルトが…変わっていると言う事にッッ！

『貴様！っ破壊者ッッ！』

「正解だ！」

光と共にクウガはディケイドに戻る。

カメンライド、

ベルトでしか本物と偽者を判断できない。

大いなる闇もまたクウガとディケイドを勘違いしてしまったのだ。

では、本物は!?

「本物は・・・どこだと思う?」

『何っ!――ぐわッ!!』

背後からの衝撃、振り返ればクウガゴウラムが大いなる闇をしっかりと掴んでいた。
ディケイドはそれを確認すると、カードをベルトに放り込む。

『ファイナル・アタックライド――ククククウガ!』

ゴウラムの角が光る。
大いなる闇は危険を感じ、必死の抵抗に入るがどんなにもがいてもゴウラムは大いなる闇を離さない!

『くッ!　何故離れんっ!』

『離さない様にしてるからだっ!お前はココで終わりなんだよ!』

「ああ!」『ファイナル・アタックライド――』

先に地面へ着地したディケイド。自らもまた必殺技を発動させた。

『ディディディケイド！』

ディケイドとゴウラムの間にホログラムカードが出現していく。
重力を無視するが、ホログラムカードに吸い寄せられて行く為、斜め上に飛び蹴りができる様になっている。

「うォオオオオオッッッ！！！」

『はぁあああああああああッッ！』

『ぐっぉおぉおぉおお！』

「『やぁあああああああああああああああああああッッ！！』」

ゴウラムとディケイドのダブルアタック。
ディケイドアサルトが直撃する。

「リントォォ…見事だ…闇が…破壊されるぞ……ッ、ガァァアアアアッ！！」

大いなる闇は両手を空に伸ばし、そして爆発するのだった。

第１６話　「強者」（後書き）

ＦＦＲ時はＦＡＲのカード１枚で個別必殺
２枚で協力必殺が発動されます

では！次もよろしく！

第17話　「世界」（前書き）

ヒーローと言う事で虎兎を見てるんですが面白いですね

折り紙とキッドちゃん、リンリンコンビの活躍を期待してますｗｗ

第17話　「世界」

あれから二日後、町はボロボロだったが、今は少しずつ前の姿を取り戻していた。

グロンギ達も全て消え去り、平和な時が再びやってこようとしている。

「兄貴！ただいまー」

「翼さん！」

「あ、ユウスケ、薫ちゃん！」

校庭でジュースを飲んでいた所、二人の姿を確認する。

「お別れはしてきたかい？」

「ああ、できればもう少しいたかったけどね」

ユウスケと薫ちゃんはこの二日間桜ちゃんと一緒に過ごしていた。

桜ちゃんの両親はすこし入院すればいいだけで、命に別状は無いようだ。

でも桜ちゃんが寂しがるといけないから二人には家に行ってもらっていた。

二人も乗り気だったし、桜ちゃんとはいい時間を過ごしてきたみたいだ。

「絵が・・・変わったんだって？」

私は頷く。
じつは今日の朝、放送室の電子黒板の絵柄が変わった、

おそらくそんなにしない内に別の世界へ移動する…と言う考察から二人には午前中の内に帰ってきてもらった。

「そう言えばさ、薫ちゃんはクウガを見ていたのかい？
聞けばその指輪の使い方がクウガの為にと言えるらしかったから」

薫ちゃんは顔を赤くして下を向いてしまった。そしてゴニョゴニョとなにか呟く。

「いやぁ…私も、
その…
ユウスケの力になりたかったから…司にクウガの話何回も…聞いて」

成る程、でも結果的には薫ちゃんはユウスケにとって大切なパートナーになったんだから、それは凄い事だと思う。

「ははっ、薫・・・」

ユウスケが右手を薫ちゃんに差し出した。

「これからも一緒にたたかってくれる?」

「え!あ!あははは、もちろんオーケーオーケー、ハハハ!」

薫ちゃんは恥ずかしそうにその手を握る。

そう言えば昔に比べて薫ちゃんは大分笑うようになったようだ。

その原因の一つにユウスケがいるなら、兄として素直に喜べる

「おにいちゃーん！おねえちゃーん！」

「え？」

ふと声がして私たちは振り向く。

なんと校庭の向こうには桜ちゃんが立っていた！

「え？おれたちが見えてる？」

「いや・・・多分それは無いと思うけど・・・」

「また会おうねぇー！」

桜ちゃんはニッコリと笑って手を振った。

ユウスケと薫ちゃんは、親指を立ててにっこりと笑う。

「あ・・・」

学校の周りが光りで満たされる。空間移動が始まったんだ・・・

「そう言えばさ、次はだれが選ばれたんだ？」

「ああ・・・それは――」

「無理はするなよ」

「分かってるよ兄さん」

亘が自分の影を見ながら苦笑する。
先程までの自分の影でなく、今は仮面ライダーキバとしての姿があった。

電子黒板には闇夜に浮かぶ月と、交差する二つの旗が写っている。
亘は深呼吸して椅子に座った。

「亘君…」

「大丈夫さ里奈ちゃん。ボクは…大丈夫」

光が晴れていく。亘は震える手を隠して、静かに笑った。

第17話　「世界」（後書き）

ちょっと次の世界の話を整理する為に
2～3日くらい更新をお休みするかもしれません
すみません！

第１８話　番外編　皆でクッキング！（前書き）

はい、と言うわけで番外編です

正直、ライダー全く関係ないですｗｗ

第１８話　番外編　皆でクッキング！

「え？お祝い？」

「うん、ユウスケや薫ちゃんが無事に変身できたお祝いみたいなモノさ」

「へー、だから皆いないのね」

そう言って薫は辺りを見回す。いつもは賑やかなクラスだが、今は静かですこし寂しげだ。

「皆ユウスケ達の為にグループで手作りの料理を作るみたいだよ。だから薫ちゃん達はどの料理が一番おいしかったか決めて欲しいんだ。」

「まあ、別にいいけど」

「普通にやるのはつまらないって言ってね、一番のグループには景品があるんだよ」

「成る程、ははん！おもしろそうね」

今頃、調理室でどんな事がおこっているのやら、薫はそんな想像してニヤつくのだった。

「はーい、と言うわけで司会の聖　亘と――」

「野村里奈です！」

「さてと、今回はユウスケさんと薫さんの為に料理を、くじ引きで決めたグループで作っていく訳ですが…」

そう言いながら亘は後ろの冷蔵庫を指差した。

「見事二人の舌を満足させたチームには、この世界でしか買えない！
有名スイーツショップのケーキをプレゼントします！」

ウオオオオオオオッッ！！

「凄い迫力だね皆さん…」

「糖分に飢えてるからね、皆」

と、言うわけで。二人は開始を告げるホイッスルを勢い良く吹いた！

「「ではっ、始めっ！」」

司、椿、咲夜、アキラ、双護チーム

「で、皆料理の腕前はどの程度なんだ？俺は正直あんまりやった事ないんだ」

「はぁ…」

その言葉に椿は深くため息をつく。

「な、何だよ…」

「司ちゃんよ、今は男も料理ができて何ぼの時代なんだぜよ？いわゆる嗜み？

それはライフ？」

「は…はぁ」

「つまり何がいいたいんだ貴様は」

咲夜がイライラしながら問いかける。椿はやれやれと前髪をかき上げて笑った。

「俺の中学時代のあだ名は『現代に蘇ってしまった鉄人』って言う

んだぜ？」

そう言って椿は何かを取り出す。

「ほぅ、マイ包丁という訳か」

「ご名答、双護まさかお前も？」

「ふッ、料理は良くやるんでね」

成る程ね、と二人はニヤニヤ笑い合う。

「ふふっ、本格的ですね」

「鉄人ねぇ…」

「まあ得意なのに越した事は無い。アキラ、咲夜はどうだ？」

「す、すみません。私もあまり」

「私の祖父は料亭をやっていたんだ。ワタシも多少嗜んでいる」

おお、勝ったんじゃないかコレは。
司の頭には最速勝利の二文字が浮かびあがる。
他のチームがどうかは知らないがこのチームのステータスは中々に高い様だ。
司は自分のくじ運の良さに笑いが出るのであった。

「よし、じゃあ何を作る？」

「オムライスとスープだな。ま、プロの腕前を…」

椿はそう言って卵にひびを入れる。

そしてニヤリと笑い。片手でボウルの上へと持って行く。

「おお！出来るのか！」

「当たり前だろうが！見せてやるよッ！」

パキンと気持ちのいい音がして卵はボウルへと落下する。

ぐちゃぐちゃに崩れた黄身と殻を混ぜながら…

「え？」

「・・・・・」

椿は何も言わずに卵の殻を取り除く作業へと移るのであった。

想像してたのと何かが違う。
司はそんな感情をいだいて周りを観察していた。

ドヤ顔で鉄人だのと言っていた椿は野菜さえ満足に切れず、
料亭が何とか言っていた咲夜も先ほどから塩と砂糖、
ソースと醤油を何回も間違えている。

同じく料理を嗜むと言う双護も、人参の皮剥きができてない。なんか身までどんどん削っていってる。

「だあああああッ！咲夜さんよぉ！
お前何回調味料間違えてんだよッ！

何ですか？アレですか？
今さら属性付けですかぁー？

無理無理！無理なんだよ！
今さらドジっ娘なんて狙ってもお前の『人間凶器』のタグは消せないんですぅ！」

「黙れ、鉄人（失笑）が！
偉そうに語っておいてそれか？マイ包丁が泣いてるぞーぉ！」

「は、はぁ！？ここれはアレだよ、ちょ、ちょっと調子が悪いだけですぅｗｗ」

「元からそんな腕ないのだろうが！「旨いんぼ」全巻よんだからって調子に乗ってるのではないのかー？」

「う、うるせぇよっ！料亭とか言ってたくせにお前も似たようなもんじゃねぇか！」

「くっ、今日は…その…たまたま調子が…」

「はいはーいッ！皆さんー！
ここに馬鹿にした男と同じこと言ってる人がいますよー！」

「ちょっとそこー、リアルファイトしないでくださーい！」

亘が半ば予想通りと言った顔で笛を吹く。

椿と咲夜は少し納得いかないようだったが渋々元の作業に戻った。

「くっ、俺は駄目みたいだスマンっ。双護、お前に任せるぜッッ」

椿はふらふらと双護の肩に手を置く。双護は分かったと静かに笑い、
冷蔵庫へと向かった。

「見てみろよ司、あの双護の後ろ姿を・・・」

「はあ」

「あれは間違いなく料理人、そう本物の後姿だ。
オーラが違うね、うん。アイツはもしかすると将来その道で生きていくかもな。」

「ふ、ふぅん・・・」

そうなのか？いや全然分からん。あ、双護が戻ってきた…

「あれ？」

俺はてっきり材料を持ってくるもんだと思ってたんだが
双護はなにか赤い袋？みたいなモノを持って帰ってきた。

椿は気づいてないようだが…

何か嫌な予感が…

「ふっ、待たせたな。七分だけ待っていてくれ、直ぐに決着をつける」

「何て頼もしい言葉なんだオイっ！双護△、マジ双護△！」

「・・・」

双護はその赤い袋、『本格派チャーハンZ』を皿へと移し、慣れた手つきでレンジのメモリをセットする。

「・・・え？」

「・・・やっぱな」

真っ白になった椿が我に返ったのは七分後、
チンッと言うおなじみの音がした時だった。

双護は出来上がりを満足そうに確認すると、出来たぞと、これまた
ドヤ顔でスプーンを添えた。

「ふむ、なかなかいい出来だ」

「え…やだ、え?ちょっとやだッ。

何?え?いや、こわいこわいこわい!

え?

嘘!?

何、何なの?これ、料理なの?
これできるからって料理できちゃうって言っちゃうの?嘘!怖い
怖い!怖いッ!」

「ああ、やはり旨いぞ!最高だ!」

「え？やだ、しかも何で食べてんの？
あれ？これユウスケと薫に食わせるモノ作ってるんじゃなかったっけ？
なのに何で当たり前の様に食ってんの？
え？あれ？
コレ俺が間違ってんの？

嫌だ、怖い怖い怖い！
分からない、分からない！

いやぁあああああああ！」

完食した双護とパニックになる椿。また塩と砂糖を間違えた咲夜・・・

「まともな奴はいねぇえええのかぁあああッッ！」

終わった、最悪だ。他のチームはなんかもう後半に入ろうとしてるのに俺達はスタートすらしてない！
終わった！俺は自らのくじ運のなさを恨む！

「皆さん！落ち着きましょう！」

そこに一筋の光ッ！

「あ、アキラ！」

「まだカレーくらいなら作れるのではないでしょうか？
皆さん、ここは力を合わせて頑張りましょう！」

ま、眩しい！光輝いて見えるぞアキラが！

「ああ！そうだ・・・な」

ふと、鼻に香るカレーの香り

「あ・・・」

真志達のチームが作っているのは

「カレー…」

アキラを見る。あ、目を逸らされた…

「おいっ、司！」

「ん！？どうした」

椿が真剣な表情でこちらを見てくる。瞬間、俺は悟る。

「成る程な」

俺達はニヤリと笑った。

「奥の手…だな」

真志、友里、拓真、我夢、良太郎チーム

「うん！とってもおいしいっ！」

「よしよし、もうちょっとで完成だ」

元から料理がうまい真志と友里。

そこに拓真達のサポートが加わり、完璧とも言えるカレーが完成しようとしていた。

だが、そこに…

「ん？椿？」

「コレクッテモイイカナ？」

「は?」

椿はズボっ、と鍋の中に顔を突っ込み、カレーを物凄い勢いですする。

数分後には鍋の中は空へと変わった。

「な、なにすんのよーッ!せっかく作ったのにー!!」

「・・・そうだな、お前ら頑張ってたな」

「だが私は謝らない」

「椿コノヤロォォォッッ！！」

「おおお落ち着いて友里ちゃん！また作ればいいじゃないか！ね？」

野良犬の様に吼える友里を鼻で笑うと椿は司の元へと戻る。

「お前もなかなかの悪だな椿よ」

「いえいえ、破壊者様には敗北いたしますよ。

まさかこんな作戦を思いつくとは…この椿、恐ろしさで未だに心が震えております。

まさか敵のカレーを漫画の様なノリで平らげろなどと…」

「そしてソレを簡単にやってのける主の実力、この破壊者たる私も感服せざるをえんわ！」

「伊達に二次元愛していませんから！」

アーハハハハッ！　二人は笑い合う。

「して、双護達は？」

「ああ、問題ない。今は材料を取りに行っている。ばれると面倒だからな」

「流石です破壊者様。

真志チームを潰せば我らがチームの勝利は固い。見て御覧なさいあのチームを」

ハナ、美歩、夏美、真由チーム

「ねぇ、塩ってどのくらい入れればいいの？」

「そんなん適当でいいしょ！料理は直感だってハナっち！」

「お塩に…お砂糖に…マヨネーズ！」

楽しそうに真由はそこらへんの調味料をぶち込んでいく。

「料理は隠し味が大切なんですよ！なんか入れましょ隠し味！」

「んー、隠し味かぁ。ま、酢でいいんじゃない？」

「お酢ね、分かったわ」

どぼどぼとハナは酢を鍋にぶち込んだ。

「あ、全部入れちゃった。」

「いいっていいって気にしないー！甘さで消せばいいじゃん。
砂糖入れればオッケ！」

ドサーッっと砂糖が大量に投下される。

「ところで…何…作ってるん…だっけ…？」

「おいしいものですよー、あ、わさび入れましょ、わさび！」

「今頃絶対真似しないでね的なテロップが下に出てるであろうあの暴挙！
もはやあのチームは居ないも同然。つうかユウスケ死ぬんじゃない？」

「となるとやはり問題は真志達と言う訳か、よかろうもう一回潰しておくか」

そう言うと司は戻ってきたアキラに詰め寄る

「え？お願いですか？…はあ、いやでも何でそんな事――わ、分かりました。そこまで言うのなら…」

相原我夢は悩んでいた。料理をそんなにやらない自分が、味付けを任された事に…

「・・・よし」

覚悟を決める。任された以上、責任がある。

同じチームメイト、先輩の役に立たなければと我夢は気合を入れた。

「・・・」

我夢はコインを取り出しソレを弾いた。
彼の癖だ、物事を決める時や軽く占いをする時によく使う。

「表がでれば成功する、裏が出れば５０％で成功する！」

コインが手に戻ってきたとき、それは表を示す。

「よしっ！」

いい事がある。自分に自身を持って彼は味付けに取り掛かるため醤油を構えた。

「我夢君」

「あ、アキラさん！？」

いきなり呼びかけられて驚く我夢、いそいで醤油を入れるのを止めようとしたが…

「我夢…くん、その…ちょっといいですか？」

上目遣い、
さらに何かちょっとモジモジしているアキラを見て我夢の時間が止まる。

「ちょっと…伝えたいことがあって…」
「えっ！？」

な、なんだ…何なんだアキラさん！？
僕に伝えたい事がある？

し、しかも何かちょっと恥ずかしそうだぞっ…！！
こ、これは、これは…

まっ、まさかッ…

「駄目・・・ですか？」

いやいやいや駄目なんてモノじゃないですよアキラさん！

何だ！

何なんだこの可愛さは！

駄目だ！駄目です！いけませんアキラさんッ！

どうしてちょっと瞳が潤んでるんですかぁ…！！

もっ、萌えぇ…死ぬぅっ！

「・・・ぁの！やっぱりなんでもないですッ！」

アキラはそう言って走り出す。

「あ！アキラさんっ！」

やっぱり今のはそう言う事なんだろうか！？
我夢の頭の中がお花畑になろうとした時、彼は大切な事に気づく。
手に持ってる醤油が全部空になっている。と言う事は…

「しまったぁあああああ！！」

鍋が真っ黒に変わっていたのを見て、我夢はその場に崩れ落ちたのだった。

「一応やったんですが…なんの意味があったんですか？」

「いやぁ、アキラ。充分だ！」

不思議そうに首を傾げるアキラと汚い笑みを浮かべる司と椿

「でも流石にちょっと可哀想な事しちまったな…」

「なぁに、俺はアイツの恋を全力でサポートするつもりだお」

「本当かよ？」

「あったりまえだろ、男なら約束は守るもんだぜｗｗＪＫ！」

「お前が言うと薄っぺらいんだが…」

「ところで他チーム潰したはいいけど肝心の俺らはどうすんのよ、のこり時間もうないけど…」

「・・・・・・・・・」

「あれ？破壊者様？」

「考えてなかった…」

「許さない　絶対にだ」

「はい、というわけで！終了ー！」

「さあ、こちらにはさっそく薫さんとユウスケさんに来てもらっています！」

「ど、どうも。へへっ」

「ふふん、楽しみにしてるわよ」

「ではさっそくいってみましょう！まず一品目、真志チームの料理は…」

「卵スープです！」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「あの…いや、嬉しいよ。嬉しいんだけど…ちょっと少なくない？」

「いや、ホントいろんな事があって…すいませんでした！」

「いや、おいしいわよ。でもねやっぱちょっと少な――――」

「は、はい！では次は司ペアです！」

「司ペアの料理は…チャーハン！」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「いや、おいしいよ。だけどさ、何かどっかで同じもの食ったことがある気が…」

「ねぇ、何でゴミ箱に冷凍商品の袋捨ててあるの？しかも何でチャーハンなの？しかも――」

「さ、最後は美歩チーム！」

「料理はから揚げだそうです！」

「・・・」

「・・・」

「やばいっしょ！うまそうっしょ！」

「何コレ…グロンギ？」

「なんでから揚げなのに液体なのよ！うわっ！臭ッ！」

「いいからいっちゃてよグイっとさ。ホラホラ」

「ゆっ、ユウスケ！」

「えっ！おれ！？」

恐る恐るユウスケはソレを口にする。

パタリ・・・

「ユウスケぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇッッ！！」

「結局、ケーキはユウスケと薫に貪り食われました…まるっ」

「おう坊主、何やってんだ」

「なんだ、モモタロスかぁ。日記を書いてるんだ！」

「どれどれぇ～・・・」

こうしてまた一日が過ぎていくのであった。

第１８話　番外編　皆でクッキング！（後書き）

美歩達のから揚げはスタッフたちが後でおいしく頂きました

ここまでお付き合いありがとうございます！

次のキバ編もよろしく！

第１９話　ベン　マルカート・誰もいない街（前書き）

というわけで今回からキバ編です
ではどうぞ！

第19話　ベン　マルカート・誰もいない街

とり合えず俺達は、まずこの学校について調べる事にした。
亘と里奈にはキバの話を思い出す限り伝えておいたし、次は学校が気になる。
すでに真由と友里がある程度調べておいてくれたので、細かいところは探さずにすんだが。

まず、この学校は特別クラスを中心に構成されていた。
中心に中庭があり、保健室、放送室、食堂の一角、和室、シャワー室、トイレ。
そして理科室、図書室。

ある程度の教室・・・
つまり大体の教室はある。

四階建てで、校庭はすこし狭いがちゃんと備わっている。
しかもプールまであり、若干意図的なものを感じた。

それだけではない。どう言う原理か電気はちゃんと通っているし（そもそも俺達の携帯だってそうだ）、
食堂の巨大冷蔵庫、キッチンも使えるようになっていた。

驚く事に何故か掃除用具入れには札束が数え切れない程おいてある。

はっきり言って生活には困らないレベルの設備が備わっていると言う訳だ。

しかし一番驚いたのはなんと言っても保健室の治療器具だった。
あきらかに俺達の世界じゃない道具。

まるでマンガにでも出てきそうな装置で、その効果も凄まじいものだった。
桜の両親もまたこの器具によって救われたと言ってもいい。

「あきらかに他の意思がはたらいている感じだお…正直ガクブルです」

「まあ仕組んだ奴がいるのは事実だろうな。
尤もだれかは検討すらつかんが…」

「ゼノン達は何か知ってそうだな。」

「ああ。しかもあいつ等は治療器具を『プレゼント』したって言ってたらしい」

「つまり、彼らは――――・・・」

「真由ちゃん、プールあるんだって！今度泳ごうね！」

「うん…！楽しみ…」

「あ、じゃあ今度水着買いにいかない？」

「あ、いいね。そうしよ！そうしよ！」

「凄いお金！こ、これだけあればちょっと使っても・・・」

「駄目だ美穂！お金は大切に使わなければならないんだぞ
ちゃんと小遣い制でいくべきだ」

「わ、わかってるって咲夜！へへへ…ゴクリっ」

「ならよだれを吹け！よだれ！
き、汚い！汚い！

ちょ、馬鹿者！ワタシで拭くなッッ！」

「あのーっ！ちょっとシリアスな雰囲気だしてもらっていいっすかねーっ！」

ある程度調べた所でいよいよ本題、街探索に入る。

だがまあ心配も多い。

クウガはまあ良かったが、キバはキバットがいないと変身できない筈だ、

この世界にキバットがいればいいが、いなかったらどうなるのだろう？
もしかしたらキバット無しでも変身できるのだろうか？

「気をつけてね・・・」

里奈が心配そうに亘を見詰める。
流石に連れて行く事は厳しかったので校庭で待機、という事になった。

幸い里奈は手当てがうまいので、救急箱を持って待っててもらう。

「うん・・・いってくるよ」

そういって俺とユウスケ&薫、良太郎に亘は学校をでる。

今回は前回の事もあるので戦える少人数で行く事にした。
困った時は電話で助けを呼ぶ、そう言う事にする。

「じゃあ、行くか！」

しかし不気味な街だ…さっきから歩いてるが人一人いない。

商店街もそう、

公園も、

公民館にすら人はいなかった。

それどころか生活の気配すらしない。まるでこの街の人間が滅んでしまったのかと錯覚する。

「一体どうなってんの・・・
結構歩いてみたけど誰もいないわね」

「怪人に…襲われたとか？」

「怪人すらいないぞ…」

そんな事を言いつつ歩いていると、道が二つに分かれていた。

片方は赤く、
片方は青い旗が刺さっている。

「ど、どうする？」

「別れるか、とり合えず・・・
まあそうだな。この中で一番強いのは良太郎だから…
悪いが弟を頼めるか？」

「兄さん！？ちょ、恥ずかしいから！止めてくれよ！」

「うん、わかったよ！行こう亘君」

「う、うん！」

良太郎はぽんっと胸を叩き、亘を引っ張っていく。
まったく、どっちが年上なのやら…。

良太郎達は青い旗の道を選んだって事は・・・

「さて・・・と、じゃあ俺達は赤いほうだな」

ユウスケ達は頷く。

とまあ道を変えてみたものの相変わらず人の気配はなく、不気味な時間が続いていた。

「そうえばさ」

それに耐えられなくなったのだろうか、ユウスケは苦笑いを浮かべて話し出す。

「司のライダー・・・ディケイドだっけ？
あれって全てのライダーになれるんだろ？
よくよく考えたらさ、かなり凄くないか？」

たしかに、すこし前の俺なら泣いて喜んだかも知れない。と言うか実際嬉しい。

「まあな。でもなんかあの警官が殺されたのをみてさ・・・
やっぱり遊びじゃないんだなって思ってな。

それに変身したら知識が頭に流れ込んできてさ、
なんか変身できるのが当たり前みたいに感じちまうんだよなぁ…」

「ふぅん・・・」

「でもまあ、やっぱカッコいいよなぁ…」

俺はディケイドのカードをくるくる回す。ま、ちょっとデザインは奇抜だがなかなかカッコいいじゃないかディケイド。

マゼンダが特に良いよな、マゼンダがな。いやマゼンダ的な配色の中に光るマゼンダの輝きと言うかマゼンダな感じがマゼンダをよりマゼンダにマゼンダがマゼンダで…

「ピンクだけどね」

「・・・」

「止まれ！」

うっ！な、なんだ！？いきなり！

「民間人だな？なぜこんな所にいる！ここは立ち入り禁止だぞ！」

銃を持った男が俺達の前に現れる。

なんなんだ？人がいたと思ったらコレかよ！

「い、いやぁ・・・私らここが立ち入り禁止だなんて知らなくて！
あははは！」

「そそそうなんですよ、おれ達偶然この町を通りかかって・・・」

ナイスだユウスケ、薫！
これならなんの不自然も無い！ほらみろ男も銃をしまって

・・・しまって

・・・ない。

「ふざけるな！立ち入り禁止区域は外部からの侵入は不可能だ・・・
はっ！さては貴様等ァァァ！人間だなッ？」

「え？ま、まあそうだけど・・・」

「人間！貴様等ぁぁああッッ！」

男は銃を捨てて怪人、ファンガイアに変身する。

おいおい、マジかよ！

「わわわわ！お、落ち着いて！」

「ふざけるなァアアア！！」

ファンガイアは俺達に殴りかかってくる！
待て待て！
マジで何なんだよ！
きれすぎだろ！

「どどどどうする司！」

「くっ、仕方ない！」

変身しようとカードに手を伸ばした時、どこからか悲鳴のような声がきこえ・・・

「待て！怪しい奴めぇえええ！」

「「うわぁぁあああ」」

「げっ！」

向こうから俺達とまったく同じ状況であろう亘達が走ってきた。
むこうも変な銃をもった女に追われている。

「！」

「！」

だが女とファンガイアは互いの姿を見た途端、
標的を俺達から双方の追っ手に変える。

もう訳が分からん！

「人間め！こんな姑息な手を使ってまで我等を滅ぼしたいか！」

「黙れファンガイア！コレは貴様等の作戦だろ！」

女はためらうことなく銃でファンガイアを撃ちまくる。

ファンガイアもまた、女を本気で殺そうとしているようにも見えた。

「な・・・なんか凄い事に・・・」

「どっちが悪かは分からんが…ケンカ両成敗だろ！」『カメンライド・ディケイド！』

「ケンカってレベルじゃない気がするよぉ」『ＲＯＤ・ＦＯＲＭ』

俺と良太郎はそれぞれに変身する。

「俺はファンガイアを」

「ふふっ、オーケー」

俺はもみ合っている二人の中に飛び込んでいく。

とり合えずファンガイアを投げ飛ばし、女との距離を離す事にした。

「くっ！貴様、どっちの味方だ！」

「知るかよっ！ま・・・コレ、試してみるかな」
『カメンライド――クウガ！』

光が走りクウガの姿に変わった、
おお！やっぱりちょっとテンション上がる！

「はっ！てやっ！」

クウガの体は中々軽く、
やはりオールラウンダーとしては屈指の力があるな…多分、
まあ武器がないとフォームの力が活かせないってのは考え物だが。

「よっと！」

「ああッ・・・！」

電王は相手の銃を釣り上げる。

女は悔しそうにしながらも勝ち目なしと踏んだのか踵を返して走り去って行った。

「はい司、プレゼントだよ♪」

「ああ、悪いな」『フォームライド・ペガサス！』

電王から銃を受け取ってフォームチェンジ。

なるほど、やはりクウガにとって薫の力は最高に相性がいいって事だな・・・

俺は武器がなけりゃ大変だ

「ライドブッカーたんが泣いとるぞ」
「あ…」
しかしこれは後に椿との会話で解消されるのだった。

第１９話　ベン　マルカート・誰もいない街（後書き）

キバはライダーのデザインが好きですね

あとやはり７５３は３１５ですねｗｗ

次もよろしく！

第２０話　ラピダメンテ・いない君（前書き）

キバのＯＰ映像が好きですね
雰囲気と言うかなんというか

第２０話　ラピダメンテ・いない君

「くっ・・・ぬおぉっ！」

とり合えず倒しちゃマズイだろうから足元に一発決めてやる。

威嚇射撃ってやつだ。

まあペガサスは精神力がみるみる削られていくから一発撃つだけが精一杯なんだが…

充分だろう。ファンガイアは小さく舌打ちをして俺達の前から姿を消す。

「全く・・・どうなってるんだよこの世界は」

「争ってたみたいだったね、あの二人」

そう言いながら電王はベルトを外し、変身を解く。

争う？

そう言えば原作でも大体似た感じの構図だったな。

「お」

ポケットから音が鳴る、電話だ。
相手は・・・

夏ミカンか

「どうした夏ミカン？」

『夏美です！えっとですね、真志君が調べてくれたんですけど・・・』

夏ミカンの話によれば、この世界は現在ファンガイアと人間の種族間抗争が続いているらしい。

詳しくは分からなかったが、どうやら俺達の学校はファンガイアと人間の町の間。
つまり国境付近に転送されてしまった、
現在ここは戦場と化しているらしく、

さっきのやつ等は偵察の為に徘徊していた・・・ということか

『おまけにですね、人間側のリーダーはイクサで
ファンガイア側のリーダーはサガなんですよ、
この二人は今にも全面戦争をしかけようとしているとか！』

イクサとサガか・・・厄介だな。

「分かった、ありがとうな夏ミカン」

『だから！私は夏――』

全部聞き終わる前に電話をきる。さて、どうするかな

「とり合えず学校に帰ろうか、これからの事を考えよう」

「そうね、ここって結構ヤバイ位置だし・・・」

「兄さん・・・」

「大丈夫だ、きっと上手くいく」

俺達は歩き出した。だが・・・

クソッ！甘かった！ここまで情報網が早いとは！

「いたぞ！レジスタンスだ！」

「やっかいな芽は早めにつませてもらいますよ」

ファンガイア共はもう俺達を第三の敵勢勢力とみなしたのか、

ファンガイアでも上級のソーンとライオンを送り込んできやがった。

しかもあちらこちらで爆発がおきてる辺りを考えると人間とファンガイアの戦いも起こってるんだろう。

とにかく良太郎に亘をまかせ、俺達は別ルートで学校に向かう。
しかし向こうも上級ファンガイア、すぐに追いつかれてしまった。

「仕方ないなクソっ！変身！」『カメンライド・ディケイド』

「変身っ！」

しばらく肉弾戦が続き、互角かと油断してたが、俺達には圧倒的に戦闘経験が足りない。
つまり戦闘センスが勝てないのだ。

「ぐわあっ！」

「うおっ！」

なんとか互角に戦っていたがついに押され始める。

「そうだ！うおおおお！」

クウガが二体に掴みかかる。あまり意味がない行為にも見えるが…

「司ぁあッ！」

そうか、そう言う事か！

「ナイスだユウスケ！」『ファイナル・フォームライド――ククククウガ！』

「何！？」

「なんですか！」

「一気に決めろ！」『ファイナル・アタックライド――ククククウガ』

ユウスケはクウガゴウラムに変身し、二体を猛スピードで上空に運んでいく。

『実力じゃ勝てなくてもなぁ！根性じゃ負けない！』

「くっ！離れませんっ！」

「なんというパワー！」

そのままゴウラムは二体を投げ飛ばした。
どこに行ったかは知らんが、これでしばらくは時間が稼げるだろう。

「あいつらが原作通りじゃなくて助かったぜ…」

『そんなにやばいのか？』

「ああ、三日缶酢漬けにしたボブをメアリーがマンモスで頂くよりヤバイ」

「・・・は？」

俺はゴウラムに掴まり、学校へと急いだ。

亘は走っていた。先程ファンガイアの集団に出くわし、良太郎は変身。

そして亘を逃がしたのだ。

幸い学校までは一本道、ここを真っ直ぐ走ればすぐに着く。

「・・・！」

何かが見えた。小さい・・・鳥？

虫？

それはヒョロヒョロと川原の方へと飛んでいく。

「・・・」

少し気になるが今はそれどころじゃない。

とにかく亘は学校へ着く事だけを考え、走る。

「！？」

学校へは無事着いたが校庭に里奈の姿が無い。

教室にいるのかと我夢に連絡をとったが、教室にはいなかった。

「里奈ちゃん・・・？」

一応携帯にかけてみる。すると、

「なっ！」

里奈の着信音。可愛らしいメロディが聞こえた。

しかしそれは学校の外、亘は急いで音がする方向へ向かう。

「携帯が・・・」

携帯は道の隅に落ちていた。つまり里奈は学校の外に出たという事だ！

「里奈ちゃん！」

亘は我夢にメールだけして学校の外へと飛び出した。

自分は無力だが何もしないで待っているなんて無理だ！

亘はとり合えず川原に行く事を決める。
ここから川原までの道は、他のみちに比べて段差がすくない。
それにさっきの事もあってか亘の頭には真っ先に川原へ行くという結論がでたのだ。

「・・・っ！里奈ちゃん！里奈ちゃん！」

とり合えず名前を呼んではみたものの返事はない。
川原を降りていき橋の下へ向かったとき、

それはいた。

「き、キバット？」

草むらの影でキバットらしき生き物がぐったりとしていた。
原作のキバットとは色が違うが・・・

姿はキバットそのものに見える。

「だ、大丈夫か・・・？」

里奈の事は気になるが、キバットを放って置くこともできない。
なにせキバットは自分が変身できるかもしれない重要なキーキャラクターなのだから

・・・それに亘には弱っているキバットを見捨てて里奈を探す気にはなれなかった。

『・・・た』

「え？な・・・なんて？」

キバットは何かを呟く。

『腹減ったっす…』

「あ！ああ、お腹ね。
すこし待ってくれよ・・・たしか」

亘は今日の朝、美歩にもらったチョコバーを取り出してキバットに差し出す。
キバットはスンスンと臭いを嗅いだかと思うと、
勢い良くかぶりついた。

亘の手ごと…

「ぎゃあああああああああああ」

第２０話　ラピダメンテ・いない君（後書き）

お気に入りや評価してくださった方、ありがとうございます！
こんな感じですがこれからも頑張りたいです

では次もよろしく！

第２１話　ラメンタビレ・亀裂と差別（前書き）

クラヒオーズでキバの技が変わってたのはショックでしたｗｗ

第２１話　ラメンタビレ・亀裂と差別

『亘さんってイイ人っスねー！オイラの恩人っすよー』

「そう・・・良かったよ・・・」

まだ手がヒリヒリする。亘は苦笑いを浮かべてそう答えた。

『オイラ、キバットバット四十五世って言うんです！よろしくっす！』

キバットは亘の事をすっかり気に入ったらしく、さっきから周りをパタパタと飛びまわっている。

「四十五世？そんなに続いているんだな、三世ってどんな方だったの？」

『三世さんすか？たしか女性で賢かったらしいっす』

「（・・・となるとココはキバ原作の世界じゃないのか…）」

『でもね亘さん、オイラの悩みきいてもらえないっすか？』

「え？ああ、ごめんボクこれから人を・・・」

「・・・（真由さんと同じにおいがするな）」

『実はっすね、』

「オイラ達キバット族は代々この国の王に仕えるのが使命っした。」

「王？」

『そうっす、この国は王のおかげでそれはもう平和に保たれてきたんすよ。
ファンガイアと人間は種族こそ違えども互いを尊重しあい、
今まで均衡をたもってたんす』

「だけど今は・・・」

キバットは力なく着地する。その目には涙が浮かんでいた。

『そうなんす。実は・・・王が殺されたんす』

「！」

『しかも大臣は…犯人は人間である可能性が高いって発表したんすよぉ…』

「大臣？」

亘は若干怪しさを覚える。

だいたいこう言うのってそのへんのポジションが犯人ってのがお約束なんだけど・・・

『大臣は王の昔からのお友達です。だから皆その言葉を信じたんす』

ふぅん・・・友達ね、まぁじゃあ大丈夫か。

『勿論可能性ってだけっすから
大臣も気にすることなく毎日を送れっていってたんすけど…』

「一度先入観が入ってしまえばなかなかソレを拭う事は難しいってヤツか」

キバットは頷く。

亘は昔ソレと似たよな事を里奈に相談された事がある。
だからこそキバットの言っている事が素直に理解できたのだ。

『その日から少しずつ互いの仲が悪くなってきたんす・・・
種族間抗争は前々からもちょっとはあったんすけど、あくまでソレは少数派でした。
だけど今回は違いましたんす。差別が強くなりました』

差別・・・

亘は、脳裏に強く里奈の姿が浮かんでしまった事を強く後悔する。

違う

ボクは彼女を普通の女の子として接すると決めただろうが！

違う

違う違うっ！

『旦さん？どうしたんすか？』

「あ！いや何でもないよ、続けて」

『例えばっすね、子供同士のケンカの時にファンガイアの子がやっぱり勝つんすよ。
そしたら今までだったらどっちが悪いかーとか、
ケンカするほど仲がいい
とか、大人達も対処してたんすけど・・・あの日から』

『うちの子に触らないでよ化け物！』

『人間は本当に悪知恵がよく働くな！』

「たがいに不信感が爆発してしまった・・・」

『特に大人っすね・・・子供たちはまた遊ぼうとしても大人がソレを許さない。
そういう険悪なムードが続いて
ついに事件がおこったんす』

「事件？」

『結婚を約束した一組のカップルがいたんす。
でも男の方がファンガイア、女の方が人間だったんす。

結婚を認めてくれていた互いの両親も急に反対して二人を引き裂こうとしてました…』

まさか…亘は息を呑む。キバットは察したのかこくりと頷いた。

『心中したんすよカップルは・・・
普通はソレで目が覚めてくれると思ってたんすけど…

二人の両親の怒りは互いの種族に向けられて…
ついに全面的対立が始まりました。

秩序を守るはずの二本のベルトまで戦いの道具にされて…』

イクサとサガか・・・

『もう昔の様な平和は消え去ったんすよ!

大臣は必死に互いの種族間抗争を止め様としているみたいっすけどダメメダメっす!
大臣は人間だからファンガイアに敵視されてますし、

大臣が王を殺したって噂まであるんすよ！

もうオイラどうしていいかわかんなくて！

うえええええええん！』

キバットは泣き出してしまう。

『昔はもっと楽しかったのにぃ・・・うえええええん！』

「他に・・・味方はいないの？」

『え？あ…一応妹とアームドウエポンズ達なら』

「いるんだね、じゃあそいつ等と早く合流して策を練るんだ。

ボクも微力だけど協力するからさ、

頑張って元の平和を取り戻そう！」

「わ…亘さん！」

「だけどまずボクは人を探さなくちゃいけない。
里奈って名前の女の子を。

車椅子で…
見なかった？」

キバットは少し考えたが体を横に振った。

「そう・・・どこにいるんだ……」

『心配っスね…今ココは戦場と化してます。
アームド達も両方の種族から狙われてますから…早く見つけないと！』

亘は頷きキバットをポケットの中にねじ込む。

里奈を探す、

争いを止める。

亘の心に不安と重圧が一気に押し寄せた。

果たしてそんな事ができるのだろうか、

争いを止めるなんてそんな事が・・・

「とにかく今は里奈ちゃんとアームドさん達を探そう」

『はいっす！』

大丈夫、亘はキバットと自分に向かってそう呟いた。

第２１話　ラメンタビレ・亀裂と差別（後書き）

キバットってどのくらい種類いるんでしょうね？

では次もよろしく！

第２２話　プレスティシモ・仕える者達（前書き）

部屋

暑すぎ

ワロタ・・・

第２２話　プレスティシモ・仕える者達

亘がキバットと出会う少し前。

里奈は校庭で亘たちの帰りを待っていた。

夏美も一緒にいてくれたのでリラックスしていけたが、

「わっ！」

「きゃ！」

いきなり目の前を傷だらけの怪人達が通りかかった。

向こうからはこちらを確認する事はできないが、コッチとしてはいきなりだったので思わず声をあげてしまう。

三体の怪人達は青、緑、紫と鮮やかな色彩だったが、その色は赤黒い血でよごれている。

三体は苦しそうにうめきながら学校を離れていった。

「なんだか・・・苦しそうでしたね・・・」

里奈は救急箱を握り締め夏美を見詰める。

夏美は少し苦い顔をしたが、すぐに笑って胸を叩いた。

「助けに行きましょう！
護衛は・・・自信ないですけど！誰かについてきてもらえば大丈夫です！」

「あ、あのっ！ありがとうございます！」

「ごめんなさい先輩達、私の我がままにつきあってもらっちゃって…」

「いいんですよ、この世界って完全な怪人はいないみたいですから、あのまま見過ごすのは私としてもどうかと思いますし」

「そうだぞ気にするな、
しかしよくついて来たな椿、感心だぞ」

「空気キャラってポジションも悪くないんだけど
流石になんかやっとかないとなぁ・・・的な。

つかまあそう簡単に敵さんと遭遇なんて・・・」

「おい！貴様等！人間だな、こんな所で何をしている！」

「・・・・・ま、お約束っちゃお約束だわなｗｗ」

「逃げましょ！！」

夏美は里奈の車椅子を掴むとおもいっきり走り出す。

「あっ！携帯が！」

その衝撃で里奈の携帯はポーチから落ちてしまった。

夏美は後で拾えば大丈夫ですと投げやりなコメントでごまかす。

「待てっ――ごわっ！」

兵士の顔に咲夜の足がめり込んだ。兵士はそのまま崩れ落ち、気を失う。

「ふっ」

「ふっ、じゃねぇよ！

なにドヤ顔決めてんだお前！どうすんだコレ！」

真っ青になる椿だが、咲夜はあくまで冷静のようだ。

「ユウスケ達から電話があっただろう、

この世界で何が起こってるのかは知らんがおそらくは戦争に近いものだろう、

私達はどちらの味方にもなるつもりはない、つまりコレが手っ取り早いのだ」

「つまりの意味はよくわかんねぇが・・・まあ今は早く光達を追う

のが先決だな」

里奈と夏美がしばらく進んでいると、先程の三体が路地裏で倒れているのが見えた。

「大丈夫ですか？」

里奈は恐る恐る声をかける。

「ぐっ・・・人間か」

三体の内、青い狼が素早く戦闘態勢に入った。

他の二体は既に気を失っているようで、狼も足元がふらついている。

「大丈夫です、私達は敵じゃありません！信じてください！」

「信じ・・・られるわけ・・・が・・・」

狼はその場に倒れ、気を失う。

「そうとう傷が深いみたいですね。はやく治療しましょう」

「そうですね」

そう言って里奈は救急箱の蓋を開けた。

応急手当程度だがしないよりかはマシだろう。

椿達もやってきて、四人で手当てを始める。

「治療中はおかしな事になっても対処できねぇからな。気をつけないと」

「ピカチュウはおやつに入る訳ないだろ、真面目にやれ」

「言ってねぇから！んな事ッ！お前こそ真面目にやれよ！」

「はいはい、しっかりやってください！」

「「すいません…」」

しばらくして三体が目を覚ました。

自分たちの体に巻かれた包帯と、
目の前にいる少女達の姿をみて、
本当に彼女達が敵では無いと確信する。

敵なら気絶している時に殺せばいいだけだろう。

『私も見てたけど本当に敵じゃないみたいよ』

狼の影から小さなコウモリが現れた。

『はぁい、キバーラよ、よろしくね』

「すまない、疑って・・・オレはガルル」

「いいんですよ、いろいろ大変な事になっているみたいですし」

『この国の事をしらないの？』

緑の魚人バッシャーも、紫のフランケン（？）ドッガも元気とは言えないが喋れるくらいには回復したようだ。

「私達は別の世界から来たんです。信じてもらえないかもしれませんが…」

「いや・・・信じるさ。お前達の目を見ればわかる」

そして四人はこの国で起こっている事を聞いた。

種族間抗争、

王の暗殺、

互いの差別・・・

「・・・」

里奈達は暫く何も言わずにソレを聞いていた。

人間とファンガイアの戦いは激化していく一方で、このままでは本格的な戦争になるだろうと

「それを止める方法はないんですか？」

「残念だが何も思い浮かばない。
我々の言葉では状況を変えることはおろか悪化させてしまう可能性が高い…」

再び皆沈黙する。

なんとかはしたいがガルルの言うとおり状況を悪化させる可能性が

高い、
いやほぼ確定だろう。

「・・・」

里奈は唇をぐっと噛んだ。

自分も体験したことがある差別の眼差し、
どんなに普通にしていても自分に向けられるのは好奇や同情の目。

もちろんそれが不快で仕方ないと言う訳ではない。
私を気遣っての好意である為に仕方ないといつも心で割り切っていた。

だけどやはり普通に、
何の気負いもしないで生活できたらどんなに良かっただろうか？

自分の不器用さのせいで通行の妨げになったとき、
後ろ指をさされて馬鹿にされる時もあった。

車椅子にいたずらをされた時も多い、

そしてなによりも…自分の周りにいる人間が自分の事をどう思っているのか、

それが重圧になるときもあった…

『遊園地行こうよ！え？里奈ちゃん？ああ、あの子はいいよ。だって――』

過去の記憶が蘇る。
同時に心が張り裂けそうだった…

たまたま聞いてしまったクラスメイトの声。

どうしようもなく悲しくて苦しくて、・・・
だからその誘いをキッパリと断った亘、アキラ、我夢の三人にはとても嬉しくて、

申し訳なかった・・・

『里奈ちゃんだってボク達と何も変わらないだろ！』

「亘君・・・」

亘に言われた言葉、
それと同時に亘が学校にもどっているのではないかと思う。
自分がいなくなって焦っていたら…

「夏美先輩、携帯を貸してくれませんか？亘君に一回連絡を取りたいんです」

「あ、うん！そうですね、それがいいです」

そういって夏美が携帯を取り出そうとしたときだった。

『あらぁ…あれって、ヤバいんじゃないのぉ…』

キバーラの視線の先、こちらに向かって歩いてくる女性の姿が見えた。

第２２話　プレスティシモ・仕える者達（後書き）

どうでもいいんですけど
かき氷のブルーハワイってなんなんですかねｗｗ

今だによくわかりません
好きですけどね

ここまでお付き合いありがとうございます
次もよろしく！

第２３話　フォルティッシモ・せめてその定めだけでも（前書き）

オーズのコンボソングとかが集まったＣＤがでるみたいですね

皆さんどの曲が好きですか？僕はラトラータですかね

つかシャウタの歌はまだですかねｗｗ

第２３話　フォルティッシモ・せめてその定めだけでも

「おやおや、これはこれは王の側近の」

スーツを着た長身の女性は薄ら笑いを浮かべながらこちらにやってくる。

「・・・」

「ふふっ、傷だらけですねぇ。王を殺した報いと知りなさい」

「なっ！違う！ぼく達は王様を殺してなんかない！」

バッシャーは女の言葉を全力で否定する。
しかし女は冷めた目でバッシャーを睨むと、視線を里奈達に移した。

「ふふふっ、人質とは汚い真似を…」

「ち、違いますよ！私たちはガルルさんたちに何にもされてません！」

里奈はガルルを庇うように移動する。

しかし女には届いていないようで、それすらも強要されたのではないかと言われた。

「そうじゃないと言ってるだろう！
　ガルル達は無実だ、どうしてそんなに疑うんだ！？」

咲夜はイライラしているのか、声を荒げて女に詰め寄る。

「こいつらが化け物だからに決まっているでしょう？危険分子は…」

女は手を後ろに回す。そして瞬間響く電子音。

『Ｒ・Ｅ・Ａ・Ｄ・Ｙ』

「なっ！」

「うふふ、変身」

『Ｆ・ｉ・ｓ・ｔ　ｏ・ｎ』

咲夜は危険を察知して後ろへ回避した、
女の前方には鎧が現れ、女と重なる。
そして女はイクサへと変身を遂げた。

「くっ、イクサ・・・」

「!、こいつが人間側のリーダーかよ!」

皆一斉に走り出す。
里奈達ならまだしもイクサはガルル達を殺す気だ。
止まるわけにはいかない。

「どうして?皆少し前までは幸せに暮らしてたんでしょ?」

里奈は必死にイクサに問いかける。しかし…

「時代は変わったのです。御嬢さん、今その化け物達から救ってあげますよ」

「そんな・・・どうして・・・」

ボロボロと里奈の目から涙がこぼれる。その涙でさえイクサには強要されたものに映るのだろう。

「逃がしません、・・・？」

路地を曲がった時にイクサはガルル達を見失う。

「・・・」

向こうは大人数でけが人もいる。
路地を曲がってから自分が彼らに追いつくまでに逃げるのは不可能のはずだが…

「まあ・・・いいでしょう」

イクサは変身を解除すると、再び戦場へと歩き出した。

「・・・助かりましたクイーン」

「いえ、いいのですよ。
今まで大変でしたねガルル、ドッガ、バッシャー」

路地に逃げ込んだ一行を助けたのは王の妃、クイーンだった。

クイーンはいくつもの隠し小屋を作っており、その一つにかくまってもらったのだ。

「どうやら状況は悪化しているようですね…
ビショップやポーンもファンガイア派として人間に敵対している状況にあります」

クイーンはどうやら里奈達の考えを分かってくれる人物らしく、安心できる人だった。
優しそうな女性だ、里奈は思わず見ほれてしまう。

「クイーン…その…無礼な質問かもしれませんが…
王を殺した犯人に検討は?」

「・・・残念ですが、全く…」

「そう・・・ですか」

「王様はどんな状態だったんですか?」

ガルルによれば王の死体を確認できたのはクイーンと大臣ぐらいらしい。
一般の民には情報だけだったそうだ。

「王は心臓を一突き。それで絶命していました…
私は犯人が憎いです。

ですがソレが人間でもファンガイアでもその種族全体を怨もうなどとは思っていません。
たしかに種族間抗争は前々からありました。
それを収集できなかったのは私も王も嘆いていた事です…

しかしそれでも二つの種族は互いに支えあい笑いあえていたはず。
今、この世界は間違っています…

互いが互いに疑いあう世界などに幸福などありえましょうか…?」

クイーンは苦悩の表情を浮かべ外を見る。
クイーンは人間とファンガイア同士で争う事は間違っているとはっきり言った。

一方、亘は里奈とアームドモンスターを探すため街中を駆け回っていた。
しかし状況が状況だけになかなかうまくいかない。

「なかなか見つからないね」
『無事だといいんすけどねぇ…』

そうやって探索していくと空地にやってきた。

そこにはなんと子供たちが遊んでいるではないか。
しかもキバットが言うには
四人いる子供たちの中で二人はファンガイアらしい。亘は急いで子供たちに駆け寄る。

「ここは危ない！はやくお家に帰るんだ！」

亘は子供達に帰宅を促すが子供たちはソレを聞かなかった。

「だって…ここじゃないと皆と遊べないんだもん」

『・・・！！』

深く突き刺さる一言だった。

「おい、何をしている・・・！」

それと同時に後ろからファンガイア側のリーダー、サガが現れた。
サガは遊んでいる二つの種族を確認すると人間側の子供たちに剣を向ける。

「おい！待ってよ！」

「む？貴様は人間か！おのれ、よくも子供たちを危険な目に！」

「違うだろ！子供達はそんな事望んでないんだよ！

皆は一緒に遊びたいんだよ！なんでそんなに種族でいがみ合うんだよ、

人間が何した？

ファンガイアが何した？

いつも勝手に決めつけて、互いの話を聞こうともしない。

それでよく一方を蔑めるよな！呆れるよ！」

「人間は王を殺したに違いない！そんな種族など滅んでしまえばいいのだ！」

「だったらもしファンガイアが犯人だったらどうなるんだよ！

全員、お前を含めて滅ぶのが正解なのか？

違うだろ！

人間だってそうじゃないのか！」

否定的な返事と共にサガは亘に切りかかる。

亘はソレをギリギリでかわすと、サガと距離をとった。

はやり戦う運命なのか・・・？

「いや…」

違う。そうだ、あきらめるな。

「キバット！」

『わ、旦さん！』

旦はキバットを構え呼吸を落ち着かせる。

「ボクにこの争いをすぐに止めるだけの力は無い。だけど――」

このふざけた定めくらいは変える。

人間とファンガイアが殺し合う未来を築かせるな。

ボクには今、その力がある。

子供達の言葉を強引にはかき消させはしない、その言葉を主張させる力がある！

亘が想うのは…彼女の後ろ姿。

兄の後ろ姿、

従妹の後ろ姿。

そして皆の後ろ姿。

「ボクが、誰かの背中を押してあげる事はできる筈さ」

『わ、亘さん…

オイラに噛ませるって事がどんなことか分かってます？

亘さんは戦わなくちゃいけないんすよ！』

亘は無言で頷く。

守る為でも傷つける為でもない。終わらせる為に。

そしてソレに呼応するかのように闇の鎖が腰に巻かれ、弾けた。

「むっ！貴様それは！」

鎖はベルトへと姿を変える。亘は目を閉じてゆっくりと呟いた。

「キバット・・・」

『？』

「ボクに…力を貸してくれるかい？」

『はっ！ハイ！』

亘は笑顔で再び頷く。

そしてキバットに自らの手を差し出す、ソレにキバットは勢いよく噛みついた。

『ガブーッ！』

「・・・変身！」

電子音に似た音と共に亘の姿は仮面ライダーへと姿を変えた。

「貴様ぁ…混血か！」

「・・・ボクは種族がどうとかは関係ない！
外見は大きく違うかもしれないさ。
だけどっ！ボクはっ…それでも魂は同じだと思ってる」

「戯言をぉおおおおおおおおおおおお！」

サガの剣が鞭の様にしなり、キバに襲い掛かる。

だが、切りかかる剣を避け、得意の蹴りで応戦していく。
戦闘センスは圧倒的に低いが、切り掛かるルートを予測してキバットが亘に声をかけてくれる。

『亘さんっ！右っす！』

「ああ、ありがとう！」

「くっ！」

しっかりとガードを決めて蹴りを浴びせ続ける。

サガの変則的な剣筋には手こずったが、

キバットがしっかり亘を支えた事でサガを押し始める事ができた。

「ぐわっ！」

サガを吹き飛ばし、キバはベルトからホイッスルを取り出す。

『ウエェェイク・アァァップ！』

キバットの掛け声とともにキバの足にあるカテナの封印が解かれる。

その力は強大。

ヘルズゲートが開放され、闇の力が辺りを夜へと変化させた。

「くっ、この力！やはり只者ではないかっ！」

サガもエネルギーを剣へと装填しキバに狙いを定める。

「はぁあああ…」

「終わりだっ！」

「はぁっ！」

サガの剣をキバはサマーソルトキックで上空へと弾き飛ばす、
それと同時にキバは空へ飛翔した。

巨大なエネルギーで形成された月とキバは重なり合い、幻想的な光景を作り上げる。

事実、サガはソレに見惚れていたのだ、剣の修正を加える事すら忘れるほど美しい月に！

『ダークネス・ムーンブレイク！』

「うおおおおおおおおおおおおお！」

「くっ、おおおおおおおおおお！」

直撃だった、サガはキバに蹴り押され後退していく。

そして壁に叩きつけられると同時にキバのエンブレムが出現し、衝撃を与える。

「っ・・・ぐぁ・・・」

変身が解かれサガは気絶する。

亘は離れていた子供達を家に帰すと、サガを担いでファンガイア側の陣地へと向かった

「これは、キバ・・・」

「え？」

クイーンはキバの力を感じとり、それを説明する。

人間側でもなく、ファンガイア側でもない。調和のベルト

第三の仮面ライダー！

「ということは亘が変身したって事だな！やるじゃんかよ！」

「亘君…」

安堵とも不安ともつかないため息を里奈は流す。

「これで、亘君は戦いから逃げられなくなったんですね…」

「ああ・・・だが亘も譲れぬ思いで変身したんだろう」

里奈は静かに頷いた。

「あ・・・うん！分かったよ・・・うん、またね」

『うれしそうっすね亘さん』

「ああ、里奈ちゃん達が無事だったんだ。キバットの妹達も無事み

たいだよ」

『えぇ！本当っすかぁー！』

亘とキバットは互いにはしゃぎ合う。
しかしその場所はファンガイアの町そのもの。

亘たちは無数のファンガイアに囲まれている。しかし攻撃はしてこない、
一応サガを運んできた手前、下手に攻撃はできないからだ

「う・・・っく」

サガは目を覚ます。
目の前の状況を瞬時に理解すると、サガはゆっくりとため息をついた。

「なにが目的だ?」

「人間側と和解してほしいんです」

「・・・嫌だと言ったら?」

「人間側にも交渉しに行くだけさ」

サガは暫く沈黙する。

「・・・少し、考えさせてくれ」

亘は頷く。亘自身すぐに答えてもらえるなどとは思っていないから

第２３話　フォルティッシモ・せめてその定めだけでも（後書き）

クラヒのウェイクアップが好きです
なんかガシャーンっていうのがねｗｗ

では次もよろしく！

第２４話　ブラヴラ　コン・説得（前書き）

イクサは結構いろんな人が変身してるんですよね

一人強烈な人がいるせいで忘れそうだｗｗ

第２４話　ブラヴラ　コン・説得

亘がサガと交渉している一方

「なんとか考え直してはくれんか？」

「嫌だよおじいちゃん、アイツらは野蛮な連中なんだ。
私たちがキングを殺したとか言ってきて…常識知らずもいいとこさ」

人間側の街、

そこに大臣とイクサが話し合っている。

大臣は孫でもあり人間側のリーダー、イクサを説得しようとしているのだ。
イクサとサガは王直属の護衛隊長であった為に忠誠心も高い。
だからこそ勝手なことを言っている双方が許せなかった。
まして混血であるアームドモンスター達を犯人ではないかと疑っているため、説得も無駄の様だった。

「お前もサガ君とは仲良くやっていただろうに・・・」

「昔は昔、サガもそれは分かっている筈だよ」

「今はまだ死人こそ出ていないが負傷者は出ている。このままでは引けに引けなくなるぞ」

イクサは少し苦い顔を浮かべる。

まだ心の片隅に後悔が残っているのだろう。

彼女はソレを否定するように首を振った。

大臣もまた一つため息をつく、

「・・・む？」

その時、何かの音が近づいてきた。音はどんどん二人がいる広場へ迫ってくる。

「うおおおッ！」

「！」

トライチェイサーがエンジン音と共に広場に現れる。
そこに乗っているのは小野寺ユウスケ。

「アンタがイクサだな！」

「・・・つまり、
貴方は私にあの汚らわしいファンガイアと和解しろと言うのですね」

「ああ、お願いだ。アンタも昔はファンガイアの事を毛嫌いしてな

かったはずだろ？」

イクサは目を閉じて沈黙した。
先程自分も同じことを考えていたから・・・

目の前の少年、ユウスケと言ったか。
この少年は人間とファンガイアの和解会議を開いてくれないかと言ってきた。

「・・・少年、私は君のことを知らない。」

ユウスケは目を丸くする。

そしてイクサは笑う。
心が迷っているのならいっそ体で決めてしまうのも一興だろう

「つまりは私はお前をファンガイア側のスパイ。
罠として見ることができる、私にはお前を信用することなどできない！」

「・・・っ、ダメって事か？」

イクサは再びにやりと笑い、手を後ろに回す。同時に電子音。

『R・E・A・D・Y』

「そうしたい所だが私もそろそろこの状況に終止符を打ちたい」

『F・i・s・t　o・n』

イクサの目の前に鎧が現れる。
ユウスケもイクサが何を言っているのか、ようやく理解した！

「要は力ずくで連れて行けって事か・・・変身っ！」

「ふふっ、正解だ少年。…変身！」

同時に走り出すイクサとクウガ。
イクサは素早くクウガの足を払い地面へ叩きつける。

しかし、

クウガもソレをしっかりとガードしてすぐに反撃の蹴りをイクサへと叩き込む。

「ふ、ふはは！ファンガイアではないようだが、なかなか面白いな！」

「くっ！どうも！・・・ぐあっ！」

だがやはり、まだ戦闘経験が浅いためにクウガはイクサの攻撃をまともに受けてしまう。

しかしクウガの力、
それがユウスケに圧倒的な力を与えるのだ。

戦いの中でクウガは確実に成長していく！

「うらァッ！」

「ちっ！」

クウガはイクサの攻撃を受け流し、拳を叩き込む。

さらに、よろけるイクサをしっかりと掴み、そのままとび蹴りをくらわせた。

「ぐぅッ・・・！」

吹き飛ぶイクサと、一気に距離を詰めるため走り出すクウガ。

このままもう少しダメージを与えてマイティキックを叩き込めば勝てる。

そう確信しクウガはスピードを上げた。

・・・が

「ふっ、ふははっ！」

「！」

笑うイクサ。瞬時に身の危険を感じつつも、もう止まることはできない！

「覚えておけ少年――」

「くっ！」

止まろうとするがはやりスピードがありすぎる。クウガはもう逃げられない！

「切り札はっ――」

「・・・！」」

「最後まで取っておくものだと言う事をっ！」

イクサの面部分が解放される。

それと同時に激しいエネルギーが溢れ、クウガを吹き飛ばした！

「ッ！あああああ！」

近くの柱に叩きつけられるクウガ。

そしてそれだけでは終わらなかった、イクサはどこからか取り出した銃でクウガを打ちまくる。

その威力は高く、クウガを地面へと返さない！

柱に銃撃ではり付けにしているのだ

「くくく、イクサ・バーストモード。
そしてイクサカリバーの威力はどうかなっ！」

イクサは銃撃をやめて接近戦に切り替える。
むろんクウガに抵抗する隙すら与えずにひたすらに切りつけた。

「ぐあぁあぁっ！」

クウガの体から火花が散る！
このまま攻撃を受け続ければクウガの負けは確実だろう。

「少年、理想を現実にかえるにはそれ相応の力、実力が必要なんだよ？」

イクサは攻撃を止め、クウガを持ち上げる。

「う・・・くっ」

「威勢だけじゃ現実は変えられない。残念だがこれが世界なんだよ」

そういってイクサはクウガを思い切り投げ飛ばした。

「うわっ！」

「空中じゃ自由にうごけないだろう？残念だがもうお終いだ」

イクサは最後の攻撃を決めるためにホイッスルを手にする。

そしてイクサは見た。

クウガの仮面の下

ユウスケの表情を…

「な…に？」

ユウスケは笑っていた！
その笑みは先程より、勝利を確信した表情に見える。

何故！？

混乱するイクサ、

そしてその声が…答えになる。

『そうね、私もそう思うわ。あと、さっきの言葉、そのまま貴女に返すから』

「悪いね、おれ…
いや！おれ達だって負けられないんだ！」

聞こえてくるはずはないのだが、女の声が聞こえた。

『「超変身！」』

「しまっ――」

ホイッスルが手から弾き飛ばされる。

なぜ？決まっている。

クウガが放った矢がホイッスルを打ち貫いたから！

「『超変身！うおおおおおおおおおおおお！』」

刹那、光るクウガ、現れし紫の戦士がこちらに向かってくる。

「うっ、うおおおおお！」

ヤツを近づけまいとイクサカリバーを乱射する。
しかし紫の戦士は全く止まらない、効いていないようだった。
それがイクサの焦りを加速させる事になる！

「うおりゃあああああッ！！」

「ぐゥウッッ！」

タックルでイクサは逆に吹き飛ばされる。
そしてタイタンからマイティフォームに変わるクウガ、
もはや形成は完全に逆転していた。

「はぁあああああああああああああッ！！！」

足に紅蓮の炎を纏わせ走り出す。

一歩、
また一歩
地面を踏む度溢れる力！
そしてそれをイクサへと叩き込むっ！

「ぐわっあああっ！」

イクサの変身は解かれ、そのまま地面へと倒れた。
結果はクウガ、ユウスケと薫の勝利だ！
二人は変身を解くと、イクサに駆け寄る。

「ぐぅ…まさか、君も武器を持っていたとはね…
しかも、女の子かい…っ」

「ごめんなさいね、今まで黙ってて」
「でも、悪いけど約束は守ってもらうよ、イクサさん！」
ユウスケはその手をイクサに差し出す。
「っ…あ、ああ。わかったよ、全く…とんだマジシャンだ君達は」
イクサは苦笑しながらもユウスケの手をしっかりと握ったのだった。

第２４話　ブラヴラ　コン・説得（後書き）

戦闘の時とかに薫ちゃんは、銃に変身してユウスケの腰にぶら下がってます

そんなこんなで次もよろしく！

第２５話　コン　トゥッタ　ラ　フォルツァ・里奈の想い（前書き）

すいません！
ちょっと明日は更新できないかもしれません

では２５話どうぞ！

第25話　コン　トゥッタ　ラ　フォルツァ・里奈の想い

ちなみに、そのころ司、ディケイドは・・・

「「「待てーッッ！」」」

「ひぃいいい！」

クイーンを除くチェックメイトフォーがディケイドを追いかけている。

上級ファンガイアだけあってディケイドは戦うのをあきらめて必死に逃げていた。

「あはは！ねえねえ見てゼノン。ディケイドが必死になって逃げているわ！

おかしいわね！」

「ははっ、滑稽だねディケイド！」

「お、お前ら！頼む！助けてくれー！」

民家の屋根に二人が座っていた。ディケイドは駄目もとで助けを求めてみる

「嫌だよ逃げピンク。ボク達は君達にあまり関わってはいけないからね」

「おい、今なんつった?ピンクって言ったか?

おい、

おい!

おいってッ!」

「うふふ、まあ頑張ってね逃げピンク。運が良かったらまた会いましょ」

そう言って二人は姿を消す。

「何しに来たんだ…あいつら…」

「「「逃げるなぁあああああッ！」」」

「ひぃいいーっ！」

「で、どうなんだ話し合いはよ？」

「なーんかいまいちみたいだねぇ…」

「ふぅん・・・結局ダメなのかしら・・・」

モモタロス達が見守る中、ファンガイア陣と人間陣の話し合いが行われていた。
だがやはり両者の仲は最悪と言ってもよく、ついに険悪な雰囲気は爆発する。

「やはり低能なファンガイアでは話にならないようだな！」

「力なき人間が！ぶち殺してやる！」

一気に場を包む殺気の嵐。
良太郎はため息交じりにベルトを装着する、だがそのときだった。

「やめてください！」

広場に響く少女の声。
あまりにも唐突だった為に皆一斉に沈黙する。

「・・・どうしてなんですか?」

悲しそうな表情で里奈は車椅子を押す。
ざわつき始める広場、
あまりの自然さに道を開けるファンガイアと人間。

「あなた達は…外見が違うから、
能力が違うから…異端とみなすんですか?」

「・・・」

「人間の皆さん。私は…」

そういって里奈は手に力を込める。
立ち上がろうとしているのだ、
しかし当然ながらソレはかなわない。
里奈は力なく倒れ、地面に伏せる。

「あ…っ、・・・っっ！」

良太郎は走り出しそうになる心をぐっとこらえる。

今、自分が助けに行けば、里奈の覚悟さえ踏みにじることになるかもしれないから。

「良太郎・・・」

ハナは良太郎の袖を軽くつまむ。
彼女もまた耐えているのだろう、良太郎はハナの手をそっと握った。

「大丈夫だよハナさん、今は里奈ちゃんの声を聞こう」
「・・・うん。そうね」

「・・・里奈ちゃん」

「私は…このとおり歩くことができません…、

ねえイクサさん。

歩くことのできない私は人間ですか？

体が皆と違う私は人外ですか！！」

「い…いや、違う。君は確かに人間だよ」

地面に伏せながらも里奈の目は確かにイクサをとらえていた。

そのあまりの気迫にイクサも思わず息をのむ。

「どうしてですか？」

「えっ？」

里奈は腕にありったけの力を入れる。

しかし、どんなに頑張っても踏ん張っても足に力は無く、立ち上がることはなかった。

「どうしてって…君は人間だからに決まってるじゃないか
見た目も、中身だって…」

「私は…一人じゃ階段すら楽に上れません」

「・・・え？」

「着替えだって、

電車だって…

遊ぶことすら普通の人と同じにできません。

イクサさん、
貴女はファンガイアの人を人間よりも出来の悪い生き物と言ったそうですね…

でも、ファンガイアの皆さんはちゃんとできますよね、だったら――」

里奈はうつむきながらもはっきりと…

「だったら私は人間以下ですね」

「ちっ、ちがう！」

イクサは里奈を抱きかかえるようにして駆け寄る。

「君は体が…その、すこし皆と違うだけだろ？
それをそんな風に解釈するのは間違ってる。

君がそんなに考える必要はないんだよ。

私は君をそんな風に見たりはしていないよ、私は君を人間として
――」

「じゃあ、私がファンガイアでも同じことが言えてますか？」

「っっ！」

イクサは里奈から目をそらす…

事ができなかった。
逸らそうとするが目が、瞳が彼女を捉えて離さない。

「イクサさん…あなたは優しい人…。
だからお願いします、どうか争いを止めてください」

「ぅ…あぁ…」

「人間の皆さん、ファンガイアの皆さん…昔を思い出して下さい。
あなた達は互いに助け合って生きてきた筈です。

考え方が違い争いが起きたかもしれません、
でもそれは同じ種族でもあり得る事でしょう?」

ファンガイア達、人間達はそれぞれ同族の顔を見合う。

「私たちは人間である前に生きてるんです、
命があって感情がある。

思い出して…どんな過去でもいいです。

楽しいと感じた時に、隣にいたのは誰でしたか？
一緒に笑う時、ファンガイアも人間も関係なかったんじゃないですか？

大切なのは心でしょう？」

里奈は腕にありったけの力を込めて身体を引きずる。
腕はすでにボロボロで、見ている方が痛々しい程だった。

「私は…この足を枷と感じたことはないです。

ううん、そう思った事もあります。いっぱい…
でも否定してきました。

だって悲しい事もたくさんあったけど嬉しいことも同じくらい、
それ以上ありました！

その時私の隣で一緒に笑ってくれた人、

その人と私の心、気持ちは同じだとおもってます！
だからどうか種族で争うなんて悲しい事は止めてください！
私たちはヒトなんです、
ファンガイアだって人間だって同じ「心」を持ってるはずなんです！」

「・・・・・・・・・・」

イクサは何も答えない。
しかしイクサは里奈を抱く手を放すことはなかった、
むしろ先程より強くしっかりと握っている。

「・・・イクサよ、ファンガイアは楽しい時笑う、そして悲しい時

に泣く」

「ああ…そうだなサガ。人間は楽しい時に笑い、悲しい時に泣く」

二人は頷き合う。

「里奈、スマナイ。

ずっと目を背けていた、
心にかすかにあった種族の壁が私たちを遮断していたんだ」

「しかしソレは種族ではない、同族とて同じ…」

イクサは里奈を抱きかかえ車椅子へ連れて行く。

「今すぐにはできないかもしれない…だが約束しよう。
私たちは再びお互いに手を取り合える関係へと時を戻す事を」

「我々は愚かだったのだ、里奈…無知だった我らを許してくれ…」

イクサとサガは互いに頷きあう。

「戦いを止めよう。二つの種族の争いをまずは…」

「そうだな。まずはそこからだ」

里奈は涙を浮かべて優しく微笑む。

『つまらん、実につまらん』

「え？」

ふいに、そんな声が聞こえた。

再びざわつき始める群衆達、そしてそいつは人間側から現れる。
漆黒の鎧、禍々しくも気高さすら感じさせる一本角…

「ファンガイア・・・」

『女…余計なことを…』

濁って男か女かすら分からない声。
ファンガイアは手を掲げる、すると巨大な剣がソコに出現した。

「あ、危ない！」

『死ぬがいい』

ファンガイアは剣を里奈に向かって投げる。

イクサは里奈を抱えると、全速力で剣と距離をとった！

「やめろ貴様！何をする！我々はこれ以上争う必要などないのだ！」

サガはファンガイアに詰め寄る。

しかしファンガイアはサガを突き飛ばし、エネルギー弾を乱射した。

「ぐっ、あああああああああッッ！！」

『サガ、お前には失望したぞ。
もうすこし利口かと思ったが…』

「なんだと!?ぐあァァっ!」

『貴様がもっと人間を敵視すれば…』

ファンガイアはサガを蹴り飛ばすと淡々と言い放つ。

『王を殺したのはこの私、エルザドルだ』

第２５話　コン　トゥッタ　ラ　フォルツァ・里奈の想い（後書き）

「ねえゼノン」
「どうしたんだいフルーラ？」

「ちょっと今回ＴＯＲに似てないかしら」
「・・・思っても言っちゃ駄目だよ愛しのフルーラ」
「まあごめんなさい！」

「意味が分からなければそれで良し。
では、次もよろしく！・・・だそうだ」

第２６話　テンペストーゾ・ｗａｋｅ　ｕｐ（前書き）

ちょっとした事なんですけど
このサガはサガークで変身しません。

ただのベルトだと思ってください

別にサガークが嫌いな訳じゃないですよｗｗ
ではどうぞ！

第２６話　テンペストーゾ・ｗａｋｅ　ｕｐ

「今・・・なんと言った？」

『聞こえなかったのか？王を殺したと言った』

あまりにも普通、

あまりにも希薄、

あまりにも虚無に語るエルザドル。

イクサ達もそのあまりの冷淡さに思考を麻痺させてしまう。

『私の計画ではもっと凄惨な状況になる筈だった。
人とファンガイアは憎しみ合い殺し合う、

そう、まさに地獄絵図と言ったところか？
しかしそれはかなわなんだ…

人に化け、ファンガイアとして舞台を滅茶苦茶にしてやるつもりだったが…』

興が覚めた。
そういってエルザドルはイクサの目の前に一瞬で移動する。

「なっ・・・」

『死ね』

エルザドルは小型ナイフを瞬時に出現させ、イクサの喉元を狙う！

「うォオォォオオオオオッッッ！！」

だが、そこでガルルが飛び込んできた。
怒りからか目が血走っている！

「貴様が王を！王をぉおおおおおおおおおお！」

『つまらん王だった。人とファンガイアは互いに助け合える？

馬鹿が、ファンガイアなど所詮力だけの存在、
まして人間など生きる価値もなし』

「貴様さえいなければ!!くそっおおおおおおおお!」

ガルルの攻撃をエルザドルは簡単に受け流す。
もやはエルザドルの瞳にガルルは映っていない。
瞳さえ虚無を見通していた

『つくづくつまらん奴らだ。呆れる』

濁った声でエルザドルは辺りを見回す。
エルザドルを攻撃しているのはもやはガルルだけではない、
バッシャーやドッガも駆けつけエルザドルを攻撃しているのだ。
にも関わらずエルザドルにはかすり傷さえついていない。

「くっ、なんでこんなに・・・」

『・・・』

エルザドルはずっと手に持っていたナイフを投げた。里奈に向かって！

「！」

目をつぶる里奈。避けられない！彼女は襲い掛かるであろう痛みに備えて歯を食いしばった。

「・・・・っ？」

しかし、痛みはない。
ガキンっと音がして目を開ける。

「大丈夫か！」

「あ・・・」

そこには見たこともないファンガイアがいた。
それだけでない。人間の何人かも同じように里奈を庇っている。
里奈は一瞬何が起こったのか分からずに、だらしなく口を開けたまま沈黙していた。

しかし気づく、皆が自分を守ってくれたのだ

「あのっ、ありが――あ、ごめんなさい！」

「おじょうちゃん…

すまねぇな、
君みたいな子供にまでこの問題を抱えさせて…
俺たち大人よかガキどもの方がよっぽど賢かったぜ…ははっ」

次々に里奈を庇おうと立ち上がる大人たち。
ソレを見てエルザドルは深いため息をつく。

『うん？何だ？
昨日まで憎しみ合ったモノ共が少女一人守る為に団結する？
笑わせるなよファンガイアッ！

どうした？
昨日までお前らはその少女を憎しみの対象とでしか見ていなかったろう！

だったら、さあ！殺せ！殺すのだ！』

「なんでだろうなぁ
お前を見てたらどれだけ自分たちが馬鹿だったのか思い知らされたよ、
おれ達はただのバカだった。

エゴだけで動いてた…大馬鹿野郎だ！」

「み、皆さん・・・」

次々と里奈を守るように立つ国民達。

エルザドルはうんざりしたようにため息をつく。

気品と禍々しさを感じるほどのオーラを持つエルザドル、
しかし国民たちはそれに怯む事なく立ち向かった！

『馬鹿ばかりか…腹が立つよ』

「なら、馬鹿で結構！」

『屑が・・・』

「おい！よそ見してんじゃねぇえええええええ！」

『むっ！』

赤い斬撃が確かにエルザドルを捉える。モモタロス、電王だ！

『貴様は・・・ファンガイア…いや、人間でもない？何者だ』

「ああん？俺は俺よ！」

「皆！彼に続け！」

この一撃をきっかけにガルル達の攻撃もヒットするようになり、善戦をくりひろげる。

『ふん、無力な少女の声で随分良くやれたものだ』

何気に放った一言、しかしそれは里奈の心に深く突き刺さった

「…私、また何もできない・・・

守られて・・・ごめんなさい！」

涙があふれる。

大人達もこれには何も言ってやれなかった。
安易な言葉では傷つけてしまうだけだ・・・

「私は…もっと…強くなりたい」

「ちがうよ里奈ちゃん・・・」

「！」

そっと肩に触れる手。里奈はソレが誰かを確認せずに呟く。

「・・・えへへ、どうにもうまくいかないね」

「君は自分で歩けてるじゃないか」

「そう・・・かな。私まだ皆に迷惑かけて」

「人間ってさ・・・絶対誰かに毎日迷惑かけてるんだよ。
里奈ちゃんはさ、兄さんよりはるかに迷惑の数、少ないよ」

「あはは…ありがとう、でも――」

「でもは無しって言ったろ?
君は特別扱いされたくないって言ってたっけ?
じゃあ自分だってそう振る舞わなきゃ。
あの時、君は自分の足を枷にしないっていっただろ?」

「で――ごめん。ねえ?私自分で歩けてるかな?」

「里奈ちゃんは、自分の「足」で歩いてるよ。
知ってるよボク、里奈ちゃんって結構決めたこと曲げるの嫌いだよね」

「う、うん・・・」

「だったら大丈夫、君はもう立派に歩いてるよ」

高速で何かがエルザドルに向かっていく。
それは素早い動きで相手を翻弄し、隙あらば魂心の一撃を決める！

『くっ、なんだ！』

『うおおおおおおおおおっす！』

「キバット！」

ソレはその声に反応すると声の主に舞い戻っていく。

「里奈ちゃん、君は皆と同じなんだ」

「うん！ありがとう。亘君！」

振り返る里奈、
そこには亘が変わらない笑顔で立っている。
亘はキバットに自らの腕を噛ませ、
もう一度里奈に微笑むと、キバットをベルトへと装着させた。

「イクサさん、サガさん。一緒に戦ってください！」

「ああ、もちろんだ。我々の償いの為にも」

「私達は立ち上がっていなかった。里奈のように自らの「足」で歩かなければ！」

「「「変身！」」」

キバ、サガ、イクサはエルザドルに向かって駆け出す。
里奈は彼らの勝利を強く願うのだった

第２６話　テンペストーゾ・ｗａｋｅ　ｕｐ（後書き）

花粉がやばいです

まあそれほど酷いって訳じゃないですが…

皆さんも気をつけて。

では次もよろしく！

第27話　フィーネ・より良い未来を（前書き）

亘キバの変更点は

バッシャー

通常弾も相手を追尾します

ウェイクアップ

ゲームのように一定時間攻撃力が上昇します。
空間がガラスの様に割れ、辺りが夜に変わります

特に今はこれくらいですかね
ではどうぞ！

第27話　フィーネ・より良い未来を

「うおおおおおおおおおッ！！」

『雑魚がァアアアっ！』

周りにいるガルル達を吹き飛ばし、エルザドルもキバ達を直視する！

エルザドルは瞬間的に無数の剣を出現させ、それを三人に向かって発射した。

「まかせろ！」

サガは剣を鞭のように変化させ、次々にそれらを破壊していく。

赤い剣閃は剣をただ弾くだけでなく、エルザドルに向けて反射させる！

『ちっ！』

「「はっ！」」

『・・・ッ』

怯んだ所へイクサとキバの拳が命中する。

エルザドルは舌打ちをするとバックステップで三人との距離をはなした。

「キバ！俺達を使ってくれ！
俺達はお前を支えるためにいるのだ！」

「皆さん…うん、ありがとう！」

ガルル達はホイッスルに変身してキバのベルトへ装填する。
キバは素早く緑の笛をキバットに噛ませた。

『バッシャーマグナム！』

闇の鎖がキバを包み、弾ける！

そこには色が緑に変わったキバが立っていた。

「エルザドル！なんでお前は人種を隔てるんだ！
皆が楽しく生きる事をなんで拒絶するんだよっ！」

バッシャーマグナムの弾はある程度相手を追尾するため、

エルザドルは避けるのではなく防御する。

だがそこにイクサとサガが猛攻撃をしかけ確実にダメージを与えていく。

『人間とファンガイアは互いに殺し合うのが定めよッ！』

「誰が決めたんだよそんな事っ！」

紫に変わるキバ、
ドッガハンマーの一撃は強靭なエルザドルの鎧を打ち砕き、破壊する！

ソードフォームも応戦し、徐々にエルザドルが押され始める。

『血塗られた歴史が語る。一度争った二つの種族には確固たつ壁が存在するのだ』

「エルザドル、ちがったんだよ…
壁を固める事じゃなく
壊すことに我々は徹するべきだった」

「一人の少女に面と向かって言われるまで気がつかなかった愚かな私達、
だがその愚かさを嘆くのではなく前に進む為に活かそうではないか！」

キバは青に変わる。ガルルセイバーだ、エルザドルと三人の攻防はどんどん激化していく。

『か弱い少女にたった一言指摘されただけで心動く貴様らに何を語る資格があろうか！
貴様らは感情論に諭されたただの馬鹿共よ！』

『里奈は傷ついた我々に手を差し伸べてくれた。危険だと分かっていながら！』

「我らは互いを罵り合いながらも心の奥で関係の修復を望んでいた、
しかしソレを認めよともせずしまいこんでいた！

里奈だけではない、
我々は全員それを言う資格を持っていた。

だができなかった何故か？

弱いからだ！」

「里奈のように否定しない心を持った大人が一人でも居ればよかったのに…
気づくのが遅かった！」

サガの蹴りがエルザドルを吹き飛ばす。

『ならばッ！その弱さと共に消えろ！』

エルザドルから強大なオーラが溢れる。

「くっ、まだこんな力を！」

オーラはエルザドルを巨大な鎧を与える。
その大きさはビルほどもあり、周囲を圧倒させた。

『この一撃は貴様らではかわせんぞ！消し炭になるがいい！』

エルザドルは強大なエネルギーをチャージし始める。

「くっ！」

「あんなエネルギーを・・・」

『わっ、亘さん！あれは危険っす！ヤバいっす！』

「っ！」

「良太郎！」『うん！』『ＦＵＬＬ　ＣＨＡＲＧＥ』

ソードフォームの必殺技がエルザドルのエネルギーを散らしていく。
しかしチャージは止まることはなく、せいぜい時間を遅らせる程度のようだ

「くそっ！」

『はっ、人とファンガイアの共存など不可能な夢物語。
そんな幻想を語る連中など、すべて消してやる！』

「それでも！夢でも信じなきゃ！信じあわなきゃ叶わない！」

里奈は叫ぶ。自分を守ってくれる人の為にも叫ばなければいけなか

った。

「人間とファンガイアは共に生きていける！
ファンガイアでも人間でも、信じる人の為に戦える！
それが心持つものの証だから！」

里奈は思いっきり叫んだ、

自分の

弱さを

醜さを

全部言葉に託して。

そしてその言葉に皆は頷き、エルザドルを睨む。

『種族の壁は絶対なのだよ！』

エルザドルのチャージが終わった様だ
キバ達はせめてもの抵抗に必殺技を当てる準備を始める。
その時だった！

『ファイナル・アタックライド――ディディディディディケイド！』

ホログラムカードを越えディケイドがエルザドルにディメンションキックを決める！

だがこれも大きなダメージにはならない

「兄さん！」

「悪いな、遅くなった！」

『・・・っ！貴様は特に異質な気を感じる、何者だ！？』

ディケイドは振り向きながら指をさす。

「俺は破壊者さ！
だからこの世界の「壁」を・・・」

ディケイドはカードを手にしてキバに見せる。

それはキバのカード、
つまりキバの封印が解かれたと言う事だ！

「破壊する！」『ファイナル・フォームライド――キキキキバ！』

「うわぁ！」

キバの体が変形して巨大な弓になる、キバアローの完成だ。

「狙い撃つぜぇ…」

『クッ！消えろ！』

エルザドルはエネルギーを一気に放出する！

『兄さん！来る！外さないでくれよ』

「おいおい、俺がお前に嘘ついたことなんてあるか？」

『ファイナル・アタックライド――』

『今ついた！』

「ははっ、勘弁してくれよ」『キキキキバ！』

カテナが解放される。

ディケイドは思い切りアローを振り絞り

そして放った。

「いっけぇえええええええええッッ！！！」

高速で放たれた弓は一気にエネルギー波をぶち抜いていく！

『なにっ？ぐあああああ！』

弓はエルザドルを貫き、

そして爆発した。

「勝った・・・のか？」

「ああ・・・だな・・・」

「やっ…やったあああああああああああ！」

一気に観衆達は歓喜に踊る。
抱き合う者や胴上げを始める者、
中には踊りだす者もいた

「終わった…というか兄さん！

今までどこ行ってたんだよ！」

「クイーン以外のチェックメイトフォーに追われてたんだよ！
あいつ等全然手加減しないんだよ、参ったぜ・・・」

そういって歩いていく司、それとすれ違いにイクサ達がやってきた

「亘君！」

「里奈ちゃん！」

二人は駆け寄ると互いの無事を確かめる。

「イクサさん！サガさん！」

「約束するよ里奈、亘。
私達は必ずまた仲良くなれると！」

「ああ、必ず！」

「「・・・はい！」」

その日は祭りが行われた。
ファンガイアも人間も関係なく笑い、夜は更けていった。

エルザドルは傷口を抑えながら歩いていた。

場所は城、
そしてエルザドルを迎えるのは大臣とクイーン。

「…お疲れ様でした」

「ああ、すまなかったないろいろ迷惑をかけて」

濁っていたエルザドルの声が鮮明になっていく。
クイーンは優しく微笑むと、
エルザドルを強く抱き締めた。

「これで・・・よかったんですよね？

キング…」

「ああ、

いや…もはや私はキングではないな。
大臣よ、次の王はイクサとサガの両名に継がせてくれ、

私は…ははっ、
もう死んでる事になっているからな」

そういってエルザドルは王座に腰掛ける。
クイーンの力で射抜かれた所はすっかり元どおりになっていた。

「・・・本当にガルル達には申し訳ないと思っている、
まして国民達にも…」

「非常に危険な賭けだったとは思います、
ですが結果論としては成功だったかと」

エルザドルは自虐的な笑みを浮かべた。

もはや限界だったのだ、
種族間抗争は日に日に激化していき、いずれは取り返しがつかなくなるところまでいってしまう。

だからこそエルザドルは苦悩の選択をしたのだった。

自作自演の死と言う嘘

自分がやった事で多くの民が犠牲になるかもしれない、

しかしそれを乗り越える事ができれば……

エルザドルは王を捨て、危険すぎるとも言える賭けにでたのだった。

「すまない、
あの里奈と言う少女にコレを渡しておいてくれ…」

そういってエルザドルは立ち上がる。

「はい…

どこへ？」

「私は死んだ身だ。人目のつかぬ所で存在しなければならん」

歩き出すエルザドル。
大臣は何も言わずにただ深く頭を下げるのだった。

大臣として、一人の友として

「私もお供させてください・・・
キング、いえエルザドル様」

クイーンはエルザドルの隣を歩く。
エルザドルはすまないと小さく呟いて彼女の手を握る。
大臣は二人が見えなくなった後も頭を下げ続けた。

「・・・綺麗・・・だね」

「うん、すごいね」

里奈はキラキラと光る竜のブローチを貰った。
真由も気に入ったらしく、二人はさっきからソレをじっとみている。

「あれから里奈ちゃんも結構成長したみたいだよ、少し明るくなったっていうか」

「ま、今回は里奈がいなきゃヤバかったからな」

ソレを聞くと里奈はブイサインを送る。

「行ってしまうんだね」

「ああ、俺たちはいろんな世界を巡らなきゃいけないから…」

イクサとサガは別れの挨拶を言う。

「ガルル達ともお別れか・・・
私は正直君たちが王を殺めたのではないかと疑っていた。

許してもらえるとは思っていないが

どうか謝らせてくれっ！
すまなかった！」

「気にするな、それより国を頼んだぞ」

「ああ…ありがとう」

ガルル達は笑いながら学校へと消えていく。

『はぁい、アタシも来ちゃった』

『わぁ！キバーラ！だめじゃないっすか！』

「ははっ、いいんじゃないかい？大勢の方が助かるよ」

こうして司たちはキバの世界を後にするのだった。

第27話　フィーネ・より良い未来を（後書き）

はい。と言う訳でキバ編は終わりです

ココまでお付き合いありがとうございます

次もよろしく！

第２８話　番外編　皆でゲーム（前書き）

はい、と言うわけで番外編です

申し訳ないですがまたライダー関係ないです（爆

第２８話　番外編　皆でゲーム

それは亘も無事に変身する事ができ、次の世界へ向かう途中の事だった。

「本当にいいのか？このスマブラの帝王とまで言われた椿様に勝てるとでも？」

「あぁら、あたくしはスマブラの神と言われておりましたのよ、おほほほ！」

友里は挑発する様に笑う。
しかし椿は小さく鼻を鳴らすと、
自らのコントローラーをゲーム機に突き刺した。

ことの発端は、亘が変身できた事をお祝いするパーティの時だった。
ふとスマブラの話題になり、誰が一番強いかと言う話になったのだ。
特に友里と椿の二人が最強の称号を譲らず、決着をつけようと言う事になった訳で・・・

「あははは、じゃあ司会は私、小野寺翼と――」

「良太郎です」「ハナです！」

スマブラが自分たちの世界に無かった電王組みが勤めることになった

「ところで何でワタシ達まで…やった事ないんだが…」

咲夜はコントローラを不満そうに見つめながら呟く。
前回の料理対決同じく、チーム対抗戦になっているのだ。

「はっ、それはコントローラーって言う機械なんだぜお猿さん。」

「知っとるわそれくらい！
ワタシ達までやる必要があるのかと言ってるんだ！」

「一応優勝チームには景品があるよ。
前回ケーキが誰も食べれなかったからね、
今回はファンガイア牧場特性、とろとろプルりんプリンを用意させてもらったよ」

咲夜は何も言わずにコントローラを握り締めた。

「いいだろう…やってやる」

「極端だね・・・」

「糖分に飢えてるからね、相変わらず」

司　椿　拓真　真志　亘　我夢チーム

「前回みたいな事にならないように嘘偽りなく答えろよ！
お前らの実力はどれくらいなんだ？

俺はまあまあだと思う」

「帝王だぜ?弱いわけないだろうが!」

「お前!前回、鉄人（笑）だったろうが!」

「今度はマジですぅ!絶対勝ちますぅ!」

「ホントだろうな・・・?　皆は大丈夫か?」

「ああ」

「うん」

『ドドーンッ!』

「大丈夫だよ」

「おいなんか今一人全く違う感じの奴がいたぞ。
なんかどどーんって聞こえたぞ。

タタコン使ってるヤツいたぞッッ!」

「えっ?」

我夢は周りを見回す。

「（あれ？なんか僕…皆とコントローラーが違うような…？）」

「１２０パーセント違うから！

コレそう言うゲームじゃねぇから！太鼓もバチも使わねぇから！」

片付けてきなさいっ、司は我夢にタタコンを片付ける様に命じる。

我夢は申し訳なさそうに走っていった。

「我夢君」

ふと、呼び止められる

「え？ああ、アキラさん。どうしたんです？」

「実はあのゲームやった事なくて、ちょっとルールを教えて欲しいんですけど」

「ああ。いいですよ」

「すみません。ありがと――」

アキラが我夢に近づいた瞬間、薫が走ってきてアキラにぶつかる。
アキラはバランスを崩して我夢にもたれかかってしまった。

「きゃっ！」

「ッッ！！！」

「あ、ごめん！」

薫はアキラと我夢に謝罪すると、急いでるからと行ってしまった。

「あ、もうすぐ始まる様ですね！急ぎましょう！」

「・・・ラさん・・・」

「え？」

「アキラ…さん、先に行っててください」

「え？でも…」

「お願いですから」

「わ…わかりました」

「・・・・・・」

胸が…当たった。

「ブハッ！」

「我夢くんおそいね」

「そうだな。片付けにいっただけなのに」

少し待っても我夢が帰ってこない。
司達は不思議に思い我夢を探しにいく

「おーい…我夢ー…？・・・・ッッッ！」

そして…見つける。血まみれになって倒れている我夢を！

「が、我夢っ！」

司は倒れていた我夢を抱きかかえる。

「だっ、大丈夫か！？」

我夢は答えない。
どうやら気を失っているようだった、

我夢の血はどうやら鼻から出血したモノだろう、

つまり、我夢は鼻血を出して気絶したと言う事だ

「な、なんで…。と言うか何て幸せそうな顔してるんだ…」

「・・・」

椿は真剣な表情で何かを考えている。

「（まさか…いや、そうなのか？）」

どうやらこの戦い。簡単にはいかない様だな…

椿は一人冷や汗を浮かべながら、ニヤリと笑うのだった。

「うりゃあああああああ！」

「うぇぇえええええいっっ！」

「だあああああああ！」

「ヴェエエエエエエエエエイ！」

「くっ！そんな！」

「はっ、どうした園田ぁ！こんなもんかよ！
これじゃあ椿様のウォッチは崩せねぇなぁおい！」

「そんなっ、あたしのディディーが…！」

「まあコレが実力の壁ってやつだわ。じゃあな、
これで終わりだァアアアア！」

「くっ、くそおおおおおおおおおお！！」

勝者　　友里

「・・・・・負けちった。てへっ☆」

「なんでだよッッ！どう考えても勝ってただろ！
さっきまでの台詞なんだったんだよ！

なんで負けてるお前が終わりだァァとか言っちゃうんだよ！！

おい舌出してんじゃねぇぞ
全然かわいくねーからな！

ぶっとばすぞ！」

「も、もう一回やらせてくれ！次は咲夜だったな、勝てる！あの女になら勝てる！」

「・・・・・まあいいけど」

『ビガーッ！！』
『ビビーッ！』

勝者　　咲夜

「ふっ、ワタシの勝ちだな椿ぃ！」

「はいはいはい、強い強い！凄いねぇーピカ厨は！
下スマと雷だけしてればいいもんねー！」

「黙れ帝王（笑）やった事ないのだからこれくらい許せよぉー！
と言うか帝王（爆笑）なら対策くらいできるんじゃないんですかぁ？
どうなのかな帝王（）！」

「ぐぬぬっ！　あーうるせぇ、うるせぇ！
だいたい何でお前、ピカチュウなんてかわいいキャラ使ってんだよ？
お前はせいぜいドンキーかクッパ、ガノン辺りだろーっ」

「好きだからに決まってるだろうが！悪いか！」

「はいはいー！誰得ですかぁー？
男に胸くっついてるだけの咲夜さんが実は可愛いもの好きって設定誰得ですかぁ？」

「はっ、ピカチュウが嫌いな人間などこの世にいませぇん！」

「はーい！椿くんライチュウ派でぇす！太ってるとか言うヤツ焼き土下座なー！」

「だからお前は帝王（失笑）なのだよ！
本物のチュウリストなら皆愛してるのだよ！」

「はっ！原作ゲームやった事ねぇヤツがよく言えるな！
どうするぅ？お前の知らない設定あるかもしれんぞぉ！」

「な、何？」

「お前あん時もそうだったな。
ぼのぼのでシマリス君きゃわいいとか言ってたけど女の子だと思ってたんだろぉ！

高校までぇ！」

「くっ！」

「そっからお前きゃわいいとか言わなくなったな！
シマリス君に対する態度が余所余所しくなったよなぁ！

無類のシマリス君ファンを語ってたお前が！

知ってるぅぜぇぇ咲夜さんよぉ！
お前シマリス君のぬいぐるみに女の子の服着せて、
抱いて寝てたらしいなぁおい！

どうすんだ！シマリス君の気持ち考えた事あんのかオイ！」

「くっ、あんなにかわいい子が男の子のはずが…！」

「逆ですぅ！逆なんですぅ！お前どうする？
もしピカチュウのチュウが虫って意味だったらよぉ！

今も変わらず愛し続けられるのかぁぁあ？本当の愛貫けるのかぁ」

「ぐぐぐっ！・・・はっ、
本当の愛？

新しいアニメが始まるたびに嫁がコロコロ変わるお前の口から愛？
笑わせるなよ！帝ｗｗ王ｗｗ様ｗｗｗが！」

「グググッ！！お、お前…それっ」

「はいはいー。またリアルファイトかなー。やめようねー」

翼が嗜めると椿と咲夜は渋々自分たちの場所へと戻る。

「安心しろよ椿、オレが勝って流れを取り戻すから」

真志は対戦表をみる、自分の相手は真由。

真志は勝利を確信する、

真由には悪いが勝たせて貰おう。

何か美歩が真由にゴニョゴニョと呟いているが特に気にする事ない

真由のプリンと真志のファルコンが対峙しあう。

ファルコンが先制攻撃をしかけようとした瞬間、真由はぼそりと呟

いた。

「プリンちゃん…殴られるなんて…可哀想…」

潤んだ瞳で真志を直視する真由。画面ではなく真志を直視する真由

「・・・いや、真由ちゃんコレっゲーム…」

「こんなに…かわいいのに…殴られるなんて…可哀想…」

「・・・・・・いや、だから――」

「こんなに愛しいのに――」

勝者、真由

「真志・・・お前」

「いいんだ・・・オレには・・・
ぷりんちゃんは殴れない」

「ブワッ…」

「やったぁ…！」

「うしっ！ナイス真由！」

駆け寄る真由を美歩は抱きしめる。

「美歩ちゃんの…言った事…守った…よぉ」

「うん！偉いぞ真由！」

ニヤリと、黒い笑顔を美歩は浮かべる。

「作戦…成功ね」

同じく、黒い笑みを浮かべた薫。

「そっちはうまくいったの？」

「ええ、我夢くんがアキラちゃんにルールを教えてる時にばっちり決めてやったわ」

「・・・くくく、計画通り！」

「どうでもいいが、人の妹を悪女にするのは止めてくれないか…」

呆れるように双護はため息をついた。

「まじで後がねぇぞ！もういい、俺がいく！」

相手は双護か…どうでもいい！

俺のカービィで全員破壊してやる！

世界の破壊者、カビケイド。その瞳は何を見る？

ガキンッ

『させるものか！』

バキンッ

『見切った！』

ドケシッ

『させるものか！』

デュクシ！

『見切――』

「だあああああ！人間じゃねぇぇッッ！
何で全部カウンターできるんだよ！化けモンかよ！」

「フッ、俺のマルスはひと味違うだろう？
さよならだ、ミスティックスラッシュ！」

「ぐあああああああああ！
そんな…技…ねぇ…から…な……ガクッ！」

「いや、なんで気絶した」

勝者　双護

「やべー、やべーぞ！どうすんだオイ！

今のところ全員負けてるぞ！残りは拓真と亘！お前らしかいねぇ！」

「大丈夫です！次は夏美姉さん！
ボクや兄さんと何回か戦ったけど一度も勝った事はありません。
いつも使うヨッシーでくるならボクのメタナイトで倒せます」

「よ、よし！期待してるぜ亘！」

亘には自信があった。現に夏美に負けた回数は少ない。
夏美の選択したキャラがヨッシーでその自信は確信に変わる。

勝てる！

そう、普通に戦えば夏美には勝てるだろう

そう、普通に戦えば…

「じゃあ！はじめ！」

ハナが開戦を告げる。

そして、亘は見た。

夏美が目を光らせて自らの指を亘の首に突き刺す瞬間を！

「・・・・」

「・・・・」

真志達はいきなりの行動に目を丸くする。

そして亘が笑い出す

「ぷっ！あはっ！あはははは！」

「・・・・・」

「あはははははは！あはははは！」

「わ、亘？」

「あはははははは！く、苦しい！あはははは！あはは――」

何がそんなにおかしいのか笑い転がる亘。
夏美は涼しい顔で無防備になったメタナイトを場外へ吹き飛ばした

「奥義・笑いの…ツボ」

バタリと倒れる亘を見つめながら、夏美は小さく呟いたのだった

勝者、夏美

「こえええええええええええ！
何だよ！アレ！え？いやいや怖い怖い！」

「くっ、やられた…」

もう司チームは拓真が負けた瞬間敗北となる。

「拓真！頼むぞ！俺達の意思はお前に託す！」

「う、うん！怖いけどやるよ！」

拓真の瞳に炎が灯る。
それに呼応するかのようにロボットの目にも光が宿る

そこからの拓真は凄かった。
ユウスケ、薫、里奈、アキラなどを次々と撃破していき成績をどんどん上げていく

「一行でやられる私達って…がくっ」

「やっつけすぎる…ばたっ」

「あ、あはは……

あ、忘れてた。
えと…ぐてっ」

「最後のはやらなきゃいけないんですか……
ぱ、ぱたり」

次々に勝利をあげていく拓真に美歩達は焦りをかんじる！

「くっ！やばいわよ美歩！このままじゃ」

「そ、そうね。何か手を打たないと――」

美穂が動こうとした瞬間、目の前に真志と椿が立ちふさがる！

「くっ！真志！」

「させねぇぜ美歩ぉ！
お前らのチームが何か良からぬことをしようとしているのは分かってるんだからな！」

「ちっ！」

「他チームの妨害なんて男らしくないぞ！白鳥！」

「私は女だっての！

つか、前回のゲームでおもックソ妨害してた奴が何言ってんだ！」

「とととにかく！拓真の邪魔はさせねぇ！」

あの…

「はっ！拓真っち一人で他の全員を倒せるとでも！？」

「いけるさ、拓真はオレ達の希望なんだ！」

あのー・・・

「ふっ、私を倒してもまだ強敵が控えているというのに！」

「美歩！見せてやるぜ！オレ達の――」

「あのっ！」

「ん？」

真志が振り返ると拓真が申し訳なさそうに笑っている

「どうした！？拓真！」

「友里ちゃんに負けちゃった…えへへ」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「まあ…ね。現実なんてこんなモンですよねｗｗ」

「プリン！プリン！プッリーン♪」

結局友里チームが勝利し、景品のプリンは彼女達のモノになった。
友里は鼻歌交じりに冷蔵庫の扉をあける

「ぷ……あれーっ？」

景品のプリンが消えている！
友里は慌てて周りを見る、どこに？景品のプリンはどこへ！？

「・・・ん？」

食堂の隅で赤い何かがモゾモゾしている、

すごい嫌な予感がしながらも、友里達はその赤いヤツに声をかけた。

「うーん…デリシャス…」

「ねえ・・・」

「ん？　おお！お前らか、どうしたんだよ」

「モモタロス…どうして口の周りが汚れてるの…？」

「口ぃ？　ああ、プリンを食ってたんだよ。
うめぇなコレ。いや全部くっちまったよ」

「・・・か・・・」

「あん？どうした？」

「馬鹿ァあああああああああああああああ！」

こうして、学校に友里の大声が響きわたるのだった。

第２８話　番外編　皆でゲーム（後書き）

かなり…やっつけでしたねｗ

次回のアギト編もよろしくおねがいします

では、お付き合いありがとうございました！

第２９話　嚆矢濫觴（前書き）

はい、という訳でアギト編です。

最初に言っておきたいんですが
オリジナルフォームが登場します

そう言うのが苦手な方はごめんなさい！

第２９話　嚆矢濫觴

ぼ、僕とっ、結婚…してくれませんか？

「　　」

ほ、本当に！？

「　　」

はっ、はは！ははは！

「　　」

う、うん！絶対幸せにするよ！

「　　」

ああ！そうだね・・・

「・・・・・・ぁ」

フラッシュバックする記憶と思い出の奔流。
暗闇の中でゆっくりと身を起こす。

だが、体が重い…

夢か…

「・・・・・・・・・・」

思い出したくはなかった夢。

追いかけても追いつけない…そんな夢だった。

「くそっ・・・」

心では割り切ったつもりだった。

決別したつもりだった

・・・が

些細な記憶一つで心が張り裂けそうになる。

自分はこんなにもメンタルが弱かったのだろうか？

自分自身に苛立ちを覚え、再び目を閉じる。

焼きつく彼女の笑顔が僕には眩しかった。

悲しかった。

だから逃げたくなる。

僕はせめてもの抵抗に心臓がある胸を握り締める。

痛みは少し僕から現実を遠ざけてくれたが、
すぐに見てしまった、

月に映る自らの影を…

「・・・そうだった、次は僕なのか」

僕は急いで教室に向かう、
昨日いろいろ考えていたせいで寝坊してしまったのだ。

こんなことじゃ皆に申し訳が立たない。

教室に入ると真志君と司君が何やら話し合っていた。

「ごめん。すこし寝坊しちゃたよ・・・申し訳ない」

「先生何いってるんだよ、オレ達が早く起きただけだって。それより・・・」

「犯罪件数ゼロ?どういうことなんだい?」

「異常だぜ先生。この町で起きた犯罪の件数はゼロなんだってよ」

つまりなにかい?

この世界では殺人はおろか万引きまで起こっていないとでも言うのかい?

そんな馬鹿な・・・
だが僕たちの常識はもう通用しないどんな世界があっても不思議ではないんだね

「司君、この世界では私が選ばれた様なんだ」

「あ…成る程、アギトの試練ってことか」

「うん、だからこの世界での敵はアンノウンであるという可能性が高いと思う」

司君は少し考えてからうなずく、
原作どおりとは限らないからこの理論の信憑性はあまり高くない。

「っていうか先生は変身できるの？」

「一度やってみたけどダメだったよ。
ユウスケみたいに極限状況に陥らなければならないのかもしれないね・・・」

テレビで見る変身ポーズだけを真似しても何も変わらなかった。
心情まではテレビじゃ分からない。それがもどかしい

「うーん・・・じゃあまた適当に町をぶらつくしかないか」

「その前にどうかな、今日と明日くらいはこの町で休暇をとらないかい？」

「え？休暇？」

翼の提案に二人は目を丸くする。

「ああ、最近ずっと戦いが続いたからね、息抜きも必要だと思うんだ。
幸いこの世界は平和そうだし」

「で、でも先生。急がないと俺達の世界がやばいんだぜ？」

「じゃあ一日にしよう。根気つめて体でも壊したりしたら結局同じ

ことだろう？」

「まあ・・・そうかな」

「じゃあ決まりだね、皆を起こしてきてくれないか。なにせ、今日一日だけなんだからね。あはは」

「ねえ咲夜ぁ、咲夜も一緒に買い物行かない？」

「行きましょうよ先輩！」

「ああ、そうだな。ご一緒させてもらうよ」

初めての休暇ともあってか、女性陣は皆で買い物に行く予定を立てていた。

「あー！そのアイテム！おれが取ろうと思ってたのにぃ！」

「かかか、ユウスケは甘いな、所詮取ったもの勝ちなんだよ！」

「くそっ！このまま真志の一人勝ちなんてさせるか！ユウスケ！」

「分かってる！」

「「変身！」」

「・・・変身する必要ないと思うけどなぁ」

ゲームで遊んでる者や、

「えいっ！」

「おりゃぁあ！」

モモタロスが打ち返したシャトルが空を舞う。

「そっち行きました！双護先輩！」

「ああ、わかった」

双護はラケットを構え、撃つ！

「うぉ！」

ビュンッと音をたててシャトルがモモタロスに直撃する。

「ばたっ！」

「も、モモタロスーっ！」

「どうかな、俺の

デスティニー・オブ・ザ・エンドレスグラビティ・ファイアーストラックフィーリングフューチャーアタッチメントライトオブワン・ザブレードの威力は？」

「・・・あの、これバドミントンなんですけど」

スポーツで遊ぶ者もいる。

「いいのかなぁー我夢君～」

「え？」

「このままアキラを行かせてもぉ？」

「・・・・・・・・ななな何のことですかな？
せせせせ先輩」

「椿先輩知ってるんだぞぉ、今日ぐらいしか誘えないと思うなぁ俺は」

「ささささ誘う？アキラさんを？どどどどどどこに？」

「えーどうしたのー？僕も気になるなぁ」

「ううううウラタロスさんも椿先輩も、ぼぼぼぼくは別に」

「じゃあ、僕が誘っちゃおうかなぁ～？」

「・・・そ、そうだなー。
いや別に変な気はないんですけどせっかくだから誘ってみようかな？」

わざとらしく態度を変える我夢にウラタロスは苦笑する。

「あ、あのッアキラさん…」

「はい？なんですか？」

「も、もし…よよよよかったらッッ…ぼぼぼぼぼぼ僕と…」

「はあ」

「かかか、買い物に…
僕と一緒に買い物に行きませんかッ！」

「あ、すみません。先に美歩さん達に誘われて、また行きましょうね」

「は、はい…」

「・・・いや、なんていうか…ね、ホラ。別に断られたとかじゃないじゃんね？」

「…そうですね」

「そ、それにまた誘えば大丈夫だよ！」

「…そーですね」

「げ、元気だせって…な？」

「・・・た」

「え？」

「アキラさんとしゃべれたぁ…僕ッ、もう満足です！」

「・・・え？」

「え？」

「あれ？」

「はい？」

「なにそれこわい」

第２９話　嚆矢濫觴（後書き）

休暇って、番外編でとりまくってるじゃねぇかっていう突っ込みはＮＧでｗｗ

あと明日は更新できないかもしれません。

では次もよろしく！

第３０話　一喜一憂（前書き）

今日は大雨で学校がなくなったんで更新できました
だから代わりに明日と…
もしかしたら明後日はできないと思います

ではどうぞ！

第３０話　一喜一憂

デパートのおもちゃ売り場では、先ほどから夏美と真由がなにやらぬいぐるみの前で話している

「見ててくださいね…」

「…うん」

夏美は熊の様な犬の様なおかしなぬいぐるみの腹を押した。すると、

おんぎゅらぁぁぁ

「わぁ！音が…なったぁ…」

「へへん、これすごくないですか！？」

「すごい…すごい！…もう一回！もう一回」

真由の反応に気を良くした夏美は、
ドヤ顔でもう一回ぬいぐるみのお腹を押した。

おんぎゅらぁぁぁ

「わぁぁぁ！」

「楽しーッ！」

「夏美達は何をやってるんだ…？」

「さあ？でも本人達が楽しそうだからいいんじゃない？

あ、友里ちゃんチョコミントにしたんだ」

「うん！あ、ハナちゃんも食べる？」

アイスクリームを舐めながら咲夜は二人を暖かい目で見守るのだった。

「で？どうなんだよぉユウスケとはぁ？我夢とはぁ？亘とはぁッ！」

「はあ！？」

そう言って美歩はジュースを薫達へ放り投げた。

「おでん缶……
で、どうなのって、何がよ」

「みぃちゃんってば、センスいいっしょ？
つか、何がって、決まってんじゃん！関係よ、
かんけい！」

美歩はにやけながらサイダーの缶を開ける。

「ちょっと、そっち寄こしなさいよ！
関係って…ただの友達よ」

「もう口付けちゃったしぃ。
え～…あ、じゃあ。どう思ってる訳？」

「ど、どうって…別に…なんとも…」

「あー！赤くなってるー！」

「ッッ！」

ニヤニヤしながら美歩は薫に詰め寄る。

彼女はこういう話が大好きだった、
もう彼女にとってここはパラダイス。文字通り楽園という訳！

「こッ、これは…おでん缶食べて熱くなっただけなんだから！」

「流石に無理があるっしょ！全然食べてないじゃ――――」

「ガツガツガツガツガツ！バウッ！」

（この女、あれ程のおでん缶を一瞬で……できるっ！）

すでに空となったおでん缶を薫は投げ捨てる（ちゃんとゴミ箱に入りました）
その顔に笑みを浮かべて

「何か…偉そうにしてらっさるみたいだけどさ。アンタはどうなのよっ！」

「えっ！？」

「真志と一緒に住んでるんでしょ？どうなんですかー？
教えてくださーい！」

「えっ！あ…いや、だからその…」

「あれ?あれれ?顔が赤くなってないぃ?」

「こっ、これは……!

け、けほん!けほん!サイダーが気管に入ってむせちゃったからー」

「・・・」

全然信じてない。言葉にしたかのような冷たい視線で美歩を刺し貫く。

「・・・ブァハワァッ!

ゲホッ!ゲホォォォ!オエェエエ!

がはっ!ゴェエホォェ!

む、むぜちゃっだぁ!」

(ちっ、美歩め何て演技をしかけてくるのッ!おそろしい子…)

絶妙な雰囲気になってしまって薫も美歩もこれ以上聞く事が出来なくなってしまった。

美歩はしぶしぶ妥協してアキラと里奈に同じ質問をぶつけてみる。

しかしアキラは表情一つ変えず

「我夢君ですか？

そうですね、私の方が早く生まれたので弟みたいな存在…
でしょうかね。

・・・あれ？どうして泣いてるんですか？」

「いや、ちょっと我夢君が不憫すぎて…」

「？？？」

対照的に里奈は顔を真っ赤にして

「そ！そんなぁ関係だなんて…
亘君は優しくて…頼もしくて…

それから、それから」

「私達にもあんな純粋さが欲しかったわぁ…」

「…達ってやめてくんないかしら」

「「ぶわぁッくしょんっ！」」

「うわ　汚ねッ　顔にかかった汚ねッ！」

ユウスケと真志の口から吹き出た紅茶が司にヒットする。

「いや、ごめん。むせちゃって…」

「噂されてんのかなぁ。あはは」

「いや、ゆるさねぇけど？」『フォーム・ライド――』『バッシャー！』

「あれ？なんで変身して…司君？いや司さん？司様？」

「つ、司？それ人に向けちゃ駄目なんだよ？」

「いや、知ってるけど？」

躊躇い無く引いた引き金、

銃口から発射される水流。

逃げるユウスケ、

真志。

代わりにぶち当たる椿。

「アッー！！」

よく分からない叫び声を上げて、椿は倒れるのだった…

「てかてか、薫！」

「はぁ…まだ何かあるの？」

「翼先生って中々イケメンじゃん？彼女とかいんの？」

「ッ！」

薫の表情が先ほどと一転し、苦々しく曇る。

「え？あ…なんか、まずかった感じ？ご、ごめん…」

「いや…いいの。ごめん、そっか…知らないのよね」

薫は少し迷ったが、口を開く。

「翼さん、婚約してた相手がいるのよ…」

「うぇ！そうなんだ」

「だけど……亡くなったわ」

「あ…」

「・・・」

意識がゆっくりと戻ってくる。ああそうか、すこし眠ってしまったらしい。

まだ、だるい身体を起こして深く息を吸った

（今、何時だ・・・？）

時計が見当たらない事に若干もどかしさを感じる。

皆は戻って来ているだろうか？

それより今日は楽しんで過ごしただろうか？

こんな状況だからこそ彼らには笑っていてもらいたい。

「アギトか…」

今、自分の影は自分であって自分じゃない。
果たして自分はユウスケや亘君の様にこの影と同等の存在になれるのだろうか？

成る程、なかなかプレッシャーが強いもんだ。
よく彼らは耐えられたな…

（ずいぶんと弱気なんだな）

自嘲気味に笑いながらカーテンを開ける。外の空気でも吸えば少しは気が紛れるだろう

「…あれ？」

何か、おかしい。

「海？」

景色がさっきのソレと違っている。
街の中に僕等は転送された筈だ。
なのになぜか今、海がすぐ近くに見える。

「海が…見える、丘」

に、住みたいね

「あ…」

丘の端に、レンガの家が建っていた。まるで、おとぎ話に出てくる様な

「レン…ガ…」

で、家を建ててさ

「っ…いや、そんなまさか」

ドクンッと心臓が跳ね上がるのを感じる。
強くなる鼓動はその答えを知るまで止む事はないだろう。

「・・・・・・」

気がつけば窓から飛び出していた。

靴を履く時間さえ惜しい、走り方すらもうどうでもいいッ、

早く、

速く、

早く速く早く速くッ！

「…まさか、そんな！そんなッ！どうしてッッ！」

レンガの家、

その玄関に置いてあるネームプレートを見て愕然とする。

ありえない、

でもありえている。

馬鹿なッ、そんな、嘘だ。

「小野寺…翼…だとっ？」

自分の名前、ここは異世界だ。

なのに…この家のネームプレートにはその名前がしっかりと刻まれていた。

「ッッ！何でだよぉ」

それだけじゃない。

発狂しそうになる心を抑えて僕はインターホンを押す。

この家に誰が住んでいるのか？

それを早く確かめたくて何度もインターホンを押してしまう。

「はーい！はいはい！」

返事が聞こえる。

ああ、当たり前だその為の機能なんだから…

だけど、

鼓動が、強すぎて、おかしくなる。

あ、扉が…開い…

「あ、おかえり。翼くん」

当たり前の様に、そう言われた。だから僕は…

「ねぇ…先生の婚約相手って…まさか」

美歩の問いに薫は頷く

「先生が婚約してたのは…」

だから僕は…当たり前の様に答える

「ただいま…葵（あおい）」

「空野葵。私の…死んじゃったお姉ちゃん」

第３０話　一喜一憂（後書き）

基本フォームだけなら僕はアギトが一番好きですね。

クロスホーン展開時が特にカッコいいです

ここまでお付き合いありがとう

次回もよろしく！

第31話　一期一会

「どうして…なんで…」

「ん？」

彼女が、一歩近づく

「…めろ」

「どうしたの？翼君」

「やめろ…」

「え？」

彼女、いやそいつが肩に手を置こうとするが、
僕は思い切り振り払う

「やめろッッ！」

「！」

「お前は誰だ！？

私に触れるなッ！

何故彼女の姿に化けている！？

何が目的だ！」

許さない、許してたまるかッ！

彼女は死んだ。

目の前にいるのは彼女の筈がない！

誰だ！

誰なんだコイツは！？

楽しいのか、楽しんでいるのか！？

わざわざ彼女と僕の願いを叶え、こんな家に住んで！

僕を、彼女を！嘲け笑うのかッ！

「とぅッ！」

「ぐわっ！」

だけど返事の変わりに飛んできたのは彼女のチョップだった。

「なになに？漫画のマネ事？帰ってくるなりずいぶんじゃない？」

「えっ…あぁ…」

「ホラ！速く着替えてよ。ご飯が冷めちゃう！あと…」

そう言って彼女は笑う。

「二人の時は、『私』は禁止！」

それは僕が最期にみたのと同じ…笑顔

「君…なのか…？」

「んん？」

「本当にッ！葵…なのか？」

「珍しいね、どうしたの？
いつもはさん付けなのに。

まあ、わたしはそっちでいいんだけどね。ふふっ」

視界が濁っていく。
やめろっ、止めてくれッ…これ以上僕を苦しめないでくれ…ッ

「葵…さん」

「ちょっと、もう止めるのッ！？
たしかにわたしの方が年上だけどさ、たった一歳じゃない！もうっ」

止めろっ、違う。惑わされるなッッ

彼女の筈がないだろっ、彼女である筈がないだろッ、

止めろ、

逃げ出せ！まだ間に合う！

彼女に背を向けるんだ！！速くッ！

「どう…したの？翼君。何か、辛い事でも…あった？」

また一歩、彼女が近づいてくる。

死んだ筈の、

事故でこの世を去った筈の婚約者

動かない。
動けない…今すぐ逃げなきゃいけないのは分かっているのに…

僕の足は、動かなかった。

僕はどうして…こんなに泣いてるんだ…

「わたしはいつだって貴方の味方だから。それを忘れないで」

彼女が僕を抱きしめる。
ああ、彼女の匂いがする。

「葵…さん。

君は、本当に…本当にッ、

・・・空野葵なのか？」

「ううん、違うわよっ！」

「え？」

左手を…押し付けられた。

薬指には、

指輪。

僕が、送った

「小野寺、小野寺葵でしょ！」

そうか…そうだったんだ…

「は…はは」

何も疑う事はなかったんだ、
最初から信じていればよかったんだよ。

ははっ、僕は何をしていたんだろうか、馬鹿馬鹿しい！

「葵…なんだね。」

そっと抱きしめる。

だからそうだっていってるじゃない！

彼女はそういいながら暴れる。

懐かしい、何もかもが愛おしい。

「ただいま…葵さん」

「はぁ…なんなのよ。お帰り！翼君」

やっと僕は彼女に会えたんだ。今はソレを喜ぼう

日が暮れ始め、レンガの家には明るい光が灯る。

そしてソレを見つめるのは二つの小さな影

「愛は人を成長させ」

「愛は人を変える」

「愛は人を夢へと向かわせ」

「愛は人を希望へと走らせる」

「愛は人をいつも見守り」

「愛は人を勇気付ける」

二つの影は時に抱きしめあい、離れあう

「そして」「いつか」

「「愛は人を狂わせる」」

ゼノンとフルーラは、翼の姿を見て静かに微笑んだ。

「兄貴が帰ってない！？」

「う、うん。先生は図書室にいたんだけど…
いつの間にかいなくなってたんだっ」

「危険じゃないか！速く探しに行こう！」

既に良太郎達は翼を捜しに行っているらしい、
司達も急いで翼の後を追おうと、暗くなった外へと飛び出した。

「ん？」

そして感じる違和感。
何がおかしいのか具体的には説明できないが、確実におかしい、
なんだか気持ちが悪い。

「へ、へへっ、ついに正体を現したって所か…」

それぞれは一抹の不安を抱え街へと向かった。

第３１話　一期一会（後書き）

いやね、もしかしたら何も言わずに更新しない日とか出てくるかもしれませんが
どうかお許しください

そう言えばプトティラの歌が出てきましたね。やっぱライダーの歌はテンションが上がりますｗｗ

では次もよろしく！

第３２話　疑心暗鬼（前書き）

明日は更新できないかもしれません

ではどうぞ！

第３２話　疑心暗鬼

司達が行動を起こす前に
既に良太郎とハナの二人は翼を捜す為に街を歩いていた。
しかし誰に聞いても、どこを探しても翼は見つからない。

「見つからないね、良太郎」

「うん…それにぼく達は今
元の身体より縮んでるから…」

「そっか、じゃああんまり遅くなると補導されちゃうのか」

二人はすこし焦りながら翼を捜す。
あまりもたもたしていると暗くなってしまう。二人は足を速めた

「あれ？」

ふと、良太郎はその足を止める。

「どうしたの良太郎？」

「あ…うん。あの人…」

良太郎の視線の先には、一組の夫婦が立っていた。
二人はこちらを向いて微笑んでいる様に思える。

問題はその二人の事を良太郎はどこかで見たと言う事。
ここは異世界なのに…何故？

良太郎は考える。

「え？どこ？だれ？」

「ほら、あそこの人…どこかで見たことが…」

尚も微笑み続ける夫婦、変わらぬ笑顔でこちらを手招きしている。
何故かひどく懐かしい。

あそこへ行きたい、

あの人たちに近づきたい…

「良太郎？ちょっと待って！良太郎！」

ふらふらと微笑む夫婦の所へ足が動く。あの笑顔にもっと…ちかく…

「良太郎ッッ！」

ハナは良太郎の目の前に立つ。しかし良太郎は特に動じる事もなく尚もふらふらと前に進んでいった。

「どうしちゃったのよ！？誰がいるって言うの！？」

「そこだよハナさん…」

同じ微笑、

変わらぬ笑顔。

ハナは良太郎が指差した方向へと目を向ける。

しかし直ぐに良太郎へと向きなおした。

「なに言ってるの！誰も居ないじゃない！」

「え…？」

何を言っているの？
良太郎は不思議そうにハナを見つめる。
当たり前の様に言われたその言葉。
そして良太郎は思い出す…

その、顔を

「父…さん？母さん！？」

「えッ！？」

何故?忘れていたんだろう…
良太郎は罪悪感を覚える。

せっかく思い出したのに…

「良・・・郎!・・・郎」

ハナの声がだんだん小さくなってくる。

行きたい、あそこへ
…優しい、

やさしい両親の所へ…

「良太郎ッッ!」

ハッ、と良太郎は我に帰る。
目の前には涙を浮かべながら自分の肩を揺するハナ。
そのすぐ先には写真と同じ微笑を浮かべた両親。

「ハナさん…」

「良太郎ぅ…ぐすっ、ひっく…」

「ごめん…」

ハナの頭を良太郎は優しく撫でた、
そして同時に両親を見直す。

先ほどとは変わらず微笑み続ける両親。

どうして…どうして彼女が泣いているのに顔色一つ変えないの？

「・・・」

二人は何も喋らない。
そして顔色、いや違う表情を変えていない。

そうか、

良太郎は理解する。

何も喋らないのは、ぼくが声を覚えていないから、

表情を変えないのは

「・・・クッ」

涙がこぼれる。

そうだ、写真でしか知らない両親、

怒った顔、
普段の表情が…

分からない。

そして気づく、周りの人間が全員同じ顔。
両親の顔に変わっている。

なんて、なんて悪趣味な世界なんだッ！

良太郎は悔しくて、
寂しくて、
悲しくて…

涙をこぼす

「な・・・何っ！？」

「!?　ハナさん?」

ハナの様子がおかしい。何かに怯えているのか?
震えだし、その場にうずくまる。

「どうしたの!?ハナさんッ?」

良太郎がハナに触れるが、ハナは相変わらず震えているだけ。
逆に今度はハナの見ている世界が変化を始めたのだ。

「消えないでッ!いやぁぁぁあっ!」

「ハナさん!ハナさんッ!」

「皆、消えるッ!何も残らないッ!
助けて!助けてっ!
お母さん!お父さん!

良太郎!良太郎ッ!」

何度もハナは助けを呼ぶ。

良太郎は彼女を手を握り、彼女の眼をまっすぐ見つめる。

「ハナさん！ぼくはここにいるよッ！消えてなんか無い！」

「ぁ…あぁ、良…太郎？」

ハナはすがる様に良太郎の手を弱々しく握り返す。
周りにはソレを見て微笑む両親達。

…遂に、良太郎の怒りが爆発する。

「酷い…酷いよッ！どうしてこんな事ッ！！」

その言葉に反応して両親達は手招きを止める。

「ぼくの…ぼくの親はっ！

目の前で女の子が泣いているのにッ、笑う人達じゃない！
これ以上ぼくの両親を語るなッ！消えろっ！」

声を荒げる良太郎、その言葉を合図に両親達は崩れ去る。

「・・・君がッ」

崩れ落ちた両親の残骸は、一つにまとまり一体の怪物へと姿を変えた。

例えるなら龍の皮を剥いだ化け物。
骨とむき出しの肉で形成された肉体。

黒く濁った瞳が良太郎を見ていた。

「グォオォォオオォオ！」

竜骨は良太郎に向かって走り出した。
イマジンとは違うグロテスクな外見に良太郎は恐怖を感じる。
しかしこの世界に対する悔しさが、その恐怖を打ち砕くッ！！

「モモタロス！行くよ！」

モモタロスとのコンタクトを試みる。が、しかし

『良太郎か！それがよぉ！ソッチに行けねぇんだよ！』

「っ！どう言う事ッ！」

『この世界じゃ…なんつーかこう！
変な壁みたいなのにぶちあったってよ！』

なんとなくそんな気がしていたが的中してしまうとは…
良太郎は自分の不運さに呆れながら、竜骨の攻撃をぎりぎりでかわす。

「良太郎！？何かと戦っているのっ！？」

ハナには見えていないのか、
その疑問を証明するかのように竜骨はハナに目もくれず良太郎へとまた攻撃をしかける。

「ハナさん！ちょっと離れてて！」

竜骨はその拳を良太郎の頭に向けて放つ。
良太郎は避けない。
避けれない！
直後、バンッと音が響き渡った。

ハナはその音に異変を感じ、良太郎を見る。
既に彼女の見ている世界には良太郎しかいない、周りのものや人々は消滅していた。

「グゴッ？」

竜骨は良太郎の頭を砕くつもりで殴った、
が、しかしその手に感じるのは硬い何か。

『良太郎！こっちはいけるでぇッ！』

『やっちゃえー！』

良太郎は巨大な剣を盾にして竜骨の拳を防いでいたのだ。
その剣にはモモやリュウ達の仮面が張り付いている。

デンカメンソード！

さらに良太郎の腰にはベルトとケータロスがすでに装備されていた。

「ガァアァアッ！！」

竜骨はソレを打ち砕く為に両手を天へ振り上げる。

そのわずかな瞬間を待っていたと言わんばかりに、良太郎はソードへパスを素早く差し込んだ！

「変身っっ！」『ＬＩＮＥＲ・ＦＯＲＭ』

良太郎の背後から
デンライナーの形をした衝撃波が巻き起こり、竜骨の体を吹き飛ばす。

そして、その衝撃波が良太郎に電王の力を与える！
ライナーフォーム。

変身を完了させた電王はソードを構えて竜骨へと走り出した。

「何…コレ…すごぉい！」

どこから出たのか？
教室には回転式の椅子が設置されて、モモタロスたちが座っている。

真由はソレが気に入ったみたいで、チョロチョロと周りを動き回った

「ねぇねぇ…ボクも…座っていい…？」

目を輝かせて真由はモモタロスにお願いする。だが――

「あぁん？だめだめ！あっち行ってな、怪我するぜ！」

「むぅ・・・」

真由は不満そうにしてしばらく何かを考える。

そして…

「じゃ…これで…我慢」

モモタロスの膝の上に腰掛けた。

「いや、どうしてこうなった」

第３２話　疑心暗鬼（後書き）

一応電王組は主軸の本人って事なんですけど
ちょっと設定が違います
いずれちょっとした説明なんか入れようかな

では、次もよろしく！

第３３話　疾風怒濤（前書き）

ライダー関係ないんですけど
なんかこの前テレビでやってたんですが、最近はアニメを見て泣く人が多いみたいですね

どうですか皆さん？なんか泣いたアニメとかありますか？

僕はあんまり泣かないんですけど…それでもやっぱり帰ってきたドラえもんとしんちゃんの大人帝国はやばかったですね

…いや、まあいいですわｗｗすいません。ではどうぞ！

第３３話　疾風怒濤

（気のせいかな…なんか、いつもより重い…）

竜骨の攻撃に特殊能力があるのか？
電王は焦る。もしかしたら攻撃したモノに重力を付加させる力でもあるのだろうか？

だとしたらマズイ。
あまり体力には自信が無い、このまま長期戦を続ければ不利なのはこっちだ。
電王は竜骨から一旦離れ、ソードのレバーを引いた。

ソードに付いている仮面が回転し、ウラの仮面がメインとなる。

『ＵＲＡ・ＲＯＤ』

「おわっ！ちょ！」

「うわぁ…おもしろーい！」

電子音と共に回転する椅子。
真由を膝に乗せたままモモは退場していく。

「ボクの出番かなぁ！」

（あれ？いつもの重さと一緒だ。じゃあ…）

『ＫＩＮ・ＡＸ』

「ちょっと！良太――」

亀、退場

「泣けるでぇッ！」

キン・アックスを構え電王は竜骨に蹴りをお見舞いする。

「ゴォォッ！」

怯んだところにもう一発、さらにもう一発。

「ゴッ！ガッ！ガガッ！」

重々しい一撃一撃は竜骨に大きなダメージを与え、怯ませる。

竜骨の反撃も、避ける事などはしない！

強靭な体で受け止め、さらに豪快な一撃を浴びせた。

「ぐごッ！ガァアア！」

タックルで竜骨は大きく後方へ吹き飛ぶ。
その隙に良太郎はデンカメンソードの仮面部分をチェンジさせた！

『ＲＹＵ・ＧＵＮ』

「いぇーい！行くよ良太郎！」

「ゴガアアアア！」

竜骨は無茶苦茶に拳を振り回し、攻撃を仕掛けた。

だが電王は軽快なステップで竜骨の攻撃をかわし、反撃にでる。
単調な動きしか出来ない竜骨に彼の動きは捉えられないだろう

キン程ではないが、確かなダメージが竜骨にどんどん蓄積されてい

く。

「グギャァアアッ！」

ダメージを受け続けた竜骨は、よろよろと後ずさる。
もうそろそろだろう、電王は止めをさす為、仮面を回転させた。

「おもしろーい！おもしろぉい！」

「おい！危な――――オエッ！」

きゃっきゃとはしゃぐ真由と吐きそうになっているモモタロス。

「モモさん・・・あんた男やで！」

真由が振り落とされない様に必死に掴んでるモモに椿は涙を見せるのであった。

「真由はコーヒーカップが好きなんだ。よかったな真由！」

「そう言うつもりで出したんじゃないと思うんだけど…」

「電車切り！」

「ガアアアアアアアアア！」

ほとばしる一閃、爆発する竜骨と晴れ行く世界。
変身を解いてため息をつく良太郎に、ハナは駆け寄っていく

「大丈夫？良太郎！」

「うん、ハナさんも大丈夫？」

「う、うん。だけどちょっと気になることがあって」

「ん？」

ハナが言うには良太郎が戦っているとき、自分の前に黒いコートを着た男が現れたと言う。

何も無い世界、
しかし男は存在している。

男はハナの世界を見回すと、淡々と話し始めるのだった。

「いいか、何があっても自我を忘れるな。
己を保て、近くにいる人間を忘れるな」

「え？どういう事…？」

「そのままの意味だ。幻想に心を食われたとき、貴様は人間ではなくなる」

話し続ける男の後ろで竜の骨の様な化け物が見えた。

「あ！危ない！」

竜骨は男を殴ろうと手を振り上げた。

ハナは男を助けようと走るが間に合わない！

（ダメッ！）

男が死ぬ。

ハナは最悪の結末を思い浮かべてしまった。

しかし――――

「ゴワァッ！」

「ふん・・・」

「え！？」

男は片手で竜骨の拳を受け止めると鼻をならした。

驚くハナと竜骨、男は素早く裏拳を竜骨に叩き込む！

すさまじい威力なのか、竜骨は大きくのけぞり、もがき苦しんだ。

「こいつ等は食われた奴らの成れの果てだ。

幻想に溺れ、永遠と言う夢の中をさ迷う存在…」

そう言って男は蹴りで竜骨をばらばらに砕く。

男はサングラスをしている為、
表情がよく読み取れない。

しかし、ハナは彼が悲しそうにしているように思えた。
何の根拠も無いのだが、そう確かに感じた・・・

「奴らは死ぬ瞬間も夢の中にいただろうな」

愚かな、そう言って男はハナに背を向ける。

「何者かは知らないが、早々に立ち去れ。ここは危険だ…」

「貴方は…」

ハナの言葉に振り返る事なく男は消えていった。

「――って事があって」

「・・・そうなんだ。
確かに気になるけど…今は、翼先生を捜そう」

「うん…そうだね、多分きっと先生も…」

幻想に、飲まれているんだろうか？

第３３話　疾風怒濤（後書き）

そう言えば今日で一ヶ月ですかね。

…まあ、どうなんですかねｗｗ

これからもこんな感じでやっていこうと思います。

よろしければこれからもお願いします！

第３４話　力戦奮闘

「おい、なんなんだよ・・・なんなんだよコレッ！」

「・・・っ」

ユウスケと薫は、翼を捜している途中、死んだ筈の葵を見つける。
何も変わっていない姉の姿。
無邪気に話しかけてくる葵に、二人は戸惑いを隠せない。

「お姉ちゃんなのっ？」

葵は頷いて薫の手を優しく握った。

「葵さん…」

ユウスケもふらふらと葵の方へ歩いていく。
ああ、良かった、生きていたんだ…
また皆で一緒に…いれ…る

「兄さん…」

「司君！」

「ああ、分かってる」

司、夏美、亘の前には顔が見えない人達が立っていた。
きっとそれは彼らの両親だろう。

顔はもっと近づけば見えるのかもしれない。だが彼らはそれを拒み、否定した。

「あの約束、覚えてますか？」

「ああ、もちろん」

幼い時に両親をなくした彼ら三人は、寂しくて悲しくていつも泣い

ていた。

だが、そんな時に夏美の祖父が一つの約束、誓いを交わしたのだ。

「家族の誓い…だったよね」

「ええ、私達はお祖父ちゃんの子供になる。私達の親はお祖父ちゃんなんです！」

よく分からない理論だが、
昔の司達はそれに満足して寂しさで泣く事は無くなった。

我ながら単純で馬鹿だったなと苦笑する。

「ま、そう言うわけだ」

『カメンライド――』

司は装着したベルトにカードをセットする。

「お父さん達の事が嫌いなわけじゃない。
だけど今のボクらにとっての両親はお祖父ちゃんなんだ。

キバット！」

『了解了解了解っすーっ！』

キバットは素早く亘の元へ駆けつけ、
差し出された手に噛み付く。

『ガブーッ！！』

ビキビキと契約の印が亘の顔に刻まれていく。

亘と司は、顔すら見えない虚構の両親を睨みつけた。

「だからさ…」

「悪いけど――」

「「消えてくれ」」

司の周りに九つの紋章が現れ司に収束し、そして弾けた！

その衝撃はユウスケと薫の世界をも巻き込み、偽りの世界を破壊する！

「え？」

薫の手を握っていたのが優しい姉から竜の骨組みの様な化け物に変わる。

顔も知らぬ両親達が化け物に変わる。

三体の竜骨と三人の仮面ライダー

『アタックライドー――』『ブラスト！』

「ガガガガァッ！」

無数の銃弾が薫と竜骨を引き剥がす。
その間に我を取り戻したユウスケが竜骨に向かって走り出した。
その腰には既にベルトが装着されており、赤い旋風を巻き起こし加速させる

「お前らァア！」

ユウスケは怒りと悲しみの感情を全て右手へと集中させて、竜骨を殴る！
そして変わる。右手がクウガへと！

「人の思いを！」

次は左腕で、殴った部分がまたクウガへと変わる。

「利用するなァァっ！」

「ゴガァアア！」

両足で竜骨を蹴り飛ばす。
それを合図に両足もクウガに

そして間を置かず胴、頭が、全身をクウガへ変身を完了させた。

「変身！」

『カメンライド――』『キバ』

ディケイドの姿がキバに変わり、蹴りを主体とした戦法に変わる。

足払い

そしてサマーソルト。

打ち上げた竜骨へ浴びせる無数の回し蹴り！

「ハッ！」

キバもまた自慢の蹴りで竜骨を追い詰めていく。

もちろん竜骨も反撃を試みるが…

『亘さん！右っす！』

「了解！」

キバットのアドバイスを受け、キバは竜骨の攻撃をかわす。

いや、それだけでは終わらない。

『亘さん！わき腹ががら空きっす！いくっすよ！』

うん、とキバは上段蹴りで竜骨のわきを抉るように蹴り飛ばす。
この二人（？）のコンビの相性は抜群だ。

しばらく三人は肉弾戦で竜骨にダメージを確実に与えていく。

「決めるぞ！ユウスケ！亘！」
『ファイナル・アタックライド――キキキキバ！』

「うん！」『ウェイクアーップ！』

「わかった！薫！」

薫は無言で頷くと、ひとっ飛びでクウガの手に銃として収まる。

つまり、ペガサス！
超変身を行うクウガに恐れを成し、竜骨は背を向けて走り出した。

もちろんそんな事は無駄だ。
クウガはペガサスボウガンを引き絞り狙いを定める。
しかし、まだ発射はしない、狙いをさだめるだけなのだ。

「「ハァアアアッッ！」」

ディケイドとキバの力によって辺りが夜の扉を開く。
巨大な満月が鏡合わせのように出現し、互いのヘルズゲートを開放した。

「グォオオオ！」

「ガァアアア！！」

キバとディケイドに対峙していた竜骨は逆に二人に向かって走り出す。
たしかに気を溜めている二人は隙があるように思えたかもしれない。
しかし竜骨の放ったパンチは二人には届かない。

一瞬で上空に舞い上がった二人はシンクロするように月に重なる。

美しく、幻想的な光景に竜骨達でさえ一瞬動きを止めてしまった。

しかしそれが運のつき、気がついたときにはそれぞれの足が腹部に直撃していた。

『ダークネス・ムーンブレイク！』

「「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッッ！」」

二人はそのまま竜骨ごと蹴り進んでいく！

ディケイドとキバは微妙にずれながらも、向かい合う形で近づいている。

そしてその横には逃走を図った竜骨…

つまり三角形の様に竜骨はならんでいるのだ。それが収束していく。

「今だ！決めろユウスケッ！」

一瞬、三体の竜骨が一直線に重なる。
そこを見計らってディケイドとキバは竜骨から分岐した。
そして同時にクウガはボウガンを発射する！

「ブラストッッ！ペガサス！」

風の弓矢が一直線に重なった竜骨をまとめて貫く！
三体の竜骨は同じ部分に風穴を開け、ばらばらに砕け散った。

「ふざけた世界だ…」

吐き気すら覚える世界だ。
最低なのに最高なモン見せてくれる。
苛立つ心を覚え、ディケイド達は無へと帰った世界を歩き出す。

「むこうの方に明かりが見えます。
何かあるかもしれません、行ってみましょうか？」

「そうだね、ここにいても仕方ないし」

皆はその明かりの方へと足を向けた。

だがッ――

「クッ！」

弾ける様な音がして、ディケイドはバックステップで後ろへ飛ぶ。

見ると、ディケイドがいた所には煙が上がっていた。

もし後ろへ回避しなかったら…

「何だッ！？」

ディケイドは音のした方向を睨む！

「客席と舞台を分けるラインは必要だろう？フフフ」

「お前っ！」

そこにはゼノンが立っていた。

ゼノンは自らの髪と同色の銃を回しながら、ディケイド達を一瞥すると

もう一度小さく笑うのだった

第３４話　力戦奮闘（後書き）

一ヶ月をこえて一日目ですかね

お気に入りしてくれる方や読んでくれた皆さん

どうもありがとうございます

では、また！

第３５話　適者生存（前書き）

すいません明日と明後日は更新できないかもしれないですね

ではどうぞ！

第３５話　適者生存

「お前、どう言うつもりだ・・・？」

ディケイドは周りを見回す。ゼノンが居るという事は…

「文字通りよディケイド！貴方たちは今、所詮観客なのだから！」

やはり、後ろにはいつの間にかフルーラが立っている。

「・・・どうしてめんどくさそうな顔をするのかしら」

「めんどくさいからだよッ！お前ら何の用だ！」

「・・・ひどい」

「ボクの天使をいじめないでくれるかなアホピンク。
蜂の巣にされたいのかい？」

「はいはい、悪かったよ。だから何の用だ？」

「ああ、そうだね。」

ゼノンは銃をディケイドに向ける。

「君達はあそこには行かない」

「・・・」

「貴方たちはあそこには行けないのよ」

ゼノンとフルーラは、くすくすと笑いながらディケイド達を見つめる。

「・・・あそこに先生がいるんだな」

「誰もそんな事は言っていないよディケイド、」

嘘つけよ、目がそう言っている。
しかし二人は相変わらず笑うだけ。それ以上は何も答えない
それに――――と、ゼノンは再び同じ言葉を繰り返す。

「君達は、あそこには行かない。行けない」

その言葉が何を意味しているのか、ディケイド達は理解する。

「あなた達も分かっているでしょう?
あなた達が何をしようが、結局は翼本人が成長しなければならないのよ」

「・・・兄貴は、今…どういう状況なんだ?」

ユウスケの言葉にゼノン達の笑い声が止まる。

「危険かもしれないね、下手をすれば…」

「死んでしまうかもしれないわ」

「!?」

それなら早く助けに行かなければ、クウガは一歩前進する。

そして銃声。

クウガの足元に火花が散る

「ゼノン君!頼むッ、行かせてくれ!兄貴が危ないんだろっ!?」

「悪いがそれは出来ない相談だねクウガ」

「ゼノン君、確かに君がとろうとしている選択はベストなのかもしれない。
でもボクらは人間なんだ。
ベストよりもベターを選びたいんだよ」

「そうだね、キバ。君の言う通りなのかもしれない」

「ワタシ達も貴方達が大人しく言う事を聞いてくれるなんて思っていないわ」

だから――、そう言って二人はニヤリと笑う。
そして素早く赤と青のメモリを取り出した！

『ヒィート！』『トリガァ！』

「「変身！」」

『ヒート・トリガー！』

二人の身体が一瞬で光に変わり、一気にディケイド達の所まで飛んでいく。
そして光は互いに交わると、ダブルの形を成した後、弾けた。

「うっ！」

「力ずくで通ってみるのもいいかもね」

一瞬で移動された為、三人の反応は遅れる。
そこに打ち込まれる紅き弾丸。三人は大きく吹き飛ぶ！

『疾走するは裁きを下す紅の猛火』
「罪を穿つは蒼き銃弾」

ダブルは三人の中心でポーズを決める。

「さあ、ディケイド、クウガ、キバ。ボクらにその力を見せてくれ

！」

ダブルはミュージカルの役者のごとく両手を開きその存在を見せ付ける。
そこにある確かなオーラに三人は少し気圧される。
だがそんな事は言ってられない、翼の身が危ないのだから！

「言われなくてもっ！変身！」『カメンライド――』『クウガ！』
「お願いしますドッガさん！」『いくっすよ！ドッガハンマー！』
「薫！タイタンだ！」『うん！』「『超変身！』」

キバとクウガ、紫の鎧が真紅の弾丸を防ぎながら前進していく。
だが特にダブルに動揺は無い。
尚も弾丸を撃ち続けていく。

「ハッ！」『フォームライド――ドラゴン！』

ドラゴンフォームへ姿を変えたディケイド。

クウガたちの影からひとっ飛びでダブルの眼前へと迫る。

「おや？」

「うらッ！」

いきなり現れたディケイドにダブルは一瞬隙を見せた。
そこにディケイドの蹴り上げが決まる！

ダブルの銃、トリガーマグナムは弾かれ、宙を旋回した後ディケイドの手に収まった。

『フォーム・ライド――』『ペガサス』

ペガサスの力でトリガーマグナムはペガサスボウガンへと姿を変える。
そしてそのままディケイドはペガサスボウガンをダブルへ向けた。

ダブルはやれやれと言ったジェスチャーをとり、両手を上げる。

「おや、武器がなくなってしまったよ」

『大変ねゼノン！』

「俺達の勝ちだな。悪いがそこを通らせて・・・」

『トリガァー！』

「は？」

ダブルは素早くメモリを外し、もう一度ボタンを押す。
そして再びベルトへと差し込んだ。

『ヒート・トリガー！』

「げっ！」

ダブルの体が光り、再びその手にトリガーマグナムが握られる。

「くそっ！」

素早くボウガンを発射するが、ダブルもまた赤き弾丸でソレを応戦する。
矢は炎の弾丸を貫くが、そこにもうダブルはいない。
それだけでなく逆に連射で、カウンターまでされてしまった

「更新できんのかよ…」

「便利だろう？ふふふ」

ダブルは先程と同じくクウガやキバに向けて発砲する。

二人は防御の構えをとるが…

「うわぁっ！」

「くっ…！」

頑丈なタイタンとドッガが赤き弾丸の前に押され始めている。

「ふぅん、６０でも耐えるのかな。
フルーラ、７０に出力を上げてみようか」

『了解よゼノン！』

そう言ってダブルの赤い部分が光る。
ソレと同時に弾丸の威力が上がり、クウガとキバは遂に防御の限界を迎えた。

「ぐわぁ！」

クウガとキバは大きく後ろへと吹き飛ぶ。
しかしディケイドはその弾丸の中を潜り抜け、ダブルの方へと全速力で向かった！

「うらっ！」
「ふん…！」

マイティにフォームライドしたディケイド。
接近戦に持ち込もうとするが、ダブルはヒラリと攻撃を避け反撃の弾丸を撃ち込んでいく。

『ゼノン、長引かせていいのかしら？
電王が加わればワタシ達も楽には勝てないわ』

「ああ、そうだね。
ならさっさと決めてしまおうか？ふふっ」

「くそっ！馬鹿にしやがって！」

ディケイド、クウガ、キバの三人を相手にしながらも余裕を崩さないダブル。
ただ者ではないのだろう。だが、しかし・・・

「・・・ふっ、ふふっ！」

「『？』」

「ふはははは！」

「・・・何がおかしいんだい？ディケイド」

「なにか、気がつかないか？」

「・・・」

いきなり笑い出すディケイド、そしてキバ達に合図を送る。

するとディケイドクウガ、キバ、クウガ。

三人の仮面ライダーが一列に並んだ

第３５話　適者生存（後書き）

はい、と言う訳での３５話でした！
次もよろしく！

第３６話　心頭滅却（前書き）

今日は更新できました
でも明日はきついっすね。すいません
ではどうぞ！

第３６話　心頭滅却

『あぁ・・・なんて事なのかしら』

「え？」

とんだピエロだわ。

そう言ってフルーラは変身を解く、

まだ意味が分かっていないゼノンに耳打ちすると、ふてくされた様に頬を膨らませた。

「はぁ…なかなかやるじゃないか。
君のカードは把握していたけど…」

ゼノンは軽く舌打ちをすると、トリガーマグナムでクウガの眉間をぶち抜いた。

クウガはそのままバタリと倒れるが、すぐにデータの残骸となって消える。

「アタックライド、イリュージョン。

クウガのベルトが君と同じだと気づいた時のボクの気持ちが分かるかい？

まったく、とんだ茶番だよ」

ディケイドは質量がある分身を作るイリュージョンを発動させていた。
本物のクウガ、ユウスケと薫はディケイドとダブルが戦っている一瞬の隙を見抜いて、ドラゴンフォームへと変わる。
そしてそのまま二人のはるか頭上を飛び越えて、翼の所へと走って行くのであった。

「もともとお前らに正攻法で勝てるとは思ってないからな。
悪いけど一芝居うたせてもらったぜ」

「ちっ、やられたよ。ベルトには特に注意していなかったからね…」

でも、いいのかい？
ゼノンは苦笑する。

「ここで翼を助けてしまえばアギトに覚醒するチャンスを逃してしまう。
そうすれば君達は最悪一生この世界で暮らす事になるんだよ」

「いや…それは違うぜ」

「？」

「人は一人じゃ強くなれないんだよ…」

「・・・・・・」

ゼノンとフルーラは、少し複雑な表情を浮かべると

「まあいいや。それもおもしろいかもね」

「ええ、そうねゼノン」

また…いつもの様に笑うのだった

翼は幸せだった。

もう二度と会話すらできなくなってしまった彼女とまたこうして再び笑い合えているのだから。

もう彼は疑わない。

いや、心のどこかで怪しく思うところはあったのかもしれない。

――が、彼はソレを否定する。

もう永遠にこの世界にいたいと思う、

目の前の彼女は今もこうして笑っているのだから、それでいい。

それがいい。

この甘いシロップみたいな世界に魂を浸し続けたい。

それを…望む

「どうしたの？」

「いや、なんでもないよ」

あれから何日が過ぎたのだろうか？

いや

もしかすると一時間も経っていないのかもしれない。

だけどどうでもいい、

彼女がいれば…それでいい。

「本当にそうなのか？」

「！」

否定される世界。

その得体の知れぬ声が僕の精神に突き刺さる。

「・・・葵さん」

「ん？」

そうだ、僕が彼女を呼べば彼女は返事をしてくれる。
それは偽りなんかじゃない、なによりの証拠じゃないか。

「そういえば翼くんってメガネ掛けてたっけ？」

「え…」

トッテモ　ニアウヨ

「……少し、外の空気を吸ってくるよ」

「え？ああ、うん、わかった。気をつけてね」

「お前はそれでいいのか？」

「・・・」

砂浜には名も知らぬ男、いきなり現れて何なんだ…

「なんの…事ですか？」

「とぼけるな。お前も分かっているんだろう？
この世界は偽りで塗り固められた虚構の存在。
幻で人をあざ笑う偽りの救済。つまり、あの女は――」

「違うッッ！」

違う！

違うっ！

違うぅぅッッ！

彼女はそこにいるじゃないか、
なのになんでこの人はそれを認めない！否定する！？

「誰なんですか…貴方は！」

「・・・お前と同じ、幻にとらわれた愚かな一人だ」

男は語り始める。
彼の子供は既に亡くなっているらしい、
しかしその子供にこの世界で出会えたと…

「だがな、気づいてしまったんだよ。所詮は幻、儚く、脆い幻想だと」

「貴方が何者かは知りませんですが、葵さんは本物です…」

「本当に、本当に貴様はそう思うのかッッ！」

「くっ…！！」

男は声を荒げ僕に詰め寄った。
知らない、僕はその手を振り払い背を向ける。

「俺も、俺の仲間も皆幻想に囚われた。
そして残ったのは俺だけだ！
なぜ、なぜお前達はこの幻を否定しない！
なぜ認めてしまうッ！？」

「辛い事からは逃げていればいい！
嫌な事からは目を背ければいい！
人間はそういう生き物なんですよッ！
彼女は本物だ！
それでいいじゃないですか！
どうして否定するんですかッッ！」

光と共にベルトが現れ僕に装着された。

「私は彼女を守れなかった。
でも、でも今度は違う！
私は彼女を守る！守るんです！」

「やめろっ、目を背けるな！お前はまだ間に合う！」

変身――っ

「くっ…」

翼は変身する。

アギト

ではなく

竜骨へと…

第３６話　心頭滅却（後書き）

イリュージョンはカメンライドしていても使えます
ただし、その場合司の精神にかかる負担も大きくなります

と言った感じですかね。
しかし最近暑いっすわ
コレも機関の陰謀なんですかね…

では次もよろしく！

第３７話　愛別離苦（前書き）

台詞の一部なんかは原作から引用したりしてる部分があります
士の説教とかね

名言が多いですよ、本当に

第37話　愛別離苦

「やめろ！」

竜骨に変わった翼を見て、男は叫ぶ。

「今ならまだ間に合う、
だが、そいつに変身し続ければやがて心も身体も食われる事になるぞ！！」

『守る…彼女を…守る…彼女を…
僕はどうなってもいいから…』

男の声を聞いても尚、竜骨はふらふらと男の方へ歩いていく。
虚ろな瞳で一体何を見ているのだろうか？

男は歯を食いしばる。また駄目なのか？

一体何度この繰り返しが続くのだろうか？

結局誰も幻想からは抜け出せないのか？

「ふざけるなッッ！お前の命はお前だけのモノかッ！？」

男は弱気になった自分と、なにより竜骨に向けて言い放った。
そして…ピタリと、竜骨は足を止める。

「お前がここで永遠に夢の中を彷徨うのは勝手だ。
だがそれを悲しむ奴がいないのかと聞いたんだ！」

「・・・・・・・・」

「答えろォオオオオオオオ！！」

鈍る思考の中、ユウスケ達が脳裏を過ぎる。

そしてあの日、葵が死んだ日を思い出す

綺麗な顔を涙でぐしゃぐしゃにしながら薫は翼にメガネを差し出した。
それは事故で亡くなった姉のモノ。
薫はせめてもの形見にと翼にそのメガネを送ったのだった。

正直、彼女の後を追う事も考えた。
だが、そのメガネを受け取った瞬間、その考えは綺麗に消え去る。

今、目の前にいる彼女に、そこにいる弟の為に

「あ…」

そして今、視線の先に見つけたのは…

「兄貴！」

「翼さんっ！」

ドクンッ！

「兄貴！何やってるんだよ！
そんな姿になって何やってるんだよ！！」

竜骨と化した兄に向かって、ユウスケは力いっぱい叫ぶ。
何故翼があのような姿になっているのか、理由は分かりきっていた事。

しかし、ユウスケは叫ぶ

「帰ってきてくれよ！兄貴ぃッ！

おれ兄貴に期待して裏切られたこと一回もないんだ！
兄貴はおれの憧れなんだよ！

だからこんな所で終わらないでくれよっ！」

「帰ってきてよ翼さん！
ここで諦めたら絶交だから！
人間としても見ないから！

幻想を打ち破るなんてサルでもできるんだからッッ！」

泣きそうになりながらも薫は叫ぶ。

「ねえ、どうしたの？帰ろうよ」

後ろから声がして振り向くと、葵さんが僕を迎えに来てくれていた。
僕は彼女に微笑みかけると、一歩・・・

後ろに下がる

「ねえ、葵さん」

「ん？」

「君は…僕の光りだった」

「え・・・ちょっとどうしたのいきなり」

「どんな暗闇でも君がいれば僕は道に迷うことはなかった」

「・・・・・」

「僕も…きみの様になれると思うかい？」

葵さんは何も答えない。

しかし構うことなく僕は続けた

「僕は…今、本当に形だけだけど彼らの引率者なんだ。
もし彼らが迷った時に…
僕が少しでも力になれたら、それはとても素敵な事だとは思わないかい？」

「・・・」

「それが僕の夢なんだ。
でもさ、それじゃあまず僕自身がしっかりしないとね」

軽く笑ってみせる。彼女もすこし微笑んだ

「僕は…君に甘えてたのかもしれないよ。
でも、さっきの言葉で分かったんだ。
僕はもう充分君に甘えた。
だから次は僕がユウスケや薫ちゃん、司君達に甘えられる存在にならないとね」

また一歩、彼女から離れる。
彼女は何も言わずに微笑むだけ…

「僕は君の死を受け入れられない。
君にまだすがりたい、一緒にいたい。
でも駄目だ。
嫌なことや辛い事から逃げていたい。
でも、それでも人間は進まなきゃいけないんだ」

ベルトから暖かい光りがあふれて来る。
僕は彼女に背を向けて歩き出した。

「…ありがとう、葵。
君とまた話せて嬉しかったよ」

「・・・」

はじめて会った時は引越しの挨拶だったかな。
隣って事もあってユウスケと薫ちゃんはすぐに仲良くなったけど、
僕らは少し恥ずかしくてあんまり話せなかったっけ？

立ち止まりそうになる足と心、しかしそれでも歩かなければならない。
振り返ってはいけない

それから、何度も会ううちに、仲良くなって…そして

「・・・ありがとう」

内ポケットには指輪が入っていた。

彼女に送るはずだった…その指輪が

「がんばってね…」

ふと、後ろからそんな言葉が聞こえた。

僕にもできるかな、皆を照らす道しるべに

「さよなら、葵」

『すみませんでした…』

「お前！まさか」

竜骨は「その」構えをとり、ゆっくりと手を前にかざした。

『…変身！』

天が割れ、一筋の光が竜骨を照らす。

直後、その体が光り輝き、仮面ライダーアギトへと姿を変えた！

「兄貴！」

「翼さん！」

「ユウスケ、薫ちゃん。心配をかけたね。でも、もう大丈夫だよ…」

それに――――

アギトは薫を見る。

「サル以下は嫌だからね」

「・・・！

うん！最高よ義兄さん！」

薫は涙を浮かべて微笑んだ。

そしてアギトは黒いコートの男を見る。

男は、嬉しそうとも悲しそうとも取れぬ笑みを浮かべる

「幻想を打ち破ったのか・・・」

「はい。いろいろすみませんでした。
ただ気づくだけなのに…

貴方に言われるまで僕は…

貴方も――」

「・・・それは、この世界に決着をつけてから聞こうか」

男は小さく笑って姿を消した。

「・・・そうですね」

アギトは天に手をかざす。

すると、太陽は眩いオレンジ色の光を放ち、彼に新しい姿を与える！

アギト・トワイライト。

それは司ですら知らないアギトの姿だろう。

この幻想の中を切り裂く、橙の輝き。

すべての幻、偽りを破壊する天の力！

「・・・」

アギトの目には真実が映し出されていた。
この世界の幻影を全て取り除いた世界が――

そして、見つける。

この世界の心臓を！

「ふッ！」

アギトはベルトの中心から弓を出現させる。
トワイライトアロー、それをアギトは構え、発射した。

『ガァッ！！』

矢はアンノウン、

ピーコックロード・バーボス・ミラージュに突き刺さる。

それをきっかけに幻の世界は崩れ、真実の世界がさらけ出されたのだった。

第37話　愛別離苦（後書き）

と、言う訳でオリジナルフォームの登場でございます。

アギト・トワイライト

基本カラーは黒とシルバー。
眼は黄色でクロスホーンは常時展開し、オレンジ色に染まっております

能力は簡単に言うと
まずこのフォームになると自分が受けた状態異常を無効化します
毒とか、拘束とかが解かれる訳です
さらにこのフォームの変身を妨げる事はできません

そして相手の幻術や高速移動なども理解でき、相手と同じフィールドで戦う事ができるようになります
クロックアップの攻撃が通常速度に見えたり、ミラーワールドにも入れちゃいます

ただし弱点としてはとにかくステータスが低いです。グローイングフォームと同等といった所ですかね

とまあこんな感じのオリジナルフォームでした。これからもオリジナルフォームが登場するんで暖かい眼で見てやってください（爆

では次もよろしく！

第３８話　一日千秋（前書き）

平成ライダーにハマるきっかけを与えてくれたのがアギトの映画でした

ではどうぞ！

第３８話　一日千秋

「・・・っ、こんなに狭かったのか」

ガラスの様に世界が砕け散った後、そこに残ったのは何もない砂漠。
そこにバーボスミラージュとディケイド達がいる。

あれ程離れていた筈なのに…

「結局はこの世界は幻影だけの世界だったと言う事か。
街さえも幻だったとは…」

「先生！アギトになれたんですね！」

「お、俺の知らないフォームだ…」

ディケイド達はアギトに掛けよる。

「・・・」

「うふふ、どうやら司の言う事も一理あるわね」

「ああ、そうだねフルーラ」

ゼノンとフルーラは翼がアギトになった事を確認すると、砂のオーロラに消えていった

『何故だ・・・ッ！何故この世界を否定するッ！』

バーボスミラージュは矢を引き抜き、アギトに問いかけた。

『お前達人間はいつも間違ってばかりだ！
だが、この世界にいればいつまでも幸せに暮らせる。
そしてすぐに永遠の安らぎである死を迎えられるのだ！
なのに！何故それを拒むッ！』

「確かに、君の幻に浸れれば幸せに最期の時を迎えられただろう。
だけど覚えておいて欲しい、人間の幸せは個人の問題じゃないと」

そう言ってアギトはユウスケと薫、ディケイド達を見る。

「僕・・・私達には守るモノがある。
君には悪いけれど、ここを去らせてもらうよ」

『やめろ！人間は間違える！間違え続ける愚かな生き物だ！』

バーボスミラージュは自らの羽を刃に変えて、発射した。
いきなりの攻撃にアギトは防御が遅れる！

「くっ！・・・・ッ！？

司君！」

羽はアギトに刺さる事はなかった。
全てディケイドが受け止めているから！

「間違える事の何が悪い…っ！」

『何っ？』

「人間は痛みを知らなければ成長する事はないッ！
痛みを知らなきゃ痛みを理解する事もできない！

確かにお前の世界にずっと入れたら幸せかもしれないさ、
でもそれは結局自分だけの幸せでしかない！

人は他人と関わる事で良くも悪くも成長するんだ。
他人を幸せにする事も人間には必要なんだよ。

お前はそれを愚かと言うのか！？」

『当然だ！お前達はいつまでも幻想の中にいればいい、
夢の中で暮らせば良い！
永遠に幸せでいられるのだから！』

「それが違うって言ってんだよッ！
人間は誰だって幸せになりたいさ、幸せに暮らしたいさ！
だけど現実はそうじゃないんだよ、でも皆生きてる！
何かの為に必死で生きてるんだよ！
俺達も、俺達の世界のために！
ここで止まる訳にはいかないんだッ！
守りたい人がいるんだよッッ！！」

『守るために傷つく？
人を幸せにする？
愚かなッ！
お前達人間はいつまでも夢の中で生きていれば良い！
成長などしなければいい！』

「そうだね…愚かだよ。いつまでも亡くなった人間にすがって…」

だけど、と。アギトはグランドフォームへチェンジする。

「大切なモノの為に戦い」

ユウスケはクウガに変身する。

「友達の為に戦い」

キバ、ディケイドもまたバーボスミラージュに向かって構える

「時に間違え、時に迷う。それが・・・」

『ファイナル・フォームライド――』

「人間と言う、愚かな生き物なのさ」

『アアアアギト！』

アギトの体が光り、アギトトルネイダーへと変化する。

ディケイドはそれに飛び乗ると、さらにカードをライドさせた。

『ファイナルフォームライド――キキキキバ』

キバアローを構え、ディケイドはアギトトルネイダーを発進させる。
風を切り裂くそのスピード！

『理解できぬかッ！ならば永遠の安息を！』

次々に襲い掛かる羽を楽にかわす小回り
アギトトルネイダーは猛スピードでバーボスミラージュに迫る！

『全ての人間に永久の楽園をォオオオオオオっ！』

『ファイナル・アタックライド――キキキキバ！』

「やぁァアアァアアアアアァアッッ」

迫り来る無数の羽を貫き、キバアローがバーボスミラージュを捕らえる。
しかしそれでもバーボスミラージュは人の永遠たる安息を説き続けた。

「お前の幸せは……」『ファイナルアタックライド――』

辛すぎる

『アアアアギト』

アギトの紋章が目の間に現れる。
その紋章を通過すると、アギトトルネイダーは金色の光に包まれた！

『「うおおおおおおおおおおお！」』

『ギャァアアアァアアアアッ！！』

そしてそのままバーボスミラージュを吹き飛ばす。
美しい羽根を撒き散らせ、バーボスミラージュは地に伏した。

『何故…何故幸福を…否定す…る？』

「俺は破壊者だ。だからこそ、この幻を破壊する」

『なら…ば…答え…ろ！お…前の幸…せ…とは…なんだ？』

「そんなもん…分かるかよ。だから探すんだよ、俺達の世界でな…」

「君は…」

アギトはバーボスミラージュに手を差し伸べる。
保健室の治療器具を使えばまだ助かるかもしれない。

「君は何故、人に幸福を与えるんだい？」

『理由か、それは…儚き夢…叶えたい…願いも、
成就…したい望…み…も…あった…だろうに

……少女は…幸せに…な…れ……』

バーボスミラージュは訳の分からない事を言う。
そしてその手を振り払い消滅した。

アギトはその手を強く握り締める。

勝利の余韻も、喜びすらない、ただ存在するのは虚しさ。

「こんなに…虚しい勝利は初めてだ」

変身を解いた司は、静かにそう呟いた。
そんな司の肩を翼は優しく叩く。

「帰ろうか、もうこの世界には…」

翼は何もない世界を見回す。そう

『翼くん！』

何もない世界なのだ。

「この世界には、何も・・・
誰もいないんだから…」

翼の頬に一筋の雫が流れたのだった。

「貴方は、これからどうするんですか？」

「そうだな、もうこの世界で迷う人間もいないだろう、俺の役目は終わった」

「役目・・・ですか・・・」

「ああ。少しでも我を取り戻してくれる奴らがいればとな…だがまあ結果としては…散々だったんだが」

何もない世界で二人の男が立っている。
翼と黒いコートの男

「想う心が強ければ強いほど幻影はソイツを捕らえて離さない。皮肉な話だ」

「・・・・・・」

貴方はどうやって幻想を――

翼はその言葉を口にするのを止めた。
彼もまた自分なりの決着をつけたんだろう。
それを自分が知ってどうとなる事でもない。

「何、どこかまた新しい世界へ…旅立つさ。
俺達の旅はここで終わったが、俺の旅はまだ終わってないからな…」

「やはり・・・貴方は」

お前も薄々気がついていたんだろう?
そう言って男は笑う。

翼は申し訳なさそうに微笑み返すと、深く頭を下げた。

「お願いがあります」

「ん？なんだ？」

翼はベルトを出現させた。

「一度、手合わせを・・・お願いします。先輩」

「ははっ…」

男は困った顔をしながらも、翼の前に立った。

「いいだろう、見せてみろッ！」

光りと共に男の腰にもベルトが出現した。

二人はそれぞれの構えをとり、対峙する。

「貴方の名前を教えてはくれませんか？」

「ふっ、名前などもう忘れたさ」

男は一体どれくらいの間、この世界で人を見守り続けたのだろうか？
名前も忘れるくらいの時間。もはやそれは途方もない世界

「だが・・・」

「「変身！」」

二人は変身する。アギトへと！

「俺も不完全だが、一応はアギトだ。
そうだな、お前とは違うアギト・・・」

男は笑う。

名前を決めた事にか、それとも…

この世界から解放された事へ…なのだろうか？

「俺の名はアギト！
仮面ライダーアナザー・アギトだッ！
行くぞ！アギトォオオオオッッッ！！！」

「うぉおおおおおおおおおおおおッ！！」

悲しき世界で、二人のキックがぶつかり合った。

「やはり・・・彼は強いね。負けてしまったよ」

「兄貴…」

校庭で待っていたユウスケに微笑みかける。

「次は拓真君が選ばれたんだって？
僕も協力するよ。きっと彼も大丈夫さ、ちゃんとファイズになれるよ」

「・・・ああ。そうだな！」

翼はメガネに触れる。度が入っていないそのメガネ。

「割り切れるわけ…ないじゃないか…」

翼は優しく、悲しく微笑むと、皆の所へ歩き出すのだった。

第３８話　一日千秋（後書き）

アギト編は次の番外編でラストです。
そう言えば総ＰＶが１００００を超えました
見てくださっている方、どうもありがとうございます

では次もよろしく！

第３９話　番外編　相思相愛（前書き）

今回は補完シナリオみたいなモノです
あとすいません。次の試練の整理の為、すこし更新をお休みする…
かも

ではどうぞ！

第３９話　番外編　相思相愛

ユウスケが八歳になる頃、僕達は親の都合でこの町に引っ越す事になった。

「・・・はぁ」

「どうしたんだよ兄貴ぃ、元気ねーぞ」

そりゃそうだよ。
嫌に決まってるじゃないか引越しなんて・・・

いやユウスケはまだいいさ。小学校ならすぐに馴染めるだろうよ。
でも僕はもう中学二年なんだ、

友達できるかな…

いじめられないかな…

気が重い…

まあ今にして思えば思春期独特の悩みとかもあった訳で…
とにかく不安しかなかった。

ユウスケはそんな事もないのか、
新居を駆け回り怒られる。ちょっと反省してまた駆け回る。その連続

（うらやましいよ、ユウスケが…）

憂鬱だよ…本当に。
そう思いながら僕は部屋へ向かった。

しばらくして隣の家に挨拶に行って来いと言われた。
本当はそんな事したく無かったけどどうせ反抗しても無駄なんだろう。大人しくユウスケを連れて外に出て行く。

右隣の家には老夫婦が住んでいた。
なんでも孫が6人もいるらしい、しばらく無駄話をして適当な所で切り上げる。
まあ変な人じゃなくて良かったよ。

トラブルは避けたいしね

「兄貴おれ退屈ぅ」

「そう言うなよ、もうすぐ終わるから」

左隣の家のインターホンを鳴らす。
どうにも自分はメンタルが弱いらしい、誰が出てくるかドキドキしながら待つ。

怖い人だったら嫌だなとか、誰だってあるだろ?

そんな事を考えていると、扉が開く。
大丈夫、ティッシュ渡してさっさと消えよう。

そしてもう関わらなければいい。うん

「はぁーい!」

「あ…」

扉からユウスケくらいの女の子が出てきて、こちらに走ってくる。

「どちらさまですかぁ?」

「ああ、あの…えっと、隣に引っ越してきたんですけど。
お父さんかお母さんはいるかな?」

「ううん。今はお仕事、お姉ちゃんならいるよ。呼んでくるね！」

「あ！ちょっと！」

女の子は僕が何も言っていないのに姉を呼びに行ってしまった。

「はは…なかなか元気な子だね…」

「ふぁあああ」

ユウスケは興味が無いと言わんばかりにあくびで返す。

「呼んできたよー！」

少しして女の子が戻ってくる。

別にこっちはただ挨拶とティッシュ渡せればそれでいいんだけど…

「あの…」

家の中から僕と同い年くらいの女の子が出てきた。
妹と同じポニーテールの女の子だった

・・・参ったな。あんまり女の子と話した事ないんだけど

思春期と言う事もあってか、中一の時からどうも女の子とうまく話せなくなってしまった。
目が合わせられないというか…

（情けない…）

突発的に目を反らしてしまう。
小さい女の子は胸を張って、僕達の前に立った。

「私、空野薫っていうの！よろしくね！」

「あ・・・う、うん。よ、よろしく」

手を掴んでぶんぶんと握手する。
なんだか恥ずかしくなって目を反らすと、今度は姉の方と視線がぶつかってしまった。

「あ…」

「…あっ、あの！私、空野葵です！」

「あ！えとっ、小野寺翼です！」

直立する。僕達…

「あっ、あの…コレ！」

なんだか緊張してしまって声が震える。
情けなくて死にたくなるが、なんとかティッシュを彼女に渡す。
彼女もまたぷるぷると震える手でそれを受け取りお礼を言った。

「・・・」

「・・・」

何も…しゃべる事がない。

いよいよ気まずくなったので帰ろうとユウスケを見るが…

「げっ！」

「あっ！！」

ユウスケ…お前…

「おー。白だ…」

あれだけ…しんちゃんの真似はするなと…

「きっ、きききき…」

ユウスケは薫ちゃんのスカートをめくり、じっくりと観察していた。

終わった、何かいろんなモノが終わった。

「きゃあああああああああ！」

「ドゲブッ！」

薫ちゃんは回し蹴りでユウスケを吹き飛ばすと、赤面しながら走り去っていく。

あああああ最悪だ！
いやもう最低だ！

いきなり隣人との関係が終わる！
さよなら、新しい土地での生活・・・

「ユウスケ！謝ってこい！今すぐに！」

「えぇ？お、おーう！」

薫ちゃんを追いかけてユウスケも走っていく。
うまく許してくれればいいが…

「あ、あの…本当にごめんなさい！家の弟が最低な事を」

「え!?あ！あははは、まあ小学生なんだからしょうがないよね」

そう言って葵さんは笑う。

（かわいい…）

「・・・・・・」

はぁ…何を考えてるんだ僕は。どうせ彼氏とかいるんだろうな

でも、なるべくなら彼女に嫌われたくはない。
変な事してしまう前に僕も消えようかな…

「じゃあ…僕はこれで。あのっ、本当にごめんなさい」

「あ、ううん。

その…また、いつでも来て下さい！お茶、ご馳走しましゅから！」

赤面していく彼女、僕は彼女が噛んだ事に気づかないふりをしてユウスケの後を追う。
大丈夫だろうか？なんか、心配になってきた…

「・・・・・・」

思っていたより余程早く二人を見つける事ができた…のだが…

「・・・・・・」

公園。二人は夕日をバックにガッチリと握手を交わしていた、
ちょっと…あ、いや、かなりボロボロになっているユウスケが気になるが、二人は笑顔で友情の誓いを交わしている。

どう言う状況なんだよ…

まあでも、険悪な雰囲気じゃないだけよっぽどマシか

「薫ちゃんゴメンね。ユウスケが変な事して」

「ううん、大丈夫！私達もう友達だから！ね？ユウスケ！」

「・・・・・・・・・うん」

「そ、そうなんだ。それは良かった」

「うん！あ、もちろん翼さんも友達よ！ね？ユウスケ！」

「・・・・・・・・・・・ああ」

何があったかは聞かない方がいいだろう。
もはや明確になった薫ちゃんとユウスケの上下関係を感じつつ、僕らは家路へと向かうのだった

まあ、どんなに嫌がっていてもその日はやってくる訳で…

「小野寺翼です・・・その、よろしくお願いします…」

不安と緊張でどうしても、うつむいてしまう。
クラスメイトの視線がキツイ…

空気が重い・・・

「ははっ、そんなに緊張しなくても大丈夫。
皆、よろしく頼むぞ！ははっ！」

「「「「「はーい！」」」」」

「え？」

初老の教師の一言で教室の空気が一気に明るくなる。
不思議に思いながらも席に着くと、隣の男の子が話し掛けてきた。

「よぉ転校生！俺、火川　涼。よろしくな」

「あ、うん。よろしく」

「お前運がいいよ。
この学校で一番人気、倉本先生のクラスになれたんだからよ」

そう言って火川くんは笑う。

「ここ…人気なんだ？」

「ああ。倉本先生ってなんか不思議な雰囲気があってさ、
クラスの空気も明るくなるんだよ」

「へぇー…そうなんだ…」

火川くんの言うとおりだった、それからはまさに順調そのもの。
三日経ったがクラスにも大分馴染める事ができたし、
僕が想像してたよりずっとうまくいっている。

「なっ、言ったろ。あの倉本先生のクラスはマジでスゲーんだ」
ラーメンに大量のコショウを振りかけながら火川くんはそう言う。

「うん…すごいね」
すごい。普通にそう思う。というか憧れる…

僕も、あんな教師になりたいな

「あ、そう言えばさ。翼部活は決めたのか？」

「あ。忘れてた。どうしようかな…」

「俺サッカーやってんだけどさ。
ウチの学校体力に自信なかったら運動部は止めといた方がいいぜ。
顧問の奴ら全員がそりゃもう鬼で鬼で！」

「そ、そうなのか…」

うーん。別に運動が苦手ってわけじゃないけど…

「文化部はどんなのがあるの？」

「あー…まあそうだな。人気なのはやっぱ美術とか…吹奏楽とかだな」

うーん…別に嫌いじゃないけど…

「反面、家庭部はやべぇな」

「家庭部？」

「おう、部員が一人だけなんだよ。三年のな、
このままじゃあと一ヶ月くらいで廃部だ」

「へー。どんな事やる部活なんだい？」

「ん？ああ、何かいろいろやってるみたいだけどな。
野菜作ったり、服つくったり。

どうだ？お前が入れば廃部にはならないぜ。やってみるか？」

「えぇ！？う、うーん…」

正直あんまり興味ないなぁ…

「まあ、…うん。

そうだな。今日じっくり考えてみるよ」

「そうだな、そうした方がいいぜ」

そう言って僕らは別れた

「あ…」

家の前までくると、隣の家の庭に葵さんの姿が見えた。
そう言えば葵さんはどのクラスなんだろうか？

一緒じゃないのは少しだけ残念だった…かな

「・・・」

何やら葵さんは深刻な表情で花に水をやっていた。
悩み事でもあるのかな…

「・・・ッ」

声をかけてどうにかなる訳でもない、まだそんなに親しくないんだ。
僕は大人しく家へと戻った。

次の日、僕は家庭科室の前に突っ立ていた。
どうも昨日火川君に言われた事が引っかかる…

お前が入れば廃部にはならないぜ

「あんな事言われちゃなぁ…」

正直、あんまり興味は無いから少し見学して帰ろうかな…

でも入るのもなんだかな…

そんな感じで迷っていると、向こうからドアが開いた！

「あっ・・・！」

「わぁっ！」

「「え？」」

そこから出てきたのは…

「あ、あの！葵さんっ？」

「あ…あぁ！つ、翼くん！」

僕らは互いに見つめあったまま固まってしまう。

「あ・・・えと！どうしてここにっ？」

しばらくして葵さんが口を開いた。僕も慌てて理由を説明する。

「え！そうなの！嬉しい！」

「え・・・？」

「私なの、ここの部長！」

先輩…って事は年上だったのか！

「あ！すっ、すいませんでした！僕、先輩だとは知らずに！」

「あ、いやいや！いいよっ、大丈夫」

葵さんの表情が明るく輝く。

・・・ちょっと、待て。

何かやばくないか？これはまさか…

「入部希望って事でいいんだよね！？」

ほらキタ！

やばい！

適当に見学して帰るつもりだったのに！

こんな嬉しそうな顔してる彼女になんて言えばいいんだ！？

「助かるよ！もう私一人じゃ限界だったの。

でも翼くんが入ってくれるなら――」

「あ、あの先輩！」

「うん？」

断るなら今しかない！今ならまだ間に合――

「・・・どうしたの？」

「入部…します」

断れる訳ねぇよ…

「ッ！　うん！本当にありがとう！翼くん！」

「は、ははっ！ははは……はぁ…」

まあ、いいか。葵さんが喜んでくれるなら…

その日から僕と葵さん。二人だけの家庭部が始まった。
顧問の先生すら始めと終わりにしか顔をださない過疎っぷり。

若干これからの事に不安を抱きつつも、
もう入ってしまったんだからしょうがない…

「いてっ！」

「あ！大丈夫？」

余計な事なんて考えるモンじゃないな…

針で指を刺してしまった。
別にたいした事ないけど、葵さんは心配そうにオロオロとしている。

「別に大丈夫ですよ。続けましょう」

「う、うん」

今日はティッシュの箱に被せるカバーを作っていた。
まあつまらなくは無いからいいかな。

むしろこう言う事は嫌いじゃない。人と競わなくていいし

「イデッ！」

…だけど、どうにもこうにも不器用なのか？
さっきから何回も指に針を刺してしまう

「翼くん血が出てる！」

「あぁ、いいんですよ。
それよりゴメンなさい、僕センス無いみたいですね。あはは…」

「ううん、誰だって始めからはうまくできないよ。大丈夫だから」

そう言って葵さんは可愛いキャラクターが印刷されている絆創膏を取り出す。
そして遠慮する僕を無視してそれを指に巻いてくれた。

「すいません…」

「ううん、大丈夫だよ」

そう言って笑う彼女。
絆創膏まで貰ったんだからこれ以上失態は晒せないな…

「いっつ…」

ほらこれだよ…現実って厳しいな…

「ああ！兄貴ー！なんだよそれ！」

「ん？ああ、作ったんだよ」

「へぇー」

あれから二日かけて僕はその歪な作品を完成させた。
正直、葵さんが作ったものより百倍くらい酷い出来だったが、
彼女はうまいねと誉めてくれたので…まあ良しとしよう
まあお世辞でも嬉しかったな

「・・・薫ちゃんとは仲良くなってるか？」

「おお！今度遊びに行くんだー！」

「へぇ。失礼のないようにな」

「おお！」

まあそう言うのは子供の特権だよな。

「先輩はどうしてこの部活に？」

「あーうん。そうだなぁ…」

家庭部に用意された小さな畑、そこに実ったトマトを収穫しながら彼女は腕を組む。

「こう言うのが好き…だから？」

「へぇ。そうなんですか」

「…翼くんは？こう言うの好き？」

「ええまあ、最近楽しくなってきました」

「…ふふっ、よかった」

ちらりと彼女を見る。トマトを見る彼女の顔はとても優しかった

「先輩は…優しいんですね」

「えっ？」

あれ…？
やばい、何を言ってるんだ！

「あ！いえ…その…ッ」

「あっ、あははは！やだなぁお世辞がうまいんだから！」

恥ずかしくなって赤くなる僕たち。しばらく沈黙が続く…

「あの…」

「あ、はい！」

しばらく黙々と野菜を採っていたが、葵さんが口を開く

「翼くん・・・

本当は・・・その、他に入りたい部活とか、あったんじゃない？」

「え？」

「ほら、この部活って…正直あんまり男の子に人気ないし…翼くん無理してるんじゃないかって…

もし他に入りたい部活とかあったら――」

「楽しいですよ」

「え？」

「すごく…楽しいです。だから、やめません…」

「え…あ…う、うん！あ、ありがとう…」

彼女は嬉しそうにまた野菜を採る。

楽しい…？

そうだな。ああ、楽しかった。

「あにきーっ！」

「わ！」

いきなりユウスケが僕の部屋に飛び込んできた。

おかしい…

コイツは確か薫ちゃんの家に遊びに行くとか言ってたのになんで…

「お前っ、遊びに行くんじゃ…」

「兄貴もいこう！さあ！早く！」

「おいっ！って、ちょ！」

ユウスケは僕の手を掴んで強引に家をでる、そして彼女の家に向かった。
ちょっと待ってくれよ！心の準備が！

「あ…」

「あ…」

そのままズルズルと引きずられ、遂に彼女の家に上がりこんでしまう。
当然彼女もいる訳で…

私服の彼女を見るのは久しぶりで、なんだか新鮮だった。

「あのっ…その、お！お邪魔しましゅ！」

「え！あ！どっ、どういたしまちゅて！！」

「「・・・・・・・」」

互いに真っ赤になってうつむく。
なんて恥ずかしいんだ…

「ほら！どうしたの！お姉ちゃん！翼さんが来たのよ！」

薫ちゃんがジュースを持って出てくる。

「お姉ちゃんってばユウスケが来たときにキョロキョロしてて、
どうしたのかと思ったら翼さん探してたんじゃない！」

「だから連れてきた！へへっ！」

「ああ！いや…その！それは！」

「んもう！
そんな事だから今まで一度も男の人と付き合った事ないんでしょ
！」

「ひゃぁぁぁあ！？」

さらに赤くなる葵さん。
ユウスケ達はもう僕らを放っておいてゲームで遊んでる…

「あ…あの…先輩？」

「・・・・はい」

「皆で…人生ゲームでも…しましょっか？」

「・・・・はい」

その後もしばらく彼女は真っ赤なままだった…

先輩、彼氏いない…のか…

「兄貴、何にやけてんだ？」

「っっ！」

いや、気をつけないとな…ハハハ

「最近さ、兄貴家の庭で野菜つくってるんだよ」

「お姉ちゃんも最近翼さんの話ばっかり！」

二人がうんざりする中も、
僕と葵先輩はずっと菜園だの裁縫だのと盛り上がっていた。

あの日から頻繁・・・とまではいかないが、
僕も先輩に会いに家に行くようになっていて、部活も素直に楽しいと思えるようになっていた。

もちろんそれは葵先輩がいるから…というのもあったが…

二人だけだったけど、僕達はいろんな事をした。
日によっては何もせず、ただ喋るだけの日もあったが、それはそれ

でとても楽しかった。

月日が経つに連れて、僕らの交流も深くなった。
ユウスケと薫ちゃんに付き合っていろんな所にも行ったっけ。
プールとか映画とか…

クリスマスとか、バレンタインで
葵さんからプレゼント貰った時は嬉しくておかしくなりそうだったよ

「もう、翼くん。こんなクリスマスの日に彼女といないなんて駄目だよっ！」

「葵先輩だって！」

「…ふふっ、そうだね」

「あはは…」

寒くてどうしようもない日だって、二人で寄り添えば不思議と暖かかった。

「あああああ！急がしーっ！」

「どうしたの？最近いつもそんな感じじゃないか」

火川君は一味唐辛子を大量にうどんに投入する。

「いやほらよ、もうすぐ三年いなくなるじゃん？
まあ一貫性だから別にお別れって訳じゃねぇけどよ。
ウチの学校って高等部と中等部で部活完全に別れてるっしょ？」

そう言って火川君はうどんをすする、入れすぎたのか直ぐにむせて

しまう訳だが

「くくっ！入れすぎ」

「だな…。んでよ、なんかお別れパーティでもやろうかって話になってるんだよ。
んなもん個人でやれっつの！」

そう言ってまたうどんをすする。そしてむせる

「あははは！まあお世話になったんだからいいんじゃないか？」

「ま、そうだがよ。あぁ、そう言えば翼も先輩いるんだろ？
隣に住んでる…あー、なんつったっけ？

文化祭の時お前と一緒に会ったんだけど…」

「ああ、葵先輩？」

「あ！そうそう葵先輩ね。
その人ももう高校なんだからよぉ、お前お別れ会でもしてやれば？」

うーん、お別れ会かぁ・・・

「どんな事をするんだい？」

「げほっ！げほっ！　ああっ、普通になんか食ったりよ。
あと女子とかは告白するヤツもいるらしいぜ？

・・・げほっ！」

「へー…」

告白・・・か。

もし、僕が先輩に告白したら…どうなるのかな。

いや、駄目だ。もし…拒絶されたら…

「翼」

「え？」

火川君は急に真面目な顔になる。

「ずっとそのままの関係なんてありえねぇんだぜ？」

「えっ…？」

まるで心を見透かされたのかと思うほど、火川くんの言葉は僕の心情に響いた

「やる」

「は？」

火川くんはうどんを僕のほうへ差し出した。

「グッドラック！」

「えぇ！？」

そう言って笑うと火川くんは帰っていく。

「・・・・」

僕はそれを一気にすすった。

「げほっ！ゲホッ！」

本当、入れすぎだよ…

「え！何コレ！」

「いや…ほら、先輩もうすぐ高等部だから…」

「お別れ会？」

「う・・・うん」

「いいの!?嬉しい!」

葵さんはテーブルに並べてあるお菓子を手にとって口に入れる。

「このクッキーおいしい!
凄いね、どこで買ったの?」

「あー…それ、僕が作ったんだ…」

「え!」

「うまくできたみたいだね、良かった」

「そう…なんだ。
もしかして…私の為だったりするの…かな?

…なんて、あはは」

「も・・・もちろん」

「そう…なんだ。・・・嬉しい」

少し恥ずかしくなって僕達は目をそらす。

「「あのっ！」」

「あ・・・ど、どうぞ！」

「え！あ！う、うん！つ、翼くん！
もし良かったらさ、私と一緒にバイトしない？」

「バイトですか？」

「うん、あと一年後にさ。
知り合いのお花屋さんがやってみないかって？
翼くんも好きでしょ？お花とか！」

「・・・はい！」

その返事を聞くと、葵さんは嬉しそうに微笑む。

「・・・葵先輩」

「うん？どうしたの？」

「その・・・」

呼吸を整える。

やばい…くじけそうだ！

「……ッッ！話があるんです！」

「う、うん！」

「僕っ…先輩に嘘つきました」

「え！？」

「僕っ、花が好きなんじゃありませんッ！」

「・・・ぁ。

う、うん、そうだよね！

ごめんね無理に誘って――」

「違います！そう言う意味じゃない！」

「うぇ？」

「僕は…っ！花が好きなんじゃなくて！先輩が好きなんです！」

「・・・・・・」

「・・・・ッ」

「・・・・・・・・・えっ！？」

真っ赤に赤面する先輩。僕は気にする事無く続ける！

「家庭部はとても楽しかったです。
でも一番楽しかったのは先輩といた時間なんだ！
葵先輩！どうか僕と付き合ってください！」

もう、なるようになれっ！僕は彼女に向けて手を差し伸べた。

「――――た」

「・・・？」

「私も…翼くんといた時間が何よりも好きだった…」

彼女は両手で僕の手を包み込んだ。

「私で・・・よければ」

「！」

僕達は笑顔で見つめあう。

「あ…！そのっ！ありがとうございましゅ！」

「どどどどういたちまちゅて！！」

「「・・・・・・・・・」」

大事なところでどうしても締まらない！！

僕達は恥ずかしさと何故か無性におかしくなって笑い出す

「あはは…葵先輩」

「ふふっ、翼くん」

僕たちは強く抱きしめ合うと、もう一度笑い合った。

そして月日は流れて…

「おい！今攻撃当たってなかったろ！」

「はいはいワロスワロス、こんなの絶対おかしいよってか？
訳が分からないや、君達はいつもそうだね――って！え？はっ
！？

おい！なんだよそれ！今攻撃当たってなかったろうが！判定おか
しいだろ！」

「同じ事いってんじゃないわよ！ほら！ユウスケ、決めちゃって！」

「おお！」

ゲームで盛り上がっている司達を翼は二階から確認する。

「あはは、元気がいいね皆」

「どうなの翼くん？」

葵さんはコーヒーを僕に渡すと、隣に腰掛けた。

「うん、まあまあかな。
順調にいけば来年か再来年には実習くらいはいけそうだよ」

「困ったことがあるならいつでもお姉さんに相談してね！」

そう言って葵さんは胸を張る、

「私と葵さんは一歳しか違わないじゃないか」

「あー！また私って言った！しかも葵さん！」

「常に使ってないと大事なときに素にもどっちゃうんだよ。
それでこの前怒られちゃって」

「じゃあ、せめて二人のときは無しにしない？」

「・・・分かったよ、葵」

「ふふっ、よくできました」

そう言って葵さんは僕の膝に座る。
恥ずかしくなって退かそうとしても、彼女は離れない。

呆れる僕を気にする事もなく、
彼女はそこら辺にあった雑誌をパラパラとめくっていく。
そこには新婚のカップルの話がたくさん掲載されていた。

葵さんはそれらを目を輝かせながら見る。

「あーあ。なんかさ、海の見える丘に住みたいね」

「えぇ？」

「うん。レンガで家を建ててさ」

夢見すぎだよ。
そう言うと葵さんは残念そうに笑うのだった…

「っ！だけど…」

「え？・・・あ」

葵さんを後ろから抱きしめる。

「今は僕自身まだまだだけど…いつか…その…」

「・・・」

「ぼ、僕とっ、けっ！結婚…してくれませんか？」

「・・・いいよ」

「ほ、本当に！？」

「嘘ついてどうするのよ」

「はっ、はは！ははは！」

「もー…簡単にいったからって！
ちゃんと幸せにしてよ！」

「う、うん！絶対幸せにするよ！」

二人は、恥ずかしそうに、でも嬉しそうに笑う。

「ねぇ翼くん。」

「ん？」

「指輪は？」

「え！？」

「うふふっ、ないのぉ？」

「・・・はい」

「え！？」

翼はポケットからそれを取り出した。
眩い輝きを放つソレを、葵に見せる

「え！ええ！？本当に！？」

「あはは、安物だけどね。それは葵さんにプレゼント
本当のヤツは――」

「・・・」

葵は指輪を受け取ると、迷うこと無く左手の薬指にはめた。

「葵さん…」

葵はニッコリと笑う。
そして何も言わずに目を閉じ顔を近づけた。

翼は少し躊躇ったが、恥ずかしそうに笑うと、触れるだけのキスを交わす。

ずっと、この幸せが続くんだろう

そう、思っていた。

でも、世界は残酷だ

ずっと一緒に居ようって言ったじゃないか

いろんな所へ行こうって約束したじゃないか

互いに助け合って生きていこうって誓ったじゃないか

なのに…なんで…

「どうしてなんだよ……」

目の前は彼女がいる。
こんなに近いのに、手が届くのに…
届かない。

彼女が見えない…

なんで？
どうして？

何で何だよ…

彼女が何をしたんだ。
彼女が誰かを傷つけたか？彼女が誰かを不幸にしたか？

何で、何で彼女なんだよッ！

ふざけるな。ふざけるなっ、ふざけんなッッ！！

「お…ねぇちゃん…大学から…帰る途中…車っ……に」

泣きながらも薫ちゃんは僕に事情を説明してくれた。

だけど、ゴメンね…

もう何も聞こえないんだ。

彼女の声も…何もかも…

「・・・ッ！・・・・・っっ」

ユウスケは僕たちに声をかけようとするが何もできずにいた。

今にして思えばユウスケも泣きそうだったな…

「葵ぃ…」

人の命は簡単に無くなってしまう。

事故、彼女は運転をミスした車に当たって死んだ。

どうだ？こんな簡単な理由で人が死ぬんだぞ！

僕はだれを憎めばいい！？

どうすればいい！？

ああ、駄目だ。

いっそ運転してたヤツがクズなら僕はそいつを憎んで生きていける。

でも…彼だって…わざとじゃない…

正直運転手が憎いさ、だけど彼を殺したいとは思えない。完全に恨めない…

葵さん、答えてよ。僕はどうすればいいんだよ…

もう、何をやってもどうでも良かった。
食事だって、なんの味もしない。
夜だって、眠っているのか、いないのか。
自分でも分からない。

いっそ、彼女の所にいこうか。
そうすれば…僕も…楽に…

「翼さん…っ！」

そんな時だった、薫ちゃんが僕にそれをくれたのは。

「・・・これは？」

「お姉ちゃんの…こんなモノしか無くて…ごめんなさい」

僕は見たことがなかったけど、彼女が最近買ったらしいメガネ。

「ねえ、翼さん…酷いお願い…してもいい？」

「え・・・」

薫ちゃんは消え入りそうな声だった。
目には涙が浮かんでいる

「お願いだから…笑ってよぉ…」

「・・・っ」

笑って…か

「このままじゃ・・・
翼さんもいなくなっちゃうんじゃないかって…

そしたら…もうっ、
私もユウスケも耐えられないよぉ…」

薫ちゃんは、ぼろぼろと泣き出してしまった。

「・・・」

命って何なんだよ…

「うぅぅううっ！」

すすり泣く薫ちゃん。

ああ、そうか。このままじゃ彼女は…

「・・・」

受け取ったメガネをかけてみる。

僕の目には当然あわなくて、視界がぼやけた。

そうだ、視界がおかしいだけなんだ。

「薫ちゃん…」

「・・・え？」

手を出す、

「大丈夫かい？」

笑って。

「あ…」

命は自分だけのモノじゃないのがややこしいね。

ユウスケも薫ちゃんも…両親達さえいなければ君の後を追えたのに。

「翼さん…」

「ほらほら、泣いてちゃ綺麗な顔が台無しだよ？」

いつまでもしまらないと、君に嫌われてしまうからね。
それだけは避けないと…

「ちゃんと……」

皆辛いんだ。
君は薫ちゃん達が悲しむのは見たくないだろ？
だったら、せめて彼らの支えにならなきゃね…

「笑わ…ないと…ね」

君のところにいくのは…

その後でもいいかな…

「翼さぁん……」

彼女の手をしっかりと握って、僕は笑った…

「・・・」

今、僕が仮面ライダーになったなんて言ったら君はどんな顔をするんだろうね。

「・・・」

いや、そんな事より…

まだ未練がましい僕を軽蔑するかい？

「どっち…なんだろうね」

時計を見る。もうすぐ誰かが起きてくる頃かな…

今日もいい日になるといいね

「・・・やあ、おはよう」

だから僕は、今日も笑顔で朝の挨拶を交わす。

第３９話　番外編　相思相愛（後書き）

「愛とは…実に不思議なモノだ」

そう思わないか？そう言って女は笑う

「ええ、そうですね。時に悲劇になり」

「時に喜劇に変わる」

その問いかけに答えたのはゼノンとフルーラだった。

相変わらずクスクスと笑う二人につられ、女も笑い出す

「さて…悲劇で終わるか…」

女は椅子にもたれかけ、ゆっくりと目を閉じる。

「それとも…」

ゼノンとフルーラはニヤリと笑って背を向ける。

どうやら次の世界が見えてきたようだ

「フフフ…」

楽しみにしているぞ、

そう言って女もまた怪しげな笑みを浮かべるのだった

第４０話　２１１２３２（前書き）

はい、と言う訳でファイズ編でございます
ではどうぞ！

第４０話　２１１２３２

檻、それがこの世界最初の感想だった。

その文字の通り、この街は巨大な檻で囲まれていた。

空さえ鉄の網目にさえぎられ、その広い青空でさえ覆い隠している。

「なんか・・・気味が悪いな」

「檻で閉じ込められているのか、
それとも何かからこの街を守るために檻で囲んだのか…
気になるところではあるね」

「つか、そもそも檻…ていうか柵っていうか分かんないけどさ。
それに出口がちゃんとついてっかもよ?」

いろいろ話し合って、
結局外に出ていろいろ調査してみようと言ういつもの答えになった。

ただ、こんな鉄の網に囲まれてる街、あまりいい気はしない訳で・・・

「あー…ほれ、亘。ちょっくらピューっと頼むわ」

「えっ…あ、いや兄さんこそライドでちょちょいと…」

「「・・・」」

正直、行きたくないですオーラをそれぞれは発する。

檻と言う単語でいい気がする訳がない、それぞれは沈黙の抵抗をつづける

「金髪ツインテール幼女にならペットにされてもいいですけどね。ハァハァ…」

「少し黙ってろ、ぶち抜くぞ」

「あああああッもう！」

だがまあいつまでも黙っていても始まらない。

司は元気良く立ち上がり、その手を高く振り上げた。

「じゃんけんだ！じゃんけんで決めるぞッッ！」

良太郎、亘、翼はこくりと頷くと、手を出す

「そう・・・だな。
よし、じゃんけんでいこう！」

ユウスケはうんうんとその手を構える、
しかしそれを他ならぬ司が制したのだった。

「ん！？ん？」

「ユウスケ、今回のじゃんけんは少し特殊なモノでいく」

「あ…ああ、あっち向いてホイとかみたいなヤツだな」

「ああ。そうだ」

その名も…司はそう言ってユウスケを指差す！

「ユウスケ敗北じゃんけんポンッッ！」

「・・・・・」

「・・・・・」

「いや、あの…ごめん。
ちょっと嫌な予感しかしないんだけど・・・
一応ルール聞いといていいかな？」

「なんとッ！

ユウスケは古代マンマルチーダ王国に代々伝わるこのじゃんけんを知らないとっ！？」

椿は信じられないと言った目でユウスケを見る。
完全に悪ノリである

「ああ、このじゃんけんはな、

一見普通のルールに見えるかもしれない。」

「うん」

「まあ実際普通にじゃんけんをやるんだ。
だが、このじゃんけんには一つ特殊なルールがあるんだ」

「うん、何？」

「それはな、小野寺ユウスケが既に敗北していると言う事なんだ」

「うん・・・」

「うん？」

「ユウスケ敗北じゃんけんぽん…
まさか世界にはそんなじゃんけんがあったなんて、意外だなぁ。
もっと世界の事勉強しないと」

「ユウスケさん、あんたは泣いていい。泣いていいんだっ！」

結局じゃんけんに負けた亘とユウスケ、薫。拓真が街を歩く。

「何か・・・それにしても」

亘はキョロキョロと辺りを見回す。
街の至る所に風船やピエロのお面が飾ってあり、花の飾り物やきらきら光るネオンが目立つ。

まるでお祭りでもしているかの様な風景。
しかしおかしい、その割には人がいないのだ。

楽しそうな音楽や飾りつけがかえって不気味になる。

「・・・どうしたんだろうね？」

「うぅん……？」

ユウスケがふと空をみると気球が見えた。
そこには電光掲示板が備えられており、そこには数字の２０００

「なんだろうか、あの数字…」

「さあ？・・・ん？」

突如電光掲示板の文字が変わる。

『ＧＡＭＥ・ＳＴＡＲＴ』

「え？」

その文字が表示されると共に、なんだろうか…

気球から何かが落ちてくる。

「なんだ？」

「うぉおおっ！」

「え？」

それが何か確認する前に物陰から小さな影が飛び出した。

「こ、子供？」

ぼろぼろの服を着た子供が、地に降りたその何かに向かって走り出す。

その手におもちゃのピストルが握りしめて。

「っ？」

気球から降りてきたのはピエロだった。
体は白黒、顔はお面をかぶっていて表情は分からないが、そのジェスチャーでおどけてみせる。
しかし子供はそのピエロに憎悪の言葉を投げつけ、玩具のピストルを向けた。

「お前はぼくがやっつけてやるッ！
バンっバンッッ！」

男の子はひたすらに撃ちまくるが所詮は玩具。
効果があるわけがないし、弾すらでない。
しかし男の子は必死に撃ち続ける。

「な、なにかのゲームかな？」

「・・・どうだろうね」

おどけるピエロ達と怒り狂う子供。
あまりの強烈な違和感にユウスケ達はうすら寒いモノを感じる。

そしてユウスケ達は自分の目を疑った。
ピエロの足が、男の子にめり込む。

いや、性格には少し違う。
さも、当たり前といった雰囲気でピエロは男の子を蹴り飛ばしたのだ！

そのあまりの光景に、ユウスケ達は何が起こったのか、思考が麻痺してしまった。

「・・・は？」

第４０話　２１１２３２（後書き）

すいません、さっそく明日が更新できないかもしれません

では、次もよろしく！

第４１話　２３９１１３０３（前書き）

今日は更新できました
でも明日はキツイっすね。すいません

ではどうぞ！

第41話　2391303

思考の整理が追いつかない。
今起こった事を理解できない！
この男の子はどうなった！？

「が・・・ハッ！げほッ！ゲホッッ！」

「だ！大丈夫っ！？」

我に返った拓真が男の子の元へと駆け寄る。
同時にユウスケ達もやっと今起こった事を理解して、ピエロに詰め寄った。

「おい！何するんだよお前ッッ！」

ユウスケはピエロに掴みかかるが、ピエロは何も動じない。
むしろキャハハハと笑っておどけて見せるのだった。

「お前ッ！」

ユウスケに怒りの感情が芽生える。この状況でまだふざけているのか！？

しかしピエロは狂ったように笑うと、姿を化け物へと豹変させた。

それは色彩無き道化

「なっ！」

「オルフェノク！」

『キャハハハハハ！』

笑いながらも、その手にはナイフが握られている。
クラウンオルフェノクは確実にユウスケを殺すつもりなのだ

『ヒャハァッ！！』

「くっ！」

ユウスケはクラウンの攻撃をぎりぎりでかわすと、ベルトを出現させる。
そして巻き起こる赤い旋風！

「変身！」

『ヒャハハァハハアハアアハハ！』

クウガの拳がクラウンを捉える。

一発、二発と叩き込まれる一撃！

しかしクラウンは笑い続けるだけ、三体のクラウンが奏でる狂気の笑顔がクウガの心に不安を焚きつける。

「くそっ、効いてるのか…？」

『キョワハハハハァアアアッハハハ！』

殴られる度にクラウンは笑う。

他の二体も仲間が殴られているのを楽しそうに見ていた。

『ヒャハハハハハッ！』

「うわっ！」

殴られ続けていたクラウンがいきなり身体を反らし、クウガの攻撃を流す。
そのままクウガの手を掴み、膝打ちを入れ投げ飛ばした。
クウガは受身をとると、クラウンと向き合う。
表情すらない無機質なピエロ、その目には狂気の光だけ灯しているのだろう

「ユウスケさん！」

「大丈夫！　・・・ッ！」

クウガは借りるよ、と優しく男の子に呟き、男の子が持っていた玩具のピストルを手にする。

「超変身・・・」

クウガの姿が緑に、ペガサスフォームへと変身する！
そして素早く矢を引き絞り狙いを定めた。

「ブラストペガサス！」

『ぎぇはハッハハアハアアヒハハウァハハハっ！』

烈風の弓矢がクラウンの胸を打ち抜く。
そこへクウガの紋章が現れると、
クラウンは楽しそうに両手を広げ爆発した。

「はぁ…はぁ…ッッ！」

自分の攻撃が通用すると安心したが…
それでも尚、謎の緊張感がクウガを包む。
得体の知れない相手がここまで心を追い詰めるとは…
ペガサスの精神的負担も倍加したように感じた。

現に大きな疲労感がクウガを襲う、緊張感がペガサスの制御を邪魔していたのだ。
だがまだクラウンは二体残っている。戦いをやめる事などできはしない

『フヤァハハハ！』

『ピロピロピオロォォハハハハハハ！』

クラウン達はクウガに背を向けるとスキップで走り出す。

一体の先には男の子と亘達が、

もう一体の先には何も無いがこのままでは逃げられてしまう。

「くっ！・・・うッッ！」

クウガは二体を追う為に一歩踏み出すが、そのまま膝をついてしまった。

想像以上にペガサスで体力を持っていかれたのだろう。

立つことすら疲れる。そんな感じだった

『困った時のキバットバットぉおお！』

『ピャハハハハラハハハラアラアぁアぁ！』

亘達に近づいてきたクラウンを颯爽と現れたキバットがなぎ払う！

そしてそのまま亘の手へ噛みついた

『がぶーっ！』「変身！」

刻印が現れ、亘もキバへ変身する。
蹴り上げでクラウンを叩き上げると、そのまま回し蹴りの連続でクラウンを押し出していく。

『バハハハハッハハハハハハハ！』

向こうに逃げたクラウンもうまくはいかない。
校庭の方角から拓真の危険を察知したオートバジンが掛けつけ、クラウンをガトリングとパンチでクウガの方へと押し戻していく。

『「超変身っ」』

ドラゴンフォームへとクウガは姿を変える。

『ユウスケ、大丈夫？』

「あ、ああ！」

クウガはその場でドラゴンロッドを構え、力を込める。
ロッドの両端が淡く輝くのを確認すると
クウガは肩膝をついてその場に止まった。

「はあッ！」

キバは回し蹴りから渾身の力を込めクラウンを蹴り飛ばす！
オートバジンも同様に掌底でクラウンを吹き飛ばす！
そしてクラウンの吹き飛ばされた先にはドラゴンロッドの先端。
二体のクラウンはその先端に触れてしまう！

『ひゃハハハハアハハハッハアッッ』

『キャパアアアアアアハハハハハアアア！』

スプラッシュドラゴンによってクラウンオルフェノクは爆散して消え去る。
クウガたちは男の子を抱えると、一度学校へと戻るのだった。

「・・・」

拓真の心に恐怖とプレッシャーが押し寄せる。
それは皆感じてきた事、ユウスケも翼も亘だってそうだ。
それにこれから選ばれるであろう真志達もこのプレッシャーと戦わなければならない

「・・・」

そう…分かっている、だけどどうしても怖かった。
この街を囲う狂気を感じつつ、拓真は唇をギュッと噛むのだった

第４１話　２３９１１３０３（後書き）

どうも私は鼻が悪いみたいで…
今日本当は病院に行こうと思ってたんですが
どうにも時間がなくて。

まあ皆さんにとってはどうでもいい事なんですけどｗｗ

じゃあ、次もよろしく！

第４２話　２１１３０３４５（前書き）

月、火の更新が危ういため
今日は多分もう一回更新する…かも

ではどうぞ！

第42話　211303 45

「はぁあッ！」

『ヒャハハハッハハハハア！』

アギトの拳をクラウンは笑いながら受ける、
翼と司もまた、クラウンオルフェノクと戦闘中だった。

学校で待機していたところ、窓からクラウンオルフェノクの姿を見つけたのだ。
人々を襲うクラウンを放っておくわけが無い。

二人は変身し、クラウンに戦いを挑んだのだった。

「なんて、不気味な奴らなんだ・・・」
『アタックライド』『スラッシュ！』

ライドブッカーを剣に変えクラウンに切りかかる。
クラウンは避けようともせず、剣をその身体に受けても楽しそうに笑うだけ。

「たあああああああああっ！」

『ヒャハァアアアアアアア！』

斬撃が強化され、クラウンを断ち切る。
絶命の瞬間までクラウンは笑い続けていた。
死に対する恐怖がないのか？狂気の笑みがよりその不気味さを増していく

「司君！後ろだ！」

「え？　グッ！」

アギトの声を聞き、司は身体を反らす。
おかげで直撃は免れたが、クラウンの攻撃がディケイドにヒットする。

「くそっ、無駄に数が多い！」

「気をつけて、一体破壊するごとに反撃してくるみたいだ」

ナイフを構えて走ってくるクラウンを見て、アギトは腰の中心から刀を取り出す。

「集え、炎よ…」

左腕が炎に包まれ、赤に染まっていく。
炎が弾けると、胸部と左腕が赤くなったアギトへと変わった。

「おお！フレイム！」

剣のデザインが違うが紛れも無くフレイムフォームだ。
剣と言うよりは刀と言った方がいいか、トライホーンの様なモノが無い。

つまるところ本物よりシンプルになっていた。
アギトは鞘からフレイムセイバーを引き抜くと、鞘と一緒に構えて立つ。

『ひゃはははーははは！バッ！』

クラウンのナイフをセイバーでいなし、鞘で殴りつける。
体勢を崩したクラウンに回し蹴りを決め、そのまま地面へと叩きつ

けた！

『ヒャハ！ヒャハハハ！ハハハ！』

尚も狂ったように笑いながらクラウンはじたばたともがく。
周りにいた数体のクラウンもそれを気にする事無くナイフを構えアギトへと向かう！

「やれやれ、仕方ないか…」

アギトは踏みつけていたクラウンを蹴り飛ばすと、後ろに下がる。
そしてセイバーを鞘にしまい居合いの構えをとった。

「はぁぁぁぁあ…」

アギトの紋章が地面に現れ、エネルギーを集中させる。
クロスホーンが展開し、炎のオーラがアギトを中心に発生していく

『ヒャハハハアハハハハハーハハハッ！』

クラウン達がそのオーラに触れた瞬間、何か赤い光の様なモノが見えた。

しかしアギトが何かをした様子もない。
今も居合いの構えを保ち続けたままだ。

しかしクラウン達は何故かアギトを素通りして走っていく。

「？」

ディケイドは不思議に思う、そして気づいた。
鞘から刀が少しだけ出ている。

アギトはクラウン達が全て自分の後ろへ行くと、刀を鞘へ納めた。
カチリと音がして…

「おお！」

その音をきっかけにしてクラウン達の身体に赤い線が現れる。
そしてすぐにクラウンの体は、ずれる様に歪み爆発した。

「か、かっけぇえええ！
先生凄いじゃないですか！
いつの間に斬ったんですか？いや全然見えなかった！」

「ハハハ、ちょっとしたアレンジみたいなモノさ。
私なりのアギトでいこうかなってね」

「成る程成る程・・・ん？」

『ヒャハハハーッッ！』

「うおっ！」

油断したディケイド達に再びクラウンの群れが襲い掛かる。

「またかよっ！ぞろぞろとっ！」

「・・・！

司君、あの数字が変わってる」

その言葉を確かめるためにディケイドは空を見上げる。
先程気球の電子掲示板に書かれていた数字は２０００だ。
しかし今、数字は１９８３になっている。

「（もしかすると…）

司君、時間は掛けられない。一掃しよう！」

「ああ、分かりました！」
『ファイナルフォームライド――』『アアアアギト！』

アギトはアギトトルネイダーへと姿を変え、猛スピードでクラウン達を吹き飛ばしていく。

ディケイドはトルネイダーに飛び乗るとライドブッカーを構え、二枚のカードを差し込んだ。

『ファイナルアタックライドー――』

『アアアアギト！』

アギトの紋章を潜り抜けると、
アギトトルネイダーは金色の光に包まれ、一気に加速する！

アギトトルネイダーはクラウン達を吹き飛ばしながら
辺りを飛び回り、空中を旋廻する

『ファイナルアタックライドー――』

『ディディディケイド！』

目の前にホログラムカードが出現していく。
ディケイドはそれをサッカーボールの様に蹴り飛ばした！

カードはある程度飛んだ後にその場に静止して留まる。
ディケイドはそれを繰り返し、五枚のホログラムカードを空中に展開させた。

「『たあああああああああッッ！！』」

アギトトルネイダーがその一枚をくぐり抜けた瞬間ッ！
まさに一瞬で次のホログラムカードまで移動する。

あまりのスピードに金色の残像がその場に現れる程だ。

残像には攻撃判定があり、
直接アギトトルネイダーに弾かれたクラウンはもちろん。
それに触れたクラウンまでもに大ダメージを与える。

ディケイドは一秒か二秒で全てのホログラムカードを通過し、
残像を爆発させた。

ディケイドトルネード。

ホログラムカードで連鎖のラインを整えた後、超高速誘導でエネルギーを残像に乗せる。
ディケイドもまたライドブッカーで相手を切りつけるダブルアタックが決まる。

クラウンは一掃され、二人は変身を解く。

「司君。やはり数字が変わっているね」

翼は電子掲示板を指差した。数字が１９７０に変わっている。

「あ、本当だ。何の数字なんだろうか…」

「おそらく今倒したピエロの様な怪人の数じゃないかな。
今倒したのも十三体だったからね。」

「ああ、成る程。全然数えてなかった…」

でも・・・司の表情が険しくなる。

「…そうだね。
あれがオルフェノクの残り数だと考えると…
かなり厳しい戦いになるかもしれない・・・」

翼は冷や汗を浮かべながら小さく笑うのだった

第４２話　２１１３０３４５（後書き）

翼アギトの説明を少し

フレイム

刀と鞘の二刀流になります。
炎の力が付与されます

ストーム

風を操る点に特化しており、空を飛ぶことも可能です

まあこんなところですかね
では次もよろしく！

第４３話　４５０４１３２４３２（前書き）

はい、と言う訳でね　平日分を今更新しました

ファイズはキックが本当にカッコいいですよね

あんまりディケイドじゃ出てきませんでしたがｗｗ

第43話　4504132432

「ぅ・・・ぅううっ」

「あ！気がつきました？」

男の子はゆっくりと目を開けて辺りを見回す。
夏美は優しく微笑むと、男の子を抱き上げた。

「お名前は？」

「ウノ…」

「ウノ君ですね。
私は夏美っていいます。大丈夫ですか？」

ウノはこくりと首をふる。

「ここはどこなの？」

「私達の学校です。
ウノ君、もしよかったらこの世界で何が起こってるのか教えてくれませんか？」

「え？」

「あの数字、ピエロみたいな化け物。何でもいいんです」

「あ…うん！」

ウノは力強い返事をすると、この世界の事を話し始めるのだった。

「お、おいっ！あんた等！」

「ん？」

司達が学校へ戻ろうとした時、襲われていた男の一人が声をあげる。
男の顔は未だ恐怖に満ちており、司達は足を止めた。

「たっ、頼む！助けてくれっ！
もう時間がないんだ！！」

「え・・・？」

男は語り始める。この世界の事を・・・

「それは…本当ですか！？」

「ああ…っ、この街は一ヶ月前までは普通の街だったんだ。
だけど…アイツが現れた」

「アイツ？」

「ああ。ピエロみたいな格好だった。
そいつは自分の事を道化師といっていたな。そいつは俺達にこう言ったんだ。」

『皆さん刺激は足りていますか？
ひゃははは！足りないでしょう！
ならばカーニバルを！この廃った世界に潤いを！』

「その言葉と共に、この街は巨大な柵に囲まれてしまったんだ。
それだけじゃない、
あのピエロみたいな化け物が現れていきなり暴れ始めた…」

そして道化師は語る。

『ゲームをしましょう！
制限時間内にクラウン達を全員倒せたら貴方達の勝ち！
もしできなかったら……』

「できなかったら・・・？」

「爆発！？」

「うん…この街ごと全部無くなっちゃうんだって…」

ウノの話によるとこの街の地下に巨大な爆弾が仕掛けられており、制限時間内にクラウンオルフェノクを全て倒さないと爆発するらしい。

「そんな・・・めちゃくちゃな・・・」

「そのめちゃくちゃな理由で俺達はもうすぐ死ぬんだっ！」

「す、すいません…」

男はその場で声を殺して泣き始める。

「あの・・・残り時間ってあとどのくらいなんですか？」

「・・・あと二日だ」

「！」

「あと二日で１９７０体を倒さないと・・・
駄目なのか・・・」

無理だ。普通に考えて…

クラウン達がどこに隠れているのか？
それすらも分からない状態でそれだけの数を倒さなければいけないなんて

「先生、学校に街の人間を避難させるってのは？」

「そうだね、多少無理やりにでも押し込めば――」

「無理だよ」

「！」

砂のオーロラと共に、ゼノンとフルーラがくすくすと笑いながら現れる。

「無理？」

「ええ。爆弾が爆発すればこの世界は消し飛ぶわ、だから貴方たちもゲームオーバーと言う訳。

たしかにあの学校は安全だけれど…

世界そのものが無くなっちゃったら意味ないもの」

「つまり・・・」

「ええ、がんばってね。あと１９７０体…うふふ」

「ククッ期待しているよ破壊者ディケイド！

ボク達も百体くらいなら手伝ってあげるよフフフ」

それだけ言って二人は砂のオーロラに消えていく。

「・・・」

「やろう、司君」

「…ああ、はい。」

二人は静かに覚悟を決めた。
もはや迷っている時間は無い、

この世界を救うためには一刻を争うのだから

第４３話　４５０４１３２４３２（後書き）

「ねぇ、知っているかいフルーラ？」

「あらゼノン、どうしたの？」

「次回は新キャラがたくさん出てくるらしいよ」

「まあ！ただでさえキャラが多いのに！？」

「そうだね、フルーラ。
気をつけないとボク達空気になっちゃうかも…」

「その前に作者が書き分けできるのかしら！」

「そうだね、だって彼は…」

「「適当な男なのだから！」」

第４４話　２１１２４５１３（前書き）

すいません、ちょっと今週は不定期になるかも…
まあ次は多分水曜日か木曜日かな

ではどうぞ！

第４４話　２１１２４５１３

司たちが覚悟を決めている頃・・・

「へっ、コレがその爆弾様ってか？」

燃えるような赤い髪と黄色のメッシュ。
派手で露出の多い服、
そして何より鋭い目の少女はそれを見上げた。

「朱雀（すざく）、あまり近づくな。この世界を滅ぼすだけの代物だぞ」

メガネを掛けた緑髪の少年が答えた。
どこかやる気のなさそうな目をしている

朱雀と呼ばれた少女は、へいへいと投げやりに答えて後ろへ下がった。

「ディス君。こ、こわいよ・・・もう帰ろうよ・・・」

まだ少し幼さが残る銀髪の少年がブルブルと震えながら、

メガネの少年。ディスに問いかける。

「かぁー！安心しろよリラ。
爆発するのはまだ先なんだからよぉ！」

「で、でも・・・」

リラと呼ばれた少年はそれを…

巨大な爆弾を見上げる。

彼らがいるのはこの街の地下、つまり道化師が爆弾を仕掛けた所だった。
荒れた鉱山の様な所に、ビルほどの大きさがある爆弾が置いてある。
爆弾にはたくさんのピエロのお面とお菓子がくっついていた。
それが不気味さと狂気さを引き立たせる

「リラの言う事はもっともですわ。
こんな所、一分一秒だっていたくありません。
あの悪趣味なモノを見ているだけで吐き気がしますわ」

三人から少し離れた所に深い青色の髪の少女が座っていた。
少女がいる場所には地下だというのに日傘が刺さっており、

豪華なティーセットが置いてある。

少女の服、座っている椅子から見て、相当のお嬢様なのだろう。

「マリンお嬢様、あまり悪く言うものではありませんよ。
リーダーはアレを欲しがっているのですから」

「分かっていますタイガ、
全く…彼のセンスには理解しがたいモノがありますわ」

スーツに身を包んだ金髪の少年タイガは、主人であろうマリンを落ち着かせる。

「ところで…その肝心のリーダ様はどこに行ったんだ!?」

「おう、そうだぜ!アイツから呼び出しといて遅刻たぁよぉ!」

五人の少年少女は辺りを見回す。
しかしどこにもそれらしい人はいない

「あのトレジャーハンターならお宝を探しにいったよ」

「！」

岸壁の上からゼノンとフルーラが現れ、彼らを見下す様に笑う。
少年達はいきなり現れた二人に驚いたようだが
それも一瞬だった

「お前らか…」

「お久しぶり…なのかしら？えぇと…なんだっけゼノン？」

「お…お宝っ…パイレーツ…ブプッ！
プククククっ…
お宝パイレーツ…

ぶふーっ！」

「ああ！思い出したわ！
お宝パイレーツストロングツイスターズね！」

二人は完全に馬鹿にした目で彼らを見る。

「長い名前、略すと・・・おぱんつ？」

「ちょっと、違うよフルーラ。
でも愛しい君が言うならそれにしよう！

君達は今日からおぱんつだ！」

「おぱんつーおぱんつー」

「おぱんつーおぱんつー！」

「うるせぇぇぇ！馬鹿ヤローッッ！！
つかその名前で呼ぶんじゃねぇよぉぉぉ！！」

「言っておくがこのクッソダサい名前をつけたのはアイツだからな！
僕達じゃないからな！」

朱雀とディスが真っ赤になって否定するが、
ゼノンとフルーラはケラケラと笑う。

「ぷぷっ、まあそう言う事にしておいてあげる。
あら！マリン、今日も素敵なお洋服ね！」

フルーラの目がきらきらと輝く。マリンも嬉しそうに胸を張った。

「ふふっ、ありがとうフルーラ。貴方もとってもかわいいですわよ。」

「へっ、オレにはわっかんねーな。こんなフリフリのどこがいいんだ？」

朱雀はマリンのフリルを強引に掴むと不思議そうに二人を見る。
マリンはムッと頬を膨らませ、その手を弾いた。
フルーラもやれやれと苦笑する

「お黙りなさい露出狂！貴女の担当は『色欲』じゃないでしょう！」

「貴女みたいな半裸に言われるとはお終いなのかしら…」

「はっ！半裸ぁあ！？ろ、ろしゅ！！」

顔を真っ赤にして朱雀は、冷たい目をしている二人を睨む。

「だ、大丈夫！この前ちょっと見えちゃったけど…
まだ普通だよ朱雀ちゃん！」

「見えたって何がだよぉおお！」

「くっ、ぐるじいぃ…！」

リラに掴みかかる朱雀。
そんな二人をディスは無視して、ゼノン達に問いかけた

「はぁ…ところでフルーラ、ゼノン。僕達に何か？」

ゼノンとフルーラはそうだったと顔を見合わせる。

「君達、この爆弾は放って置いてくれよ」

「いかにもあのトレジャーハンターが好きそうなものじゃない。
忠告しにきたの」

五人は爆弾をみる。そして確かにと頷く。

「あほリーダーは使えそうなモノ程簡単に手放すからな
あのリングは結局渡したのか？」

「ええ、イメージ・リングの件については感謝するわ。
とっても助かったの」

「で、どうなんだ？まだ顔もみてねーけどよ。そいつ等は？」

ゼノンとフルーラはニヤリと笑って五人を見る。

「なかなか…いや、かなり面白いよ。
彼らはね、もしかすると君達と同じく――」

ゼノンはそこから何も言わなかったが、五人は頷く。

「成る程…まあ、いずれ会う事になるかもな」

そう言って五人はゼノンとフルーラに背を向けて歩き出す。

「おや、もういいのかい？」

「ああ。リーダーもこないんじゃここにいる意味もないからな」

「ディケイド達に会ってみないの？」

「そいつらが有能ならいずれ会うことになるだろ？
別に今じゃなくても構わないさ」

五人はそのまま歩き、言ってしまった。
残されたゼノンとフルーラは尚もニヤつく

「あら、でもゼノン。
別に爆弾くらい撤去してしまえばいいのではないかしら？」

「駄目だよフルーラ。
教えていなくてもリハーサルじゃ意味はない、失敗できない本番じゃないとね」

ゼノンは爆弾を見ながら、静かに笑うのだった。

「君達、酷いじゃないか。リーダーを置いていくなんて」

「アンタが勝手にどっか行ったんだろ！」

ディスの言い分をさらりと流しリーダと呼ばれた男はヘラヘラと笑う。

「んで、どーすんだよ。お宝つうか爆弾つうか」

「うーん。
トレジャーハンターとしてはアレを見逃す手はないんだけど…」

「あんなモノがアジトにあったら落ち着きませんわ。
スルーです！スルー！」

マリンの激しい拒絶に彼はやれやれと首を振った。

「しょうがないなぁ、見逃そうか。
感謝したまえよ、この偉大なトレジャーハンターがあきらめるんだから」

「よし、じゃあもうこの世界には用はねぇな！
何か食いにいこうぜ！」

朱雀は目を輝かせながらそう言う。
だが、他のメンバーのノリは悪いようだ

「君から話す時はだいたい食べ物の話題だねぇ。
さすが『暴食』だ、太るよ？」

「う、うるせーな！」

「大食いで何食べても、うまい…ですからね」

「へっ、オレは動くからいいんだよ。
でもよ、マリン。

お前は甘いモンばっか食ってる割には動いてねぇよな？

『怠惰』ってのは結構だけどよ？太るのはお前の方じゃねぇのかぁ！」

「う、うるさいですわ！」

そう言って笑う彼らの前に・・・

『ヒャハハハハハ！』

『アーハハハハ！キハハハハハ！』

狂ったように笑うクラウン達。
だが、彼らは嘲笑する。

「おいおい、誰にケンカうってんだ？」

朱雀は何かを取り出すと、それを勢いよく弾いた。

ピンッ！

朱雀は回転しながら落ちてくるそれを掴む為に、手を伸ばす。
しかしそれより早くリーダーと呼ばれていた男がそれを奪った。

「あ！おい、なにすんだ？」

不満気に朱雀はリーダーからそれをまた奪い返す

「ここはぼくに任せたまえ。
せっかく司・・・だったっけ？
彼らとお宝を探しに来たのにどっちも見つけられなかったんだ。」

「ああ、はいはいそうかよ！
じゃあ二人でやるぞ！

つか大輝、お前司ってヤツに会った事あるんだろ！？」

「ああ。でもあの時はぼくも急いでいたからね、覚えていないんだ

よ」

「ハッ、海東らしいですわね。さて、わたくし達は戻りましょう？」

そう言ってマリン達は歩いていく。残されたのは…

「さて、ひと暴れすっかな！」

「ふっ、ほどほどにしたまえよ
というか君達はリーダーに対しての尊敬の念が…」

まあいいか。と、海東と呼ばれた男はニヤリと笑った。
そしておかしな形をした銃をとりだすと、クラウン達に向けて発砲する！

『ギャギャギャ！』

「ふっ…」

クラウンが怯んだ隙に、海東はどこからか一枚のカードを取り出すとそれを銃に装填した。
直後、鳴り響く電子音

『カメンライド』

「へっ！」

朱雀もまたその赤いモノを手にする。
それはメダルだった、朱雀はマジシャンの様にメダルを素早く三枚に増やすと…
それをいつの間にか腰に巻かれたベルトに装填した

「…ふふっ、まあせいぜい頑張りたまえよ」

司達に向けたであろうその言葉。届くわけはないが、海東は笑う。
そして、引き金をひく――！

「「変身！」」

「ん…」

「どうしたの真志ぃ？」

「今なんか聞こえなかったか？」

「何が？」

「なんか…ディッエーンッ…みたいな」

「・・・はぁ！？」

「いや、だから、ディッエーンッだって！」

「ディッエーンッ？」

「そう、ディッエーンッ！」

「…イエス！ディッエーンッ！」

「カモン！ディッエーンッ！」

「「ディッエーンッ！！」」

「うるせえええええええ！」

椿は屋上の二人に向けて吼えるのだった。

「ねぇ…お兄ちゃん」

「ん？どうしたんだ真由？」

「何か…今ね、お歌が…聞こえたの…」

「歌？」

「うん…なんかね…たぁじゃぁどぉぉりゅぅぅ！って！」

「・・・」

「・・・」

「うまい！さすがは俺の妹だ！将来はアイドルかな？」

「本…当！お兄ちゃん！」

「ああ！もう一回歌ってみてくれ！」

「うん…！たあああああじゃあああああ！」

「最高だぞ真由ぅぅぅぅうううううう！」

「お前らもうるせえええええええええ！
ってか、何なんだよさっきから！！」

椿は訳もわからぬまま声を荒げたのだった

第４４話　２１１２４５１３（後書き）

「輝」はわざとです

まあ司と同じく、半分オリジナルが入った感じですかね

いつかね、挿絵とかやってみたいと思うんですけど

多分思うだけなんだろうなｗｗ

では次もよろしく！

第４５話　２２４５５５１５７５１２４４０４（前書き）

どうも最近忙しくて…

それにしてもプトティラのテーマソングはクセになりますねｗ
ついつい口ずさんでしまいます

ダークサイドの辺りが特に気に入ってます
まあいいか

ではどうぞ！

第45話　2245551575124404

二日目

「ねえ…友里ちゃん…」

「ん？どうしたの？」

「僕…ココに居ていいのかな？」

「え？」

教室の隅で拓真が小さく呟いた。

「皆、この世界の為に頑張ってるのに…
一番頑張らなきゃいけない僕が何もしてないなんて…」

「・・・」

友里は優しく微笑みながら拓真の隣に座る。

「無理しなくていいよ拓真。きっと大丈夫だから」

「でも・・・」

「でもじゃない！
ホラホラ、拓真がそんな顔してるとあたしも悲しいな。」

「う・・・うん」

拓真はまだ納得していない様だがなんとか笑顔を浮かべる。
ぎこちない笑みだったが、友里は納得したらしい。
拓真に向かって優しい笑みを向けた

「そうそう！
拓真はけっこうイケメンなんだからそうしてた方がいいって！」

「え・・・！」

拓真の顔が赤くなる。

冗談なんだろうか？
それでも嬉しい、拓真は恥ずかしそうに微笑んだ。
それにつられて友里も笑う。

「おう、拓真。いるか？」

「あ、真志君どうしたの？」

真志は拓真を見つけると、先程ウノから聞いた情報を教えた。

「ウノの両親達がいる地下シェルターがあるんだが、
そこに村野博士って人がいるらしいんだ。」

「その人がどうかしたの？」

「本人曰く天才らしい…
その人が対クラウン用の武器を作っているらしいんだ。

周りの人間は気味悪がって近づかないらしいんだけど…
ウノが見たとき、その人の作ってる武器がベルトに見えたらしい」

「ベルト・・・」

「この世界でベルトって言ったらもうそれしかないだろ。
どうだ?行ってみないか?」

「う、うん!」

ふと遠い記憶が蘇る。

「こらぁー!あんた達っ!」

「うぇ！友里だ！逃げろ、お前ら！」

「くそっ、本当にうるせぇ女だぜ！
また先生に告げ口されたらたまったモンじゃねぇ！」

「あーあ。白けた白けた！帰ろうぜぇ
じゃーな、弱虫！ブス！」

友里が睨む中、男の子達はそそくさと走っていく。

「・・・拓真！大丈夫っ？」

地面に落ちていた拓真のランドセルを友里は拾う。
友里はにっこり笑ってそれを拓真へ差し出した。

「はいっ」

「あ…りがとう」

拓真は曖昧な笑みを浮かべてそれを受け取った。

「大丈夫？それにしても酷い！どうしてあんな事されてたの？」

拓真がいじめられる事は少なくない。
その度に友里は彼を助けていた。
しかし何分クラスが違うため、いつもいじめられる前に助けられないのが彼女の悩みだった。

「今度のテスト。皆でカンニングしようって話になって…
嫌だって言ったら…」

拓真は笑う、しかし目は全く笑っていなかった。
友里はそれに気づくものの、彼の気持ちを悟り同じく笑みで返すことにした

「うん、偉いぞ拓真！拓真は優しいもんね。あたし、そんな拓真が好きだよ」

「え・・・！」

友里の笑顔を見て拓真の顔が赤くなる。

「これからも拓真は私が守ってあげるからね！」

「あ…」

拓真の表情が曇るのを友里は理解できなかった。
友里にとってはそれが当たり前なのだから、何も不思議な事など無いのに

「友里ちゃんは…どうして僕の事を守ってくれるの？
同じマンションに住んでるから？

今はまだ大丈夫かもしれないけど…
いつか標的が友里ちゃんになるかもしれないんだ」

その言葉に友里は少し沈黙する。そして、笑った。

「拓真が…私に似てるから…かな」

拓真にはその顔が笑顔に見えただろう。

しかし、友里は決して笑ってはいなかった、拓真と同じ、口だけ吊り上げる。

偽りの笑顔

「拓真だってたまには言い返してもいいんじゃない？ガツンとやっちゃいなよ」

「いいんだ。僕、そういうの嫌いだから」

「もうっ、拓真は優しすぎ！」

そう言って二人はまた笑い合うのだった…

第４５話　２２４５５５１５７５１２４４０４（後書き）

拓真のイメージはディケイドに出てきたタクミですね。
まあ、あんまり名前同じヤツがいっぱいいてもアレなんで少し変えてます

決してムカデとは何の関係もありません
気にしないでくださいね

では次もよろしく！

第４６話　２２０４１１（前書き）

熱くてとろけてしまいそうだよ

そんな一日

ではどうぞ！

第４６話　２２０４１１

「大丈夫？拓真…」

「うん…大丈夫」

真志、亘、拓真と友里の４人はその天才がいるというシェルターに向かっていた。

本当にバイクが乗れる事に驚きながらも彼らは進んでいく。

「安心しろよ、緊張するなって方が無理さ。」

「そうだよ拓真さん。ボクだって本当に怖かったんだから」

「拓真！いくら拓真が優しいからってクラウンは殴らなきゃだめだからね！」

「う、うん・・・あはは」

優しい？

違うよ友里ちゃん。

僕は弱いんだ、弱いから何もできなかった。

君に迷惑を掛けてばかりで何もできない弱虫野郎だ

だけど、今はもう違うっ！
僕はもうすぐファイズになれるんだ！
ファイズの力があれば友里ちゃんを守ってあげられる。

僕の夢が叶うんだ！

悔しくない訳がなかった。
情けなく思わない訳がない！

好きな女の子に守られて、いつも励まされて！

でも僕にそんな状況を変えるだけの力なんてない。
頭が特別いい訳じゃないし、運動ができるわけでもない。

そんな駄目な僕をいつも支えてくれた彼女。

毎日が不安だった。

いつ彼女に愛想をつかされるんじゃないかって怯えてた。
だけどそれを口にしたり今を変える為の努力もできない…

（僕は・・・クズだ・・・）

優しい？

そうじゃない。

弱いんだよ僕は…

昔からそうだ。
クラスの皆が団結して答えを教えあう協力カンニング。
それを僕が拒否していじめられたとき
あの時だって僕を優しいって言ってくれたっけ？

違う、僕は別にカンニングが嫌だった訳じゃない。
先生に怒られたり君に嫌われないかが気になって参加できなかった

だけだ。

正義感とかじゃない。怯えてただけ

情けない。ああ、本当に！

…だけど、それももうすぐ終わる。
生まれ変わるんだ、ファイズになって僕は生まれ変わる！
友里ちゃんや皆を守って、頼りにされる。
もう昔の僕じゃないんだ！

拓真の心に激しい焦りと期待が交差する。
ずっと自分の夢だった、友里を守る事。

それがもうすぐ現実へ変わるのだ

シェルターが見えてくる。拓真の心臓が鼓動を強くならした

「わしの作った対クラウンオルフェノク用の兵器が欲しいとな！」

「はいっ！どうか、譲っていただけませんか！」

ごちゃごちゃとよく分からない機械が散乱しているラボ。
そこに村野博士はいた。

拓真達が兵器の存在を口にすると、博士は上機嫌に笑う。

「ほう！ほう！わしの言葉を信じる者がついに現れたか！
よいよい！」

博士は足の踏み場も無いところをズンズン歩いていき、大きなトランクを抱えて戻る。

「わしはな、この世界に代々伝わる救世主のベルトを元に改良をくわえ、
３つのベルトを開発した」

博士はベルトをずらりと並べる。

「カイザ、デルタ、サイガ…」

そして・・・博士はすこし溜めて、そのベルトを持ち上げる。

「これがオリジナル。救世主のベルト、ファイズギア！」

「救世主！？」

「ああそうじゃ。この世界に伝えられる伝説のアイテム！
これを元にわしはカイザ、デルタ、サイガのベルトをつくったん

じゃ。

闇を切り裂き光をもたらす、それがこのファイズギアなんじゃよ！」

それなのに他のやつ等は信じようとしない！
あろう事か玩具だのガラクタだのと！

博士は不満を爆発させる。

どうやらこの世界には強大な危機に陥った時、それに対処できる道具があるらしい。
それこそがファイズギアだった。
この世界のファイズギアの役割…といった所だろうか

「今までもこの街が危険に晒された事はある。
しかしそれを知っているのはわしだけになってしまった。
…わしの言葉を誰も信じない！」

「そうなんですか…」

「だが君がコレを必要としているなら渡そう。
そしてどうかクラウン達を倒してくれないか？

道化師が言うには残り三十分になるとクラウン達は一箇所に集ま

るらしい。
道化師はラストチャンスといっていたが・・・
そこで君達にはこのファイズギアや他のギアで変身してもらいやつ等を根絶やしにするのじゃ！」

博士は自分の作ったベルトやファイズギアの能力を嬉しそうに話始める。

対オルフェノクを強く意識しているらしく、何でも一撃で粉砕できるとかなんとか

「変身のデメリットは？特にカイザギアとデルタギアです」

真志は司から聞いていた話を思い出す。
いくら世界が違うといえど設定が同じかもしれないからだ。

「ふむ…特にはないぞ。ほれ、少年よ…！」

「譲って・・・頂けるんですね！」

「もちろんじゃ！」

拓真は両手を上げて叫びたい程の衝動に駆られる。

これで、夢が叶う！

友里を、皆を守る事ができる！

もう馬鹿にされる事も自分に負い目を感じる事もなくなる！

「じゃ、じゃあ今すぐにでも・・・」

拓真は受け取ったファイズギアを装着する。

しかし対照的に博士の顔が青くなっていく

「あー・・・その、なんじゃ・・・」

博士は何かを思い出したかの様に言葉を濁した。

「え？」

「その…すまない。忘れとった…」

博士は申し訳なさそうに何かを取り出す。

「今のままじゃ君はファイズにはなれない…」

しかし、コレを飲めば…と、
博士は手に持っていた小ビンを差し出す。

「『変身一発』じゃ…コレを飲めば…」

「わ、わかりました」

特に疑問にも思わず拓真はそれを手にする。
どうせ少しまずい程度だろう、それくらいにしか拓真は考えてなかった。

しかし、真志は違う。
司から話を聞いていた彼は、ふと浮かんだ疑問を博士にぶつける

「なんでそれを飲まなくちゃいけないんです?」

「うむ・・・それは・・・」

拓真はその答えを待つことも無くビンのフタを開けようとする。
しかし他ならぬ博士がそれを止めた。

「な、何ですか？」

「博士…やっぱり…」

「ああ、そうじゃ。それを飲めば君は…」

あの、化け物と同じ体になる

「・・・え？」

第４６話　２２０４１１（後書き）

まあちょっとファイズの設定は特殊すぎるので大幅に変更させてもらいました
フォトンブラッドとかは考えないでください

ファイズは映画がかなりおもしろかったです
当時まだまだお子様だった私にはいろいろ衝撃的すぎたｗ

では次もよろしく！

第47話　718512（前書き）

なんかいろんなアニメが終わっていきますね
少し寂しいような…でも終わりを見れて嬉しいような

ではどうぞ！

第47話　718512

拓真の体から一気に嫌な汗が染み出る。

今、何て言った？

「そのファイズギアは…その…
変身者が相手と同じ体になることによって内部から細胞、性質を解析し、
もっとも有効な攻撃を判断する訳なんじゃ…」

博士は拓真の持っている変身一発を指差す。

「すでにギア達には対オルフェノクと設定をしてしまった。
わしが開発したその薬で肉体をオルフェノクに変えてからファイズギアやその他のギアに認識させる。
でなければ、エラーと見なされ変身はできないのじゃよ」

そんな…事って、

「え・・・あ・・・っ」

変身一発を持つ手がブルブルと震える。
何なんだ?変身一発ってそう言う意味だったのか!?

拓真の心に嫌な重圧感が押し寄せる。

いや、別にいいじゃないか、オルフェノクになるくらい!

それで皆を守れるんだ!

どうして迷うんだよ!

ほら!

さっさと飲めよ!

呼吸が荒くなる、なんだか気分が悪い。
別にオルフェノクになるくらいいいじゃないか、
むしろ普通の人間より強く慣れるんだ。

結局同じことじゃないか！

「・・・ッッ！」

変身一発を口元に持って行く。

「っっ！！」

しかし、飲めない。

数分前の自分の気持ちすら思い出せない！

無性に吐き気がして目の前の液体に猛烈な嫌悪感を覚えてしまう。

笑えてくる、

自分はさっきまで救世主になれるかもしれない。

皆を救うヒーローになれるかもしれないと妄想を重ねた。

しかし、今、

自分がオルフェノク…

つまりは化け物になる事を拒絶している。

ファイズになる事とオルフェノクになることに何の違いがあるのだろうか？

所詮はイメージ、敵のオルフェノクと主人公のファイズ。

ただの印象だ、なのに…今、自分はこの薬を飲めなくなっている。

「はぁ…はぁっ！」

何で！？どうして！？

ただこの薬を飲めばいいだけ！

それだけなのに身体が動かない！

どんなに力を入れても腕が動かない！

『化け物！化け物！』

もし、全ての事が終わって、日常に戻れたとして…

僕の正体が世間にばれたらどうなるのか・・・？

『化け物！化け物！』

猛烈にこみ上げ吐き気についに耐えられなくなったのか、拓真は変身一発を置いて走り出す。

真司達は止めない。

止められるわけがない。

「なぁ…、世界救う為に化け物になる。すぐに決められるか？」

「そんな事…無理です」

「…ッッ！拓真…！」

友里はベルトと薬を持ち、ラボを飛び出す。
博士は仕方ないとため息をついて椅子へ座った。

「大切なことを言うのを忘れたのはわしじゃ。
無理強いなどできる訳も無い」

真志と亘は何とも言いがたい虚無感に陥る。

「・・・」

亘は空に浮かぶ掲示板を見る。
絶望の数字はいまだに千を切る気配をみせない

『旦さん！たいへんっす！』

数字を見ていたら目の前にキバットが現れる。

「っ！どうしたの？」

『実は・・・』

「うぁあああああああっ！」

「ヒィイイィイイイイ！！」

『キャハハハハハ！アハハハハっ！』

恐怖で顔を引きつらせて逃げ惑う人々。
対照的に笑い続けるクラウン。

悲鳴と爆笑、狂気のハーモニーはシェルターを包み込む。

ぞろぞろと現れるクラウン達に人々は絶望する。
クラウン達は一瞬の隙をついてシェルターの中に入り込み、続々と仲間を呼び寄せたのだ。

シェルターの中にクラウン達の笑い声が反響する。
それを聞いてまた人々はパニックに陥り泣き叫ぶ。

「ママッー！」

『ヒャハアハアハハアハ！』

泣き叫ぶ母親を弾き飛ばし、クラウンは男の子を掴みあげる。
そしてまるで雑巾を絞るかのように締め上げた。

助けを求める母親をあざ笑い、クラウンは男の子を殺そうと力を込める。

「ぐっ…がぁ！」

『ヒャハハハハアーッハハハア！』

絶望。そんな空間だった。

だが、しかし

その絶望に、文字通り…

ヒビが入る！

「ウオオオオオオォォォォオオオオオォオオオオオッッ！」

ガラス様に空間が割れ、
屋内だと言うのに美しい月が見える夜へと世界は姿を変えた！

第47話　718512（後書き）

すいません、ちょっと忙しくなりまして
次回はおそらく木曜までにどこか一回更新…となりそうです

それにしても結構ライダー小説に限らず皆さんキャラ紹介は別で作ってある方が多いですね
僕も作ろうかな

では次もよろしく！

第４８話　番外編　キャラ紹介　メイン編（前書き）

はい、とまあ日曜日の更新が危ないんで今日やっちまいましょうと
番外編は話関係ないんですけどキャラ紹介ですね

まあ一応自己紹介の話はあるんですけど
こう言う感じのヤツもあったほうがいいのかなぁって

第４８話　番外編　キャラ紹介　メイン編

「特別クラスメンバー」

学校の一部が拠点となり様々な世界を移動する事になる
この物語の中心人物たち

聖司（ひじりかさ）　仮面ライダーディケイド

ヒーローが好きな高校生。
両親はまだ幼い時に蒸発し、従妹である夏美の家に弟と共に預けられた

ヒーロー好きゆえ正義には熱いが、少し冷めた所もある

仮面ライダーの知識がある為、自分の記憶にある範囲だけだが皆に情報やきっかけを与える事ができ、他のメンバーを支える

光夏美（ひかりなつみ）

司、亘の従妹、常に敬語まじりで話す。
優しく、真面目な性格で友人も多い

司と亘、祖父とで写真館を営んでいる。
（しかし何故か喫茶店の様な位置づけになっている訳だが…）

その明るい性格からか皆からの信頼も厚く、時に体を張ってサポートにまわる
笑いのツボは習得済みであり、対象者を笑い地獄へと沈める

小野寺（おのでら）ユウスケ　仮面ライダークウガ

司達の友人で、同じクラスだった。
コレといった特徴もない、普通の人生を送っていたが
特別クラスに移動させられた事で激しい運命に巻き込まれることになる

よく皆からいじられるが本人は気にしていない様子

つまりドMである

空野薫（そらのかおる）

司達の友人で、同じクラスだった。ポニーテールが自慢
司達との交流は深いが、特にユウスケとは小学校からの知り合いである。

サバサバした性格で、男らしい部分もある

ゼノンとフルーラからイメージリングを受け取り
ロッド、銃、剣の三種類に姿を変化させる事ができる

小野寺翼（おのでらつばさ）　仮面ライダーアギト

ユウスケの兄で、教育実習生。
理不尽とも言える流れで、半強制的に特別クラスの担任にさせられてしまった

趣味は家庭菜園と家庭的。

優しく容姿も良く、メンバーからも慕われている
メガネをかけているが、いわゆる伊達メガネであり、本人の目は悪くない

条戸真志（じょうど しんじ）

新聞部の部長で、司達とは別クラスだった。
髪を茶色に染めている。

真面目で正義感も強く、
常に善を全うするその姿勢は評価されており人気も高い。

ある事情で一人暮らしをしていた

白鳥美歩（しらとり みほ）

常に真志の周りにいる。

髪は茶色で服装も乱れており、あまり教師からの印象は良くない。
しかし誰とでも隔てなく接する明るい性格から、
交友関係は広く生徒間の評判は高い
ある事情で真志の家で暮らしている。
それもあってか真志の事が気になる様だ

犬養拓真（いぬかい たくま）
新聞部、司達とは別クラスだった
優しいが、気が弱いのが欠点。
だが曲がった事が嫌いで、それゆえに小さい時はよくいじめられていた
大人しいが、内に秘めている想いは大きい
友里に密かな好意を抱いている

園田友里（そのだ ゆり）

新聞部の副部長。司とは別クラスだった。ツインテールの少女

拓真とは小学校からの付き合いで、マンションも一緒だった為、
いつも一緒にいる。

気の強い性格で、よくいじめられていた拓真を守っていた

ゲームが強く、ゲームセンターにはよく行っている

守輪椿（すわ つばき）

司と一緒のクラスでよく、遊んでいた

アニメやゲームなどに詳しく、よくネット用語なんかを口にする。
めんどくさがりで、自分にとって不利な状況をなかなか受け入れら
れない面がある

しかし、なんだかんだ言って協力や行動は惜しまない

本人曰く右腕には暗黒の化身が宿っており、たまに疼くらしい。

本人曰く左目には精霊の力を得た魔眼が眠っているらしい

本人曰く赤い満月の夜には血に飢えたもう一人の自分が目覚めるらしい

本人曰く（ｒｙ

つまり厨二病である

広瀬咲夜（ひろせ　さくや）

美しい黒髪、整った顔立ち、凛々しく鋭い瞳

中学時代にはファンクラブまであった程の美少女

椿とは幼馴染であり、それゆえかケンカが絶えない

親が道場を営んでおり、彼女自身もある程度の経験者

堅い性格だが、理解力と包容力はあり、実は可愛いもの好きだった

りする

相原我夢（あいはらがむ）

咲夜の道場に通っている。中学生で司達より歳下。
真面目で礼儀正しく、正しいと思った人に全力で味方する。

中性的な容姿で、女に間違えられる事もあるらしい
迷った時、コイントスで決めるクセがある

アキラの事が好きだが、本人には全く気づいてもらえない

天美（あまみ）アキラ

咲夜の道場に通っている。我夢とは同じクラス
ショートヘアでボーイッシュな印象。
咲夜を尊敬しており、慕っている。

椿と仲良くして欲しいと願っているが
なかなかうまくいかない事に頭を悩ませているとのこと

我夢の気持ちには全く気づいておらず、弟の様な存在としか思っていない

天王路双護（てんのうじそうご）

資産家、天王路グループの跡取り
イケメン、どこか気品のあるオーラ。
スペックは高いが、意味不明な行動で台無しになる残念なイケメン

常に冷静で、あまり感情を爆発させる事はない。

妹の真由を可愛がっており、軽度のシスコンではないかと思われる

天王路真由（てんのうじ　まゆ）

双護の妹。一人称はボク。
年齢の割に幼い印象を受けるが、純粋で無垢なその性格から皆から可愛がられている

双護を慕っており、よくなついている。

顔が似ているかどうかは微妙なところだが、クセのある髪質は兄譲りなのだろう

野上良太郎（のがみりょうたろう）　仮面ライダー電王

仮面ライダー電王の主人公。
司達の世界ではなく、別の世界からやってきた。
世界移動の際、デンライナーに帰れなくなってしまいそれから司達に協力する事になる

時間軸は本編終了すこし前であり、
さらに主軸の人間という事もあってか、ライダーの中では最強である

ハナ

同じく電王の世界の住人。
容姿は良太郎と共に子供、つまりコハナである

鉄拳制裁や、殺人的な料理、気の強い性格からきついイメージを持つが、
良太郎達を気遣う優しさや、お化けが苦手など、女の子らしい一面も持つ。

良太郎との関係は知っているが、何故か複雑そうである

モモタロス、ウラタロス、キンタロス、リュウタロス

おなじみのメンバー。学校内では実体化できる様になっていた
放送室や食堂、空き教室などで過ごしている

真由には大変なつかれている模様

聖亘（ひじわたる）　仮面ライダーキバ

司の弟で、我夢達とは同じクラスで仲がいい。
しっかりした性格で、よく司を注意したり、呆れたりする
しかし決して仲が悪い訳ではなく、むしろ良好な関係であるだろう

里奈の事を気にかけており、毎日迎え行っている

芯は強く、ライダーとしてのレベルも高い

野村里奈（のむらりな）

亘と同じクラス
足が悪く、車椅子で過ごしている。

それゆえ悩んだり、迷ったりするものの

亘や我夢、アキラ達に支えられて成長していく

一度決めたら曲げたくない。
負けず嫌いな性格で自分にできる事を精一杯やる努力家でもある。

その想いが伝わり、司達も彼女には対等の扱いで接している

キバットバット４５世、キバーラ、ガルル、バッシャー、ドッガ

亘に協力してくれる頼もしい味方
イマジン達と同じく、学校内で過ごしている

第４８話　番外編　キャラ紹介　メイン編（後書き）

まあちょいちょい更新すると思います

しかし、間が悪いとか言う突っ込みはなしでｗ

第４９話　番外編　キャラ紹介　サブ編（前書き）

ライダーはオリジナルじゃないんで紹介は無しでいきます

第４９話　番外編　キャラ紹介　サブ編

「お宝パイレーツストロングツイスターズ」

トレジャーハンター集団…らしい
司達とは一線引いた位置づけらしく、まだ詳しくは分からない
ゼノン達から、オパンツと言う大変不名誉な略をいただいた

海東大輝（かいとうだいき）

自称リーダー
お宝に目が無いらしく、いろいろなお宝を探しまわっている
といっても、お宝の定義はあやふやで結局彼の欲しいモノがお宝らしい

薫の持つイメージリングは彼がハントしたモノである
常に偉そうな口調で話す

ディス

緑色の髪にメガネをかけた少年
どこかやる気のない雰囲気がある。
他のメンバーのまとめ役といった役回り

リラ

銀髪の少年。少年だが、女顔。
怖がりで、気弱な性格だが、発言がだいたいまともなので、
他メンバーからは信頼されている

朱雀（すざく）

派手で露出の多い服、燃える様な赤い髪が特徴の少女
一人称はオレ、口調も男っぽいが女である

食欲が旺盛で『暴食』の肩書きを持つ

マリン

深い青色の髪。身なり、振る舞いから見て相当のお嬢様。
身の回りの世話を全て執事であるタイガに任せている為
『怠惰』を象徴する

タイガ

マリンに使える執事、しかしマリンとはあまり歳は離れていない
リラと並ぶ常識人であり、家事などもこなせる万能人

「???」

司達の前に現れて、時に助言、時に対立する不思議な存在
多くを知っている口ぶりだが、多くは語ろうとしない

ゼノン　仮面ライダーダブル（ボディ）

スーツに身を包んだ青髪の少年。見た目は幼いが、雰囲気が異質であり
芝居がかった振る舞いや口調もそれを際立たせている
ナビゲーターの様な存在だが、多くは分からない
フルーラを世界一愛している

フルーラ　仮面ライダーダブル（ソウル）

まるで人形の様なゴスロリファッションの赤い髪の少女。
ゼノンと同じく演劇の様な喋り方や振る舞いを見せる

多くを知り、司たちが危機的状況に陥ろうとも笑う二人は狂気をまとっている様にも見える。

しかしたまに見せる人間らしさも確かに存在している

ゼノンの事を世界一愛している。

二人は自分達の事を眼だと言う、その真相は…

？

謎の女性。ゼノンとフルーラより上層に立つ彼女は一体何者なのだろうか

第４９話　番外編　キャラ紹介　サブ編（後書き）

まあレギュラーは…これくらい…かなｗ？

では次もよろしく！

第５０話　１１５１４１５５４１７４５２（前書き）

今日更新となりました。ハイ
次は金曜日かな？

ではどうぞ！

第５０話　１１５１４１５５４１７４５２

そしてほとばしる青い閃光！

男の子を締め上げていたクラウンを瞬時に切り裂き、息の根を止める。

それだけでは終わらない！

そのまま辺りのクラウンを次々に切り裂く！

抉る！

刈り取る！

「ガアアアアアアアアアアッッ！」

ガルルセイバーを構えた、青いキバが怒りの咆哮を上げる。

その衝撃にまわりのクラウンは苦しそうに耳を押さえ、うずくまった。

「ラァアアアアァアアアァァッ！」

流れるように切り裂き、野獣のような動きでクラウン達を攻撃して

いく！

時に馬乗りになり

時に喉元に噛み付き

時に爪を強化させて切り刻む。

美しい月がその野獣を照らし、同時に絶大な力を与える。

『ヒャハハハハハ！』

『ヒャーハハハハハハッ！』

クラウンはナイフを構えて一斉にキバへと向かう。

2、3体ならばキバも受け流す事はできただろう。

だが相手は20体くらいを超えている、キバは抵抗むなしくクラウンの群れの中に消えていった。

それはまるで餌に群がる鳥たちの様

キバは無数のクラウンに囲まれ、ナイフで滅多刺しにされる

・・・筈だったが、そうはいかない。
紫の光が周りのクラウンを吹き飛ばす！

「うらぁあああああああぁあッッッ！！！」

ドッガハンマーにチェンジしたキバは
その厚い装甲とパワーでクラウンを弾くと、渾身の力を込めて地面を叩く。

その力がエネルギーの衝撃を発生させ、キバの紋章を形作った。
そこに触れたクラウンは皆まるでステンドガラスの様に変質し、動きを止める。

そしてキバはもう一度同じ様に地面を叩く！
すると、ガラス化したクラウンはばらばらに砕け散った。

「はぁ…はぁッ！」

長時間のウェイクアップはキバの体力をみるみる削っていく。
しかしここで止まる訳にはいかない。

クラウンの群れはまだまだいるのだから

「うおおぉおおおおおっ！」

バッシャーに変わり水流弾を撃ちまくる。
キバは襲い掛かる疲労を無視するかのように力強く引き金を引くのであった。

「うぅ…」

川辺で拓真はうずくまる。

先程よりはマシになったが、まだ強い吐き気が彼を襲う。

もう何でもいいから開放されたい、そんな事を思いながらも彼は答えを出し切れずにいた。

わかっている。

オルフェノクになればいいだけの話しなのだ、そうすれば自分も戦える。

何度も思った。

でも無理だった！

どんなに分かったつもりでいて、決断した気になっていても結局自分は怯えるだけ。

何もできない、していない！

「拓真！」

そんな時、彼の心に光が灯る。

「友里ちゃん！」

拓真は安心する。
そうだ、友里ちゃんなら分かってくれる。
彼女なら僕を攻めたりなんかしない！

「あ…」

しかし友里の手にはファイズギアと変身一発。
拓真の心にどす黒い感情が湧き上がってきた、どうして？
なんで…

「友里…ちゃん？」

「拓真…お願いがあるの…」

友里は少し申し訳なさそうに目をそらすが、すぐに拓真を直視してベルトを差し出す。

「っ！　お願い拓真、戦って！」

「・・・ッッ！」

「ゴメンね…、でもこのままじゃこの世界も！皆も危険なの！ううん。皆死んじゃう！

でも拓真が変身すれば少しでもその可能性は少なくなる！

もしかしたら――」

限界だった。

拓真の意思とは関係なく、彼の心は爆発した。

「じゃあ！友里ちゃんは僕に化け物になれって言うのか！？」

「ッッ！」

「友里ちゃんはいいよ、別に変身しなくていいんだからさ！」

やめろ！

拓真の理性がそれを止めようとする。

しかしうまくはいかなかった、強い口調で叫んでしまう。

彼は初めて友里の怯える姿をみたかもしれない。

「拓真…」

「くっ…！」

拓真は友里から目をそらす。
申し訳ない気持ちと、どうしようもない怒りが拓真に降りかかる。

「そう…だよね。ごめんね拓真…」

後ろから震えるような声が聞こえる。
拓真は耐えられなくなって振り返った。

謝ろう。そう思って・・・

「え・・・」

その光景は拓真は信じられないモノだった。

友里が…飲んでいる。

変身一発を

「友里…ちゃん…？」

何で…？

どうして彼女はその薬を飲んでいるんだ？

意味が分かってるのか！？

拓真の思考がついていけない。
友里は変身一発を全て飲み干すと…

苦いね

…と笑った。

その笑顔はいつもの彼女と一緒。
拓真もつられて笑みを浮かべる。

「うぐっ……ッ！あぁ！」

友里は胸を押さえて苦しそうにうめく。
拓真はまだ回復しない意識のなか、彼女に手を伸ばした。

しかし友里は大丈夫！と、拓真から離れる。

「拓真ぁ……聞いて、お願い…」

「え……え？」

友里は彼の眼をまっすぐ見つめて、そして口を開いたのだった

第５０話　１１５１４１５５４１７４５２（後書き）

次のライダーの画像を見ました
やっぱり４がイメージされてるんですね

デザインは…まあいいんじゃないかなｗ

では次もよろしく！

第５１話　０１４１３２５５２４４３１２（前書き）

本当は金曜日に更新しようと思ってたんですが
すこし金曜日に用事ができてしまい
今日更新となりました　ではどうぞ！

第51話　01413255244312

拓真は言ってくれたよね、どうして僕の事を守ってくれるのかって…

違うんだよ。
ゴメン拓真、守ってもらっていたのはあたしの方
あたしなんだよ。

昔から正義感は強い方だった。
悪い事が許せなかった、それがどんな小さな事でも

あたしは正義の味方、
ううん。正義でいたかった。

だってそうでしょ？
正しいことばかりしていたらきっと神様はご褒美をくれるって、信じてたから！

だけど…できなかった。

無理だった。怖かったの、誰かに注意したり駄目って言ったりするのが
せいぜいそう振舞えたのは幼稚園まで。
小学校からは…

結局あたしは心で反発するだけ。
カンニングの手伝いを強要されたり、
ちょっと強い子が誰かをいじめようと提案した時、

あたしは嫌だっていえなかった。

だって嫌だなんて言ったらあたしがいじめられちゃう…

なにもしない。
見てるだけ、だけどいじめられてる子が助けを求めても知らないふり…

最低だ。

自分が嫌いだった。

苦しかった辛かった嫌だった！

自分が思っていた自分と違う！でもそれはあたしが弱いから！

そんな時、あなたを見つけた。
クラス替えで一緒になった君、
その時は同じマンションに住んでるなんて知らなかったっけ。

最初は気の弱そうな子としか思わなかった。
だけど、同じクラスの子がやんちゃな子にいじめられてる時…

やめなよ…
そう言いたかった。

だけど…駄目！

いえない！

あたしがいじめられる！

そんなの嫌ッ！

「やめなよ…嫌がってるじゃないか…」

「ッッ！！」

だけど…
あなたは凄く嫌そうな顔だったけど…

確かにそう言ったね、

「あ？」

胸倉を掴まれてもあなたは怯まなかった。
強い目で、また拒絶の言葉を口にした

「…やめろよ。殴りたきゃ僕を殴れよ」

…かっこよかった。
あなたは結局その後ボコボコにされちゃったけど…

あたしの心に光が灯った。

あなたがとても眩しく見えた！

「大丈夫…？」

「え・・・？」

手を差し伸べる、あなたはすこし戸惑ったけど小さく言ったね

「僕に近づかない方がいいよ。君まで変な目でみられる」

そう言って一人で立ち上がろうとするあなたを、あたしは抱きかかえた。

「・・・どうして」

「だって…」

それが…ただしい事だから。

「あたし、友里。園田友里」

「犬養…拓真」

「うん！拓真、よろしくね！」

それが私とあなたの出会い

「…拓真、一つ聞いてもいい？」

「何…？」

「どうしてあんな事言ったの？」

「・・・見過ごすなんてできないよ。
気持ち悪くなるんだ、だから止める。

もしそれで僕が殴られたとしても…僕はそれで納得できるから…」

「っ！」

あなたを守りたい、あなたと一緒にいたい。
本当にそう思った・・・

あたしにはできない事、
できなかった事。

でもあなたは…拓真は違う。

「拓真…大丈夫だよ」

「え？」

拓真は私が・・・

「守ってあげるからね…」

そう言って友里はファイズギアを置く、だってコレは彼のモノ。

そしてそのまま拓真に背を向けると走り出した。ラボへ！

「・・・」

拓真はぼんやりとファイズギアを拾い上げる。

「・・・ッ」

ポタリと、ファイズギアに一粒の雫が落ちた。

「・・・クソぉおおおッ！」

ファイズギアについているアイテムを乱暴に引き剥がし、川へ投げ捨てる。

「くそっ！クソッ！ちくしょう！」

一つ、また一つ、川へとツールを投げ捨てていく。

悔しくて、悲しくて

死にたくなった。

いや、違う、殺した。

僕が

友里ちゃんを。

大好きだった、女の子を

『きゃはははははは！』

『アヒャハハハッハハハハハ！』

「ぐわぁ！」

クウガはクラウン達の攻撃を受けて地面に倒れる。
数が多すぎるのだ。クウガの疲労は蓄積されつづけ、クラウン達は続々増えていく。
そんな長期戦でいつまでも優位にたてる訳が無い。

『ユウスケ！！』

「ははっ、ちょっとキツイかも…」

ぞろぞろと現れるクラウン達にクウガは敗北寸前だった。
しかし負けられない。
ここで倒れればこの世界は終わるのだから

「この世界の皆だって笑っていたいんだ！
ゲーム？刺激？ふざけんな！」

クウガはクラウンの肩を掴みとび蹴りを食らわせる。
しかし、威力が弱い！
連戦に次ぐ連戦でクウガの精神はもやは限界に近かった。

『ハヤハッハアハハハアッッ！』

「ぐぁぁあっ！」

クラウンのとび蹴りをまともに受け、
クウガはついに立ち上がる事すら難しい程のダメージを受けてしまう。

『きゃはははははーあは！』

「くそっ！動け！動けぇえ！」

全身に力を入れるが…力が入らない。

絶体絶命

クラウン達はクウガに止めを刺す為にナイフを構えた。

だが、その時…

その音声が場に響くのだった

『Ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ』

第５１話　０１４１３２５５２４４３１２（後書き）

まあ次は土曜かな？

一番最初に買ったライダーのゲームはファイズでした
友達とやってたんですが…
謎の筋肉痛になりましたよｗｗ

では次もよろしく！

第５２話　４４０４９３４１（前書き）

今日はコレ更新して寝ます
明日っていうか…今日はのんびりできるんで
他の皆さんの小説を読もうかな

では、どうぞ！

第52話　44049341

「！」

『ヒャハ……』

クラウンですら沈黙し、音がした方向をみる。

「ゆ、友里ちゃん！？」

『友里！あんたまさか！』

友里の腰にはベルトが巻かれていた。
そしてその手には銃の様なモノが握られている！

「・・・」

友里はその銃をベルトに装填した。
そして、眩い光が彼女を包み込む、青い光…

『Ｃｏｍｐｌｅｔｅ』

「なっ！」

黒と銀、そしてオレンジの瞳、友里はデルタを選んだのだった。
デルタは銃。デルタムーバーを引き抜くと口元に持って行く。

「ファイア」

『Ｂｕｒｓｔ　Ｍｏｄｅ』

音声がなり、それと共に引き金を引く。
すると、青白い光弾がクラウンに向けて発射された！

『ギョエェエ――』

『ビャハハッ――』

まさに、一撃だった。

光弾に触れた瞬間クラウン達は燃えるように消滅していく。
対オルフェノクの名に恥じぬ威力と言ったところか――
あれだけのオルフェノクはものの数十秒で全て消滅した。

「友里…ちゃん…っ」

「大丈夫？ユウスケ、薫！」

デルタはクウガの手を握り、引き起こす。

「あ…うん。だけど友里ちゃん…」

「大丈夫！大丈夫だよ！」

デルタは強引に話を打ち切る。
空はすでにオレンジに染まろうとしていた。

「もうすぐタイムリミット。
だけどのこり三十分に開始されるラストチャンスで一気に決めちゃうんだから！」

そう言ってデルタは変身を解除し友里へと戻る。
だが、ユウスケ達は一瞬だけだが確かに見えた
見えてしまった。

友里の姿が白黒の化け物になっていたのを

「・・・どうしたの？」

拓真の心はぐちゃぐちゃになっていた。
だがそれでも目の前で泣いているウノを見過ごす事はできない。
うつろな瞳でウノを見つめる

「もうすぐ…爆弾が…爆発しちゃうって…グスッ」

だから泣いているのか、当然だ。

いつもならば…大丈夫だよ。拓真はそう言っていただろう、
だが今の彼にそんな言葉をかける勇気も資格もなかった。

何も言わずに黙り込んでしまう

「死ぬのは…怖いよぉ！」

声をあげて泣き始めるウノ。
拓真も泣いてしまいたい気分だった…
何も声を掛けれずにただ呆然と立ち尽くすだけ

「もっと・・・やりたい事だって！
したい事だってあったのに！」

「っ！」

したい事、やりたい事・・・

友里を守りたい、それが拓真のやりたい事だった。
だが…
彼女は

人間の彼女はもう死んだのだ

「……夢」

「え…？」

「ウノくんは…夢、ある？」

「・・・」

拓真の弱々しい一言に、ウノはすこし動揺する。
どうしてそんな事を聞くのだろうという思いと、自分の夢…
しかし、彼はハッキリと答えた

「ぼく……ッ！」

ウノは言う。

生きたいと

生きて檻に囲まれていない空が見たいと！

「・・・・・・」

普通の人間、普段の日々を生きているなら絶対に抱かない夢。

拓真は思う、

もし自分が今からでも覚悟を決めたなら…

いや、無理だ。

どうせ自分にはできない。

いつもそうなんだから、今回もそうなんだろう。

結局…友里ちゃんを守れなかった。

「大丈夫だよ」

「え？」

「！」

自分が言えなかった言葉を、前から歩いてきた翼は平然と言ってのけた。

「先生…」

「もうすぐラストチャンスが始まる。そこで全てが決まる」

でも大丈夫、そう言って翼はウノを優しく撫でた。

拓真は疑問に思う。

なぜ！

どうして！？

根拠もない事が言えるんですか！

その疑問さえ、翼はにこやかに笑って答えた。

「僕達が諦めたら終わりだと思わないかい？せめて最期の時まで戦い続けようよ」

だって、僕達は…

翼は

「達」

と言う事を強めて言った。

「正義の味方。仮面ライダーなんだから」

「・・・・・・！！」

過去、自分だって見たことがある。
正義のヒーロー。どんな時でも諦めない、そして奇跡が起きる

「だけど…僕は駄目なんです。
結局迷ってばかりで…友里ちゃんを守りたかった。
こんな僕にヒーローを語る資格なんて…」

だったら、と翼は笑う。

「死んでみるのも悪くないかもしれないよ」

「・・・えっ！？」

翼は時計を確認すると緊張したようにため息をつく。

「もうすぐ三十分前だね。僕はもう行くよ」

翼は拓真に待ってるよと笑い、走り出す。

拓真は今言われたことを何度も繰り返し、理解しようとした

死んでみるのもいいかもね

第52話　４４０４９３４１（後書き）

「知っているかいフルーラ…」
「どうしたのゼノン？」

「まあコレはあくまで噂なんだけど…
デルタは最初女性ライダーでいく案だったそうだよ」

「まあ！そうだったの？」

「あくまでそう言う噂なだけだけれどね
そう言われてみればどことなく
女性的なフォルムだとは思わないかい？」

「う、うーん…
そう言われれば…そうなのかしら…？」

「まあ所詮噂だから
あまり考えすぎないほうがいいんだけれどね」

どうなんでしょうね、実際。
まあ私は三原が一番好きなんで変わってくれて良かったような…？

次の更新は日曜日で
では次もよろしく！

第５３話　８３７４（前書き）

明日からの更新は申し訳ないんですが不定期になりそうですね
月、水、木くらいは更新できるといいんだけど

ではどうぞ！

第５３話　８３７４

『ラストチャンスの場所はこの街にあるスーパーアリーナとなっております。
人間の皆様が無事に生還できる事を心から願っておりません
道化師』

電子掲示板にその文字が何度もリピートされる。

「どこまでもふざけやがって・・・」

ユウスケは怒りに満ちた表情で壁を殴る

「でも、道化師って奴がラストチャンスを設けなかったらボク達今頃絶望してますよ…
くやしいけど、このラストチャンスはありがたいです」

亘の言葉に皆無言で頷く

ユウスケ達はアリーナの入り口に立っていた。
翼も合流し、いよいよこの世界の命運を決めるであろう戦いに挑む。

「・・・」

司は携帯でなにやらメールを打ち、送信する。
そして皆にむかって作戦を伝えるのだった。

「は!?本気か司!」

「大丈夫なの、兄さん?」

「ああ、というかコレしかない」

司の作戦はかなり衝撃的なものだった。
圧倒的に勝つ確立が低い、だがしかし司はこれしかないと言う。

「どうせ、道化師の野郎は全うに勝負を挑む気なんて無いさ。
この作戦以外だと時間切れで確実に終わりだ」

「そうだね、僕もそう思うよ。ここはかなり危険だけど司君の作戦でいこう」

翼がそう言うと皆はこくりと頷く。
流石に緊張してしまう、数字は今だに千を切ってはいない。

つまり千を超えるクラウンを三十分で倒さなければいけないのだ

「大丈夫、大丈夫だって！あたしがバンバンっってやっちゃうからさ！」

友里は明るく笑う。
不安は強いが司達も頷き、それぞれの配置につくのだった。

「・・・」

拓真の心は揺れていた。

ウノの夢、

自分の夢。

叶えられなかった夢と望む夢、

拓真の心に今からでも間に合うのではないかと言う期待と、
今さら自分に何ができるのかという迷い。

そしてなによりファイズギアはツールを含めバラバラになって、川に沈んでいるのだ。
それを今から探しに行って間に合うわけがない

だが、迷う。

どうしてこんなに苦しいのか自分でも分からなかった。
いっそ全てを放棄して死ねば楽になれるのだろうか…？

「拓真！」

真志がこちらに走ってくる。
拓真は目を合わせる事なく、身体だけ真志の方へ向いた。

「・・・どうしたの？」

「お前に一つだけ聞きたいことがあるんだ」

「・・・なに？」

「拓真、お前の夢ってなんだ？」

「えっ？」

真志はなんの遠慮もなくそんな事を聞いてくる。
瞬間、拓真の心に笑顔の友里が浮かぶ、

「ッ！僕は――」

「あー、答えなくてもいい！でも、一つだけ覚えておいてくれ」

「え・・・？」

「いいか、拓真。夢ってヤツはさ、たとえ叶わなくとも持ってるだけで意味あるよな。
なんか、生きる気力とか活力とか沸いてくるつうか。
オレ、世界中の人が幸せになれればいいとか思ったりして」

ハハハと真志は苦笑する、

「ま、叶わないよな。だけどな、よく考えてみろ。
お前の夢はまだ叶うんじゃないのかよ！
終わってないんだよな！」

友里を守りたい。
それは真志はとっくに分かっていた。
だからこそ、拓真に気づいてもらいたかった。

拓真はオルフェノクになる事を恐れていたのではないと

「友里はどんな姿になっても友里だろ！
お前も！友里も！
そう思ってるんじゃないのかよ！」

「……っ！」

あぁ・・・そうだったんだ。簡単な事だった

拓真は自分の本当の気持ちに気づく。

あの時、変身一発を飲めなかったのは
オルフェノクになるのが怖いからだとばかり思っていた。

だが、違うのだ。ただ単に、

友里ちゃんに嫌われたくなかったんだ・・・

化け物になる事で友里が自分を恐れてしまうのではないかと、怖かったのだ

「そんな事あるかよ！」

「！」

まるで心が分かってるかの様に真志はそれを否定した。

「友里はそんなヤツじゃない！
お前がどんな姿になろうと、お前の事を変わらずに想っていてくれるだろ！

そう言うヤツだ。
それは、お前が一番知ってるんじゃないのかよ！
そうだろう？」

今まで友里と一緒に過ごしてきた日々、思い出が蘇る。
ああ、そうだ。
友里ちゃんは…優しくて
強いから・・・

「僕っ……友里ちゃんを信じられなかった…ずっと好――」

好きだったのに、その言葉を真志は止める、

「だからさ、まだ終わってないんだよ」

「終わってない・・・？」

「そうさ、拓真。

つか、お前いくら親しい人だったりしても傷つけないとか疑わないなんてありえないぜ。
だってオレ達人間なんだからな。
大切なのはそれからだろ？そう思わないか？」

拓真の瞳に少しだけ光が灯る。

「拓真、お前は友里を守れる力が手に入るって分かったとき、嬉しかったろ？
だってお前の夢だもんな。嬉しいよな！」

それが夢を持つものの特権だろ？
真志は笑う。

もうすぐ世界も自分も死ぬかもしれないのに

「まだ、お前の夢は終わってない。友里を、皆をまだお前は守れるんだ！」

「っ、僕は…まだ…」

どんどん大きくなるその光、拓真の中にいるマイナス思考が消え去っていく。

「どうだ?嬉しいか?嬉しいよな!夢はまだ終わってないんだ」

そして真志は両手を広げる。

「皆、夢をもってるんだよ」

「あ・・・」

ウノの夢を思い出す。

生きたい。

当たり前のような事、だけど彼にとってはそれが希望なのだ

「皆にも、夢が、希望がある!

だから頼む拓真。どうか皆の夢を、希望を…」

そう言って真志は拓真にそれを投げつける。
拓真はそれを受け取った、

そしてその眼にともる光

「守ってくれないか？」

「・・・」

拓真はそれを受け取る。『変身一発』

「辛い役目を押し付けるな…すまん」

真志の言葉に拓真は首を振る。

――と、同時に携帯がなった

「司くんからだ…」

司からのメールはとても短いものだった。
しかし拓真はそのメールを何ども読み返す。

そして笑った。

「ううん。そうだね、僕の夢は終わっていないんだ。諦めるのはおかしいよね」

翼の言葉を思い出す

僕はもう吹っ切れた。

いっそ死んで、楽になるよ

第５３話　８３７４（後書き）

まあ、ライダー関係ないんですが

タイバニ２期
ＯＰの折り紙カッコよすぎだろ…ｗ

では、次もよろしく！

第５４話　１５０１９２６４（前書き）

予約投稿を初めてやってみました。
いけたか？

ではどうぞ！

第５４話　１５０１９２６４

「友里、いいか？」

「おっけー！変身！」

『Ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ』『カメンライド』
『Ｃｏｍｐｌｅｔｅ』『ディケイド！』

二人は変身を完了させ、ホールの扉の前に立つ。
覚悟を決めたはずだが、襲い掛かるのは

恐怖、

緊張、

そして重圧。

もしも、自分たちがクラウンを全て死滅させる事ができなければ…

「中がやけに静かだな…気をつけろよ」

「そだね。じゃあ・・・行くよっ！」

二人はドアを開けて素早く中に転がり込む。
アリーナホールは真っ暗で、とても静かだった。

「・・・」

「・・・」

だが、ゲストが登場した事をきっかけに、ホールに明かりが灯る。

ラストチャンスの始まりだ。

「くっ！！」

「ッ！」

分かっていた、理解していたつもりだったが…

その光景に目を疑う。

アリーナホールの客席にクラウン達が座っている！
１０００を超えるクラウン達が皆同じように腰掛けている！

「・・・」

これを…全て、あと三十分で…

「うぅうう…」

アリーナホールはあまり大きくない、そのせいで客席全てが満席になっていた。
それがむしろ逆に恐怖と緊張を倍増させていく。
満席になっているスタジアム、異常な光景。

そして、電子掲示板に表示される残りクラウン数と時間。
始まりを告げるブザーが鳴り響いた。

『・・・ハハ』

『・・・ヒャハハ』

ヒャハあああああああアアア八ははハハはヒャハハハはヒャハッはやははあハッはハッハハハハッはハハッはーッハハハハッッハハハはははきゃハハはくひゃはぁぁあアアアァアアアアアアアハハハハハハーハハハハハハハハアハハハアハヒャハハハハハハギャハハハハハハはハハハハハハはハアハアアアアアアアアアアアハハハハハハハアハハハハハ！！！！

アリーナホールに狂気の大爆笑が巻き起こる。
それだけではない、クラウン達は一斉に立ち上がると、
ディケイドとデルタを無視して、自分の席から一番近い出口に走っ

ていく。

ホールの出口は全部で四つ、東西南北に設置されている。

それら出口へとクラウン達は向かう。

結局、道化師は人間に勝たせると言う事など考えていない。

残りのクラウンを全てを一箇所に集めると言う事で人間に希望を持たせる。

そしてすぐにクラウン達を散り散りにさせ、タイムアップを狙う。

希望を持った人間が絶望に落ちるだけのイベント。

それが道化師の仕掛けたラストチャンスだった。

『ヒャハハ！…アヒャ？』

クラウン達は扉を開けようとする。

しかし開かない！

クラウン達は外に出られずただ混乱するだけ

「うおおおおおおおおお！」

足止めされたクラウンに打ち込まれる青い弾丸。

そう、司は分かっていたのだ。
クラウン達が逃げることを！

だからこそ対策をとる！

「やっぱり逃げるつもりだったのか！ふざけやがって！」

南扉をタイタンフォームが、
東扉をアックスフォームが、
西扉をストームフォームが、
そして北扉をドッガハンマーを構えたキバがそれぞれ押さえつけて

いた。

戦力が激減するかなり危険な賭け。
しかしここで誰かが鍵の役割をしなければクラウン達は外に逃げてしまう。

もはやこれ以外に道は無い。
いや、他に道があったとしても彼らには思いつかなかった

「うらぁあああああッ！」『カメンライド』『アギト！』

ヒャハハハハハハハハハハハ！！

何百ものクラウンの中へ飛び込んでいくデルタとディケイド。
デルタの弾丸は一撃でクラウンを葬り去るが、ディケイドはそうもいかない。
残りクラウン数と時間に焦りを感じる。

『フォームライド――ストーム！』

だが、諦めない。
諦めるわけにはいかない。

心が死ねば、その時点でこの世界も…

自分達も死ぬ。

「はァアアアアアアアアアッッ！！」

巻き起こる嵐、次々と巻き上がるクラウン。

そして…笑う声。

バヤハハハハハハヒャハハハハ！

「ぐあああああ！」

背中に鋭い痛みを感じて振り返る。
客席に座っているクラウン達がナイフを投げてきたのだ！

一つ一つは小さいものだが、数が多すぎる。
ナイフはまるで鳥の群れの如くホールに飛びかっていた。

他のクラウンに刺さろうがお構いなしに！

「くっ！友里！」
『カメンライド・クウガ！』『フォームライド・タイタン！』

タイタンフォームに変わりデルタをかばう。

「司！大丈夫っ！？」

「ああ、お前が頼りだからな！しっかり頼むぜ…ッ」

「う、うん！」

無数のナイフもタイタンに変われば何の事はない。
しかしクラウン達はそれを瞬時に理解すると、群れを成してディケイドにのしかかってきた。

「ぐうぅうっ！」

重い！重すぎる！
すぐに地面に倒れてしまうディケイド。

そこにクラウン達は馬乗りになってナイフで刺しまくる。
助けようとしたデルタも、嵐の様なナイフに巻き込まれ、引き離されてしまった！

「ウッ！あぁあああっ！」

「ぐあぁあああ！」

「兄さんッ！」

「友里ちゃん！」

ゲート越しにキバ達はその絶望的な状況を確認する。
助けに行きたい！

その衝動に駆られるが、動けない！
ここを動いてしまえばクラウン達が外に逃げ出してしまう！

詰み、まさに最悪の状況だった。

しかしそんな彼らの心情をあざ笑うように、狂気の爆笑は尚も続くのだった…

第５４話　１５０１９２６４（後書き）

友里デルタの変更点はとりあえず

ツール、デルタショットが追加されています

くらいかな…要はグランインパクトが使えるって感じですわ

次の更新は…木曜辺りですね

では、次もよろしく！

第５５話　７１４３７５５５（前書き）

クロスオーバーをやりたいと思いつつ…
やったらぐだりそうな気もする

うーん難しいｗｗ

第55話　71437555

「くそぉおおっ」『カメンライド・キバ！』

ひゃははは！

カメンライド時に発生する衝撃波でクラウン達を吹き飛ばす！
しかしすぐに足を、

手を、

肩をつかまれ引き倒されてしまった！
しかも手を掴まれているせいでカードを持つことができない！

「どけぇえええええええッッ！！」

ヒャハッハハハハハハ！

「うわぁあああああ！！」

ナイフでズタズタになりながらも、
デルタはディケイドを抑えているクラウン目掛け発砲する。

次々にクラウンは灰に変わるが、尚もナイフの雨はデルタに振りかかっている。
激しく火花を散らす装甲。

そして切りかかってくるクラウン。
一撃で倒せるデルタも、限界が近づく。

ヒャーッハハハハハ！

「ぐっ！がぁあああ！」

殴る、蹴るの嵐がディケイドを、
無数のナイフが、デルタを襲う！

ヒャハハハッツ！

「しまっ！」

クラウンの一体がデルタムーバーを弾く、
デルタはすぐに拾おうと手を伸ばすが…

その時だった――

「アッ！

ぐぅっっ…ガフッ！」

クラウンの拳がわき腹を抉る。
あまりの苦痛にその場に倒れるデルタ…

「大丈――――がはぁッッ！！！」

ディケイドの首を締め上げ、クラウンは楽しそうに振り回す。
そして二、三回地面に叩きつけると、デルタの所へ蹴り飛ばした。

「「ぐあぁあああああああ！！」」

吹き飛ばされる二人、

数百体のクラウンオルフェノク。

迫り来る制限時間、
減らないメーター…

「良太郎！ヤバイで！」

『良太郎。アレで行こうぜ！』

『そうだね。限界だ！二人助けに行こう！』

電王は何かを決心して扉を開けようとする。

しかし――

「言った筈だよ電王。邪魔しないでくれってね」

「ゼノン君・・・！」

電王の後ろでダブルが銃を構えて、ベンチに座っていた。

「君がいきなりアレを使わず、
さらにディケイドを壁役にしなかった事はボクらも不思議に思っていたんだ。

何故だい？
君は彼らのなかでも一番強いはずだ」

『・・・司君に頼まれたんだ。
でも、もう限界だよ、助けに行かなくちゃ！』

『残念だけれど、させないわ』

『え！？』

「ボクらは救世主の登場を大人しく待とうじゃないか。
ねえ？電王」

ダブルは扉に照準を合わせている。
ここで抵抗すれば扉を破壊されるだろう。

電王は大人しく従うしかなかった

「しかし、電王。君は分かっているのかい？
このまま君が彼らに味方するという行為が、
どのような結果をもたらすのか…」

「ッ…」

『もう既に貴方たちはその領域に足を踏み入れてしまったのよ？
そこまでして彼らに味方する理由が貴方達にはあるのかしら？』

フルーラの問いかけに電王は少しだけ動揺を見せる。
しかし、直ぐにその迷いを否定するかのように答えた

『ぼく達は人間だ。そして彼らは友達なんだ…
友達は助ける。それだけだよ』

「ふぅん。まあ…君がソレでいいならボク達は何も言わないけれどね。
電王、君はこの世界・・・滅ぶと思うかい？」

ダブルの問いに迷わず電王、良太郎は答えた

『絶対にこの世界は滅ばない』

ダブルはニヤリと笑う。

やはり・・・面白いね

その時だった、バイクのエンジン音が外から聞こえてきたのは。

第５５話　７１４３７５５５（後書き）

次は土曜日です…ね
まあ土日でファイズ編はほぼ終わるかな…たぶんｗ

では次もよろしく！

第５６話　２２７２５５４１７４５２（前書き）

すいません！
土日じゃファイズの世界は終わらないと思います（爆

あと今回、人によってはモヤモヤする所で終わるかもなんで
明日に溜めてみるってのもいいかもしれません

ではどうぞ！

第５６話　２２７２５５４１７４５２

ヒャハハハハハハハハ！！

「ぐっ！…ハァ…ハァ…ッッ！」

デルタとディケイドは立ち上がる。
彼らは自らの命が無くなるまで戦うのをやめないだろう。
圧倒的絶望、しかし彼らは歩き出す。
歩かなければならないのだ。

たとえナイフで切り裂かれようと、
殴られ蹴られようとも。

ヒャハハハハハーッハハハハハアハハハハハ！！

ナイフを構えてクラウン達が走り出す！

次は、耐えられる？

それとも……

「うおおおおおおおおおおおおおお！」

銃を構える！向かってくるクラウン！

守る、その為に…戦う。私は…

ヒャハハハハハハハ
アハハハハアハハハハアアアアッッ
ハハハハハアハハハハハハ！

「・・・・・・・」

デルタは膝をついていた。
雨のようなナイフは彼女の体力と精神を確実に奪っていたのだ。
目の前には大きくナイフを振り上げているクラウン。

ディケイドが何か叫んでいるがうまく聞き取れない。
徐々に意識ももうろうとしてくる。

「大…丈夫……だよ…拓……真」

薄れる意識の中、彼女はそっと呟く。

「私…が…守っ…てあげ…る…か…ら」

大好きな

「あ…な…た……を…」

ごめん。もう駄目かも

さよなら。ごめんね拓真

彼女はそっと口にする、届くだろうか？

バイバイ

『バヒャッバババババババ！！』

「！」

突如、無数の弾丸がデルタの前にいたクラウンをぶち抜いていく。

「え・・・？」

『ビャハハハーハハハッ！！』

さらに鉄拳がクラウンを吹き飛ばす！

『ピピピピピ』

デルタの前に立っていたのは…

オートバジン！

「え…？あ…」

鮮明になっていく意識

「へへっ！遅すぎなんだよーッ！！」

マジで焦った、
そう言ってディケイドはその方向を指差す。

「あ・・・」

デルタはその方向を見る。

そして、見つけた！

「あ…あ…！」

どうしてだろうか、デルタ。
友里の目から涙があふれてくる。

でも、震える声であろうとも、彼女は笑う。

「遅い…ぞっ！拓真ぁ！」

その視線の先には…

犬養拓真！

「遅くなってゴメン。司君、友里ちゃん」

クラウン達も何事かと黙り、拓真の方に視線を移す。
拓真はクラウン達を睨みつけると、

自らの正義。ファイズギアを取り出した。

それを腰に装着し、ファイズフォンを手にする！

『5』

そして拓真は思い出す。
あの時――

「辛い役目を押し付けるな…すまん」

真志の言葉に拓真は首を振る。
と、同時に携帯がなった

「司くんからだ…」

司からのメールはとても短いものだった。

闇を切り裂き、光をもたらす　夢の守り人　ファイズ

拓真は何故かおかしくなってプッと吹きだしてしまった。
でも、なにか熱いものが込み上げてくる

「ううん。そうだね、僕の夢は終わっていないんだ。
諦めるのはおかしいよね」

拓真は変身一発を一気に飲み干すと、

苦いと笑う。

真志は少し複雑な顔をしながらも、しっかりと笑い返した。

だが、拓真の顔が真っ青になる。
そうだ、ファイズに変身するための道具を川に投げ捨ててしまった。

しかもツールを全部バラバラにして！

「くっ！」

今から拾いに行けばぎりぎり間に合うかもしれない！
せめてベルトとファイズフォンだけでも――

「行くのか、拓真？間に合わないかもしれないぜ？」

「それでも…僕はもうっ迷わない！
迷いたくないんだ！

迷っているうちに誰かが傷つくのはもうたくさんだ！」

それを聞いて、真志はうつむく

「――たぜ」

「え？」

「待ってたぜ、その言葉！」

『5』

「待ってたって…？」

顔を上げた真志はニヤリと笑っている。
そして、ポケットからソレを取り出した。

「あ！それ！」

それは泥だらけになったファイズフォンだった。
怒りに任せて川へ投げ捨てたツールの一つ。

「あ・・・」

そこで初めて気づいた。
真志のズボンが泥だらけだと言う事を！

「ま、ポケットに入れるのはちょっとアレだけど
今さら汚れてもな。

里奈ちゃん！」

「はーいっ！」

真志が手を上げると物陰から里奈が現れ、
猛スピードでこっちに来る。

「え？え！？」

訳が分からない拓真をおいて、里奈は真志からファイズフォンを受け取る。
そして自らのポケットからタオルを取り出してゴシゴシとファイズフォンを拭いていった。

「んしょ！んしょ！」

一生懸命に泥を拭い取っていく里奈。
ファイズフォンはみるみる綺麗になっていき…

「よし！できました！」

「よーし、ありがとうな里奈ちゃん！
皆！出てきていいぞ！」

「え！」

真志の合図と共に、学校に待機している筈のメンバー全員が現れる。
それだけじゃない。

皆泥だらけで、手には・・・

「ッッ！！」

「はい！どうぞ！」

夏美はファイズドライバーを拓真へ渡す。

「えへへ、大変でしたよぉ。
我夢くんとアキラちゃんの三人で見つけたんです」

「今の私達にはこれくらいしかできません。
拓真先輩、応援しています」

「僕達に出来ることがあればいつでもいってください。
力になりますから！」

「あ、ありがとう！夏美さん！アキラちゃん、我夢くん」

何故か顔まで泥だらけの夏美達はえへへと笑う。

「はい…どうぞ！」

「ありがとう真由ちゃんっ！」

真由はファイズポインターを拓真に差し出す。

「お兄ちゃんと…
ハナちゃんと一緒に見つけたのぉ…」

「お願いね拓真！」

「フッ、期待してるぞ救世主」

泥だらけなのだが、
無駄にイケメンの双護に拓真は笑ってしまう。

「あはは、まあやってみるよ。
ありがとう、ハナちゃん。双護くん」

「たくまぁー」

「ひっ！」

藻だらけの美歩が背後から現れる。
一瞬化け物かと思って拓真は腰を抜かしそうになってしまった。

「受け取ってくれ拓真。これは君のものだ」

「途中でこけて散々だったおｗｗ」

同じく藻だらけの椿と咲夜は、ファイズショットを拓真に差し出す。

「あ、ありがとう！咲夜さん、椿くん、美歩さん！」

「お前が川にファイズギア投げ捨てるの見ちまって、
皆で拾う事にしたんだ…
余計なお世話にならなくて良かったぜ」

「だったらアンタも汚れろぉおおお！」

後ろから美歩が真志に抱きつく！

「ぎゃあああああああ！藻がぁあああああああ！」

泥と藻で汚れた顔をすり寄せる美歩、
真志は振り落とそうとするが美歩は離そうとしない！

「薄い本もでねぇなこの格好じゃ、あとコレ！」

椿は拓真に腕時計の様なツールを渡す。

「これは？」

「あのロリバカップルが見つけたやつだ」

「え？ゼノンくんとフルーラちゃん！？」

まだ会った事はないけど、
話を聞く限りとても手伝いそうにないのだが…と拓真は思う。
それを感じたのか、椿はニヤリと笑った。

「引きずりこんでやったんだよｗｗ」

「えぇ！？」

拓真は皆から受け取ったモノを組み合わせ、ファイズギアを完成させる。

「それから…君も」

拓真は自分の下へ走ってきたオートバジンを優しく撫で、
そしてそれに乗り込む！

「…じゃあ、行って来るよ」

「おう、行ってらっしゃい」

真志達はいつもの調子で拓真に手を振るのだった。

『5』

拓真は迷うことなくエンターのボタンを押した。

『Ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ』

「僕はもう迷わない。弱虫の犬養拓真は…」

翼に言われた言葉。
それを思い出してバックルにフォンをセットする！

「死んだんだ！」『Ｃｏｍｐｌｅｔｅ』

赤い光がアリーナホールを包み込む。

闇を切り裂き、光をもたらす――

仮面ライダー・ファイズ！

「司君も、皆も、友里ちゃんもっ、僕が守るッッ！」

第５６話　２２７２５５４１７４５２（後書き）

一応今は一人だけ…仮面ライダーと全く関係ない作品のキャラクターをだすつもりではあります。
あまりにもハマリ役というところだったので

まあでも出てくるのはまだ先ですがねｗｗ

では次もよろしく！

第57話　650423552443312（前書き）

駄目だと信じてた未来が崩れ去ろうとしてる

正直ずっとこうだと思ってましたｗｗ

ではどうぞ！

もしかしたら投稿ミスで同じヤツが投稿されてるかも

第57話　650423552443 12

「拓真ぁ！」

「ははっ」

ディケイドは力強く立ち上がりクラウン達を一瞥する

「聞けっ！クラウン共！

今この瞬間ッ！お前らの勝利はなくなった！」

ディケイドは三枚のカードを取り出す。

そう、ファイズの封印が解かれたと言う事だ！

キャハハハハハハハハハハハ！

再びクラウン達は笑いだし、ナイフを構える。

「お前らからして見れば俺達はちっぽけな存在なんだろうな」

だけど

「ちっぽけだから守らなくちゃいけないんだよ！」

ディケイドは三枚のカードをドライバーに放り込む。
ファイズもまた、自らの腕に装備されているウォッチからメモリーを抜き取り、

装着した！

「俺は破壊者ディケイド！この世界のふざけた結末を…」

『アタックライド・イリュージョン！』
『カメンライド・ファイズ！』

ディケイドの両隣に分身が現れ、そのままファイズに変身する。

「破壊するッッ！」

『フォームライド――』

『Ｃｏｍｐｌｅｔｅ』
『アクセル！』

四人のファイズの胸部が同時に展開する。
そして色も黒を中心にした姿に変わった、

ファイズアクセル。超高速の戦士！

『ＲＥＡＤＹ』

メモリをポインターにセットし足へ装備する。

「いくぜ、拓真」

「うん！」

『Ｓｔａｒｔ　Ｕｐ』

刹那、四人のファイズ達の姿が消えた。

そして、それはまさに

紅き光のシャワー

「「うぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおッッ！」」

赤い雨。

いや違うッ！雨ではない！
円錐状の赤い光はクラウンに命中すると動きを止めるポインター！
四人のアクセルが放つポインターの大雨！

逃げようとするクラウン達だが、数が多いことが仇となり逃げられない。
次々と拘束されていくクラウン達。

赤く染まる客席！
もやは彼らは笑っていない！

全滅の危機の前にただ逃げ惑うだけ

そしてこの間、現実時間にしてわずか五秒。
五秒で客席を含む大半のクラウンにロックが施されていた！

「すごい…」

赤い光のなかデルタはポツリと呟く。

だが、本番はこれからなのだ。

愚かな道化達への…

処刑が始まる

「「「「タアアアアアアアアアアアッッ！！！！」」」」

『ビャハアアアアアアアアアアアアアアアア！！』

超高速で放つとび蹴りの嵐！

アクセルクリムゾンスマッシュ！

次々に爆発していくクラウン達、

一つの爆発は連鎖を起こし新しい爆発を巻き起こす！

そこに残るのはΦのマークのみ。

「ウォオオォオオオオオオォオオオッッ」

「ヤァアアアアアアアアっっ！」

客席では赤いウェーブが巻きおこる。

満席だった客席が徐々に空席へと変わっていく！

怒涛の勢いで減少していく残りクラウン数！

守る！

その夢は死んでいない！さあ！自由に飛びまわれ！

「タァアアアアアアアアアッッ！！」

『Ｔｉｍｅ　Ｏｕｔ』

『Ｒｅｆｏｒｍａｔｉｏｎ』

元に戻るディケイドとファイズ。
アリーナは無数のΦが存在するだけで、静まり返っていた。
辺りを包む静寂、もう笑い声はかけらとて聞こえてこない

「終わったな…」

流石にエネルギーを使いすぎたのか、
ディケイドはその場に倒れこむ。

「うん！」

ファイズはディケイドに手を差し伸べる。
これで世界は守られたのだ。

安心する二人。

しかしデルタはそうではなかった。

「待って！止まってない！時間も！メーターも！」

「何ッ！？」

残り時間が止まってない！？

当然だ、残りクラウン数が1を示しているからッ！

「まだあと一体残ってるっ！！」

「馬鹿なッ！」

三人はあたりを見回すがクラウンの気配は無い。

いや、もしかしたらどこかに居るのかもしれないが…

皮肉にもΦの弾幕がそれを隠していた。

「やばい！のこり三十秒しかないッッ！」

29

「だめだ！アクセルが使えない今、見つけても倒す手段が！！」

２８

「どこだっ！どこにいるッッ！！」

２７

叫んでみても何もおこらない！

２６

無常にも残り時間は過ぎていく。

２５

駄目なのか？

２４

この世界は滅びる運命にあるのか？

「・・・」

「違うッッ！」

諦めるなっ！たとえ最期の瞬間だろうとも！

「諦めてたまるかぁあああああああ！！」

そして、その思いがこの状況を――

18

破壊する！！

『ウェイクアァァァップッ！！』

17

亘、そうキバはドッガハンマーを構え辺りを見回す。
そしてそのドッガハンマーに備えられている
トゥルー・アイが真実を映し出した！！

16

「にィィィィィィィさぁあああああああああん！！」

15

亘はありったけの力を込めて叫ぶ！

「北ゲートのすぐ近くの男子トイレ！その個室の中に一人隠れてる！！」

１４

ディケイドは頷くと、素早く二枚のカードをセットした！

１３

『ファイナルフォームライド』『ファファファ５５５！』

１２

ファイズの体が変形し、巨大なバズーカーに変わる！

１１

ファイズブラスター！ディケイドはそれを構えた！

１０

北ゲートの方向へファイズブラスターを向ける！

9

『ファイナル・アタック・ライド』

8

『ファファファ５５５！』

7

「はぁぁあああぁぁあああ！」

6

赤い光が砲口へと集中していく！

5

「やあああああああああッッ！！」

4

発射！

3

強大な赤い閃光は、北ゲートだけでなくその周りも粉砕していく！

2

「・・・・・・・」

沈黙。そして

1

「・・・・ッッ！！」

1

「あ・・・」

「残り時間が・・・」

1

「止まっ…たぁ…」

1

そして、のこりクラウン数

0

「やぁったぁ…」

三人は力なくへたり込む。そして少しずつ笑い出した。

「うはは…！やっぱかったなぁ！
本気で焦ったぞ！あハハッ！」

「あたしもぉぉ！もう寿命縮みまくり！」

それぞれの扉を押さえていたユウスケ達も
集まって喜びを分かち合っているのが見えた。

一番活躍した亘が胴上げされている。

「あー。本当に亘がいなかったら終わってたなー」

「今度何かお礼しないとね！」

すっと、へたり込む二人に差し出される手

「……帰ろうか」

「・・・」

「・・・」

「うん！」「ああ！」

二人は笑うと、拓真の手を握った。

「ねえ、拓真」

「・・・何？」

もし、世界が私達の敵になったとしても

ずっと、一緒にいようね

「・・・うん」

いつまでも、一緒に

二人はその手をしっかりと握る。

しっかりと…握るのだった

第57話　650423552443312（後書き）

イリュージョンの分身は最大で二体呼び出せます
体力は低く、ほぼ一撃で消滅してしまいます
ですが、力を込める事で防御力を高める事もできます

イリュージョンのカードは各世界、一度しか使用できません

まあこんなところかな。
では次もよろしく！

第５８話　１５０１９１５１１２８３７４（前書き）

はい、という訳で今回で話しは一応ラストですね
まあ正確には次の番外編でファイズ編はラストなんですが

ではどうぞ！

第58話　1501915112837 4

クラウン達が全て消滅した事をきっかけに、この街を囲っていた檻も消え去る。
喜びに歓喜する人々、安心から泣き崩れる人もいる。

ウノは帰ってきた拓真達に駆け寄ると、笑顔でお礼の言葉を述べた。
彼の夢は叶ったのだ。

檻に囲まれぬ空を、
生命の希望を、
また得ることができたのだ！

博士やウノの紹介もあってか、
街の人達はそろって拓真達にお礼がしたいと言ってきた。
だが、彼らはソレを断る。

「抑える技術も身につけないとね…」

「・・・」

拓真と友里は、ふとした時にオルフェノクの刻印が浮かんでしまうのだ。
もし、それが街中でててしまったら…

「人は怯え、同時に不信感を抱くだろうな」

「そんなモンなのかねぇ…」

少し離れた所で椿と双護が話していた。

「その場はいいかもしれん。
だが、時間が少し経てば徐々にそう言った感情が芽生えるだろう

な。

それがある意味普通なのだ」

「街中を救ったヒーローなのにな…」

「フッ、人は心にどす黒い感情を常に潜ませているものさ」

「・・・お前にもあるん？」

「ああ、この前もこの心を悪に染めてしまった…」

「な、何ぞ…？

つかイケメンで暗い過去とか…ど真ん中すぎるだろ…」

「聞いて驚くな…」

ごくり、と椿は意気込む

「ユウスケのおやつを…つまみ食いしてしまったのだ…」

「あっそ…」

椿は拍子抜けして、深くため息をつく。
自らの行動の罪深さに苦悩する双護を冷めた目で見つめると、また深くうな垂れたのだった

「夢が…叶ったら…どうなるの？」

拓真は喜びに踊る人々を、屋上で見ていた。
皆本当に嬉しそうで、楽しそうだった。
拓真はそれが嬉しかったが、同時に疑問にも思う。

「また新しい夢をみつけるだけだろ」
司はそう言って笑う。拓真も頷き笑った。

「しっかし…
イリュージョンでアクセルはキツイもんだな…ははっ」
「あはは、動きがロボットみたいだ」

二人は喜ぶ人達とはちょっと違う笑顔を浮かべ、学校へと戻っていくのだった。

一方…

どことも言えぬ書斎の様な場所、そこに女は座っていた。
その眼には拓真の姿が映っており、女はニヤリと笑って視線を移す。

電王、野上良太郎へと

「どうやら、彼らはこのままディケイド側に付くようですよ」

「それが彼らの選択なのかしら！」

「・・・・・・」

女の背後から声が聞こえる、ゼノンとフルーラだった。
二人は相変わらずクスクスとつかみどころの無い笑顔を浮かべて椅子に座る。

ゼノン達は彼女に若干の敬語を使っているあたり、
主従関係の様なモノがあるのだろう。

だが、それでもゼノン達は足を組んで座ったりしているわけだが…

「成る程…ゼノン、警告はしたのか？」

「ええ、もちろん。

チケットも渡しましたよ。それでこの結果です」

女は小さく笑った。それもまた一つの運命だろう

「ああ、でもゼノン。

実はワタシまだよく分かってないの。電王は何がマズイのかしら？」

「そうだね、ならすこしヒントをあげようね、愛しのフルーラ…」

ゼノンはフルーラの手にキスをする。

そしてテーブルに置いてあったティーカップと、ポットを手にした。

「見ててごらん…」

ゼノンは二つのカップに紅茶を注いでいく。

「彼らの世界はとてもよく似ている。
同じ紅茶というカテゴリーに分けられ、
銘柄も近い…」

だけど、やはり同じじゃない。
そう言ってゼノンは右の紅茶にスライスレモンを投入した。
あっという間にレモンティーとホットティーの完成だ。

「良太郎…そう、電王をこのレモンに例えようか？」

そしてゼノンはレモンティーに入っていたレモンを取り出すと、
それをそのままホットティーの中へと移した。

「これが、今の状況さ。
レモンティーの中に入っていたレモンが、ホットティーの中へ移
動した状態」

「分かったわ！ホットティーの味が変わってしまうのね！」

「いや、干渉された側の世界がどうなろうとも
ソレはただの結果としてでるだけでそこまで危険視する必要はないよ。

ホットティーにレモンが入るのはさして問題じゃない」

「まあ、ワタシもたまに入れるわ」

「フフフ、そうだね。だけど…問題はコッチ」

そう言ってゼノンが指差したのはレモンが無くなったレモンティーだった。

「この世界…いや、この紅茶はレモンがあって始めて完成される世界なんだ。
別にレモンが食べられてなくなったのなら誰も文句は言わないよ。

だけど突然レモンが消えちゃったら…それはおかしな事だろう？」

「ええ、そうね」

「うん、だから――」

そしてゼノンはニヤリと笑って新しいスライスレモンを取り出すと、
それを何も浮かんでいないレモンティーに入れる。

「こうするのさ。いや、こうなるのさ」

「新しいレモンが追加されたわ！これで問題はないわね！」

「あはは！そうだねフルーラ。
もうこの紅茶は完成されてるんだ、レモンは一つでいい」

ゼノンはそのままレモンティーを女に差し出す。
女は鼻で笑うとそれを受け取り口を付けた。

そしてゼノンは次にホットティーに浮かべられたレモンをスプーンですくい上げる。

「もうレモンティーにはちゃんと新しいレモンがあるんだ。
だったらもうこのレモンは……

レモンティーには――」

要らない

「フッ…」

女はもう一度良太郎とハナを見る。

「さて…どうする？電王？」

早くしないと…

「ククククッ」

女は楽しそうに紅茶を楽しむのだった。
どの様なルート、そして結末を迎えるのか？

それは彼女にも分からない。
だからこそ…

おもしろいのではないか

第５８話　１５０１９１５１１２８３７４（後書き）

まあ次は多分、火曜か水曜ですかね
その後に少し間を頂きまして次の試練となりそうです

では次もよろしく！

第59話　番外編　　2101629512（前書き）

ここで拓真ファイズの変更点を少し

アクセルフォーム

基本的にはクロックアップと同等のスピードです
しかし感情の変化によって早くなる場合があります

一度つかうと冷却が完了するまで使えません

とりあえずはコレだけですね
ではどうぞ！

あと今回は川拾いの話なんですが、コメディ色が強いです
一応それだけを警告しておきますw

第59話　番外編　2101629512

「・・・クソぉおおおッ！」

拓真はファイズギアについているアイテムを乱暴に引き剥がし、川へ投げ捨てる。

「くそっ！クソッ！ちくしょう！」

一つ、また一つ、川へとツールを投げ捨てていく。
そしてそのまま拓真は走り去ってしまった。

「・・・」

それを見つめていたのは真志だった。

覗き見はよくないと思っていても、
つい隠れて二人のやり取りを見てしまったのだ…

だが、その結果かどうかはわからないが、こんな事になってしまった

「拓真、お前……っ」

自暴自棄ってヤツだろうか、
友里をオルフェノクにしてしまった事を悔やみ、
そして行き場の無い怒りを…

「ッ…」

さて、どうする。オレ？
拓真がこのままファイズにならなかったら世界は滅びるのかね？

ぶっちゃけソレはソレで構わない、そう思う。
拓真を無理やり変身させた所でそれが正しい選択になるのか？

分からない。

だったらこのまま世界と一緒に死ぬのも…

「・・・」

つっても、司達はそうじゃない。だったら――

「うし、やるか……」

拓真、オレ達は辛くてもやらなくちゃならないんだよな。
悪いけど、お前には……

「さてと……あ、もしもし？美歩？」

「と、言う訳で…ここにツールが落ちてる筈なんだけど…」

真志が指差す方向を皆は見る。

「成る程…ってか、
ウラタロスとかバッシャーに頼めば一発じゃないの？」

「あの姿のままじゃここにはこれないよ。
オレ達で探すしかないさ」

その言葉を聞くと同時に双護が川に飛び込んだ。
何のためらいも無い行動に皆は少しだけ驚く。

「割と深いところがあるな。真由、気をつけるんだぞ」

「うん……分かった！」

そして真由も同じように川へと進んでいく。
背の低い真由は深いところでは危ないので双護がしっかりと手を握っていた。

「お前ら……」

次は我夢が飛び込む。
双護は、もう一つの手で我夢をしっかりと支える

「ありがとうございます、双護先輩っ！
本当だ、結構深さがバラバラですね…

気をつけないと…」

一同は頷く。
普段は見てるだけの自分達が役に立てるかもしれないのだ。

それぞれは川に向って飛び込んでいく。

しかし…一人だけ

「っ…」

里奈は申し訳なさそうにうつむいていた。
しかしソレを真司は感じ取り、彼女にタオルを差し出す。

「見つけてもさ、きっと汚れてると思うんだよ。
だから、里奈ちゃんが綺麗にしてくれないか？」

「！！

は…はい！私っ！頑張ります！」

真志は笑ってサムズアップをすると、川へと戻っていくのだった

とまあ意気込んでみたはいいものの、
なかなか小さなツール達を見つけるのは難しく、さっきから探しているが全然みつからない。

散り散りになって探してみたり、
ローラー作戦なんかやってみたがどうにも無駄だった。

深い所は腰まで水があり、長時間の捜索は体が冷えてしまって続かない

「くそっ、早くしないと…」

「もうすぐラストチャンス始まっちゃいますよ…」

あまり時間はない。
皆で手分けをして探すことになった。

とりあえず三人で分かれて捜す。

「うーん…」

椿は両手を使ってツールを探していた。
ゴーグルでもあるならもっと楽に探せたんだろうが…

今は悔やんでいてもしかたない。

適当に手を振り回して、何か当たったらソレが何かを確かめる。
それを繰り返していた。

「うーん…」

すぐに見つかると思っていたが、案外そんな簡単じゃないって事か…

「お！」

しかし何か堅い感触を感じて、ソレを引き上げる。
もしかして！

「えー…」

しかしソレはただの泥だった。
期待していた分ガッカリ感がヤバイ。
死ねる

「萎えるわぁ…そぉい！」

椿は泥の塊を後ろに放り投げた。

ベチャ！

「あん？」

何か変な音がする。

水に落ちた音じゃなくて…何かにぶつかったような…

「……」

「……」

振り返ると目の前には泥を顔面で受け止めている咲夜が見えた。

何か冷たいモノが背筋を通り過ぎて行く。

あ、ヤバイ…

「ささささ咲夜さんってばどどど泥パックっすか？
いやー、やっぱ違うね美少女（笑）は！

ちょ！まてっ！嘘！冗談！俺が悪かった！
だから暴力は止めよう？な？

オイ！聞いてんのか！？

ちょ、まっ――――

アーッ！」

「ねぇーなー…」

美歩は辺りを見回すがソレらしい形はない。
腰も限界を迎えようとしていた。

だが、弱音は吐いていられない。
皆がんばっているんだ、自分だけ楽しようなんてもってのほかだ！

「うし！」

気合を入れる、その時だった！
背中に何かがぶつかる！

「ん？」

振り返ればそこには…

椿の死体があった

「――――」

美歩は言葉を失う。
まさかクラウンにやられてしまったのか！？

そんな……仲間が減った。
皆で元の世界に帰れると思っていたのに…

「むくり」

「きゃあああああああ！！」

椿が起き上がった！

何故？

まさか……ゾンビ！？

思わず尻もちをついてしまう。
お尻が冷たかったかそんな場合じゃない！

「おい…」

「きゃあああああ！

ごめんなさい！ごめんなさい！
もうピーマンとかゼッテー残さないんで！

靴下もちゃんとたたむんで！

だからどうか成仏してーッ！！！」

「いや…あの…」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい！」

「ちょ、おま…」

「ひぇー！動いたぁぁああ！」

「死んどらんわあああああああ！」

「ぎゃあああああああ！」

ドボーンッッ！

大きな水しぶきが上がって美歩は倒れる。

「おいおい、大丈夫かぁ？」

「ままま紛らわしいんだよっ！」

既に藻だらけになっている二人はため息をつく。

こんな事してないでさっさと探さなければ…

「その…なんというか…

悪かった、つい」

「ああ…いや、まあ別にもういいけどよぉ」

咲夜は申し訳なさそうに椿に頭を下げる。
美歩と咲夜、椿の3人は決意を新たにツールを探そうと決意した！

「バアアアアアアア！」

「「「ぎゃあああああああああ！」」」

だが、だがしかし川底から双護が泥まみれで現れる。
顔面が泥まみれでもはや別人！

3人は化け物かと思って思わず腰を抜かしてしまった。

「ブハッ！双護！お前何やって！」

「くっ！藻が頭にぃぃ…」

「うへー…」

3人はもうびしょ濡れだ。それは双護も同じな訳だが…

「泥パックだ…」

たった一言双護はそう言って三人から離れていくのだった…

「な、何やってんだよアイツは…」

椿は立ち上がるために手で地面を押す。

その時だった。何か堅いモノに触れたのは…

「お？」

椿はソレを拾い上げる。

カメラ…だろうか？

「！」

そして椿はそのΦのマークを眼にする。

間違いない！

コレは…

「…けた」

「？」

「見つけた…！」

「え！？」

「見つけたあああああああああ！！」

ファイズショット。回収成功！

その少し前、双護と真由もまたツールを探すために頑張っていた。

「ブクブクブク……」

「真由、そっちは深いぞ。気をつけるんだ」

双護は真由を引き上げて、タオルで髪を拭く。
よく見ると、顔に泥がついている。
双護はソレもタオルでふき取った。

「フッ…真由はまだ泥パックはいらないな」

「泥……パック…？」

「ああ、泥を顔につけるんだよ。肌にいいんだ」

「へー…」

「と、言ってもこんな泥じゃ――」

べちゃり……

顔に感じるその感触…

「・・・・・」

べちゃり。もう一発

「……あ、あはは。どうした真由？兄ちゃん泥で前が見えないぞお！

なんでお兄ちゃんに泥をなすり付けてるんだ？

反抗期かなぁ？」

「ボクね、お兄ちゃんに……

泥パックしてあげるのぉ……」

「・・・・・」

なんて…

なんて兄思いの妹なんだッッ！
双護は感動で涙が出そうになる。

ああ、そうか真由は俺の為にぃぃぃ！

「お兄ちゃんは嬉しいぞ！さあ、もっとやってくれ！」

「うん！」

真由は笑顔で泥をすくい上げたのだった

「真由…そろそろいいんじゃないかな？
お兄ちゃんもう何も見えないんだけど――」

「もっと……もっと…」

「ハハッ！真由はいい子だな！
でもな、どうして髪にもつけてるんだ？真由？

……真由？

聞いているのか真由？
真由？

真由ゥウウウウ！！」

一生懸命に泥を双護に付けていく真由。
双護は流石にこのままではヤバイと感じたのか、一瞬の隙をついて妹から逃げ出すのだった。

「バアアアアアア！」

「「「ぎゃあああああああ！」」」

息が苦しい。流石にもぐって逃げるのは無謀だったか。
目の前で椿達の悲鳴が聞こえたが気にする事はないだろう

「ブハッ！双護！お前何やって――」

「泥パックだ…」

そのまま歩く。
とり合えず泥を落とそうか……

「苦労するわね……」

「フッ」

ハナが差し出したタオルを双護はお礼を言って受け取る。

「あたしは寝てるときリュウタロスに落書きされたわ。
油性のマジックでね」

「フッ…気遣い感謝する」

「お兄ちゃーん…！探したよぉ！」

真由が向こうから走ってくる。
双護とハナ、二人は謎の握手を交わすと3人でツールを探すのだった。

「みつけたぁ！」

真由はファイズポインターを高く掲げる！

ファイズポインター回収成功！

「やあ、頑張っているみたいだね」

「！」

突然、空からそんな声が聞こえて一同は上を見る。

『ヒート・トリガー！』

「うわぁ！」

椿と咲夜の間にそいつは振ってくる。驚く二人！

「赤いライダー！？」

「はっ！？おいおい咲夜さんよぉ！
お前とうとうおかしくなったのか？
どう見ても青いライダーだろうが！」

「はぁ？青？馬鹿かお前！どう見ても赤だろうが！」

「はいはい、じゃあお前もし青だったら謝れよ？」

「ソレはコッチの台詞だ！」

『もういいかな？』

ダブルは正面を向く。

「「ごめんなさい」」

椿と咲夜は互いに深く頭を下げるのだった…

ゼノンとフルーラは変身を解き、彼らを見下す場所に移動する。
一同は何事かと思わず身構えた。

「フフッ、頑張っているね……
そんな君たちの汚い姿を一度見てみようかと思ってね」

「まあ！何てこと！ブラックゼノンだわ！でも素敵！」

「あはは！ありがとうフルーラ！
見てごらん、彼らもボク達の愛の力に唖然としているよ！

クフフフ――」

「フ」

笑い合う二人に突如はしる衝撃、
美歩がドロップキックで二人を川へと突き飛ばしたのだった。

大きな音をたてて2つの水しぶきが上がる。

「何てことをするのぉ！せっかく新しいお洋服を買ったのにぃ」

「プハッ！何をするんだ！？」

「コッチの台詞だっての！何しにきたんだ！時間無いってのに！」

「ああ、もうすぐラストチャンスだったね。
じゃあボク達も行こうかフルーラ」

「うん！そうね！」

二人はそそくさと川から上がろうとする。だが――

「どうしたんだい椿、美歩。
名残惜しいのは分かるけどその手を離してくれないかな？
じゃないとアリーナに行けな――」

「「わっしょぉぉーいっ！」」

ダバーンっ！

美歩と椿はゼノンを引き倒し再び川へと戻す。

「ブハッ！って、蜂の巣にされたいのかい！」

トリガーマグナムを構えてゼノンは起き上がる。
しかしそこにいたのは椿でもなく美歩でもない、
真由だった。

「手伝って……くれないの……？」

眼に涙を浮かべて首を傾げる真由。

「あ……アハハ、悪いけど――」

「可哀想！」

「え…？」

フルーラは涙を浮かべている真由を抱きしめる。
尤も真由の方が年上で背も高いのだが…

フルーラはまるで真由をペットの様に撫でると、ゼノンの方を向いた。

「ねぇゼノン。一つくらいなら手伝ってあげてもいいんじゃないかしら？」

「えっ！？あー…あはは。そうだなー…

でも彼らに協力しちゃうとあの人に怒られ――」

「皆頑張っているんだし…ね？」

いつの間にか椿や美歩を含む全員が真面目にツールを探していた。
時折全員でチラ見してくるのだが…

（こいつ等……）

とんだ策士だ。
ゼノンは小さくため息をついてフルーラの髪を撫でたのだった。

「なんでボクがこんな事を…」

「そう言わないでゼノン。とてもカッコいいわよ」

ゼノンとフルーラもまた水につかってツールを探す。
ちょっと馬鹿にして帰るつもりだったのにどうしてこうなったのやら…

「あ！あったわ！」

「見つけたんだね。流石ボクの天使だよ！
ホラ！これで満足かい！アホ共！」

「うぃーっす！サンキュー！！」

美歩はそう言って二人にジュースを投げる。
フルーラは丁寧にお礼を言い、
ゼノンは鼻を鳴らし、軽くお礼を言うとアリーナに向うのだった。

ファイズアクセル。回収完了！

夏美と我夢とアキラ、3人は少し喋りながらツールを探していた。
オルフェノクになると言う事。
それがどう言う事なのか?自分達はまだ軽視しているのだろうと言う事

「難しいですねぇ…」

「私には…分かりません。正直どう言った行為が正解なのか…」

アキラはため息をつく。
元気付ける?それともあえてキツイ言葉を投げかける?
分からない。それが無性に悔しかった。

「答えなんてないんじゃないですかね…」

我夢は手を泥の中に入れる。
しかし何もソレらしい感触はない、ならば次のところに手を入れるだけだ。

「僕達は今、こうやってツールを探してます。

それは拓真先輩が戦う意思を示した時、初めてこの行為が報われる。
そうですよね？
だけど僕達は報われるとかそう言うの以前に、
拓真先輩や皆さんの為に探してるんですよね？」

「ええ…まあ」

「だったら僕達はただその為のだけに動けばいいじゃないですか。
今こうやってツールを探す事が僕らにできる事なら、
それを一生懸命やりましょう」

夏美とアキラは頷くとまたそれぞれ川の中を探していく。

「いやぁー我夢君はしっかりしてますね！私とは違います」

「いえっ、僕は…口ではなんとでも言えますから」

「またまたぁ！ね？アキラちゃんもそう思いますよね？」

「え？ああ……」

「えっ！？」

我夢は夏美を見る。

笑ってる、しかも何か嫌な笑い方だ。

アレ？なんか親指を立てて…

「まかせてください…ギャルゲは結構得意なんです…！」

何が？いや、てか何を……焦る我夢に対してニヤリと笑う夏美。

『ここでバッシーっとアキラちゃんの好感度を再確認しておくんですよ。

きっとアキラちゃんは、

そうですね……とか言って頬を染めるに違いありません！

見ててください我夢君！』

「えぇ！？」

夏美は小さな声で我夢にささやく。
だが…

「どうでしょうね。我夢君けっこういい加減な所もあるから」

真顔、というかむしろ冷めた様子でアキラは答える。
そしてすぐに違う方向を向いてしまった…

「・・・・・」

「あ…あれー?あ、あはははは!
おっかしいですねぇ?あ…あは…はは」

バシャーンッッ

「あれ?我夢君?どうして倒れるんですか?

我夢君?我夢君!?

がっ、我夢クゥゥゥゥン！！」

真っ青になった我夢を引き上げる夏美。

「あれ！？」

我夢の首に何かが引っ掛かっていた。
それはまさしく…

「ファイズドライバー！」

我夢の心に大きな剣が刺さってしまったが、
大事なものは得ることができたのであった…

「ふぅ…」

皆なんだかんだ言ってもちゃんと見つけられてるな…
真志はそう思う。

いや、下手に沈んだ気持ちよりコッチの方がらしいちゃ、らしいか。

「・・・・・」

拓真は今何を考えているのだろうか?分からない。
ただそれは真志にとっては問題ではないのだ。

彼は彼で決断して行動するだろう。
それがどの様な結果を生んでも文句は言わないさ。

「お!」

だけど…このまま終わるのも胸糞悪いって思わないか?

「なあ？そうだろ。拓真」

真志はソレを川から拾い上げる。
泥まみれだったがちゃんと動いている。防水は完璧ってか？

真志は小さく笑うと、ファイズフォンを掲げて、皆に知らせる

こうしてファイズギアは完成したのだった。

第５９話　番外編　２１０１６２９５１２（後書き）

と、言う訳でファイズ編完全終了です

ちょっと次の試練の準備の為、２～３日更新をお休みします。すみません

では次もよろしく！

第６０話　話０６第（前書き）

今回は時間指定での更新なのでもしかしたらシリーズ管理ができてないかも

今回から新しい試練ですね。
ではどうぞ！

第６０話　話０６第

「司っ、お前…今、何て言った…？」

「・・・だから――」

司は少し戸惑いながらも、真志に全てを伝える。

「っ……！」

真志は何も言わない。
しかし見開かれた目が全てを語っていた、

司はそれを感じつつもあえて続ける。
途中でやめる事などできるものか

「しかも――」

真志は、それから司が喋る言葉を食い入る様に聞き入っていた。

質問をする訳でもない、

反論する訳でもない。

ただ、一心に司の話を聞くだけだった。

「・・・って言う訳だ」

「・・・」

司が一通り喋り終わると、真志は何も言わずうつむく。

悲しむのではなく、

余韻に浸る訳でもない。

心に穴が開いた様な感じだろうか、真志はただ何も言わずにうつむいたままだった。

「・・・・・」

司は真志の心情を察して教室を後にする。

その後も、真志はしばらくそのまま動く事は無かった

「フッ…素晴らしい朝だな」

「おはようございます双護さん」

「おはおは！」

「ああ、おはよう」

「うぃーす」

朝になり、それぞれが起床してくる。

実はファイズの世界が終わってから、皆は翼と葵の事を知った。
驚くメンバー達、それから少しは皆元気が無かったが、
翼の既望もあって、もうだいたい元通りの雰囲気に戻っていた。

翼としても隠し事はなるべくしたくなかったし、
皆にもその事で気をつかってほしくなかったのだろう

皆もソレを理解し、いつもの様に過ごす事を決める。

そして、今は朝食。
食事は当番製になっており、毎回くじ引きで決めたペアがそれぞれを担当していた。

「今日は相原と白鳥が当番か。助かったな…」

「そうだな。
この間のハナと真由ペアは料理じゃなくて毒物生成だったから…
…」

司はこの前の夕食を思い出してしまい、テンションが下がってしまった。
とにかくそれほど酷いモノだったのだ。
思い出すだけでも吐きそうになる

「ちゃんと分量を考えれば誰だってそれなりのモノを作れますよ。
美歩先輩だって最初は無理とか言ってたけどちゃんと作れたじゃないですか」

「あはは、ぎゃむっちの教え方がうまかっただけっすよ！」

美歩は笑顔で我夢を突っつく。

恥ずかしそうだったけど嬉しそうな表情だった。

「はい到着ぅ。俺の方が先に到着ぅ！
咲夜さんよぉ、俺の方が早起きって事でおｋですよねー」

「馬鹿か貴様は、ただ単にお前の方が先に食堂に入っただけだろうが。
ワタシの方が先に起きていた！」

「はい違いますぅ、椿くんの方が先に起きてましたー。
お前、じゃあ今日何時に起きた？おら、言ってみろよ！」

「はっ、六時だ」

「はい俺の勝ちでしたぁ。
椿くん五時に起きてましたー！俺の勝ちー！」

「嘘をつけ、嘘を。昔から起きるのが苦手だったアホが何を言って

いるぅ？
それにアレは嘘だ。ワタシは四時半に起きていた」

「・・・・・つ、椿くん…
よくよく考えたら四時に起きて――」

「うるせえええ！お前らさっさと席に着けよッ！」

相変わらずだな。
双護達はため息混じりに二人を見る。

椿と咲夜は既にどっちが朝食を早く食べられるかで戦いを始めていた。
よく飽きないモノだと皆は笑う、

しかしそんな中、一人だけ浮かない顔をしている者がいた。

そう、真志だ。

「・・・」

先程からずっと黙っている。
見れば食も進んでいない、それだけでなく先程から何度もため息をついては遠くを見つめていた

「・・・元気ないですね。真志君」

「まあ今回は真志君が選ばれたんだ。緊張するのも無理はないよ」

「うーん…正直、
真志はこう言う事で緊張しないタイプだと思ってたんだけどなぁ」

美歩は先程から何ども真志の方をジロジロと見ているが、それすらも気づく様子は無かった。

「あー…多分違うぞ、それ」

「え？」

複雑な表情で司が会話に参加してきた。

美歩は先ほどの言葉の意味を司に問う、
司は言いにくそうにしながらも、渋々と言った感じで口を開いた。

「実はな…」

「はいー完食―！俺の勝ちー！ハイお前の負けー」

「はっ？お前は馬鹿か？トマトが残ってるぞぉ」

「あー、しょうがないしょうがないー！
トマト食うと俺の中に眠っている堕天使が――」

「あああああ！うるせえええええな！少し黙ってろ！」

「「チッ！」」

「実はな――」

「え？龍騎の結末？」

「ああ…それを話したら…ずっとあの調子って訳だ」

第６０話　話０６第（後書き）

思えば今回で６０話目ですか…
いやいや、本当に読者の皆様や
お気に入り登録をしてくださっている皆様
どうもありがとうございます！

これからも頑張っていきますんでどうかよろしくお願いします！

では、次もよろしく！

第６１話　話１６第（前書き）

さて、少し注意をココで

まずですね、今回から龍騎編なわけですが
残りの編含め、割と原作との設定が変わってきます
それはちょっとしたモノであったり割と大きいモノだったり…

申し訳ありませんが一種のパラレルだとお考えください。
今回の龍騎編では

・オリジナルカードの登場
・カードの効果が原作と違う

がその変更設定だったりします。
どうかご了承ください

あとごめんなさい！原作龍騎のネタバレを含みます

ではどうぞ！

第６１話　話１６第

美歩達は首を傾げる。どうしてそんな事であんなに沈んでいるのだろうか？
だが、それも予想通りといった様子で司は続けた。

「いいか？龍騎ってのは…」

司はそう言って龍騎の話を聞かせる

「ゲッ！それマジ？」

「ああ、死ぬんだよ。城戸真司は」

「主人公…なんだよね？」

翼と美歩もしばらく固まってしまった。
まあ主人公が死ぬ作品は少なくはないが…

（まあ、俺も実際こんな感じだっな…）

司は当時を思い出しながらも、ため息をつく。
まあ分かっていたといえばそうなのだが…

「いや…それで、さっきも言ったけど。
真志は主人公、城戸真司の事をとても気に入っていてな…

それで…」

いや、俺だって伝えるかどうか迷ったんだぞ！
司はすこし口調を強めるが、意味は無いと悟ったのかすぐにやめた。

「つまり何だ。簡単に言えば、
条戸は好きなキャラクターが死んで落ち込んでいると言う訳か」

「ま…簡単に言えばな」

双護の言葉に司は頷く。
そう、真志は落ち込んでいたのだ。

司から龍騎の話を聞いていた時、

ライダー同士の戦いを止めようと頑張る城戸真司を彼は尊敬していた。

そんな彼に憧れていた。

そう、しかし城戸真司は死ぬのだ。モンスターから女の子を守って…

別にその行動も彼「らしい」と言えば彼らしいが、

真志はそれを予想していなかった分、大きなショックを受けてしまった。

結局ライダーバトルに参加した全員死亡という結果に、真志はやり切れない切なさを感じる。

「・・・」

結局、真司のした事は正しかったのだろうか？

ライダーバトルに勝ち抜けば願いを叶えてもらえるという。

だったらいっそ勝ち抜いて――

「真志ってば！」

「うっ……？」

ふと気がつけば目の間に美歩の顔があった。不機嫌そうにこちらを睨んでいる、

「さっきから呼んでるんだけど？」

「え？　あ…ああ、悪い悪い！ハハっ…なんだっけ？」

「なんか悩みがあるならこの美歩さんが聞いてあげるっつてんの！」

「あはは…別に大丈夫だぜ？」

そう言って真志は笑う。
しかし美歩は相変わらず膨れっ面で真志を見ていた。

「な…なんだよ」

「・・・べっつに」

美歩は不機嫌そうに答えると食堂を出て行った。

「何だよ…アイツ」

「頼ってほしかったんですよ」

「う、うーん・・・」

夏美の言葉に真志は頭を抱える。
別に頼りにしてない訳じゃないが…

「難しいな…」

真志は残りのパンを一気に口に入れる。味なんて感じられなかった。

「今回はどんな世界なんでしょうね」

屋上でアキラ達は今回の世界を見渡していた。
特に何の変哲も無い街、都会といった所だ。

「結構風が強いですね」

「大丈夫？里奈ちゃん」

「うん。ありがとう」

四人はその変哲の無い世界をしばらく眺める。
正直、ここが自分たちの世界だと言われても疑わないだろう。
ビルがあって、広告があって…

「クウガの時と同じだね」

「ええ。と言うか…」

世界って一体どれくらいあるんだろうか？我夢の疑問に皆沈黙する。

「少なくともボク達が一生かけても回りきれないくらいはあるんだろうよ。」

「なかには人間がいない世界とかもあるのかな…」

まさに途方もないのだろう。
しかし不思議なものだ、そんな途方も無い話を彼らは全然知らなかったのだから

「本来は交わるものではないのかもしれません…」

「ひょっとすると、別の僕らがいる世界もあるかもしれないって事ですか」

四人は世界という無限の境地に想いを馳せる。

だが、その時だった――

「「「「「！！！！！」」」」」

轟音がして、気がつくと
街中のビル、車の窓やガラスが割れていた。

次に聞こえてきたのは悲鳴、
街中から助けを求める声や、言葉にすらならない叫びが聞こえてきた。

「あれは！」

四人はさらに新しい音を確認する。
耳障りな羽音と何かの鳴き声、

一つ一つの音量は小さくても、それが山の様に重なれば大きな音量となって四人に届く。
亘達すぐにその音の正体が何かを確認した。

「ちっ、やっぱり平和にはいかせてくれないんだよね…」

『亘さーん！』

「ここだよ！キバット」

キバットは屋上の亘を確認すると、一気に手元まで飛翔する。

『なんか大変な事になってるみたいっすよー！』

「そうだね、街の人達を助けにいこう！」

『了解っす！がぶーっ！』

「変身！」

現れた刻印と共に亘の姿はキバへ変身する。

「亘、頑張ってください」

「気をつけて！」

「亘君、無理しないでね」

心配そうに見つめる三人に軽く合図を送ると、キバは屋上から飛び降りた。

『ブロン・ブースター！』

キバットがホイッスルを吹くと、
キバのバイク、マシンキバーに黄金の魔像ブロンが装備される。

ブロンブースター！

爆発的な加速で直ぐにキバは街中に消えていった。

「ヴェ、ヴェヴェッ」

逃げ惑う人々をヤゴ型モンスター、シアゴーストの大群が追いかける。
不気味な鳴き声を上げてシアゴースト達は餌である人間を捕食する為に街中を破壊していく

「ウワァアアアアッッ！」

飛び散る鮮血が人々をパニックに落とし、悲鳴の嵐が街を包んだ。
あちこちで火が上がり、事態はより深刻さを増していく。

「ヴェ　ヴェヴェ　ヴェ」

シアゴースト達は口から糸を吐き、人間を絡めとる。
恐怖で泣き叫ぶ人達を気にする事もなく、シアゴースト達は食事を開始した

まさにここはゴースト達の餌場だろう。
人間など所詮その程度でしかないと、不気味な鳴き声がそう告げていた。

「ヴェヴェ　ヴェ？」

「ヴェヴェヴェ　ヴェヴェ？」

しかしそれを否定するかの様にバイクのエンジン音が鳴き声をかき

消していく。

瞬間、風を切る音と共にシアゴースト達が宙に舞う。
いや、吹き飛ばされたと言った方が正しいだろう、ゴースト達を一撃で絶命させたのはブロンブースター！

キバはブースターから飛び降りると、人々を絡めていた糸を引き千切る。
しかし周りを見渡すと、何人かは既に息絶えていた。

「ッッ！！」

確かに全ての人を助けられるなどとは思っていない。
しかし、今この現状を目にして見れば、悔しさと怒りが込み上げてきた。

いや、もっと根本を考えればこのシアゴーストも生物。
人間を食料にしているならば食物連鎖の結果論。

だが、

「っくしょぉオオオオオオオッッ！」

キバの蹴りがシアゴーストの首を本来なら曲がることのない方向へと持って行く。
大きな視点でみればシアゴーストのやっている事は生きる為の行動なのかもしれない。

だが人間のエゴを押し通してでもこいつ等を全員倒す！
それが自分のやるべき事なのだろう。

『ウェイクアァァァップ！！』

「オォオオオォオオっっ！」

雲ひとつない青空にヒビが入り、音をたてて割れる。
現れたのは漆黒の世界、美しい月が輝く夜だった。

ウェイクアップによりキバの力が倍増する！
蹴りの威力も跳ね上がり、先ほどは蹴り飛ばすのが精々だったが、
蹴りの力で腹に風穴を開け、瞬時に絶命させる程に強化されていた。

しかし、ウェイクアップは強力だが同時に精神力を大きく消費する。
あまり長時間の使用はできない。

キバはある程度ゴーストを一掃したところでウェイクアップを解除
することにした

「ヴェヴェヴェ！」

「うっ！」

しかしその僅かな隙を狙ったゴーストが、糸でキバの動きを封じる。

「くっ！」

引きちぎろうともがくが、さらにそこを狙って他のシアゴーストが
糸を発射する。
一本の強度は低くてもそれが束になれば話しは別だ。

キバ一人の力ではどうする事もできない！

だが、それは一人でならの話なのだ。

『ドッガ！開放ォー！』

キバットはベルトから紫のホイッスルを取り外し、一瞬だけそれを鳴らした。
そして素早くホイッスルを放り投げる。
すると、ドッガハンマーが空中から現れ、元の姿に戻った。

「大丈夫か！すぐ　助ける！」

ドッガはキバを捕らえていた糸を簡単に引きちぎると、シアゴースト達に攻撃をしかける。
豪腕がシアゴーストの身体にめり込み、2，3体まとめてぶっ飛ばしていく。

「…ッ！　ありがとうドッガさん！」

「気に　するな　お前　仲間」

その言葉にキバは力強く頷いた。

「ヴェヴェッ――――ッッ」

「ヴェヴェヴェ――――ッ！」

さらに、気がつけばシアゴーストの動きが止まっていた。
見ると赤いポインターが、無数のシアゴースト達を拘束しているのだ。

『3』

「ヤアアアアアアアアッッ！！」

『2』

赤いポインターに黒き閃光が突入していく、
あれだけいたシアゴーストもなすすべなく次々にその体を爆散させていった。

『1』

『Ｔｉｍｅ　Ｏｕｔ』

シアゴーストのいたところは既にΦのマークがあるだけ、

『Ｒｅｆｏｒｍａｔｉｏｎ』

アクセルフォームを解除するファイズ。
周りにシアゴーストが残っていないのを確認すると、安堵のため息をついた

第６１話　話１６第（後書き）

黄門様が…終わる……だと？
おいおいメアリー、そりゃないぜ

んー、結構見てただけに残念ですね

とまあライダー関係ない後書きでした
では次もよろしく！

第６２話　話２６第（前書き）

小さい時龍騎を見て鏡がトラウマになったのはいい思い出ｗ

ではどうぞ！

第６２話　話２６第

「大丈夫？亘君」

「はい、拓真さんも大丈夫ですか？」

「うん、ありがとう。とにかく他の場所も見て、一回戻ろうか」

「そうですね――――って危ない！」

「え！？」

ファイズが上空を見上げると、
シアゴーストの進化形態とさらにその進化形態の
レイドラグーンとハイドラグーンがファイズに襲い掛かろうとしていた。

「うわっ！」

ファイズは素早く防御の姿勢をとる。

「ブバァッ！」

「ヴェヴェヴェッ！」

だが突如突風が巻き起こり、ドラグーン達を吹き飛ばす！

「大丈夫かい！」

「「先生！」」

ファイズ達の視線にはストームフォームになっているアギトが見えた。

アギトはマシントルネイダーをスライダーモードに変化させると、クロスホーンを展開させエネルギーを溜める。

「はぁぁあああッッ・・・」

「ブブブブブブブッ！」

「ヴェヴェヴェ！」

「たあああああああああッッ」

アギトはスライダーが与えた猛スピードを得てジャンプ切りを決める。

ハルバードブレイク。

その強力な一撃はドラグーン達を絶命させ、爆発を呼ぶ。

「こっちはだいたい片付いたみたいだね。とりあえず傷ついた人達を手当しようか」

ファイズとキバは頷くと、アギトに続いて歩き出した。

『ファイナルアタックライド』
『ククククウガ！』『ディディディディケイド！』

「「おりゃあああああああああ！」」

ディケイドアサルトがシアゴースト達をまとめて巻き込み爆発させる。
しかしやはり数が多い。
できることなら長期戦は避けたいのだが・・・

「おーい！どいてどいてーっ！」

「え？」

ふと遠くを見るとデルタがジェットスライガーに乗ってなにやらモゾモゾと動いている。

「成る程な、ユウスケ！」

『え？　あ、ああ！』

ディケイドはクウガゴウラムに掴まると上空に飛翔する。

ディケイドはデルタに合図をおくり、

デルタも了解と叫ぶと、そのスイッチを押した！

「発射！」

それと同時にけたたましい音をたてて、

ジェットスライガーから何十発ものミサイルが発射される。

ミサイルはシアゴーストの大群を瞬く間に吹き飛ばしていく！

圧倒的武力はシアゴーストやドラグーンを焼き払い、辺りをさら地にまで変えたのだった

「凄いな・・・」

「当っ然！」

デルタは自慢げに胸をはって見せるのだった

「まだ街にはあいつ等が徘徊してるみたいだね」

司達は一旦学校へ戻り、これからどうするかを決めていた。
シアゴースト達はまだ無数に散乱しており、街のパニックは継続している

「とりあえずもう一度シアゴースト達を倒しにいこうか、今はそれが一番だと思う」

「ああ、そうだな。じゃあ行こう！」

そう言ってユウスケは駆け出していく。
外には既にシアゴーストの群れが見えており、ユウスケは直ぐに戦えるように変身の構えをとる。

だが、その時だった。

『アドベント』

「！」

「グオォオオオオオオオッッ！！」

その咆哮と共に真っ赤な龍が現れる。
自分の姿を見て怯むシアゴーストを、龍は容赦なく弾き飛ばした！

「ブブブブブブブブブブ！」

「ヴェヴェヴェ　ヴェ　ヴェヴェヴェ　ヴェ！」

シアゴーストやドラグーン達は龍にやられっぱなしと言う訳にもいかない。
しかし反撃を試みるが、圧倒的な龍の力にねじ伏せられていく。

「あれは！」

その様子を見ていた司は思わず声をあげた。

「ど、どうしたんだよ司」

「あのモンスターは…間違いない！
あれは――――」

司がその言葉の続きを口にしようとした時、見つける。
その視線の先に…真紅の騎士が立っていることに

「・・・・っ！？」

「おい、どうしたんだよ司！」

ユウスケは不思議に思い、司の視線の先を追う。
そしてユウスケも見つける、その騎士を――

「あ・・・」

真紅の騎士はシアゴースト達を前にゆっくりと深呼吸をする。

そして、覚悟を決めて気合をいれた！

「っしゃあ！！」

真紅の騎士とその周りを飛び交う龍をみて、司は震えていた。
なんだ！？どういう事だ！？そう言う世界なのか？？
洪水のように情報と考察が司の頭を駆け巡る
そうこうしている間にも時は過ぎるのだが…

「うおおおおおおおっ！」

騎士はシアゴーストやドラグーンの攻撃をかわしながら同時にダメージを与えていく！

その様子を司は食い入る様に見つめていた。

「あの…声…」

間違いない。
司は複雑な表情をうかべ、真志を、皆を見やる。

「あれが…城戸真司。

つまり、仮面ライダー龍騎だ――」

一同はしばらく沈黙する。
だがそうしている間にも龍騎はシアゴースト達を相手に戦っている。

「えっ!? つまり…なんだ…? 本人って事…?」

「あ…ああ！ここは多分龍騎そのものの世界なのかもしれない！」

司は校庭から出ようか躊躇う。

できれば加勢したいところだが…

「・・・・・」

ココに来て異質な緊張が司を蝕む。

なにが正しいのか全く分からない。

自分がとるべき行動が決められなかった。

戦いに加勢する？そうだ、それが一番いい。

その筈なのに身体が緊張して動かなかった。

良太郎と初めて会ったとき、その時も少しこの感情が湧き上がってきた。
ずっと見てたヒーローに会えた。

だけど自分の心の中では分かっていたのだ。
それは完成されたキャラクター、本当にいる訳じゃないし台本があって脚本があって…

だが、今目の前にいる龍騎、そして電王を見て
本当なら嬉しくて舞い上がってしまう程喜んで、サインだけじゃなくて写真とかいろいろ貰って…

その筈だった、でも違う。
何故かうれしいと言う心の中で、若干の恐怖があった。
もちろん良太郎は今では大切な仲間だ。

でも本来自分は野上良太郎と言うキャラクターには一生会うことなんて出来ない。
でも、現に自分は今こうやって良太郎とも会話しているし、本物の龍騎を目にしている。
それは本来ありえない事。

そう、ありえはしないのだ。
でも、今現実はこうなっている、自分もライダーになっている。

それは…やはり今、
自分が置かれている状況がただ事ではないのだと、司は再確認するのだった

第６２話　話２６第（後書き）

翼アギトは全ての必殺技時にクロスホーンが展開します

そう言えば、
ディケイドで士って結構龍騎にカメンライドしてたイメージがあります
好きなんですかねｗｗ？
それとも大人の事情が……ｗ

では、次もよろしく！

第６３話　話３６第（前書き）

明日からの更新は不定期になりそうですね
まあ多分木、金…あたりかなと

ではどうぞ！

第６３話　話３６第

「・・・っ」

司は目の前の龍騎、城戸真司がどうなるのかを知っている。
この世界でどうなるのかは分からないが…恐らく同じ結末だろう
それが余計な圧力となって司にのしかかった。

ユウスケ達とは視点が違う、司は今…ある意味において死者を見ているのだから

「・・・・」

ふと、真志を見る。
彼は歯を食いしばって龍騎を見つめていた。

憧れの存在が目の前にいる。
だが、もしかしたら…今、この戦いで命を落とすかもしれないのだ。

「司っ！皆！」

「・・・！　ああ！」

真志の眼を見て司は余計な考えを捨てる。

「ヴェヴェヴェヴェ！」

「ヴェヴェヴェヴェ！」

「のわっ！」

シアゴーストの糸が龍騎に絡みつく！
それを見て、司も覚悟を決める！

「助けよう！」『カメンライド』

司は変身しようとディケイドライバーに手をかけた。
目の前の命を見過ごして何が仮面ライダーだ！
司はどこかまだ燻る心を隠しつつ、変身の構えをとる

『アドベント』

「！」

しかし、また電子音が聞こえた。
今度はシアゴーストとは違うモンスターの大群が押し寄せてくる。

「っ、敵？」

「いや・・・っ、ちょっと待て！」

友里はデルタフォンを構える。しかし司はそれを静止させた。

確かに新たに現れたモンスターは敵…に見える。
が、しかしそのモンスター。
ギガゼールを筆頭としたレイヨウ型モンスター軍団は龍騎ではなく、
その周りのシアゴーストに狙いを定め、攻撃していった。

「キキキキッ！」

「ヴェヴェヴェ！」

ガゼルモンスターはその手に構えた槍で次々にシアゴースト達を貫いていく。
どうやら…敵ではないようだった

「セーンパーイ！大丈夫ですかー？」

ガゼルモンスター達の後方で気の抜けた声が聞こえた。
龍騎は自分に絡まった糸を外しながら、手を上げる

「おお！佐野！」

「いやーセンパイ危なかったなー。オレが来なかったらやられてましたねー」

そう言いながら仮面ライダーインペラー。佐野満は仮面越しにヘラヘラと笑う。

「？？？」

ソレを見て司の手が止まる。アレ…？確かインペラーって敵ではないのか――？
しかし龍騎に焦る素振りはない。むしろ知り合いがきてホッとしているように思えた

「お…おぉ…。悪かったな、
ありがとう。絶好のタイミングだったぜ」

「でしょぉ？だって見てましたから」

「・・・は？」

「センパイがピンチなるの待ってたんですよぉ！

ピンチになるセンパイ、そこに颯爽と現れるオレ！
どうです？かっこいいで――――ぐはっ！」

馬鹿野郎！
龍騎はインペラーの頭を軽く叩く。

「もっと早く助けに来てくれよ！」

「じゃあセンパイがオレにツケといた分、
今ここで払ってくれるんならこれからはいつでも助けにいきますよ！」

インペラーの言葉に龍騎はピタリと止まる

「あれぇ～？オレ、フリーズベントなんて使ったけなぁ？
昨日も確かオレセンパイに昼飯おごりましたよねぇ」

「いや…あの…ホラ、給料日前でさ…」

「いやね、オレはセンパイに命を救ってもらった身なんでね。
そりゃセンパイには絶大な感謝をしてる訳ですよ？
ね？」

「お、おう。まあ…気にすんなっ」

「だけどね、それとこれとは別じゃぁないかなぁ？ってね。
このままだったらセンパイのお給料、
オレに返済する分でなくなっちゃいますよ？」

「しっ…心配すんな！必ず返すから！」

「ホントかなぁ？」

必死に手振り身振りで弁解する龍騎、
それを怪しそうにインペラーは見つめる。

しかし二人は完全に忘れていた。今が戦闘中だと言う事を…

「ブブブブブブ！」

「「あいたぁ！」」

ハイドラグーンの攻撃で龍騎とインペラーは二人まとめて地面に伏せる。

「いたた…、もうセンパイがしっかりしないから！」

「俺のせいかよ！」

また懲りずにわちゃわちゃと二人は言い争いを始める。
そうしてる間にもハイドラグーンはさらに旋廻し、また二人めがけて突進をしかけるが――

「ハッ！」

「ブッッブブッ！」

槍を構えた漆黒の騎士が空中から現れ、そのままハイドラグーンを貫く。
その勇ましい姿はまさに騎士を名乗るにふさわしいだろう

「おぉ！蓮！」

「蓮さぁーん」

仮面ライダーナイト、秋山蓮。
ナイトは地面にへたり込んでいる二人を見てため息をつく。

「相変わらず緊張感の無い奴らだ…」

「だってコイツが！」「だってセンパイが！」

ギャーギャーと騒ぐ二人にますますナイトは呆れる。

「お前ら・・・

そうだ、城戸」

「ん？」

そこでナイトは何かを思い出したのか、龍騎に話しかける

「どうしたんだよ？」

「・・・後方注意だ」

「は？」

後方？龍騎は自分の後ろを見る。
そこにあったのは…

「え？」

足…だった。

「おりゃあああ！」

「おわあああっ！！」

龍騎めがけてドロップキックが飛んでくる。
当然避ける事も出来ずに龍騎はまた地面に叩きつけられるのだった。

「あーあ…」

「全く…本当に緊張感の無い奴らばかりだな…」

呆れる二人。もうナイトもイライラを通り越してどうでもよくなった感じだろうか、
周りをみるが犠牲者らしい人はいない。
成る程、だからか…

人が犠牲にならなかったのはいい事だが、戦闘の緊張が無くなるのも考え物だな
ナイトはまたため息をついて龍騎を見るのだった。

「いってぇ！何するんだよ！」

起き上がろうとする龍騎に純白の騎士が馬乗りになる。

「おっそいんだよ！真司！私が何分待ったと思ってるの！？」

「…わ、悪かったって！
だけどしょうがないだろ、お前の所にいく前にこいつ等が――」

「うるさい！パンチ！」

「ブッ！理不尽…」

龍騎に馬乗りになっているのは仮面ライダーファム、霧島美穂。
ファムは待ち合わせに龍騎が遅れた事を怒り、バシバシと龍騎を叩く。

「罰として今日全部真司のおごりだからな！」

「はっ！？え！？ちょ、おま――」

「はい決まり！じゃ、さっさと片付けるから」
『ファイナル・ベント』

「キュイイイイイイ！」

地面が水のように揺らめき、そこから白鳥型のモンスター、ブランウィングが出現する。

「わわっ！」

インペラーは急いでアドベントを解除する。
下手すればギガゼールまで巻き込まれかねない。

もし契約モンスターが死ねば一気に自分は弱体化してしまう、それは避けねば
モンスターの死は自分の死につながる一番の事だからと――

現れたブランウィングは一気にモンスター達の後方まで飛ぶと、
強力な羽ばたきでドラグーン達を吹き飛ばす！

そしてファムは長刀を構えると、吹き飛んできたモンスター達を一刀両断にしていった！

第６３話　話３６第（後書き）

インペラーは味方になりえたと思うんですよね。
と言う訳で登場してもらいました

まあいろいろアレなヤツではあった訳ですが、嫌いではないです

では次もよろしく！

第６４話　話４６第（前書き）

木曜と金曜かなと思っていたんですが、
どうも更新が難しいので今日更新となりました。

では、どうぞ！

第６４話　話４６第

モンスター達を全て倒し、龍騎達は変身を解除する。

「最近ミラーワールドだけでなく
現実世界にまでこいつ等が大群で現れる様になったな…」

「そーですねぇ…。正直、勘弁してほしいですよ。
百合絵さんにもしもの事があったら…」

佐野は拳を握り締める。
蓮もまた深いため息をついた、たしかにこのままでは…

「ほら！真司！行こう？」

「いや、何か…ほら！ちょっとお腹痛くなってき――」

「はいはい。じゃあ行こう？真司のおごりだからね！」

「いや、だから・・・佐野ぉ！」

美穂に羽交い絞めされている真司は、佐野に助けを求める。

「金なら貸しませんよ。
っていうかデートの金を他人に借りるって最低っすよセンパイ…」

「お前にだけは言われたくない言葉だな…」

蓮は馬鹿にしたように笑うと、バイクにまたがりエンジンを入れる。

「彼女の所に行くんですか？」

「・・・ああ」

「まだ目覚めて間もないですしねぇ。そりゃ心配だ」

「ハァ…相変わらず腹の立つヤツだ。それに――」

ここにいると馬鹿がうつりそうで怖い。
そう言って蓮は走り去っていく。

「やれやれ、酷いなぁ。ねぇ、センパイ？」

「真司ィィっ…逃げるなぁぁぁ」

「金がないんだよぉぉぉぉっ」

「・・・・・・」

ずるずると美穂を背負い込んだまま歩いていく真司を見て、佐野も蓮に同意するのだった。

「間違いない…本人だ。
龍騎、ナイト、インペラー、ファム。四人にそれぞれ変身する人間で間違いない」

司は静かな興奮を覚えながら皆に説明をする。
仮面ライダー龍騎の主軸、良太郎と同じく本物の変身者なのだ

しかし、少し疑問に思うところもある。
司の記憶ではこの四人が共闘している所なんて無かった。
特にインペラー、むしろ彼は敵に近い位置だったが・・・

「君なら理解できるんじゃないかい？」

「！」

頭上から声がして司達はその方向に振り向く。
見ると、フェンスの上にゼノンとフルーラが座っていた。

「ここは龍騎の世界で間違いないのか？」

「ああ、まあそう思ってくれて構わないよ。
だけど君は知っているだろう？
ここは龍騎の世界だけど『今回』の城戸真司を君は見たことがない」

「・・・ああ、そうだな」

龍騎の世界がループ周期をたどっているならば、ここはその中の一つだと言う事なのだろう。

「今回の城戸真司の頑張りは凄いものだったわ。
結果としてファム、ナイト、インペラーという仲間を作る事ができたと言う訳。」

「世界転移は時間を超越する。
ここは一体どの時間軸なんだろうねぇ？フフフ」

「まあ貴方が知らないのも無理は無いわ、
結局貴方が観測した龍騎の世界は四つがいい所なのだから」

四つ、自分が見たのはテレビ放送、映画、テレビスペシャルのエンディング２つ。
成る程、司は納得する。

どうやらここはありえたかも知れない世界の一つというわけか、
いや現にありえているのだ。それは変わらない

「まあ今日ボク達がここに来たのは…条戸真志！白鳥美歩！」

ゼノンのいきなりの指名に、二人は肩を震わせる。

「貴方たちにチケットを！」

舞台に上がる資格を！
そう言ってフルーラとゼノンは四角い何かを二人に向けて投げつける。

「うわっ！」

「おぉ！」

危うく落としそうになる二人を見てゼノン達はクスクスと笑う。

「なんだ・・・？コレ」

「・・・！　お前っ！これは！」

司の驚く表情が滑稽なのか、ゼノン達はその口を吊り上げる。

「この世界のライダーにはそれが必要不可欠だろう？
あげるよ、ボク達からのほんのささやかなプレゼントさ」

真志と美歩はもう一度渡されたモノを見る。
最初は分からなかったが、今はそれがハッキリと分かる。

これは・・・

「カードデッキ…」

何も紋章がない無地のデッキ。
二人はそれを恐怖でも歓喜でもない表情で見つめる、自分達が変身する為のキーアイテム。

「ちょ、ちょっと待て！いくつか質問がある」

「・・・なにかなディケイド？」

「まず一つ目、このデッキには何もかかれてない。
つまり未契約って事だな？」

「そうね。そう言う事になるわ」

「真志は龍騎に選ばれた筈だ、だが既に城戸真司が龍騎になっている。
この場合はどうなるんだ？」

ゼノンは少し沈黙するが、すぐにまた笑い出す

「あー…それは君達自身が決めてくれ。
勿論他のモンスターと契約してくれても構わないよ。フフッ」

「・・・仮にそうした場合俺達の世界はどうなる？」

「さあね？フフフフ」

「・・・・」

真志は自分のデッキを見つめる。
そして自分の影に視線を移す、自分は龍騎になれるのだろうか？

「まあ…わかった。じゃあ次の質問だ、
俺の聞き間違いじゃなければだが…
佐野満は秋山蓮に彼女は目覚めて間もないから…と言ったな？」

「そこに気づくとは流石だわ。ピンクバーコード！」

「…いや、だから、お前…な？
いつも言ってるよな？

な？

な？

マゼンダだよって、な？」

「この世界を軽く説明してあげるよ。まず現段階で残っているライダーは五人」

「……っ、ゾルダと王蛇はどうなんだ？」

「彼らは割と早い段階で互いの因縁に決着をつけたわ。
でもゾルダ、北岡はリタイアしたの。

理由は…貴方なら分かるんじゃない？」

「…そうか」

どんなに強くても…
人は簡単に死んでしまうのかもしれない。

改めて司はそう思う

「他には…そうね、彼らには神埼優衣との関わりがないわ」

「成る…程」

神埼優衣。彼女も悲しい運命に翻弄された身だ、この世界でも…そうなのだろうか？

「そして、君がさっき言った疑問に答えよう」

「ああ・・・」

「そうよ、確かに貴方の言う通り、秋山蓮の恋人、
小川恵理は既に目覚めているわ」

「・・・」

司はその話題がでた時、二人の笑みがより深くなったのを見逃さなかった

「お前ら…なのか！？」

司の問いかけに二人は最高の笑顔を見せる。
しかしその笑顔にはどこか影があり、ほんの少しの狂気を帯びているようにも見えた。

「ああ、そうだよディケイド。
小川恵理はボク達が目覚めさせたのさ」

「あまり干渉するのは怒られちゃうから嫌なのだけれど…あなた達

の為なのよ。
　ナイトが戦う理由を失えばそうとう円滑になるもの！」

そう言って二人は笑う。そんな事を簡単にしてのけるこいつ等は一体…

だが、まあ先程は少し薄ら寒いものを感じたが、
今はもういつもの笑顔に戻っていた。
その事に少しだけ安堵しつつ、司は続けた。

「最後に一つ、いいか？」

「ええ、ワタシ達が答えられる範囲であれば…だけれどね」

「ライダーバトルの勝利者には…一体何が与えられるんだ？」

「・・・・・願い」

「え？」

「どんな願いでも、一つ叶えてくれるのよ」

「・・・・・・」

正直、それは嘘の筈だ。
その表情に気がついたのか、ゼノンは一つ付け加える

「ああ、願いが叶えられるのは本当だよ」

「何？」

「そう言う世界もありえたという事さ」

「はっ、都合のいい話しだな！」

「だろう？でも、案外世界なんて単純なモノなんだよ」

まるで自分が世界と言うモノを熟知しているかのような口ぶり。

「ゼノン、話しすぎると叱られるわよ？」

「・・・ああ、そうだね。
ありがとうフルーラ。愛しているよ」

「まあ、ゼノン！」

また それか

うんざりする司をみて二人は笑うと、フェンスの奥に飛び降りる。

「お、おい！」

「まあボク達が教えられるのはここまでさ。じゃあ、皆頑張ってくれよ」

「では、ごきげんよう。心から応援しているわ！」

ゼノンはフルーラを抱きかかえて後ろへ飛ぶ。
すると、地面から大きな車。リボルギャリーが出現し、ゼノンの足場となる。

「フフッ、じゃあねディケイド」

そう言って二人はあっという間に走り去ってしまった。

「司…私らどうすりゃいいと思う？」

美歩はデッキからカードを取り出してパラパラめくる。

「そう…だな、
その前にちょっとカードを見せてくれないか？」

「ん？　ああ、まあいいけど」

美歩と真志からデッキを受け取りどんなカードがあるか確認する。

「コレっ…すげぇぞ！　強力なカードから見た事ないヤツまである！」

司は興奮気味にカードの効果を二人に教える。
本来契約して初めて手に入るであろうカードまで出てくるとは…

「やっぱ、あいつ等が用意したって時点で普通じゃないとは思ってたけど…

コレは助かる。お前らも慎重に契約するんだぞ」

「契約ねぇ…
つってもあのヴェヴェヴェ言ってるヤツとはゴメンだわ…」

「・・・」

真志は何も喋らない。
さっきからずっと考えていた事があるのだ。

確かに龍騎になりたくないと言ったらそれは嘘になる。
自らの影に映るその姿、

しかし真志は歯をグッとかみ締めると、司に向かってまっすぐな視線を送った

「・・・司っ」

「ん?」

「俺…いや、司達の力があれば、
真司さんを助けることができるんじゃないか!?」

「っ！？」

そうだ、ここにはディケイドだけじゃなくクウガたちもいるのだ。
それならば城戸真司を守る事ができる。そう真志はずっと考えていた

どうしても真志は認められなかったのだ。
城戸真司のやっていた事はとてもカッコよかった。
戦いを止める為に戦う、それはなかなか出来るものじゃない

しかし運命は彼を殺す。
真志はそれがどうあっても信じたくなかった。
だけど、今、自分には微々たる事しかできなくても

「真司さん。他の皆も守れるんじゃないのか…？」

それは、司にも大きく響く言葉だった。

「そう…だな…！」

「だろ！」

司は決意する。そうだ！守るんだ！そして、今回こそ…

「止めるんだ！ライダーバトルを！」

真志は頷く。ユウスケ達も司の意見に従うのだった。

第６４話　話４６第（後書き）

カードの説明は土曜か…日曜の更新で後書きにでも書こうかなと

では、次もよろしく！

第６５話　話５６第（前書き）

実は蟹刑事って結構強いんですよね
扱いがアレなだけで

ではどうぞ！

第６５話　話５６第

「ふぅーっ……」

「え？何？まさか久しぶりの二人きりに緊張してる訳ぇ？」

「馬鹿！してねぇよ！」

「きゃはは、そうだよねぇ」

真志と美歩はふざけ合いながらも笑い合う。

「美歩…」

「んー？」

「ありがとうな…」

「・・・うん」

美歩は嬉しそうに微笑む。真志はもう一度深呼吸をして、その扉を開いた。

「あのー・・・すいません！」

「牛丼並盛りのお持ちしましたー」

「あ、はい！こっちです！」

やる気のなさそうな店員は牛丼を三つならべると、そそくさと戻っていく。

「どうぞ、食べて食べて」

「あ、はい！い、いただきます！」

「うぃーす！ゴチでぇーす！」

遠慮する事無くガツガツと牛丼をかきこむ美歩に二人は笑う。

「それにしても驚いたよ、
まさかまだ契約してないライダーが二人もいたなんて」

「そうなんですよ。
オレ達戦いとか嫌で…ずっと逃げてたんです」

「いやぁー君達みたいな人間ばっかりだったら良かったのに…
それにしても真志と美歩か…変な偶然もあるんだな」

「ははっ、そうですね」

とりあえずまずは繋がりを持つ事、
真志と美歩はＯＲＥジャーナルを訪ね、真司とのコンタクトを取ったのだ。

昨日の混乱から、街はまだざわついていた。
真司もどこかで犠牲者が出たのをしり、その表情を曇らせる。

それほど範囲は大きくなかったから、犠牲者はいないと思っていたが…
どうやら甘いみたいだった。

今、テーブルの上には真志と美歩のデッキが置かれている。
真司は特にそれを疑う事無く受け入れたのだった。

「とりあえず今は持っておいた方がいいよ。
その中にあるカードがモンスターから守ってくれるから」

「あ、はい…。その、一つ聞いてもいいですか？」

「え？何？」

「真司さんは…その、ライダーバトルをどうするつもりなんですか？」

真司の表情が真面目なものに変わる。
その迫力におもわず二人は息をのんだ

「佐野の願いは戦いから開放される事、これは単にデッキを壊せばいい。
蓮の願いも叶って、あとは美穂だけなんだ」

「美穂さんの…願い？」

司から聞いている。
亡くなった姉を蘇らせる事だ。

だから真司からその言葉が出てきても、特には動じなかった。

「だから、俺達は美穂を勝たせようとすればいいんだ
・・・だけど」
「？」
「ライダーがいなくなったらどうやってモンスターから皆を守ればいいのかって…」
「あ…」
真司はいつもの元気な様子じゃなく、その様子に二人も黙り込んでしまう。
今はもう皆戦いあう意思はない。主催者である神埼士郎は残りのライダーは自分達だけだと言う
だったらライダー同士の戦いはもう終わったようなモノなのだ。
だが、モンスターはそうではない。もしライダーバトルが終わってもモンスターが消えなかったら？
残りのライダーはファムだけになってしまう

流石に一人だけでは……それが今の真司達の悩みだった。

「あっ、ゴメン、ゴメン！」

真司はそれに気づくとすぐに笑顔を浮かべる、そしてそこに振り下ろされる手

「いてっ！！」

「ふふん！」

噂をすればか、霧島美穂が現れて真司の頭を軽く叩く。

何すんだよと真司が詰め寄ると、美穂は涼しい顔で受け流した。

そして真司の隣に座ると、何食わぬ顔で二人に話しかける

「貴方たちが契約してないって言う？」

「はい、条戸真司です」

「白鳥美歩っす！」

「へぇー。名前が…」

美穂はそういいかけて沈黙する。
視線の先は真司の足元――

「あ！ちょっと真司！
また靴の紐ほどけてるじゃない。ったくしょうがないなぁ」

「え？」

美穂はそう言って真司の靴紐を結びなおす。

「あ…ありがとうな」

「真司！靴の紐くらいちゃんと結べよな！」

照れくさそうに笑う真司と、優しく笑う美穂。
それを見て美歩の目が輝き始める。

「でさぁ！そん時真司が――」

「あはは！マジですか！？こっちの真志も――」

美歩と美穂は席を移動してなにやら盛り上がっていた。
その様子をみて二人は苦笑いを浮かべる

「あの…真司さん」

「え？」

「真司さんはライダーバトルを止める為に戦ってたんですよね」

「ああ、それが俺の願いなんだ。俺にデッキを託してくれた人の夢でもあるから」

「え？」

「その人、モンスターに教われた俺を助けてくれたんだ。
でも、結局その時にその人は…」

「あ…」

「だけど、その人が言ってたんだ。どうか戦いを止めてくれって…
ライダー同士が戦うなんて馬鹿な事は止めれくれって」

「オレ…その考え凄いと思います！
だから…！

その…！」

真志はうまく自分の考えが言えずに黙ってしまう。
だが、真司は笑うとその手を差し出した。

「サンキュー、サンキュー！
君みたいな子がライダー候補の中にいたってだけでも嬉しいよ」

「は！はい！」

二人は握手を交わす。

そうだ、死なせない。

死なせはしない。そう心に誓うのだった…

「あーあ、羨ましいなー…」

化粧室で美歩は小さく呟く。
美穂の話を聞く限り真司との仲は良好のようだ、

そう言う話は大好きなのだが、どうにも自分と重ねてしまう

（真志は私の事どう思ってんのかな…）

鏡に映る自分の姿を見てみる。女としてはまあまあだと自負してい

るが…

（・・・）

もしかしたら真面目な娘のほうがいいのだろうか…

（黒にしてみっかな…）

すこしでも綺麗に見えるように髪を整える。

『ライダーバトルの賞品で真志を自分のモノにすればいいじゃん！』

「・・・え？」

ふと、目の前の自分がそんな事を言った様な気がした。
もちろんそんな事ある訳ないと、直ぐに目を反らす

「や…ヤベーっ、幻聴とかありえんし…」

少し怖くなって美歩は足早に化粧室を後にした。

「え！モンスターを消し去る方法がある！？」

真司は驚きで目を見開く。

「はい、ミラーワールドのどこかにコア・ミラーというミラーワールドの心臓があります。
それを壊すことができたなら…」

「ミラーワールドは消滅し、モンスターも、ライダーもいなくなる・・・という事です」

後日、古びた教会にライダー達と真志、美歩、司と翼が集まっていた。
ライダーが増えるとややこしい事になるので、ミラーワールドに入れる事が分かったディケイドとアギト。

つまり司と翼が新たに加わった。

昨日の真司から得た情報を司に伝えると、司の記憶にミラーワールドの心臓が蘇ってきたのだ
尤も、真志は一つ重大な情報を聞き逃していた訳だが…

「その情報は本当なのか？」

疑わしいと、蓮は目で語る。
司と翼は自らをミラーワールドの調査隊と名乗り、芝居をうった。

オルタナティブ同様、人工ライダーだと他のメンバーを偽っているのだ

「そうですね。確かに百パーセントかと言われれば沈黙してしまいます。
ですがコアミラーは確かに存在するんです。
どうか信じてはもらえないでしょうか？」

「うーん…まあ別に信じないって訳じゃないっすよねぇ。
でも、もしそれ壊しちゃったらライダーバトルも終了するって事ですよね？」

「願いが…叶えられない…」

美穂は唇を噛む。
そんな！せっかくここまできたのに…

「ではどうでしょうか？
ライダーバトルに決着をつけた後、コアミラーを破壊するのは」

「そうだな、それがいい。だったらまずはコアミラーを見つけなければ…」

それぞれは頷く。
まずコアミラーを見つけ、その後で美穂を勝者にして願いを叶えさせる。
そしてコアミラーを破壊してモンスターを全て消し去る。

「よし・・・これなら！」

真志はうまくいくと心の中でガッツポーズをとる。
しかし対照的に美歩は複雑な表情でそれを見ていた。

「・・・どうした？」

「え！あ、いや！なんでもない！」

そう言って美歩は走り去っていく。
少し不思議に思ったが特に気に留めることなく、真志は会議の中に

戻っていったのだった。

「でも…ちょっと、コイツらに申し訳ないですよねぇ」

佐野は少し悲しそうな目で契約モンスターギガゼールのカードを見る。
すぐに、まあこいつ等のおかげで大変な目にあった訳ですが。

と苦笑いを浮かべる

「まあ、なんだかんだ言ってついて来てくれるからな」

蓮も、苦笑しながらダークウィングのカードを取り出す。
美穂を勝たせ、コアミラーを破壊すると言う事は
少しではあるが自分の契約モンスターを裏切る事になる。

「・・・ごめん」

真司はドラグレッダーに謝る。
どこからか咆哮の様なモノが聞えた気がした

第６５話　話５６第（後書き）

さて、ゼノンから渡されたカードデッキには以下のカードが入っていました
☆がついているものは何度でも使えます

真志

ソードベント☆
ストライクベント☆
ガードベント
アクセルベント
リターンベント　カードのリロード効果を持ちます
アドベント
ユナイトベント　特定の何かを合体させる事ができます
コピーベント　相手の武器をコピーできます
リミッツベント　一定時間身体能力が跳ね上がります
ファイナルベント
無地のカード
契約のカード

美歩

ソードベント☆
ガードベント
シュートベント☆
トリックベント

コピーベント　相手の武器ｏｒ姿をコピーできます
コンファインベント
ユナイトベント　特定の何かを合体させます
フリーズベント
クリアーベント
アドベント
ファイナルベント
アクセルベント
ヒールベント　対象を回復させます
リカバーベント　自分の状態異常を回復させます
リターンベント　一度使ったカードをもう一度発動できます
無地のカード
契約のカード

こんなモンですかね
もしかしたら増えたりする…かも？

では次もよろしく！

第６６話　話６６第（前書き）

まあ、そうですね。
確かにちょっと悪ふざけだと思う気持ちはどこかにあったのかもしれない
このタイミングで入れるモノではないのかもしれない

だが私は謝らない

そんな６６話

ではどうぞ！

第６６話　話６６第

「はぁ…はぁ…！」

少し皆から離れたところで美歩は地面に膝をついていた、顔色は悪くて冷や汗も酷い。
ふと、横を見ればガラスに映った自分の顔。

辛そうじゃない、笑った顔

『だからさぁ！言ってるじゃん。協力するふりしてさ、願い叶えちゃおうよ！』

美歩はブンブンと頭を振る。
自分は何を考えているんだ？

ガラスに映る自分は笑ってなんかない。だったら…

（これは…私の…）

身体が寒くなってくる。
何を考えているのか、自分でも分からなくなってくる。

『願い叶えてさぁ！真志を私のものにしちゃおうよ！』

また、鏡の中の自分が笑いかけてくる。

「ヒッ！」

だが、それも一瞬。すぐに自分と同じ顔になる。

「なんなんだよぉ…」

化粧室で最初に聞いた幻聴。
その時は気のせいだと思っていたが、段々頻度が増えてもはや無視

できないモノにまでなっていた。
襲い掛かる不安。自分はおかしくなってしまったのだろうか？

「うぅうぅ…助けて…真志ぃ…」

無性に怖くなってつい口にしてしまった名前。
それを待っていたかと言わんばかりに鏡の中の自分は怪しく笑いだす。

『ほら、困ったらいつも真志がなんとかしてくれると思ってる』

「・・・あ」

『依存してる。欲しがってる！
知ってるわよぉぉ、真志が他の女と話すのも嫌なくせにぃッ！』

「ちっ！違う！」

『違わないぃぃッッ！
アンタはくそ汚ねぇ嫉妬をいつも抱いてんだろうがぁ！』

「そんな！私は――！」

『ああ、そうだよ分かってる。
お前は忘れてるだけだ、夏美達はそれぞれお相手がいるもんなぁ？
だけど！どうだ！？
違うだろうが！
いつものお前、いや！私はそうだろうが！
いつも怯えてる！真志に見捨てられないかビクビクしてる！』

「・・・ッッ！　違う！違う！！」

『おいおいおい！大丈夫かよ！もし夏美達の誰かが真志になびいたらどうすんだ！？
テメェ納得できんのかよ！
ああ、でもそうだよな！私は告白できない！
する勇気がないクズだ！どうしようもねぇ馬鹿野郎なんだよ！』

鏡の中の美歩は怯える彼女を刺し殺さんとばかりに睨みつける。
その恐怖の中で美歩は冷静な思考を失っていく。

もう何故鏡の中の自分が自分と違う動きをしているのかすら考えられなかった。
鏡にいるのは自分、ならば自分の言っている事は・・・

正しいのか？

「美歩！」

「！」

真志が向こうから走ってくる。

「大丈夫か？具合悪いなら学校に…」

差し出される手。

「・・・」

初めて真志と出会った日のことを思い出す。
そうだ、助けてくれる。真志がいれば自分は頑張れる。

「ありが――」

笑顔で、真志の手を握ろうとして…

見てしまう

「・・・」

「美歩？」

真志の向こうに映った自分の顔。汚い笑みを浮かべている自分の…

「だ、大丈夫・・・」

美歩は真志の手をとらず立ち上がる。

不思議そうにする真志にもう一度大丈夫と呟き、背を向けて歩き出した。

「・・・」

一人残された真志は何も言わずに美歩の背中を見つめていた。

「美歩…」

「ヴェヴェヴェ！」

「ヴェヴェ！ヴェヴェヴェ！」

真司達の前に無数のシアゴーストとドラグーンが出現する。
街中でも定期的に起こる様になっていたモンスターの大量発生。
もはやミラーワールドと現実世界の境界線はなくなろうとしていた。
一刻も早くコアミラーを破壊しなければ、その内にこの街はモンスターで埋め尽くされてしまうだろう。

「そんな事…させるかよ！」

真司達はベルトを出現させ、それぞれの構えをとる！

「「「「変身！」」」」

鏡合わせの様に鎧が現れ、四人に装着される。
変身を終えた四人のライダーはシアゴースト達目掛けて駆け出す！

「司君。私たちも戦おうか」

「ああ、そうですね」

二人もそれぞれベルトを出現させる。

『カメンライド』『ディケイド！』

「「変身！」」

ディケイドとアギトもまた、シアゴースト達の群に突っ込んでいくのだった。

「あれ？」

龍騎は戦いの最中だと言うのに動きを止める。

「う、う～ん・・・」

「？」

その視線に気がついたのはアギトだった。

「どうかしたんですか？」

「いやぁ、どこかで会った事ありませんでしたっけ？
なんか…こう、ミラクルーみたいな所で…」

「え？」

翼は記憶をたどるが全く覚えていない。

「ゴメンなさい、ちょっと分からないですね…」

「あ…だったらいいんですけ――――ドッッ！！」

突っ立っている龍騎に吹き飛ばされたインペラーが激突する。

「いててて！またですかぁセンパイ！」

「悪かった――ヨッッ！」

話しこむ二人の上にファムが落下してきた。うまく支えられずに二人は地面に倒れこむ。

「み…美穂ぉ、お前重くなったな…」

「はっ！？何言ってんだよ馬鹿ッッ！！」

「ウゴッ！」

「まあ今のはセンパイが悪いですよね…」

「だろ！？」

「まあ重いのは本当ですけ――ガフッ！」

相変わらずの三人ほっといてナイトは次々にシアゴースト達をしとめていく。
何度も戦っている内に、行動パターンや攻撃の癖を見抜いているのだ。

流石はナイトと言ったところか。

『ファイナルアタックライド』『ディディディケイド！』

ホログラムカードが出現し、ディケイドはライドブッカー・ソードモードを構え潜り抜けていく。
一枚通過する毎にソードは光をまとって長くなり、五枚全てを通過した時には倍以上の長さに変わっていた。

「ヤァアアアアアアっ！」

ディケイドはそのソードでシアゴースト達を次々に切り裂いていく。

ディメンションスラッシュ！

決まった…心の中でドヤ顔を決める司。
しかしそんなディケイドにナイトは問いかける

「お前・・・契約モンスターはいないのか？」

「・・・えっ！？」

（ヤベー…呼ぶの忘れてた…）

「え！あ・・・い、いますよ！出てこい！ＹＵ☆Ｕ☆ＳＵ☆ＫＥ」

ディケイドがアドベント！と叫びながら手をパンパンと叩くと、
物陰から謎のモンスターが現れる。

何なんだこのモンスターは?まるで怪獣の着ぐるみみたいだ…

ＹＵ☆Ｕ☆ＳＵ☆ＫＥ?

くっ、駄目だ。まるで見当もつかない…一体何者なんだ!?

『アオオオオオオオオオオオン!』

「・・・お前コレ――」

「お、俺!コイツと契約したんです!いいいい行け!
ユウス…じゃなくてＹＵ☆Ｕ☆ＳＵ☆ＫＥ!」

『アオオオオオオオオン!』

ＹＵ☆Ｕ☆ＳＵ☆ＫＥはこくりと頷き、シアゴーストにパンチをしかける。

しかし当たらない!

まるで視界が悪いとでも言わんばかりだ！？

どうして？

一体何者なんだ…まるで見当がつかないっ！

「ヴェヴェヴェ！」

『アオオオ――うぉ！危ない！』

「おい！今アイツ喋らなかったか！？」

「きっ、気のせいです！ああ言う鳴き声なんですよ！な！そうだよな！ＹＵ☆Ｕ☆ＳＵ☆ＫＥ！！」

『え？何て？聞こえないぞ司ぁ！』

「・・・・・・」

あの野郎…

「あれも…鳴き声なのか…？」

「そう…じゃ…ないかなぁ…」『ファイナルフォームライド』『ククククウガ！』

『っておわぁあああ！』

ＹＵ☆Ｕ☆ＳＵ☆ＫＥが変形し、クワガタの様な姿に変わる。
それに耐えられなかったのか外装（？）はビリビリと破れ、中からクウガゴウラムが出現した。

な、なんだってー！？ＹＵ☆Ｕ☆ＳＵ☆ＫＥの正体はユウスケだったのかー！

「茶番乙」

「椿・・・いきなりどうしたのだ？」

「いや、なんか言いたくなってな…」

「そう…か？」

満足そうな椿を見て、咲夜は首をかしげたのだった。

「たあああああああああああッッ！」

『はあああああああああああッッ！』

ディケイドとクウガの挟み撃ち、ディケイドアサルトがハイドラグーンに叩き込まれる！

その威力にハイドラグーンは爆散し、あたりのモンスターは全て消えた。

「よし！」

「やったな司！」

真志と司はハイタッチを決める。

しかしまだ街中からは悲鳴が聞こえる、シアゴースト達はまだ群をなして街中を徘徊しているのだろう

「早くコアミラーを見つけないと…」

龍騎達は焦った様子で走り出したのだった。

第６６話　話６６第（後書き）

はい、えー…ｗ

あれですね、２７時間ですか？やってますねぇ

いや、いつも見ようとは思うんですが多分今夜も夢の中かなｗ？

これ予約更新なんで既に夢の中かもしれないな

では次もよろしく！

第６７話　話７６第（前書き）

うーん、結局寝てしまいましたｗｗ
まあいいでしょう

ではどうぞ！

第６７話　話７６第

「拓真！そっち行ったよ！気をつけて」

「ありがとう、でも大丈夫だよ」

襲い掛かるシアゴースト達を逆に殴り飛ばしていくファイズ。
普段の拓真からは創造もつかないパワープレイに、デルタ達は目を丸くする。

「ハッ！」

「ヴェヴェ！」

倒れたシアゴーストに追い討ちの蹴りを決める。
空中から襲い掛かるドラグーンも、デルタの銃で次々に撃ち落されていった

『ＦＵＬＬ　ＣＨＡＲＧＥ』

「いくぜいくぜ！いっくぜぇぇえええッ！！」

電王が吼える！
赤いエネルギーを纏った剣が複数のモンスターをまとめて切り裂き、爆散させる。

「ブブブ！」

最後の一体になったハイドラグーンは逃げる訳でもなくファイズに特攻を仕掛ける。
だが、特別複雑な動きといった訳でもなく楽にかわされてしまった。

『ＲＥＡＤＹ』

ファイズはメモリをポインターにセットすると、
そのままソレをドラグーンに向けて投げつけた！

「ブブッ！」

投げられたポインターはドラグーンに直撃するとそのまま跳ね返り、

ファイズの所へ戻っていく。
それと同時にファイズはとび蹴りをドラグーンにしかけた。
突き出した足にうまくポインターが重なり、ファイズはそれを素早く装着する！

『Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ』

ポインターをぶつけられ怯んだドラグーンにさらに赤い閃光が襲い掛かる。
赤いポインターに動きを封じられたドラグーンはもはやどうする事もできない。

「たぁあああああああああッッ！！」

赤い閃光がドリルの様にドラグーンを削る。
クリムゾンスマッシュ！

ドラグーンはΦのマークが現れたかと思うと爆発し、消滅した。

「やったね！かっこいいよ拓真！」

「はは…ありがとう」

「おう、どうすんだ？このまま他のヤゴ野郎もぶっ倒してくか？」

「そうだね・・・ん？」

ファイズの携帯が音をたてる。

「電話だ・・・もしもし？」

『俺だ』

「ああ、双護君。どうしたの？」

『そっちに龍騎達がやって来る。逃げた方がいい』

「っ！

うん、わかった。じゃあね」

『ああ、気をつけてな』

電話を切るとファイズは今の言葉を皆に伝える。
ただ電王は不満そうに首をかしげた

「なあよぉ。俺達って逃げる必要あんのか？
事情を話して協力すればいいじゃねぇか」

電王の言う事は尤もだ。
別に自分達はライダーバトルの参加者ではない、龍騎達にその事を伝えればいいだけの話だ

しかし司はそれをあまり良しとしなかった

「うん、だけど信じてもらえるとは限らない。
本当は司くんと先生の二人だけでもギリギリだよ。
僕達はこうして影ながら支えるのが一番だと思うよ」

「ふぅん・・・ま、いいけどよ」

少し不満げに電王達はバイクに乗り込み、学校へと戻るのだった。

「・・・よし、もう大丈夫か」

画面に映った彼らを見て、双護はため息をつく。

「おいおい、何なんだよコレ！マジでさ！」

椿が吼えるのも無理は無い。
今パソコンの画面にはこの街にある監視カメラの映像全てが映りだされている。
明らかに普通じゃない、椿はついにその疑問を爆発させたのだった

「さあな、俺は頼まれただけだ」

「クウガの時からおかしいとは思ってたんだよ。
警察のパスワードが表示されたりさ、このパソコン管理してたの真志だろ？
お前アイツに何て言われた？」

「保健室の治療器具と同じでパソコンにこんな機能がついてた…らしいが」

椿はそれを聞いて少し考える。
たしかにそう言われれば納得もいくが…

「・・・この音」

椿は何を思ったかパソコンのある場所に触れる。
すると、一枚のディスクが出てきて、画面はエラーを表示した。

『ディスクを入れてください』

「ディスク…？　と言う事は…」

「ああ、コイツだよ…ッ」

椿が持っている一枚のディスク。

「このパソコンは別に特別でも、何でもねぇ！このディスクが問題なんだ！」

「そう言えば拓真のヤツ、これが罪のなんとかだって…」

「罪？」

二人は沈黙する。

そして、しばらくして拓真がやって来る。

拓真は椿の持っているディスクをみると、何も言わずにうつむいた。

「・・・拓真、コレが何か知っているんだな」

拓真は少し迷った様に目を反らすが、すぐに決心を決めて二人の目を見つめた。

「うん、真志くんもバレたら教えろって言ってたし

…分かったよ」

「・・・」

「どうして、真志君が一人暮らししてるか…知ってる?」

「え?あ…いや、理由までは…」

「お父さんと、お母さんが…その…いないんだ」

「あぁ…成る程…」

二人ともって事は事故か何かだろうか…
椿は予想を2、3考えてみる。

だが、拓真の口から出てきたのは意外な言葉だった。

「捕まったんだよ…
警察に…」

「「!!」」

これには椿はもちろん冷静な双護の表情を一変させた。

拓真は気にせずに続ける。

「椿くんが持っているそれ、コンピューターのハッキングソフトなんだけど…」

「え？これが！？」

「うん…、なんでも電波を介して、
対象のパソコンのデータを全てコピーしたり、
相手が今使用しているのと同じ画面にしたりするモノらしいんだ…」

椿はそのディスクを見る。

「まさか…」

「うん。真志君の両親はそれを作ったんだ。
コピーをメインにしたハッキング、通称…鏡像（ミラー）の世界（ワールド）」

「ミラーワールドって…」

拓真は続ける。

真志の両親はそれを使い大金を得ようとした。
しかし、所詮は人の作りし虚像。うまくいくわけがない。

鏡像の世界は不完全な失敗作であり、なんの意味も成さなかった。
それだけではない、ハッキングの件は警察にばれてしまい結局両親は真志を残して刑務所に行く羽目になったのだ。

真志は親戚の元に行き、無理をいって一人暮らしをさせてもらっている…という事なのだった。

「多分、一人のほうがいろいろと楽なんだと思う。
真志君にとっても…

親戚の人にとっても…」

犯罪者の息子…正直親戚は真志を預かる事を躊躇しただろう。
いや、恐れていたのかもしれない。
一人暮らしをしたいと言ったとき、親戚の目が輝いたのを真志は忘れないだろう。

真志はそれから偽善だったとしても出来る限りの善を尽くす人になった。
それは強迫概念からくるモノだったのかもしれない。
自分が少しでも悪い事をすれば飛んでくる言葉は決まって

『犯罪者の息子だから』

そうなれば自分を預かってくれた親戚にまで迷惑がかかる。
それは避けないといけなかった

少しでも善人に…

両親を憎む事はしなかった。
憎んでどうなるわけでもない、もう二度と関わらない奴らだ。
どうなってもいい、どうでもいい。

そう真志は心に刻む、そして少しでも善に生きる。
そうする事で救われる気がした。
そうする事でしか生きられない。彼は理解する

「「・・・・・・」」

二人は絶句していた、確かに真志はいいヤツだ。
人気も高かった。

募金があればクラスの半額以上は彼が払っていたし、
掃除やボランティアをサボった事もない。

髪の色以外は完璧で、先生からの人気もかなり高かった。
でも、それが真志にとって自分を保つ事だったとは…

もちろんそれで真志の印象が下がる訳ではないが…
なんというか…

「真志君…それの試作品をずっと持ってたんだ。

警察の人もそれには気づかなかったみたい。
まあといっても使えないんだけどね」

「ん？でもコレ使えてるぞ…？」

「一番最初の世界から使えるようになってたらしいよ…」

「ほう…ふざけたサプライズと言う訳か…」

「うん…正直複雑だったみたい…」

そう、だからこそ真志は本当の善が分からなくなっていた。
少なくとも真志は自分の行っている事が正しくても善とは思えなかったのだろう
しかしそんな時に真司の話を聞いたのだ。

欲望の為殺しあうライダー達。
そんな中に戦いを止める事を願いとし、
ライダー達を説得しつづけた真司を心の中から尊敬したのだ。だか

らこそ許せなかった。

彼が死ぬという事実が…

「俺！マジで真司さん尊敬してます！」

「えぇ、本当に？いやぁ、もっと食べて食べて！」

真志の言葉に気を良くしたのか、真司は追加注文をとる。

とりあえず今日は皆で居酒屋に来ていた。

もっとも蓮はまだ病院にいる恋人、恵理のところに行っている為ここにはいないが。

「いやぁー！真司さんは――――で！
それから――――
んでもって――で！！」

「お姉さーん！パフェも追加で！」

次々と誉め殺しの一手が真司を襲う。
だが、真志は本音を言っているだけなのだが

「うへぇ…センパイのウイルスがまた感染していってる…」

少し離れた席で、佐野が呆れたように二人を見つめていた。

「でも、満さんだって真司さんにいろいろ助けられたんですよね？」

そういって佐野百合絵は微笑む。

「やめてくださいよ百合絵さん！」

恥ずかしそうに佐野はソレを否定する。流石の彼も彼女には甘いようだった。

「あーあ・・・今頃司くん達はおいしいもの食べてるんでしょうね…」

「そうですね、だけど普段頑張ってくれてるんですから・・・ね？」

「アキラちゃんは良い子ですねぇ…私も見習わなくちゃです」

夏美がそう言うとアキラは少し照れたように笑う。

「今日は空野が当番か、どんなメニューなんだ？」

「運がいいわよあんた等、今日は薫スペシャルだから」

「マジでか！ヤベー、椿くん楽しみー！」

薫は鼻歌交じりに、丼にご飯をよそう。
そしてかまぼこを数切れのせて醤油をかけると、ホレと言って椿に渡した。

「きゃーおいしそー

はい次ー！」

「・・・」

料理なめんなぁあああああ！

うっさい！めんどくさかったんだから許しなさいよぉおお！

吼える彼女達を見て、二人はため息をついた。

「はぁ…食堂のお姉さんとかも欲しかったです…」

「…そうですね。あはは…」

二人は仲良く薫スペシャルをかきこむのだった

第６７話　話７６第（後書き）

まあ土日は更新すると思うんで
それまでは不定期でいきます

では、次もよろしく！

第６８話　話８６第（前書き）

はい、次の更新の話を先に

次はどうですかねぇ…

まあ多分土日までに一回か二回になりそうですかね

ではどうぞ！

第６８話　話８６第

「どうしたの？さっきから変だぞ」

「え…？あ…あはは…」

美穂はずっとうつむいてる美歩にジュースを差し出す。
美歩はお礼を言って受け取るが、口を少しだけ付けただけで飲む事はなかった

「なんかさ、悩んでるなら…相談、のるよ？」

「あ、いや…大丈夫！大丈夫…」

美歩は店のガラスに映る自分の姿を見てゾッとする。
笑っているのだ、自分と違う顔をしている自分は口パクで確かに言った。

『そいつを殺してデッキを奪えよ』

「ッッ！！」

『殺すのが嫌なら奪ってもいい、じゃねぇと勝ち残れないぜ』

「みっ…美穂さんは、
なんか…どうしようもなく怖い時ってありません…か？」

「え？うぅん…そうだな、あるよ」

でも、と美穂は真司を見る。
その目はとても優しくて、美歩は何故か泣きそうになる。

「だけどアイツ…真司がさ…」

馬鹿なヤツだよと、美穂は笑う。

しかし佐野同様、悪気は少しも感じられなかった。

どういう事があったのかはわからない。だがこの世界では美穂も佐野も真司に救われたのだろう。

それがひしひしと伝わってきた。

「・・・」

美歩は真司の隣で熱く語っている真志を見る。

「・・・」

「なあ、どうしたんだよお前」

「どうしたって…何が？」

真司達と食事を楽しんだ帰り、真志は美歩に声をかけた。

「お前、ずっと調子悪そうじゃねぇか！
絶対なんかあるんだろ？」

少し強めの口調で真志は美歩に詰め寄る。
しかし美歩は真志の目を見ることなく曖昧に返すだけだった。

「どうしたんだよ！もっとオレを頼ってくれてもいいじゃねぇか！」

「いやだからっ！何でもねぇって！」

美歩は真志の肩を掴んで引き寄せる。
近づく顔と顔、美歩も真志もつい赤くなってしまう。

「ねぇ、真志」

「な…なんだよ」

美歩は目を閉じて顔を近づける。

「えっ！え？」

真志はいきなりの行動に戸惑い、パニックになる。
これはそう言う意味なのか！？そしてその視線の先には…

（せっ、先生！どうなってんだコレ！！）

（ぼっ、僕にも全く分からないよ！
え、ちょ！これってやっぱり担任として注意すべきなのかな！？

あ、でもまだ僕臨時だし…！
うん、でも高校生ならもうこう言う事してもいいんじゃないかな？

いやいや！何を言っているんだ僕は！）

（おおお落ち着いて先生！まずは冷静に状況を把握しよう！
美歩と真志は一緒に暮らしてるんだぜ！？

そりゃそう言う関係になってもおかしくないんじゃねーかな！？）

（つつつ司君！一緒にクラウチングスタートってどういう事なんだい！？）

（どういう事なの・・・）

「わ・・・っわわ！」

流石に恥ずかしい。真志は少し申し訳ないと思いつつも、美歩から離れた。

「・・・ぁ」

「ご、ごめん…」

恥ずかしくなって真志は走り去る。残される美歩…

『ぎゃははは！やっぱ私って真志に嫌われてんだよなぁ！』

やめてよ…

『でも大丈夫、ライダーバトルに勝ち残れば願いが叶うんだから！』

やめて…

『真志をモノにするには…分かるよなぁ？ぎゃははは！』

「やめてよぉ…」

水面に映る自分が下卑た笑みを浮かべる。
これは私の本心なのか？美歩はどうしようもなく怖くなって、悲しくなって…

切なくなった

次の日、また街中にシアゴースト達が現れて人々はパニックに陥る。
あきらかに間隔が短くなっている。

このままではいずれミラーワールド関係なくモンスターが街を覆ってしまうだろう。

「とにかく、殲滅が先だよ！変身！」

「自衛隊もちらほら見えるな…変身！」『カメンライド』『ディケイド』

アギトとディケイドはシアゴーストに向かって走り出す。
しばらくして真司達も集まってきた。

「変――ッ！」

変身しようとデッキを鏡にかざす真司、しかし鏡に映ったモノを見て変身をやめる。

「うぇえんッッ！！」

女の子が泣いていたのだ。
母親とはぐれてしまったのだろうか？

とにかくあのままでは危険だ！
既に女の子を捕食しようと、レイドラグーンは空中を旋廻している！

「くっ！」

間に合うか？

正直、微妙だった。
しかも変身していない今、攻撃を受ければ致命傷になるだろう。
だが変身している時間もない！

それでも真司は女の子を助けることを迷わない。
彼の正義、信念は動きを止める事はない、女の子の所まで全速力でかけて行く！

「っ！」

それを見て真志は息をのむ。まさか――

『城戸真司は女の子を守って死んだんだ』

真志の頭に蘇るその言葉・・・

間違いない！

「司ぁあああああ！」

「！」

真志の叫びの意味ををディケイドは直ぐに理解する。
そう、真司が今助けようとしている女の子。
間違いない、あの子を守って真司は死ぬのだ。

「っっ！！させるかよォォォオオ！！」

『カメンライド』『ファイズ！』

赤い光と共にディケイドはファイズに変身する。
司は恐れていたのだ、
自分が本軸に関わる事でおおきく歴史が変わってしまいなにかよくない事が起きるのではないかと。

良太郎達は本人であるが、結局は自分達の世界に来ているいわばゲストの様なものだろう。
しかしココは違う、龍騎の主軸の世界であるのだ。
そこに異物の自分達が加わる事に司は若干の恐れをいだいていた。

言いようのない緊張感、
だからこそミラーワールドに入れる自分と、アギト以外は待機させる選択をとっていたのだ。
最初からクウガ達にも協力してもらえばよかったのに…

「うおおおおおおおおおおッ！！」

だが、今…龍騎、真司の死を直前にして司の心から迷いが吹き飛ぶ！
果たしてこの選択は正しいのだろうか？いや、どっちでもいい！
目の前の彼をみすみす見殺しにする？そんなのはふざけた選択だと！

『フォームライド』『アクセル！』

『Ｓｔａｒｔ　Ｕｐ』

とにかく真司を助けたい。
たとえそれが間違った選択だったとしても後悔はしない。

いや、したくない！

「大丈夫？お母さんは？」

「う・・・うん。――――ッ！危ない！」

少女が叫ぶ。真司の後ろには鋭い爪を構えたドラグーンが！

「――っ！」

真司は覚悟を決める。

だが、ドラグーンはすぐに吹き飛び爆散した。

あっけにとられる真司と現れるΦのマーク。

「え？」

「大丈夫ですか！？」

真司の前にはディケイドが立っていた。

真司は状況を素早く理解すると、助けてくれたディケイドにお礼を言う

「あ・・・ああ！ありがとう！」

「俺より真志のヤツに言ってやってください」

「っ！ああ！変身！」

ディケイドは真司の無事を確認すると、再びドラグーン達の群に走っていった。

『ファイナルベント』

ガゼル軍団が嵐の様に連続攻撃をしかけていく。
インペラーの必殺技、ドライブディバイダーが炸裂し、モンスター達を一掃する！

「はいはい、終わりですねぇー」

そう、終わりなのだろう。いつもなら…

キィィイイイン

「？」

嫌な音がしてライダー達はその場に立ち尽くす。
すると、空中から金色の羽が舞い降りてきた。

「なんだ？」

意味が分からないといった感じでライダー達はその羽を見つめる。

しかし、二人。

二人だけ皆とは違う表情を浮かべていた者がいる。

「ッッ！！！」

甘かった…ッ！

嫌な汗がにじみ出てくるのがわかる。

なぜ、自分はこの可能性を考えてなかったのか！？

すぐに後悔と自己嫌悪の念が襲い掛かる。

安易な決め付け、ファムがいたから劇場版基準だと考えていた自分を殴りたかった。

そう、司。

ディケイドはその羽がなんなのかを知っている。

今さらになってあの時ゼノンがのこりライダー数をあやふやにしたのか。

それをなぜ深く考えなかったのか！？

「・・・ッ！」

そしてもう一人、そう龍騎はその羽を見つめ拳を握りしめたのだ！
そして何も言わずに一枚のカードを取り出し、バイザーにセットした。

『サバイブ』

「！？」

通常よりもエコーがかかったその音声。
それと共に龍騎の姿は強化体、龍騎サバイブへと進化する。

しかし一同は龍騎のいきなりの行動に驚くだけだった。

「城戸・・・？」

「・・・・・」

覚悟、焦り、緊張、そして恐怖。
それらを感じつつある龍騎とディケイド。
そしてまだ意味が分かっていないナイトたち

「・・・来る！」

「え？」

黄金の羽が舞い上がり、一つの場所に収縮していく。
龍騎もディケイドも注意をはらう。

間違いない、ヤツだ！

『・・・』

羽が一体のシルエットを形作る。
そして黄金の羽が弾け、最後のライダーが現れたのだった…

「「「「！」」」」

「・・・」

「お前は…」

羽が弾け、現れたのは黄金のライダー。
そのオーラは凄まじく、直視するだけで体が焼き尽くされそうな程熱くなる。
呼吸すら苦しい、心が焼き尽くされそうだった。

『城戸真司…仮面ライダー龍騎』

黄金のライダーはポツリと呟く。
そして一歩、龍騎達に向かって前進した。
同時に龍騎達は一歩後ろへ下がる。

『秋山蓮、仮面ライダーナイト』

また一歩、そのライダーが歩くたびに龍騎達は後ろへと下がっていく。

『霧島美穂、仮面ライダーファム。

佐野満、仮面ライダーインペラー…』

黄金のライダーは龍騎達を一人一人見やると、その場に立ち止まった。

しかし何故だろう、嫌な予感がする。

プレッシャーがより強くなってのしかかってくる！

『お前達には・・・』

黄金の仮面ライダー、オーディンがその手を上げた。

瞬間、彼の姿が消え、インペラーの背後に現れるッ！

「ッ！！」

『失望した』

第６８話　話８６第（後書き）

一応アギト以外もオリジナルフォームの登場予定はあります。
でもまだまだ先になるかな

では次もよろしく！

第６９話　話９６第（前書き）

一回携帯で見てみたんですけど結構見にくいですね。すいません！

ちょっとパソコン向けにしてありまして改行とかがどうしても…

いや申し訳ないです

ではどうぞ！

第69話　話96第

黄金の羽が発射され、インペラーを包み込む。
すると羽の一つ一つが爆発を始め、インペラーを衝撃の檻へと閉じ込めた！

「がああああああああッッ！！」

「佐野！」

ナイトは事態の危険性を察知するやいなや、自らもサバイブのカードを発動させる。
そして、ブラストベントを発動して羽を吹き飛ばした。
散り散りになる黄金の羽達。その中にインペラーはいた。

「がぁぁあ…ッ！グアァア…」

「大丈夫か！？佐野！」

「は…いッ…つか、コイツやば過ぎだろ…訳わかんねぇ…」

インペラーは苦しそうに立ち上がるとアドベントのカードを発動した。

レイヨウ型のモンスター達が駆けつけ、インペラーをかばう様に立つ。

『・・・』

しかし、オーディンはソレを見て一瞥する。まるでゴミを見るかのような雰囲気だった。
そして自らもまたアドベントを発動させる。
現れるのは最強のミラーモンスター、ゴルトフェニックス！

「攻撃を止めて逃げろ！早く！」

龍騎はインペラーに向かって叫ぶ！

しかしインペラーにその言葉が届くよりさきにゴルトフェニックスの巻き起こす黄金の疾風がガゼル軍団に襲い掛かった！

「うっ！わあああああ！」

「佐野ッッ！」

インペラーを守るようにガゼル達はゴルトフェニックスに向かっていくが、
その黄金の羽がガゼル達に着弾していく。
次々に爆散するガゼル達、そして遂にその羽が契約モンスターギガゼールに命中する。

「ギィイイイイ！！」

「ッ！」

あれだけいたレイヨウモンスター達もたった数十秒で無に帰ってしまった。
もちろんそれだけではない、契約モンスターがいなくなったと言う事は…

「グッ！！あああああああああああ！」

インペラーの体から色が失われていく。そして装飾も次第に消え去り、貧相な姿に変わってしまった。

「がぁぁぁ・・・ッッ！」

ブランク体である。全身の力が抜け足がすくむ、だがインペラーは倒れなかった。
別に愛着があったわけでも友情があったわけでもない。
主従関係ですらなかったのかもしれない。

だが、しかし…むざむざ殺された自分の契約モンスターを思うと、ここで倒れる事はできなかった。

「ハァッ…ハァ！うっ…ウォオオオオオオオっっ！！」

龍騎達が止めるのを振り切り、インペラーは全ての気力を振り絞りオーディンに向かう。

敵討ち？

いや違う、自らのプライドの奪回？

それでもない。

ただ自分とこれまで共に戦ったギガゼール達の為に一発だけ、

一発だけでもなにか仕返しをしたかったのかもしれない。

インペラーは渾身の蹴りをオーディンに食らわせる！

『・・・』

「ぅ・・・おおおおおお！」

だが、オーディンはその蹴りを受けるも、ノーリアクション。

そして直ぐにインペラーを弾き飛ばした。

「ウオオオオォォォッ！」

おまけと言わんばかりに金色の羽をインペラーに発射する。
モンスターを失い防御力も低下したインペラーにもはやなす術はない。

龍騎やナイトが彼を庇うが、それでも受けきれる限界を超えてしまったのだ。

「あああああァッッ」

弾けるような音と共に、インペラーのデッキが破壊される。
変身は解除され、佐野はその場に倒れてしまった。

「あぐぅうああ・・・ッッ」

「佐野！佐野ッ！」

佐野はかなりボロボロだったモノの、命までは失ってはいないようだった。

その様子に龍騎はホッと胸をなでおろす。
だが、安心はできない。今まさに最悪にして最強の敵が目の前にいるのだから

『戦いを放棄した貴様らにもはや願いを叶える資格などない。
残された時間もすくないのだ。
貴様らにはここで消えてもらう』

「どうして・・・どうしてなんだよっ！」

『ストライクベント』

龍騎の手にドラグランザーの頭部が装着される。
しかしオーディンは何も焦る事なく淡々と言葉を紡ぐだけ

『貴様らは戦えばいい、そうやって世界は巡ってきたのだから』

オーディンが羽に紛れて消えた。
ファムやナイトはオーディンが撤退したのかと油断する。

が、しかし龍騎は大きく深呼吸をすると、
急に後ろへと振り返り、思い切り空を殴ったのだった。

『ウッ…！！』

しかしそこは空ではなかった。
瞬間移動したオーディンが立っているではないか！
これには少し驚いたのか、オーディンですらしばらく固まってしまう。

『ほう…何故私が現れる場所が分かった?記憶が消えなかったのか?』

記憶が消えなかったのか?
ナイトとファムはこの言葉に違和感を感じる。
まるで以前にもこのような事があったかのように・・・

そう言えば龍騎はこのオーディンの存在に気づいているような様子だった。
それもあってか、よりいっそうこの言葉が引っかかるのだ。

「城戸・・・お前、何か知っているのか？」

「…さあねッ！」

「・・・あ」

ファムは思い出す。
以前真司の住んでいる所にいった事がある、（といってもそこは会社の一端だったが…）
特に普通といった所だったが、一つだけ異質なモノがあったのだ。

それが大量のメモ書きだった。
何かを記憶しておくにはあまりにも多いそのメモ書きにはたった一行

『金色の羽のヤツが消えたらとにかく後ろを殴れ！絶対に！』

「お前を一発殴りたかった！それだけだ！」

『フッ、殴ったうちには…』

入らないがなッ！そう言ってオーディンは逆に龍騎を殴り飛ばす。
サバイブ体であるにも関わらず、その攻撃は龍騎の装甲に大きな傷を残した。

しかし龍騎は力強く立ち上がり、オーディンに指を刺す。

「どうだ…少しは足掻いたぞ！」

『愚かな、何も変わっていない。いや、何も変わらないのだ』

オーディンは笑う。

しかし龍騎の仮面の中、その瞳は未だに強い光を纏っていた！

「いや・・・絶対に一つだけ変わった・・・」

『……何？』

「重さが……消えていったライダー達の重さが倍になった！」

『・・・』

「これ以上は増やさない！
俺は人を守る為にライダーになったけど、ライダーを守ったっていい！」

『悪いが、それはできない話だ。
もはや貴様らを生かしておく事も不要だろう。

私には時間がない。もっと命を蓄積させたい所ではあったが…』

仕方ない、オーディンはそう言って一枚のカードを装填する。

『シュートベント』

オーディンがゴルトバイザーを天高く掲げると、
雲が割れ、そこから一筋の光が現れる。
光は佐野を照らすと、その輝きをどんどん増していく。

「まずい！」

それが何を意味するのか察知したアギトが、佐野を庇うように立つ。
他に方法が思いつかなかった。とっさに自分の身を投げ出す

「！」

「グッ！！ゥウウウウウっ！」

まさに一瞬。
空から光の通りにレーザが発射され、アギトに降りかかった！
かろうじて耐えるアギトだが、ダメージの量は大きい。

「くっ！」

「うおおおおお！」

龍騎とナイトはオーディンに攻撃をしかけるが、
瞬間移動とその強大な力で翻弄される。

それだけでなく、一瞬でアギトの目の前まで移動するとゴルトバイザーで激しい攻撃をしかけていった

「グッ！！ガアアアア！！」

アギトも限界を向かえ変身が解除されてしまう。
すこし回復した佐野が翼を抱えてオーディンから離れようとするが、
オーディンは一瞬で佐野達の前まで移動する。
その強大なオーラに思わず動きを止める佐野

『命を貰うぞ、ライダー！』

「くっ！！！」

『ファイナルアタックライド』『キキキキバ！』

割り込むようにディケイドキバ・バッシャーフォームの必殺技が放たれた！
圧縮された水流弾はオーディン目掛け、凄まじいスピードで襲い掛かる。

もちろんオーディンは瞬間移動で回避するが、水流弾もその動きをサーチして追尾行動をとる。
決して逃げられはしない、まさに必殺技！

「逃げられるかよッ！」

オーディンは何も言わずに一枚のカードを発動させる。
その様子から全く焦りがない事を思わせるのが気になるが…

『ガードベント』

オーディンは出現したゴルトシールドで水流弾を弾き飛ばした。
それに驚くディケイド
当然だ。まさかあんなに簡単に…

（おいおい、コッチは必殺技なんだ・・・っぞ！）

オーディンはディケイドの背後に移動する。
ディケイドは素早くドッガにフォームチェンジするが、オーディンの攻撃によって大ダメージを受けてしまう

「グッ！ガッあああああ！」

『異端は消えてもらおうか…』

金色の羽がディケイドを包み込む。
インペラー同様、爆発の嵐がディケイドの体力を物凄い勢いで奪っていく

「くぅぁぁあ・・・」

ディケイドの変身が解かれ司はその場に倒れた。
ファムは真志と美歩を守っている為動く事ができない。

佐野も翼を抱えてるだけでなく、すでに体中のあちらこちらに出血がみられる。
もはや立つことすら厳しく、這うようにオーディンから距離をとっている。

「くっ…」

ナイトはこの状況に焦りを感じる。
このままでは全滅してしまうのが明らかだった。

だからこそナイトは苦渋の決断を取るのだった

「城戸…」

「ッ？」

「お前はこいつ等を連れて逃げろ…」

「はっ！？」

らしくないと言えばそうだろう。
しかしナイトとて、こうするしかないと分かったのだ。

このまま全滅するのと、自分が少しでも足掻く事ができれば・・・

と

第６９話　話９６第（後書き）

今回はいろいろ原作から引用させていただきました
この真司も前のループの記憶を覚えていたって事ですね。

あとナチュラルにオリジナルカードが出てきましたｗ
サバイブのストライクベントとかね

次は土曜かな？
では次もよろしく！

第７０話　話０７第（前書き）

さて、皆様。後書きにて少し相談（？）がありますではどうぞ！

第７０話　話０７第

「蓮！それじゃ――！」

「いいから早くしろッ！お前の願いは守る事だろう！」

「――ッ！」

龍騎は拳を強く握り締める。
もはや考える時間もない！

龍騎は迷いを振り払うかのように大声を上げると、ドラグランザーを召喚した

『させん！』

オーディンは無数の羽を発射するが、それを白い羽が受け止める。
だが、それも一瞬程度。

しかしさらに新しい白い羽が金色の羽にぶつかっていく。

「美穂！」

ファムは頷くと真志と美歩をドラグランザーに乗せた。
龍騎はドラグランザーをバイクモードに変えると、
さらに佐野と翼、司を乗せる。

「行って、真司。私も残るよ」

「・・・分かった。
蓮、美穂…絶対助けに戻ってくるから」

龍騎がそう言うとナイトとファムは鼻を鳴らして笑う。

「お前には何も期待してないが？」

「靴紐も結べない男に助けられてもねぇ」

龍騎はヒデーなと少しだけ笑うと、ドラグランザーを発進させた。

「真司さん…オレ…」

「大丈夫大丈夫！君達は俺がゼッテー守るから」

自らの無力さに歯がゆい思いをしながら、真志は携帯を鳴らすのだった

「――もしもし？皆！お願いがあるんだ――ッ」

「うおおおおお！！」

『・・・』

ファムの素早い攻撃をかわす訳でもなく、オーディンは二本の剣で弾き返していく。
ナイトの攻撃も瞬間移動を駆使してオーディンは二人にカウンターを決めていく。

「くっ！」

『トリックベント』

ナイトは分身してオーディンに攻撃をしかける。
ファムのガードベントが見せる幻影も合わさり回避は不可能だ！

『・・・』『リターンベント』

オーディンが発動したカードの絵柄が変わり、もう一度認識音声が鳴り響く

『アドベント』

上空から飛来するのはゴルトフェニックス。
その羽ばたきがナイトの分身も、ファムの羽も全て消滅させる

『ムンッッ！』

「うぅぅぅうッッ！」

「グッ！」

金色の羽が発射され、二人の装甲を乱暴に削りとって行く。

ナイトはファムを庇い前へ立つが、オーディンは瞬間移動でファムの後ろへワープすると背後からファムを金色の羽に包み込んだ。

「きゃあああッッ！！」

「くっ！霧島！」

ナイトは飛翔し、そのままオーディンに切りかかる。
当然瞬間移動でかわされるが、それこそが狙い！

「これで終わりだッ！」

『！』

『ファイナルベント』

出現したばかりのオーディンを青き閃光が捕らえる。
バイクモードへ変形したダークレイダーの捕獲攻撃！

ナイトはそれに飛び乗り、自らのマントで車体を包み込んだ！

「ウォォォオオオオオオオッッッ！！！」

『グゥウウ！！』

風を切り裂くその一撃がオーディンに直撃する。
しかしオーディンはその一撃を確かに受け止めていた。
そしてその僅かな一瞬の間に、一枚のカードを発動させる。

『ファイナルベント』

ゴルトフェニックスが雄たけびをあげてオーディンに重なる。

「！」

加勢しようとしたファムは思わず動きを止める。
それほどまでに眩い光がナイト達を包み込んだのだ。

「え・・・？」

光が晴れたとき、そこに見た光景はまさに絶望と言っていいかもしれない。
倒れるナイト、そしてそのデッキを握り潰すオーディンが見えたのだ。

まさか――――あのナイトが・・・

「グッ！！」

ナイトの変身が解かれる。
無防備な蓮にオーディンは止めを刺そうと手を伸ばした。

だがダークウイングが蓮を庇うように、オーディンに攻撃をしかける！
既に契約は破棄されているのだが、何故かダークウイングはオーディンだけに狙いを定めていた

「キィイイイイッ！」

『・・・愚かな！』

「クッ！やらせるか！」

オーディンが手をかざすのを黙ってみているファムではない。
素早くオーディンを邪魔するために剣を突き出すが・・・

『ふっ…』

オーディンはファムの攻撃をそのまま受けると、
なにくわぬ様子でダークウイングに攻撃をしかけた。
無数の羽がダークウイングに着弾していく

「ちっくしょおお！」

ファムはまるで自分を相手とすら見ていないオーディンに怒りを感じる。
確かにオーディンにとって脅威なのはサバイブ体であるナイトの攻撃だろう。
だが、攻撃を避けすらしない事に無性に腹がたった。

『ムンっ！』

「ぐぐッ！ううあああああ！」

金色の羽がファムの身体に着弾していく。
くじけそうになる心を奮い立たせ、ファムはカードを装填する

『ファイナルベント』

「うおおおおおッッ！」

ブランウィングの突風がオーディンを襲う。
しかしオーディンはそれすらも避ける事なく、ミスティースラッシュを手で受け止めた。
多少は苦痛の声をあげるも、その装甲に特に目立ったダメージを与える事はできない。

『これで理解したか？お前達はもう…』

オーディンはゴルトバイザーを二人に向ける。
勝ち目はないのか？二人は死を覚悟する。
しかし、その時だ。紅蓮の炎がオーディンに向かってきたのだ！！

『チッ！意外と早かったか』

ワープでそれを回避する。この炎は…

「蓮！美穂！」

ドラグランザーが咆哮をあげる。その中心には龍騎が立っていた！

「ッ！遅いぞ！馬鹿！」

「城戸・・・ッ！」

ナイトとファムは歓喜の声をあげる。
それを不愉快とオーディンは鼻をならし一瞥した。

『今さら戻ってきた所で…』

そして、オーディンは足を止める。
その直後、オーディンの目の前に一閃が巻き起こった。

目の間に突き刺さったのは槍…だろうか？
オーディンがそのまま歩いていたら間違いなく直撃していただろう

『・・・』

「フフフ、惜しいね」

オーディンの後ろから青いメッシュの入った少年、良太郎が歩いてくる。
腰にはベルトが巻かれていて、その手にはパスが見えた。

良太郎は圧倒的なオーラを放つオーディンを前にしても、平然と笑みを浮かべている。

『貴様もライダーか…全く、次から次へと…ッ』

「正解。とりあえず君には」

『ＲＯＤ　ＦＯＲＭ』

『・・・・・』

「消えてもらおうかな。変身」

ベルトの中心が青く輝くと、良太郎の姿が電王に変わる。

「フフッ」

『・・・』

ロッドフォームになった電王は、もう一度笑みを浮かべるのだった

第７０話　話０７第（後書き）

さて、もうお気づきの方も多いとは思いますが
歌詞の無断転載についての規制が厳しくなるみたいですね

最初、え!?何?俺、やらかした!?
と思ったんですが皆様に連絡が届いているようでｗ

まあ仕方ないですね。
ですがちょっとまだ基準が分からんもんでして…

これは予約投稿なんで、まだ情報があまりないんですよね

実は私も少し歌詞の一部を転載してしまいましてね
今、ちょっと修正したんですけど…大丈夫かなってｗ

まあ明日明確な情報が届くようで、それを待ちますが…
なんでも引っ掛かった場合、もう即ユーザーを消滅させられるようで

「あぁ!もうじれったいわ!」

「落ち着いてフルーラ。つまりこう言う事かな?」

「「作者はビビってる！」」

「そもそも台詞も一部原作から引用してるものね」

「歌詞だけなのか？台詞はまだ大丈夫なのか？」

「いろいろと心配は尽きないと言う訳ね！」

「だからもし、読者の皆様が」

え？コレやばくね？アウトじゃね？

という感じの文を見つけたらどうか教えてほしいです。お願いします！

ではこれで

次もよろしく！

第７１話　話１７第（前書き）

うーん…やっぱり皆さん修正に忙しいみたいですね
ボクも気をつけないと
今日は番外編も投稿します。理由は番外編の前書きにでも…

ではどうぞ！

第７１話　話１７第

変身と共に電王は走り出す。
オーディンはゴルトバイザーを構えカウンターをしかける為にあえて動かなかった。
このまま突っ込んできた電王に俊足の突きを与え、一撃で沈めようとオーディンは神経を集中させる。

『ハッ！！』

そして、電王がその射程に入った瞬間、ゴルトバイザーを素早く突き出す！

が、しかしそれが当たる事はなかった。

『！』

電王が消えたのだ！

いや、違う。電王闇雲に突っ込んだわけではない。
ウラタロスはオーディンがカウンターを仕掛ける様に誘導し、文字通り釣ったのだ。
電王はスライディングで突き出されたバイザーの下を潜り抜け、突

き刺さっているデンガッシャーの下までやってくる。
そしてソレを素早く引き抜くと、オーディンに向かって思い切り振り回した！

「はぁあああああッ！」

『フン！』

オーディンは瞬間移動で電王との距離をとる。
そして黄金の羽を電王に向けて発射した。強力な飛び道具に電王は対抗する手段をもたない。

「フフッ！」

だが、電王はあくまでも余裕を浮かべていた。
迫り来る羽を見ても迷わず突っ込んでいく！

そしてそのままロッドを地面に突き立てると、棒高跳びの要領で自らを空に放り投げた！
無数の羽のはるか頭上を飛び越えて、電王はオーディンに狙いをさだめる

『むっ！』

『ＦＵＬＬ　ＣＨＡＲＧＥ』

電王の足が光り輝く。

デンライダーキック！

電王はそのままオーディンに向かってとび蹴りを仕掛けたのだ！

しかしオーディンがそれを受けるとは思えない。

それが逆に裏があるのかと警戒を呼ぶ。

『・・・』

そして、オーディンが出した答えは、真っ向から潰すと言う簡単なモノだった。

無数の羽の狙いを空中にいる電王にかえると、羽の量を増やし、黄金の嵐を巻き起こす

『散れ！』

「ふふっ！足元注意！」

『何ッ！』

オーディンはその言葉を信じ、足元を見る。
しかし特に何も無く、電王も羽に巻き込まれ、普通にダメージを受けていたようだった。
キックは中断され、電王は地面に落下する。

「・・・フッ！」

だが、しかし電王、ウラタロスはまだ笑っていた。
足元には何も無いのに・・・？

「嘘だよ…足元じゃなくて…」

やられた！！
オーディンは瞬間移動をするために意識を高める。
おそらく下ではなく…ッ！

直後、赤い閃光の雨がオーディンを囲む！

『！』

「やあああああああああ！」

直後、その赤い閃光。
ポインターに黒い影が突入する。
アクセルクリムゾンスマッシュ！

『ぐぅううッッ！』

直後現れるΦのマークを弾き飛ばすと、オーディンはその影に金色

の羽をぶつける。
高速で動いているにもかかわらず、羽を命中させられるその腕前は最強のライダーを名乗るのにふさわしいだろう

「くっ！」

倒れるのはファイズアクセル。
拓真だった。

奇襲の為に遠くでアクセルを発動させた為、タイムリミットがやって来る。

『１・・・』『Ｔｉｍｅ　Ｏｕｔ』

「お前は・・・？」

蓮は新たに現れたそのライダーに問いかける。

「僕達はあなたの味方です。安心してください…ッッ！」

そう言ってファイズはオーディンと対峙する。
オーディンはすこしファイズと距離をとるため、後ろへさがっていく。

だが、それはフェイク！オーディンは瞬間移動でファイズの後ろへ移動する！

『死――』

「チェック！」『Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ』

『何！？』

今度は青い閃光がオーディンを捕らえる。
既に瞬間移動の事を知らされていた拓真達は、囮の作戦をとったの

だ。

物陰からデルタが現れ、ポインターに向かって飛び蹴りを放つ。

「でりゃあああああああッ！」

『ぐおぉおおおおお！』

ルシファーズハンマーがオーディンにヒットする。

流石のオーディンも、度重なる連撃に参っているようだ。

苦しそうにうめきながらも、黄金の羽を散らしながら牽制する。

『・・・クッ！今から十時間後、
ミラーワールドのこの場所においてライダーバトルに決着をつけるぞ。

もし、ここになければこの街を破壊してでもおびき出してやろう』

「なっ！待て！」

オーディンは金色の羽と共に消える。
完全に気配が消え、戦いは一旦終了したのだった

「蓮！美穂！大丈夫か！？」

「あ…ああ…ッ！」

蓮はフラフラと立ち上がると上空に留まっているダークウイングを見る。

「お前…」

ダークウイングは何も答えない。
まるで、蓮の無事を確かめたからといわんばかりに上空へ飛び立つと、そのまま見えなくなってしまった。

「・・・」

蓮は言葉にこそしなかったが、今までずっと一緒に戦ってきたパートナーに礼を示すとその場に座り込むのだった。

龍騎達は変身を解くと、同じく変身を解いた拓真達に頭を下げる。

「ありがとう、たすかったよ。君たちは――」

「真志君から連絡があって…詳しい事は後で」

「ああ、分かったよ。それより、真志君！」

拓真の後ろで真志が照れくさそうに笑う。
真司は先程と同じように笑って真志に駆け寄った

「サンキュー！真志君！助かったよ」

「い、いや！あははは！」

憧れの人にお礼を言われて真志も嬉しいようだ。

だが、そんな二人に一つの影が襲い掛かった！
ハイドラグーンだ！

運よく生き残った一体が、その爪を突き立てて真志に狙いを定める！

「え？」

「ブブブブブブブッッ！！」

真志が気づいたときにはもう遅い。いまから逃げようにも確実に射程範囲にはいっている。

「うっ！うわぁ！」

思わず腰を抜かしてしまい両手で顔を覆う。

襲ってくる激痛に耐えようと、歯を食いしばった・・・

しかし、痛みは襲ってこない。

真志は助かったのかと安心する、

だが目を開けた時彼の視界に広がっている光景は意外なものだった…

「ッッ！！　真司さんッ！！！」

「大…丈夫…ッ？」

そう言って真司は笑う。
しかしその口からは鮮血が見え、顔色も悪く、足が震えていた。

「真司ッッ！！」

美穂の叫び、それで彼らは事態を理解する。
庇っていたのだ、真司はその体を盾にして真志を守った。

「真司…さん…なんで…」

「言った…だ…ろ?君達…は…俺が…守…るっ…て」

「そんなッッ!」

真司は力を失ったかのようにその場に倒れた。
美穂が何か叫んでいるが真志の耳には届かない。パニックになってしまっているのだ

「え……あ……!」

城戸真司は死ぬ。

その結末を変えたかった、自分には力がないがそう思った。
龍騎になれなくてもいい、そう思ったのに!

オレのせいだ…

「くそっ！」

拓真の合図と共にオートバジンがドラグーンを吹き飛ばす。
そのままゼロ距離でドラグーンを蜂の巣にすると、ドラグーンを爆散させる。

「真司！真司ッ！」

「城戸！城戸ッッ！」

美穂と蓮は真司に駆け寄るが、拓真は二人を制した。
今ならまだ学校の治療器具で助けられるかもしれない！

「バジン！お願い！」

オートバジンは頷くと、真司を抱きかかえ学校へと飛んでいく。

「・・・間に合うといいけど」

拓真は真志に視線を移す。

へたり込んで震える彼に手を差し伸べると真志は弱々しく握り返した

「・・・とりあえず落ち着いた様だね」

ベットに眠る真司を見て美穂達は胸をなでおろす。
しかしあくまでも危機的状況を避けただけで、まだ安心はできない。

「やばい…ですよッ、あのオーディンとか言うヤツ…
指定された時間まであと二時間しかない・・・ッ」

佐野が言う通りだ。
真司は助かったものの、まだオーディンが残っている。
奴を倒さなければ、この街が破壊されてしまうかもしれないのだ。
しかも場所はミラーワールド。入れるライダーは限られる…

「私・・・行くよ」

「ッ！　本気か霧島？」

「強化体だった蓮さんですら勝てなかったのに…」

でも、私が行かなくちゃならないんだ！
美穂は震える手を握り締めて言い放つ。

誰も否定はできない。

残ったライダーは美穂と真司だけなのだ。
真司が戦えない今、美穂がオーディンと戦うしかないのだ。

「ごめんなさい！オレのせいでッ！」

真志は何度目か分からない謝罪をする。
別に誰も真志を攻めなどしない、それはもう彼自身分かっているのに。

だがそれでも真志の心が救われる訳ではないのだ、自分を庇って刺された真司。

真志は自分のデッキを見る。
もし自分が素早く契約していればだとか、もしああしていればということは思わない。
彼はそう言う後悔はしない。

だが、やってしまった事の大きさは真志に重い枷の如くふりかかるのだ

「私たちも…行くよ…ッ！」

まだ少し顔色が悪い翼と司…
彼らもミラーワールドに入れるため、加勢しようと歩き出す。

しかし

「大変です！司くん！」

そこへ夏美が走ってくる。真志達とは違って、その表情は少しばかりの希望が混じっていた

「実はですね！」

第７１話　話１７第（後書き）

次は番外編になってます。
ちょっと本編とするにはタイミング的に違う様な気がするんで…

アギトの時みたく本編の補足シナリオですが、
まあまだ見なくとも大丈夫っちゃ大丈夫ですかね

では次もよろしく！

第７２話　番外編　編外番　話２７第（前書き）

実は次の土日までたぶん更新できないと思うんで
今日二話更新する事にしました

ではどうぞ！

第７２話　番外編　編外番　話２７第

『アンタも無茶するわねぇ…』

「いいんですよっ！
司君達が頑張ってるんですから、私も頑張らないと！」

キバーラの呆れ顔を夏美はくすぐる。
今、夏美と我夢、アキラは街を駆け回っていた。

少しでもコアミラーの情報を手に入れる為、何か手がかりがないかと探していたのだ。
だが、結果はイマイチ。
はやり一般人では知りえない情報を得るのはとても難しいモノだ。
３人はそれを痛感させられる。

一応モンスターが出たときの為にキバーラに付いてきてもらったが、杞憂であってほしい

「アキラさん、夏美先輩、大丈夫ですか？」

「ええ、私は大丈夫ですよ？夏美先輩はどうですか？」

「うぇ！？あ、あはは！
もちろん！元気いっぱいです！」

ああ、違う。
疲れてるんだな、我夢は夏美の様子からソレを読み取る。
正直、いつシアゴーストの大量発生が起こるかどうか、わからない所だったが…
このまま無理をして探すのもどうかと思う。

それこそ大事な時に力が出せないのは危険だ、我夢は夏美とアキラに休憩を申し出た。

「あははは、二人とも凄いですね。
僕はもう疲れちゃって…本当にごめんなさい、ちょっと休憩していいですか？」

我夢のその発言にアキラはしょうがないですねと笑う。
夏美もホッとした様子でその案に賛成した。
3人は街にある適当なベンチに腰掛けて一息をつく。

「私、ジュースでも買ってきます。先輩と我夢君はそこにいてくださいね」

『あ、アタシも欲しぃー！』

「大丈夫ですよ、分かってます」

そう言って微笑むと、アキラはパタパタとジュースを買いに走っていく。

「我夢君、お願いがあるんですけど…いいですか？」

「え？ああ、はい。何ですか？」

「アキラちゃん、きっとジュースを四本も持つの大変だと思うんですよ。
だから、手伝ってあげてくれませんか？」

「あ……ああ！そうか、そうですね。
はい、分かりました！」

そう言って我夢はアキラを追いかけて走っていく。

『アンタが手伝ってあげればよかったんじゃないのぉ？』

「チッ、チッ、チッ！わーってないっすねーキバーラは、
気遣いには気遣いで返すのが流儀ですよ！

いやぁ、我夢君には悪い事をしました。
きっと、私の為に休憩してくれたに違いありません」

『あ！そうか、アンタっ……成る程ねぇ』

キバーラは楽しそうに夏美の周りを飛び回った。

「フフフ、策士夏美。もっと誉めてくれてもいいんです…よ？」

夏美の視線の先には一人の男がいた。
買い物袋を持っているところを見るにスーパーから帰るところだろう。

しかし、夏美にはどこかその男に見覚えがあった。

「んー・・・」

ドラマだったような、それとも雑誌だったような…

「お！」

男の買い物袋からりんごが一つ落ちてしまった。
コロコロと転がるそれは、夏美の足元で停止する。

「あっ……すみません…」

「あ！いえ！そんな…」

少し無愛想…というか、表情が硬い感じの男が夏美のところへやってくる。
夏美はりんごを男に返そうとその顔を見る。

「あああああああ！」

「!?」

思い出した!そうか、ココ龍騎の世界だった。
夏美は司から無理やり龍騎の鑑賞会に付き合わされたのを思い出す。

そうだ、そうだ!

「お話し!聞かせてください!」

「えっ…?」

「ごろーちゃん!」

「・・・」

男、北岡秀一は戸惑っていた。
友人であり秘書であり、ボディーガードである由良吾郎。
そんな彼が珍しく客を連れてきたのだ。

まあ彼にも友人くらいいるだろう、だがおかしいのは明らかに接点がないと言う事。
目の前の客人は3人、いずれも自分達よりかなり年下だろう。
高校生と…中学生か？

しかし、高校生の女の子は必死にシャリシャリ音を立ててりんごを貪り食っているのが何ともまあ…

「なっ、夏美先輩！」

「ふぇ？（シャリシャリシャリ）」

「北岡さんが見えましたよッ…」

「（シャリシャリシャリシャリ）・・・！」

ブッ！！

「あ！ご、ごめんなさい！ちょっと頂いてました！」

「あぁいや、いいんだけど…」

北岡は吾郎に軽く合図を送ると椅子に腰掛けた。
吾郎から少し話は聞いていたため、スーパー弁護士ではなく…

「で？俺に何か用？と、言ってももうライダーじゃないんだけどね」

ゾルダとして夏美達に話しかけたのだった。

「…と、言う訳なんです！」

ふぅん、世界ねぇ…ま、信じられなくもないけどこんな世の中じゃねぇ

「ま、信じてもいいけどさ。俺に何を聞きたい訳？」

「あ、あのですねっ！コアミラーって知ってますか？」

「コアミラー・・・？」

なーんかどっかで…

「あ」

思い出した

「何か知ってるんですか!?よければ教えてください!」

「そう言えばさ…」

「北岡アァァアァァアアっ！」

「ハァ…やれやれ、いい加減お前ともサヨナラしたいね。俺は…」

荒れた廃工場で二人の男が対峙していた。
北岡と、仮面ライダー王蛇・浅倉だ

「どいつもコイツも…ハハァッ！
イライラさせやがってぇぇぇ！」

「何に切れてるんだよお前は…」

適当に置いてあったドラム缶を浅倉は乱暴に蹴り飛ばす。
もちろん、そんな事で彼のイライラが晴れる訳ではない。

そう、もっと大きなものを壊せば、彼の心は晴れるだろうか？

「三人だぁ…」

「？」

「三人、このゲームに乗ったヤツを殺した。ハハッ、ハハハハ！」

だけど…笑う浅倉の顔が急に真面目なものになる。

「弱いッ、どいつもこいつも…ふざけているのかぁ？

アアアアアアア！！」

怒りの咆哮をあげる浅倉。

そしてその時、そんな彼の頬を掠める弾丸。

「・・・」

「お前はやっぱ危険だよ。悪いけど…ここでサヨナラだな」

ゾルダに変身した北岡は、銃で浅倉に威嚇射撃を放つ。
しかし浅倉は、逆に何故か楽しそうだった。
ニヤリと笑って、自らもカードデッキを構える。

「クク…！　変身！」

王蛇に変身を完了させ、二人はミラーワールドへと戦いの舞台を移す。
誰が告げるとも言わぬゴングと共に、二人の戦い…
いや、殺し合いは始まったのだった。

『ソードベント』
『ストライクベント』

剣を構えた王蛇の攻撃を、契約モンスター、マグナギガの頭部で弾き返す。
しかし王蛇は笑い続け、ゾルダに攻撃をしかけていく！

「本当ッ…お前はイかれてるよ」

「クハハハッ！ハハハハァァアハハハ！！」

それは誉め言葉、王蛇は狂ったように

…ではなく、正常にゾルダに連撃を浴びせていく。

「あーあ、やっぱお前は普通じゃないわ」

「普通とは何だ？ハハッ、戦う事か？」

そんな訳ないでしょ…ゾルダは接近戦をあきらめ、銃で王蛇を牽制し距離をとる。
やはりアイツに近距離は無理。なるべく遠、近距離での戦闘を心がけなければ。

「フン…」

『アドベント』

「!?」

後ろから衝撃が走り、王蛇の所まで吹き飛ばされる。
ふと後ろを見れば、サイの様なモンスターが立っているではないか。
コイツが契約したのはどう考えても蛇、つまり…

「はいはい、奪ったってわけねッ」

振り下ろされる剣をかわし、銃で殴るように撃つ。
ゼロ距離での発砲は流石に堪えたのか、王蛇は笑いではなく苦痛の声をあげる。

「フッ、ハハハ！」

しかしすぐに王蛇は笑い出した。

「コレだ…この感覚、この感覚をオレは待ってたんだよ。

北岡ァァ！」

戦いは最高だ。この命のやり取りが最高の興奮を与えてくれる。
王蛇は楽しそうにゾルダに向っていく。

銃を放つが最小限の防御しかしない、銃弾がその体に当たろうとも構わず走り続けた。

「アイツ、人間じゃないんじゃない？」

『シュートベント』

巨大なキャノン砲を両肩に背負って発射する。

たとえどんなに人間離れしているヤツだろうが、コレは受けきれない。

流石にソレを理解したのか、王蛇はその弾丸を交わしていく。

だが、少しずつ、確実に距離を詰められていっているのは事実だ。

ゾルダに焦りが生じる、解除すべきか？

いや、もしかしたら隙が生まれるかもしれない…

その迷いは一瞬、だが、その一瞬が王蛇にとっては絶大な隙となるのだ。

『ファイナルベント』

急に王蛇は加速を始める。その後ろには契約モンスターのベノスネーカー！

「あれ？」

俺、やばいんじゃない？

「クッ！」

『ガードベント』

ギガキャノンを解除して、シールドを構える。
そのまま走るが、逃げられるか！？
すでに王蛇は空中に舞い上がっている。

「クソッ！」

せめてもの抵抗に銃で勢いを殺せないかと撃ってみるが、無駄のようだ。
酸を纏った連続蹴りが、放たれる！

「ハァアアアアッッ！！」

「ッッ！！」

回避するために物陰に飛び込むが、直ぐに蹴りの嵐が襲い掛かって

きた。
数発は重機によって防がれたが、すぐに自らのシールドに蹴りが命中する。
もの凄い衝撃、そして破壊されるシールド。
最後の一発はカードできずにまともにくらってしまった。

「ウッ！ガァッ！」

ゾルダはきりもみ状に吹き飛び、地面に叩きつけられる。

「ハハッ…」

王蛇は笑っていた。何故？
そう、それは自分の体に感じる痛みが原因だった。

「ハハハハハハハ！北岡、やはりお前はただの雑魚じゃないようだな…」

あの瞬間、蹴りがシールドに触れたとき、ゾルダは銃で王蛇の足を撃っていたのだ。
それが原因で少し蹴りの威力が弱まったと言う事なのだ。

「くぉ…」

ゾルダはふらふらと立ち上がる。そして一枚のカードを発動させた。

『アドベント』

契約モンスターマグナギガが現れ、立ちふさがる。
ゾルダは周りを確認すると、すこしマグナギガから少しずれた位置に立つ。

「何の真似だ？」

「さぁね」『シュートベント』

巨大なバズーカ砲を出現させ、ゾルダはソレを王蛇へと向けた。

「ハハハハ、もっと楽しみたかったが……」

『ユナイトベント』

「!?」

「…消えろ」

エビルダイバー、ベノスネーカー、メタルゲラス。

三体のモンスターがゾルダの背後に現れる。

そしてそのまま合体すると、獣帝・ジェノサイダーへと姿を変えた。

「おーお、合体か。昔は憧れたもんだよ」

「アァァアア…終わりだ、北岡」

『ファイナルベント』

王蛇はゾルダの息の根を止めるべく走り出す。
巨大なギガランチャーを構えているゾルダはまともに動く事が出来ない。

しかし、ゾルダは冷静だった。
少しだけ笑うと、そのままギガランチャーを…

横に向ける。

「！？」

「悪かったな、こんな主人で。ま、あの世では幸せにやってよ」

ゾルダが照準に合わせたのは王蛇でもジェノサイダーでもない、マグナギガだった。

そしてそのままゾルダは、引き金を引くッ！

物凄い衝撃と反動で、ゾルダの体が後方へと移動する。
そしてその後方にあったもの…それはガラスだった。

そう、ミラーワールドと現実世界をいどうする媒体。

「知ってるか浅倉・・・」

「ウオオオオオォォオォオォオォ！！」

王蛇はその意味を理解し攻撃を中断する。
しかしもう遅い、発射された弾丸はマグナギガに着弾する。

同時にガラスから現実世界へと戻るゾルダ。

「そいつ、体中にヤバイ物積んでるんだ」

超爆発。まさにその言葉が似合うだろう。
マグナギガの体中にあるミサイルや燃料に着弾からの爆発が引火し、
廃工場を大爆発が包み込む。

ゾルダはそれを現実世界から確認すると、すこしため息をついた。

「本当、お前は人間じゃないよ」

ブランク体となったゾルダは再び廃工場…だった所に訪れていた。
もう何も無い、工場の周りすらさら地になっていた。
しかし、その中にたった一人、人間がいた

「ハハハ……アーッハハハ！」

全身に大やけどを負った浅倉は、死が近づいているというのに笑っていた。

「これが……戦いか……心地いい……」

「・・・・」

もう目すら見えていないだろうに、浅倉は笑う。
ゾルダは、銃をそんな彼に向けた

「・・・・」

何も言わず、ゾルダは浅倉の眉間を撃ち抜いたのだった…

そしてその後、戦いを終えた彼の前に一人の男が現れた。
男は、北岡がライダーだと知ると、目の色を変える

「何？おたくもライダー？」

「ああ、できれば協力してもらいたい…」

そして男は話し始める。
だが、その男の言葉がゾルダの耳にはあまり入る事はなかった。
当然だ、今終わった戦いが北岡という人間の心になにか虚しさのような物を生んだのだ。

「悪いけど、俺は協力できないわ」

なーんか、虚しくなっちゃったんだよね。

「命とか、人生とかさ…だらだらやってても意味あんのかなって…」

「そうか…なら俺の連絡先を教えておく。気が向いたら連絡してくれ」

「はいはい。いただいときますよ」

多分、もう一生会わないだろうけどね

そう言って二人は別れる。

「さてと・・・」

今日は玲子さんとディナーか…遅れないようにしなければ

「・・・・」

永遠の命…か。もうどうでもよくなっちゃったな

「・・・・」

「――で、その時の男がコアミラーがどうのこうの言ってたような気がするんだよねぇ」

「連絡先はまだ？」

アキラの言葉に北岡はハッとする。

「あー…ゴローちゃん、あれどこやったっけ？」

「あ、はい。今持ってきます」

そして戻ってきた吾郎の手には一枚の紙切れが…

「ふぅん。俺も全然興味なかったけど・・・」

その紙を祈るように見ている夏美達に少し興味を示したのか、北岡もその紙を除いてみた。

「住所が書いてありますね…行ってみますか？」

「ちょっと！いいんでしょうか！？勝手に入って！」

我夢は冷や汗を浮かべて夏美達を追いかける。
確かに行ってみようと言ったのは自分だが、不法侵入をするなんて言ってない！

「大丈夫大丈夫、もし訴えられたら俺が白にしてあげるから」

「そういうもんだいじゃないでしょ！」

我夢の心配をよそに夏美達はそのアパートの部屋に来ていた。

住民の名は榊原耕一、だが部屋にその姿はなく。
部屋は不気味なほど静かだった。

「えと…」

北岡達は適当にデスクをあさる。
もう我夢も止める事は無駄だと判断し、それを見ていた。
暫く適当に探していたが、一枚の地図を見つけ表情が変わる。

「赤い点が打ってありますね」

アキラはさらにメモ書きをみつけた

『鏡の心臓』

「あー…」

これは、ビンゴじゃないか?皆は顔を見合わせる

「これで…司君の役に立てたんですね・・・」

嬉しそうに微笑む夏美を見て、北岡は何故かおかしくなる。

「そう言えば…北岡さんのデッキはどうしたんですか?」

我夢の問いに北岡は笑って答える

「なんかさ、ライダー同士の戦いとめようとしてる馬鹿がやって来てね。
ソイツ見てたら、なんかもう本当どうでもよくなってさ」

壊してもらったよ。デッキはね…

「…そうですか」

きっとその人は…城戸真司なのだろう。

「さあ、誰かに見つかる前に…行こうか」

そう言って北岡は立ち上がった。

ぼやける視界、だが北岡は笑う。

たまには人助けも悪くない。

何故か、とてもおかしかった

夏美達と別れた北岡は事務所に帰るために歩いていた。
さっきよりはだいぶマシになった。

ふと、鏡を見てみる…

そこには、赤い髪と青い髪の二人

「？」

北岡が振り返ると、そこには二人の少年と少女が立っていた。
くすくすと笑う二人は北岡に小ビンを投げつける

「うぉと…」

「ゾルダ。参加賞だよ、受け取ってほしい」

「ソレを飲めば貴方を苛む呪縛は消え去るわ。ウフフ…」

「は？」

北岡が間抜けな声をだすと、また二人はくすくすと笑う。
そしてそのまま砂のオーロラの様なモノが現れたかと思うと、あっという間にいなくなってしまった。

「なんなのよ…」

最近どうも調子が狂うね…

「でもまあ」

うけとっておきましょうか。
どうせ死ぬんだ、成るようになれ…

北岡はソレを飲み干すと、あまりの不味さに笑ってしまうのだった。

『余計な事はするなと…言った筈だが？』

クワガタの様な携帯電話から女の声が聞こえる。
ゼノンはそれを聞くと、苦い顔を浮かべて笑った。

「あら？
今さら一人の命を救ったところでどうにかなる訳じゃないでしょう？」

フルーラはしかめっ面でその声にこたえる。

『確かに…あの程度の事では世界に影響はきたさない。
だが、私は死に逝く人間を見るのも好きなのだ。
それを忘れないでもらいたい』

「でも、こう言う展開だって好きでしょう？
人を殺めながらも幸せに向かい続ける人間の姿」

『フッ…確かに嫌いではない』

イエスと言う事か？

二人は笑い合う。
しかし電話の向こうの相手はあくまでも不機嫌そうだ。ゼノン達はお仕置きを言い渡される

「えぇ！金のエンジェル五枚当てるまで帰ってくるな！？

冗談でーーー」

切られた…

「えっと…ゼノン？」

「フルーラ。長い戦いになりそうだよ……コレは」

「お小遣い…足りるかしら……」

可愛いクマの財布を覗き込みながら、フルーラはため息をついたのだった。

第７２話　番外編　編外番　話２７第（後書き）

牛か……じゃなくてマグナギガは
多分爆発したらヤバイと思うんですよね…

じゃあ次は…多分土曜かな？
もしかしたら一回くらいは更新できるかも

では次もよろしく！

第７３話　話３７第（前書き）

はい、どうも！
ちょっと日曜の更新が怪しいので今日代わりにやっとこうかなと

今回ちょっと長いっすねｗ
ではどうぞ！

第７３話　話３７第

「うっ…うぅっ！うぅうう…」

女子トイレではすすり泣く声が響いていた、美歩だ。
真司に助けられた後、彼女はずっとここで泣いていた。

相変わらず鏡の中の自分は親しげに話しかけてくる。下卑た笑みを浮かべながら

『おいおい！泣いてんじゃねーよ、コレってマジでチャンスじゃん！
テメェもデッキ持ってんだろ？
うまくいけばあいつ等出し抜いて勝ち残れるんじゃね？キャハ！』

「うぅ…うううう！」

自分はおかしくなってしまったんだろう、こんな事思ってない。
だがこれを言っているのは自分だ。
心の中でこんな事をおもっていたのだろうか？美歩は自分が分からなくなる。

同時に怖くもなった、ああ…こんな人間だったのか…

きっと真志に嫌われる。ずっと好きだったのに…

『ああ！そうだよ！真志はお前の事なんて何とも思ってねぇ！
むしろ縁切りたいんじゃねーかな？ぎゃははは！』

そうかもしれない。
もともと真志は真面目な男なんだ、頭も悪くないし運動だってできる。

でも自分は駄目だ、

勉強は全然だし運動が得意という訳でもない。
自分といれば真志の評価まで落ちてしまう…

『でも、大丈夫！大丈夫だよ私』

急に優しく話しかけてくる自分に、少しだけ心が揺らいでしまう。

『願いを叶えれば真志とずっと一緒にいられるから…』

美歩の心が揺らぐ。

そうか？

そうなのか？

いたい。離れたくない…

『私は私の味方だから。さ、手を出して』

「あ・・・」

しかし、そんな彼女を抱きしめたのは鏡の中の自分ではなかった。

「え？」

いきなりの衝撃に美歩はバランスを崩す。
だが、それでも彼女が倒れる事はなかった、彼女はしっかりと支えられているから

「・・・何しに来たの」

「・・・」

美歩は支えている手を掴む。
引き剥がしたかったができなかった、思わず泣きそうになる

「美歩・・・」

「真志…ここ、女子トイレなんだけど」

「ああ」

悪い、そういって謝るものの真志は美歩から手を離すことは無かった。
むしろ強く抱きしめる。

後ろから抱きしめられ顔もうつむいている為、
美歩から真志の表情は読み取れなかったが、震える手と足をみて普通ではない事を悟る。

「どうしたの…？」

真志は弱々しい声で小さく呟く。

「あのな…オレ、決めたことがあるんだ…」

「うん…」

「だけど、怖いんだよ。
一度決めたら迷わないって生き方してきたけど…
怖いんだ…」

でも

「生きてるうちにそんな事何回もあった。
どうしていいか分からなくて、迷う事すらできなかったり、
逃げたり…」

怯えているのだ。そう、誰だって…

「真志…は…」

美歩は少し迷ったが、口を開いた。

鏡の中の自分が鬼の様な形相でなにか言っている様な気がしたが無視することにした。

だって、いつもそうしてきたから…

「真志は…大丈夫っしょ？いつもいつも乗り切ってきたじゃん…か」

「・・・」

真志は美歩から手を離す。

そして振り返る美歩に向かって笑いかける

「ぁ…」

「おう！そうだな、助かったぜ」

真志は美歩の肩をポンポンと叩くといつもの様に笑って走り出した。

とてもさっきまで落ち込んでいた人間には見えない。

その変わりように美歩は思わず吹きだしてしまった

「なんだよ…それ…」

「あー…美歩！」

「・・・ん？」

「やっぱ、お前に励ましてもらうのが一番しっくりくるわ」

「え…！」

真志は顔をこちらには向けずにハッキリと彼女に言った。
しかしすぐに走って行ってしまうのだが…

「・・・」

だが、美歩の心のなかで何かが楽になった様な気がした。
それはとても暖かいもの、ずっと忘れてたような思い

『おい！ざけんなッ！思い出せ！
テメェがアイツにどれだけ迷惑かけたとおもってんだよ！

アイツはてめぇの事なんてどうでもいい！
迷惑だと思ってる！

おい！聞いてんのか！おいッッ！』

「・・・ッ！」

思い出す？今までの事を…？

雨、曇天。ああ、どうでもいい。どうでもよかった。

靴を履いてなかった事を後悔する。
それより傘をもってこなかった事を悔やむべきだろうか？

「・・・・・・」

もういい、そう彼女は思う…
彼女の家族は皆頭が良かった。よく言えば博識、悪く言えば厳しいという所か。
学者の父や、会社でリーダーを任されている母。

そしてなによりその二人から絶大な信頼、期待、そして愛情を注がれている姉。
その三人の家族だった。

そう、三人だけなのだ。
では私は？彼女は思う。

極論で言ってしまえば…そう、自分が悪いだけなのだろう。

彼女の成績はあまり…いや、とてもいいとは言える物ではなかった。

ピアノもバイオリンも英語も習わされた。
だが、どれも結局やめさせられた。

何故？

彼女は続けたいと言った。
たしかに自分が集中していなかったり、遊びに呆けていたというのもあるが…

『恥ずかしいでしょ、そんなんじゃ』

それが親からかけられた言葉だった。

ああ、そう。

いつもそうだった、授業参観にきてくれた事なんてなかった。
来てくれたのは最初だけ…

しかも教師から当てられた時、緊張して答えられなかったのを見て途中で帰られた。

その後家に帰れば怒られ、二度と行かないとまで言われた。
でも、姉の授業参観にだけは欠かさず行っていたみたい…

体育祭だってそう、応援はいつもお姉ちゃん。
お弁当だってお姉ちゃんの方がよっぽど豪華だった…

お姉ちゃんと喧嘩をすれば絶対私が怒られる。
どんなに言っても、何を言っても信じてもらえないッ！

でも、だけど・・・信じてた。
私の事も絶対愛してくれてるからって信じてた。

でも、私が熱をだしても迎えにすら来てくれなかった。
お姉ちゃんが熱を出した時は仕事中だってのに抜けてきやがって…

怒られればそう、あの言葉をいつも言われてた。

『お前なんか生まなければよかった』

「・・・・・・」

もういい、私は親になんの期待もしない。
お姉ちゃんは嫌いじゃないけど好きにはなれない…

家族ってこんなモン？

別に頭が特別悪いってモンでも運動神経が極端に悪い訳じゃない。
なのになんでこんなに

責められて

怒られて

悲しい思いしなくちゃいけないんだよ！！

そんな反抗で髪を染めた。自分でもよく分からない反抗だった。
なんでそんな事したんだろう？

頬に走る痛みを感じて私は強く思う。

叩かれた。そして言われた。

『お前はもうこの家の人間じゃない！今すぐ出て行け！』

『あなたは恥しか晒さないの？
あなたのせいでお姉ちゃんの評価まで下がるのよ！
ああ、生まなければよかった！アンタなんて！』

気づくと裸足で家を飛び出していた。

もう嫌だ。

苦しい、

辛い、

悲しい、

悔しい、

怖い

まだそんなに暖かくない季節、雨に打たれ続けて体が震えてくる。

どこか…雨宿りしないと…

いっそこのまま雨に打たれ続けてたら倒れて、病院に運ばれたら両親が駆けつけてくれるのかな？
そんな淡い期待を抱く。

いや、そんな訳ないか。
結局私は本当に要らない子なんだ、いっそこのまま本当にいなくなったほうが両親達も姉も喜ぶのかもしれない。

「それも…いいかもな…」

適当に見つけたアパート、そこで雨宿りをすることにした。
これからどうしようか？

ああ、もう分からないし…泣きたくなる

「・・・ッッ、ぅぅぅぅぅっ、ぅぅぅぅ！」

もっと、普通の家庭に生まれたかった。毎日が楽しいと思いたかった…

適当に座る。顔をうずめて、体育座り。
なさけない、でもそれ以上に悲しい…寂しい

あれからどれだけ泣いただろうか？

寒い、本当に寒い。
体もだるいし、頭もクラクラして気分が悪い。

もしかしたら熱がでたのかもしれない。
雨も激しさを増して横から体に当たってくる。

外も暗くなってきたし、ますます不安になる。

だが、もう彼女に帰れる場所はない。
帰ってもまた結局同じ事なのだ、自分のやった事を後悔しても何にもならない。
それは分かっているのだ。

だけど後悔が悲しさに変わってまた涙が込み上げる。

誰か・・・助けてよぉ

彼女は切にそう思う。
その時だった、彼女に降りかかる雨がピタリと止んだのは…

「え？」

不思議に思って顔を上げる。

「・・・！」

そこには自分と同じくらいの男の子が立っていた。

男の子は複雑な表情でこちらを見つめている。

「あの……」

「え？」

「すいません…そこ、オレの部屋なんですけど」

「あ！」

そこで初めて自分が背もたれにしていた壁が、扉だったことに気づく。

「ああ…えと、すいません。オレ何かしましたか？」

「あ…いや、ごめんなさい。なんでもないです…」

恥ずかしい、早くどこかへ行こう。

そう思って手に力を込める。

だが、うまくいかない、フラフラして尻もちを着いてしまった。

「ハァ・・・ハァっ！ご、ごめんなさい…ッ」

呼吸が荒くなる。体の節々に痛みを覚える。

ああ、ちくちょう、熱かよ…

「・・・っ」

意識がもうろうとしてくる。
彼女は遂に耐え切れずその場に倒れた。

その様子をみて少年はイライラしたような目でため息をつく。

「くそっ、何なんだよ…」

なるべく他人とは関わりたくなかったのに

「・・・・あ」

彼女が目を覚ましたとき、見知らぬ天井がまず目に飛び込んできた。

ここはどこだろう?

病院…ではなさそうだ。

体はまだだるく、重い体を起こして周りを見てみる。

暗い、何も見えないってのが正直な感想だった。

「?」

救急車の音が近づいてくる。

そのまま暫くして、救急隊員が目の前にやってきた。

理解した。

自分はあの少年の家で寝ていたのだ。

きっと少年が救急車を呼んだのだろう。彼女は少し抵抗するも、そのまま病院に連れて行かれるのだった。

「あの・・・」

ドアの前には少年が立っていた。
顔は…まあ普通。
髪は黒くていじっていないところを見るに、自分と違って真面目なんだろう。
一人暮らしだろうか？
そんな事を思う内に少年が喋りだす。
「本当に・・・ごめんなさい。オレの事殴ってもらってもいいです。とにかく病院から帰ったらオレ何でも言う事きますんで…」
少年は目を反らしてそう言う。
最初は意味が分からなかったが、今自分が着ている服を見て理解する。

「あ！」

「・・・っ」

自分は制服を着て飛び出してきた。
でもその制服は今干されている。

そして自分が着ているのは見た事ない服、男物のソレはきっとこの少年の物だろう。

と、言う事は

「ごめんなさい。濡れたままじゃ…と、思って。
でも、最低ですね。本当に殴ってくれてもいいです、
お金…も、あるだけなら…」

恥ずかしい。顔が赤くなる、でもしょうがないと言えばしょうがない

「いや…その、悪いの私だから…」

そう言って彼女は病院に向かうのだった。

「・・・めんどくせぇ」

少年は小さく呟いた。

今、自分のやってる事は正しいのか?それとも…

「・・・あの、本当にすいませんでした」

「あ…えと…」

特に普通の熱だったので、薬を貰って彼女はまたこのアパートに戻ってきていた。
少年はもういいと言っているにも関わらずに謝り続けている

「もうホントにいいから！全然気にしてねぇし！だはは！」

「…ごめんなさい。あの…だけど、どうしてあそこに？」

少年の問いに彼女は黙り込む。
言いたくない、それを瞬時に見抜いたのか少年は追及を止めて彼女に温かいミルクティーを差し出した。

「・・・あの」

「え？」

少年は立ち上がると、出かける用意をする。

「もしよかったら、この家つかってもらってもいいです。
オレ漫画喫茶に泊まるんで」

「え！」

少年の言葉に彼女は目を丸くする。
たしかに…泊まる所はないが…

その時、少女の心になにかが芽生える。
もしかしたら…少しは気が紛れるのではないだろうか？とかそう言う考えが大きく膨らんできて、もう制御できなかった

「あの！さっき言った事・・・マジ？」

「え・・・」

彼女は少年の目を見つめる。
そこに何か迫力の様なモノを感じ、少年はすこし表情を引きつらせた

「あの…何でも言う事聞いてくれんの？」

「ッ…　あの、できる範囲であれば」

「じゃあ・・・」

もうどうにでもなれ！ヤケになった彼女は迷わずそれを口にする

「ここに置いてくれない？」

「・・・は？」

まあ、それが当然のリアクションだろう。
しかし彼女は迷わずに全てを話した。

もうこの少年がどんな人でもいい、ありのままを受け止めようと彼女は決める

「駄目？」

「いや…駄目って言うか…」

この女、何言ってるんだ?意味分かってるのかよ…

「じゃ!はい!決まり!安心してよ、私もバイトでちゃんと家賃はらうからさ!」

「でも、普通に考えてまずいっつうか…オレ達全然知り合いでもなんでも――」

「私の裸見たんでしょ?もうそんな仲じゃない」

「裸じゃない!変な言い方するな!」

「だははは!おっけおっけ!」

これで、確信した。この人は安全、彼女はその手を差し出す。

「私、白鳥美歩ってんだ」

「・・・」

ここで、断れば…オレの印象が悪くなる。
制服からしてこの女はオレと同じ学校、変な噂を流されるのは……

少年は複雑そうな顔をしながらも、その手を掴もうと手をのばす

「あ！あと、敬語はぜってーやめてよ？美歩って呼ぶこと」

「・・・」

少年はため息をついて苦笑する。
仕方ない、コレも乗りかかった船だと思うか

「分かったよ、美歩。オレは条戸真志、よろしく」

二人は曖昧な笑顔を浮かべて、その手を強く握りしめた。

それからは本当に大変だった。
まず彼女の姉と祖母に連絡をとってなんとか説得した。
そして両親には祖母の家で暮らすと言う事にして、なんとか真志の家に転がりこんだのだった。

もちろん普段あまりやらない選択や料理もしなければならなかったし、
最初の方は二人の関係もあまり良いとはいえず、沈黙の時間が続いたりもした。

だけど、しばらくすれば二人の間からぎこちなさが消えていた。
たしかに毎日は大変だったが…

「うぅ・・・疲れた」

「おう、また居残りかよ。ははっ！」

「あーあ、アンタとは頭のデキが違うんでね！

・・・あの、さ」

「ん？」

「ただいま…」

誰も、返事なんてしてくれなかった。

「おう、おかえり」

だけど、今は違う。今は彼が答えてくれる！

ある日、髪が茶色いと怒られた。
一応髪の色についての指定は無い為だいたいの教師は見て見ぬふりをするが、
たまにそういうのにとても厳しいヤツがいる。

名前もしらない教師、しかし悪いのは自分だろう。
美歩は悔しくなる。

いや別に染めてもいい。だが何故かできなかった。
親への反抗心で染めてみたが、もし戻してしまったら本当に親から見離される様な気がしていた。

もはや彼女にとっては怒られる事すら会話として成り立つ分、
若干の嬉しさがあったくらいである。

だから、美歩は戻せずにいた

「・・・はぁ」

「・・・」

そんな彼女をちゃんと真志は見ていた。

翌日、彼女は目を疑った。

あのクソ真面目だった真志の髪の色が変わっていたのだ。

それは自分と同じ茶色

「アンタっ、何で…」

「あー…ほら、新聞部ってなめられたら終わりだからな。

外見で威嚇できる様にしとかねぇとな」

嘘、そう彼なりの優しさの様なものなのだろう。
すごく偏屈な優しさだったが、美歩はとても嬉しかった。

真志と関われた事で、友達もたくさん出来た。
友里達に司達とも最近は話す。

毎日が楽しかった。暖かかった。幸せだった…

だが、同時に申し訳なくなる。
真志はきっと迷惑してるんじゃないか？

やっぱり出て行った方がいいんだろうか？

ずっと、助けてもらってばかりで自分はなにもしていない。
それじゃ真志に嫌われないだろうかと、さまざまな事を思うようになった。

だがそんな事を布団の中で考えていた夜の事

「なあ…美歩、起きてるか？」

「・・・」

すこし眠くて返事が遅れてしまった。
しかしそれを寝ているととったのか、真志は一人話し出す。

「寝てるんだな…じゃあ、言うぞ」

「・・・？」

寝ているのに？
美歩は疑問に思いながらも、何を話すのかが気になって寝たふりをつづけた

「オレの親、お前には海外に行ってるって言ったけど…アレ嘘な。
逮捕されたんだよ、二人とも…」

「！！」

「ハッキングソフト作ってそれ使ってハック失敗。
ははっ、笑えるだろ？
マジ、そんなモン作るくらいなら真面目に働けってな…」

「・・・」

「それからオレが何か悪い事でもすれば決まって周りのやつ等は同じ事いいやがる。
犯罪者の息子なんてそんなモンかとか…
ああ、クソッ思い出すだけでイラつくわ」

だから、真面目に生きてきた。善意で生きてきた。

「でもよ、疲れるし　結構ストレスもたまったり？
ああ、別に全うに生きるのがいやって訳じゃないぜ？
でも、なんか重かったんだよな……」

真志はそこで少し口を止める。

「でも、お前といるとそれがなくなる。楽しくなるんだよ世界が…
正直最初はめんどくさいとか思っちまったけど…ごめん！」

「・・・！？」

「何か…だから…その、変な負い目感じてるみたいだけど…気にするなよ。
オレだってお前に助けられてるんだ。
互いに助けあってる、それでいいだろ？」

「・・・」

「・・・って、面と向かって言えないのがオレの悪いところなんだよな」

あーあ、寝てる相手に何やってんだか…

そう言って真志は美歩の部屋を後にする。

「・・・ッッッ！！」

真志は美歩がいたからその重圧に耐えられた。
美歩は真志がいたからその重圧に耐えられた…

偽善で救った者と偽善に救われた者。

結果、本当に救われた者と本当に救ったもの。

二人の不思議で確かな関係…絆。

『ガッ！・・・ゴフッ！ァァアッ…！』

目の前の鏡がクモの巣のように網目を張っている、
その中にいる自分はとても苦しそうで、何より信じられないと言う目をしていた

『オマエッ！何で…！？』

滴るのは赤い血液。

握った拳から流れるそれを見てますます驚愕する私…

いや、私の姿を借りた…

「消えろ、化け物」

『なっ！！』

美歩は目の前の鏡を思い切り殴っていた。

思い出したのだ、真志は自分の事を荷物とは思っていない！

『グググッ！ガガッ！アァアアッ！』

目の前の自分が、自分でなくなる。
やはりコイツは自分じゃなかった、今まで散々振り回されたが…もう迷わない！

『ちくしょうッッ！もう少しでお前の体をのっとる事ができたのに！』

私はッ！！鏡の中の幻じゃなくなるのにぃいいいッ！
化け物は美歩を殺そうと手を伸ばす。
しかし化け物は弾かれる！舞い散るのは白き羽。

『ギャアアアアアア！！』

化け物は目の前に現れた白鳥に成すすべなく敗北する。

「！」

「頑張ったな…美歩ちゃん」

「霧島さん！」

そこに立っていたのは霧島美穂だった。
ブランウィングは既に化け物を絶命させており、優雅に飛び去っていった。

「噂には聞いたことがあったよ、
心の隙間につけこんで体を乗っ取ろうとするミラーモンスターがいるって・・・」

そうだったのか、美歩は誰にも相談しなかった事を強く後悔する。
結局信頼して欲しいと思っていながら、自分はこのざまか…

「それで・・・美歩ちゃん、真志君がね…」

「え…？」

そして美穂は…話す。真志の決意を――ッ！

第７３話　話３７第（後書き）

あのまま美歩が鏡の中の自分に取り込まれてたらリュウガ的なモノになってた…と言う事ですね

あと美歩の両親は本気で美歩を嫌っている訳ではないです親の気持ちと言うのは中々子供には伝わらないモンですよ

と、青いガキが言ってみましたｗｗ

では次もよろしく！

第７４話　話４７第（前書き）

日曜は普通に更新できそうかな
ではどうぞ！

第７４話　話４７第

「ちょ！そんな！」

「ごめん…止められなかった」

美歩はその事を告げられる。
絶対に勝機など無い戦い、正直殺されにいっただけと言ってもいいだろう。

しかしそれでも真志は戦いに行った。

真司の為、

この世界の為

皆の為

・・・それともう一つ。自分の為に

「・・・」

「私はこれから真志くんを助け――」

「美穂さん！」

美穂は思わず言葉を止めてしまう。
当然だ、いきなり土下座なんてされたら誰でもそうなるものだろう。
美歩のいきなりの行動に美穂は戸惑う。

「一生の・・・お願いがありますッ！！」

誰の為に戦うのか、生きるために戦うのか

…そんなの分からない

だけど、たったひとつだけ理由を作るとするなら

あなたの為に戦いたい

もっと、一緒にいたいから――っ

その少し前に時はさかのぼる。

「行くのか・・・霧島」

美穂は頷き、デッキを取り出す。
正直、勝てる可能性はゼロに近い。

いや、ゼロと言ってもいいかもしれない。

だが、行かなければならない。
たとえ自分が死ぬことになったとしてもオーディンに会わなければいけないのだ。

「行ってくるよ…真司…」

恐怖の感情を隠して美穂は真司の頬に触れる。
もしかしたら…これが最期かもしれないのだから。

「あッ…」

美穂が真司の体に触れた事で、真司のポケットに入っていたデッキが滑り落ちてしまう。

美穂はソレを拾おうと手をのばす。

「え！」

しかし――それよりも早く、デッキを拾い上げた人物がいた。

「・・・オレ、真司さんに憧れてました」

そう言って、真志は龍騎のデッキを見詰める。

「もし、オレがライダーバトルに参加してたら絶対真司さんと同じ事考えてたと思う
・・・でも、オレは絶対それを途中であきらめてた」

ぐっと、デッキを握りしめる。

そう、正しく…正義に生きたいとずっと思っていた、両親が捕まったあの日から。

ずっと善に生きる事を目標にしていた。

だって、そうする事で自分と自分の周りを守れるのだから

偽善でもいい、とにかく世界の好感度を上げろ。
ずっとそう考えてきた。

そう、逆に言えばそれしか考えてなかった。

そうなのだ。真志の正義、行動は全て計算されたモノだった。
善を都合よく操り、それから得られるメリットの事しか考えていなかった。
もちろん正義感が全くないと言う訳ではない。

だが、得られるメリットを考えて優先する善意があるのは確かだった

友里は自分に似ている、そう思った時期があった。
彼女もまた自分を正義で保持していたのだろう、

だが…彼女とは違う点が一つだけあった。

彼女は本当に正義の事を思っている。
それがうまくできない事にジレンマを感じていただけだ。

しかし自分はそうじゃない、正義をかざしているが他人の為になど考えた事がなかった。
正義、善意は自分をよく見せるだけの道具だとずっと思ってきた。
そうすれば後ろ指をさされる事はないと・・・

それは拓真も同じだっただろう。
だが、自分は逃げていた、拓真の様に自分が傷つくのは嫌だった。
拓真は強い、自分が傷ついても他人の為に心から動ける事ができる男だ。

自分はどうか？

無理だ、上っ面だけ。

もう自分ですら正義と善意、それの裏に秘めた黒い感情を理解できない。

『お前は結局自分の事しか考えてねぇんだよ』

鏡のようにもう一人の自分が語りかける。

そうなのか？

そうなのかもしれない

ああ言えばこう返ってくる。
これを言ったら駄目だ。

そんな事ばかり考えてた。

断言できる、オレの正義は偽りだ。
打算的な利己主義を振りかざしてた。

でも、だからこそ・・・真司という存在が大きく見えた！

他人の為に命をはり、願いが叶うと言う条件を突きつけられてもその思いを曲げなかった！

本当の正義は真司の様な人間！

だから…真司は、彼の意思は死んではいけない！

「・・・ッ！」

真志は見る。鏡の奥、窓の向こうにドラグレッダーがその眼を光らせたのを！
それは合図。決意の証明！

「オレ、ずっと逃げてました。
正義気取りたいのに、大事な事になれば逃げてばっかで・・・」

美穂達は真志が何を言いたいのかまだ分からない。

それに構わず真志は続ける。

「オレは真司さんみたいになりたかった。
雑念にまみれた正義とかじゃなくて…本当の正義ってヤツを」

真志はゆっくりと備えてある鏡の前に向かう。

「お前、まさか・・・」

「オレ、自己犠牲なんてゴメンだと思ってました。
だけど真司さんがオレを守ってくれて…少し考え変えてみたんです」

ごめんなさい。真志は真司に向かってそう告げる。

あなたに助けられたこの命、賭けに使わせてもらいます

「美穂さん。あなたは生きなくちゃいけない、真司さんには貴女が必要なんだ。
もし、真司さんが目覚めた時に、貴女がいなくちゃ…」

真志が何をやろうとしているのか蓮は理解する。
それがどういう事を意味するのか、蓮はおもわず声を荒げる。

俺が変わる！

――と。しかし真志は首を振る。

「すいません。やっぱりオレはこういうやり方しかできないみたいなんで」

「・・・真司くんにだって大事な人くらいいるだろう?」

佐野も意味が分かったのか、問いかけるようにつぶやく。

「オレのわがままです、皆には申し訳ないと思うけど…コレは譲れない」

一度、もう何も考えないでありのままに――っ我武者羅な正義を!

でも・・・

「負ける気もないけど・・・ッ!」

突き出す拳！
握られているのは深紅の竜が宿る魂！

「！」

それが合図だと、世界は認識する！

真志の腰に現れたのはＶバックル。

それを見てようやく美穂達も真志が何をしようとしたのか理解する

「本気なの！？」

真志は何も答えない、突き上げた手は真司のポーズとは逆のもの。
そして、その間から見える彼の眼に宿る赤き決意！

「・・・変身！」

オーディンは朝焼けに照らされた街をゆっくりと歩いていた。
もう、彼には時間がない。

本当は残り一人になったライダーを殺し、今まで蓄積された命を彼女・・・

優衣に与えるつもりだったが、予想以上に城戸真司達が邪魔をして

くれた。

また、繰り返す事になるのか？

いや、そうはさせない。
もう今回で決着をつける。優衣を救う為なら他のなにを犠牲にしてもかまわない。

それこそ…世界であったとしても…

『・・・』

オーディンはふいに右手を横に向けた。
その刹那、そこに紅蓮の火球が着弾する！

オーディンはそれをなんなく握り潰すと、その火球が飛んできた方向に目を向けた。

『・・・来たか』

「・・・・・・・」

オーディンの先には龍騎が立っていた。
それが開戦の合図、龍騎は素早くカードを発動させる

『ソードベント』

「うぉぉォォオオオオオォォオッッ！」

龍騎はドラグセイバーを構えて一直線に走り出す！

『・・・ッ！』

「くっ！」

振り下ろしたソレを、オーディンは真正面で受け止める。
掴まれたセイバーに力を込めるがピクリとも動かない！

「くっ！ぉおおお！」

『・・・？　お前は…誰だ？』

一瞬動きを止める龍騎、しかしすぐにその眼に光を宿し思い斬り叫ぶ！

「オレはッ！仮面ライダー龍騎だ！」

『！』

思いきり力を込めてオーディンの手からドラグセイバーを引き抜いた。
散る火花と共に龍騎はもう一度オーディンにドラグセイバーで斬り掛かる。

しかし、オーディンは瞬間移動でソレをかわすと、背後から龍騎に殴りかかる。

一発、二発。オーディンは龍騎を殴りつけていく！

このままではマズイと振り返りながら斬る龍騎。それをまた受け止めると、次は蹴りで龍騎の腕を弾く！

龍騎はドラグセイバーを衝撃で振り落さないよう力を込めるが、逆にそれがボディのガードを緩めてしまう。
オーディンはそのがら空きになった体に黄金の羽をぶつけ、爆発させた！

「グッッ！！！」

よろける龍騎に瞬間移動で背後に回ると、ドラグセイバーを掴み上げそのまま龍騎ごと地面に叩きつける！

その際にドラグセイバーは叩き折り、
自分は代わりにゴルトバイザーで龍騎を殴り付けた。

『無駄だ、お前では私には勝てない』

「あーあ…やっぱそうなのかねぇ…」

苦しそうに呻く龍騎を、どうでもいいと言った様にオーディンは見

下す。

『もういい、死ぬがいい』

「くっそ…」

オーディンはゴルトバイザーを龍騎に突き立てる。
そのまま力を込めれば終わりだろう。

オーディンは手に力を入れ――――

『シュートベント』

ビュン！と白い弓矢がオーディンの手をかすめる。

『・・・』

「・・・！」

ボウガンを構えているのは、ファム！

『霧島美穂か・・・』

ファムは何も答えない。

そしてブランバイザーを構えると、オーディンに向かって走り出したのだった。

「ウオォオオオオオオオオオォォオオオッッ！」

アホみたいなお願い。ただの我がままだろうそれは…

でも、美穂は自分にこのデッキを託してくれた。

私たちが負ければこの世界の運命は破滅に一気に近づくというのに…

「ウラァアアッ！」

『チッ、霧島美穂ではないな』

「ああッ！？美歩ちゃんは美歩ちゃんだよ！」

「美歩！？お、お前ッ！」

受け流すオーディンの足元を狙って蹴りを繰り出す。
しかしオーディンは一気に後ろへ飛ぶと、黄金の羽をファムに向けて発射した。

「うあああああああ！」

羽の爆発に巻き込まれてファムは龍騎の元へふき飛んでいく。
龍騎はファムに駆け寄ると、その手を強く握り締めた！

「お前！どうして！？」

「は…ハハッ！決まってんだろ？
私たちいつも助け合ってきたじゃんか…だからさ――」

一人じゃ…ないから

「・・・」

龍騎は頷くと、ファムと一緒にオーディンと対峙する。

勝つ、いや…勝たなければならない。

世界の為とか、誰かの為とか…

全ての為に、オーディンに勝たなければならない。

「「・・・」」

だが、勝てない。

力の差がありすぎる。

無理、無理だろう。

無理なのだ。

勝てない、勝てるわけが無い・・・

『愚かなライダー達よ、協力？団結？戦いを止める？
馬鹿が、そんな綺麗ごとを振りかざすな。
人間は自らの欲望の為に戦う！それが本質！あるべき姿なのだ』

無能なライダーをオーディンは愚かと斬り捨てた。

『人は一人で戦うのが定め、貴様らのような無能が私に勝つ事など不可能！』

『アタックライド』『ブラスト！』

『！』

無数の弾丸が変則的な起動を描いて、オーディンに向かっていく。
素早く瞬間移動で後ろへ下がるが逃がさない！
一発が着弾し、間髪をいれず次々とオーディンに弾丸が直撃していく！

『クッ！目障りな』

だが、どれもたいしたダメージではない。
しかしその一撃が龍騎達を奮い立たせる！

「俺達は欲望や願いの為に人を傷つける。その時、人間は一人だろう」

だがな――――

一歩一歩近づいてくるそのライダーにオーディンは強い不快感を覚える。

「だが、俺達は大切なモノの為にも戦う。
そん時は俺たちは……弱くても、
愚かでも……一人じゃない！」

『何だと・・・っ？お前…何者だ？』

歩いてきたライダーは龍騎とファムの前に立ち、オーディンのオーラと対峙する。
その何者も恐れないごとし姿は、龍騎とファムに強い勇気を与える！

「俺か？そうだな――
俺は・・・」

そこで彼は言葉を止める。

「真志、美歩。よく聞け」

「「！！」」

「この戦い、俺達に勝機はないだろう。勝率は限りなくゼロに近い」

いや、もしかするとゼロなのかもしれないな、ライダーは笑う

「俺達はアイツに絶対勝てない」

『分かっているのなら早く私に殺さ――』

「だがッ！「絶対」は「絶対」にありえないッッ！何故なら、俺は破壊者ディケイド！
今からこの世界の「絶対」を――ッッ！！」

ディケイド達三人は一気にオーディンに向かって走り出す

「破壊するッッ！！うおぉおおおおおおッッ！」

『来い、ライダー達よ。その命、貰い受けるぞ！』

こうして、この世界の運命を決める戦いの幕が…切って落とされたのだった

第７４話　話４７第（後書き）

真志と美歩はそれぞれ自分のデッキからカードを移しました

まあ、スペシャル版を見るに龍騎のライダーは
デッキさえ受け取れば契約者じゃなくても変身できるようなので
そちらの設定を採用しました。

では次もよろしく！

第７５話　話５７第（前書き）

次の更新は月曜かな？
では、どうぞ！

第７５話　話５７第

「変身！」『カメンライド・ファイズ！』

ディケイド達はオーディンを囲むようにして立つ。
しかし瞬間移動を使うオーディンを囲んで攻撃する事は不可能である、おまけに強力な羽という飛び道具がある以上変に作戦を練っても無意味なのだ。
だからこそディケイド達は最低限の作戦でオーディンに立ち向かう！

「うらッ！」

『・・・』

避けられる。ああ、分かってる！ディケイドは手持っていたカードを素早くライドさせた！

『アタックライド・オートバジン！』

『っ？』

空中からオートバジンが飛行してくる。
バジンはガトリングでオーディンの周りを射撃していった。
無数の弾丸の雨は、オーディンがどこへ移動移動しようとも降りかかる攻撃のシャワー

『目障りな！』『シュートベント』

バジンを照らす様に空から光が漏れる。
バジンはその光から逃れようとするが、光はバジンを追うように出現していき、捉えていく

「ハァッ！」

龍騎とディケイドは、バジンに気をとられているオーディンに攻撃をしかけた。
しかし、瞬時に後ろへ回られ、逆に激しいラッシュを仕掛けられてしまう！

「ウオォオオッ！」

そこを突く様にファムの連撃がオーディンへと襲い掛かる。
瞬間移動が間に合わなかったのか、オーディンに数発ファムの攻撃がヒットする。

だが初めての手ごたえに一瞬気を緩めてしまった

『ムンっ！』

「くっ！」

オーディンはその一瞬の隙にファムのブランバイザーを掴み、そのまま投げ飛ばす。
さらに空中に放り出されたファムに追撃の羽を発射した！

しかし、羽はバジンが発射したガトリングにかき消される。

――と同時にオーディンが発動したシュートベントがバジンに命中し、バジンはマシンディケイダーへと戻ってしまった。

『ソードベント』

『ソードベント』

龍騎とファムはそれぞれの剣を構えオーディンに向かう。息もつかせぬ連続攻撃を仕掛けなければオーディンに勝つ事など不可能だろう

『ソードベント』

オーディンもまた2つの剣を出現させ、二人と対峙する。

「ッ！」

『遅いなッ』

またも一瞬で後ろへ回られた為、二人の反応が遅れる。そこに振り下ろされるゴルトセイバー

「美歩！」

「きゃ！」

瞬間的に龍騎はファムを突き飛ばし、オーディンの攻撃を受け止める。
度重なる瞬間移動、そのうちになんとなくだがオーディンがどこに現れるかの予想をつけていたのだ。その読みが当たったという事だろう。

「ぐぅううッッ！あぁあああああ！！」

しかし読みが当たったからといって、力の差がありすぎては意味のないもの。
二本のゴルトセイバーを受けきれるわけも無く、龍騎はドラグセイバーごと切り裂かれた。

装甲も大きく削られ、あと一撃でも受ければ完全に削がれてしまうだろう。

「っせるかぁあああああ！」

『フォームライド』『アクセル！』

ディケイドは瞬時に『Ｓｔａｒｔ　Ｕｐ』を発動させ、猛スピードでオーディンの懐へ潜り込む！

流石のオーディンもコレには対処できない、ほぼ唯一といっていい攻撃チャンス。

本当はとって置きたかった気もするが、迷っている暇はない！

『ファイナルアタックライド』『ファファファファイズ！』

「ウラァアアアアアアアアアア！！」

超高速連撃、アクセルグランインパクトを叩き込む！

一発、また一発とオーディンの厚い装甲に拳を叩き込んでいくディケイド！

龍騎と同じ場所に想いと力を込めて殴りつけていく！

『グォオオォォォオォオッ！』

「ハァアアアア！」

ファムもまたラッシュに参加する。

二人の連撃はオーディンに初めてまともなダメージを与えただろう。

「くっ！」

しかしディケイドにタイムリミットが訪れる。

「まだだぁあああああ！」『ファイナルアタックライド』

ディケイドは変身を解除して、元の姿に戻る。
そして発動させるのは自らの必殺技！

五枚のホログラムカードが、オーディンを押し出していく

「ヤァアアアアアアっっ！」『ディディディディケイド』

ライドブッカーを剣にしてカードを通過していく。
巨大化する剣と、カードに怯むオーディン。

決まる！いけると確信する！

・・・が、

『スチールベント』

「なっ！」

ディケイドの手からライドブッカーが消滅する。

いや、違う！

消滅したのではなく奪われたのだ。オーディンに！

『フンッ！』

「ガァアアアアッッ！」

奪われたライドブッカーで逆にカウンターを決められてしまう。

あまりの衝撃に吹き飛ぶディケイド。

その隙にオーディンは黄金の旋風でファムを吹き飛ばし、自らも一

枚のカードを投入した。

『アドベント』

上空からゴルトフェニックスが飛翔し、現れる。
そのままフェニックスはよろよろと立ち上がろうとした龍騎に体当たりを決め、さらに旋廻しもう一度体当たりを決めた

装甲がまだ直っていない龍騎は、その攻撃に耐えられる自信がなかった。
みしみしと嫌な音をたてて、鎧が剥がれ落ちる

「くっそ！」『アクセルベント』

龍騎は自らのスピードを上げ、攻撃を回避する。
そしてそのままオーディンに向う。

アクセルの加速とほぼ同等のスピード、これならばまたオーディンにダメージを与えられるのではないか？

淡い期待が過ぎる。

それに乗じてファムもまた立ち上がりオーディンに切りかかる！

『同じ攻撃が私に通じるとでも？』

「何ッ！」

「くっ！」

オーディンは双方の手で龍騎とファムの攻撃を受け止めた。

いくら加速していようと、手を捕まれてしまっては身動きが取れない。

そのまま何もできずに時間切れがやって来る。

「くそっ！」

「はっ！前ががら空きだぜ！変身！」『カメンライド』『キバ』

ディケイドはキバにフォームチェンジすると、オーディンに蹴りを仕掛ける！

『無駄だ』

「何っ！　グアッッ！」

上空からゴルトフェニックスが飛翔し、ディケイドを弾き飛ばす。まだアドベントは終了していなかったのだ。

ゴルトフェニックスはそのままディケイドに二度三度と突進を仕掛け、また上空へ舞い上がっていった

「ちっ！」

ファムは剣から手を離し、とび蹴りを仕掛ける。
しかしオーディンは素早く龍騎を盾にし、それを防いだ。

「いっつ！」

「あ！ごめん、真志！」

オーディンはそのまま瞬間移動でファムの隣に移動する。
黄金の羽を撒き散らせ、二人を吹き飛ばすとファムにゴルトバイザーで追撃を行った。

「くっ！アッッ！」

激しい攻撃にファムはなす術もない。
バイザーも弾かれ、暫く攻撃を受け続けてしまった。

もちろんそれを黙ってみているわけがない。龍騎はガードベントを構えファムの前に立つ。

『その粗末な盾で私の攻撃が防げるとでも?』

「へっ、やってみろよ!」

オーディンはその言葉には従わす、龍騎の足を払う。
足は盾では防げない、龍騎はそのまま地面に倒れてしまう。

オーディンは倒れる龍騎に何度も蹴りをいれ、サッカーボールの様に転がしていく!

「グッ!ガッ!」

「真志!」『フォームライド・ガルル』

狼の雄たけびと共にディケイドの姿が変わる。
一気にオーディンの所まで跳躍すると、獣のように激しい斬撃でオーディンと龍騎の距離を離した。

『そこだッ！』

「グッ！」

その激しい攻撃から一瞬の隙を見出しゴルトバイザーで突きを放つ。
ふらつくディケイドに蹴りと拳を瞬時に打ち込んでいく。

「ガッ…フッ！」

『ふん・・・』

よろけるディケイドの後ろに瞬間移動し、さらに蹴りとバイザーで殴りつけるオーディン。
傍から見れば遊んでいる様にも見えるその一方的な攻撃。
途中龍騎の攻撃が入るが、それを受け流し弾き飛ばすと、またディケイドを殴り続けた。

「ウッ！ウォオォォォオォオオ！！」

『ファイナルアタックライド』『キキキキバ！』

このままでは危険と判断したのか、ディケイドは必殺技を発動させる。
夜に変わる景色、そして上空に現れるのは巨大な月！

「ヤァアアアァァアアッッ！」

ディケイドは上空に飛翔し、月と重なり合う！
そのままガルルセイバーを振り下ろしオーディンを切り裂く！

・・・筈だが――

『ガードベント』

「なっ！」

ゴルトシールドにガルルセイバーは弾かれ、そのままディケイドは空に放り出されてしまう。
そこへ襲い掛かる黄金の羽、ディケイドは爆発に飲まれ地面へ叩き付けられた。

『その程度か？』

オーディンはディケイドの首を掴み強引に持ち上げる。
そしてそのままゼロ距離で黄金の羽を発射し、ディケイドを爆発の嵐に巻き込む！

「グゥウアァァアァッ……」

『アドベント』

「キュイィイイイイイ！！」

ブランウィングがオーディンを弾き、ディケイドを救出する。

「グォオォォオオオオオォッッ！」

『・・・』

さらに龍騎の発動させたアドベントでドラグレッダーもオーディンに攻撃を仕掛けた。

流石に大型モンスター二体が相手になればオーディンもそちらに気をとられる。
しかしオーディンの実力ならばドラグレッダーを殺す事などたやすいだろう。

龍騎は早めに発動を終了させ、オーディンとの距離をあける

『ブラストベント』

入れ替わりでゴルトフェニックスが現れ、その羽を羽ばたかせる。
すると通常の倍ほどもある羽が龍騎達に襲い掛かった！

「くっそぉおおぉぉおおお！」

『ファイナルアタックライド』『キキキキバ！』

ドッガハンマーに変わっていたディケイドが龍騎達の前に出る。
闇の雷で錬成させた拳を振り回し、羽を散らしていく

『・・・』

オーディンはファムの隣に移動すると、ゴルトバイザーを突き出した。
それに突き刺さるファムだが、一瞬で白い羽に変わる

『何ッ！？』

「やあああッ！」

ファムのガードベントの効果でオーディンの狙いがずれていたのだ。
その隙にファムはオーディンに渾身の突きを当てる。

だが、これも決定打にはならない。
オーディンは直ぐにファムを蹴り飛ばすと、瞬間移動で距離をとった。

『ククク…しかし』

オーディンは辺りを見回す。苦しそうに立ち上がる三人。

『諦めた方がいいのではないか？』

「うる・・・せぇ」『クリアーベント』

ファムの姿が消える。
しかし、オーディンには関係がない、羽を散らせば勝手にダメージを受けるだろうと黄金の旋風を巻き起こす。

『フォームライド』『ストーム！』

しかしアギトに変わったディケイドが起こす小規模の竜巻が、黄金の羽をまとめて収束させる。
これでファムを見つける事は出来ない！

『足音』

「・・・は？」

『足音は消せなかったようだな。ククク！』

オーディンはゴルトバイザーを構えその場所に振りかざす。
直後小さい悲鳴が聞こえ、ファムの体がさらけ出された。

「化けモンかよ！」

龍騎とディケイド、ファムの三人はオーディンに攻撃を仕掛けるが誰一人まともに命中させる事すらできず、受け流され、受け止められ、カウンターを決められてしまった。

まさに圧倒的な力の差。
フラフラになりながらも戦う彼らと、余裕の笑みすらもこぼれるオーディン。

まさに最強――

第７５話　話５７第（後書き）

アクセルベントのスピードはアクセルよりちょい遅いとお考えください
しかし、何かライダージェネレーション欲しくなってきやがったｗ
まあいいです

では、次もよろしく！

第７６話　話６７第（前書き）

次の更新は多分明日…だと思うんですが
もしかしたら不定期になるかも

すいません！

ではどうぞ！

第７６話　話６７第

『リミッツベント』

「うおぉおおおおおおおおおお！！」

龍騎の体が赤く発光する、十秒だけ身体能力が跳ね上がるリミッツ！
龍騎はそのままオーディンに殴りかかる。

『・・・クッ』

拳を受け止めたオーディンから苦痛の声が漏れる。
もう一発殴ろうと、龍騎は拳を振り上げた！

『フンッ！』

オーディンは黄金の羽を発生させるが、龍騎は怯まない！
龍騎の意地だ、ここで倒れる前に終わらせる！

『あまり…』

オーディンは龍騎の攻撃を防御しながら、そう呟く

『調子に乗るなよ』

「ッッ！！　がはぁぁっ！」

瞬間移動は攻撃を受けていたら発動できない。
オーディンはその両手で、龍騎の拳を受け止めると渾身の蹴りで龍騎を空中へ押し上げた

「リミットでも…駄目なのかっ…」

強い…っ！

強すぎる！

今まで戦った誰よりも！

なによりも！

だが、勝機が無いわけではない。

一つだけ、それは賭けの様なモノだが…龍騎には考えがあった。

昔、バイトでクソ重たい荷物を持たされた事がある。

次の日には何とも無かったのだが、さらにその次の日。

腰に猛烈な痛みを感じて歩く事すら厳しかった。

そう、遅れて痛みがやってきたのだ。

ダメージは蓄積されていた、自分じゃ気がつかなかった。

なんとも無いと思っていたのに！

「・・・・」

『ハッ！！』

よろける龍騎をオーディンは殴りつけ、蹴り飛ばす

そして笑った

『ライダーは欲望に溺れ、そして死ぬ。それだけでいい』

「何……ッ！」

『ストライクベント』

龍騎はドラグクローを構えてフラフラと前に出る

『巨大な欲望のその先には大きな力がある。それに人は飲まれる』

オーディンは龍騎に止めをさそうと、一歩前に出る

『だが、お前らは無力だ。そのまま惨めに死を迎えるがいい』

「っ！違う！」

『ククク！』

オーディンが消える。

奇襲、もう龍騎達にオーディンの攻撃を受けきれる体力と精神力は残っていないも同然だった。

この奇襲を許せば・・・

負ける――ッ！

「・・・」

龍騎は大きく深呼吸をする。

どこだ？どこから来る？

これは賭け、もう自分の勘を信じる他ない。

龍騎はドラグクローに全ての力を込める。

真司から受け継いだこの力、生きる願いを、彼の想い……

「――――ッッァアアアアアアアアア！！」

それれらの想いを乗せて、龍騎はその方向を思い切り殴った！

『……何いいッ！』

「どうやら、当たり…みたいだなッ…！！」

龍騎の一撃をオーディンの装甲が受け止めていた。

真正面ど真ん中、龍騎の読みは的中していたのだ

『しかし…』

悲しいかな

『力が足りん』

ゴルトバイザーが龍騎の腹部にめり込む。

「「真志！！」」

ディケイドとファムが苦しそうに龍騎のところへ向う。しかし間に合わない！
オーディンはもう龍騎の目の前に移動していた

「ぐぅぅううッ！」

膝をつく、龍騎。
オーディンはまだ余裕の笑みを浮かべている。

『終わりだ…』

これで終了。オーディンはゴルトバイザーを天高く振り上げた。
これを振り下ろせば龍騎の装甲を破壊できるだろう。

オーディンはそれを思い切り――

『・・・』

「・・・いや」

振り――

『・・・ッッ！！』

「…ッ！　終わりじゃない…賭けは」

下ろす事が出来なかった。
ゴルトバイザーは力を失ったオーディンの手から滑り落ち、音をたてて地面に落ちた。
オーディンは自分の胸を苦しそうに押さえながら、訳が分からないと言わんばかりに龍騎と自分の胸を交互に見やる。

「賭けはオレの勝ちだ…ッ！」

『オッ…お前！何を…！何をした！』

龍騎は呼吸を荒げ、苦しそうに立ち上がった。
そしてオーディンを指差し、大声をあげる！

「オレがッ…何かをしたんじゃない！！」

『何ッ！？』

ビシッ！

――っと何かにヒビが入る音が聞こえた。
そう、オーディンの装甲だ！

黄金の鎧に一筋のヒビが入っていた

『馬鹿な！お前の一撃にそんな威力が――』

いや、違う！いくらなんでもそれはない！
サバイブ体である筈のオーディンが、こんな何も強化されていない雑魚に装甲を砕かれる訳がない！

それこそ自らと同じであるサバイブ体の――

サバイブ体…？

『お前を一発殴りたかった！』

『まさかッッ！！あの時の！！』

あの時の龍騎――ッ！！

城戸真司の一撃なのか！！

「「「！！」」」

あの時の、龍騎の一撃なのかっ！？

いや…違う。

「それだけじゃねぇ！」

『何いぃいっっ！』

「ナイト！蓮さんの一撃！」

『グッッ！』

ビシッ！っと、また一筋、黄金の鎧に亀裂が入る！

あの時、ナイトサバイブの必殺技をまともに受けていた事を思い出す。
まさか…回復が追いつかないほどのダメージを受けていたの言うのか！？

「インペラー！佐野さんの一撃！」

『ガァァッ！！』

また一筋！亀裂！あの弱々しい一撃ですらッ！？

「一つ一つのダメージは小さいさ。けどなッ！
お前の体に確かに蓄積されてたんだよ！！」

『先程の一撃でッ！私の鎧が限界を迎えたとでも言うのかッッ！』

クモの巣のように亀裂が広がっていく！

「ファム！美穂さんの一撃ッッ！」

『馬鹿なッ！そんな事がっ！』

あの突き、避ける意味すらないと慢心していたのかッッ！？

そして――ッッ

「オレ達の一撃だ…ッッ！！」

『ガァアアアアアアアアアアアァ！！』

ドラグクローから炎の弾丸が放たれる！

それをスイッチに、無数のヒビが入ったその鎧は遂にその限界を向かえ粉々に砕け散る！

あまりの衝撃に思わず倒れるオーディン！

『グゥウウゥ！そんな事がぁぁああ！』

直ぐに体制を立て直そうと、よろける体を直ぐに起こす。
だが、その眼に飛びこんできたものは――！

『ファイナル――』

一方、病院では…

「・・・ッ」

真司の手を握りながら美穂はため息をついた。
後悔しているのか？蓮のその言葉に美穂は小さく頷く。

やはり、美歩を行かせた事は間違いなんだろうか？
自分がファムとして、いや願いを叶える為戦うライダーとしてオーディンに挑まず、
あろう事か自分の後輩になるかもしれない少女に任せるなんて…

佐野が空気を読んでフォローの言葉を言ってくれるが、どうしてもそれが引っ掛かってしまう。

正直、自分としても真司と離れたくなかった。死にたくなかった…

「お願い…ッ！」

だから彼女は普段絶対にしないであろう、神に祈りをささげると言う行動をとる。
神様、お願いです。どうか、彼女達を死なせないで。生きて帰ってきて…と

「お願いだから死なないでよ…」

「・・・」

美穂の目から涙がこぼれる。
しかし、同時に感じたのは手を強く握られたと言う事だった。

「え…？」

美穂は驚きに満ちた目で自分の手を見る。強く握られている手と手…

「…ッ！　大…丈っ夫！」

「しん…じ……？」

「「真司！」」

「センパイ！」

三人の驚く視線を受けながらも、城戸真司は目を覚ましその体を起こす

「大丈夫…ッ！真志君たちなら…きっと！！」

できるからッ！！

「ウォオオオォオオオォオオオォオオオ！！」『ファイナルベント』

龍の咆哮に龍騎の咆哮が重なり合う。

「ハァァアアアア――ッッッ……」

ドラグレッダーは龍騎の周りを飛び回ると、龍騎と共に上空へ舞い上がった。
そして炎を纏ったとび蹴りが放たれる！

ドラゴンライダーキック！！

「ダァァアアアアアアアアアッッ！！」

『ウォオオオッ！』

オーディンの意識が鮮明になると同時に目の前には龍騎の蹴りが迫っていた。
オーディンは瞬間的に直撃を避けるため、両手でその蹴りを受け止める！！

『グォオォオオッ！！』

鎧が砕かれた事で少し力が落ちているのか、オーディンの手に力が入る。
全力を込めなければ押し負ける！！

「ウワアアアアアアアアアア！」

「変身！」
『カメンライド・クウガ！』『フォームライド・タイタン！』

『ファイナルアタックライド・クククウガ！』

ファムのバイザーとディケイドの剣がオーディンに迫る！
もはや回避は不可能！

だが、オーディンは考える。
いくら装甲が剥がれたとはいえ向こうとてボロボロの状態、まだコチラの方が有利ではないか？

耐えられる！

そして耐えた後全力で潰せばいい！

「「ヤァアアアアアアア！」」

二人の突きがオーディンに…

『っっ！しまった！』

いや、違う！

二人はオーディンを狙っていない！

「へっ！今頃気づいても遅い！」

「例えどんなに装甲を厚くしても…」

ここだけは私たちと同じ！

『馬鹿な！馬鹿なぁあああ！』

二人が狙ったのはオーディンのカードデッキだった！

それに気づくが、今両手を離しては…！

「「「終わりだぁぁぁあああッッ！！」」」

『ッ！』

第７６話　話６７第（後書き）

今度友達と映画行こうと思います。
案外高校生とかもいるんですよね、レッツゴーの時とか…

ちょっと目があったら

なるほど、コイツもディープなファンなんだな
なんて事思ったりしてますｗｗ

では次もよろしく！

第７７話　話７７第（前書き）

明日はお休みするかもしれません。お許しを！

ではどうぞ！

第77話　話77第

静寂が辺りを包む。
そこにいるのは地面に膝をついている龍騎達と直立しているオーディンだった。

オーディンの足元にはバラバラに砕け散ったカードデッキと、カードが散乱している。
既にオーディンの体は粒子化が始まっており、それは彼が敗北したという何よりの証拠だった
最強のライダーであるオーディンに彼らは勝利したのだ！

「勝った…のか」

「ああ…」

「や…やった！」

喜びにくれる三人。

…だが

『フ…フフフ』

「！」

『フハハハハハ！！』

オーディンは笑い、地面に散らばった一枚のカードを拾い上げた。
それを見た瞬間、ディケイドの雰囲気が一変する。

いや！違うと、自分達はまだ勝利していない！！

そんなディケイドには目もくれず
オーディンは素早くその拾い上げたカードを発動した

『タイムベント』

「ッッ！！まずい！美穂！
コンファインベントを使え！」

「え！あ、うん！」

『コンファインベント』

オーディンのセットしたカードが白い羽に変わる。

しかし――

『リコールベント』

『タイムベント』

「！」

オーディンが発動したカードの効果で再びそのカードが発動される

『なかなか焦ったぞ、ライダー達よ』

オーディンの粒子化がピタリと止んだ。
それだけではない、デッキが破壊されているにも関わらず変身さえ解かれ無いオーディン。

そもそもデッキが破壊された時点で契約は破棄されるのではないのか！？

「なっ！何で！」

『私は神崎士郎によって生み出された特別な存在だ。契約の破棄はない』

オーディンはタイムベントで自分の粒子化を遅らせたのだ。
時を戻す必要はない。なぜなら…そう

『貴様らを殺せば…全てが終わる』

オーディンは最後のカードをバイザーにセットした

『ファイナルベント』

「くっ！」

身構える三人の前にゴルトフェニックスが出現する
神々しい光を発しながら、ゆっくりとオーディンの頭上に下降していくゴルトフェニックス。

もしあれが重なれば…

負ける…だろう――ッ

『私の…勝ちだな』

「くっそぉ……！」

「あき…らめてたまるかぁぁあ！！」
『アタックライド・イリュージョン』

『ファイナルアタックライド』『ディディディディケイド！』

ディケイドの両隣に分身が現れ、三人のディケイドはそれぞれライドブッカーガンをオーディンに向ける！

「早く！オーディンを倒せば！」『ファイナルベント！』

ブランウィングの羽ばたきでファム自らが加速しオーディンに向う！
オーディン達が重なり合う…エターナルカオスが発動する前にッ！

早くオーディンを倒さなければ――ッ！

「「「間に合えええええええええええ！」」」

光がはれる。倒れるファム、龍騎、ディケイド。

そして・・・

『・・・』

オーディンは立っていた。

しかも――――ほぼ無傷！

『・・・』

何かおかしい、オーディンは思う。

衝撃がなかったのだ。

あれだけ意気込んでいたファムたちの攻撃を全く感じなかった。

装甲が削られているのに全くダメージを受けなかったのはおかしな話だ…

「・・・う」

『？』

ファムが何かを呟いた。
オーディンは聞き取れなかったため、耳をすませる

「私らの勝ちだよ、クソ野郎」

『！』

そこで、気づく。

そして、見る！

自分の体から黄金が消えいくのを！

『まさかっ！』

振り返るオーディンの目に飛び込んできたモノ、それは…
ファムのブランバイザーが頭部に突き刺さっている。契約モンスター、ゴルトフェニックスの姿だった！

『貴様ら！』

そう、ファムたちはオーディンを狙ってなどいなかった。
最初から契約モンスターであるゴルトフェニックスのみを狙ってい

たのだ！

「賭けだったけど…うまくいったみたいだな」

ディケイドは立ち上がる。
全力をかけた一撃はゴルトフェニックスを粉砕したのだ！

そして訪れるのはオーディンのブランク化。

いくら絶大な力があろうともそれは契約モンスターありきでの事。
契約モンスターを失ったオーディンの姿は粗末なモノへと変わっていく

『おのれぇぇッ！』

「美歩！」

「はいよ」『フリーズベント』

ファムはゴルトフェニックスからバイザーを引き抜き、一枚のカードを発動させる。
それはモンスターの時を止めるフリーズベントのカード。

オーディンの契約モンスターは不死鳥。
つまり一度殺しても灰になり、直ぐに生まれ変わる。

そうすれば再び契約を結ばれてしまうだろう。だからこそここで時を止めて置く

『馬鹿な！そんな！私が…』

負ける！？

「真志ぃ！決めるぞ！」『ファイナルフォームライド』

「ああ」『リュリュリュリュウキ！』

龍騎の姿がドラグレッダーに似た龍へ姿を変える。

「名前は……どうすっかな…」

「ドラゴンしんちゃんとかは？」

「龍騎レッダーでいいか」

「きけよ！」

ファムを軽くスルーして龍騎レッダーとディケイドは、ドラゴンライダーキックと同じ構えをとる。

『『ファイナルアタックライド』』

重なる音声、飛び上がる二人

『馬鹿な！馬鹿なぁぁああ！！』

ブランク体になったオーディンにもはや回避の術はない。

『リュリュリュウキ！』『ディディディケイド！』

『「ヤァアアアアアアアアアッッ！」』

『グァアアアアアアアアア！！』

炎を纏ったディメンションキックがオーディンに炸裂する！

『ゆ…い…』

「・・・っ」

彼が戦う理由の言葉を呟き、オーディンは爆発するのだった…

彼ら激闘を繰り広げている頃、アギトはある場所に来ていた。

「・・・」

夏美が駆け回って情報を集めた結果、興味深い情報を見つけたのだ。
それは榊原耕一という男が残したとされるメモ書きだった。

そこには鏡の心臓と書かれた一文と、この街の地図に赤い丸が打ってあったモノ。

鏡の心臓…

「間違いないね…」

アギトはその赤い丸がうってあった場所にやって来る。
彼が仮面ライダーとして覚醒したからなのかは分からないが、明らかに異質な場所の様に感じたのだ。

オーラが違うといったらいいか？
うまく言葉には表せなかったが、たしかに何か不思議な感じがする場所だった

「・・・」

おそらくこの先に…あるのだろう、心臓であり破壊すべきコアミラーが

「よし！」

アギトはトワイライトフォームに変わる。
このフォームでしかミラーワールドに入る事はできないからだ。

アギトは深呼吸をしてミラーワールドに突入した。

皆が今頑張っている！自分も彼らの力になれるようにせねば…
できれば一緒に戦いたかったが、トワイライトのステータスは低い。
これでは足手まといになってしまう可能性が高かった。

だから翼はいざと言う時に強制的に戦いを終わらせる手段としてコアミラーの破壊を引き受けたのだった。

「・・・」

一見は普通の地下駐車場と言った場所だ。
しかし、異質な空気はますます濃くなるばかり。

さすがのアギトも緊張感を隠しきれない、少し足が震える。
自分の足音だけが響くその空間。

しかし、アギトは見つける、それを！

「！」

巨大な鏡、まさにそれは心臓と言うに相応しいモノだろう。
圧倒的なオーラにアギトは思わず足を止める。

だが、それと同時に背中に強い痛みと衝撃を感じた！

「グゥぅッ！」

『ギギッ！ギギギ！』

『ギギギギッ！ギギ！』

アギトの背後に現れていたのは二体のクモ型モンスター、ソロスパイダーだった。

そしてもう一体アギトに攻撃を仕掛けてきたのはジョロウグモ型モンスターのレスパイダー！

アギトはレスパイダーの鋭いカギ爪を紙一重で交わすと、転がるように三体との距離を空ける。

まずい、アギトのトワイライトフォームは戦闘向きではないのだ。
司から聞いていた為、ガーディアンがいる事は知っていたが…

なんとか切り抜けなければッ…

「くそっ！」

コアミラーさえ破壊すれば良いのだが、なによりこの三体の強さは異常だった。
トワイライトアローは全て弾かれ、軽快な動きで辺りを跳躍し攻撃を仕掛けてくる。
一つの攻撃が終わればもう一体の攻撃が襲い掛かり。

そんな激しい攻撃の渦にアギトは捕らえられていた。
なんとか回避しつづけるものの、いつまでも続く訳がない。

「ぐはっ！」

アギトの体から火花が散る！
よろけるアギトにもう二体の激しい攻撃が襲い掛かった！

「グッ！」

なんとかソレを回避するアギト。
しかしレスパイダーは自分の爪を地面に突き刺し、まるでコマの様に回転蹴りをアギトに浴びせる

「ッ！」

トリッキーな動きにアギトは翻弄され、同時に押されていく。
さすがに三体一は無謀すぎるといってもいい。

一体に攻撃をしかけても、もう一体がすぐに助けにはいってくる。
いや、二体ならまだいけたかも知れない…

だが、三対のスパイダーはアギトに爪を突きたてて何度も引き裂こうと襲ってくるのだ

「くそ！」

『ギギギッ！』

『ギギギギ！ギギギ！』

ソロスパイダーはアギトに掴みかかると、アギトの体をレスパイダーの方へ向ける。
レスパイダーはそれに感謝するかの様な仕草を見せると、なんどもその爪でアギトの鎧を切り裂いていった！

「ぐぁぁぁあぁぁあああぁ！」

苦痛にうめくアギトに気をくれず、スパイダーは狂ったように切り続ける。
だが、少しだけ時間がたつと、あきたと言わんばかり、玩具のようにアギトを蹴飛ばす！

「ぐぅ！ガッ！」

直ぐに体勢を立て直すと、アギトは少しだけその場に立ち止まる

（考えろ！今のままじゃ勝てない…）

「いや…ッ！待てよ、これなら…！！」

アギトは何かを思いつく、それが決まれば…ッ！！！

彼は走り出すのだった。

第７７話　話７７第（後書き）

とり合えずオーディン戦は終了です

どうなんでしょうか、本編でゴルトフェニックスについてはあまり触れられなかったけど
やっぱ不死鳥なんですよね。
でも一度死んでからすぐに蘇る方のパターンを採用しました

では次もよろしく！

第７８話　話８７第（前書き）

明日は更新できなさそうなんで
今日やっておきます

今日ちょっと、友人の家に泊まりに行くんで、もし感想とか書いてくださる方がいても返事が遅れてしまいます。それはすいません！

ではどうぞ！

第78話　話87第

アギトは何かを決めたかのように頷くと、もう一度スパイダー達に向かって走り出す。
だが、彼の右ストレートもレスパイダーに受け流され、カウンターとして体を切りつけられた。

だが、アギトは諦めない。
蹴りでレスパイダーとの距離を離すと、横から来たソロスパイダー達に応戦した。

数発殴りつけ、数度切られる。
その応戦が暫く続いた時、レスパイダーの強力な一撃がアギトに決まった！

「うわぁぁあああ！」

アギトはそのまま吹き飛び、車のサイドミラーを経由して現実世界に弾き出される！

『ギギギッ！』

『ギギギギギ！』

『ギィィィ！！』

二体のソロスパイダーとレスパイダーはアギトに止めを刺すべく、自分達もミラーワールドから現実世界へと移動する。

だが、それが…間違いだった

「ハァァアアアっっ！」

『！』

アギトの色が変わる！

グランドフォーム！

そう、ここはミラーワールドではない。
つまりトワイライトで戦わなくてもいいのだ！

『ギギギッ！』

『ギギッ！ギギギギ！』

その意味が分かっていないソロスパイダー達は、爪を構えて走り出す。
彼らはまだアギトの力がトワイライトの時と同じと思っているのだ。

だが違う！

「ハッ！」

『ギギッッ！？』

突進してきたソロスパイダーを受け流すと、裏拳と回し蹴りでカウンターを決める！

何かの間違いではないか？
そうスパイダー達は思い、もう一度同じように切りかかった。

だが、またもアギトは攻撃をかわす！
それだけでなくスパイダーの爪が振り下ろされる前にストレートで怯ませ、上段蹴りでスパイダーを大きく吹き飛ばした！

『ギィィィイイ！』

レスパイダーもその危険性を感知し、加勢する。
しかし、レスパイダーの爪はアギトに触れる事すらなかった。

『！！』

「フッ！たぁあああッ！」

『ギィイイ！！』

アギトの片腕の装甲が青く変わり、その手にハルバードが握られていた。
アギトを中心に暴風が巻き起こりレスパイダーの攻撃を遮断する！

吹き飛ぶレスパイダー。
アギトはさらに自らのベルトに手をかざした！

「はぁあああッ！」

そこから現れたのは紅き刀、フレイムセイバー！
セイバーは鞘に収まっていたが、鞘が光輝きその形状を変化させる。
鞘はクロスホーンの様な形に変わると、セイバーに装填された。
本来のフレイムセイバーの形に変わったのだ。

それに反応してアギトのもう片方の腕の装甲が赤く染まった。
一方の手にはストームハルバード、もう一方の手にはフレイムセイバー！

クロスホーンが展開し、アギトの周りに光の衝撃波が発生する。
スパイダー達はそれに触れると、さらに大きく吹き飛ぶ！

「悪いけど…負けられないんだ！」

アギト、トリニティフォーム！

そのオーラにスパイダー達は怯むが、それを振り切るかのように走り出した！

「はぁぁッッ！！」

『ギッ！』

『ギギッ！』

しかしアギトの圧倒的な連撃にねじ伏せられる！

うなる様にハルバードとセイバーがスパイダー達を切り裂いていく！

風と炎の演舞は、美しくも強大だった

「・・・！」

アギトの足元に紋章が現れ、アギトは構えをとる。
スパイダー達が何かくると思った時にはもう手遅れで――！

「タァアアアアっ！」

アギトはハルバードとセイバーを…投げた！

二本の武器は、風を切り裂いてそれぞれソロスパイダーの眉間に突き刺さるッ！

『ギギギイイイィィイイイィ！』

『グギギイイィイイギイギイギィ！』

二体のスパイダーの頭上に天使の輪を連想させるモノが浮かび上がり、そして二体は爆発した！

『！』

いや、それだけではない！
爆炎の中からアギトのドロップキックがレスパイダーに向けて放たれる！

ライダーシュート！

爆炎で隠れていたためにレスパイダーは防御が間に合わず、直撃を許してしまった！

『ギィイイイイイッ！』

爆発。アギトは勝利の余韻に浸る間もなく再びミラーワールドへと

向った

「あれを…っ！壊せば！」

マシントルネイダーを走らせ、コアミラーに向う！

だが、頭上から大型モンスターディスパイダーが現れ、糸を絡ませてきた！
その強靭なワイヤーの様な糸は、一度絡みついたら獲物を絶命させるまで離さないだろう。

「悪いけど！」

しかし、それを橙の光が吹き飛ばす！
トワイライトの特殊能力、拘束解除。

アギトはマシントルネイダーのアクセルを最大にしてディスパイダーを振り切った！

「これで決めさせてもらうよ！」

そして…そのままコアミラーへと……

「うぉおおおおおおおお！」

「じゃあ、真志。私は美穂さんとの約束があるから」

「ああ、じゃあ後でな」

美歩はそう言って、司達に背を向ける。

約束だったのだ、もし戦いに勝てば・・・

「え！そんな！別にいいですって！」

デッキを受け取った美歩はその条件を受け入れまいと、必死に首を振る。
しかし美穂はその条件を変えようとはしなかった

「もし、オーディンに勝ったら…私のデッキを破壊してほしい」

「で、でもぉ！」

「それで…この学校で美穂ちゃんがブランウィングと契約してほしいの…」

この学校はこの世界の干渉を受けない。
つまりコアミラーによるモンスター消滅を防げるのだ

「この子は…助けてあげたいから…」

美穂はブランウィングのカードを寂しそうな眼で見つめる。

「私…さ」

「え？」

「私…お姉ちゃんを生き返らせる為にずっと戦ってきた。
それが私の願いだし、ずっとそれでいいと思ってた…」

だけど、美穂はうつむく

「真司…あいつが刺された時、私…本当に怖かったんだ。
それで、悲しかった…」

もし、真司があのまま死んでたら…

「私はお姉ちゃんと真司…どっちを生き返らせたいと願うの？」

美穂の目から一筋、涙がこぼれた。

もう、分からないのかもしれない彼女は…自分の願いが

「だから…いいの、もし美歩ちゃん達が勝ったら…」

貴女の願いを叶えて

「だって…私は…もう、ライダーじゃないから…」

ライダーとして霧島美穂は…もう死んでしまったのだから

「真司さんが目覚めたってよ！」

「！！」

その言葉に三人の目が輝く。

「良かった…美穂さん…」

美歩は嬉しそうに、でもどこか悲しそうに走り出した。
それから数分もしない内に電話で再契約の知らせがきたのだった

『見事だ』

「「！」」

驚く二人、それはそうだろう。
いきなり光が現れ、しかも言葉を発したのだから

「おっ、お前は！？」

『ライダーバトルの勝利者に与えられる願いを叶える…
そのナビゲーターと思ってくれればいい』

「・・・は、はぁ」

何故だ？この声…どこかで……？

『仮面ライダー龍騎。貴様が最後のライダーにしてこのライダーバトルの勝利者。

さあ、願いを言え』

「あ、ああ・・・」

「まさか、本当に願いが叶うなんて…嘘じゃないのかよ…」

やはりそう言う世界もあったって事か?司は首を傾げる。

「願い…どうする?」

「俺が決めて良いのか?いや、違うよな。
お前が決めろ、勝利者はお前なんだ」

「・・・」

真志は少し考えた後、口を開いた

「願い事の限度を無限にしてくれ」

「ブッ！！」

盲点だった。

司は思う、まさかこんな願いをするヤツがいるなんて…

『ならん』

「えー…」

ま、そりゃそうだろ・・・

『だが、発想は評価しよう。よって、限度を5にしようではないか』

「おお！」

言ってみるもんだな。司と真志は互いにそう思う

「・・・よし！決めた！」

『・・・』

「オレ達の世界を救ってくれ！」

この願いが通れば！

もうこの旅は終わる、そしてまた日常に・・・

『残念だが、それもできない』

「なっ、なんで!?」

『できないからだ』

「なんだよそれ!」

それから何度言っても無駄だった。
二人は納得いかないようだが諦める事にした。
二人は気づいていなかったのだ。
世界を救う?世界はまだ滅んでいないのに…

司が見た光景は未来のモノなのだ。
決して今ではない、それを二人は気づけなかった。
だからおかしな言葉になり矛盾を生んでしまったのだった

「でもあと5つある。まずは何より――」

真志は少しだけ戸惑ったが、最初の願いを言う。

『分かった。受理しよう…』

「よし。それから…」

また一つ、願いが受け入れられる。

「それから――――と――――」

計四つの願いが受け入れられる。

「あとは…」

絶大な力でも貰おうか？

いや、扱いきれる自信が無い。

じゃあお金とか？ううん…

「・・・」

そして、ふと…思いついてしまった……

「――ッッッ！！！！！！！」

いや、これはっ…

「ぁ……ぇと……その…」

「？」

どうしよう…もうそれしか思いつかない。

いや、これ以外を選択したらきっと…

「ッッ！ッ！」

呼吸が荒くなる。どうしよう、どうしたらいい？

いや、これは…

自分の心にふと浮かんだその願い。それは…

だめだ、いいのか、悪いのか分からない。

それをしてはいけない？

いや何故？

してもいい？

どうして？

込み上げてきたその願いは
一体正しいのか正しくないのか？
それすらでもないのか分からない！
分からなくなる！

「ッ！おい真志！」

「え？」

ミラーワールドの空間がゆがみ始める。どう言う事なのか？

『…どうやら、誰かがコアミラーを破壊してくれたようだな…』

「先生だ！やったんだ！」

『おい、早くしろ…もう時間がない。
ここが消えれば願いを叶えられなくなるぞ』

「！」

マジかよ…

「真志！早く！」

「ッッ！ッ！！！」

くそっ！駄目だ！もう限界だ！これを言っちゃいけないような気がする！だけど駄目だ！オレはもうっ！

「うおぉぉおおおおッ！最後の願いは――ッッッ！」

真志はその願いを口にする

「！」

司もその願いには眼を見開いた、だが真志はもう後悔などしていない。
その願いを切に叶えたいと願ったのだ

『分かった。その5つの願い、叶えよう…』

その言葉を最後に、ミラーワールドとモンスターは消滅したのだった…

第７８話　話８７第（後書き）

あの光の輪はアンノウンだから出るのかと思っていましたが
確かディケイドでファンガイアにも出てましたね。

ちなみにトワイライトでマシントルネイダーに乗ると、トルネイダーもミラーワールドに入れちゃいます

では次もよろしく！

第７９話　話９７第（前書き）

この話で一応龍騎編のストーリーは終わりです。次の番外編で龍騎の試練は終了です
あ、あと後書きでオーズの映画、感想かいてます。ネタバレは無いんですけど、嫌な人は注意してください。

ではどうぞ！

第７９話　話９７第

「優衣…優衣ぃ…」

神埼士郎は泣いていた。
たった一人の妹だった、守りたかった。
ずっと一緒に居たかった、だけど…
叶わぬ願いだったのか…

「優衣…」

眠るように息を引き取った妹を見て、もう一度彼は大声で泣いた。
全てを賭けた勝負も結局負けてしまった。
もうタイムベントのカードはない。あの時なぜ時を巻き戻さなかったのだろうか？
果てしない後悔が彼を苛む。

「優衣ぃぃいいいッッ……」

いつかきっと笑い合えると、信じていたのに…

運命は残酷だ。

「……どうしたの…お兄ちゃん」

「！」

そう、だが時に運命は思わぬ幸福をもたらしてくれる

彼は…いや、『彼ら』はきっと…

「このアホ！馬鹿！間抜け真司ぃいいい！」

「わわわ！何すんだよ！」

「じんばいじだんだからなぁぁぁぁーっ！」

涙で顔をふやけさせている美穂を見てちょっと笑ってしまう。

「城戸、お前の生命力はゴキブリ並だな。見直したぞ」

「いやぁーさすがセンパイ！おつよいですねぇ！」

「…なんか、全然嬉しくないんだけど」

その言葉に二人は笑う。
望みどおりの言葉が返ってきて満足そうだった。

「冗談だ、城戸。よく帰ってきたな」

「本当ですよ、本当どうなることかと…」

喜びにくれる真司達。そこに携帯の着信音が鳴り響く

「美穂、お前のだろ！」

「う…誰から……――っ！」

「ど、どうした？」

美穂は急いでその電話にでる。期待と疑問が混ざった表情だ。

「ハイ！はい！……え？」

美穂の目から涙があふれて来る。

でも美穂は何故か少し笑っていた、真司達は不思議に思う。

美穂は電話の向こうの相手には伝わる訳もない、お辞儀を繰り返している。

「…はい……はい！はいっ！」

電話を切った途端に、美穂は真司の胸に顔を埋める。

「ど、どうしたんだ？」

「あのね……」

美穂は真司を強く抱きしめて呟いた。
震える声、だけどそれは悲しみじゃなくて…

「お姉ちゃんがね…」

喜びだった。

「いててて…」

翼は体中の痛みを覚えながら廊下を歩いていた。
トリニティの負担は想像以上で、もう筋肉痛が酷いのなんの…

鍛えないと…翼は思う。

でも、今ははやく座りたい！
そう思いながらため息をつく。

「――――――ぃぃ」

「ん？」

何か聞こえ――――

「「せんせぇえええええええええええええええええええええ！！」」

「ぎゃあああああああああああああ！！！」

後ろから夏美とハナのタックルが炸裂する！
全身が悲鳴をあげた様な気がしたが…気のせいだと祈ろう

「い…き…が……とまっ…」

「「早く！翼先生！早く！」」

「し！し！死ぬ！イデデデデ！」

二人は翼の言い分を聞く事もなく彼を引きずっていく。
痛みで訳が分からなくなる翼だったが、気づく。
二人が泣いている事に

「・・・！　どうしたんだい！？」

「ぜんぜいぃ！ずごいんでずずううう！」

「えぇ？」

呂律が回っていない夏美達が気になったが、彼女達は答える事なく
どんどん翼を引きずって…

その場所にやってきた

「保健室？」

ここがどうかしたのかい？
そう翼は二人に尋ねたが、二人はもう泣き崩れていてとても会話できる様子ではなかった。
翼はそれを不思議に思いながらも、保健室のドアを開ける。

「うぉ！」

そこには同じく泣きじゃくっている皆がいた。
その異様過ぎる光景に驚きながらも、翼は前に進む。

そこにいたのは…

「ははっ、ユウスケ。お前何やって……」

そこにはユウスケがいた。
また何かやったんだろうと翼は苦笑する。

しかし、すぐに気づいた。

ユウスケは泣いている、そしてそこには薫ちゃんもいて…
これまた皆と同じ様に泣いていた。

でも薫ちゃんは誰かにしがみついて泣いていたのだ…

「…え？」

誰に…？

薫ちゃんは誰にしがみついて……

「嘘……だろ…」

また？またなのか！？

いや、でも…

ここは……もうあの世界じゃない

「あ！あの…さ！」

その人が口を開く。
薫ちゃんを優しく撫でながら…

いつもみたいに…

「コレって…どう言う状況…
なのかなぁ…って

あは…ははは」

そう…だよ…

どういう……

「あ…あれ！？泣いてるの！？
え、嘘！ちょっと！え？待って！わたし何かした？」

っていうかココどこなのーっ！

彼女は困ったように叫ぶ……

「ねぇ…」

「え！」

「今度は…今度はっ……本当に……本当にっ！

君…なのかい？」

「えぇ！？どういう事！？あと、本当にココどこなの！？」

驚く彼女…

「え…えええええ！？ちょちょ！ていうか今日って…えええええええ！
なんでこんな時間たって…って！

あれーっ！そのメガネわたしのじゃ…！」

彼女は言葉を止める。僕が抱きしめた事に驚いたみたいだ…

「え…？ど、どうしたの？恥ずかしいよ…皆いるんだよ？」

赤くなる彼女…ああ。本当なのかい？

本当に…今度こそ…

「ね、ねぇ！翼くんってば！」

「おかえり・・・」

「えっ？」

「おかえり…おかえり…っ」

「えぇ！？あぁ…うぅん？

ただいま？翼きゅん……」

また噛んだ。彼女は顔を真っ赤にしてうつむく。

「ほんとっ…大事なところで噛むんだから…葵さんはぁ…」

そこには、もう二度と会えない筈だった。空野葵が立っていた。

「・・・」

真志は屋上でそのデッキを見つめていた。龍騎のデッキを…

ミラーワールドが破壊されモンスター達も消えたわけだが、ドラグレッダーのデッキは消えなかった。
ゼノンとフルーラが言うには副賞らしいが…

「これで…オレも龍騎か…」

ホッとしたような…
なんというか…真志はため息をつく。

「・・・」

耳を澄ませてば聞こえてくるのは泣き声や歓喜の声。
彼はもう一度ため息をつく

「……オレのした事って、正しかったのかな」
誰もいない屋上で彼は呟いた。

「今さら後悔ってタイプでもないだろうが」

「ああ、そうだよな」

誰もいないと思っていたが、入り口の上から上れる所に司がいた。
寝そべっているせいで真志からは見えないが…

「なんかさ…人の死って単純なモノじゃないだろう？
なんていうか、乗り越えたり区切りつけたりしてさ…
でも、そう言うのを台無しにしちまった気がして」

「まあ、だからこそ漫画とかやら何やらで言われてるのかもしれな

いな。
だいたいの場合失敗したりして…」

「ああ、それにもしかしたらもっと辛い事になるのかもしれない！」

でも、真志はグッと歯をかみ締める

「だけどさ、オレはこの選択をしなかったら一生後悔してた。
責任を取れる訳でもないのに！

オレ、結局自分の為にこれを願ったのかも…な」

結局またオレは自分の事しか考えてない善意を……

「それでもいいじゃん…」

「！」

ジュースが飛んできてそれをギリギリで受け止める。
美歩だった。美歩は上にいる司にもジュースを投げると、自分の分をのみ始める。

「私らだって人間じゃん。それに命かけて、辛い思いして戦ってるんだからさ。
こう言う奇跡くらい許してくれるって！」

「・・・ありがとう」

真志は美歩にお礼を述べる

「やめてよ、私もさ…真志が死んじゃったら同じ事してたから…」

「え？」

「私…真志がいなきゃ…駄目っていうか…

なんつうか」

美歩は赤くなってうつむく。

「オレも…」

「え？」

「オレも…だ」

真志もすこし顔を赤らめる…

「あたっくらいど！オオオオレヲワスレルナ！」

「「ッ！」」

司が飛び降りて二人の前に移動する。
真志と美歩は焦りながらも、苦笑いを浮かべたのだった。

「人間なんて少なからず善意の裏に何か期待する生き物だろ、
でもそれで救われた人や喜ぶ人がいるならそれは偽善じゃない」

「司……」

「そんなすぐに変われたら人生苦労しねぇよ、
お前の目指す正義はこれから徐々に実行していけばいい」

「ああ…ありがとう」

「うんうん！その為には生きないと！」

三人は静かに笑う

「…で？言うのか？」

「いや…一応黙っておこうかなって…」

「ああ、そうか。まあそれもアリかもな」

三人は空を見上げる。清清しい程青い空。

「死者を蘇らせる…か」

誰しもが求めて叶わぬ…そんな…願い。

でも、自分達はソレを成し得た。
たった一言、その願いを口にしただけで。

「そう言えば真司さん達にはお別れいつ言う？
あっちも今頃大変だろうからな」

「ああ。大丈夫だよ」

真志は自分の手を見つめる

「本当に…そのデッキが要るんだ…よな？」

「はい。だからお願いです。
このデッキを…貸してもらえせんか？」

真司は困ったように笑い、鏡を見る。
そこにいたのはドラグレッダー。

真司はドラグレッダーに向って笑いかける

「頼むな」

「・・・」

ドラグレッダーは鏡から飛び出し、真司の周りを一周するとまた鏡の中に消えていった。

「ははっ…じゃあ……頑張って」

「はいっ！」

真司と真志は固い握手を交わす。
ただ、真司は少し申し訳なさそうだった。自分だけ戦いから開放されるのは…

「いいんすよ、オレはオレの戦いがありますから」

「…ああ」

真志はそう言うものの、真司はもう一度申し訳なさそうに笑う

「じゃあな、お前も…」

真司は鏡の中にいるドラグレッダーに挨拶と礼を言う。
ドラグレッダーは小さく吼えると空に舞い上がっていってしまった

「ははは……」

「あはは」

「…君達なら絶対大丈夫だからさ、応援してる」

「ありがとうございます！」

そう言って二人は笑い合った

榊原耕一から城戸真司へ、そして城戸真司から条戸真志へと龍は受け継がれる

「じゃあね、頑張って」

「うぃっす！頑張っちゃいますよぉ！」

抱きしめあう美穂と美歩。二人もまた別れの言葉を言い合う

「きっと、またいつか…その時は皆でお好み焼きでも食いにいこうぜ！」

美穂は親指をぐっと立てて笑う。

「はい！楽しみにしてます！」

そう言って、もう一度二人は強く抱きしめあうのだった

「う～ん！感動しますねーっ！」

「…全然そうは見えないが、まあ…いい」

佐野も蓮も、清清しい笑みを浮かべて二人を見送ったのだった

「えええええ！おいおい！もう挨拶すませたのかよっ！
…サイン欲しかったのにっ！」

「ハハッ、悪い悪い。」

今ならまだ間に合う――っ！
司はそう言って走り出そうとするが、眩い光が辺りを包み込む！

「ちっくしょぉおおおお！世界移動かよぉおおおお！」

その場に崩れ落ちる司を見て二人は笑う。

「受け継いだこのデッキ…きっと皆の役に立ててみせるから」

「うん、きっと…」

「はぁ…ま、頑張れよ」

三人はそう言って皆のところへと戻っていくのだった…

「く…くくっ…くくく！」

抱きしめあいながら泣いている翼たちを視て、彼女は笑っていた。

「なかなか、私の予想通りといったところか？」

女は手に持った紅茶を置いてゼノン達に問いかける

「まあそうなるのかな。
でも大変でしたよ、願いを叶える『存在』を他の世界から持って来るのは
もうどの世界にもあんなモノは無いんじゃないかな」

「ええ、本当に！」

そう言ってフルーラはマイクから手を離した

「どうゼノン？ワタシの演技はなかなかじゃなかったかしら？」

「ああ、フルーラ。ナビ役、最高だったよ！
さすがはボクの愛するフルーラだ。低い声も素敵だよ本当に。
あのアホピンク達もフルーラの声には気づけなかったみたいだね」

「まあ！ゼノン…」

二人は熱い抱擁を交わす。
女はそれを特に同ずる事もなく、相変わらず口元をつり上げたまま
二人を見つめていた。

そして暫くそちらの方に視線を移していたが、クスリと笑うと再び
翼たちの方に視線を戻す

「ククク、神崎士郎、霧島美穂…そして」

空野薫！

「こいつ等の家族を蘇生させるとは！神をも恐れぬその行為！
条戸真志、なかなか気に入ったぞ。フフフ…」

「人間の分際で三人もの命を動かした、まさに神に等しき行為ですからね」

「ククッ、やはりいつの世も世界を動かすモノは愛と決まっているのかもしれないな」

「愛は人を狂わせる元素、ですが人は愛がなければ生きてはいけない」

「愛は、観測者しだいで悲劇にも喜劇にも変わる不思議な元素、
少なくとも彼らは悲劇で終わることを拒んだみたいね」

「フッ、つくづく人間とは不思議な生き物だ」

「ボクとフルーラも人間なんですけどね、フフフ」

「おっと、これは失礼」

そう言って三人は笑い合うのだった。

「あああああ！」

椿が驚きに目を見開く。
しかし真志は気にする事なく鏡像の世界を叩き割り、ゴミ箱に捨てた。

「もう、いらないんだ。コレは…」

「どうしてですか？」

我夢の言葉に真志は少し沈黙した後、笑う。

「いつまでもコレに縛られるのはゴメンだからな。
もう、いらない」

「はぁ…」

少し名残惜しそうにしながらも椿達はそれ以上何も言わなかった。
たとえ犯罪の道具だろうが両親の残したモノ。
だから捨てられなかった、だけど…

「オレには……もう、これは必要ないんだ」

そう決心する真志。これから彼は彼の人生を生きるのだろう。
願いの為戦い続けるライダー。
それは真志の心に人生の重さを教えてくれた。

今まで、なんの為に生きていたのか分からなかった。

だから、彼は鏡像の世界を破壊した。
今までの彼の人生は親の印象を消すだけの作業的なモノでしかなかった。

でも、これからは自分の人生を生きてみようと思う

真実を惑わせようとする鏡なんて…割ってしまえばいい

「さあ、次の世界にいこうか！」

真志は今までの自分に別れを告げると、笑顔で立ち上がるのだった

第７９話　話９７第（後書き）

はい。えー……ｗ　迷いましたね、ぶっちゃけ。
でも変更する気はないです。てな訳で学校に新しいメンバーが増えました！

映画見ました。いやぁ良かった、何より上様がカッコよすぎて鳥肌モンでしたわｗｗ
ストーリーも難しいものじゃなく、パラレルならではの展開だったりね。

ただもうちょっといろんなコンボの戦いが見たかったかなでも本当に面白かったです。サンバも良かったｗ

では次もよろしく！

第８０話　番外編　休憩の世界（前書き）

はい、と言う訳で番外編です。
まあ一応龍騎編の番外編なんですけど世界移動してます。休憩の為に用意された世界とでも思ってください

あと今回長いです。力尽きたｗ
ではどうぞ！

第８０話　番外編　休憩の世界

「お姉ちゃん、どこに行くの！？」

「え？ああ、うん。ちょっと雑誌を取りに」

「お姉ちゃん！どこに行くの！？」

「え？ああ、うん。ちょっと水を飲みに」

「葵さん！どこに行くんだい！？」

「え…？ああ、うん。ちょっとトイレに…」

「葵さん！」

「お姉ちゃん！」

「いや…ちょっと…お風呂……」

「あああああ！んもうっ！翼くんも薫もそんなに心配しなくていいんだよ！？」

「「だってぇぇ！」」

教室の片隅で二人は正座をさせられていた。
葵は少しうんざりしたようにため息をつく。一歩動くだけで何をするか聞かれるのは流石に疲れるというものだ。

「確かにね、わたしを心配してくれるのは嬉しいよ？
でも、お風呂とかトイレにまでついてくるのは流石にわたしも嫌なのッ！！」

「「だってぇぇぇ！」」

相変わらず葵に付きまとっている二人を司は複雑そうな目で見ていた。
どっちの言い分も分かる。そりゃまあついて行きたくもなるだろ

「・・・」

しかし、改めて考えると本当に凄いな…

一度亡くなった人が今こうやって元気に過ごしてるんだから…

あれから数日は先生も薫もユウスケとか皆、泣きまくって大変だった。
葵さんも皆と仲良くなった後、ゼノン達が本格的に説明にやってきた。

とりあえずあいつ等が言うには、葵さんは偽者じゃなくて正真正銘本人であると言う事。
肉体は復元された本人の物、葵さんの年齢は今まで通りに生きてきたと仮定した物。

つまり翼先生の一つ上と言う事。２３歳だな。
あとは葵さんも俺達同様防御力の上昇や特殊能力を得ていると言う事だった。

何であいつ等が俺達の願い事の内容だとか詳細を知っているのかは気になったがどうせ聞いても教えてくれないに決まっている。だからここは黙って話を聞く事にした

「は！？わたし…えぇえええええええ！！」

ばたーんっ！

「あっ！葵さぁぁぁあん！」

自らが一度死んで蘇生した事を知ると、葵さんは気を失って倒れてしまった。
まあ無理も無い、葵さんが目覚めてからも落ち着かせるのはそれなりに時間がかかった。

でも案外葵さんは今の自分の現状を割りとすんなり受け入れると、もう一度ゼノン達からの説明を聞いていた。

「むしろこんな現状で信じないとか言うほうがどうかしてるわね、私が死んだ？仮面ライダー？世界を巡る？

ええ信じますとも、ええ信じますよ！
自分の妹が武器に変形して、彼氏とその弟、

友達が変身してるの間近で見てまだ信じないわけないでしょーがっ！」

なんか軽くやけくそになっている様な気がしたがそんな事はないのだろう。
葵さんは深呼吸をした後、冷静になったのか優しく微笑んで

「あの…、と言う訳で…よろしきゅね？」

「「「「・・・・・・・・」」」」

真っ赤になって震える葵、一同は一斉に吹き出す。

「あはは！葵さん本当によく噛みますね！アハハハ！！」

「葵さんかわいーっ！」

「うぅ…酷いわ、皆！」

暫く皆は笑う合うと、そのまま葵に向かって微笑む。
代表で司が手を差し出した

「よろしくお願いします。葵さん！」

「うん！」

葵はその手を掴む。
確かな人間の暖かさを感じる、司はもう一度微笑むとその暖かさをしっかりと確かめたのだった。

「たった一言。空野薫の姉、空野葵を蘇生させてくれ…
そう言っただけで人の命が動かせる。

ああ、簡単なモノだとは思わないかい？フフフ」

ゼノンは挑発的な笑みを浮かべて真志に話しかける。
校庭の隅で彼らは、ドラグレッダーとブランウィングに餌をやる美歩とフルーラを見ていた。

ゼノン達が用意した餌の効果は凄いもので、一度食べれば暫くは空腹を感じない物らしい。
これならミラーモンスターの二体が人を襲う事はなさそうだ。

「オレは…オレはその選択を後悔しない。もう後戻りはできないんだから…」

「ふぅん、君にはその力があると？
どうするんだい、もしもう一度空野葵が死ぬ事になったら。

その時、皆はもう一度同じ…いやより深い悲しみを背負うんだよ」

「ああ…そうだな。オレは弱い、葵さんを守りきる自信は…無い」

「・・・」

「だから…オレ一人じゃなくて、みんなの力を借りる事にしたよ」

「まさか！？蘇生させた事を話したのかいッ！」

真志は頷く。これにはさすがのゼノンも少し表情を変える。

「驚いたな…それで皆は何て？」

「お礼…言ってくれたよ」

「・・・」

目を閉じれば涙を浮かべてありがとうと言ってくれた翼や薫の顔を思い出す。

「正しいことって…なんだと思う？」

「…さぁね、でも君がした事を君が正しいと思うならそれでいいんじゃないかい？」

「オレは…必ず皆と笑顔で元の世界に帰る。今は…それだけさ」

ゼノンはもう一度小さく笑うと立ち上がりフルーラに合図を送った。

「まあ、期待しているよ。君たちの物語をボクももう少し干渉してみたい」

そう言うとゼノンとフルーラは砂のオーロラへと消えていった。

「オレ達も行こうか、美歩」

「うーっす！」

真志はもう一度デッキを握り締めると、笑顔で学校へと戻るのだった。

こうして葵がクラスメンバーになった訳だが、葵の働きは凄まじいものだった。
掃除、選択、料理。家事系の事は全て彼女が引き受けてくれたおかげで、彼らの心にも余裕ができる！

「これでっ…もうあの料理を食わなくていいんだよねっ！」

「ありがてぇ…ありがてぇ！！」

泣きながら飯をかっ食らう司達に葵は苦笑する。
彼女は真由とハナの料理を知らないのだ。あれは料理ではない、グロンギなのだから

「あぁ！ちゃんといい匂いがする！
男共は部屋干ししか脳がない奴らばっかりだから！」

「あはは、喜んでもらえてよかった！」

「葵姐さん！」

ひしッ…と美歩は葵に抱きつく。
あまり家事をした事が無いメンバーにとって葵はとても頼りになる人物だった。

それだけでなく女性陣にとって優しい葵には無性に甘えたくなる。
言ってみれば葵は皆の姉の様になっていたのだった。

「うーん…」

「どうしたんすか椿さん」

「おぉ亘か、いやな…
二十歳を過ぎれば皆等しくＢＢＡに変わるのだと思っていたが別にそんな事はなかったぜ。
これはちょっと幼女からストライクゾーンを広げるべきなんだろうか？
お前はどう思う？」

「ごめんなさい。ちょっと何言ってるか分かんないですね」

その夜、皆がもう寝ている時間に翼と葵は話していた。

「大分、皆と慣れてきたんじゃないかい？」

「うん、ありがとう」

翼が差し出したチューハイを開けると葵はそれをゆっくりと口に入れた。

「…ねえ、翼くん」

「うん？」

葵は翼が座っているソファまで移動すると、彼の隣に腰掛けた。
その表情は少し寂しげで、翼も何も言わずに彼女から口を開くのを待った。

「わたしって…本当に……その、死んだの？」

「……ああ。そうだね、間違いないよ」

「だったら…薫とか、ユウスケ君とか…皆にとんでもないこと――ッ」

翼は何も言わずに葵の手を握る。
思わず言葉を止める葵に、翼は優しく微笑んだ。

「今、僕の手には君の体温がハッキリと伝わっているよ。
それは生きてるなによりの証拠だとは…思わないかい？」

「・・・」

「君は、今生きてるんだ。
もし君が何かを感じてるならその分薫ちゃんに関わってあげてほしい。
もう一度言うよ、君は生きてるんだ。
だから…薫ちゃんやユウスケ、皆ともっと一緒に居てほしい」

「うん…ありがとう」

葵もまた微笑んで翼の手を握り返す。

「うん、それでいいんだよ。葵さん」

「……」

さん、は止めて

「あはははっ！」

ふくれっ面の葵と笑う翼。

翼は軽く謝ると、彼女の名前をちゃんと呼ぶ。

葵はソレを聞くと、満足そうに笑うのだった

「と、言う訳でね。一度皆の状況を確認しておこうかなと」

「うん、成る程ね」

翌日、葵はそんな事を言い出した。
次の世界に着くのは明日らしい、と言う訳で今日は休日なのだが…

皆めずらしくそれぞれの男女ペアで行動していたのだ。
保護者の一人としてそれぞれのペアがどの程度の仲なのかを見ておくのもアリだろう。

葵は、翼とイマジン四人組みを引き連れて視察に向かう。

「むふふ」

「・・・葵さん、楽しんでない？」

「そ、そんなことないわよ！さあ、まずはユウスケくん達ね」

「うん、ユウスケ君と薫ちゃんだね。
やっぱり二人は仲がいいよ、戦闘でも二人はだいたい一緒だからね」

ユウスケと薫はどうやら空き教室にいるらしい、何かをして遊んでいるのか？
葵はゆっくりと扉を開けてみた。

すると…

「ホラ！あと一週！休んでんじゃないわよっ！鞭で叩かれたいのっ？」

「ヒ…ヒヒーンッ！！」

「オーッホホホ！！」

ピシャッ…

「・・・・」
「・・・・」

「わぁ！お馬さんごっこ？わーい！ぼくもやるぅ！」
「シッ！駄目だよリュウタ！アレはああ言うプレイなんだから！」
「違うで、アレは足腰を鍛える訓練に違いない。
いやぁ、やるもんやなぁ！」
「お…おいおい」

何だったんだアレは…モモタロスは汗を浮かべながら翼達を見る。

「うーん、今日も天気がいいわねぇ…」

「そうだね葵さん。今度皆でどこかへ行こうか？」

「あ、いいわね。じゃあ――」

「オォォイッ！！」

「モモタロス君、私達は何も見ていない。
それでいいじゃないか。他に何を求めるんだい？」

「モモタロス君。
この世にはね、決して触れてはいけない謎という物があるのよ？」

そう言って二人はそそくさと教室を去っていく。
キンタロス達は後へ続くが、モモタロスは気になってもう一度扉を開いた。

開いてしまった

「違うんだって薫！
お前のおやつを食べたのはおれじゃなくて双護――！」

「誰が口答えを許したのからしらぁあ！？
今のアンタは馬よ！鳴きなさいホラホラッ！」

「いでで っ！ひっ！ヒヒーンッ！」

なんて恐ろしいお仕置きなんだ…
モモタロスの背中に冷たいモノを感じる。

「フフフ…さあ、続けましょうか…」

「その扉の向こうにいるお前も一緒にな」

「！？」

扉から手が伸びてきてモモタロスの角を掴む。

「ちょ！おい！嘘だろ！？おい！
お――アアアアアアアアア」

モモタロスは教室の中に引きずり込まれた。
その後、彼がどうなったのか、知るものはいない…

「今、何か…先輩の悲鳴が聞えたような…」

「気のせいだよウラタロスくん。
気のせいなんだ、気にする事はないよ。気のせいなんだから」

続いて葵達は図書室に来ていた。ここには真志と美歩がいるらしい。

「あぁ、いたね」

「うん、どれどれ」

本棚に隠れて本人達を確認してみる。

「？」

真志と美歩はなにやらソファで言い合いをしていた。
ケンカだろうか？

しかし真志のテンションが異常に低い。
ケンカと言うよりは一方的なものを感じる。

割ってはいる事も考えたが、取り合えず物陰から様子を伺ってみることにした。

「ちょ！聞いてんのかよ真志！やばいんだって！」

「ああ…そうだな……」

「何でそんなに冷静なんだよ！
皆だってそうだよ、もっと焦らなきゃヤバイって！」

「・・・」

「あぁぁ、どこに逃げたらいいと思う？地下とか？空？
ううん、でも結局滅んじゃったら全部同じなのかな？
あああ、もう！どうすればいいのさアタシはぁぁ……」

「お前さ、それ本気で言ってんの？」

「何が！？当然じゃん！偉い人がそうだって言ってるんだよ？
地球が滅んじゃうって予言してるんだぜ！

ああ、ヤバヤバっしょ！コレマジで！」

涙目になって美歩はその本を振り回す。真志はため息をついてそれを奪い取ると、パラパラと興味なさそうに目を通した。

「ノストラダムスの大予言……ねぇ」

「そうだって！皆何でこんなに冷静なのさ！
地球が滅んじゃうかもしれないんだって言ってるのにぃぃ！」

美歩は頭を抱えてうずくまる。

「あああ、お母さんの言う通りだったんだ！
昔からピーマン残したら悪い事が起こるって言われてたのにぃぃ！

ねえ、真志！今からちゃんと食べれば間に合うかな？
地球滅びねぇかな！？

あああああ、死にたくねぇぇよぉぉおお！」

「お前っ…予言ではいつ滅びる事になってるんだ？」

「えぇ？１９９９年だってぇ！どうすんだよ真志！どこに逃げればいいんだよぉ！」

「今、西暦何年だよ」

「え…今は……」

・・・あ。

なんかみるみる美歩の顔が赤く染まっていく。
美歩は何も言わずに深呼吸をすると、手に持っていた本を元の棚に戻していった。

『美歩ちゃんはお馬鹿かわいい』

「…よしっと！」

「・・・」

手帳に書き込む葵を複雑な表情で翼は見詰めるのだった。

中庭では拓真と友里がなにやらしゃがみ込んで、何かを観察していた。
翼達は気になって覗き込んでみる。

「花みたいやな」

「きれいだねー！」

一つだけ咲いているタンポポ、二人は笑顔でそれを見詰めている。

「タンポポって踏まれちゃっても元気に咲くんだよね、凄いね」

「うん、凄いね。あたしは好きだよ」

「うん、僕も…」

「「・・・・」」

会話は少ないものの、二人は笑顔で花をみている。

「何か…あの二人から熟年夫婦のオーラが出てるんだけど…」

「そうだね、何か入り込めないオーラみたいなものが見えるよ…」

邪魔しちゃいけない。翼達は中庭を後にする。

二時間後…

「ねぇ拓真、アッチのお花は何かな?」

「えーっと…どうなのかな。
あんまり詳しくないから分からないけど…綺麗だね」

「うん!」

さらに二時間後…

「拓真、こっちのお花もかわいいね」

「うん、そうだね」

そらに（ｒｙ

「ねえ、拓真。今日はいい天気だね」

「うん。明日もいい天気だといいね」

…こうして、彼らの一日は過ぎていった。

「わぁ！」

「あ！すんません！」

廊下の曲がり角で葵と椿はぶつかってしまう。
椿はなにやら息が荒く顔色も悪い、

「あはは、廊下は走っちゃ駄目だよ。
ところで、大丈夫かい？気分が悪そうだけど…」

「ははっ…だ、大丈夫っすよ！予定より早く目覚めちまって…

あ、いや！だははは！」

不自然に笑う椿、そしてその手にはマジックが握られていた。

「絵でも描いていたのかい？」

「やべっ…！あぁ、あの俺もう行きますわ！」

そう言って椿は早歩きでどこかへ行ってしまった。

「どうしたのかな？」

「うぅん…」

その時だ、また向こうから誰かがやって来た。
これまた全速力で廊下を爆走しているのは…咲夜だ。

廊下を走るなんて彼女らしくもない、どうしたのだろうか？

「げっ！」

リュウタロス以外はギョッとしてしまった。
そう、ただ一人リュウタロスだけが笑い転げたのだ…

「あははは！面白い顔ー！」

「・・・」

咲夜は翼達に気づき足を止める。
リュウタロスの言葉にプルプルと体を震わせるが何とか抑えている様子だ。

「先生…葵さん……あの馬鹿を見なかったかな……ッッ！」

「え！あ…！う、うーん…！　み、見てないかなぁ…」

咲夜の顔を見て悟る。
彼女のその整った顔に黒いマジックで描かれるアート…

眉毛が繋がり髭みたいなモノが描かれており…

「ど、どうしたのその…顔…」

「あの…ッ、クソ馬鹿が…ワタシの寝ている間に……ッッ！！」

「お、落ち着いて咲夜ちゃん！椿くんだって…」

悪気があるから落書きしたのよね…

「そうだよ！咲夜ちゃん。つ、椿くんだってほんの出来心で…」

いや、絶対狙ってたね。

「「・・・・・・」」

二人は様々なフォローを考えるが…何も浮かびやしねぇや！

「ぶ　ち　の　め　す」

咲夜はそう言い残して歩き去る。

「だ、大丈夫かな椿くん…
女の子の顔に落書きするのはいけない事だけど…」

「そ、そうだね。あの様子だと――」

アアアアアアアアアッッッッッーーーーーーーーーーーーーー

「「!?」」

「な、なんや!?」

「椿の悲鳴だよー!」

「「・・・」」

まあしょうがないか、翼と葵はため息をついて次に向かうのだった。

「我夢君、お疲れ様です」

「アキラさん…ありがとうございます。
アキラさんもお疲れ様でした」

我夢とアキラはプールのシャワー室の掃除当番だった。
と言ってもこの学校のシャワー室は中々凄いもので、シャワー室と言っても浴槽が2つ設備されている。
しかもそれなりの大きさで、一つはジャグジーまでついてるときている。

「運が悪かったですね、今日の当番がここに振り分けられて」
「ふふっ、そうですね」

二人は笑い合いシャワー室を出て行こうとする。
しかし、その時だった

「きゃ！」
「！」

アキラがバランスを崩して我夢にもたれかかった！

「！！！」

「あ…」

我夢はその時こそ何も考えずにアキラを支えたが、よく考えてみれば肩を抱く形になっているではないか！

「あああああアキラさん！だだだ大丈夫ですか！？」

「あ…はい、ゴメンなさい」

「い、いえっ…」

真っ赤になってうつむく我夢、体が熱い。
こんな所を見せる訳には…

「でも我夢君って本当に女の子みたいですよね。
体が華奢っていうか。ふふふ、男の人に支えられた気がしませんでしたよ。

じゃあ、行きましょうか」

「・・・」

女の子みたいですよね（笑）男の人（）に支えられた気がしませんでしたよ（失笑）
※あくまでもイメージです。

アキラは呆れたように笑うとそそくさと出て行く。

・・・あれ？

「・・・」

外に出てみる、空が青いや。
そこには何故かキンタロスとリュウタロスがいる、でもどうでもいいや。ハハハ！

「今日は…いい天気やなぁ。そう思わんか我夢！」

「太陽が…目に染みやがるですね…」

「ねぇねぇ！飴食べるぅ？」

リュウタロスが差し出した飴をお礼をいって受け取ると、我夢は悲しく微笑んで口に入れるのだった…

「しょっぱいなぁ……」

「？　甘いよ、コレ」

「我夢君…！頑張って！」

「・・・」

翼は無言で頷くと、物陰から我夢に応援の眼差しを向けた。

その後、学校を探索していると食堂で双護と真由を見つけた。
双護は珍しく落ち込んでいるようで、真由がそれを必死になぐさめていた。

「お兄ちゃん…ボクね……
きっとお空から見守ってくれてると…おもうの……」

「いいんだ真由、俺は罪深い男なんだ。
あの時、素直に俺がやったと言えば…
アイツは助かったかもしれない。
ッ！　だが、俺は怖くてそれをしなかった…
結果、アイツは…もう…」

「お兄ちゃん……ボクは…きっと許してくれると思う。
もしね…お兄ちゃんが反省してるなら……生きなきゃ。
生きて…彼の分まで生きて！」

「真由…」

すまないと双護はうつむく。
目頭が熱くなっているのか、双護は目を覆っていた。
真由は優しく微笑むと双護の頭をなでる。

「うぅぅっ、すまない。すまない！」

「大丈夫だよお兄ちゃん。

罪は…償えばいい……ユウスケ君の分まで…」

「ぅうぅぅ！ユウスケ、俺が悪かった。
薫のおやつを食べたのは…俺なんだ……うぅぅぅ！」

「うん。いや別に死んでないからね。ユウスケは」

「！」

翼は耐え切れなくなって二人の間に割ってはいる。

「本当なのか先生っ！本当にアイツは死んでないのか！？」

「うん、大丈夫だよ。
ちょっと上級者向けのプレイを仕掛けられてい――」

「良かった！本当に良かった！！」

「良かったね……お兄ちゃん…！」

「ああ…ああ！真由！
許してくれるかな…ユウスケは俺を許してくれるかな！？」

「うん……きっと……」

「うぅぅうううッッ！！」

悲しみの涙は喜びの涙へと変わる。
翼は優しく微笑んで双護の肩を叩いた。

「うぅぅ！泣けるで！」

「よがっだねぇ！」

「いい話だわ…本当」

「・・・」

え？え、何？コレ泣くところなの！？
ウラタロスは何か疎外感の様なモノを感じつつも取り合えず感動しておくのだった。

「りょ、良太郎…元気出して？ね？」

「ぼくは…元気だよ」

べつに何故か置いてあったバナナの皮で滑って、
そのまま何故かこんなに晴れているのに存在している水溜りに頭か

ら突っ込んだからって…
悲しくなんか……

「ぼくは…元気だ――――ヨッ？」

「あ！」

さらに良太郎はバナナの皮を踏んで壮大にこけてしまう。

「いたいよぉ…おッ！」

「ひゃあ！」

何故かさらにバナナの皮を踏んでまたこけてしまう。

ハナを巻き込んで…

「いつつ…ッ！」

「ごめん…ハナさん…」

良太郎はハナをまるで押し倒すかのようにしてしまった。

「なななな！」

いきなりの事に思わず赤面していくハナ。
だが、良太郎はそんな事を気にする事なく…

「大丈夫？ハナさん？」

顔を思い切り近づけてしまった。

「ひゃあぁぁあああ！」

「？」

「――――ぁ！」

「え？」

「いやあああああああああ！」

「えぇぇえええええええ！！」

ハナ的には軽く、あくまでも軽く…突き飛ばしたつもりだったのだが
良太郎は物凄い勢いで上昇してそのまま木の枝に引っ掛かる。

「ごっ！ごめーん！」

「今日は…ついてないよぉ……」

「確か…先輩今日、バナナ食べまくってたよね…」

「そう言えば、良太郎とハナちゃんって……」

「うん、叔父と姪の関係らしいね」

「・・・・」

葵はなにやら考察を始める

「葵さ――」

「・・・・燃えるわ」

翼は葵が昼ドラに夢中になってたのを思い出すと、ため息をついた

「チェックだドッガ」

「うっ…ううううう」

「あはは、やばいんじゃない？」

「うぅうううう……

むしゃむしゃ」

『食うなっス！！』

美術室ではアームド達がチェスをやっていた。

その隅っこでは里奈が一生懸命何かをしている。

『へぇ、うまいモンねぇ』

「へへっ、そうかな？ありがとう」

里奈は絵を描いていたのだ。なかなか上手いモノでキバーラも思わず賞賛の声をあげる

「里奈ちゃんは美術部だからね。
本当上手いよ、ボクも見習いたいもんだ」

「そんな…事…」

里奈は照れ笑いを浮かべて手をブンブンと振った。

「亘くんだって凄いよ！
絵だってちゃんと勉強すれば私をすぐ抜いちゃうと思うし！」

「そう？ははッ、ありがとう」

「う、うん！」

『はいはい…』

呆れ気味にキバーラはため息をついて飛び回る。

『でもねぇ…』

ふと、キバーラは汗を浮かべてその絵を見詰めた。

『うまいんだけど…なんでかまぼこの絵なんて描いてるのよ…』

「薫さんに頼まれたんだよ。部屋に飾りたいって」

『・・・マジ?』

「椿さんが言うにはここでキャラを取りにきたとか言ってたけど…
私は描くの楽しいからいいかなって」

『あ!かまぼこっすか!おいしそう!
ガブーッ!

ニガーッ！』

「何やってんだよキバット！これは絵じゃないか！」

「大丈夫？」

亘と里奈はため息をつきながらも楽しそうに笑い合った。

「どう？翼くん」

それを見た葵は手帳に絵を描いて翼に見せる。
もちろんドヤ顔で

「へー、上手いね。バナナかい？」

「え?翼くんを描いたんだけど…」

「え…?」

「あれ?」

「いや、コレ…バナナ……」

「いや、あのっ…これ翼くん……」

「え?」

「あれ?」

「「なにそれこわい」」

「ねぇ！見てくださいッ！司君！ホラ！これ！やばくないですか？」
ヒュンヒュン！

「おー…」
ピコピコ

「やっと！これで！私も！」
ヒュンヒュン！

「うんー」
ピコピコ

「フンッ！セイッ！そいやぁ！」
ヒュンヒュン！

「がんばれー…」
ピコピコ

「うははは！やっとッ！これで！私も！二重飛び！

できちゃう組み！ですね！」
ヒュンヒュン！

「すごいぞーなつみー」
ピコピコ

「つ、疲れてきました！」
ヒュンヒュン…

「おまえならできるさー」
ピコピコ

「アデッッ！」

バシッ

「げっ！ここでアストラルかよッ！
コレよけれねーんだけど！！」

バゴーン！

「司くん！私何回飛べました……か…」

「あーあ、蟲とか強すぎだろ…あ、でも友里はコイツ使ってんだよな…あー、どうしたもんか…」

「…司くーん」

「おぉ、すごいぞー、みてるぞー。がんばれなつみー。

えーと、取り合えずコンボを――」

ぶすり…

夏美の指が司の首にめり込む。

「ぎゃあああああ！！――――アハハハハハアハハハハハアハ！！！」

「天誅」

「笑いのツボ…わたしも教えてもらおうかしら…」

「いや、なんていうか…やめてください」

深く、切に翼は頭をさげるのだった。

「ねえ、フルーラ。ボクは病気なのかもしれない」

「どうしたのゼノン!?」

「ボクの頭の中から君が離れないんだ…
今ではもう赤いモノを見るたび、
君を想う様になってしまった……の、さッ」

「まあ！ワタシもよゼノン、だってそれは…
愛ッ！なのだから！」

「フルーラ！」

「ゼノン！」

「「ひしっ！」」

そう言って抱きしめあう二人。クルクルと回りだす二人。

「うふふふ！」

「あはははは！」

「ねえゼーノンっ！」

「どうしたんだいフルーラ？」

「よ　ん　で　み　た　だ　け！」

「もうっ！こいつぅ！」

「あはっ！」

「ソイヤァアアアアッッ！」

葵はそこらへんにあった小石を思い切り蹴り飛ばす。
何故かはわからない。だが、無性にそうしたくなったのだから仕方がないね。

「ホラ！こう言うのが見たかったんだろっ！」

「しっかりと目に焼き付けておいてねッ！」

さっきからチラチラとコチラを見ていたゼノン達、

「そう言う事じゃないのよー！あああもうっ！
なんか体中が痒いんだけど！」

「あはは…ところで、何で君たちはここにいるんだい？」

「ふふっ愛と言うモノはね、観測者がいればそれだけ燃え上がると言うモノなのさ」

「そうね！さあゼノン！もっと見せ付けてあげましょう！」

そう言って眼を閉じながら顔を近づけていく二人…

「「ん～…」」

「いひゃあああああああああ！！」

「あっ！葵さぁぁぁーん！」

思わず目を覆って葵は走り去る。
それを追いかけていく為翼達は二人から去っていった。

「もうっ！」

「フフフ…」

満足そうにゼノンは笑うと、砂のオーロラを出現させて消えていった。

本当に何しにきたのやら…

「ふぅ、疲れたわ…」

「お疲れ様。どう？皆を見てみて」

「・・・」

「・・・」

「全然わかんない」

「だろうね・・・あ！」

翼は大事な事を忘れていたと葵に話しかける。
翼は掛けていたメガネを取ると、それを葵に差し出した。

「これ、葵さんの」

「ああ！そうだったね」

葵は外に出かけるときはコンタクトレンズを使ったりもしているが、家では大体メガネを掛けていた。それ程目が悪い訳ではないが、なくてはならない物だ。

「ありがとう！」

「いえいえ…」

「うーん…」

だが、葵はソレを受け取ると何かを考え始める。
暫くそうした後、葵は自室からもう一つのメガネを取ってきて、それを翼に渡した。

「コレは？」

「あげる。やっぱりもう翼くんも掛けてないとね、違和感が出ちゃうわ」

「そうかな。まあ、じゃあありがたく」

翼は複雑そうに笑いながらも、それを受け取るのだった。

「よし！じゃあ私も皆の為に頑張るから！」

「あはは、まあ期待しておくよ」

「うん！」

こうして彼らは次の世界に向けて、旅立っていくのだった

第８０話　番外編　休憩の世界（後書き）

家事やらは葵さんが中心にやる事になりました。他のメンバーも手伝いますが、メインは葵さんが引き受けてくれました…って事ですね。

あと、すいません。次の世界を整理したいんで更新は少しお休みします。

三日かそこらかな？

さて、残り試練は電王を除く三つ。

では、次もよろしく！

第８１話　？新世界（プロローグ）？（前書き）

今回の話ほど中身がないモンはないですわｗ

だが、私は謝ら…
ではどうぞ！

第81話　？新世界（プロローグ）？

「――ちゃん！待ってよぉ…」

少女は目に涙を浮かべて走っていた。目の前を走っていく少年に追いつくために…

「ははっ！早く来いよ！置いてくぜ！」

少年はそんな少女のことなど、おかまいなしのようだ。
少女は必死に追いつこうとしているが、少年はもうずっと先にいる。
いつもそうだ、彼は自分のずっと先を行っている。

ずるい、うらやましい

「きゃ！」

ふいにバランスを崩し、少女は倒れる。
ほんの少しの沈黙と、襲ってくる痛みに少女は耐えられず泣き出し

てしまった。

「うぇぇぇんッ！」

「！」

少年ははるか後方で泣き出した少女に気づくと、少女の方に向って走り出す

「ったくしょうがねぇな！」

「！！」

少女は少年が自分の所に来てくれたのを見ると、先程までの事が嘘のように笑うのだった…

「オイてめぇ今何つった？ああ？」

「…聞こえなかったのか？じゃあもう一回言ってやる――」

うまいのは、たけのこの方だ――ッ

「ざけんじゃねぇえええええ！表でろこらぁあああああッ！
きのこの方に決まってんだらぁぁぁあがぁあああ！」

「ほぉお！頭だけでなく味覚までおかしくなったのか？
可哀想だな椿！

現実、現実を直視してみろホレホレｗｗｗ」

「は？おいおいおいタケノコ厨さんよ、なんか勘違いしてねぇか？
売り上げだけでモノ語るなんざソレこそカス！カスにわか乙ｗｗ！
だいたいたけのこなんて小学生の食いモンなんだよ！

何なの？あの粉っぽいの…ちょっと、勘弁してほしっすねｗｗ

あ、ごめんなさい。咲夜センパイ（）って胸に栄養行き過ぎて
脳に栄養いかなかったんですよね……」

「きｗｗのｗｗこｗｗっのｗｗっこｗｗっのｗｗこｗきｗｗのｗこ
っｗｗこ！

どう考えてもたけのこの方がおいしいと言うのにお前ときたら…」

「上等だごらぁあああああ！」

「あ…の…2つ好きじゃ駄目…なのかな？なんて…」

「ああ！？消えろよ中立きどりの三流が！」

「そんな事ぬかしておいて
どうせア〇フォートが一番うまいと思っているんだろう？
浅い、浅すぎる！出直してこい！」

「ごっ！ごめなさぁあああい！」

ユウスケは涙を浮かべて走り去る。
しかし二人はそんな彼に目もくれず言い合いを再開した。

「咲夜さんよぉ…そろそろ決めようや、
どっちが正しく、どっちがカスなのかを…」

「泣いて謝るなら許してやらんでもないぞ。
せいぜい未来の自分に怯えるんだな」

見えない火花を散らす二人。
やれやれと思いながらも、司が仲裁に入る。

「まあ落ち着けよお前ら。そんなきのこ、たけのこで争わなくてもいいだろ。

皆違って皆いいんだよ」

しかし司の言い分空しく、二人はまたギャーギャーと騒ぎ始める…

「あああああッッ！もううるせぇよ！
お前らさっきから聞いてればアホみたいな意見ばっかだな！
どうかんがえてもマーチ様が最強だろうが！

いい加減理解しろよ！破壊しちゃうぞ！？」

「本性現しやがったなコアラ野郎が！
あ？何か？自分は高みの位置にいるとでも思ってんのか？
あ？」

「「「グゥゥウゥウッッ！！」」」

司、椿、咲夜の三人は互いににらみ合う。

「どっちもおいしいですよねー」

夏美はにやけながらソレらを口に運ぶのだった。

「おい、椿。今何かふざけた発言が聞こえたんだが大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない。コーヒー＞＞＞紅茶でＦＡ（ファイナルアンサー）」

「椿、屋上へ…行こうか？久しぶりに…キレてしまったよ…」

「デュフフｗｗそうですねｗｗそうですよねｗｗサーセンｗｗ
本当の事言われたらそら困りますモンねｗｗ

フォカヌポウｗｗｗｗ」

「貴様ァァアァァアア！
あの嗜好の芸術とも言える紅茶を冒涜した罪は重いぞぉおおおおッ！！」

「はっ！来いよ弱小が！コォフュィの偉大な力でねじ伏せてやるからさぁ！」

「あんなモノ×××で×××だろうが！」

「おいてめぇ今なんつったゴラァアアアっ！」

「まあまあ落ち着けよお前ら、
コーヒーと紅茶どっちがうまいかなんて人それぞれだろ？」

しかし司の言い分空しく…

「あああああああ！うるせぇなクソがっ！
そもそもさっきから紅茶とかコーヒーとか訳分からん事ばっか言いやがって！

緑茶が最強に決まってんだろうが！

いいのか？あ？破壊しちゃうぞ？ああ！？」

「「「ガルルルルルっ！」」」

三人は睨みつけ、互いに注意を払いながら、熱弁していく

「どっちもおいしいですよねー」

そう言って夏美はゴクゴクとそれらを飲み干すのだった

「オイてめぇえぇえええ今のだけは許せねぇわ、
ちょっと…ホント、マジで」

「奇遇だな、ワタシもだ。本気で貴様を潰したいと思ってきたよ…」

「なあ…オイ？もう一回だけ聞くぞ？本気で言ってんのか？
目玉焼きに醤油って…

お前…本気で言っちゃってるんですかｗｗ？」

「ついに常識すら理解できなくなったのか…
醤油こそ目玉焼きに合う究極の調味料だと何故気づかん？

結局お前もただの×××か」

「ざけんなテメェエエエエエエっ！
あー、かっちーんっ！椿君かっちーんときちった！
目覚めるぅ！目覚めるよぉ俺のなかの堕天使がぁ！」

「はいはい、厨二乙、乙。なんだ？ソースかけてれば大人になったつもりか？
笑わせるなよ三流がぁあああああ！」

「まあまあお前ら、目玉焼きってのはな…」

「「うるせぇえええええええ！」」

司の・・・

「上等だよお前らァアアアアアアアア！
塩が一番って事を嫌でも理解させてやるからなくそがぁあああああ！

破壊してやるよォォォオ！」

「「「ガルルルルルルッッ！」」」

「全部かけてもおいしいですよねぇー」

夏美は目玉焼きの黄身だけをくりぬいて食べるのだった

「はい、つぶあんが最高。はいつぶあん派の勝ち。はい椿はアホ」

「はいー、アホー、お前アホー！こしあんー！こしあん最強―！お前アホー！」

「まあまあお前ら……なんて言うと思ったか馬鹿共がぁあああ！たい焼き、上級者はカスタード一択なんだよど素人共が！」

「「「ガルルルルルルル！」」」

「ｚｚｚｚｚｚｚ…」

夏美は夢の中

第８１話　？新世界（プロローグ）？（後書き）

いろんな人にごめんなさいｗ

えっと、まあ今回からブレイド編なんですけど…
主な変更点は

・ベルトの仕組変更
（ターンアップでもオープンアップ式のようにエレメントが向かってくる様にできる）
・一部のカード効果変更
・オリジナルコンボ
・ＡＰの廃止

かな？
では次もよろしく！

第８２話　？相反のマインドゲーム？（前書き）

今思ったら全然キャラ紹介更新してねぇや！

まあもうしばらく放置しましょうかねｗ

ではどうぞ！

第８２話　？相反のマインドゲーム？

「う～ん…本当に凄いわねあの二人…」

「ずっとあんな感じなんです…昔はそうじゃなかったみたいなんですけど…」

葵とアキラはため息をついて椿と咲夜を見ていた。

ある時はお菓子の種類、

ある時は漫画のキャラどっちが強いか…と言うモノ。

ある時はどちらが先に寝るか…

とにかくそんな下らない争いをほぼ毎日繰り返していた。

もう皆そんな二人にあきれて放置状態と言う感じになっているのだが…

アキラはそうでもなかった。

やはり尊敬する先輩と、慕っている先輩と言う事で仲良くしてほしいのが本心である。

我夢もそれは同じのようだが…

「我夢君が言うにはアレで仲がいいらしいんですよ。私は信じられなくて…」

「うーん。そうね、でもまあ確かに険悪って訳じゃなさそうだけど…」

葵は紅茶をアキラに差し出す。
葵が入れる紅茶はとても香りがいい、アキラはお礼を言ってそれを受け取ると少しだけ口に入れる。

「おいしい…！」

「ふふっ、よかった」

笑顔になる二人。だが、そこにまた騒ぐ二人の声が聞こえてくる…

「また貴様は野菜を残して！
はっ！　そんな事でライダーになれるのかぁ？」

「あああああウッセー！
つか野菜とか食わなくてもいいんですぅ！野菜ジュースで補うんですぅ！

つかお前仮にも幼馴染だろうが！いいか、よく聞けよ…
幼馴染っつたらまず朝起こしにきて、そんで主人公の為に尽くしてくれちゃって、
なんかふとした拍子に赤面しちゃったりなんかしちゃって……

でもちょっと報われなかったりしちゃうのが幼馴染の条件……

っておい！聞けよ！」

「あーすまんすまん、ちょっと居眠りしてたわー！」

「嘘付つくならもっとマシなのにしろよ！あああ、くそっ！」

「夢を見すぎなのだお前は！いいからさっさと野菜を食え！」

「ぐあああああ！みっ、右手が疼く！？
クソッ！ヤツか！ヤツが目覚めるのか！？

ちくしょう！封印からまだ百年しか経ってねぇのによ！
ああ、そうか。魔界三銃士が目覚めたか！くそっ！やるしかねぇのかぁあああ」

「あーはいはい、凄いすごーい。さあ早く食え食え！」

「・・・・」

「…はぁ」

「あらあら…」

葵は苦笑いしながら二人を見る。もうどこかへ行ってしまったわけだが…

「どうすれば仲良くなってくれますかね…」

「うーん…まずそもそもどうして二人はあんな感じなのかな？」

「多分…椿先輩が咲夜先輩の道場にこないから…」

じゃないのかも…アキラはふとそう思う。
それは葵も同じようで…

「うん。多分きっと昔になにかあったんじゃなかなって…」

そんなの分かる訳ない。聞いても教えてくれなさそうだし…

「はぁ…」

アキラはもう一度ため息をつくのだった。

「ホラホラ、ため息ばかりついてると運が逃げちゃうよ？おかわりいる？」

「ふふっ、そうですね。すみません、いただきます」

葵に聞いてもらえて、アキラも少しは心が安らいだようだ。

紅茶のいい香りに少し笑みを浮かべると、カップにゆっくりと口を付けるのだった

「仲直り…ですか？」

「はい、我夢君はどう考えます？」

翌日、アキラは我夢に協力を求めていた。
世界移動にはまだ時間がある。その隙にもっと椿と咲夜の仲を良好にしておきたかったのだ。

いつまでもあんな調子でいいのか？

いや、きっと良くないはずだ！余計なお世話だろうがなんだろうがアキラはそう決めたのである

「まあ、そう…ですね。僕としても先輩たちには仲良くしてほしいですし…」

我夢はうんうんと首を振る。
でも正直あの二人ってあれで完成してる気もしなくもな――

「ありがと我夢くん。うれしい」

「ッ……」

服の裾を軽くつまんでアキラは照れたように微笑んだ。
いきなりの行動に我夢の思考が停止する。

（かわいい…）

「い、いやいや！」

「？」

「で、でも、どうしますか？何かいい手とかあるんでしょうか？」

「それは…」

アキラは黙ってしまう。コレと言った案は無いようだ。
どうしようかと二人は考える。

すると、背後からいりなり声が聞こえてきた

「フッ、それぞれが互いをどう思っているのか聞いてみるのもいいかもな」

「！」

ソファーで小説を読んでいたのは双護だった。
双護はニヤリと笑って立ち上がると、二人のそばにやって来る

「双護先輩！い、いたんですか！すいません！」

「気にするな、ちょっと気配を消す練習をしてみたんだ。
アキラはとっくに気づいていたようだがな」

なんていう練習してんですかこの人は…。
我夢の突っ込みに双護は笑い、受け流す。どうやら双護も協力してくれるらしい。
まあ協力者は多いほうがいいので喜んでそれを受けた

「正直おもし――大変そうだからな。俺でよければ力になろう」

「今、面白そうっていいませんでした？いや言いましたよね？
ちょ、あの寝ないでください！」

だが、まあそうと決まれば話しは早い。
椿が咲夜をどう思っているのか、また逆に咲夜が椿をどう思っているのか聞いてみるのもいいだろう。まあ本心を教えてくれるのかは微妙なところではあるが…

「トゥッ！」

「「ひぃぃっ！」」

突如開け放してあった窓から美歩が飛び込んでくる！
まるで特殊部隊のような動きで受身をとると、美歩はその目を輝かせて近づいてきた

「ちょ！美歩先輩ココ二階なんですけど！」

「気にしない気にしない！つか何々？え！聞いちゃうのソレ！
やだーっ！興味ある！美歩ちゃんも混ぜて混ぜて！」

もはや好奇心を隠す気すらない美歩。

「もう！遊びじゃありませんよ！」

「分かってる！分かってるって！」

アキラは何とか納得したようで、美歩を仲間に加えた。

「あ？あの女？そうですね、存在自体が誰得って所ですかねハイ。
フォカヌポゥｗｗ」

「ふっ、そんな事言っておいて実はそれほど嫌いじゃないのではないか？」

「ｏｈ……馬鹿野郎！冗談きついぜ…」

椿は真っ青になって走っていってしまった

「うーん…やっぱりですか…」

「まあ本当に嫌いなわけではないだろうが…」

本音かどうかは置いておいても想像以上かもしれない。
我夢と双護は互いにため息をついたのだった

「ええ、こっちもです」
それは咲夜も同じようで…

「はっ？誰が？ワタシ？ワタシが椿の事を好き？冗談は止めてくれ。
アイツと豆腐が崖から落ちそうになっていたらワタシはまず豆腐
を助けにいく」

「とか言われちゃってさぁ」

アキラと美歩は困ったように笑う。やはり無駄だったようだ

「はぁ…」

本当にどうしたら仲良くしてくれるのか…アキラは何度目かもう分からないため息をついた

そして翌日…ついに次の世界へやってきた

「見たところちょっと普通の町並みじゃないね」

「ええ、少しファンタジックというか…外国？」

屋上では翼達が今回の世界を見回していた。現代の様な町並みではなく、ビルも存在していない。

変わりにコロッセウムの様なものや見慣れない建物から、神話…それこそファンタジーな世界を思わせる。だが、街の人の中には携帯電話や車に乗っている人も多いため、過去の世界と言う訳ではないようだ。

「…ッッ　しかし、世界移動の際の光と衝撃はいつになっても慣れないな…」

双護は頭を抱えて苦笑いを浮かべる。

「あはは…多分移動の際に時間とか空間を超えるからだと思うよ」

「良太郎は平気そうだな」

「うん。ぼくとハナさんは特異点だから平気なんだ。
時間移動の影響は受けないからね…」

「羨ましいよ…はは」

そう言って一同はこの世界をもう一度見回す。
この世界ではどんな事がまっているのだろうか…？

第８２話　？相反のマインドゲーム？（後書き）

今回でやっと世界移動ですね
次回から本格的にブレイド編の世界へ！

では次もよろしく！

第８３話　？紅ト翠ノ仮面？（前書き）

サブタイトルは何かこう厨二っぽい感じを目指してるんですが…

ではどうぞ！

第８３話　？紅ト翠ノ仮面？

「さて、まずブレイドになる為にはアンデッドの力が無いと駄目なんだ。
ブレイドのライダーは皆アンデッドの力があってこそその能力を発揮できる訳だからな」

空き教室で司は椿にブレイドの情報を与えていた。
本人が覚えている範囲、しかももしかしたら情報に誤認があるかもしれないというデメリットもあるが、それでも知らないよりはマシだ。

「はい！質問があります！」

「なんだ椿君、言って見なさい」

「あ、あの…幼女のアンデッドとかいる――イデッッ！」

司の投げたチョークと後ろに座っていた咲夜の踵落としがヒットす

る。

「おい！つか、テメェ何でココにいんだよっ！」

「お前と口論していたせいで話を聞きそびれてしまったのだ！」

「ああ、一応もう皆には伝えてあるから…
戦える奴らにはアンデッドを探しにいってもらった」

椿はそれを聞くと、すこし不満そうだが席に着いた。
司はその後も自分が知りえる情報を二人に伝えていく。

だが今までの世界を見るに、その情報はあまり役に立たないかもしれない。
きっとこの世界もなんらかの情報変更点があるのだろう、例えばアンデッドの力を借りずに変身できたり…とか

まあ考えすぎか、司はそう思いながら二人に情報を伝えきる。
もっと何かあったような気がしたが…

正直、今自分が思いだせるのはここまでだろう

「ってな訳で俺もアンデッドを探しに行ってくる。お前らはここで待機しておいてくれ、なんなら校庭のほうがいいか？」

椿と咲夜が頷くのを確認すると、司は外へ出かけに行くのだった

「意外だな…」

「あん？」

司が出て行って残された二人は暫く沈黙を続けていた。
だが、ふと咲夜が椿に話しかける。

「正直、もっとビビるかと思っていたが…」

咲夜はニヤリと笑って椿を見た。
しかしその笑みは馬鹿にしているとかじゃなく、
少し見直した、

と言った感じだろうか。
あまり見ない表情に椿は思わず笑ってしまう

「はっ、俺は既に暗黒帝王と契約を結んだ身だからな。今さらどうって事ねぇよ」

「またお前は……」

それも一瞬、また冷たい視線に変わる咲夜。

椿は困ったように笑みを浮かべると、立ち上がって歩き出した

「校庭に行くのか？」

「まあな、お前どうするん？」

「まあ一応、ワタシとお前はブレイドペアらしいからな」

「わー　うれしーなーぼくもさくやさんといっしょでうれしーやー」

「露骨な棒読みありがとうございます…
とでも言ったほうがいいのかな？」

「サーセンｗｗあー…先行っててくれ、忘れモンしたわ」

咲夜は頷くと、校庭に向って歩き出す。
椿はそれをしばらくボーっと見つめ、視界から消えるのをまった。

そして完全に咲夜の気配がなくなるのを感じると、深くため息をつく。

「普通ビビるだろ…」

大きく震えだす足。正直、気を張るのは疲れる。
本心としては弱音を吐いて逃げ出したくて、泣きたい程怖い。
緊張してる。

でも、拓真に先をこされたから少なくともそんな事はできない。
二番煎じなんてそれこそヘタレもいいところだ。

「ハァ…ま、まあアレだな。
仲間の知らない所で実は苦しんでましたってのはカッコいいからな。

うん、そうだな！」

とりあえずそう思っておこう。椿はもう一度深呼吸して、校庭に向うのだった。

「なんていうか…遊園地に来てるみたいだな」

司はそう言って辺りを見回す。

外国の街並は彼にそう言った印象を与えたのか、物珍しそうにしていた。

「結構人もいるみたいだけど…」

街には人の姿も多い。それほど物騒じゃないようで安心する。

「なんか…情報が欲しいところだな…」

司達は適当に人を捕まえて少しこの街の話を聞いてみる。
とりあえずココ最近おかしな事が起きたかどうかとか、変なモンスターが出たかどうかとか…

「あぁ、そう言えば…」

そんな中、一人の貴婦人が気になる事を言う

「ココ最近変な怪物が出るらしいねぇ…

まあ街の外の方だからまだ皆注意していないんだけど…それに彼らもいるしねぇ」

「彼ら？」

「代々この街を守ってくださる方達さ。まだ若いのにたいしたもんだよ」

「そうですか…」

司達は貴婦人にお礼をいう。
変な怪物、そして彼らと言われた存在、なかなか気になる情報は得られた。

「街の外の方には…たしか…」

「変身！」『Ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ』『Ｃｏｍｐｌｅｔｅ』

「変身！」

デルタとファムは目の前のソレに向って武器を構える。

「ジィイイイイイイイッッ！！」

ゴキブリに似たその外見はまさにローチの名に相応しいだろう。
ダークローチと言われる三体のソレは、ファムとデルタに今にも襲い掛からんとしていた。

「うへー…ゴキブリとかマジ勘弁なんですけどぉ…」

「しかも大きいし…」

あ、でも…

「男の子とかって虫に怖がる女の子にキュンキュンしやがるみたいっすよ友里さん？」

「あらそうでしたの美歩さん。きゃーむしこわーい！」

その言葉と共にデルタは拳を大きく振りかぶって、そのままローチの顔面目掛け殴りつけた。

拳がローチにめり込むと、ローチは大きく吹き飛ぶ！

「んなめんどくさいアピールできないっての！」

「だよねー、ってか結構いくねー」

その行動を開戦といわんばかりにローチとデルタ達は動き出す。
ローチはその爪でファムを切り裂こうとするが、ファムは最小限の動きでソレを防ぐ。
振り下ろされた爪をブランバイザーで弾き、隙を見て強烈な突きを繰り出していく。

「ジィイイイイイイッッ！」

「フッ！ハァ！」

白いマントを翻し攻撃をかわすその姿は美しく、時折白い羽が舞い散る。
ファムはまさに蝶の様に舞い、蜂のように刺す。そんな戦闘を見せた

「タァッ！」

「ジィイイイィィッッ！」

ファムはローチの膝に突きを当てる。
その衝撃で体勢を崩すローチ、そこにできた隙を見逃さない。
ファムは一枚のカードをバイザーにセットさせる！

『アクセルベント』

瞬時、ファムの動きが高速に変わり、見えない突きの連打を繰り出す！
ローチは一瞬で蜂の巣にされ消滅した。
爆発ではなく消滅。黒い霧のようなモノになって消えていく。

「あたしもっ！決めるよ！」

左右から突進してくるローチに青い光弾を当てていくデルタ。
一体が怯む隙にもう一体に弾を当てていき次第にその距離を離していく。

ある程度距離が離れたのを見計らってデルタはミッションメモリーを抜き出し、腰にあるデルタショットにメモリーを装填した。

『ＲＥＡＤＹ』

電子音が鳴ると共にデルタはソレを構え走り出す！

「チェック！」『Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ』

光がショットに収束していき、デルタは思い切りローチを殴り飛ばす。

「ジャアアアアア！」

直後Δのマークが現れ、ローチは消滅する！

もう一体のローチもファムの突きによって息絶えるのだった。

「うぃー！終わりー！」

変身を解いて二人はハイタッチを決める。

「よしよし、あたしらも役に立ってる感じだよね！」

「もち！さ、帰ろ――」

そこで美歩は言葉を止める。何事かと友里は振り向くが、瞬時にその意味を理解するのだった。

「はぁ…一匹いれば十匹はいるって言ったモンだけど…」

「ほんと、うんざりするよね…」

二人の背後の方で、新たなローチ達が爪を構えてやってくる。

二人はやれやれと思いながらも、再び変身アイテムを構える――ッ

「え？」

だが不思議な事にローチの体から火花が散り、直後ローチ達は何かを警戒するように後ろへ後退していった。

「！」

そして気づく、後ろから誰かがローチに攻撃を仕掛けたからだと！

友里と美歩はそれが誰なのかを確かめる為に振り返った

「貴方達！そいつから早く離れて！」

「危険だよ！逃げて！」

「「！」」

美歩達の所へ二人の人間が駆け寄ってくる。
一人はカールのかかった金髪の少女で、もう一人は栗毛で背の高い少年だった。

二人は美歩達をかばうように立つと、ローチの群と対峙する。

「あ…あのっ、貴方達は…」

「私たちの事は気にしなくて良いから！早く逃げて！」

「言う通りにするのが一番しょ？逃げよ友里」

「で、でも…」

「あ！ちょっと！」

美歩は友里の手を引いて岩陰に隠れる。
自分達も戦えるのだから逃げる必要はないのではないかと問いかける友里を美歩は落ち着ける。

「別に、やばくなったら助けりゃいいって話。
どうして私たちを逃がしたのか…見てれば分かるっしょ？」

「う…うぅん…」

ローチと対峙している二人に聞こえないようにしながら美歩達は計画をたてる。
問題の二人は美歩達が隠れたのを見ると、何かを取り出した。

「あれ…」

「うーん、やっぱしな。美歩ちん、さえまくりだわ」

二人がそれぞれ取り出したのはバックルと一枚のカード。
二人はカードをバックルに装填し、腰へとセットした。

「気をつけてね、ダイアナ」

「クロハ…ありが――ふん！あ、アンタもね！」

そして二人はポーズをとり、バックルに付いているハンドルを勢いよく引く！

「「変身！」」

『『ターン・アップ』』

二人のベルトから光のカードが現れローチ達を吹き飛ばした！
二人はそのカードに向って走り出し、そのままカードを通過すると二人の姿が変わり、アーマーに包まれたモノへと変化を遂げた。

「おぉ！」

現れたのは緑と、赤いライダーだった。
緑のライダーはその手に構えたロッドでローチ達に激しい攻撃をしかけ、赤いライダーは銃で緑のライダーを援護していく

「赤と緑…ねえ、アレって…」

友里は司から聞いた話を思い出す。
ブレイドの仮面ライダーで赤色、そして銃を使うのは…ギャレン！

仮面ライダーギャレンだ。と、なると緑のライダーはレンゲルだろう。

「この世界の仮面ライダーってわけね…」

第８３話　？紅ト翠ノ仮面？（後書き）

この世界ではレンゲルもターンアップになってます。
ってか全部ターンアップで統一してると考えてください

では次もよろしく！

第８４話　？終焉を招く使徒・ローチ？（前書き）

何かもう迷走してきたなサブタイｗ

ではどうぞ！

第８４話　？終焉を招く使徒・ローチ？

二人が見守るなか、レンゲルとギャレンはローチ達をなれた手つきで攻撃していく。
おそらくコレが初めての戦闘ではないのだろう。
立ち振る舞いや、攻撃の無駄のなさからソレが思い知らされた。

『ブリザード』

レンゲルは一枚のカードを発動する。
直後、ロッドから冷気が発生しローチ達の動きを封じた。
凍てつく檻にて拘束される、ローチの群

『ファイア』『アッパー』

【バーニング・スタンプ】

ギャレンの拳が紅く燃え上がり、そのままローチ達を殴りつけていった。
次々に消滅するローチ達。

しばらくして全てのローチは二人のライダーによって倒されたのだった。

「…ふぅ。終わったね」

「ええ…そうね。貴女達！出てきていいわよ！」

その言葉を聞き、美歩と友里は岩陰から姿を出す。

「ココは危ないわ！早く街に帰りなさい！」

「あの…実は――」

「「どうぞ」」

「あ、どうも」

「…ありがとう」

咲夜と椿はそれぞれにジュースを差し出す。
しかし、ピタリと二人の動きが止まった。

椿と咲夜はそれぞれが出したジュースを凝視する。
一見普通の炭酸飲料なのだが…どうしたのだろうか？

「おい咲夜、お前…お客様に何出したんだ？」

「コーラだが……それより椿、お前…まさか…」

二人がなにか怪しいオーラを出していたが、クロハは気にせずコップに手を伸ばす。
だが、椿はその手を弾いて、代わりにコップを奪い取り一気に飲み干す！

「えええええええ！？」

何でー！？

何でお客にだしたもの飲むのーっ！？

混乱するクロハ、だが二人は気にする事なく続ける。

「何をするんだお前は！？」

「お客様にだすのはペプシのゼロカロリーって決まってるでしょーがっ！
だから飲んだ！はやく持って来い！」

「はぁぁ、いるんですよね稀にこう言う馬鹿が……」

咲夜は構えをとる。それを確認すると椿もまた、構えをとる！

「やはりお前とは相容れないようだな…」

「そうみたいだな。まあ別にそれでいいけど…」

「コーラのほうがーー」

「ペプシのほうがーー」

「「うまいんだよぉぉおぉぉぉおおおッッ！！！」」

「…何？アレ」

「頼むから気にしないでくれ……頼むから…」

「驚いたわ…
まさかアンデッドの力を借りずに変身できるライダーがいたなんて…」

金髪の少女ダイアナと、長身の少年クロハはディケイド達を不思議そうに見詰めていた。
街を守っている二人が敵である筈がない、司達は早速彼女達に協力を求めたのだった。

「他の世界か…
にわかには信じがたい話ではあるけど…君たちを見れば頷ける話

だよ」

クロハは少しも迷うそぶりを見せず、その手を差し出した

「僕でよければ力になるよ、よろしく」

「あ、ああ！ありがとう！」

にこやかな笑顔を浮かべるクロハに安心する。
想像以上にいい人のようだ、クロハは皆と握手をしてまた笑顔を浮かべた。

しかし、ダイアナは対照的のようだ。腕を組み、口をへの字にしている。
怪訝そうにクロハを見つめて、少し鼻をならす

「ちょっとクロハ！あなたまたそうやって…
私達だって今、大変なのにッ」

「それは…本当に申し訳ないと思っている。ただ少し協力して欲しいんだ！
どうか、俺達に力を貸してくれないか？」

「え？あぁ…えとっ…」

頭を下げる司にダイアナは一瞬どうしていいか分からないという表情になる。
しかし代わりにクロハが苦笑いを浮かべて口を開いた、

「気にしなくていいよ。
ダイアナは口が少しキツイだけで君たちにちゃんと協力してくれるから」

「そ、そうなのか…？」

「え…あ…そ、そうね！
あなた達がどうしてもっていうならいいわよ」

「ありがとう！」

照れながら笑うダイアナ。クロハはくすくすと笑いソレを見ていた。

「だから、言ったでしょ？
ダイアナは優しいんだけど、少しテレやなだけだって」

「なっ！か、勘違いしないでくれる？私はあなた達の為にやるんじゃ――」

「テンプレキタアアアアアアアアアアア！」

「きゃあ！」

今まで黙っていた椿が目を光らせ立ち上がる、しばらく…

絶滅危惧種だの

今時いねぇよこんなお手本どおりのツンデレなんて…だの

よく見れば貧乳じゃねぇかオイッ！あれ？ちょっと待てよ…この声

……

くぎゅぅううううううううッッ

と喚いていたが、咲夜の手刀で沈められるとそのまま部屋から退場

していった…

「・・・」

「な、なかなかアクティブなスキンシップをするんだね彼らは…」

冷や汗をかきながらクロハと司は、うはうはとぎこちなく笑う。

ダイアナは顔を真っ赤にしながらクロハを睨みつけるのだった

「ところで、あのモンスターは？」

司のその言葉に二人の表情が険しく変わる。

街を守っている彼らなら、あのモンスターを知っている筈だ。

この世界で何が起こっているのかも…

「ダークローチ。ココ最近になって街の付近に現れだしたんだ。
日を重ねる毎に数が増えていっている気がする」

「噂によれば数ヶ月前、この街にピエロの格好をした
道化師ってヤツが現れてから出現する様になったらしいの。
だから私達はその道化師ってヤツを探しているんだけど…」

「道化師…！？」

司達の脳裏にファイズの試練の記憶が蘇る。

たしかあのクラウンと爆弾を設置したのは…

「またその道化師ってヤツか…」

「知っているの!?」

「ああ、ここととは違う世界だけど…」

となると、道化師も世界を移動できる!?

いや、もしかしたら道化師は複数いるのかもしれない。

駄目だ、情報が少なすぎる…

二人は道化師を探しているのだが、なにぶん街を守りながらの捜索の為なかなか見つからないらしい。警察や一般市民にも道化師の情報を伝えているが、それでも目撃したと言う情報すらこない始末。

このままでは街にローチが攻めてくるまでそう時間は掛からないだ

ろう

「それだけじゃないんだ」

「？」

クロハはこの街…いや、世界について話し始めた。

この世界ははるか昔、人間の他に様々な種族が生きていたらしい。
しかし種族間抗争が起こった事で大規模な戦争が行われる事となった。

そんな中、戦争を嫌う人間と、各種族から戦争に否定派の者たちが集まり一丸となって行動した

戦争は凄まじいもので結局生き残ったのは否定派の者達だけとなった。
もちろん人間だけで戦争を乗り越えられた訳ではない。
むしろ人間はほぼ無力といってもいいだろう。

人間が生き残れたのは人間以外の種族のおかげなのだ。
人間はその人ならざる者達を称え、人ならざる者達もまた人間と深い絆を持つ事になった

人間は歴史の中で絶大な知恵を手にいれ、人ならざる者達を不死者へと変えた。そして神として代々称え、祀る事となったのだ。

だが、絆が深くなったとは言えその時代の人間と…というだけの話。
人ならざる者はいつからか人間に絶望しはじめた。

欲深き人間達はいつしか神として崇めていた筈の彼らをアンデッドと称し、その力を道具の様に扱いだした

これに絶望したアンデッド達は、人間に見切りをつけて

『自分達が認めた人間』

以外には手を貸さないという事にしたのだった。
計52体のアンデッド達は、その数から自分達をトランプに見立てそれぞれのスートとカテゴリーに別れた。

そしてそれぞれ自分達が定めた定義にしたがい人間に力を貸すことにしたのだった。

自らの力を鎧に変えるバックルをつくり……

「その気になればアンデッドは僕たちを滅ぼす事もできただろうから…
　このルールはありがたいよ…」

「じゃあ、つまりクロハ達は・・・」

「うん。僕とダイアナはクローバーとダイヤに選ばれたんだ」

「す、スペードの契約者はいるのか！？」

「ううん、いないよ。今は僕たち二人だけさ」

「それで、大変な事って…？」

そうだった。と、クロハはまた表情を変える

「ハートのスートが消えたんだ。アンデッドと一緒に」

アンデッドと誰かが契約を結べばその人間の情報をそれぞれのスートのキングに伝える事になっているのだが、ハートからの念波が途絶えたらしい。

誰かと契約したと言う事だろうが…全く情報が無く、今どこにいるのかさえ不明という事なのだ。

「ありえないとは思うけど誰かに悪用なんてされたら…」

「ハートの面々は気まぐれなヒトが多いから
多分普通に契約したんだと思うんだけど…

一応…って事もあるから」

成る程と一同は頷く。そして同時に込み上げる疑問

「クロハたちはどうやって選ばれたんだ？」

「ダイアナは代々家がダイヤのスートと契約を結んでてね、
ダイアナも幼い頃からいろいろ努力して無事、ダイヤのキング。
ギラファさんに選ばれたって訳」

「ちょ！ちょっと！勝手に言わないでよ！」

ダイアナは赤くなってクロハの口を押さえる。

「へー！凄いんですね！」

「そそそんなんじゃないんだからね！ただちょっと何て言うか…」

「はいまたテンプレはいりましたァァァっ！」

はしゃぎながら戻ってくる椿、さらに彼にめり込むチョップ。
倒れる椿、引きずる咲夜……

「……気にしないでくれ」

「え、ええ…」

「クロハ君は？」

「クロハは完全に運がよかっただけ！
道に迷っているおばあさんを助けたのを見ていたクローバーのキングが
クロハを気に入ってそのまま契約！」

「あはは…クローバーの皆はヒトがいいから…」

そう言って二人は笑う。

「へー。じゃあスペードのキングに交渉して
力を貸してもらうってのもそんなに難しい事じゃないのか！」

椿が身を乗り出してくる。

よかった、そんなにキツそうでもない！これなら直ぐに仮面ライダーになれる！
俺が皆の足を引っ張る事はなくなる訳だ。

「いやっ…それが……」

クロハとダイアナは急に押し黙ってしまう。

その様子に椿の余裕が消える。何か嫌な予感がする。

っていうか嫌な予感しかしない…

「その…できれば、なんだけど…」

「どうしても、ブレイドにならなくちゃいけないの？」

「あ…ああ、もう今契約していないのはブレイドだけなんだろ！？」

クロハとダイアナは困ったように顔を見合わせる。

「何か…問題が？」

司の問いに二人は頷く。

確実に問題がある、止めておいたほうがいいと顔が語っているのだ

「ブレイド…つまりスペードのアンデッド組みは、
ある条件さえクリアできれば誰でも、どんなヤツにでも忠誠を誓って力を貸すんだ。

だから…その、椿がもしブレイドになりたいなら…

そのテストをクリアすれば良いだけの話しなんだけど…」

「テスト…？」

どんどん膨れ上がる嫌な予感。
椿の顔から笑みが完全に消える。テスト…

「それは…どういう…」

「…多分、今も誰かやってるから、行ってみる？」

「クロハっ！」

ダイアナは信じられないと言う眼で彼をみる。

「あなた本気なの？あれを一般人に見せるって…

どうかしてる！」

「彼らは一般人じゃないだろ？

それに…ブレイドになろうとする事がどういう事かを見せないと…

彼らも、ぼくらも先に進めないんだよ！」

「っ…！」

ダイアナは渋々といった様子で椅子に座る。

だが今だに納得していない様子で、時折小声で信じられないと何度も呟いていた。

第８４話　？終焉を招く使徒・ローチ？（後書き）

次の更新はちょっと未定とさせてください。
明日は多分ないです、明後日からは未定で

いやいや申し訳ありません、では次もよろしく！

第85話　？王（コーカサスビートル）？（前書き）

まあ、とり合えず今日は更新できました

ではどうぞ！

第85話　？王（コーカサスビートル）？

「・・・」

「…なんというか、静かになったな」

スペードのアンデッド達に会うべく、椿達はその場所まで歩いていた。

緊張して黙っていた椿の少し後ろを咲夜は歩く。

「普段はあれだけ偉そうに喋るクセにいざとなったらソレか？
それとも右腕に眠っている魔王が暴れだしているのかー？」

小馬鹿にしたように笑う咲夜

「うるせぇな…つか、ちったぁテメェ空気読めよ！」

「おーおー、マジレスか…」

咲夜は呆れたように笑い肩をすくめる。

椿は軽く舌打ちをすると、咲夜の隣に寄って歩く速度を合わせた

「つか、お前なんで一緒に来てんだ？関係ねぇだろうが、帰ってろよ」

「…はっ、ビビるお前の姿でもみてやろうと思ってな」

「かぁー、さすが血の色が緑の咲夜さんはおっしゃる事が違いますねー。
昔はあんなに可愛かったのにー」

「はぁっ！？」

表情を変える咲夜を見て椿はくすくすと笑う。

「冗談だよ。つか昔の事なんざカケラとて覚えてねぇよ」

「っ……」

「あんなの黒歴史の塊だぜ。おい、なんかお前寂しそうな顔してねぇか？
あれか？実は俺達将来結婚の約束でもしてました的なベタってる展開か？

それ何てエロゲ？」

「うるさいわ！ワタシもとんだ黒歴史だったよ！」

「「ケッ！」」

二人はまたいつもの様に罵り合いながら、足を進めるのだった

『・・・』

そして椿達はそこへ連れてこられた。
グラディエーターが出てきそうな中世をイメージしたコロシアム。
命を賭して戦士達が戦う場所、そこに…そのアンデッドは立っていた。

キング、コーカサスビートルアンデッド！

キングはその手に剣を構え、目の前に転がっているモノを見ていた。
ソレは苦しそうに呻きながら地面を這いずりまわっている。

それを笑うのでもなく、追うでもなくただじっと…キングはソレを見ていた

「あれが…キング」

「ッ！」

そのオーラに椿はいっそう気分が悪くなる。
そしてソレを見てしまいその恐怖は確信へ変わる

「おい…あれ…」

「！」

椿が指差したところをみて司達の表情も変わる。
キングが見つめていたモノ、それはまさに仮面ライダーブレイドそのものではないか！

「なっ！」

ブレイドはまだ契約してないんじゃなかったのか？
司の問いにクロハはしっかりと答えたのだった

「スペードのアンデッド達に認めてもらう条件はたった一つ、
それはキングを倒す事なんだよ…」

「！！」

「ブレイドに変身させて、キングと一騎打ち。
それで勝てば彼らはそれがどんな人間だろうと協力するのよ…
本当、信じられない」

苦々しくそれをダイアナは見る。
その性質上、安易に力を求める輩や私欲の為に力を手に入れようとする者が後を絶たない。

だが、結果として誰もキングに勝つ事はできなかった。
今、下で転がっているブレイドもそういった人間なんだろうか

「彼は…もう、負けたんだね」

クロハの言うとおりだった。
倒れているブレイドは息も切れ切れで、キングから逃げ様と這いずっていく。そしてその口から漏れるのは命乞いの言葉

「たっ……たすけて……くれっ！」

『・・・』

一歩、キングがブレイドに近づく。
ブレイドはさらに命乞いを続けてキングに助けを求めた

「……おい、負けたら…どうなるんだ？」

震える声で椿がクロハに問う。
いや、分かっている。

命乞いなんかしてる時点でもう完全に！
でも、否定したかった。否定してほしかった！

「殺される。どうあっても……」

しかし、無情にもその言葉が放たれ、椿の心に突き刺さった

「ひっ！」

思わず腰を抜かして倒れこむ。

そんな、そんな条件ってアリかよ！

恐怖で頭がおかしくなりそうだ。

椿のそんな思いを知らず、キングはブレイドに剣を向けた

「うっうわあああああ！助けて！
おれが悪かった！もう二度と現れないから！！」

『悪いが…それはできない。私は最初に言った筈だ、敗北は死を意味すると。
そして貴様は敗北した…

潔く――』

死ね

「うわあああああああああ！」

「おいおい！悪いけど黙って見過ごす訳にはいかないぜ！」

司はディケイドライバーをセットし、一枚のカードを装填する。

『カメンライド』

「変身！」

『ディケイド！』

司の周りに九つの紋章が出現し、収束する。
そしてそれらが弾け、ディケイドに変身を完了させる。
ディケイドはそのままコロシアムの中心に向って飛び降りる

「・・・」

それをクロハは複雑そうな表情で見ていた。
何故なら…クロハとて同じ事をしたからだ。

過去にテストに敗れた人間を、ディケイドと同じように助けに入った事がある。

だが……

『…ほう。異質な気を感じると思えば』

「悪いけど、このまま殺させる訳にはいかない！」

ディケイドはブレイドを庇うように立っていた。
既にブレイドは恐怖で気絶しており、動ける状態ではない。

キングはディケイドとブレイドを交互に見ると、すこしだけため息をついた

『貴様は何かを勘違いしている。
我々は互いに誓いを立て神聖なる約束の下にこの戦いをしているのだ。
私は決して私欲や娯楽の為に人間を殺すのではない』

「それは理解するつもりだ。ただ殺さなきゃ駄目なのかよ！」

『当然だ。命を賭けた戦いこそ偽りの無き結果が生まれる』

そう言ってキングは手を上げる。

「何……を――ッッ！！」

ふと、ディケイドの目の前に何かが迫る。
そして気づいた！

それはキングの剣！

寸止めこそされているが、ディケイドの眼前にキングの剣先があった。

「！！」

それだけではない。
いつのまにかディケイドの周りはアンデッド達が包囲しており、それぞれの武器をディケイドに突きつけているではないか！

「なんだと…っ！」

いつの間に囲まれたのか？
そもそもいつの間に剣を突きつけられたのか…全く分からなかった。
それこそ一瞬、そして直後後ろから何かが落ちる音…

「ッッ！！」

ブレイドの変身が解かれ、一人の人間が倒れていた。
そしてそのすぐそばにはカテゴリーエース。ビートルアンデッドが剣を持ち立っている

その剣からは血が滴っている。
そう、そして男を見た。

無い、何が？

首が！

首が無いのだ男には！それがどういう事なのか瞬時に理解する。
遅かった、間に合わなかった…

ビートルアンデッドはブレイドだった男の首を一撃で切り取り、即死させる。
おそらく男に苦しみは無かっただろう。

だが、ソレを見ていた椿は恐怖でもう声すら出せなくなっていた。

「くっ！」

『変身を解除しろ、我らは無益な殺生だけはしない。
苦しませる事もしない、誓おう』

『ご理解ください、これがルールなのです』

ディケイドを嗜めるようにジャック、イーグルアンデッドは優しい口調で囁く。
しかし彼もまたディケイドに武器を向けており、抵抗すれば…

「っっ！」

ディケイドは勝ち目が無いと悟り、変身を解除する。
それを合図に、ディケイドの周りで構えていたアンデッド達も散り散りになっていく。

「・・・」

クロハも同じだった。そして知る、タイムスカラベ。
スペードスート以外の時間を停止するその力がある限り、彼らを止める事はできないのだ。

時間停止中は攻撃する事はできないが、すぐに囲まれてしまうし、逃げようともすぐ追いつかれてしまう。

『・・・』

ふと、椿とキングの目が合った。
圧倒的威圧感、アレに勝つ！？
ついに椿に限界が訪れる…

「うわぁあああああああ！！」

「！」

恐怖で錯乱した椿はコロシアムから逃げるように走り去る。

「おい！椿！」

咲夜は椿を追いかけ、自らも走り去っていく。

それをキングは何も言わずに見ているのだった…

「ハァ…ハァッ……オエッ…」

緊張と恐怖、こみ上げる吐き気が椿を包んでいた。
もう自分が立っているのかどうかすら分からない…ブレイドになるにはアイツと戦う？一騎打ち？

負けたら……死ぬ！？

ふざけてる！
無理ゲー、いくら補正がかかってるからって仮にも向こうは王を語るキング。
負ける、戦う前から分かってるだろそんなのっ！
もっと簡単な試練にしろよ！なんだよコレ！
「おい、椿。大丈夫か」
「・・・っ」
後ろから追って来た咲夜に気づくと、椿は静かに頷いた。

「本当に大丈夫か？」

辛そうな椿を見て、咲夜は背中をさすろうと手を伸ばす。
しかし椿はその手を振り払い咲夜に詰め寄った、普段見ない椿の眼に咲夜は思わず息を呑む。

「なあおい…お前、あいつに勝てる自信あるか？」

「っ？あいつ…？」

「キングだよ！あんなヤツに勝てるかって聞いてんだ！」

「ッッ！」

ついイライラして咲夜の肩に強く掴みかかってしまう。
表情を強張らせる咲夜、椿はそれに気づくと小さな声で謝った。

「ワタシは…どうだろう…」

「はっきり言えよ。無理だろ？そうだ、勝てるわけねぇよ！」

「・・・」

咲夜は答えない。

答えられない。

安易な気持ちで勝てると、勝てないと答えても結果は同じだろう。
結局椿が欲しいのは同調の言葉といい訳の理由。

誰も自分を責められない。そうだ！あんなヤツに勝てる訳ないのだからと！

だが、いい訳の理由を作ろうが作らなかろうが極論として彼はブレイドにならなければならない。

どんなに同情を買おうがそれで自分達の世界が滅びの道からそれる事はないのだ。

「戦わないのか…？」

悪気を込めたつもりは無い。

すくなくとも咲夜はそう思っていた。

だが、この一言が椿をより追い詰める事になる。

「ッッ！！」

椿は顔を真っ青にしてその場にへたり込む。

「勝てねぇよ！殺される！嫌だ…ッ！ふざけんなよ！」

「・・・」

正直、なめていた。椿は心からそう思う。
ユウスケの時も、亘の時も、翼、拓真、真志。ここまで全員がクリアできた。

だから、自分もできる。そう思っていた。
少しの苦労、あとは変身して終わり。

そんなモノだと考えていた…

だが違う。
そうだ、ユウスケ達は皆一つ間違えれば死んでいたのだ。

いや、それだけではない。

拓真の時に至ってはもしかしたら自分まで死んでいたのかもしれないのである。

だが、そんな事は無いと思っていた

テレビを見ているような、自分は大丈夫だというような感覚。

そう考えていた…

だが、今…

「お！俺に死ねってか！？冗談じゃねぇ！」

「だっ…誰もそんな事言ってないだろ！」

「同じようなモンじゃねぇか！あんな化け物に勝てるかよ！
たとえブレイドになったとしても俺はアイツには勝てない！
分かるんだよ！」

「・・・・」

ガタガタと震える椿。咲夜は思わずどうしていいか分からなくなる。
いつも大口を叩いていたコイツが、今はこんなに怯えているのだ

「……椿」

「へっ、笑いたきゃ笑えよ！分かってるさ俺だって情けないって事くらい！
でも怖いんだよ！しかたねぇだろクソっ！」

「わ、笑わないさ！」

ただ…なんて声をかけていいか…

「椿、ワタシは…
ワタシはお前の事をこんな事で見損なったりはしない！」

「っ……あ、ああ」

『キヒヒヒヒヒッ！』

「「！」」

ふと、笑い声が聞こえて二人はその方向を見る。

「なっ！」

「ッッ！」

二人を見ていたのはカミキリ虫の様な姿をした化け物だった。

第85話　？王（コーカサスビートル）？（後書き）

ちなみに、この世界のスペードクイーンは女性です

つか逆に何で原作は男だったんだろうかｗｗ

まあいいですわｗ

では次もよろしく！

第８６話　？狂気道化のファーストゲーム？（前書き）

そう言えばもうすぐオーズも最終回か…
この小説が終わる頃には何がやっているのやら

ではどうぞ！

第８６話　？狂気道化のファーストゲーム？

『キヒッ！ヒヒヒヒヒ！！』

青が目立つその姿、化け物は不気味な笑い声をあげて二人に近づいてくる
何故笑っているのか二人にはまったく理解できない。そして同時に…怖い

「ッ！」

「ひぃっ！」

『キヒヒヒヒヒ…』

化け物の手には鎌の様なブーメランが握られていた。
街の外に現れるというローチでは無いようだが危険なのは確かだ。
いや、もしかしたらもっとヤバイのかもしれない。
咲夜は腰を抜かしている椿をなんとか担いで逃げれないかと考える。

「ちっ！」

「！」

嫌な予感ほど当たるものだと咲夜は切にそう思う、化け物の周りからローチが現れた。
ローチ達はすぐに咲夜を取り囲む！

「くそっ…」

自分一人なら前のヤツに蹴りを決め、その隙に逃げられるのに…

「おい…」

「あ？」

椿は震える声で小さく呟く

「おれ…おいて…にげろ…」

「…はっ？かっこつけるのは他の女相手にしろ。
そんなモンじゃワタシはときめかんぞ」

「ばかっ…言ってる場合じゃねぇだろ！」

咲夜は冷や汗を浮かべながらもニヤリと笑う。
最初の世界でもこんな感じだったな
慣れたと思っていても、やはり…怖い

「椿、何が何でも走れよ！」

「あ！おい！」

咲夜は一気に走り出し、一体のローチにとび蹴りを決める！
それに気をとられたローチや化け物は咲夜が厄介な敵と判断し、彼女に攻撃をしかけた！

「うっ！」

ギリギリ、しかし咲夜はローチ達の攻撃を紙一重でかわしていく。
それだけでなく椿から狙いが外れるように徐々に彼から離れていった。

「す！すまん！直ぐに助けをよんで…」

椿は這うように化け者達から離れていく。

くそっ、情けない！
だが、早く何とかしないと！椿は携帯を開いて助けを求める

「早く！早く！」

『キヒヒヒヒッ！！』

「ッ！あ？」

そんな彼の目の前で化け物が笑っていた。

「ッ！！　しまった！」

咲夜はまわし蹴りでローチ達を吹き飛ばすと、全速力で椿の所へ走っていく！

ローチに気を取られていたせいで化け物が椿の所へ向かったのに気がつかなかった

「あ…あ……ッ！」

『キヒヒヒヒヒヒ』

化け物はどこからか出したダーツを構え、狙いを定める。
椿の事をただの的としか思っていないその素振りに、絶大な恐怖が
襲ってくる

「う…ぉ…！！」

『キヒヒッ！』

化け物はダーツを投げる！
目をつぶる椿、そして聞こえる苦痛の声…

「お前っ！」

「くぅ……ッッ！」

咲夜は椿を庇い、かわりにダーツを背中で受け止めていた。
化け物は咲夜が間に合った事が愉快なのか、腹を抱えて笑い出したのだった

「お、おい！大丈夫か！」

「ぐっ…あ、ああ」

咲夜はよろよろと立ち上がりもう一度構えた。
防御力は上昇している為、苦痛ではあるが命に別状はないようだ。

ダーツという事もあってかそこまで深い傷でもない。
咲夜はダーツを引き抜くよう椿に言う。

椿は少し戸惑いながらも、ソレを抜いた。

「グッ！」

「だっ、大丈夫か！？」

「ああ…これくらい…」

『ピピピピ！』

『キヒィィッ！』

その時だった。空から銃弾の雨が降ってきてローチと化け物の動きを封じる。
上空から現れたのはオートバジンだった。

バジンは椿達を守る様に立つと、その拳とガトリングでローチ達を攻撃していく

「ジジジジィィィイ！！」

断末魔をあげてローチ達は霧となって消滅していく
だがカミキリ虫の化け物は消滅しておらず、バジンに向って攻撃をしかける！

化け物は軽快な動きでバジンの攻撃をかわし、自らの武器で攻撃していく。
バジンもソレをしっかりとガードし、鉄拳で化け物を押していった。

しばらくはその攻防が続いていたが、
バジンはふいに化け物を投げ飛ばすと自分をバイクの姿、ビークルモードに変える。
そして椿達の前に移動すると、二人を乗せて走り去るのだった。

『キヒヒヒ！』

もちろんそのまま黙って見逃すわけが無い。
化け物はブーメランを構え、咲夜の首を狙う。

『キヒッ！？』

しかしそこに割り込む様に一人の少年が物陰から現れた。
化け物は新たなる標的の登場に笑いを上げた……が、立ちふさがった少年はそれに怯む事なく、ソレを取り出した。

『キヒヒヒ？』

少年…拓真は、ファイズギアを装着するとファイズフォンに変身コードを素早く入力する。

「僕の友達を傷つけた代償は…」

『5』『5』『5』

『キヒヒヒヒヒヒ！』

化け物はもう待ちきれないのか、ブーメランを放つ！
風を切り裂く音と共にブーメランは拓真に向かう。だが拓真は怯まない！

「払ってもらう。変身！」『Ｃｏｍｐｌｅｔｅ』

拓真はブーメランをかわし、フォンをバックルにはめ込む！
拓真の体を赤い光が包み、仮面ライダーファイズへと姿を変化させた

「ハァァッ！」

『ギヒッ！』

ファイズは素早く化け物に近づくと、その拳で化け物の顔を殴り飛ばす！
怯む化け物にもう一発、さらにもう一発と拳を打ち付けていく！

『ギヒヒッ！』

「フッ！」

大きく仰け反る化け物を逃がすまいと、ファイズは肩を掴んで引き寄せた。
そしてさらに、今度は胴体を殴りつけていく。

「たぁァッ！」

ファイズは後ろから戻ってきたブーメランを蹴りで弾き飛ばす。
その反動で化け物は拘束から逃れたが、ファイズは気にする事なく
攻撃をしかけていく

『ヒヒヒヒィィイ！』

「！」

化け物のタックル。ファイズはガードをしようと構えるが、それは
フェイント。
化け物はファイズの足を払い蹴り飛ばす。

「くっ！」

『キヒヒヒヒヒヒっ！』

倒れたファイズに向って、化け物はブーメランを振り下ろす。
だが、ファイズは地面を転がりそれを回避した。

化け物はファイズに再び狙いを定めるが、ファイズは素早くフォンを抜き取りコードを入力する

『Ｓｉｎｇｌｅ　Ｍｏｄｅ』

フォンを銃に変え、迫ってきた化け物に発射する。
腹部に衝撃がはしり、化け物はたまらず後退していく。

ダメージを受けているにも関わらず笑い続ける化け物に、ファイズはクラウンを重ねた。
この世界に道化師がいるのかは分からないが、この不快な笑い声を沈黙させる事が先だろう

『ＲＥＡＤＹ』

ファイズはミッションメモリをファイズポインターに装填させると、足へと装備する。

『Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ』

そしてエンターのボタンを押すと共に狙いを定めに入った。
ポインターに赤い光が充満したのを確認すると、ファイズは飛び上がって赤い光を発射する！

『キヒヒヒーッヒヒヒ！』

「！」

化け物から突如黒い霧が噴出され、その霧がローチ達になり具現化する。
ローチの群は化け物を隠すだけでなくポインターから発射された光を防ぐ盾にもなった

「くっ！」

今さらキックを中断する事はできない。
ファイズはそのままとび蹴り、クリムゾンスマッシュをローチに命中させる。

「ジィイイイイイイッッ！」

Φの紋章と共に数体のローチは消滅する。だが、肝心の化け物の姿が無い！

「くそっ…」

逃がしたか。それよりあの化け物の噴射した霧がこのローチの正体

だったとは……
いろいろ考察してみるが、その間にもファイズの周りをローチの群が取り囲んでいく。
そしてその爪を構え、今にもファイズに襲いかからんとしているではないか。
だが、ファイズに焦る様子はない。
冷静に、淡々とウォッチからメモリを抜き取ると、それを装填する。
『Ｃｏｍｐｌｅｔｅ』
ファイズの胸部が展開し、色が黒へと変わる。
そしてウォッチを起動させ、超高速の世界へと突き進む！
『Ｓｔａｒｔ　Ｕｐ』
ファイズはローチの攻撃から一瞬で抜け出すと、ファイズショットにメモリを装填し再びエンターのボタンを押した。

『Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ』

そのまま無抵抗に近いローチ達に無数の連撃をくらわせる！

『Ｔｉｍｅ　Ｏｕｔ』

十秒後、全てのローチにΦのマークが出現し、消滅した。

「……っぅ」

拓真は変身を解いて息を吐いた。
すでにもう、街にもローチの群が現れたと聞く。
そしてその発生源が分かったのだ。

いろいろ情報が多い、ここは一旦皆と合流すべきだろう。

拓真は頷くと、走り出すのだった

第８６話　？狂気道化のファーストゲーム？（後書き）

次回は…もしかしたら来週忙しくて更新が少なくなりそうなんで二回更新するかも…？

では次もよろしく！

第87話　？笑ウ悪意ト道化？（前書き）

今日は二話更新です、理由は次の話で

ではどうぞ！

第87話　？笑ウ悪意ト道化？

「ハァァッ！！」

街に徘徊するローチ達を龍騎は豪快に切り裂いていく！
ドラグセイバーで素早く動きまわるその様は、まさに舞を踊っているかのようだ。

「ジィイイイッ！」

「ハァッ！」

振り下ろす剣をローチはガードする。
しかし腹部に蹴りを入れられ再び体勢を崩したところに斬撃がおそいかかった！

「フッ！タァアアアッ！」

ドラグセイバーが赤く輝き、炎がまとわり付く。

そしてそのまま龍騎はローチ達をなぎ払う、龍舞斬！

黒い霧になっていくローチ達。龍騎と少し離れた所で戦っている電王も必殺技をローチに決めていく

「……ダイナミック・チョップ！」

力強い電王の一撃がローチを無へと返す。
龍騎と電王は混乱している街の人たちを安全な所へ避難させると、その場に座り込んだ。

「…？　どうしたんだ、キンタロス」

龍騎は完全に力を抜いていたが電王は何故かアックスを構えたままだった。
それに疑問をもった龍騎が問いかける。

「なんか、変な感じがするんや…」

「え？」

電王は辺りを見回す。
龍騎も同じようにするが特におかしいところはない、だが相変わらず電王は意識を集中させていた

「・・・」

そして電王は斧を構えて、誰もいない方向へと体を向けた。
龍騎は不思議そうにその方向に視線を送る。特に何も無いように見えるが…

「何モンや…でてこい」

「!?」

すこしだけ沈黙が起こり、すぐに拍手の音が聞こえてきた。
同時に響く、深いな笑い声。

「くくっ…ヒャハハハ！なかなかやりますね」

「！」

誰もいないと思っていたが、物影からピエロの格好をした男が現れる。
瞬時に整理される情報、ここでピエロの格好をしているヤツと言えば…

「道化師ッ！！」

「そのとぉーり！！」

道化師は龍騎を指さすと楽しそうに踊りだす。
何なんだコイツ、気味が悪い。
龍騎は得体の知れない恐怖を覚える。

「あなた達、見ない顔ですね…一体何モノかなぁ？気になるなー？」

道化師はオーバーな動きでアクションをとる。
電王と龍騎はそれぞれ武器を構えゆっくりと道化師との距離をつめていく。
完全に敵である事は間違いない、一気に決着を決めたいが…

「んー、ワタシも貴方たちと遊びたいんだけどなー…」

残念！そう言って道化師はポケットから何かを取り出す。

「ごめんね！ジョーカーを回収しないとイケナイカラ！
君たちの相手はこの子達がしてあげるよ！よかったね！」

道化師が取り出したのは小さなキノコだった。
道化師はソレを勢い良く空へと投げる！

すると、キノコは巨大化し、人の形へと変わった。
驚く龍騎と電王。キノコが化け物になったのもそうだが…なにより

『ヒャハハハハハ！』

『キャハハハハーッ！』

「こいつ等！」

聞き覚えのある不快な笑い声とその姿。

間違いない、ファイズの時に戦ったクラウンオルフェノク！

道化師は、クラウン達が現れたのを確認すると甲高い笑い声をあげて走り去っていった。

「待て！」

追おうとする二人を邪魔する為、クラウン達はナイフを振り回す。

「ムンッッ！！」

電王はナイフを体で受け止める。
その堅い装甲は、ナイフをへし折るだけでなくクラウンの手に衝撃を走らせた！

痛がるクラウンを電王は吹き飛ばすと、同時に斧を投げる！

『ヒャヤアハハハアハアアアア！！』

斧はクラウンに命中し、そのまま爆発させるのだった。

「オッラアアアアッ！」

『ギャハバババッ！！』

龍騎の蹴りがクラウンの腹部にめり込む。
苦しそうにしながらも笑うクラウン、まさにあの時と同じだった。

何故、違う世界にいた筈の道化師がここにいるのかは分からない。
だが、コイツから情報を聞き出すのは不可能のようだ。
龍騎は話しが通じないと悟ると、クラウンを殴り飛ばしカードを発動させる。

『ファイナルベント』

「フッ！ハァァァアアアッ……」

意識を集中させ、そのままドラグレッダーと共に空へ舞い上がる！
ドラグレッダーの炎を纏い、龍騎はそのままクラウン目掛けとび蹴りを食らわせた！！

『ギャアァァハハハハッァァァァ！』

クラウンは爆死する。二人は急いで道化師の後を追うが、全く見当たらない。
それだけでなく街のあちらこちらにローチが見えた。

「今は追ってる場合じゃないみたいだな」

「ああ、そうやな。アイツが原因って事は分かっとるのに…っ」

少し悔しそうに、彼らはローチ達に向かって行くのだった。

「うわっ！」

「クロハ！危ない、気をつけて！」

レンゲルの背後にいるローチを、ギャレンが打ち抜く

「大丈夫！？」

「うん、助かったよダイアナ」

「べべべべ別にアンタの為なんかじゃ……」

「ないんだからねッッ！ってか！」

ディケイドは半ばうんざりしながらローチを切り裂いていく。
動揺しながら弁解するギャレンを無視して、ディケイドは戦いを続ける。

「くそっ！いつの間にこんなッ！」

ディケイド、ギャレン、レンゲルの3人は、街中に徘徊するローチ達にてこずっていた。
このローチ達、気のせいか時間がたつに連れて増えていくような感じがする。

…そう思うが、根拠のない話しだ。とにかくローチ達をはやく倒さなければッ！

「くっ！きりが無い。このまま増え続けられたら！」

「馬鹿！変な事考えてないで集中しなさい！」

3人はローチの群に囲まれ、少しづつ離れ離れになっていく。

「うわっ！」

戦いに集中していたため、
ディケイドは今自分が立っている所が崖の近くという事に気づかなかった。
ローチの攻撃を反射的にかわしてしまい、バランスを崩す！

「しまっ――ッ！」

もう遅い。ディケイドは崖から下に転落していく！

「司君！」

「大丈夫！あそこはそんなに高い崖じゃないからッ！」

しかも変身しているのだ、死ぬことはないだろう。

助けに…行くことは難しい。このローチ達をなんとかしなければ…

「ダイアナ！」

「くっ…」

ギャレンとレンゲルは少し早急かと思いつつも、状況を打破するカードを使うのだった。

『アブソーブ・クイーン』『アブソーブ・クイーン』

二人は自分の腕に装備されているラウズアブソーバを起動させる。
そしてさらに一枚のカードをラウズさせた

『『フュージョン・ジャック！』』

象と孔雀を模った紋章が二人の体に現れ、金色が鎧に追加されていく。
それだけでなく、二人の武器に変化が訪れる。

ギャレンラウザーには刃が、レンゲルラウザーには鉄球がそれぞれ追加される。

「ウオォオオオオオオオッッ！！！」

レンゲルが周りのローチをまとめてぶっ飛ばす！

ジャックの力を借りる。

文字通りジャックフォームに変わった二人はローチ達を全滅させる為、その武器をふるうのだった。

第87話　？笑ウ悪意ト道化？（後書き）

レンゲルのジャックって象なんですよね。
つまりあの伝説のシーンで仮にレンゲルがジャックになっていたとしても…

では次もよろしく！

第８８話　？世界の奪取者・ディエンド？（前書き）

二話更新の理由は、まあ普通に２～３日くらい更新できないと思うので
今日やっとこうかなと。キリも良さそうなんでね

ではどうぞ！

第８８話　？世界の奪取者・ディエンド？

「いつつ……ぅッ」

体中が痛い。ディケイドはよろつきながら立ち上がった。
いくら低いとはいえ、崖から落ちたとなれば無事ではすまない。
まあどこも折れてたりしていない様なので、それは安心する。

「とり合えず…戻るか…っ」

まだローチはあちこちにいるだろう。
全く、クラウン、シアゴースト達といい最近こんなのが多いな……
全ての人を守りきる事は難しいだろう。
その事に少しイラつきを感じ、ディケイドは歩き出した。

「みーつけた」

「は？」

思わず足を止める。
岩の上に人が座っていた、そいつに話しかけられたのだ。

「初めまして…じゃないんだっけ？フフッ」

歳は…まあ俺と同じか少し上くらいだろうか？
男は立ち上がると、司を見下す様に視線を送った。

「・・・？」

なんだか偉そうだな…まあいいか。

「今は危ないですよ！早く避難してください！」

「ああ、もちろん分かっているとも」

「は？」

あれ？そう言えばコイツどこかで…
それにさっき確か、初めましてじゃない…って

「・・・」

俺は記憶の糸をたどる。ええと、たしか…

「あ！！！」

思い出した！あの時！あの時だ！

「あはは、思い出してくれたのかな？そうさ司…だったね」

そう言って男は何かを投げてきた。
俺はそれを受け取るとなんなのかを確かめる

「これっ！」

それは赤い体操着入れ！間違いない！コイツ！

「ぼくは海東大輝、トレジャーハンターさ。
まあでも…そのお宝は返すよ、だから――っ」

『カメンライド――』

「！」

海東はどこからか銃を取り出し、そこへ一枚のカードを装填した。
そして耳に聞こえてくる電子音。

俺のディケイドライバーと同じ…だと！？

「ぼくのお宝も…返してもらうよ！変身！」

『ディエンド！』

海東が銃の引き金を引く。
すると、青いカードの様なモノが発射される。
同時に海東の周りにはホログラムのビジョンが現れ、不規則な動きをした後カードと共に収束し装着された。

ディエンド!?

「お前…いや!それより返すって…」

「決まってるだろう?ソレは元々ぼくの物だったんだ。
あの時、君にぶつからなければ…」

ディエンドは銃を俺に向ける!

「あんなベタな展開で…ああ、トレジャーハンター失格だよ」

まあでも…と、ディエンドは笑う。

「拾った物をどうしようと勝手と言えばそうなる。
と言う訳で…」

「！！」

「試させてもらうよッ！ディケイド！！」

「くっ！」

『アタックライド』『アタックライド』

『『ブラスト！！』』

二人の放つマゼンダとシアン色の銃弾が交差し、互いにぶつかり合う！
だがやはりその形状が物語るのか、ディエンドの銃弾の量がディケイドのモノよりも多く
シアンの銃弾がディケイドにヒットする。

「うわっ！」

怯むディケイドにディエンドは蹴りを浴びせる。

避けようとするが、その先には銃が待っており弾かれてしまう。
案外接近戦もできるようだ。

だがディケイドもやられてばかりではない！
攻撃の隙を見計らい、ディエンドに向ってライドブッカーソードを振り下ろす。

「くっ！」

今度はこっちの方が有利らしい。
銃で受け止めるディエンドだが、横ががら空きだ。
ディケイドは回し蹴りをディエンドに食らわせると、カードをライドさせた。

「変身！」『カメンライド』『クウガ！』

ディケイドの姿がクウガに変わる。
銃を構えなおそうとするディエンドの手を弾くと、拳と蹴りでディエンドを押していく。

なんとか銃を奪いさえすれば、ペガサスで終わらせることができるのだが…ッ！

「フッ…どうやら少しはやるようだね…」

『カメンライド』

ディエンドもまたカードを装填し、引き金をひく！

『カイザ！』『ガイ！』

「なっ！」

ディエンドの銃からビジョンが出現し、形を作る。

そこに現れたのは、仮面ライダーカイザと仮面ライダーガイ！

どちらもこの世界のライダーではないはずだが…

「そうか…そっちは召喚…って訳か！」

「正解！さあ、行け！」

カイザとガイはその命令に従い、ディケイドに攻撃をしかけていく。
一人ならまだしも二人がかりは流石にキツイ。

ディケイドの装甲から火花が散る！
攻撃を受け、さらにディエンドの銃が火を噴き襲い掛かる！

「クソッ！」『カメンライド・リュウキ！』

ディケイドの姿が龍騎に変わる。
そのままカイザ達の攻撃をかわし、素早くカードをライドさせた

『アタックライド』『ストライクベント！』

ディケイドの手にドラグクローが装着される。
襲ってきたガイを殴り飛ばすと、金色のカードをライドさせた！

『ファイナルアタックライド・リュリュリュリュウキ！』

「はぁぁぁッツ…」

ドラグクローの口元が赤く輝く！

「ヤァアアアアアアアッツ！」

ディエンドは舌打ちをすると、ガイにとび蹴りをくらわせた。
大きく吹き飛ぶガイ。そのおかげで、ディケイドが放った炎の弾丸を回避できたのだった。

しかしその炎弾が着弾した際に巻き起こる煙が、ディケイド達を巻き込む！

「ちっ、コレが目的だったと言う事かな？」

煙でディケイドの姿は完全に隠れていた。
これに乗じて奇襲をしかけるつもりなのだろう。
ディエンドは神経を集中させる、なるべく背後が空かない様に移動して銃を構えた。

「・・・」

実は、見えないのはディケイドも同じだった。
だがディケイドはソレを気にする事もなく。二枚のカードを取り出す。

「……はっ」

それはイリュージョンとキバのカード。
ディケイドは小さく笑い、それを発動させたのだった。

「ウオォオオオオオオ！」

「……っ！」

煙の中、大声が聞こえる。同時に現れるドッガフォームのキバ！
煙は計算ではなかったのか？

ならば話しは早い。ディエンドはもちろんその方向に銃を構え同時に発砲した。
しかしドッガの鎧はソレを弾き、そのままコチラに向ってくる。

「成る程、作戦は無く真っ向からと言う訳か…」

でも…

「残念。ぼくには効かない、あきらめたまえ」

『ファイナルアタッククライド・クロスアタック！』

カイザのブレイガンから金色のポインターが発射される。
怯まない事に慢心していたのか、ディケイドはそれを受けてしまう！
網目の様に光は広がり、完全にディケイドの動きを拘束した。

そしてその背後にはガイが契約モンスター、メタルゲラスと共に立っていた。
ガイはそのままメタルゲラスに飛び乗ると突進攻撃ヘビープレッシャーを発動する！

カイザもまた、ブレイガンを構えた突進ゼノクラッシュを発動し挟み撃ちを仕掛けた！
ディケイドは逃げ様とするが、拘束が外せない！

「――――――ッ！！」

２つの突進がディケイドに命中し、ディケイドを吹き飛ばす！

ディケイドはそのまま動かなくなってしまった。
どうやらこの戦いは、ディエンドの勝利のようだ。

「やれやれ、正直ガッカリかな。
もっとぼくを楽しませてくれると思っていただけに残念だよ」

ディエンドは期待はずれのディケイドを見る。

転がるディケイド…

そしてデータの残骸となるディケイド！

「なっ！」

やられたッ！これは…イリュージョンか！

その時、頭部に何かを突きつけられる感覚を覚える。
振り向くと、ディケイドがライドブッカーガンを構えて立っていた。

防御力を込めていたとは言え、
もしもう少しディエンドが銃で分身を撃っていたらアウトだったろう

「ッ！」

ディエンドもまた振り返り銃を構える。交差する二つの銃…

「どうだ？少しは期待にそえたかな？」

「ああ…前言を撤回するよ」

二人は同時にバックステップで距離をとる。

「まあ、合格点をあげてもいいかな。
もういいや、それは君に預けておくことにするよ。
感謝したまえ」

「…どうも」

「だが勘違いしないでくれたまえよ！
ぼくはトレジャーハンター、そのドライバーはいずれ…
このお宝パイレーツストロングツイスタースターズが頂こう」

「……え？」

「いや、だからいずれそれは頂くよって…」

「あ、いや違う違う、そのもうちょっと前、何ていった？」

「いや…だから！いずれそのドライバーは
お宝パイレーツストロングツイスタースターズが頂くよって……」

「……ん？」

「え？」

「今…ちょ、何て言ったの？」

「いや、だーかーら！そのドライバーは
お宝パイレーツストロングツイスターズが…！」

「え……あ、あの…お宝…何？」

「お宝パイレーツストロングツイスターズ！！」

「お…おっぱいって……引くわ」

「違うよ！やめてよ！お宝！」

「お宝…？」

「そう！お宝！次はパイレーツ！その次はストロング！」

「お宝…パイレーツ、ストロング…」

「そう！やればできるじゃないか！
その後はツイスター！最後はスターズ！」

「ツイスターズ！」

「よくできましたッ！さあ繋げてみたまえ！」

「え……あ、えーと、お宝ストロングパイレーツスター…
あれ？スターツイン…？」

「違う！違う！違うよ！
お宝パイレーツストロングツイスターズ！！」

「ああ、悪い！えっと、お宝パイレーツ……
パイレーツ…えと…」

「ス！ス！ス！」

「スター！」

「あああああああああ！！いや、だから――」

「しつけぇえええええええええええええ！！」

緑色の何かが飛んできてディエンドの頭にヒットする。

「いてっ！」

「！」

ディエンドは投げられた…メダルを投げた本人に投げ返す。

「何をするんだ！」

「それはこっちの台詞だ！そんな事してないでさっさと帰るぞ！」

少年、ディスは嫌がるディエンドを掴んで引きずっていく。

「悪かったな、司……だったか。ウチのリーダーが迷惑をかけた」

ディスは少しやる気のなさそうな眼をしていたが、それに反して深く頭を下げる。

「ああ…まあ、別に…」

「お詫びと言ってはなんだが、少しだけ情報を」

「情報？」

「ああ、どうやら今街にいるローチは『ジョーカー』と言う化け物から
生まれた存在の様だ。
ローチを撃退するよりジョーカーを見つけ出して殺せ。
そうすればローチは全て死ぬ」

「成る程…」

この世界でのジョーカーの役割と言う事なのだろう

「まあ、これくらいしか言える事はない。
せいぜい頑張ってくれ、またいずれ会うかもしれないからな」

「？」

そう言って二人は司の前から姿を消した。

「ディエンド、アイツは一体……」

また疑問が増えてしまった。

一体何モノなんだ……

「まあ、覚えておくぜ。
お宝パイレーツツイスターストロングブラスター！」

司はジョーカーを探すため、走り出すのだった。
名前を間違っている事には気がつかないまま…

第８８話　？世界の奪取者・ディエンド？（後書き）

ディエンドの召喚したライダーはエネルギーの塊です。
イリュージョンみたいなものかな

クロスアタックはＦＡＲ扱いで、一世界一度しか使用できません。
使用すると召喚したライダーは消滅します

こんなところかな今は？
では次もよろしく！

第８９話　？亀裂（ライアー）？（前書き）

はい、と言う訳でね
また今日からちょいちょいで更新…かなｗ？

ではどうぞ！

第89話　？亀裂（ライアー）？

一方学校では、傷を負った咲夜と椿が無事に帰還して玄関に着いたところだった。
我夢とアキラが椿達をいち早く見つけて駆け寄る。

咲夜の背中から血が出ているではないか、それを見て二人の表情が一気に変わった

「大丈夫ですか！先輩！」

「あ…ああ、大丈夫だ」

泣きそうになるアキラをなだめると、咲夜は優しく微笑む。
我夢の能力で傷は癒えていくが、それでもちゃんと手当てをした方がいいだろう。

「アキラさん。先輩を保健室に連れて行ってあげてください。
ここは場所が場所だから…手当てもお願いします」

「う、うん！」

咲夜はアキラに支えられて保健室へ向う。
我夢もまた心配そうに椿に手を差しだした。ガタガタと震える椿に
違和感と、緊張を覚えながら…

「わ、悪い……へ、へへっ、結構かっこ悪いな、俺」

「いえっ、そんな事…！」

「いいんだ…」

もっと、自分はうまくできると思ってた。
すぐにライダーになってハイ、終了。
その程度にしか考えてなかった。

椿は消えてしまいそうな程、小さな声でそう呟いた。

「……っ」

我夢はなんて声をかけたらいいのか迷う。だから…

「何があっても…椿先輩は椿先輩です」

「……！」

自分の思いだけを口にして椿の手を引き、起こしたのだった。

「どうですか…？」

咲夜は少し不安そうに葵に問いかける。
だが葵はニッコリと笑って背中を撫でた、その笑顔に咲夜の緊張も緩む。

「うん、心配しないで。大丈夫、傷も浅いし痕にはならないから」

「そうですか…」

咲夜はホッと息をつく。
彼女とて女性なのだ、そういって心配もあっただろう

「良かったですね」

「あはは、ありがとう」

アキラと咲夜は安心したのか笑い出す。
しかしその時、二人の笑い声に重なるように二つの笑い声が聞こえた。

「！」

二人がその方向を見る。
そこにはゼノンとフルーラがいた。
相変わらずヘラヘラと笑っている二人に少し違和感を覚えながらも、
今は気にしないでおこう
二人は木の上に座っており、それに気づいた葵は窓をあけた。

「どうしたの？」

葵の問いに二人は笑って答えた。

「傷が浅い？ハハッ、君たちは勘違いしているよ」

「え…」

「実はね――」

あまりにもあっさり告げられたソレ。３人は思わず固まってしまうのだった。

「おう…もう、大丈夫なのか…」

「…あ、ああ」

保健室から出てきた咲夜を椿と我夢は出迎えた。
怪我はもういいのだが、何故か手当てを行ったアキラと葵の表情は

暗い

「……？」

不思議に思う我夢をよそに、咲夜はもう大丈夫と笑う。

「椿…その……」

咲夜はすこし悲しげな表情でうつむく。
流石の椿もふざける気にすらなれない、少しの沈黙が続いた後咲夜が口を開いた。

「すまない…」

「な…なんでお前が謝るんだよ」

悪いのは…俺なんだから。
そう呟く椿を、咲夜は悲しげな表情で見詰める。
何かを言いたい様な、そんな表情。
だが何も言わない。いや、言えないのだろうか？

咲夜も、椿も泣きそうな顔。
我夢とアキラはなんとも言えぬ喪失感を覚える。

あれだけ普段馬鹿な事ではしゃいでいる二人が、今は会話すら交わそうとしないのだ…

洒落に、冗談にならない恐怖。初めて覚える絶対的力の差
今まで化け物や人間を殺す存在なんてテレビでしか見た事がなかった。
最初の世界でワームに出会ったとき、良太郎に助けられたことで錯覚してしまった。
やはり、自分は大丈夫なのだと――ッ

キングと目を合わせた時、本能がキングを拒絶した。
完全に戦意を喪失してしまった……

相手は人間ではない、化け物だ

「・・・」

「・・・っ」

だが今この状況もかなりキツイものがある
椿は気まずそうに口を開いた。

「お、俺…キングと戦ってみようかな…」

「先輩!?」

冗談とかそうでないとか、真偽は置いておくとして椿はその言葉を口にする。
彼としては少しでもこの空気をどうにかしたいと思っての行動だった。

だが、以外にもソレを真っ向から否定する者が現れる。

「っ！？」

椿の胸ぐらがつかまれ、同時に投げ飛ばされる。
壁に叩きつけたれた椿は、苦しそうな声をあげて咳き込んだ。

「ゲホッ！ゲホッッ！！な、何すんだよ！」

「・・・」

椿を投げ飛ばしたのは、咲夜だった…

「咲夜先輩！？」

我夢の驚く目を無視して、咲夜はいまだ倒れている椿を見下ろすように立つ。
髪で隠れている為に表情は読みとれないが、あまりいい雰囲気ではないという事が嫌でも伝わってきた。

そして、ポツリと咲夜の口から言葉が漏れる。

「――――か？」

「ゲホッ！！は…はぁ！？」

「また……逃げるのか？」

「ッッ！？」

咲夜は椿が立ち上がるのを待たずして、再びその言葉を口にした。
また、逃げるのか？どういう意味なのか我夢たちにはイマイチ分からない言葉だったが、椿にとっては深く突き刺さる内容だったらしい。

咲夜は申し訳ないと、悲しげな表情だったのに…
一気に怒りの表情に変わる

「……どう言う、事なんだ？」

「決まっている。もう一回いってやろうか？」

「あ…？」

「そんな事を言っておいて、また…どうせ、逃げるんだろ…？
お前はいつもそうだ。
口ではでかい事を言っておいて、いつも逃げる。戦おうとしない」

お前は！！

咲夜は椿の目をみないまま声を張り上げた。

「ずっと逃げてばかりの臆病者だッ！！」

「！！」

椿はグッと歯を食いしばる。何か思う節があるのだろうか？
しかしそんな彼を気にする事なく咲夜は言葉を続ける。
感情を爆発させる様に流れていく言葉…

「ああそうさ！戦いたくねぇよッッ！怖いさ！
あんな化け物と戦って勝てる自信なんてねぇんだよっっ！」

椿もまた声を荒げる。だが、咲夜は怯む素振りすら見せない。

「いい加減にしろッ！甘えるなよ椿！
皆、ちゃんと変身しているんだよ！
なのにお前はうじうじ、うじうじッ！情けない！」

「くっ！」

「咲夜先輩！」

我夢が止めに入ろうとするがそれをアキラと葵に止められる。

「っ！？」

驚く我夢、二人が泣きそうな表情をしているからだ。
特にアキラは小さく震えている。

それが気になったが…今はなにより椿と咲夜が……

「しょうがねぇだろうが！！負けたら死ぬんだぞ！
そんなのこえーに決まってるじゃねぇか！お前なんなんだよ！」

「だから戦わないのか？負ける？死ぬのが怖い？
戦っても無いのによく言えるな！

結局お前は戦う前から負けると決め付けているだけだ！
臆病者のする事だな！」

お似合いだ！一生そうやって怯えていろ！
咲夜は椿を突き飛ばす。

「っっ！何だよ何なんだよ！？はっ、お前はいいよな別に…
アイツと戦わなくていいんだから！
何とでも言えるよな！」

「ああ、そうさ。ワタシはブレイドになる必要なんて無いからな！
だが、お前は違う！いつまでもいい訳並べてないでッ！
キングを倒す為に稽古でもなんでもしろ！

今のお前は――ッ」

咲夜は椿の目をまっすぐ見て言い放つ

「足手まといのお荷物なんだよ！！」

「ッッ！！テメェぇぇぇ！！！」

「先輩っ！」

椿は咲夜の襟元を掴む。
にらみ合う二人、だが咲夜は尚も続ける。
それはもはや椿を煽るだけのようにも見える程だ

「殴るのか？臆病なだけでなく器まで小さいなお前は。最低の人間だ！」

「くっ……！！」

椿は悔しそうに歯を食いしばりながらも、咲夜を離し背を向ける

「言いすぎです！咲夜先輩！椿先輩だって――」

「もういいんだよ我夢！コイツには…っ」

椿は咲夜たちに背を向けたまま歩き出す。
我夢は困ったように椿と咲夜を見た後、椿の方へと走っていった。

「・・・」

それを咲夜は何も言わずに見ていた。

何も……言わずに

「あの…きっと咲夜先輩も悪気があって言ったわけじゃ…」

コインを弾きながら我夢は笑う。

表が出ようが裏が出ようがいい方向になるように彼は願った。

いつもケンカをしている二人を見てきた、だが今回のケンカは完全にいつものような…おふざけではない。
仲良くして欲しいと願うのに、どうしてこうなってしまうのか…

「……あの女はもうどうでもいい」

「・・・」

椿は悔しそうに石を蹴る。
分かっている、でも怖いモノは怖いんだよ！

うずまく心の中、感情の奔流は椿を飲み込んでいく。
理解はしている、でも怖い。

なのにアイツは……

「あああ！クソッ！」

悔しい、むしゃくしゃする！
正論だよアイツは！だから何だってんだ！？
人間の心は正論じゃ語れないんだよ！あああ！うぜえええ！

「・・・」

我夢はため息をつく。
何度もコインは裏と表を指し示すが、何も考えられない。
一体どうすればいいんだろうか？
何かできる事はないのか…？

「…はぁ」

正直全く思いつかない。
我夢は自分の無力さにため息をつく。

何故か、無性に嫌な予感がしているのは気のせいだろうか？

第８９話　？亀裂（ライアー）？（後書き）

噂ではクラヒフォーゼには昭和ライダーがでるみたいですね
これはちょっとＲＸでぶっちぎらさせて頂きましょうかね

では次もよろしく！

第９０話　？自己満足のブラックゲーム？（前書き）

始めに補足を…

この世界ではカリスもターンアップです

第９０話　？自己満足のブラックゲーム？

「・・・っ！」

「お前！」

ダイアナとクロハはバックルを構える。
前から歩いてきたモノは、うるさい程の笑い声をあげていた。

何故かとても楽しそうなそいつは、二人を確認すると地面に倒れ笑い転げる。
不快、その一言に尽きる。

狂ったように笑い続けるピエロの様な男、ダイアナとクロハは得たいの知れぬ恐怖を覚える。
こいつは普通じゃない、体が、直感がそう告げる！

逃げたい衝動に駆られたが、そいつの後ろを子供のようについて来た化け物を見るかぎり敵なのだろう

「ダイアナ…危なくなったらすぐに逃げるよ」

「ええ、わかってるわよ」

『『ターン・アップ！』』

エレメントが現れ二人を通過する。
ギャレンとレンゲルに変身した二人はそれぞれのラウザーを構えて走り出した。

「ストォオオオップ！」

「「！」」

笑い転げていた男が声をあげる。
思わず立ち止まる二人に、男は耳障りな拍手を贈った。
賞賛でもないその拍手。意味なき行動は二人の不快感を加速させる

「こんにちは、ワタシは道化師！あなた達はギャレンとレンゲルで

すね！アハハ！」

そう言って道化師は帽子からソレを取り出して二人に見せ付けた。
まるで子供が友達に自慢の玩具を見せびらかす様な素振り、しかし
二人はソレを見ると一気に雰囲気を変える！

「それはっ！」

「ッ！！」

驚く二人が面白いのか、道化師はケラケラと笑う。
道化師が取り出したのはバックルだった。

それは二人と同じモノ。

つまり…

「！」

道化師はさらに一枚のカードを取り出す。
いわゆるカードスリーブに包まれたそのカード、道化師は笑い続けながらそのカードをバックルにセットしたのだった。

この世界ではバックルとカテゴリーエースのカードでライダーに変身する。
バックルはキングと契約を交わした時にキングから貰う物なのだ。
つまり、そのバックルを今道化師が持っていると言う事は……

「まさか…」

「んふ！そう、そのまさかってヤツでっすねぇ！！」

道化師はバックルを腰に装着する。
そして、そのハンドルを引いた！

「ヘンシン！！」

『ターン・アップ！』

「「！？」」

エレメントが出現し、道化師を通過する。
そしてそこに立っていたのは…

「カ……リス…？」

「なんで…？」

驚く二人に道化師は恍惚の表情を浮かべる、尤もその表情は彼らには読み取れないだろう。

仮面が隠しているのだから！

「ふふっ！ヒャハハハハハハ！」

素晴らしい！

理解できないモノを直視した人間の浮かべる顔とはなんと滑稽か。

ああ愚かで、醜く、そして美しい！道化師は満足だった。

だが、まだだ。もっと楽しませてもらわないと。

「契約…したのか？」

道化師はハートのライダー。カリスへと姿を変えていた。

パラドキサアンデッド達、ハートのスートに認められし者のみが変身できるカリス！

確かにハートのアンデッドは気まぐれな者が多い。

だがいくらそうだと言ってもこんな怪しいヤツをマスターとして認めるだろうか？

報告まで忘れるのだろうか？

その答えはカリス本人が告げる

「はぁ？けいやく？ブプッ！する訳ないじゃないの！ホホホホホ！」

じゃあ何故？
カリスはどうして存在しているのだろうか！？

そんな二人の様子を読み取り、カリスは適当にカードを取り出して
ソレを二人に見せ付ける。

「あああ、契約はしてないけどカードは貰ってますよ。ホレ！」

「！！」

「なっ…」

カリスが取り出したカードは黒いカードスリーブに包まれていた。
二人はすぐに理解する。あのカードスリーブが原因なのだと！

「それは！？」

「ヒャハハ！どうです？ワタシが作ったんですよ？
お前らゴミみたいにチマチマ契約なんて馬鹿な事しないでさ！
コレさえ使えばアンデッド共を楽に支配できんですよ！
ヒャハハハハハハハハッッ！」

そう言ってカリスはカードを地面にばら撒く。
黒いカードスリーブにハートのアンデッド達は包まれていたのだ。

カリスは笑いながらカードを踏みつけると、耳障りな笑い声をあげる。

「ワタシは道化！玩具はたーくさん持っている！
素晴らしい玩具を作る天才なんですよ！」

『リモート』

「ハハハ…は？」

カリスはいきなり襲い掛かってきた
タランチュラアンデッドとギラファアンデッドの攻撃をヘラヘラ笑いながらかわす。

「おわぁああ！危ない！危ない！ヒャハハハ！」

『貴様…我々をなめるなよ…』

『今すぐハート達を解放してもらおうか』

ギラファとタランチュラはカリスを睨みつける。
しかしカリスは相変わらずふざけた態度で二体を小馬鹿にしていた、
その余裕はどこからくるのか？

「はいはい！確かにあんた等はお強いお強い！
だけどね、ワタシが何の対策もしないとお思い？」

『何ッ？』

『キヒヒヒ！』

「遊んでやれ！ジョーカー！」

カリスの合図と共にカミキリ虫の化け物、ジョーカーが動きだす。
ギラファとタランチュラに狙いを定めると、ブーメランを構えて走り出した。

『ヒヒヒヒヒ！！』

『フン！』

ギラファはジョーカが投げたブーメランを弾くためにバリアを張った。
だが、異変はその時起こった。

ジョーカーの武器がバリアに触れると、バリアはいとも簡単に割れ、ブーメランはそのままギラファに命中する。

だが、本当におかしいのはそこからだ。
単にブーメランを投げただけの攻撃、それなのにギラファのバックルが展開する！
これはアンデッドが過剰なダメージを受けた時に展開するもの。
あんな攻撃で展開するはずが無い！

『グゥウウ！貴様ァァ！何をしたァァァッ！』

だが、現にギラファは立つことすらままならず、膝をついている。
あの攻撃がそれ程の威力を持っていたと言う事なのだろうか？

「ヒャハハハ！サイッコォオオオ！！」

腹を抱えて笑うカリス。その様子にレンゲル達もわれに帰る。

「ジョーカーか！」

「ヒャハハ！その通り、この人工アンデッド・ジョーカーは
お前らアンデッドに対する切り札。

言えばアンデッドキラー！お前らの特殊能力はコイツには効かないんですよぉお！
逆にジョーカーの攻撃はアンデッドに対しては絶大な効果をもたらす！」

つまり…

「不死者共がァァ！テメェら詰んでんだよぉ！ギャハハハ！」

「くっ！」

ギャレンとレンゲルはすぐにキングをカードに戻す。
自分達ならジョーカーと戦えるはずだ。

二人はそれぞれ武器を構えてジョーカーとカリスを睨む。

「ハッ！君たちをぶっ殺して残りのアンデッドも頂きますよ。
せいぜいワタシを楽しませてくださいね？ヒャハハ！」

カリスはキノコを取り出しあたりに投げる。
次々に出現するクラウンオルフェノク達、ギャレンとレンゲルの表情が曇る。
敵の数が多いのだ、リモートで応援を呼びたいが…

『キヒヒヒヒヒヒヒ！！』

ジョーカーに一撃で倒されてしまう…

「結構…厳しい戦いになるかもね…」

「ええ。そうね…」

二人は互いに顔を見合わせる。
ずっとこの街を守ってきた。だが、もしかすると今回ばかりは…

「「ウオォオオオオオオ！」」

無数のクラウン、ジョーカー、ジョーカーが生み出すローチ。そしてカリス。

圧倒的戦力差だが、彼らは負けられない。彼らは自分達の世界を愛しているから

「無駄なんですよ。この世界は滅びる。ワタシ達の玩具になるんですよ！ヒャハハハ！」

第９０話　？自己満足のブラックゲーム？（後書き）

カリスの姿はライダーって訳じゃなくてマンティスアンデッドなんですよね

まあでもこの世界ではライダーとしてお考えください

では次もよろしく！

第９１話　？芝居ト勝利？（前書き）

ライダー関係ないんですが後書きでエヴァの感想書いてますなんかそう言うのが苦手な方は注意してください

ではどうぞ！

第９１話　？芝居ト勝利？

レンゲルはラウザーを振り回しクラウンを弾き飛ばす。
さらに豪快な蹴りでローチ達を押し出していき、そのままジョーカに攻撃をしかけた。
まずやはり狙うのはジョーカーだろう、この街に徘徊しているローチを消滅させなければ希望はない。

『キヒヒヒ！』

しかし黙ってやられるわけもない。
ジョーカはバック転でレンゲルとの距離を離す。だが、ここまでは予測できた。
軌道を読み取り、ギャレンは銃でジョーカに狙いを定める！

『キャハハハ！』

『ジジジジジ！』

「くっ！」

ジョーカーを庇うようにクラウンとローチが立ちふさがる。
構わず打ち抜くが、ジョーカーには届かない！

「背中ががら空きですよ。お嬢さん？」

「なっ！グッ！」

背中に痛みを感じて振り返る、そこにはカリスがいた。
カリスアローで切られたと言う事だろう。
ギャレンは舌打ちをしてカリスとの距離を空ける為、後ろへ跳んだ。

「甘い！」

『バイオ』

「え！？」

カリスアローからバラの蔓が発射され、ギャレンに絡みつく。

そのまま引き戻されるとカリスの蹴りが待っていた。

「ぐっ！」

「ヒャハハハハ！」

苦痛の声がカリスにとっては最高のＢＧＭらしい。
レンゲルは急いで助けようとカリスの元に向うが、こちらもクラウンやローチに阻まれてしまう。

さらに襲い掛かるジョーカの攻撃。

「クソ！」

『ブリザード』

レンゲルが放つ冷気にクラウンやローチは抵抗できず、氷の檻へと閉じ込められる。
それを次々に砕いていくが、ジョーカだけはそうもいかなかった。

素早いフットワークで冷気をかわし、レンゲルに攻撃をしかけていく。
レンゲルもそれを受け流すが、ジョーカが召喚するローチにいつの間にか囲まれ、反撃を許してしまう！

「ヒャハハ！死ね！死ね死ね！」

『チョップ』

カリスはその手を振り上げギャレンの脳天を狙う。
ギャレンはいまだに蔓が絡み付いており避ける事ができない！

「そう簡単にやられるもんですか！」

『バレット』『ラピッド』『ファイア』

【バーニングショット】

ギャレンの放つ無数の炎弾がカリスの体にヒットする。
コレにはまいったのか、カリスは小さく呻くとバイオを解除しギャレンから離れた。
煙が上がる腹部を押さえてカリスはギャレンを睨みつける。
激しい憎悪のオーラが感じ取れたが、ギャレンは冷めた目でソレを見返す。

「あああ！クソッ！ガキがぁっぁぁ！」

「ふん、それが本性かしら？」

『アブソーブ・クイーン』

ギャレンはラウズアブソーバーを起動させる。
そして、ジャックのカードを発動させた！

『フージョン・ジャック！』

ギャレンの体が金色に包まれ、ジャックフォームへと変身を遂げた。
カリスはイライラを隠すようすもなく、地団太を踏んでクラウンオルフェノクを盾にする

「甘い！」

『アッパー』

ギャレンは飛翔し、カリスに狙いを定める

「くっ！」

カリスは素早く弓で何かを発射し、離れたところで交戦していたレンゲルに何かを当てる。

若干それが気になったが、ギャレンの攻撃を避ける手立てはない。

ギャレンはそれを確信し、勢いよく拳を突き出した！

「ヤバイ！……なーんてねっ！」

「え？」

『シャッフル』

突如カリスの体が消え、変わりにレンゲルがカリスのいた場所に現れる。

「あ…」

それに二人は気づくが、もう遅い。
ギャレンの拳はレンゲルに命中し、レンゲルは大きく吹き飛ぶ。

「ぐあぁあああああッ！」

「そんなっ！」

「ヒャハハハハ！！」

『トルネイド』『ドリル』【スピニングアタック！】

「きゃあああああああ！」

竜巻を纏ったカリスのキックがギャレンにヒットする。
同じく大きく吹き飛ぶギャレン

「あ…ぐぅ…」

ヤバイ。このままでは負けてしまう！二人に焦りが生まれる。対照的に笑い続けるカリス達。

「まてっ！」

「あん？」

その中に飛び込んでいくモノが一人！

「変身！」

ベルトが赤い旋風を巻き起こし、同時に姿が変わる！

「ハァッ！」

「！？」

カリスに向って攻撃をしかけたのはライダー。
だがカリスには見覚えがない、アンデッドを使って戦うのはこいつ等だけのはずだ。

と言う事は…

（前のヤツらと何か関係があるのか…？チッ、ややこしい！）

「オラッ！」

「グゥ！」

ライダーの拳がカリスの顔面をかする。

「お前が道化師かっ！？」

「だったらどうなるのかなぁあああ？」

「お前のせいで！どれだけの人が悲しんだのか…分かってんのかよッ！」

ライダーの拳がカリスを完全に捉えた！
頬に走る衝撃がカリスのイライラを加速させていく！

カリスはその不快な状況を打破するためにクラウンをライダーに向わせた。
数さえあればコイツを取り押さえ――

「超変身！」

「は？」

ライダー。クウガは、ドラゴンフォームへと姿を変える。
向ってくるクラウン達をひとっ飛びでかわすと、レンゲルの所まで一気に駆け抜ける。

「大丈夫！？」

「う…うん！」

「ええ、何とかね」

「よかった。じゃあ悪いけどちょっとコレ借りるよ」

そう言ってクウガはレンゲルラウザーを蹴り上げて片手で持つ。
するとラウザーはドラゴンロッドへ姿を変え、クウガの手に収まった。

「援護を頼む！」

「ええ！まかせて！」

「僕もまだ大丈夫！」

クウガはロッドを巧みに操り、ローチやクラウンをいなしていく。
そしてあっという間にジョーカーの前までやってきた！

ジョーカーは素早い動きでクウガを翻弄しようとするが、ドラゴンに変わったクウガにとって今のジョーカーの動きなど単調なものと同一。すぐにロッドでジョーカーを攻撃していく！

『ギッ！キヒヒヒヒヒ！』

避けようともクウガのロッドはソレを許さない。
ジョーカーに確実に与えられていくダメージ！

ローチやクラウン達はギャレンの弾丸に阻まれ、ジョーカーを援護できない！

「クソがぁあああ！調子に乗ってんじゃねぇぞォォォオオ！！」

カリスのイライラは最大点に達する。
あのライダーが何者なのかは気になるが、自らの最高傑作であるジョーカーを傷つけられるのは我慢できなかった。

カリスアローを構えてクウガの所へ走り出す。

「ウォオオオ！！」

「何ッ！？ゴワァアアアア！」

だが空中から飛んできた鉄球がカリスの体にヒットする。
巨大な衝撃がカリスの思考を停止させる。そこに再び襲い掛かる衝撃！

「ぐぅうう！」

「ハァッ！」

ジャックフォームに変わったレンゲルの鉄球がカリスを追い詰める。
カリスアローを弾き、その拳は確実にカリスを捕らえる。

「ハァアアアアアア！！」

『ギィイイイ！』

スプラッシュドラゴンがジョーカに炸裂する。
瞬時に体を反らした事で直撃を免れ、ジョーカは致命的なダメージを負う事は避けられたようだ。
だがクウガの紋章は確実にジョーカーの体にダメージを与えている証拠、

このままいけば――ッ！

「チッ！」

カリス、道化師は焦る。
このままではやられる可能性が出てきたからだ。

正直自分の戦闘力はそこまで高くない、ここでジョーカーを失うのは…

「ヒャハハハ！ショウガナイ！ショウガナイ！ジョーカー！逃げるよーん！」

『キヒヒヒ！』

屈辱ではあったがカリスは撤退の選択をする。
フロートを発動させ、空中に浮き上ると、そのまま飛んでいく

「まてっ！」

ギャレンはカリスの後を追おうとするが、ローチとクラウンに取り押さえられてしまう。

「クロハ！」

「ああ！分かってる！」

レンゲルはギャレンの周りにいるローチ達を吹き飛ばし、そこにクウガはロッドで的確にローチ達を消滅させていく！

「ジョーカーはッ！？」

「あ！あそこだよ！」

「っ！」

ジョーカーもまたカリスに捕まるためジャンプで跳ぶ。
このまま逃がすのか！？ギャレン達は歯を食いしばる。
せっかく黒幕に会えたのにっ…

しかし、その悪い予想は外れることになる。
ジョーカーとカリスの間に、何かが飛んで来たのだ。

「ウォオオオオオオッッ！！」

「「！！？？」」

カリスとジョーカーの間に押し入ってきたのは薫だった。
トライチェイサーに乗り込み、崖からウィーリーと大ジャンプでジョーカ目掛け突撃する！！

『ギビイビビウイビッ！』

「なっ！！」

トライチェイサーのタイヤはジョーカーにめり込み地面へと叩きつける！

「ちぃいいい！」

カリスは仕方なく自分だけ上空に飛翔し逃走する。
ジョーカーはトライチェイサーに弾かれ、引きづられながらカリスとの距離を離されてしまった。

「薫！」

「はいよっ！」

薫はトライチェイサーをまるで体の一部のように操り、ジョーカーに数発連撃を加えた後、クウガの所へ向う！

「はっ、どう？結構練習したんだけど」

「ああ、やっぱり凄いよ薫は」

ユウスケと薫は互いの手をガッチリと掴む。すると、薫の体が光輝き銃の姿に変わった！

クウガは瞬時にペガサスフォームへと変わると、ジョーカーの武器を貫き飛ばす！

そしてその後、再びドラゴンフォームに変わると、次々に連撃を食らわせていく！

『キヒヒヒィ！』

「フッ！」

ジョーカの振り下ろされた拳をロッドで受け流し、
回転するように蹴りとロッドの多段攻撃をしかけていく。
反撃すら許さない猛攻にジョーカーもお手上げのようだ

『ユウスケ！』

「ああ！」

クウガはジョーカーを援護するため送り込まれたローチ達を受け流すと、空中へ跳ぶ。
当然ローチ達もクウガを追うため飛翔し、追ってくる。しかしそれが狙いなのだ！
クウガはさらにもう一度ジャンプで地面との距離を離す。さらについて来るローチ

「『超変身！』」

クウガは空中でタイタンフォームへと変わる。
タイタンはドラゴンフォームのジャンプを殺し、直ぐに猛スピードで地面へと帰還する。
その下にはジョーカー！
ローチ達はクウガを追うが追いつかない！
そのままクウガは地面へと直行し、ジョーカーを押しつぶした

『ギイイイイイイイイイ！！』

流石にコレは聞いたのか、苦痛の声をあげ走り去るジョーカー。
もちろん逃がす訳もない、クウガはマイティフォームに変わると、ジョーカーに狙いを定める！

「ハァァアアアッ…！」

クウガの足に炎がまとわりつき、一歩足を踏み出す度に炎が足を包んでいく！
そのままクウガはジョーカーの脳天に蹴りをきめた。

マイティキック！

ジョーカーは笑い声とも断末魔ともとれぬ声をあげながらはるか後方へ吹き飛ぶ！

「・・・・・」

カリスは怒りから拳を強く握る。

爆発するジョーカー、そしてソレをきっかけに消滅するローチ達。

誰がどう見てもクウガ達の勝利だった。

そう、誰が見ても……

第９１話　？芝居ト勝利？（後書き）

補足として、ドラゴンの二段ジャンプはタイタンでキャンセルできます。
こんなところかな？

エヴァは昨日のので初見だったんですが、面白かったです。
若干ＬＡＳ派である私としてはどことなく複雑な気分だったんですが最後のシンジはイケメンでしたわｗｗ

てかそれよりも使徒が最高でした。僕、使徒大好きなんですよなんか不気味で喋らない敵ってけっこう惹かれます、今回の使徒って前回のリベンジ的な事してますよね。ゼルエルとか特に

まあまだまだ書けそうですが自重しときますｗ
では次もよろしく！

第９２話　？悪夢・ジョーカーウイルス？（前書き）

ん、すいません。
ちょっと次の更新はいつになるか分かりません。
できれば早くしたいんですがね

ではどうぞ！

第９２話　？悪夢・ジョーカーウイルス？

「・・・」

ガコンッ！とジュースが自販機から落ちてくる音が聞こえる。
椿はそれをとると、勢い良く飲み干した。

「ッ！！」

少し離れた所にあるゴミ箱に向って、椿は空になった缶を投げた。
だが、缶はゴミ箱にかする事すらなく転がっていく。
余計に虚しくなる……

（くそっ……）

悔しそうに頭をかくと、椿は缶を拾うために歩き出す。
転がっていく缶、そしてそれは暫くして誰かの足に当たり、動きを止めた。

「・・・」

その缶を拾い上げたのは椿では無く咲夜だった。
咲夜は何も言わずにその缶をゴミ箱へ捨てると、椿を睨みつける。
鋭い瞳はさらに鋭利さを増し、椿の心に若干の恐怖を煽らせる。

「んだよ……」

「まともに特訓もせずに…お前、何をやっている。
さっさとキングを倒す準備でもしたらどうだ?」

「・・・ッ!」

椿は何か反論をしたそうな様子だったが、それを口にする事は無かった。
それを察知してかしないでかは分からないが、咲夜は冷たく笑うとまた椿を睨みつける。

いや、睨むと言うよりは見下す…と言った方が近いだろう。
咲夜は言葉にこそ出さなかったが、完全に椿を見下していた。

まるでゴミを見るかのような眼で、椿をじっと見詰める。
それが椿にとっては大変不快であったろうに…

わざとやってるのか?椿の心にドス黒い感情が湧き上がってくる。
自分に非があるという事実がある為、強くはいえないが今目の前に

いる咲夜が鬱陶しくて堪らなかった。

「言いたいことがあるなら言えよっ！
クソッ！何なんだよお前は！！」

「……戦わないお前に価値なんて無い。
尤も、今さら価値がでる事もないだろうがな…」

つまり、椿は戦わない負け犬。

つまり、椿は戦いを放棄する臆病者。

つまり、椿は皆のお荷物！

「何なんだよッ！お前、さっきからァッッ！！」

椿はついに限界を迎える。
咲夜に掴みかかると、彼女を睨んだ。

しかし咲夜は怯む事はない。椿の手を振りほどくと、そのまま椿を投げ飛ばした

「グッ！」

「無様だなお前は、まさか私より弱いとは」

「クッソォオオオオオオ！」

悔しい、悔しい！悔しい！

そして目の前のコイツが…ッッ！

「・・・」

何故か少し汗をかいている咲夜。
それが椿の記憶を呼び起こす、道場で自分より弱いと思っていた咲夜に手も足もでず負けた

……あの時！

「どうだ？見下される気分は。
お前がブレイドになればワタシに勝てるかもな」

相変わらず咲夜は挑発的な言葉で椿を攻め立てていく。
グッと歯を食いしばる椿と息が荒い咲夜。

窓から射す夕日の光だけが二人を照らしていた。

「椿…ワタシはなぁ……」

どんどん咲夜の呼吸が荒くなっていく。
だが椿にそんな事を気にする余裕はない、咲夜が今言わんとしている事から逃げようと眼をそらすだけ。だがそんな事をしても結局耳には入ってくるのだが…

「お前……がっ…嫌い……なんだよ！」

「ッ！」

沈黙、初めて面と向かってハッキリと言われたその言葉。
椿の体から冷や汗がにじみ出てくる。

分かってたよそれくらい、俺もお前なんて嫌いだ。

そう言えばいい、だけどできなかった。
いつものおふざけでは決して無い、だからこそ無性に嫌な気分になる。

「……」

「っ？」

「……くひっ！」

「？」

「クヒヒヒヒヒヒヒ！ヒャハハハハハハハ！！アーッハハハハハ！」

カリスは空中でいきなり笑い始めた。
尤もさっきから笑っているのだが、今のこれは特に異質なモノを感じる。

圧倒的不利な状況だけでなく、ジョーカーまで倒され計画だったろうローチの繁殖を阻止されたのにもかかわらず…何故？

どうして笑う事ができるのか？普通じゃない。

「ヒャァアーッハハハハハハッッ！なーんちゃって！」

「は！？」

「ヒャハハハハ！腹が…！腹が痛いですよワタシは！ヒャハハアハ

ハハ！
　まんまと引っ掛かってんだもんなぁあああああああ！」

ま、ちょっと焦ったのは本当だけど…カリスはそう言ってクウガ達を見る。

「何っ！？どう言う事だ！」

「ヒヒヒヒヒ！！」

カリスは空中をクルクルと旋廻しながら尚も笑い続ける。
そしてその笑い声に重なる黒い霧…

「なっ！？」

それは街中を再び包んでいた。そこから現れるのは…

『ジィイイイ！』

無数のローチ！

「そんな馬鹿な！？何で？」

「よく考えてみてくださいよぉぉぉお！
トランプっつうのは何枚で構成されてんだぁ！？ああ？

ギャハハハハ！そうですよ！ジョーカーは二枚！」

ジョーカーは二枚。
その言葉が指し示す意味はたった一つ！

「ジョーカーはもう一体いるのか！」

クウガの言葉にカリスは笑い転げる。
正解！大正解！カリスは腹を抱えて空中を転がりまわった。

つまりジョーカーはまだ死んでない。
あの青いジョーカーは死んだが、もう一体いると言う事はローチ達も消滅してはいないのだ。

「ヒャハハハハハハ！　ギャハハハハハハ！！」

「くっ！」

だが、ちょっと待て。

いくらジョーカーが二体いたとはいえ一度ローチは完全に消滅していった筈だ。
直ぐに新しいローチが生まれたわけだが、すくなくともクウガの眼には一度完璧に消え去ったように見えたのだ。

その疑問は直ぐにカリスにぶつけられる。

カリスはその問いに焦るわけでもなく、断るわけでもない。
あくまでも普通に、冷静に答えた

「フフッ！気がつきましたか。そうです！貴方の言う通りだ！」

「ッ！？」

「ジョーカーは最初一体しか存在していなかった！

だが、だがしかしっ！」

ローチ達はクウガ達に攻撃をしかけていく。
それはジョーカーが生きているというなによりの証拠。

いや、少し違う

「ジョーカーには特殊能力が一つありましてね！ヒャハハハ！」

それは！もったいぶったようにカリスは空中を何度も旋廻する。

「それは！ジョーカーウイルス！」

カリス、道化師は語る。
自らが作り上げた対アンデッド用怪人、ジョーカー。

アンデッドに対して絶大な力を発揮するだけでなく自らの化身であるダークローチを生み出し、時間がたつにつれ増殖していくローチと自らで世界すらも滅ぼす事ができる。

道化師の最高傑作である玩具。

「そして、ジョーカーには文字通り切り札を持っているんですよ！
ジョーカーウイルスと言うね！アハハハハハ！」

まるで玩具を自慢する子供の様に、饒舌に楽しそうにカリスは語り始める。
コチラが聞いてもいないのにペラペラとジョーカーの自慢をする辺り、相当な思い入れがあるのだろうか？

「ジョーカーウイルスって何なんだよッ！」

ローチはまだ少ないものの、クラウン達がその数を補っていく。
クウガ達はまともにカリスの話を聞いている余裕はないのだ。

「ヒャハハハ！すみませんねぇ、つい興奮してしまいまして！」

「くっ！」

「ジョーカーは仲間を作る事ができるんですよ。
まあワタシは最初に見つけた人間を狙えとインプットした訳なんですがね！

ヒャハハハハ！ジョーカーはその力をダーツに変えて具現化できるのです。
そして、それを打ち込まれた人間は……」

どうなると思います？

カリスは仮面越しに最高の笑みを浮かべていた。
ジョーカーの最大の能力…それは一体…

「おい…おいっ……おいってッ！！」

椿は目の前で倒れた咲夜を抱えるとその瞳を見る。
虚ろなそれはいつもの咲夜からは想像できないほど弱々しかった。

「おい！大丈夫かよ！」

咲夜は息も荒く、汗を大量にかいていた。
あきらかにおかしい、普通じゃない！
熱は……ないようだが危険な状況だと言う事は嫌でもわかった。

「と、とにかく…っ！保健室！」

治療器具を使おう！
椿は咲夜を抱えると、保健室に向うのだった。

途中キンタロスや我夢と合流し、咲夜を保健室まで連れて行くことができた。
中にいた葵やアキラも咲夜の姿を見て一気に青ざめる。

「やっぱり…咲夜ちゃん…ッ！」

葵は咲夜を直ぐにベッドに寝かせる。
やっぱり？その言葉が少し気になったが今はそれどころじゃない

「ありがとう椿君、皆。
でもごめんなさい…少し服を脱がせたいから外にいてくれない？」

「え？あ…ああ、ハイ。」

椿達が外に出て行くのを確認すると、葵は咲夜の背中が見えるように服を脱がせる。

「！！」

「先輩！やっぱり…」

アキラはふらふらと腰を抜かしてしまった。
眼には涙が見える、どうしてあの時自分は咲夜の意思を尊重してしまったのだろうと。

「咲夜ちゃん……」

「ハァ…ハァ……ッ！いい…んだアキラ。
ワタシの我がままなん…だからッ」

咲夜は少し落ち着いたのか意識が戻り、アキラに微笑みかける。
だが、葵から見える咲夜の背中は……

人間のモノとは思えなかった

第９２話　？悪夢・ジョーカーウイルス？（後書き）

いろいろぶっ飛んでますが、道化師は科学者だったりします
では次もよろしく！

第９３話　？選択（サイレント）？（前書き）

どうも、更新できました。
次はいつだろうｗ？んー・・・なるべく早くします

後書きでオーズの感想書いてます
まだ見てない方は注意してください

ではどうぞ！

第９３話　？選択（サイレント）？

「今、何ていったの！？」

ギャレンの驚く様子にカリスはますます上機嫌になる。
彼にとってこの瞬間こそが至福の時であるかのように、彼はとにかく笑っていた

「だーかーら！ジョーカーのダーツを受けた人間が、
次のジョーカーになっちゃうんですよぉ！

ジョーカーウイルスに感染してねぇ！ヒャハハハハ！！」

さいっこうだとは思いませんかぁあ！？ねぇそうですよね？考えてみてください？

例えば貴方の好きな人が感染したとするでしょぉ？
そしたら段々その人は人間じゃなくなっていくんだよ？

ヒャハハハ！その人も自分が化け物になるなんて嫌だよね！？だから泣き叫ぶんだよ！
必死に懇願する！化け物なんかになりたくないって！

だけど無理無理！結局ソイツはジョーカーになる。
じゃあ貴方はどうする？

必死に直す方法探してる間にタイムリミット！クヒャヒャ！残念
に合わなかった。
もう理性すらなくして暴れまわるジョーカー！どうする？貴方はど
うするの？
最後の希望とか、あきらめない！とか何とか言っちゃって説得とか
してみます？

ギャハハハハハ！無理無理駄目駄目！
そんな事しても完全にジョーカーになってしまえば
説得なんて絶対無駄なんですよぉおおお！

じゃあ大人しく殺される？

ハハハハ！分かってる！嫌だよなぁ！

嫌ですよねそんなの！じゃあどうすればいいか？
殺すんですよ！ジョーカーを！

愛する人だったヤツを！

ヒャハッハハッハハハハアアハハハハッハ！

最高！もう完璧！楽しいねぇ！
だってよぉ！ジョーカーがいればローチが生まれるんだぜ？
ほっとけば人類は滅亡よ！

いや、世界すら滅びちまうだろ？
だから殺すしかねぇんだよッッ！

感染したヤツがジョーカーになる瞬間と、そいつを殺すヤツ。
その時の顔を見たくてしかたねぇんだよ！コッチは！
お前がぶっ殺したのは誰でもねぇ言わば０号。人間じゃねぇただの化け物よ！

そんなのが死んだって何にもおもしろくねぇんだよ！
でももう誰か感染したんだよ！？

ヒャハハハハ！記念すべき一号目だよ！
んでもってジョーカーが完全体になってダーツを誰かに当てれば次はソイツが候補者！
永遠に続く最高のショー！

なのに…なのによぉおおおお！

そいつを見つける前にお前らがジョーカーを殺したせいで！

あああああ！クソクソクソッ！
おかげで感染のスイッチが入っちまった！

楽しいショーを完璧に楽しめねぇじゃねぇえええかぁあああ！
早くそいつを探しにいかねぇえええと！

狂ったようにカリスはさらに空中へ舞い上がる。
そしてそのままクウガ達の前から消えてしまった。

追いかけようとしたが、クラウンとローチに気をとられ結局逃がしてしまう。
3人はすぐにローチ達を倒すものの、もうカリスの姿は完全に見失っていた。

「くっ！今はまだローチの数は少ないけど段々増えてくるんだろ？」

「でも、感染した人がいるのよね！？どうすればいいの！？」

それぞれは沈黙する。
道化師の口ぶりからは直す方法があるとは思えないが…

「殺そう」

「「！」」

クロハは決断する。まだ完璧にはジョーカーになってはいないはずだ。
だったら今の内に…

「感染した人は本当に可哀想だと思う。
だけど…このままじゃローチは増える一方だし、

なにより完全にジョーカーになってしまったら
次のジョーカーが生まれる可能性もでてくるんだ……ッ」

「…できるの？」

「……」

ダイアナはクロハという人間を良く知っている。
答えはノーだ、彼は優しすぎる。
口でなんと言おうが彼にできる筈はない。
もちろん…それは自分も同じだ。

「！」

その時、ユウスケと薫の携帯が鳴る。
二人はそれぞれ頷くと、電話を取った。

「はい…え？ああ…うん――――え！？」

「嘘…」

どうやらあまりいい話ではなさそうだ。
クロハとダイアナは二人の様子からそう感じ取る。
事実、電話を切った二人の表情はかなり沈んでいた。

薫はダイアナ達を見て、小さく呟く

「実は…見つかったの。ジョーカーウイルスの感染者が……」

「！」

薫の表情から察するに…答えは一つ。

感染したのは、知り合いと言う事だ

「そんな…事って……」

力なくへたり込む夏美や友里。
そして呼吸が荒く、見ているだけで苦しくなる程の咲夜。

そう、ジョーカーウイルスに感染したのは咲夜なのだ。

「ッッ……」

椿は皆から離れてずっと下を見ていた。
咲夜は自分を守って感染したのだ。もし、あそこで自分がダーツを受けていたなら…

「咲夜ちゃん……苦しい…？大…丈夫？」

真由は水を咲夜に手渡す。
咲夜は苦しそうではあったが、最初よりずっと落ちついていた。
笑顔でお礼を言うと、咲夜はすこし水を口に入れる。

「皆…ここで話し合うのは咲夜ちゃんに負担をかけるわ。
教室に行きましょう」

葵の言葉に皆は賛同すると、一同は教室へ向う。

「治療器具は使えないのか！？」

「はい…ゼノンくんが言っていました。ウイルスまでは無理だと。一応駄目もとで試してみたんですけど…やっぱり駄目でした」

「クッ…」

「どうにかならないんですか！？」

アキラは耐え切れず涙を流しながら、誰に問うわけでもなくその言葉を発する。
だが、誰一人分からなかった。
その事を聞きつけたクロハやダイアナも駆けつける。

アンデッドの力を使えばどうにかなるのではないかと思ったが、ジョーカーの力はアンデッドに有効に作られている。

結局どのアンデッドの力を持ってしても、ジョーカーウイルスを取り除く事はできなかった。

「やっぱり僕にはできないよ…口ではなんとでも言えたけど…
いざ目の前にしたらコレだ」

「……大丈夫。私も同じだから」

目の前で苦しんでいる咲夜。
どれだけの時間が掛かるかは分からないが、このままではジョーカーになってしまう。

人間ではなくなるのだ…

「そんなのっ…」

友里は唇を噛む。そんな目にあうのはあたし達だけで充分だと。
しかしそんな彼女の心情を世界が理解してくれる筈もない。

苦しむ咲夜は現実なのだ

「・・・」

そんな中、司は必死に打開策を考えていた。
もちろんこんな展開は原作にはない、だが、思い出せ！
何か、何かあるはずだ！

記憶の中からありとあらゆる情報を呼び起こす。
どんな些細なモノでもいい！

とにかく今は何か手がかりを…

「！！！」

待て…よ…確かジョーカーは映画で一度封印されたはずだ。

封印・・・

そう！封印だ。
それならジョーカーを殺さないですむ！

いや、でもそれじゃ根本的解決にはなってない。
咲夜を封印してしまうのは、死とそれ程大差はないだろう。

なら…待て、落ち着くんだ聖司。

封印…

封印……ジョーカー、アンデッド…

契約……ッ！！

「そうか！これなら…っ」

「何か分かったんですか！？司君」

「可能性は低いがもしかしたら…な！真志！」

司は真志を呼びカードデッキを見せてもらう

「お前は真司さんからカードを受け継いだんだよな！？」

「あ、ああ。そうだな」

司は頷くと、真志のデッキからカードを取り出し確認していく。
そしてその中から二枚のカードを抜き出し、凝視した

「もしかすると…これなら…ッ！」

正直可能性は低いしうまくいく保証も無い。
だがもう他に方法が思いつかない以上この方法に頼るしかないだろう。
司は皆にその事を伝える

「なるほど…だが、それには……」

「クロハ！ダイアナ！この世界に『――』はあるか！？」

司の言葉を二人は聞いていた。
しかし悔しそうに首を振る。

「ゴメン。持ってないよ…アレは契約時にキングから一枚だけもらえるんだ。
君の言うモノは僕達の世界ではあまり良く思われないモノだから…
強制封印の道具なんだよ…」

「でも！キングと契約すれば手に入るんだよな！？」

「ええ。つまり…」

「！！」

一同は一斉に椿のほうをみる。

「お、おいおい…まさか……」

青ざめていく椿、司はこくりと頷いた。

「そうだ。咲夜を救えるのかは……お前にかかってる」

第９３話　？選択（サイレント）？（後書き）

はい、という訳でね。オーズ終わりましたねぇ

個人的にはタジャドルでラストバトルに挑んだのが印象深いですね、
初じゃないですか？中間フォームで決着をつけたの
良かったですよ。電子音もちょっとした変化があったり、歌が流れ
たり、フルギガスキャンとまあやる事はやった感じで

アンクの言葉もね……最後の落下シーンは感動しましたよ
後、会長の服ってタトバの色だったんですねｗｗ
言われるまで気がつかなかったｗ

不満点があるとするなら…そうですね、
本編でシャウタの歌は流してほしかったかな
あとタトバキックは確信犯だなｗｗ

いやー、でも面白かったです。いつも気になるんですけど子供達は
どう思ってるんでしょうね？アンクの件はやっぱりショックだった
んじゃないかな？

さあ次はフォーゼですね、どうなるのかｗｗ

ではこれで、次もよろしく！

第９４話　？有限のセレクトゲーム？（前書き）

忙しいっす……次の更新も申し訳ありませんが未定で

ではどうぞ！

第９４話　？有限のセレクトゲーム？

「なんだよ…それ……」

椿は震える手を押さえながら地面へ崩れ落ちた。
へたり込む椿に襲い掛かる現実、結局自分はどうあってもあのキングと殺し合いをしなくてはならない。

そして勝たなくてはいけないのだ。
もし司達が戦おうとしたならタイムスカラベを発動されてしまう。
正式に、真正面から勝つしかない

ただ背負うモノが増えただけ、プレッシャーに弱い椿にとってまさに地獄と言うべきモノだった。

「椿、悪いが時間はないぞ…」

「嘘だろ…そんな事ってねぇよ」

ふらふらと立ち上がり椿は教室を出て行く。
皆、分かっている。椿自身が決断するしかない。

そしてそれは決断したとしてキングに勝たなければならない。
こうしている間にもジョーカーの影響でローチは増えていく、討伐に出ている美歩や亘達だけでは無理なのだ。そして世界はローチに埋め尽くされ滅びをむかえる。

「先輩…ッ」

我夢はコインを弾く、出たのは表。
彼が何を思ったのかは分からないが我夢は椿を追いかける為に、自らも教室をでていくのだった。

「我夢君！」

「？」

我夢が振り返ると、アキラの姿が見えた。
目が赤いのは泣いていたからだろう。

アキラはまだ少し目をこすりながらも、我夢の所へやってくると儚げな笑みを浮かべた

「・・・」

だけど、我夢はそれがいやだった。

「無理…しなくていいですよ」

「え？」

我夢はアキラの事が好きだ。だが……なによりも椿や咲夜、そしてアキラの事を親友として慕っている。

だからこそアキラには自分の気持ちを偽って欲しくない。こんな状況で笑みを浮かべる事が彼女にとってどれだけキツイ事なのか、それは我夢にだってわかる。

「無理…しないでください…っ……僕も…」

だけど我夢はうつむいてしまう。泣き顔を見られるのはやはり抵抗があるものだ……

どうしようもない不安と、最悪の未来を想像してしまい悲しくなる

「ッ！」

アキラもせき止めていた想いが涙となってあふれ出してしまう。
二人は暫く互いに声を押し殺して泣いた。

だが、しばらくしてアキラが口を開く。そこから吐きだされるのは弱音、そして後悔の言葉。

それを聞いてふいに我夢はコインを弾く。
それは彼にとって決断、そして覚悟を決めるある種の儀式。
自分の思いをコインという他の物に託して…

「アキラさん――――」

コインの表裏はもはや彼にとっては些細なもの。
我夢は、普段なら恥ずかしくて直視できないアキラの目をまっすぐみて話しかける。

皮肉なモノなのかもしれない。
我夢の心から『今は』アキラに対する恋慕の念が消えていた。
もちろん彼のアキラに対する想いは相当なモノだ。

だが、彼はそれを心にしまいこむ。
そうでなければこの状況を変えることなどできないと理解したからだ

「どうしたんですか……？」

「僕達が変えるんです」

「え？」

我夢は歯を食いしばる、椿や咲夜にはもっと笑っていて欲しい。
それなのにこんな結末はあんまりだろッ！

ふざけるなよっ！

道化師に対する怒りが込み上げてくる。
だが、自分は弱い。

司達のように戦う力もなければ、夏美のように行動する力もない。

いや、なかった。

だが、もうそろそろ甘えるのは止めないか？
我夢は自分に言い聞かせる。

「僕達が、この状況を変えるんです」

「！」

「だからその為に…協力してくれませんか？」

「……っ！　もちろんです」

二人は頷く。同じ道場で仲良くなっただけの師弟関係、たかがその程度で何を馬鹿なと人は笑うだろう。

だが、他人にとってはそれだけの絆、しかし我夢達にとっては大切な人達なのだ。
ここで終わらせたりはしない。

二人は決心する、椿と咲夜の関係を知っているからこそ彼らは負けられない戦いに挑むのだ。

『お前は逃げてばかりだな』

「・・・」

椿は校庭に一人たたずんでいた。
頭の中に鳴り響くのは咲夜から言われた言葉、自分は逃げてばかり
……

そうなのか？ああ、そうかもしれない。

いや、そうだ……

いつも、逃げていた。
それでよかった。

今回も…逃げてしまえば…

「クソゲーすぎんだろ…」

逃げられない。俺が勝たなきゃあの女は死ぬ？
世界は滅びる？

ああ、くそっ！なんで主人公みたいな選択せまられてんだよ俺は！

脇役でよかった。なのになんでこんな大役回ってきてんだよ、おかしいだろ！
もっと人選ちゃんとしろよ！！

理不尽な世界に行き場のない怒りを投げかける。
キングに勝て？ふざけんな、無理。
無理なんだよ。あんな化け物に勝てるわけない、どうせ殺されて終わりだ。
ちょっとケンカが強くなったくらいじゃ化け物には勝てないのと一緒さ

クソ……

「椿先輩」

「ッ！？」

我夢の声がして椿は振り返る。そこにはアキラと我夢の二人が立っていた。

「な…なんだよ、どうし――」

「会ってください」

「え？」

「咲夜先輩に、会ってください」

「……」

椿はうつむく。
正直、今さらどんな顔をして会えばいいのか…

「椿先輩。私は先輩がうらやましかったです」

「え？」

「咲夜先輩と、椿先輩。とっても仲がよかったから……」

「ハッ、アキラ。お前何か勘違いしてるぜ……
俺とアイツは――」

「違いますよ」

「っ？」

「違うんです…」

アキラは今日、初めて咲夜との約束を破る。
ずっと守ってきたその約束、アキラは心の中で咲夜に何度も謝ったのだった

「え？」

「だから……おかしいと思わなかったんですか？
咲夜先輩が椿先輩の話に合わせられる事！」

いつもケンカしていたから頭が回らなかったが、そう言えばアイツもなんだかんだ言ってネットスラングとかアニメの話について来られたような……

「咲夜先輩っ、勉強してたんですよ！」

「え！？」

「椿先輩の話にあわせられるようにって……
ネットで色々調べたり、いろんなアニメ見たり！」

「……マジ！？」

全然知らなかった…

その後も、そんな話をたくさん聞かされる
そのだいたいが咲夜が椿の為になにかをする話だった。

「でも、なんでそんな事…っ」

「咲夜先輩、一度だけ言ってました」

椿には悪い事をしたって

「！！」

その言葉で椿の目に何かが灯る。

「僕達には椿先輩と咲夜先輩に何があったかなんて分かりません。
だけど、二人ともこのまま終わるのが最良だとは絶対に思えないんです。

だから…」

咲夜先輩に会って、話しをしてください

「二人が仲良くしてくれる事だけが、私達のお願いです…」

「咲夜・・・ッ」

お前……

「・・・・」

「やあ、どうしたんだい？」

「翼くん…」

葵は目の前でスヤスヤと寝ている咲夜を見守りながら、その声に答

える。
額に浮かぶ汗をこまめにふき取ってあげるその姿は、母性に満ち溢れていた。
彼女の夢だった職業が保育士というのも頷ける

「ちょっと…落ち込んじゃってね」

「へぇ……」

翼は葵の隣に腰掛けると、同じように咲夜を見詰める。

「もし…ウイルスに感染するのが僕なら良かったのに…」

トワイライトならウイルスを殺す事が出来る。
しかし、どんなに…何を言おうが感染したのは咲夜なのだ。

「わたし、気づいてたの。咲夜ちゃんが感染してるって…
だけど……」

咲夜はそれを皆に相談する事を拒んだ。
咲夜は自分が助からないと思い作戦を立てたのだ、もちろんそんな

作戦がうまくいく訳がない。

葵とアキラは猛反対したが、咲夜はどうしてもと言って聞かなかった。

葵は分からなくなってしまった。

咲夜を助ける為に相談するのが一番の筈なのに、涙を流しながら黙っていてくれと懇願する咲夜を見て咲夜の意思を尊重してしまった。

それが正しいことだったのか？咲夜はこうして苦しんでいるというのに……

「成る程ね、うん…難しいね。
咲夜ちゃんにとってはそれで良かったんだろうけど」

「分かるの？」

「まあね。咲夜ちゃん本人が止めたんだろ？」

葵はコクリと頷いて翼を見る。

驚いた、まだ話していないのにすっかり理解されてしまったようだ。

「あーあ。ちょっと見ない間に成長しちゃって……」

「まあ私は皆の保護者だからね」

「成る程……」

「「！」」

二人は廊下に響く足音を聞いて静かに立ち上がる。

「保護者って言っても、彼らはもう立派に歩いているけどね」

悩んだり、迷ったり、そしてそれを乗り越えてこそ人は成長できるんだから

「結構、大変よね……本当に」

「大丈夫だよ、葵さんだって十分皆を支えられてる、僕が保障するよ」

「……ありがとう。もっと皆を助けられるようになるから」

二人は困ったように笑うと、保健室を出て行く。

「さあ、任せたよ」

「がんばってね」

椿君――

第９４話　？有限のセレクトゲーム？（後書き）

なんか５日にこのサイトのメンテナンスがあるみたいですね。

ではこれで、次もよろしく！

第９５話　？後悔ノ独白？（前書き）

今回から二話？くらい過去話になります。これは前編かな

ではどうぞ！

第９５話　？後悔ノ独白？

「お、おじゃま…しますよっと……」

椿は気まずそうに保健室の扉を開ける。

なんとなく分かっていたけど、寝ている咲夜以外は誰もいなかった。

きっと気を使って出て行ったのだろう、

こっちとしてはなかなかどうして気まずいんですけど……

「さ、咲夜…さん？」

「・・・」

「ね、寝てるんですね？」

椿はそっと咲夜の顔を見てみる。

寝ている彼女をまじまじと見るのは何年ぶりだろうか？

前は落書きをするために良く見ていなかったから……

あれはスマンかった

「へ、へへ…」

こんな状況ではあるが懐かしさと、言いようのない切なさが込み上げてきて……

笑ってしまった。

「なんつーのかね…俺とお前って……」

変な関係だよな。

寝ている咲夜に聞こえるわけないのだが、椿は構わず続けた。

「こうして見ると…昔のお前を思い出しますよ。
お兄さんは悲しいね、あんな純粋だったお前がこんなにひねくれるなんて」

だけど……

「悪かったよ。咲夜、悪いのは……全部俺だ」

椿は思い出す、今までの日々を……

長いぞ？

そりゃそうだ、お前とは長い付き合いだからな。

物心ついた時から、俺とお前は一緒だった。

どうやって知り合ったのか？

いつから遊んでたのか？

そんなの覚えてないくらい、前の話なのかもしれない。
お前の家と俺の家にある写真で分かるよ、お前と俺。
いくら赤ん坊とはいえ全裸で並んでる姿はマジで恥ずかしかったわ

それからずっと一緒だった。
毎日遊んでたし旅行とか祭りとか家族ぐるみでアホみたいに一緒にいったな……
お前の家に何回泊まったか全然記憶にないね。

保育園とか、小学校とか結構からかわれたりもしたな。
お前の事皆の前でブスって言った事は許せよ。
悪かった、申し訳ない。だって恥ずかしかったんだ……
いや、ほんと、すいません

その頃からお前は親の道場に通う事になったんだっけ？
女でも容赦なく投げ飛ばすお前の親達には恐れ入ったぜ。
まあ結局お前はいつも泣いて訳だが…

「うぇぇぇん！」

「なんだよお前、また泣いてんのかよ！
最近泣いてばっかだな」

「だってぇ…」

「やっぱり厳しいのか？お前のお父さんとお母さん」

「……うん。この前もぬいぐるみ捨てられたの！
あれ、大切にしてたのにぃ！」

「わわわ！泣くな！泣くな！コレやるから！」

「え…？」

「ほら！これ、お前欲しがってたろ？電気ネズミのキーホルダー。
俺進化系の方が好きなんだよ。だから…やる！」

「…いいの！？」

「あ…ああ！これから悲しくなったら俺に言えよ！椿様が慰めてやろう！約束だ」

「本当に！？ありがとう！椿ちゃん！」

「あったりまえだろ！男なら約束は死んでも守る！」

とまあこんな感じだったな、捏造なんてしてないからな！本当だぞ！

っていうか、あれだね。あん時の俺は最高にイケメンだったな、う

ん。

そうやって俺はお前を励ます事が日課になりつつあったんだっけ？
お前本当に毎日泣いてたからな。
俺としても多分お前が泣くのは嫌だったんだろうね。

今は逆に泣いてもらいたいもんだが……

どうにもあの時の俺はお前に甘かった。
お前は本当に何をやっても駄目な幼女だったな！

クッソ！

「椿ちゃん！待ってよぉ……」

「ははっ！早く来いよ！置いてくぜ！」

「きゃ！　うぇぇぇんッ！」

「……ったくしょうがねぇな！」

「！！」

運動もだめ。何も無いところで転びやがって…

「椿ちゃん！これわかんない！」

「あー…これはだな…」

「すごい！わかるんだ、椿ちゃんは頭いいね！」

「ったりめぇよ！椿様は無敵なんだぜ！」

「すごーい！」

頭だって俺の方がずっとよかった。

お前なんだっけか？　一時期、卵を暖めてひよこにするとか言ってたな。

それでお前が暖めてたのが、ゆで玉子だもんな。

ひよこになる訳ねぇだろ！

「椿ちゃんは凄いね…」

「え？どうしたんだよ」

「椿ちゃんは友達もいっぱいいるし、
おもしろいし、なんでもできるし！」

「お前だってそのうち凄くなれるさ。
今は柔道やってるんだっけ？

その内俺を投げ飛ばせるくらいになってもらわないとな」

頑張れよ。俺はそう言ったんだっけか？
ああ、そうだな、あの時は互いに純粋だったよ

でも、ずっとそのままなんてありえないって、分かってたのに……

「・・・」

本当に、悪かった。俺が馬鹿だったんだよ。
お前は本当に頑張ったよな、マジで熱心に勉強とか習い事とかいろいろやってさ。
小学校卒業するくらいかな。
お前本当に成長してたよ…

中学は……そう、最初クラスが違ったんだよな。

「ねえ椿ちゃん、一緒に帰ろう？」

「……えっ？」

校門でそんな事言われたから戸惑ったぜ。
なんか同じクラスの奴がヒソヒソ喋ってるし、俺は何かまたそう言う噂になるのが嫌だったからお前を無視して歩き出しちまった。

「ねぇ！ちょっとどうしたの椿ちゃん！」

「――――ッ！！」

ねぇ聞いた？椿ちゃん。だってぇー……クスクス。

ちゃんってマジかよ、ダセー。

何アレー！カップル！？

「ッッ！」

分かってた。分かってたさこうなる事くらいッ！

だけど……分かってたけどいざ言われるとキツイ。

だからつい声荒げちゃたんだよ

「お前！ちゃんとか止めろよ！子供じゃねぇんだからよ！」

「え！？あ…ご、ごめん。椿…くん」

「……呼び捨てでいい。」

「う…うん。ごめんね椿……」

その後暫くしてだよ。
俺がお前のファンクラブがあるって知ったのは。
まあ……たしかにお前は綺麗だったさ！

だけどよぉ――――ッ！

いやいや酷いね厨二病患った馬鹿は

『咲夜さんと気安く喋ってんじゃねぇよあの男』

『特別カッコよくもねぇくせに。アイツ咲夜ちゃんの何なんだ？』

『ウゼェ。しめちまうか？』

『おい、俺の咲夜様と会話してんじゃねーぞ！』

『アイツ調子のりすぎじゃね？』

「・・・ッ！」

シラネーよクソ共が！

そんなにあいつが好きならさっさと告白でもなんでもすればいいじゃねーか。

わざわざ聞こえる声で喋ってんじゃねーぞッ！

あああクソ！ウゼェ！

どこの誰かも知らないヤツに殴られた時もあった。

お前は咲夜さんには似合わない？

何様だよクソ野郎が！

「――――ッ！」

そう、あの時から何かおかしくなってきたんだな。
もちろん俺だけだ、お前は悪くねぇ。
お前は部活も勉強も学校生活もちゃんとやってた、だから人気がでる。

ああ、当然だ。

「椿！聞いて？あのね、ワタシ――」

「……なあ、お前さあ。そう言う女みたいな声やめろよ」

「え？だってワタシ女――」

「……ッ！いや、だから。
もっと俺には男みたいな感じで接しろって言ってんの。

なんかこう――――ッ」

見ていたアニメのキャラクターを例にすると、お前は渋々頷いてくれたっけか？

ありがとう。

「わ、わかった。つ、椿がそう言うならワタシもそうしよう」

「おう…それで…いい……」

だけど、それで俺への嫉妬が減ることは無かった。

むしろ増えてきたっけ、本当ふざけてるよ。

そうやって徐々に俺達の関係はおかしくなってきた。

「椿、テストはどうだった？ワタシはなぁ」

お前は十二番、おれは半分より下。

いや、下から数えた方が良かったかもな

「なあ椿、聞いてくれ。今度クラス対抗リレーがあるんだが、
それでワタシがアンカーなんだ！」

俺はクラスの足手まとい。
そう、お前のファンクラブの会員様に足手まといだって言われたよ。

まあ、否定できないんだけどな。

そうだ、お前はもう勉強もスポーツも、学校生活も全てにおいて俺を突き放していた。
正直虚しかったね俺は、自分で言っといてなんだけど。

お前が羨ましかった。

――――で、同時に妬みもあった

『なんだよアイツ、また今日も咲夜さんと一緒にいたらしいぜ』

『たいして成績もよくねぇくせに、咲夜さんに馬鹿が移ったらどうするんだよ』

『一緒にいるのってきっとアレだろ？金とか払ってんじゃねぇの？アハハハ！』

『アイツ、咲夜さんに近づかないで欲しい』

『ほんとよね、咲夜お姉さまにはもっとお似合いの人がいるわよ！』

『ルックスも並、成績と運動神経はカス。
咲夜さまと肩を並べる資格なんて無いわね』

『あーあ、ムカつく！　消えろ、消えろ！嫌われろ！学校くんなよ！』

『あはははは、お前酷すぎ！あはははは！』

「――――ッッ！！」

うぜぇえんだよッッ！カス共がぁぁぁッ！成績も運動能力も！
ルックスもテメェらより百倍マシだわ。さっさと消えろよアホ共が！
何で俺なんだよ！何で俺ばっかり言われなきゃならねぇぇんだよ！！
くそッ！ちくしょうっ！！知らない！俺は関係ない！！

悪い、あの時からだ。お前に対する不快感ってのが浮かび上がってきたのは。

だから――あんな事言っちまったんだよ。

「あああ！ウゼェな！お前！もう二度と話しかけてくんなよ！絶交だわ！縁を切るよお前とは！！」

「・・・！！」

お前はただ家庭科で作ったクッキーを持ってきてくれただけなのにな。

あの時のお前の顔は……

悪い。一生忘れないつもりだった……

でもお前の泣き顔を俺は心にしまいこんでたんだよ

とにかく、あの日俺はお前を一度拒絶した。

お前は泣いて走っていたな、でも俺は追いかけなかった。
だって追いかけたら、また言われると思ったからさ……

そう、これでよかったんだ。
もう俺はお前と話す事はない、他の奴らもそれを望んでる。

そうだ、これでいいんだよ。それでいいんだ――

第９５話　？後悔ノ独白？（後書き）

まあね（キリッ

人生なんてね（ドヤァ

後悔の連続ですよ（ドヤネンナァァ…

では、次もよろしく！

第９６話　？後悔・彼女の懺悔？（前書き）

はい、というわけで今日は二話更新でございます
まあ何故か、それは次の前書きで

ではどうぞ！

第９６話　？後悔・彼女の懺悔？

それから結構の間はお前とまともに口聞かなかったっけか？
ああ、でもまあ嫉妬してる馬鹿共も少しは落ち着いてくれたから…
俺はそれでよかった。

そう、それで満足しちまったんだよ。

でも、駄目だった。なんで笑わないんだよ、昔はお前もっと笑ってたろうが……
あの日から急に笑わなくなりやがって…
もう結構な時間が経ってた。いい加減割り切れよ！
おかげでファンクラブのクズ共に問い詰められたんだぞ

『咲夜さんになんかしたんだろ！？許さない！』

『やっちまえ！許すなコイツを！』

『お前みたいなやつがッ！！咲夜さんに近づくなッ！』

マジでふざけてる。いきなり皆の前で殴られて、蹴られてよぉ……

正直お前に対する恨みみたいなモンまで巻き上がっちまった、スマン。
あの時は俺もクズだったのかもしれない、いやお前の事なんて気にしてなかった屑野郎だ
でも、まあそいつ等が皆の前で殴るなんて行動してくれたおかげでアイツが気づいてくれた訳だが……
ありゃマジで助かった。あん時のアイツは輝いてたね
俺が女なら絶対に惚れてた。
悪い、適当な事言った。きもちわりー……

「お前らッ！いい加減にしろよ！
こいつが何したんだよ！ふざけやがって！」

俺を殴ってきたヤツがぶっ飛ぶ、俺を蹴ったヤツの腹に蹴りがめり込む。
俺を助けてくれたソイツ、誰だと思う？
真ちゃんよぉ！　条戸真志！
真志はファンクラブのアホ共を蹴散らしてくれたよ
まあ真志の話は今はいいや。

それから真志と友達になって司とかと友達になって……
正直お前の事は考えないようにしてた。

でも、中学の三年のときだな。
たまたまお前を見かけたとき、お前かばんに昔あげたキーホルダーまだつけてたんだっけな？

あれ見たら無性に申し訳なくなって…さ。
もう俺に何か言ってくる馬鹿もいなくなったし……なんていうか、こう余裕みたいなのがあったんだよ。だからお前に思い切って話しかけたんだっけ？

「よ、よよよよぉ……！」

「！！」

「ささささ、最近……その、どどどどう？」

「え……あ、うん。いや、その…悪くない」

「へへへへー。そ、そっか。うん…」

正直ノープランでいった事を後悔したわ。
自分から話しかけといて意味不明な事ばっか・・・

「あ、あの…悪かった！」

「え？」

「そのっ…お前に酷いこと言って……許してほしい！
なんなら一発や二発ブッ飛ばしてくれてもいい！

だから――ッ」

まあ、あれだ。確かに俺はそう言った。

でも本当にブッ飛ばすのはどうかな咲夜さん？
あんときは涙が出たね、痛すぎて…ははは。

でもまあ――

「よし！許してやる！」

お前が笑った事は嬉しかったぜ。

アレは思えばフラグみたいなモンだったのか？よく分からん。
まあそれから俺達の関係は少しはマシなモンになったな。

ただ、あの時から俺とお前は傷つけ合う事でしかふれ合えなくなった訳だが…な。
あと俺が冗談でお前の家の道場に入るっていったのを信じたのは計算外だった

でもそれで我夢とアキラに会えた事はよしとしよう、
俺は道場を三日で諦めたがあいつ等に会うために毎日通ってたのは内緒だぞ！

「……とまあ、俺は身勝手な理由で拒絶しちまった訳だ。悪かったよ、謝る。どうか許してくれ」

「……別に、今さら……どうでも…いい」

「うぇっ！」

起きてたのかよコイツ！うわっ！なんか恥ずかし！

「悪かったな……つか、あのさ、お前ってツンデレなのか？」

「はぁ…い……み…わからん」

「あの…アキラからいろいろ聞いた。
お前さぁ、心遣いはありがたいけど本気で傷ついたんだからな！
俺はガラスのハートだっての！」

「……どの程度…聞いた？」

咲夜は呼吸が荒い、おそらく相当苦しいのだろう。
だが、あえて椿はいつもの様に接する。

咲夜とてそれで良かった。
いや、それが良かったのかもしれない

「あー…まあ、かなり…いろいろ。バレンタインとか…」

「あぁ…アキラは……後でお仕置きだな…」

「うわー、可哀想なアキラ……」

俺は小学校後半からバレンタインのチョコなんざ貰った事はなかった。
いやあったとしてもかけらみたいなサイズのくそ安い義理の中の義理みたいなヤツくらいだ。
もちろんコイツからも貰った事なんてない。昔は貰ったらしいが忘れた。

だけどアキラが言うにはコイツは毎年俺にチョコを作ってくれてたらしい、
結局一度も渡すことは出来なかったらしいけど…

「渡してくれればよかったのに、お前まさか……
俺が毎年トラックでチョコが運ばれてくるとか言うアホみたいな冗談信じたとかじゃないよな?」

「当た…り前だ……ッ！」

「俺って結構愛されてるのね！感動しちゃう！」

「フン……言ってろ……お前が毎年惨敗で……
哀れに思っていただ…け…だ」

「ハハ…ツンデレ乙」

「フフ……ウゥッ！！」

苦しそうに顔をしかめる咲夜。思わず椿の顔から笑みが消える

「っ！おい、大丈夫か！？」

「ゥゥウウウ……ッ！！」

咲夜は苦しそうにうめき声を上げる。
しばらくして落ち着きはしたが、体を蝕むジョーカーウイルスの確

かな効果を感じる。

「……お前、どうしてあんな事したんだよ」

「……」

あの時、ゼノンが保健室にやってきた時だ。
咲夜はジョーカーウイルスの事を皆より先に知った。

だがあえて黙っていたのだ、アキラと葵に無理を言って…

「咲夜ちゃん！本気なの！？」

「そんな！どうして黙っているんですか？」

皆にジョーカーウイルスの事を黙っているいる様に頼んだのは咲夜だった。
その提案は危険すぎる。

ゼノンとフルーラ以外の二人は信じられないといった表情で咲夜をみる。

「咲夜、君は今自分がどれだけ危険な状況下にいるのか…
まだ理解していない様だね。
ジョーカーウイルスはボク達にとっても予想外といっていい程の代物なんだよ？」

ゼノンの言葉が3人の不安を煽る。

だが……

「今のままでは椿は――」

正直、皆に話したとして…ジョーカーウイルスが治る可能性はどれだけあるのだろうか？

そして咲夜は決断する。自らの命を賭けた勝負にでたのだ。

「今の椿には理不尽な怒りをぶつける相手が必要なんだ。
アイツはヘタレだからな…
だから、ワタシがその悪役になる。」

「え？」

「・・・」

そこから咲夜はもう何も言わなかった。
葵とアキラに無理をいって自分が感染している事を黙ってもらった。

どうして？

咲夜は瞬時に計画をたてていた。
もう絶対椿はキングと戦う意思を持てないと悟る。

だけど椿がブレイドに変身しなければどうしようもない。
ならばせめて自分が犠牲になる事で椿に分かってもらいたかった。
今自分がどれほどのモノを背負っているのかを…

咲夜は自己犠牲をとったのだ。
まず自分が椿に嫌われる事で椿への想いと、自分がジョーカーになった時に椿に変な気を使わせないようにする。そして自分がジョーカーになる直前にキングに戦いを申し込む。これですこしキングにダメージを負わせ、その後椿に譲る…

ああ、今にして見ればなんと安易で考えなしの作戦だったのだろうか！

ジョーカーウイルスの影響はここまで体に負担をかけるとは考えて

なかった。

それにジョーカーになったとしてうまくいく確率なんて低いし…
なによりジョーカーになった自分をそう簡単に倒してくれる人がいるなんて
どうしてあの時考えていたのだろうか？

ああ、もう情けない。咲夜の瞳から涙があふれて来る。
結局自分が生んだ結果なんてせいぜい目の前のコイツに嫌われた程度じゃないか…

ああ、情けない、情けない！

第９６話　？後悔・彼女の懺悔？（後書き）

今日はフォーゼなのかな？

どうなんだろう、フォーゼが終わるまでにはこの作品も終わってるのかｗｗ？

では次もよろしく！

第９７話　？資格（ライダー）？（前書き）

まあ更新理由はしばらくできないかもしれないと言う事でね

ちょっと熱風ライダー意識した感じにしてみました

ではどうぞ！

第97話　？資格（ライダー）？

嫌われただけ、その言葉に椿は反応した。

「…別に、嫌ってなんかねーよ。
つか、その話聞いてお前嫌うって俺そうとう鬼畜だぞ…
流石の椿くんもそこまで落ちてねーよ」

「……ははっ、それは…どうも…ウゥッッ！」

「っ！苦しいのか？」

「ははは…正直、かなり苦しいよ椿…」

「っ！！」

「冗談だよ…ははは。ウぅッ！　お…いっ、椿……」

冗談ではない。

椿もそれを理解する、きっともう直ぐ――

「…何だ？」

「ワタシは……死…ぬの…かな？」

「・・・！」

「分かっ…てる…、ワタシが自分で決めた事だ……なあ椿――ッ」

そして、咲夜は椿に向って謝る。
過去、自分のせいで椿にいろいろ迷惑をかけてしまった事。

それがどういう事なのかは分からない。
でも、椿に迷惑をかけてしまった事は本当に申し訳なく感じていた

「何でお前が謝るんだ……」

「いいじゃないか、普段の謝罪だ……
こんな時くらいしか素直になれないなんてな……」

「お前は何も悪くねぇよ…悪いのは……俺だ」

ずっと…逃げてばっかでさ

「……なあ、一つだけ聞いていいか?」

「・・・?」

咲夜は飛びそうになる意識を気合で保つと、椿のほうをみた。
虚ろな瞳と目が合う、いつもの光はもうない。

「お前…俺の事好きか?」

「ッ！？　あ……あはは…」

咲夜は苦しいのか…それとも悲しいのか、
どっちともつかない表情を浮かべて涙を流した。

「ああ…好きだったよ」

なんの迷いもないその言葉。だが待て、だったよ？
怪訝そうな表情に咲夜はまた笑う

「今は…もう…勘弁してほしいな…私の初恋が汚れる……」

「どう言う意味だよっ！」

咲夜は乾いた笑い声をあげると、再び苦しそうに呻く。

もう彼女が何を見ているかさえわからない

「ハァ…ハァッ…む、昔の…お前は……本当にカッコよかったよ…
ワタシのヒーロー…だった……」

「あー今は、どうなのかなー？」

「…カスだ」

「うぉい！！」

「違うのか……？」

「うぇぇぇぃぃ……」

咲夜の声が段々小さくなっていく。
これは…もう――――
椿は目を背けたかった。だけどできない、逃げてはいけないのだ！

「昔は…楽しかった……」

「とても高校生の発言とは思えねぇな…」

「いつ……からだろうな？ワタシと…お前は――」

「ああ、俺とお前は傷つけ合う事でしか分かり合えなくなった」

「また――」

「・・・」

「昔みたいに…」

普通に喋るだけで疲れる。咲夜は言葉を言い切る前に口を閉じてしまった。
だが、椿はるまるで咲夜が何を言おうとしていたのか分かったように、彼女にむかって頷いた。

「できるさ…時間は掛かるかもしれないけど…
俺とお前は、きっと昔みたいにまた、遊んだり、笑ったり」

まあ、今の関係も悪いもんじゃないだろ?
椿は咲夜に微笑みかける、咲夜も弱々しくだったが
ちゃんと微笑み返した。

「すまん……もう…限界かもしれない……」

皆に迷惑をかける。咲夜の目からどんどん涙があふれて来た。
自分がした事は一体なんだったんだ……
結局は全部、無意味じゃないかッ！！

「本当に…申し訳な――」

その時だった、咲夜の涙を椿が拭う。

似合わない事をするじゃないか、そう言うのはイケメンがやってこそ絵になるもんだろ。
咲夜は小さな声でささやくように言う。

「俺だって、イケメンよぉ！リア充椿くんだからな。
と言うか――」

言っただろ？お前が泣いてたら慰めてやるって

「ハハ……キモイなお前は。鳥肌が立ったよ」

「うるさいなお前は本当に！
男なら、約束は死んでも守るもんだからよぉ」

「ドヤ顔……か、失笑ものだよ」

だが、咲夜の目からはどんどん涙があふれて来る。
呼吸が落ち着いてきた、これは決してよくなった訳じゃない。
なぜなら、彼女の首から下の皮膚が明らかに人間のモノではなくなっていたからだ。

このまま…自分は咲夜を見捨てるのか？
ああ、そうだな。そうに違いない
いつも自分はそうだった。

解決できねぇ問題が増えてきて山積みなっていったら抱えきれず押し負けて、ビビッて逃げてきた。
何もしない、できない。

それで適当にいい訳つくって自分を騙してハイ、終わり。

「・・・」

だけど、コイツは必死に毎日を生きてきた。
いつもそう。道場の練習も、勉強も必死に頑張って…

でも、コイツはあと少しでジョーカーになる。
俺より苦労して、俺より頑張って、俺より…凄くても……

化け物になる

俺はカウントダウンにビビッて…タイムアウト。
それって意味あるか?俺の人生って意味あんのか?

そんな逃げてばかりでよぉ…ッ。

ねぇよなぁッ！！

「椿…最期に一つ、お願い…きいてくれないか……？」

最期、おそらく彼女は死を覚悟しているのだろう。
当然だ、化け物になれば殺してもらうほうがいい
死んだほうが世界のためになるのだ

「何だよ？」

「ファーストキス…」

「は！？」

「まだ…なんだ……お前、あるか？」

「ね、ねぇよ！」

「…だろうな」

「ちょ、おまっ、オイっ！！

へー以外ですね、咲夜様ほどの美少女が！ケッ！」

「だって、好きな…人とっ、したかったからぁ……な…」

咲夜の声が弱々しくなる。
どんなに強がっていても化け物になる恐怖が彼女を襲う、それは並みの恐怖ではない。
彼女は怯えていたのだ。

「…で、俺にどうしろってんだよ」

「つくづく…っ、女心が分からんな、貴様は……
ねえ?椿…ちゃん?」

昔と同じ呼び方、椿はやれやれと苦笑する。

「そんなに昔の俺はイケメンでしたか?」

「あはは……はは…冗談だよ、椿……」

椿は軽くため息をついて、自らの顔を咲夜の顔に近づけたのだった。

『ほぅ、よりにもよって貴様か』

その場所は、多くの人間が戦い……命を散らしたであろう場所。
円形闘技場コロッセウム。
今日もまた、ブレイドの力を求めた愚か者が一人やってきた

キング、コーカサスビートルアンデッドは向こうから歩いてきた少年を睨みつける。

「・・・」

『成る程……』

逆に睨み返してきた少年に、キングは賞賛の念を込め立ち上がる。

『何があったかは知らんが、あの時よりは少しだけマシになったと言う訳か』

「テメェ何偉そうな口聞いてんだ?俺はお前らのマスターになる男だぜ?」

『まさかテストを受けに来たとは…』

キングが合図をすると、少年の隣にカテゴリーAビートルアンデッドが現れる。
エースである彼は少年に向かって一礼を行った。

『本当によろしいのですか?
テストを受けるという事は、死を覚悟していただく事になります。

キングに敗北をすれば、あなたは死ぬのですよ？』

止めるなら今、とビートルアンデッドは少年に警告をする。
だが少年はそれを拒み、再びキングを睨みつけた。
両者が放つ…剣のごとし視線は、この闘技場を包み込み切り刻む！

『成る程、意思は固いか。いいだろう、エース。力を貸してやれ』

ビートルアンデッドは頷くと、少年に跪く。
そしてブレイバックルを少年に渡した。

少年はブレイバックルを見つめると、にやりと笑った。
震える足は……気のせいだろうか？

『貴方の勝利を心から願っております』

その言葉を発すると同時に、ビートルアンデッドはＡのカードに変わる。
そしてそのままバックルへと装填していった。

少年は何も言わずにそのバックルを腰へと持っていく。
そしてゆっくりと変身のポーズをとった、それはもう逃げないとい

う何よりの証拠。

『人間、今まで私の元にはお前の様な人間が多くやってきた。
絶大な力を望むもの、愛するモノを守るモノ、それは様々だ。
貴様は…何の為に私に挑むのか？』

少年はキングの目を見てこう言った。
視線と視線の剣が激しくぶつかり合う！

「見返したい女がいる。あいつをぎゃふんと言わせるには、
お前らの力が必要なんだよ。
悪いけど、協力してもらうぜ」

『フッ…成る程』

キングは剣を構えて少年の前に立つ。
理由はただのオマケでしかない、今目の前にたっている少年が自分に勝てば忠誠を誓う。
ただそれだけの事なのだ

「……変身」

『ターン・アップ』

エレメントが少年の前に展開される。
少年はゆっくりと深呼吸をついてソレをみた。

『これが最後の警告だ。ソレを通り抜けた瞬間、貴様はもう逃げられない』

「上等だ。もともと逃げるつもりもねぇ」

ああ、そうだ。もう逃げない。
今までずっと逃げてばかりの人生だった・・・

自分からも――――ッ

アイツからも目を背けて…

互いに傷つかない最良の選択だといい訳をして

結果、互いに傷ついてよぉ…

だから、もう止める。
止めた、もう逃げるのは止めることにするわ。

『・・・』

一歩、エレメントに向って歩き出す。

それは命を賭けた戦いに参加するという何よりの意思表示。

『命を散らす気か？それとも、私に…勝てると？』

「さあ？どうだろうな…」

だけど、と…少年は足を速める。足の震えは消えていた。
震えなんて邪魔なだけだ引っ込んでろッ！！

「だけど、俺はお前に勝つ。ああそうさ。できる筈だぜ？
尤も、俺に…仮面ライダーとしての資格があるのなら
…だけどな」

守輪椿は一気に走り出す。
そして……

エレメントを…潜り抜けた！

その姿が、ブレイドに変わる！

「キング！　覚悟しろよぉぉおおおおおおおおおおおッッ！！」

『来いッ！その力で私を屈服させてみろォオオオオオオオッッ！！』

二人の剣が、激しい音と光を発しながらぶつかり合ったのだった――

1996

第97話　？資格（ライダー）？（後書き）

仮面、剣でムジュラを思い出しました。
なんか最後の方の台詞が頭ん中に残ってます

君の本当の顔はどんな顔？

だったかな？結構好きですねこの台詞

まあいいやｗ
では次もよろしく！

第９８話　？決意のデュエルゲーム？（前書き）

フォーゼが始まりましたね
いやいや、中々いいんじゃないかな？

しかしキックが鬼畜すぎるｗｗ
ロケットの勢いでドリルぶち込むとか誰も勝てねーよｗｗ

ではどうぞ！

第９８話　？決意のデュエルゲーム？

「ウォオオォォォォォォオオオッッ！！」

『・・・』

ブレイドの剣をキングは避ける事無く受け止める。
キングは公平を期すために、ブレイラウザーと自らの剣であるオールオーバーの威力、リーチを同等にしてある。
そして防御力も同じ、つまり二人のステータスは完全に互角なのだ。
つまり、どちらかのセンスが勝敗を決っする。

暫くは互いの連撃がぶつかり合う、呼吸すら忘れるほどの猛連打――ッ！

「ウェェアッ！」

『ハァァッッ！！』

ブレイドが振り下ろした剣をキングは弾き、同時に腹部に蹴りを入れる。
後ずさるブレイドにさらに拳を打ち込んでいき、袈裟切りを決めた。

激しく火花を散らすブレイドの鎧。
そして同時に襲い掛かる痛みが、ブレイドの心までを折ろうとしていた。

痛みが恐怖を呼び、ブレイドの足を鈍らせる。
キングはその震える足を払うとブレイドを地面へと叩き伏せる！
そこに剣で強烈な突きを浴びせると、さらに蹴りでブレイドを苦しめていく

ああ、イテェ…怖い！怖いッ！
ブレイドの心によりハッキリと死のビジョンが焼き付く。

だが、同時に思い出す。彼女の…咲夜の涙を――

「ウワァアアアアッッ！」

『クッ！』

ブレイラウザーを思い切りキングの足に突き刺すッ！
焼きつくような激痛で、キングはブレイドから少し距離を離した。

「ウォラァアアッ！」

『グッゥウ！』

飛び上がるように切りかかるブレイド。
キングは何とか剣でそれを防ぐと、さらに突きでブレイドの僅かな隙を狙う。

また火花を散らすブレイド。だがブレイドはその剣を掴み、自らも反撃の突きを繰り出した。
お返しにと言わんばかりの突きだったが、キングは素早く頭を反らしその突きをかわす。

かわりに、自らの腕に力を込めてさらに突き上げる！

「ァアアアアァアアアアアアア――ッッ！！」

人生の中で味わったことのない激痛。
ブレイドの口から自分ですら聞いたことのない叫びがあがる。

だが、ブレイドはあくまでも冷静さを忘れないようにしていた。
焦りは即、死に繋がるのだと何かで読んだ事があったからだ。

「うぁあぁぁあぁぁぁ――！」

折れそうになる心を叱咤激励しつつ、ブレイドはキングの手を狙った。
剣を持つ手を攻撃すれば、剣を離すと考えたのだ。

『甘いな…ッ！』

「ぁぁあ？」

キングはソレを読んでいた。
突き出された剣を瞬時に弾き返すと、さらに剣を深く深くブレイドに突き刺していく。

「――――――」

声にならない叫びを上げて、ブレイドの体から力が抜ける。
すぐに体に力を込めようとするが、キングの頭部が眼前に迫ってきた事を理解するまでには間に合わなかった。

激しい音と共に飛びそうになる意識、キングの頭突きでブレイドの脳が揺れる。
痛みすら忘れてしまいそうな程の衝撃！

しかしさらにまた直ぐ襲ってくる痛み、肩を剣で切られたのだ。

火花がまたブレイドの体から散る。

キングはふらつくブレイドの首を掴むと、そのまま締め上げた。

『所詮はその程度か…』

ギリギリと力が込められていく、ブレイドを睨みつけるキング。
ブレイドはその王たる瞳に恐怖を感じながらも、挑発の言葉を投げつけた。

キングは少しため息をつくと、ブレイドの体を何度も切りつけていく。

「ウァァアアッ！アアアアア！ァァァァアアアアアッゥ！！」

崩れ落ちるブレイド、立ち上がろうと力を込めるが駄目だった。
ブレイドは諦めたように息を吐くと、仰向けになる。

「あー…綺麗な空だねぇ……椿君かんどー……」

雲、太陽、そしてそれに重なるキング。
ブレイドを見下す様に立つと、剣を喉元へと突きつけた。

『どうやら…ここまでのようだな』

「ハァ…ハァ…！　何？残念賞とか…ないんですかね？」

『楽に天国へと送ってやろう。それでどうだ?』

「そりゃ……ありがたい」

ブレイドはもう一度全身に力を込める。
しかし駄目のようだ、だらしなく四肢を広げてため息をつく。

『愛する女の為に戦い、死ぬ。酔狂な生き様だったな』

「おいおい、愛する女とか冗談だろ?
CG手に入らなくてもいいからアイツの個別ルートだけはやりたくねぇわ」

『何を言っているのか、理解できんなお前は』

「愛する？　死ぬ？　おいおい、冗談キツイぜ。
俺はただ…」

約束を守るだけさ

「男なら…約束くらい死んでもまもらねぇとなぁ？」

『ますます理解できん男だ。できればもう少し観察していたかったが…』

もういいだろう。キングは剣をブレイドに当て、一度離す。
狙いを定めたのだ、キングは一撃で絶命させる為に剣を高く引き上げる。

「あーあー…もう止めた。どんな事してでも勝つわ」

『もう、遅い。死ね――』

キングは剣を思い切り突き出した！

――が、しかし！

『何ッ！？』

「ハッ！」

ブレイドは素早く転がり、その突きをかわす。

『貴様ッ！動けないというのは演技だったのか！』

「ウェァアアアア！！」

キングは渾身の力を込めたため、剣が深く地面に突き刺さってしまった！
引き抜こうと手を伸ばすが、ソレをブレイラウザーが遮断する！！

『グッ！』

手にほとばしる痛み。さらにそのままラウザーで切りつけられていく。

『グォオオ！！』

「ヴェェエエエエエエイッッ！！」

振り下ろすブレイラウザー。
だが、キングはソレを両手でしっかりと受け止めた！

「うぉッ！？」

『フンッ！』

真剣白刃取り。

キングはブレイラウザーをブレイドから奪い取ると、そのまま斬りつける！

「シュ――ッッ！！！」

『グッ！？』

だが、キングの目に衝撃と痛みが走る。

ブレイドの手にはいつの間にか石が握られていた。

それを目に投げつけられたという事か、

普通の投石でも目という場所をピンポイントに狙えば大きな効果になる。

やられた！　キングの狙いはそれ、逆にブレイドに蹴りを入れられ

てしまった。

『チッ！』

剣を振るうがそこにブレイドの姿はない。
鮮明になる視界と共に飛び込んできたのは、自らの剣を引き抜くブレイドの姿だった。

キングはブレイラウザー、ブレイドはオールオーバー。
両者は互いに相手の剣を構えて対峙する。

「『ウォオオオオオッッ！！』」

走り出し、同時に斬りかかる！
火花を散らす互いの剣、キングは体をひねる様に斬りこんでいく！

――が、ブレイドもまた上空へとジャンプしてその斬撃をかわす！
そしてそのままキングの肩に強烈な一撃を加えた。

苦痛の声をあげながらも、キングはそのまま突進でブレイドを弾く。
同時に剣でなぎ払う様に斬った。

倒れないように踏み込むブレイド、そこへさらに追い討ちをかけようとキングはブレイドに詰め寄る。

しかしそれがブレイドの狙いだった。

ブレイドはそのタイミングであえて倒れキングの剣をよける。
同時に自らは剣を突き出し、自動的にカウンターを決めた！

2013

『グッ！ガァ……ッ！』

「へっ！」

両者はそのまま滅茶苦茶に斬りつけあう。
防御という単語を忘れたかのように互いの力をぶつけ合った！

「！」

『！』

両者の剣が弾かれ、上空へ舞う。

どちらが先に剣を掴むか？

二人は地面を蹴り上空へと舞う。

伸ばす手の先にはそれぞれの剣、信念がある！

第９８話　？決意のデュエルゲーム？（後書き）

オーズがセイヤー！
ブレイドはウェーイ！

個性は大切、だけど公式は最近ふざけすぎだと思いますｗ
ライジェネとかクラヒとかもっと気合いれろよｗｗ

あとクラヒオーズのギャレンとの掛け合いは絶対わざとですよね
中々攻めてくるな公式……さすがだぜ…

では、これで。次もよろしく！

2015

第９９話　？運命ノ切リ札？（前書き）

えっと、すいません！
ちょっと次の更新は未定で

いや……忙しいです

ではどうぞ！

2016

第９９話　？運命ノ切リ札？

「ウォオオオッ！」

『ハァァアアッ！』

ブレイドはブレイラウザーを、キングはオールオーバーを手にすると同時に地面に着地した。
そして同時に斬りつける！

ぶつかる剣と剣。にらみ合う二人ッ！！

「おうおう、もういい加減…降参してもいいのよッキングちゃん！」

『馬鹿を言え、貴様が私のバックルを展開させるかそれともお前の命が先に消えるか？

この２つ以外に決着はないッ！』

そして、その結末は…貴様の死で終わる！

キングの渾身の一撃をブレイドは防御しきれずに大きく吹き飛んでしまう。
口中に広がる血の味、バウンドし叩きつけられた瞬間飛ぶ意識。

「うぅぅう……」

何とかその体を起こし、剣を構える。
ぼやける視界の先、陽炎の中に佇むキングもまた剣を構えていた。

まだ、終わらない。両者が感じる戦いという証明！

『普通の人間ならばもう十は死んでいただろう、
…にも関わらずまだ貴様が立っていられるのは
ブレイドの鎧を纏っているだけではないな……』

「・・・」

ボロボロになりながらもまだブレイドの闘志は死んではいない。
それがキングにとっては疑問だった。

愛する者の為に戦う人間が稀に見せるこの現象…

キングの心にその事についてもっと知りたいという感情が少し湧き上がった。

『もう一度聞く、その女の事を愛してはいないのか?』

「・・・さあね」

『?』

「何か俺でも分からんわ。でもあの女は…あんな馬鹿な事で死ぬべきじゃねぇ。
今まで散々俺を馬鹿にしといて勝ち逃げなんてさせるかよ。
殺すなら俺がぶっ殺してやるってんだ……
それに、約束があるんでね。アイツとは」

『ますます分からんな。そんな女の為に命を賭けると？
小さな約束の為に苦痛を受けると？』

「……そうだな。自分でも馬鹿だと思うよ、本当に。
現に今死ぬ程体がイテェ…」

『お前は死ぬかもしれんのだ。ソレを理解していたのか？』

「ああ、というかお前に勝つ確立なんて無いに等しかったろうよ。
それこそ死亡フラグとかじゃなくて確定事項の中に突っ込もうとしてるくらいよ」

あーあ、とブレイドはヤケになったように大声で叫ぶ。

この戦いが終わったら…とか、

冗談じゃない！俺は死にたくないんだぁぁぁ…とか、

急に過去振り返っちゃったりさぁ…死亡フラグばっかじゃんかよ俺。

確実に死ぬね普通

『・・・』

キングは黙っている、それはブレイドが何を言っているのか分からないからではない。
彼の中から溢れんばかりの闘気を感じていたからだ。

どんどんそれは膨れ上がり、キングですら黙らせる程に…

「だけどな…どれだけ死への伏線とか恐怖とか膨れ上げても――」

『・・・』

二人は剣を構えなおした。それは再び訪れる開戦の意味

「たった一つの思い出がソレを凌駕する。
たった一つの涙が…その死への恐怖を――」

『・・・！！』

「破壊するんだよぉおおぉぉッッ！！」

二人が同時に出した突きがぶつかりあう、二人の剣の先は見事に重なっていた。
しかし二人はその奇跡の様な光景になんのリアクションも起こさずすぐにまた斬りかかる！

両者の全力を込めた一撃と一撃、あまりの威力に二人の体は大きく後ずさる。
それでもまた二人は走り出す。

もうただ我武者羅に、ひたすらに勝利だけを考えて見栄えなど気にはしない。
二人の戦いは他人から見ればとても美しいとはいえないモノだろう。

だが二人にそんな事を気にする意味も理由もない、ただ相手を殺すだけ。
決闘という名の殺し合いなのだ。

相手が憎い訳ではない、思いを成就する為剣をふるう。
救うため、試すため。ブレイドもキングもただそれだけを考えて剣を打ち付けた！

『っ！？』

何かがおかしい！

キングは焦りを覚える、何故かブレイドの動きが読めない。
剣の動きに統一性が全く無い！まるで数撃ごとに人が変わっているようだ。

「ウラァアアアアアッ！」

『ウッ！グォオオオ！！』

キングの装甲が激しく削られる。
最初とはまるで動きが違う！？

剣が見切れない！

そう、椿は彼にしかできない戦い方にシフトチェンジしたのだ。
それはまさに彼がこの日まで見続けていた様々なアニメやゲーム。
それらに出てくる剣を使った技。それを今、椿は真似している！

昔は真似をしようとしてもできないモノばかりだった。
だが今、ブレイドのステータスを得た彼はあの日できなかった事をやってのける。
キングが剣を見切れないのは当然だ。
なぜなら今、彼の戦い方は何人ものキャラクターのモノなのだから

「オラァァァアアアアアアアッッッ！！」

『グワァアアアッ！！』

ついにブレイドはキングの膝を地面へとつかせた。
それを合図とし、ブレイドは一旦後ろへ多きく跳ぶ

「『オォォオオオオオオオオオ！！』」

両者は覚悟を決めた。

そう、決着をつける！

どこから攻めるか？

どこを守るか？

唐突に訪れる終わり。二人は剣を構えて確実に決めるタイミングを探る…！

「ッ！！」

先に仕掛けたのはブレイドだった。
まさに賭け、ブレイドはブレイラウザーを蹴った！
武器を捨てかねない危険な賭け！
だが、想像もしていない攻撃にキングもまた対処が遅れる。

『グッ！』

瞬間的に剣を盾にしてブレイラウザーを弾いた。
が、しかし目の前にいたのは…

「終わりだぁぁぁあああッ！！」

ブレイドはキングに蹴りを入れると同時に飛び上がる。
そして手を突き上げて弾かれたブレイラウザーを掴んだ！

そして振り下ろすっ！　キングを一刀両断する為にッ！

『クッッ！！オオォオオオ！』

怯むキング、勝利を確信するブレイド。
だがキングとて何度も戦いを重ねてきた経験者なのだ。
思考が追いつかなくても、体が反応していた！

振り下ろされた腕に重なるように剣を構えた。
ただ構えたその剣だが、ブレイドの勢いが重なり…ギロチンとなる。

「――――ッッッ！！アアアアアアアアアアアアッッ！！」

何かが空に舞った。

そう…それは腕だった。

ブレイドの…左腕。

『・・・』

吹き上がる鮮血、絶叫し地面に膝を着くブレイド。
腕を失った彼にもう勝利はない。

キングもまた勝利を確信した、随分不思議な人間だった。
せめてもう苦しまないように息の根を止めてやろう。

そうキングが思ったとき、ふと違和感を感じた。

確か…最初ブレイドが振り上げた手は右の筈だ……

――だが、振り下ろした手は左腕……

『！！！！！』

そして、気づいた。
切断され地面に落ちたブレイドの左腕。

だがどこを見ても周りにブレイラウザーはない！

と言う事は――ッ！

『フェイクかッッ！！』

「アアアアアアアアアアッッ！！」

キングの目の前でブレイドは踏み込んでいた。

膝を着いていたのではない！

全てを決める一撃の力を込めていたのだ！

そして苦痛の絶叫だと思っていたモノも違う！
苦痛の中に勝利の雄たけびを込めていたのだッ！

『腕を犠牲にしたと言うのかッッ！！？？』

元々まともに挑んで勝てるなんて思ってねぇさ。
腕の一本くらいやるよ、でも……

代わりにお前らの力を貰うぜ

「ウァァアアァアアアァァアアッッ！！」

右手に持ったブレイラウザーがキングの顔面に突き刺さる！
それだけでは終わらない！！

「俺の勝ちだァァァァァァ！！
キングゥゥウウウウウゥゥウウウゥゥウッッッ！！！」

ブレイドは飛び蹴りで、突き刺さったラウザーをさらに深く突き立てた！

「――――――ッッ」

俺の――ッ

勝ち――だ・・・

ブレイドの意識はそこで途絶えたのだった。

第９９話　？運命ノ切リ札？（後書き）

はい、と言う訳でね……

ん、どうかなもう少し長くしても良かったかな？
ではまあ今回はこれで

次もよろしく！

第１００話　番外編　新〇話×誕△生□！（前書き）

緊急更新ってなもんですｗ
理由としましては、まずよくよく考えたら１００話目じゃないか！
やはり１００にはちょっとした特別なモノをやろうかなとｗｗ

だから今回の話はブレイド編とは全く関係ありません。
なので、前回からの雰囲気が壊れてしまうのは嫌だと言う人は
今回の話をまだ見ない事をおススメします

ではどうぞ！

第１００話　番外編　新〇話×誕△生□！

Ｅｐｉｓｏｄｅ　？？？

世界は広い、数ある世界は互いに干渉しうる事なく均衡を保ち続けていた。

しかし、その秩序が音をたてて崩れていく。
ある世界で一人の少年が決意を固め、少女を救う為に戦うと言うありがちな展開、そんな物語が紡がれる。

だが世界は決してその一つではない。
誰かが世界のどこかで命をかけて戦っているさなか、全く関係ない世界にいる人間もいるのだ。

観測された場面が全てではない。

そう、もしかしたら今この瞬間に世界の命運を賭けて戦っている人間やらがいる

……かもしれないのだ。

「だが、そんな事はどうでもいい」

明日世界が滅びようが、今この瞬間が何よりも大切ではないか？

「……ッ！！」

博士！　成功です！

「フッ……」

そう、世界なんてちっぽけな箱庭だ。所詮僕達は井の中の蛙。
世界を知らなければ考え方が固定されるつまらん生き物、だが自分はそうじゃない。

「上出来だ馬鹿助手。ほめてやる」

「あぁぁあ、やっと完成ですかぁ……」

長かった……そう言って助手は涙を流す。
それだけの努力と苦労がこのベルトには詰まっているのだ。

「やはり僕の考えは正しかった。間抜けでッ！
硬いッ！馬鹿共は、僕の考えを鼻で笑い罵倒したッ」

「あー、確かにあれは酷かったですね……」

そう、常識なんてくだらないモノに縛られた馬鹿に世界は理解できない。

理論は理解できはしない！

「僕の理論は正しい、そうだろう助手くん？」

「そ、そうっすね」

助手はプルプルと震える手でベルトを博士に手渡す。
本当に長かった、本当に苦労した！
助手は涙を浮かべてベルトを見ていた。

「はんっ、学会の老人共め……
子供である僕に負けるのはさぞ悔しかろうな。
ククク！　驚く顔が目に浮かぶ」

「そう言うところが子供っぽくないんじゃないかな……」

「ん、なんか言ったか？」

「い、いえ何もぉ……」

まあいいと、博士と言われた少年は鼻を鳴らす。
助手の少女も愛想笑いのようなモノを浮かべてウハウハと笑った。
白衣の二人はまさに科学者の風貌だろう。

「さて、完璧に完成したのはどれだけかな助手くん？」

「あ、はい。えっと……」

助手は待ってましたと言わんばかりに手をたたくと、デスクに『ソ

レ』を並べていく。

「まず、ロケットでしょ。あとはランチャーに……レーダー。最後にドリルです」

「……は!?　まさか終わりか？」

「・・・」

「四つ!?」

この……ッ

「馬鹿助手がぁあああああああああッ！！」

「ひいいいいいいいい！！」

博士は助手より年下に見えるが、どうやら権力では断然上に立っているようだ。
できの悪い部下にお叱りの言葉……
もとい罵倒じみた言葉を浴びせる。

「説明書通りにやれば八個はいけただろうがッ！！
馬鹿かお前は！？　むしろ天才か？

こんだけ時間があってたった四個しか作れないとはなぁぁあ！」

「すすすいません！　でも――」

「でももクソもあるかぁッ！！　この役立たずが！」

「うぅぅう酷い……ッ」

フンッと鼻を鳴らして博士は助手をにらみつける。
涙目になる助手をもう一度罵倒すると、その行動とは反対にジュースの缶を投げつける。

「え……？」

「まあとんだ馬鹿っぷりを見せてくれた訳だが、貢献したのもまた事実だろう。
礼だ、くれてやろう」

「は、博士ぇ！！」

笑顔になって駆け寄ってくる助手をさらりとかわすと、博士はベルトにそれら――ッ

『スイッチ』を装填させていく。

『Ｒｏｃｋｅｔ！』『Ｌａｕｎｃｈｅｒ！』

博士は淡々とスイッチをベルトに装填させていく。
しかしすぐに上機嫌になって笑い出した。やはり電子音はいい！そう思わないか助手？

そう言って博士は助手へと笑いかける。

助手も投げやりに返すとベルトをじっと見つめた。

「焦るな焦るな！」

博士と助手は興奮を抑えないようで、スイッチを全て装填すると仲良く笑い合う。

さあ、いよいよ起動だ！！

「わ、私やっていいですかね？」

「はぁッ！？」

「い、いいじゃないっすか！　私にやらせてくださいよ！」

「ふざけるなッ！　僕がやるに決まってるだろ！」

二人はベルトを互いに強くつかんで放さない！

「おいっ……放せ馬鹿助手ッ！！」

「いいじゃないっすかぁぁ！」

これから空間移動実験も控えてるんですよね？

だったら博士の体になんかあったら大変じゃないっすか！

助手の仕事は博士のサポート！

博士を守る事！

助手のマシンガンの様な言い分を博士は迷わず切り捨てる。

「ふざけるなっ！　調子のいい事いいやがって！
はじめて聞いたぞサポートなんての！
おらっ、早く放せ！」

「いやですぅぅうううう！」

尚も力を込める二人、そして……

「「あ」」

ベルトが二人の手をすっぽ抜けて――

そのまま水槽にポチャリと……

「「あああああああああああああっ！！」」

新しい玩具にクマノミ達ははしゃぎ回る。

ほほえましい光景だろうか？

他人が見ればそうかもしれない。

だが――ッ

「まだ防水加工……してないのにぃいいい！」

「ーーーぁッ」

「え？」

こんの馬鹿助手がぁあああッッッッ！！！

「ひぇーん！！」

研究所に大声が響き渡ったのだった……

さて、彼らが新たな物語として認められる日はくるのだろうか？
はじまりはじまりぃー……ってなモノである

第１００話　番外編　　新〇話×誕△生□！（後書き）

と言う事でこの話は種みたいなモンですねｗ
まだこの種がどう言うモノになるのか、僕さえちょっと分からないです。

メインキャラになる可能性も、サブに終わる可能性も
秘めた種と言う事でｗｗ

いやしかし、このＥｐｉｓｏｄｅ　ＤＥＣＡＤＥも無事に１００話をむかえる事ができました
これも皆様のおかげでございます！

読んでくださる方、お気に入りにしてくださる方
どうもありがとうございます！

ではこの辺で、次もよろしく！

第１０１話　?笑う者・嘆く者?（前書き）

くそッ！　俺はエクシリアを買うべきなのかッ！?

……はいｗ

と言う訳でどうぞ

第１０１話　?笑う者・嘆く者?

『・・・』

キングは目の前で気を失っている椿を見ていた。
変身が解かれた彼の体はもう傷だらけ、腕も片方なくなっていて顔色も悪い。
このままだと確実に死ぬだろう。

だが――――

『・・・クイーン』

『はい』

カテゴリークイーン。
カプリコーンアンデッドは、気を失っている椿に近づいていく。
その手には彼の切断された腕が握られており、クイーンはそれを切

断面に合わせた。
すると、淡い光と共に切断された筈の腕が元通りにくっついたのだ。
それだけではなく、傷だらけだった体も全快とまではいかないものの見事に癒えていた。

『皆の者。異論は無いな？』

キングの言葉に周りで戦いを見ていたアンデッド達が一斉に椿の周りにやってくる。
そして、その膝をつき忠誠の証を見せる。
今倒れている椿こそ、彼らの新たなる主人なのだから。

『まさか、この様な子供に私が…負けるとはな』

キングのバックルは確かに展開していた。
それは、守輪椿という人間が勝利したという証拠。

キングは剣を掲げると新たなマスターに忠誠を誓う。

『我らがアンデッド、ここに新たなる契約者の誕生を示そう！
守輪椿に祝福を！』

アンデッドの歓声と共に彼らはその姿をカードに変える、その数は十四枚。
エースからキングを含めた十三の力と椿が求めていた…一枚のカード。
それらは椿の周りを囲むように回転し、ブレイラウザーへと収められたのだった。

皆、聞えるかい？

落ち着いて聞いて欲しい、咲夜ちゃんがいなくなったんだ。
保健室からね……

窓が開いていたところを見るにそこから外に出て行ったんだと思う。
おそらく、彼女はジョーカーになったんだと思う。

ローチ達も活発になったし、なにより数が増えてきた。
くれぐれも気をつけて探して欲しい。

あと、椿くんもいないんだ。

きっと――

……さあ、私達は私達にできる事をやろう。

とにかくまずは咲夜ちゃんを見つけて確保する。
ローチを減らしつつ人命救助を中心にね。

じゃあ皆、気をつけて！

翼からの電話を切ると、それぞれは行動にでる。

「くっ、想像以上にローチの数が多いな！」

「しかも、クラウンまで…」

咲夜を探したい、しかしローチが多いため街の人達が危険に晒されるのもまた現状である。
街の騎士団や学校からの総戦力を持ってしても勢いを抑えられるかどうか難しい。

そう、それにローチが尽きる事はない。
ローチはジョーカーを殺すまで無限に湧いてくるのだ。

咲夜を殺さない限り…

「「変身!」」

クウガと龍騎は互いにバイクを走らせ、ローチの群に突っ込んでいくのだった。

「どう…？アキラさん」

「ちょっと…待って…ください」

アキラは神経を集中して聴力を研ぎ澄ませる。
あの日一番最初の世界から得た特殊能力、『聴力の上昇』をフル活用して咲夜を探す事にしたのだ。

同じくディケイドクウガのペガサスで異質な音、
つまりジョーカーの発する笑い声を聞き取りその場所へ向う。

そう言う作戦だった。しかし、ジョーカーも移動している。
ペガサスでいつまでもソレを探すのは精神が持たないのだ。

しかし、アキラの聴力ならペガサスには及ばずとも肉体への負担はずっと少ない。

我夢、アキラ、司の３人は街中を足で移動しながら咲夜を探していた。
本当はもっと人数が欲しかったし、バイクで移動したいところではあったが余計な音をたててしまうため、バイクは諦めた。

（お願いします…ッ！　どうか！）

アキラは咲夜と椿の無事を祈って、神経を研ぎ澄ませる。

そしてそれは暫く進んだところだった、アキラが何かの笑い声を聞き取ったのは。
笑い続けるそれは間違いなくジョーカーだろう、三人はその場所に向って走っていく。

「・・・？」

だがアキラが聞き取った所に来てみるものの、誰もいない。

勘違いか？

それとも移動したのか？　肩を落とす三人。

「どうしたのガッガリしちゃってさ？　ヒャハハハハハ！」

「「「!?」」」

エネルギーで構成された弓矢が、我夢に向けて発射された。
その音を瞬時に捉えたアキラが我夢を庇い突き飛ばす！

おかげで我夢に怪我はないのだが…

「くぅッ…」

「アキラさんッ!!」

アキラの真っ白い靴下に赤い斑点が広がっていく。
苦痛の表情を浮かべるアキラ、我夢は能力を発動させアキラの治療に取り掛かる。

「ヤッタアアアア！！　命中！命中！　ヒャハハハ！」

「大丈夫か！？クソっ、変身！」
『カメンライド』『ディケイド！』

ディケイドは声が聞こえた方向に銃弾を放つ。
何かに弾かれる音、それと同時にカリスが現れる！

「ヒャハハハ！　順調に世界の壊滅は近づいてますよ！
このままならあと一週間で、この世界中にローチが繁殖するでし

ょうね！

クヒヒヒヒ！」

カリスは全てが順調と楽しそうに笑う。

自分の思い通りにいく世界がいかに滑稽で愚かで愉快で最高なものか。

もうこの世界はカリス、道化師の玩具箱でしかない。

ここに存在する生命全ては彼の玩具なのだ。

「お前ッ！何者だ！？」

「んー？　クフフフ…それはコッチの台詞なんですけどねぇ？

アンデッドの力無しで戦えるヤツがいたのは知らなかったなぁ」

（・・・）

ディケイドは考える、ここで檻に囲まれた世界の事を持ち出すかどうかだ。

向こうはコチラの存在をまるで知らない。
そんな相手にわざわざ情報を与えるのはどうだろうか？

安易な問いかけはコチラの身を危険に晒すことになる。
ディケイドは考えた結果、あえてあの世界の事は黙っていた。

完全に拘束した時にでも問い詰めてやる！

一方のカリスは……

ま、でもいいか。どうせこの世界は滅びるんだしね。

そう言ってまた笑う。

幸いにもそこまで興味を持たなかったようだ。
彼は自分の実験以外はさほど興味がない、そう言う性格だった。

「正直、どこのどいつかがジョーカーになる瞬間を見れなかったのは残念だけど
もういいですよ。ブラックカードスリーブももっと改良したいから…」

もう、この世界はいいや。滅びましょう！
カリスはそう決めたと手を叩く。

「ふざけんなっ！させるかよ！」

ライドブッカーを構えてカリスに斬りかかろうとするディケイド。
しかしカリスはあくまでも楽しそうに、それを呼んだ。

「・・・なっ！？」

カリスの合図と共に現れたのは二体のクラウンオルフェノク。
そしてそのクラウン達が引きずっていたのは……

「ッ……！！」

檻だった。その中には子供達が入れられており、泣き叫んでいる。
ざっと五人くらいだろうか？

子供達はディケイドや何に決め付けるでもなく助けを求めていた。
その泣き声を聞いてカリスはまた笑う。

笑い続ける、不快な笑い声。

「意味、分かりますかね？
ヒャハハ！変な動きしたら…」

カリスは弓をディケイドに向ける。しかしディケイドは動けない！

動いたら……

「そうそう、動いたら子供達を殺しますよ？
ヒャハハハハ！　アーッハハハハハハ！！」

ディケイドの装甲から火花が散る。

体に衝撃が走り思わず苦痛の声を漏らす！

「グッ！！」

また、さらにもう一回。

またさらに！

どんどん打ち込まれる弓矢。
抵抗はできない、カリスはそれを知っている。

だからこそディケイドを苦しめるような場所に打ち込んでいく。

直ぐに殺してベルトを調べたいという気持ちもあったが、
なによりそのショーを楽しみたいたいという彼の性格が優先されたのだ。

「ヒャハハハ！避けないんですかね？
あ！そうか、避けたら子供達が死ぬからか！

アハハハハハッ！」

今度はカリスアローで直接ディケイドを切り裂いていく。

このままでは負ける！
ファイズアクセルで子供達を……

駄目だ！カメンライドの時間がでかすぎる！
どうすることもできない無力感と悔しさがディケイドを包む。

尚も楽しそうに斬りつけてくるカリス、どうする事もできないディケイド。

カリスはキノコを放り投げてさらに兵力を増加させていく
かなり危険な状況だ……

だが、そんな時だった。
クラウンの体に無数の銃弾が打ち込まれたのは

「！」

「ッ！」

振り返る二人、爆発するクラウンと粉々に粉砕される檻。
そこにいたのはギャレンとレンゲル！

「ダイアナ！　クロハ！」

「司！大丈夫！？」

「今助けるよ！」『リモート』

レンゲルは、ギャレンのキングであるギラファアンデッドを解放すると
我夢とアキラの護衛として設置する。

襲い掛かるクラウン達を次々に爆散させていくキング、ギラファ。
彼とて王を名乗る存在、クラウンが勝てる道理などない。
圧倒的な王の力の前に次々とクラウン達は無へと帰って行く

「・・・おい！」

「あぁッッ！？」

「おかえしだ」

『ファイナルアタックライド』『ディディディディケイド！』

「ヒッ！？」

カリスの腹部に衝撃が走る。
見れば、ディケイドが銃を突きつけていた！
そのままゼロ距離でディケイドはディメンションブラストを発射する！！

「ゴワァアアアアアアアアッッ！！！」

吹き飛ぶカリス！

ホログラムカードを経由していない為威力は弱いが
それでもカリスに十分なダメージを与えられた

ギャレンとレンゲルも加わり、三人でカリスと対峙する！！

第１０１話　?笑う者・嘆く者?（後書き）

カードの説明はまた今度やろうかなと思ってます
まあ基本的には同じだけど、ＪＱＫが全然違うって事で

ではこれで、次もよろしく！

第１０２話　？回答（ラビリンス）？（前書き）

まあフォーゼの幹部クラスは十二星座なんでしょうね

どうしよう……

自分の星座がネタキャラならまだしも噛ませだったらｗｗ

ではどうぞ！

第１０２話　？回答（ラビリンス）？

「今度は逃がさない！」

「覚悟する事ねッ！」

「ウガァアアアアアア！またテメェらかああ！」

カリスは怒りに任せて叫びをあげる。

すると、その体が禍々しいものへと変化した！

例えるならキノコだろう、不気味なキノコが装飾となってカリスの体に付着する。

禍々しいその姿は一瞬三人の思考を停止させるだけの威力を発揮する

「ギャハハハ！ぶっ殺してやるよ！ライダー！」

異形の姿となったカリスアローを構え、カリスは走り出す。
三人もまたそれぞれの武器を構えて走り出した。

「我夢！アキラ！早く子供達を連れて学校に戻るんだ！
キングがついてるとはいえ、今のままじゃ咲夜を止められない！」

「は、はい！」

3人と、カリスは激しい火花を散らして我夢達から離れていく。
残された我夢とアキラは一旦学校に戻る事を決意するのだった。

「くっ……」

「ご、ごめんなさい！　アキラさんっ！　僕のせいで…」

「我夢君のせいじゃありませんよ。気にしないで」

手を貸してくれませんか？
そう言ってアキラは微笑む。

我夢は少し戸惑いながらもその手を握るのだった。

（本当なら…好きな人の手を握るって…とても嬉しいことなのかな）

今の我夢には罪悪感しかない、切にアキラへの謝罪の気持ちしかなかった。
二人はまだ泣きじゃくっている子供達をなだめるとギラファに合図をだす。

『よし、ならば学校まで行こうか。
まだローチもそこまでの数ではない、このまま直ぐに――』

だが、ギラファはその言葉を止める。

「どうしたんですか？」

「・・・」

そしてアキラの耳にも入ったその声

キヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ

『ハァ…どうやら今日は運が悪いらしい』

「先輩！！」

「！」

草むらから探し人が現れる。
しかしもうその外見は完全に人ではなくなっていた。

アキラは思わず目を覆いたくなる、もう面影すらない。
どうして……

そこにいたのは…

『キヒヒヒヒヒ！』

化け物、ジョーカーだった。

『道化師にひかれ、やって来たか…』

『ヒヒヒヒヒッ！』

ギラファの心に焦りが生まれる。

いくら自分がキングの称号を得ていようともジョーカーの前では無力に等しい。

こちらの攻撃は通用せず、対して向こうの攻撃で自分は一撃で敗北する。

護衛を任された以上、子供達は守りたいものだが…

特攻するにしても時間かせぎにすらならないだろう。

ギラファは詰んでいたのだ、ここでジョーカーに出会うのは完全に計算外だった。

「先輩ッ僕です！　我夢ですッ！」

「咲夜先輩ッッ！！」

二人の必死の説得ももはや無意味だった。
もうそこにいるのは咲夜ではない、ジョーカーなのだ。

いや…腕の部分に肌色が見える。
ジョーカーになりきれてない部分があるところをみると、
完全にジョーカーにはまだなっていないのかもしれない。

しかしその部分も僅かなもの、あと少しで尊敬していた先輩は化け物に変わる。

いや、もはや理性が無い時点で変わらないのかもしれないが…

「・・・」

尚も必死に説得しているアキラをぼんやりと我夢は見詰める。
アキラはなんとかして咲夜の自我を呼び起こせないかと足掻くが、

無駄のようだ。

ジョーカーは彼女の声がおかしいのか？
ケラケラと笑い。ブーメランを構えた

「……ッ　アキラさん、ギラファさん。僕に考えがあります」

『・・・』

「何ですか、我夢君！？」

何か作戦があるのか？　アキラは目を輝かせる。
しかし、我夢の口からでてきたのはそんな希望に満ちた言葉ではなかった。

「僕を置いて、学校へ行ってください」

「……え？」

『・・・』

それはつまり・・・

何を…言ってるんですか？
アキラの言葉に我夢はハッキリと返す。
それはあまりにも真っ直ぐな目だった。

「先輩は僕がひきつけます、その間にアキラさん達は逃げてください。
あと、できれば応援を頼みます…ッ」

「そ、そんな!?　我夢君、駄目ですそんなのっ！　危険ですよ！」

「分かってます！　でも、こうしないと…ッ！

さあ、行ってください。もう時間がありません！　お願いします！
このままじゃ全滅もあるんです！

だからどうかッ！」

我夢の言葉どおりジョーカーは、我夢達を狙うターゲットだと認識する。
そして近づく足を速める！

もう迷っている時間は無い！

もちろんだからと言ってそう簡単に容認できる訳もないのだが……
アキラは我夢を引き止める為に食い下がる。
当たり前だ、ここで我夢を残すと言う事は結果として我夢を死の危険にさらす事になる

いくら咲夜だろうとも今はジョーカーの支配下にいるのだ。
まだ完璧にジョーカーじゃ無いためにウイルスを生成する事はできないだろうが
鋭い爪や殺傷能力の高いブーメランは存在しているのだから

「で、でも…！」

「お願いします！　もう時間がないんです！」

「そんなの勝手です！　じゃあ、私も残りま――――」

「天美ッッ！！！」

「っ！！」

普段の我夢からは想像できない声、女性の様に高い声だがナイフの様な鋭さがあった。

そして『天美』と言う呼び方。

アキラは思わず驚き、ほんの少しの恐怖を覚える。

こんな彼を始めて見るかもしれない……

「いい加減にしてください！　今の天美じゃ的になるだけだろ！分からないのか！？

僕を庇ってくれた事は本当に感謝してるし申し訳ないと思う！

でも理解してくれよ！　それとこれとは話が違うんだぞ！？

下手をすれば全員死ぬんだぞ！」

「で、でも…ッ！　それじゃあ我夢くんはどうなるんですかッ！！」

「……ッ　ギラファさん！」

『・・・いいのか？』

ギラファの問いに我夢は迷う事無く頷く。
ギラファもまた頷くと、アキラと子供達を抱えて走り出した。

「そんなっ！？」

アキラはまだ納得していない様だったが、ギラファの力にはかなわない。
そのままギラファ達は走り去ってしまった。

ジョーカーはそれを見てこそはいたが、追う事はしない。
当然だ、目の前に玩具が置いてあるのにそれで遊ばないのはおかしな話。

ジョーカーはブーメランを構えると、我夢の周りを跳び回り始めた！

「あーあ…アキラさんに嫌われちゃったかなぁ」

素直に君を傷つけたくない…って言えばよかったのだろうか？
駄目だ、キャラじゃない。やっぱり自虐的になってしまう

「僕ら、似てると思いませんか？　つくづく損な性格ですよね」

ジョーカーはまだ完全にジョーカーにはなっていない、
つまりジョーカーウイルスを注入される事もない。我夢はソレを確信する。

そして、自分に与えられた特殊能力である『回復』を発動させてみる

ああ、大丈夫……ちゃんと使えるな

「さて、咲夜先輩。頑張ってください、今から僕も」

死ぬ気で頑張りますから…ね？

我夢はため息をついて走り出すのだった。

「咲夜先輩！お願いですからやめてください！」

などと言って止めるのであれば誰も苦労はしない。
ジョーカーは笑いながら我夢に攻撃を仕掛けていく、紙一重で避ける我夢。

襲い掛かる恐怖を抑えながら冷静に回避ルートを予測していく

「・・・・・・」

攻撃の瞬間若干ジョーカーの動きが鈍るのを確かに感じた。
ソレは咲夜の精神がまだ死んではいないと言う事だろう。

やはり凄いと、我夢は咲夜に改めて尊敬の念を覚える。

「グッ！！アァアアアアア！」

だが、攻撃が鈍るだけで攻撃をしない訳ではない。
我夢の足に激しい痛みが走る！

見ると、地面からローチが現れその爪で我夢の足を切り裂いていた。
毒を注入される前に離れ、体勢を立て直す我夢。

「咲夜先輩！　これは鬼ごっこです！　貴女と僕、二人だけのッッ！！！」

『キヒッ？』

その言葉に立ち止まるジョーカー。
少し考えたような動きをとると我夢の周りに出現させたローチを消し去る。

「・・・」

はやり、あくまでもアッチは遊んでいるだけなのか……

我夢は歯を食いしばる。

ふざけた事を…

『ヒヒヒヒヒッ！』

「くぅうッッ」

ジョーカーの蹴りをかわす我夢、しかし足に赤い円がどんどん広がっていく。
すぐに能力で足の怪我を癒すが回復が追いつかない。

このままでは攻撃を避ける事が難しくなる、それと同時に迫るブーメラン！

「ッッ！！」

気づいた時にはもうブーメランが自分の足にめり込んでいた。
激しい痛みと反転する景色。

地面に倒れたと理解する前に再び背中に衝撃が走る。
さらにぐちゃぐちゃになる景色、蹴飛ばされた？
全てを理解した時、自分は地面に這いつくばっているではないか。

はやく立ち上がらないとまた攻撃が…

『キヒヒヒ！』

「！？」

また一瞬ジョーカーの動きが止まる、その隙に全ての力を振り絞って後ろへ跳んだ。
回復と言う言葉が馬鹿らしく感じる程、体からは血が流れている。

しかし、こんなに寒い物だったとは…

「クッ…つぅ…」

まだ、倒れないでくれよ…僕。
我夢は必死に咲夜の自我を呼び覚まそうと声をあげる。

だが、咲夜……ジョーカーは笑い続けるだけ。もう言葉すら通じないのか？

いや、違う。

例えそうだったとしても声をかけるのを止めてはならない。
我夢は自分の体が徐々に回復していくのを感じると、もう一度大声で咲夜の名前を呼んだ。

第１０２話　？回答（ラビリンス）？（後書き）

まあ我夢はディケイド版のアスム、イメージですかね
まああくまでもイメージですんで深く考えないでくださいね

ではこれで、次もよろしく！

第１０３話　?悲壮のツーゲーム?（前書き）

実は……割とあと少しでブレイド編は終わりだったりします
なのに、もうストックがそこをつきてきたり…ｗｗ

うーん、ちょっと更新が不定期になりそうかな
申し訳ないです！
なるべく早くしますんで、ではどうぞ！

第１０３話　?悲壮のツーゲーム?

「咲夜先輩ッッ！　起きてください！！　咲――ッ…」

我夢は自分の愚かさを嘆く。
まだ回復しきれていなかったのに無茶をするから……目まいがして意識が飛びそうになる。

一瞬、だけど相手には充分だろう。
ジョーカーはスキップで我夢のところまで移動すると我夢の顔を掴んで地面に叩きつける！

「――――ァ」

真っ黒になる視界、また再び体中に衝撃がはしる。
ジョーカーは我夢の体を軽々と持ち上げあたりに叩きつけた。

何度も、

何度も、

何度も

「――――――」

ジョーカーは我夢の足を持って乱暴に振り回す。
岩があれば激しく打ちつけ、木があれば我夢をバットの様にして叩きつける。
何も無ければ引きずりまわし、投げ飛ばす。

舞い散る血液はまるで華のように辺りを舞う。
地面には花びらがたくさん落ちているではないか、それは赤黒い絨毯(じゅうたん)のようだ

「ッ……ァ……」

もう痛みを通り越して何も感じられなくなっていた。

こんなに寒いのに汗まみれなのは何でだろう？

この汗が赤黒いのは何で？

回復を発動させる？

意味なんてあるのだろうか？

既にもう我夢の思考までもが麻痺していた。

音が遠い、視界が悪い、体中が鈍い。

だがそれなのに不快な笑い声だけは鮮明に聞えてきた。

『キヒヒヒヒヒ！』

もう、咲夜の声ではなくなっている。

徐々にジョーカー化が進んでいるのだろう、早くなんとかしなければ…

我夢は立ち上がろうと足に力を込める。

「・・・」

だが、気づいた。

倒れていたと思っていた自分は今ジョーカーに持ち上げられているのだと。

足が宙に浮いている。

そうか…自分は今、寝転んですらいなかったのだ……

失われる平衡感覚、頭に響く耳鳴りが邪魔だ。

それより雪が降っているのか？　なんなんだこの寒さは？

なんだか気分が悪い、眠くなってきた。

『キヒヒヒッ、ガ…ヒヒヒヒヒ！ム…』

「……ッ……？」

何か、今…聞こえ……頭……痛……い

『キヒヒヒ！ガ…ム…！ヒヒヒヒヒ！！』

「・・・」

『ガ……ムッッ！！キヒヒヒ！』

「！！」

今、何て……ッ

『ヒヒヒッ！　ハヤク…ヒヒヒヒ！　ニゲ…ル……ンダヒヒヒヒ！』

「せん……ぱい……」

回復によって視界と聴力が元に戻っていく。
そして確認した、確かにジョーカーの口からその言葉が発せられているのを！

『ニゲテ…クレッ……デ…ナイト…ワタ…シ…ハ……』

「！！」

ジョーカーは確かにその言葉を言った。
声こそは本人から程遠いものの、笑い声を発する事なく確かに言ったのだ。

「先輩…」

振り下ろされる拳は鈍く弱々しい、我夢は足を引きずりながらも何とかかわす事ができた。
次の一撃も、その次の一撃もジョーカーの動きは鈍い。

鮮明になっていく意識と軽くなっていく体。

「咲夜先輩！！」

『ガ…ム……！　ハヤク…ニゲ…ル…ンダ！』

ジョーカーはフラフラと頭を抱えてうめき声を上げる。
それはまさに我夢にとっては希望の光！

「悪いけど、聞けませんよ！」

我夢はジョーカに駆け寄るとその肩を強く揺さぶる。
そして何度も何度も咲夜の名前を呼んだ。

「咲夜先輩！　咲夜先輩ッ！！
お願いです、ジョーカーなんかに負けないでください！！」

『ダメダ…ガムッ……
モウ…ワタシは……
ワタシデ…ナ…クナル…ッ！
』

「そんなっ！？」

『ダ…カラ……オネ…ガイダ…
ソノマエニ…ワタシ…ヲ』

「咲夜…先輩…」

『コロシテ…クレ……』

「・・・」

『――ヒヒッ…！キヒヒヒヒヒヒ！！』

理性を失ったジョーカーが口を開けて我夢に迫った。
とっさに右腕を盾にして防ぐが、そんな事はお構い無しに思い切り噛み付かれる。

噴き出る鮮血と、常人ならば狂いたくなる程の激痛。
だが、我夢の心は冷静なものだった。

「どうして…ッ」

『キヒヒヒヒヒ！！』

「どうしてなんだよ！！」

我夢はジョーカーの足を払いそのまま投げ飛ばす。
うまく口を離してくれたからよかったが、下手をすれば噛み千切られていただろう。

溢れてくる血、既に我夢の服は本来の色を忘れるくらい汚れていた。
だが我夢にとってはもうどうでもいい、何を失おうとも目の前にいる先輩をただ切に救いたかった。

咲夜と特別な出会い方をした訳でも

椿の様に長い付き合いがある訳でも

アキラの様に同姓だからこその絆がある訳でもない。

だが、今まで四人で過ごした日々は確かにこの胸に刻まれている。

『おいコラ！椿！！また貴様は――』

『よぉ、我夢！遊びに来たぜ！え？練習はどうしたのかって？あ、あああ！疼く！疼きやがる！静まれ――』

『我夢君、先輩達とアイス食べに行きませんか？』

「・・・ッ！！！」

何気ない日々だった、だけど楽しかった。

書道や空手、柔道に琴や弓道。お茶の点て方までやっていた道場だ、
それなりに人は多い。
だけどずっと通っている我夢とアキラは、特別椿と咲夜との交流が
深かった。
そう、それだけの思い出があるのだ

咲夜には悩みを聞いてもらった事もある。大切で真剣な悩みだった。
アキラと仲良く慣れたのも咲夜がいたからこそかもしれない

「咲夜先輩！　お願いです！　お願いですから!!」

足に再び衝撃が走り、地面に叩きつけられる。
それでもまだ我夢は叫び続けた。

何度でも立ち上がってやる。だからどうか…

「諦めないでくださいよ！！　咲夜先輩！！」

いつも凛としてたじゃないですか…

だから、どうかこんなつまらない事で死ぬなんて言わないでくださいよ…

『ウッ……ァ…ァ……ア……』

ジョーカーの瞳から涙が溢れる。

だが、いずれその涙も止まるのだろう、いつの間にかジョーカーの腕から肌色が消えていた。

もう侵食は最終段階まで来ているのか？

もうすぐ完全に自我を失い、理性を失い、狂った道化に変わるのか
!?

『ガム……ドウシテ…ニゲテ…クレナインダ…?』

「僕が居なくなったら…ッ、
咲夜先輩はすぐにジョーカーに飲み込まれてしまうと感じました。
違っていたらすいません、無事に全部終わった後好きなだけ叱ってください」

『イヤダ……オマエ…ヲ……コロシタク…ナイ……』

「僕も先輩を置いて逃げるのは嫌ですね。
先輩には申し訳ないですけど…僕を殺したくないって気持ちが
理性を保つ理由になっているなら…利用させてもらいます」

『ガム……オネガ…イダ……オネガ…イダカ…ラ』

「・・・」

ごめんなさい。本当に……

我夢はもう一度ジョーカー…いや咲夜に謝るとその目を直視する。

振り下ろされる爪。我夢は歯を食いしばって覚悟を決めるが、彼女から視線を外す事はなかった

第１０３話　?悲壮のツーゲーム?（後書き）

補足説明として
ジョーカーウイルスもアンデッド扱いとします。

あとちょっとタグを変更したところがあります
この作品はこれからも変身者がオリジナルのケースが多々でてきますんで、どうかそこは割り切ってお楽しみください！

ではこれで、次もよろしく！

第１０４話　？ソノ選択ヲ？（前書き）

いよいよブレイド編も、残すところ後三話程度となりました
後書きでカードシステムの説明いれます

ではどうぞ！

第１０４話　？ソノ選択ヲ？

「なかなかの外道さだな。相原、ああ…嫌いではない」

「！」

『ウゥ…ァ…ァ……ア…ァ』

いきなり声がして二人が振り返ると、
気だるそうにクセっ毛をいじっている男が立っていた。
こんな殺伐とした状況の中でも光を放っているかの様なオーラは、
彼の本質そのものだろうか？

「ほぉ広瀬ぇ、イメチェンか？　だが止めておいた方がいい。
似合わないぞ、なんか…言いにくいが…その…虫みたいだ」

『ゥ……ム…シ……？　ッッ！　ヒヒイヒ…』

「ああ、そうだ。人の好みにけちをつける気はないが
昆虫系女子と言うのはどうだろう…？
それでは椿も引いてしまうぞ？」

『ウゥッ！！　アアアアヒヒヒ！　キヒッヒヒヒイヒ！！』

ジョーカーはブーメランを構えて、双護に狙いを……

「フ――ッ」

だが、天王路双護は走り出す。

特殊能力の移動速度上昇で、辺りを駆け回りジョーカーを翻弄する。
単純なジョーカーは双護から狙いを外さず、キョロキョロと双護を
目で追っていた。

その隙に我夢の体が支えられる。

「ッ？」

「大丈夫ですか？我夢君！」

我夢に向けられた優しい微笑み、思わず心が温かくなる。
夏美は我夢をゆっくりと起こすと、肩に手を回し移動する。

「我夢君は少し休んでいてくださいね！
次は私達が頑張っちゃいますからッ！」

「ッッ…すいませ……ん」

「いいんですよ、それと…ありがとうございました。
我夢君が咲夜ちゃんを止めておいてくれたからすぐに見つける事ができました！」

我夢はその言葉に微笑みで返すと、回復を発動させた。
同時にまた肩に触れる手。

「後は、アイツが来るまで…繋いで置くから。
ゆっくり休んでくれよ…我夢！」

「ありが――――」

緊張の糸が切れたのか、我夢の意識はそこで途切れてしまった。
回復の力があったから何とかなったものの、下手をすれば我夢は死んでいたのだ。

その事を理解して彼は覚悟を決める

「よし……ッ！」

『ガードベント』

覚悟を決めた龍騎は、盾を構えてジョーカーと対峙する。

「さあ、夏美！　双護！　気をつけろよ！」

「もっちろんですぁ！」

「フッ、ああ」

3人はジョーカーを囲むように立つと、声をそろえて言い放つ

「「「鬼さんコチラ！　手のなるほうへ！」」」

ジョーカーはそれを聞くと楽しそうに笑うのだった
遊び相手が増える、ジョーカーはまさに心躍る気分だったろう。

その後も傷つけない攻防は続いた。
双護が辺りを駆け回り、夏美が咲夜の名前を呼び続ける。
攻撃は龍騎が盾で防ぐと言う流れ。

「くっ、なかなか手ごわいな」

ジョーカーのブーメランが双護の頬を掠める。
全ての攻撃を龍騎で防ぐのは不可能だ、彼らにも命を落とすと言う緊張感が溢れてくる。

「ぜぇてぇえええ！　大丈夫です！　諦めないで！！」

夏美の声が辺りに轟く。
彼女の気合いが回りを奮い立たせて、戦いの恐怖に呑まれない勇気を与える！！

『ギヒイイヒヒヒヒヒヒヒイヒヒヒヒヒヒヒヒヒッッ！！』

「咲夜！！」

「咲夜ちゃん！！」

そして、クウガや、アギト達も加わりジョーカーは完全に包囲される。
しかし誰一人攻撃しない戦い、それが続くことに変わりは無い。

だが、そこに変化が訪れる。

「ヒャハハハ！　追いついてみてくださいよライダー！」

「クッ！」

「ギャハハ…ハ…は？」

カリスの強烈な弓が地上にいるディケイド達を拘束していく、
激しいラッシュのせいでディケイド達は防御する事しかできない！

上空をフロートの力で浮遊していたカリス、クラウンの群れとカリスアローでディケイド達と互角に戦っていたのだ。

だが、ついにそれを見つける。

「あ……あぁぁあ！！！

おいおいおい！ありゃジョーカーじゃないですか！

ヒャッホーウッッ！！！」

「なっ！！　待て！」

カリスは猛スピードでジョーカーの所へ向う！
やっと見つけた！

ジョーカーウイルスを活性化させるキノコでも与えて早くウイルスを広めなければ！！

「くそっ！ダイアナ！」

「ええ！わかっ――」

フージョンジャックを発動しようとしたギャレンの腕を誰かが掴む。

驚く三人にかける言葉

「俺がいく」

「「「！！」」」

三人の驚く顔をみて、ソイツは鼻を鳴らしてドヤ顔を決めたのだった。

仮面に隠れていても確かに伝わるその表情……

「お前ッ！」

「あれ？　誰か分かる？
やっぱイケメンのオーラでちゃってるのかしら！？」

そいつはニヤリと笑う。
いや、だからディケイドからは分からないが絶対そんな気がした。

『アブソーブ・クイーン』

『フュージョン・ジャック！！』

「ジョォオオカァァァアーちゃーん！」

『キヒッ！？』

「なっ！？　道化師！！」

上空からコチラへ向ってくるカリスにメンバー達は焦りを覚える。
この状況でカリスに加わられたら……

「！」

だが、その焦りは切り裂かれる！

突如、何かがカリスに向かって行き攻撃を与えたのだ！
悲鳴を上げながら地面に墜落するカリス。

その何かは、さらに空中に舞い上がり太陽と重なり合う。
それぞれはその何かを確認しようと目で追うが、それより先に耳がその音声を捉えた！

『サンダー』『スラッシュ』【ライトニング・スラッシュ！】

「ウッッ！　アァ？」

何が起こったのか理解できないカリスに、さらにその剣が振り下ろ

された！
まさに一閃と言うに相応しいその一撃は、カリスを一刀両断にする。

「ゴワッァアアアアアアア！！」

カリスの体に光を放つ一本の線が刻まれる！
防御をしていないカリスにとって、さすがにダメージが大きすぎたのか？
ベルトが外れ道化師は大きく吹き飛ぶ！

「イッ！！　てぇぇえええええええ！！　アアアアッ！」

『『ヒャハハハハハハーハハハハッ！』』

道化師は苦し紛れにクラウンを出現させ、自分は慌てて走りだす。
逃げる道化師の先にはディケイド達が居るというのに……

今の道化師にはそこまで頭が回らないようだった。

「お前ッ！！」

「いよぉ、待たせたな。でもよ、ヒーローって遅れてくるもんじゃない？
……なんつってな」

そう、そこに立っていたのは紛れもない。
仮面ライダーブレイドジャックフォーム！
守輪椿の姿だった。

『キヒヒヒヒヒ！』

ブレイドの目の前にはジョーカーが笑っていた。

「あれですかね、まあ私も……
そろそろ咲夜ちゃんを攻略しようかなと思いまして」

そう言ってブレイドは一枚のカードを取り出す。
それはキングが契約者に一枚だけ与えるラウズカード、『ブランク』のカードだった。

「一応、これジョーカーに使えるはずだぜ。
道化師産とはいえ人工アンデッドだからな」

「ああ、わかった」

アンデッドとて魂と心を持つもの、契約したとはいえ仮に反旗を翻す事もあるだろう。

それを良しとしないキング達はどんなアンデッドでも強制封印させるラウズカード
『ブランク』を契約者に一枚持たせるのだった。

だが、ブランクは互いの信頼関係を崩すなによりの因子、クロハもダイアナもすぐに捨てたのだが…

「咲夜……」

これで咲夜を封印する？

駄目だ、結局は同じ事。
そう、アンデッドを封印するブランク。

今咲夜の体には咲夜とジョーカーの二種類の魂が混合している。
このまま封印をすれば咲夜までブランクに飲み込まれてしまう。

「頼む、真志」

「ああ！」

だが、そう…それはこのカードだけならばの話。
龍騎はデッキから一枚のカードを取り出した、それは契約のカード。

『モンスター』を強制契約させるカードなのだ。
龍騎はブレイドからブランクを受け取るとその手に契約のカードとブランクを重ねて持った。

そして一枚のカードを発動させる。

『ユナイトベント』

合成のカード、ユナイト。
その力で龍騎の手にある二枚のカードは眩い光を放ち、一枚のカードへと姿を変えた

司の作戦は、この二枚のカードを合体させた時に生まれるカードを使う事だったのだ。
アンデッドを本体ごと強制封印させるカード、ブランク。
これでアンデッドであるジョーカーウイルスを封印する。

だが、それでは融合している体まで封印させてしまい咲夜を巻き込んでしまう。
しかしここで龍騎の契約のカードが効果を発揮する。

そう、龍騎のカードでジョーカーと『契約』を強制的に結ぶのだ。
龍騎のカードは契約したモンスターをカードの中に入れるわけではない。
体を封印するのではなく心を支配するのだ。

『モンスター』ではなく『アンデッド』との契約。
それを可能にしたのはユナイトから生まれたカードの出来る技だろう。
二枚のカードの効果は融合し、ジョーカー……いやジョーカーウイルスを支配下に置く事ができる物へと変わったのだ。

「じゃあ、契約にはカードを体に当てなきゃならない」

「ｏｋ！　余裕余裕！」『マッハ』

ブレイドはあっという間にジョーカーの前まで移動する。
そして、そのカードを…

「俺の選択肢が間違ってないって事、教えてくれよ咲夜さんッ！」

見せてもらおうじゃないの、バッドエンドなんて勘弁してくれよ？
俺はグッドエンドしかやらないんでね

第１０４話　？ソノ選択ヲ？（後書き）

カードシステムの説明をここで。結構長いですわｗｗ
まずＡＰではなく、消費制です

・カードを使えば、そのカードは無くなって
再構築されるまで使えなくなる

・再構築までの時間はカードによって異なり、変身を解除した場合は
早く回復する。
学校の治療器具を使っても回復する

・カードコンボを発動すると、一番最初に使ったカードは
再構築されない

・ジャックフォームになると、全てのカードが再構築される
単体でＪをラウズすると、全てのカードが使用可能になる

・Ｑは単体でラウズすると、対象の体力を回復させる。
Ｋは単体でラウズすると、好きなコンボを一度使用できる

・椿はキングフォームになる資格をもっていない
使用してもエラーがおきる

こんなもんかなｗ？
一応各ナンバーのカードの効果も次らへんに書くかも…？

では次もよろしく！

第１０５話　?剣・ライダー?（前書き）

次でブレイド編本編は終わりだと…思います
番外編はいつもとは違う小話みたいな感じのを二話くらいかな

ではどうぞ！

第１０５話　?剣・ライダー?

暗闇の中で、二人の子供が走っていた。
男の子と女の子は暗闇の先にある一点の小さな光を目指して必死に走っている。

「待ってよぉ！」

女の子は自分より前に走っている男の子に追いつきたくて必死に走る。
しかし、男の子は待ってくれない。
どんどん先に走っていく、このままでは…
置いていかれるのだろうか?

先に走っていってしまうのだろうか？

女の子は無性に悲しくなった。

「きゃ！」

こけてしまう、涙が出てきた。
痛いからじゃなくて置いていかれる寂しさの方が強いからだ。
女の子はつい声をあげて泣いてしまった。

「…ったく、しょうがねーな」

男の子は女の子に気づくと、ため息をつきながらも側へとに駆け寄る。
女の子はそれが嬉しくてまた泣いてしまう。
それに気づいたのか、男の子はニッコリと微笑んだ

「大丈夫だよ、俺はお前を置いていかないから」

男の子は優しく微笑む。
本当に優しい目だった、女の子も嬉しくなって頷く

「でも、結局ワタシが裏切ったの？」

気がつけば、男の子は後ろにいた。

自分は前に……

逆……自分が前に来て、後ろを振り返りもせず…置いていったの？

「違う、悪いのは俺なんだ…」

二人ともいつの間にか成長していた。

「お前の前にいる事から俺は逃げたんだ」

椿はうつむいて呟く。咲夜もまた下を向いていた。

「ワタシは…お前の気持ちをしろうともせず…」

「いや、俺が悪い。なにもかも、逃げ出してた。
お前からも、自分からも」

「・・・」

「だから、もう逃げない」

椿は足を速める。しかし咲夜には追いつかない

「ああ…」

だから咲夜は椿が追いつくのを待った。
二人の肩が並ぶと、それぞれは微笑み…また歩き出した

「二人で…」

「一緒に…」

光が大きくなる。
それを咲夜は感じて、また微笑むのだった。
そうだ…二人で一緒に歩けばいい。
どちらが前だとかは関係ないんだから

「――――――ぁ」

目を開けると刺さるような光が飛び込んできた。
思わず顔をしかめる、ええと…

自分はどうなったんだったか？
それを思い出す前に走る衝撃。

「うぉ！」

誰かに抱きつかれた。
よく見れば…アキラだ、アキラが泣きながらワタシに抱きついている。

何故……だ？

「！」

いや、違う！
そうか、ワタシは自分の体を見てみる。
それは紛れもなくワタシの体、人間の体だった。

「そうか…」

だとすればアキラが泣いているのも、皆が周りにいるのも納得だ。

そうか、そうなんだな。
かすかに思い出す、いそいで我夢を見てみるが元気そうだ…
本当に良かった――ッ

「アキラ…」

「ハイ…！　何ですか？」

「ワタシは…戻れたんだな……？」

「ハイ…っ！　はい！」

アキラを抱きしめる。
そうか、皆には…本当に迷惑をかけたな

体はまだ少しだるいが動けない程ではない、
だんだん回復していくのも感じるし…良かった。

「ほんどうによがっだでずぅうぅぅう！」

いろんな液体でぐちゃぐちゃになっている夏美が飛びついてきた。
アハハ…今日は良しとしようか。彼女にも世話になったからな

「・・・」

あの男を捜すがいない、その事を聞くと司と一緒にケリをつけにいったらしい。

全く、歩くのが速いんだよお前は……

そう、咲夜はジョーカーと完全に分離していた。
合成した契約のカードでジョーカーを支配して、ウイルス細胞ごと
自らの意思で消滅させたのだ。

司と椿、ダイアナとクロハは道化師との決着をつけに行ったらしい。
咲夜はそれを聞くとゆっくり体を起こす
皆は心配して咲夜に駆け寄るが、咲夜本人がそれを制した。

「大丈夫なんですか!?　先輩ッ!」

「ああ、それより…我夢、みんな――」

ありがとう。

咲夜が微笑むと皆も照れくさそうに笑う。

美しい彼女の瞳の中に皆が笑っている、凛とした彼女の瞳。

「さてと――」

「？」

咲夜は大きく伸びをすると、地面に落ちている『ソレ』を拾い上げた。

「先輩！？」

咲夜はソレを暫く見詰めると、まるで何かと会話をしているように振舞う。

そしてしばらくして大きく頷き、走り出したのだった

「先輩――ッ！！」

つい止めようとしたアキラの肩に、アギトの手が置かれる。
アキラは少し心配そうに咲夜の背中を見ていたが、仕方ないと笑って無事を祈るのだった。

「ハァ！　ハァ！　クソッ！」

道化師は大変不愉快だった。
世界は自分の玩具、思い通りにいくオモチャの筈なのに…何故？

何故今自分はこんなにもボロボロなのか？

惨めに草むら掻き分けて、無様によろよろと逃げてッ！
こんな筈じゃない！　自分はもっと有能だ！
あんな雑魚共にやられる訳がないっっ！！

自分は『道化師』だ！

確かに戦闘力はあまり高くはない、だが自分にはそれを補えるだけの装備と知力があったはずだ！

違うのか!?
人間なんて俺の玩具なんだよぉぉおおおおッッ!!!
おい！　どうなってんだ！　この世界は滅びるんじゃないのか?
どうしてローチが消えている?
おい！　ふざけんなッ！
次のジョーカーはどこだよ！　おい！　おいッ！

「いねぇよそんなモン」

「！」

前からディケイドが歩いてくる。
ああ、クソッ！　すっかり忘れていた！！

「あああああ！　クソがぁあああ！　テメェは何なんだよ！？」

「俺？　俺は――――」

ディケイドはその言葉を止める。
不思議に思った道化師が後ろを見てみると…

「ヒッ！」

クロハ、ダイアナ、椿の三人が立っていた。

それぞれはベルトを装着し道化師を睨みつける！！

危険だ！　非常にまずい！

「ハハッ…い、嫌だなぁ皆！　冗談ですよ、冗談！
ワタシは皆さんの世界を危険に晒すつもりなんてなかっ――」

ビュン！　と何かが飛んできて道化師の頬を掠める！

三人の誰かが撃ったのではない。

では誰が？　椿達もソレが飛んできた方向を見てみる

「は！？」

椿は思わず間抜けな声をあげてしまった、だが理解した。
飛んできたのは矢だ、この中で矢を武器にしているヤツと言えば…

「今まで散々やってくれたな…」

「あ、貴女は！？」

道化師は完全に怯えていた。
鋭い目で蛇に睨みつけられた、まさに蛙のように！

「ワタシと彼女達が許すと本気で思っているのか？」

椿達の横に、もう一人の女が並ぶ。
既に彼女の腰にもベルトが巻かれており、残りの3人はソレを理解する。

「――凄いね、どうやって選ばれたの？」

「ワタシも彼女達も、アイツにいいように遊ばれた被害者だ。
それで意気投合してな」

『わらわパラドキサアンデッド率いるスートハートは
この女を主人にするぞ、よいな』

相変わらず自由だな、キング達の声が聞こえる。
椿たちは最初こそ驚いたが、今はもう彼女に目を向ける事なく道化師を直視した。

四つの『人間』の視線が、『道化師』を刺すように襲い掛かる

それはまさに剣！

「なっ…そんな！
ヒャァアアアアァァアアアッッ！」

驚く道化師をディケイドは投げ飛ばす。
そして、同時に一斉にポーズをとる四人の契約者達！

スートダイヤ・ダイアナ。

スートクローバー・クロハ。

スートスペード・守輪椿。

そしてスートハート・広瀬咲夜！

彼女は決してやられっぱなしで満足するような女では無い！
転んでもタダじゃ起きない彼女がとった行動は、同じ被害者であるハート達との契約を結ぶ事だったのだ

「道化師、覚えておけ。俺は破壊者さ」

ビシリと道化師を指差すディケイド！！

「だから…この腐ったショーを破壊するッッ！」

「っくしょぉおおおおおォォォオオッッ！！」

道化師は自らの正体、トードスツールオルフェノクへと姿を変える！

四人もまたベルトのハンドルを同時に引いた！

「「「「変身！！」」」」

『『『『ターン・アップ！』』』』

四つのエレメントを同時に通過する椿達！

現れたのはギャレン、レンゲル、ブレイド、カリス！

「ウワァアアアアア！！」

トードスツールは棍棒を構えて走り出す！
同時に『キング』のカードをライズするブレイド達！

Kの効果は、自らが望んだカードコンボを発動できると言うモノ
哀れな道化師をあざ笑う、王の一撃ッ！！

【ライトニング・ブラスト】【スピニング・アタック】
【バーニング・スマッシュ】【ブリザード・クラッシュ】

「「「「ヤアアアアアアアアアッッ！！」」」」

「ギュアアアアアアアアアアッッ！！」

四人の飛び蹴りがトードスツールに命中する！
大きく吹き飛ぶトードスツール！

『ファイナルフォームライド』『ブブブブレイド！』

ブレイドの体が光り輝き、巨大な剣に変化する。

ブレイドブレード！

ディケイドはソレを掴み取ると、金色のカードを発動させた！

『ファイナルアタックライド』『ブブブブレイド！』

ブレイドブレードが光り輝く！

そのままディケイドは飛び上がると、トードスツールに狙いを定めた！

「『終わりだァァアアアアアアッッ！！』」

「ッ！　アアアアアアアアアアッッッ！！」

一刀両断！

トードスツールオルフェノクは爆発し、その幕を下ろしたのだった。

「……なあ、おい咲夜よぉ」

「あん？」

「ハートって逆さからみるとおケツに見えないか？」

「――――シュッ！！」

「い……ってぇぇ」

「空気を読め！　お前は本当に馬鹿だな！」

「うるせぇよ、でもまあ――」

やっぱ、お前はそうしてる方がお前らしいわ

ブレイドの言葉に、カリスは小さく笑う。

「一緒に帰るか、椿」

「ああ、そうだな」

一緒にな。

第１０５話　?剣・ライダー?（後書き）

はい、と言う訳でね…

どうなのかなぁ……w?
最後の悪ふざけみたいなのは，あれが椿と咲夜って事で入れてみました

ハートさんすいません

まあ、今回で咲夜がカリスになった訳ですが
名前的には咲夜はギャレンですよね。でもまあそこは割り切っていただければなと

二人のカード効果は次……か、まあ番外編で触れようかなと

ではこれで、次もよろしく!

第１０６話　？最後（スタート）？（前書き）

はい、と言う訳で今回でブレイド編は終わりですね
終わりにブレイドのカード説明を加えました。

龍騎のときはやらなかったんですけど
ブレイドはオリジナルのコンボも出るんで、知らない人がいたらと思って書きました

ではどうぞ！

第１０６話　？最後（スタート）？

だが……

「――――ハァッ！　ハァ！！」

だがしかし、道化師はまだ死んでいなかった。
ブレイドブレードが振り下ろされる瞬間に自らの意識をクラウン用のキノコに移し、生き延びていたのだ。

しかし自らは弱いクラウン。
必死に走って逃げ延びる今の姿はなんとも醜いものだ

「ハァっ…！　ハァッ！　クソッ！」

何故自分がこんな屈辱を受けているのか？

腹立たしい！

人間が絶望する顔を見るのが好きなのにッ！
なんでコッチが追い込まれてんだよぉおおおおぉぉッッ！！

気になるのはアンデッドの力を借りずに戦っていた連中だ。
あんなライダーがいるなんて知らなかった。

一体あいつ等は……

「ハァ…ハァッ！」

ジョーカーもカードスリーブも回収しそこねた。
まあカードスリーブはこの世界のアンデッド限定だったから諦めはつく。

――が、ジョーカーを失ったのは痛い！

最悪の気分だッ！！

今からまた研究所に帰って――

「どこへ…いくんだい？」

「！？」

ふと、目の前をみる。

そこに居たのは二人の子供、しかし何やら只者ではない雰囲気を見せている…

道化師も思わず構えた

「初めまして道化師、君にはお世話になったよ。
おかげでファイズとブレイドのノルマはクリアできた」

「は？」

「ワタシ達は感謝してるのよ？　だから、お礼を受け取ってもらいたいの」

二人はそう言って笑うとそれぞれのメモリを取り出す。
ヒートとトリガー、二人の髪と同じ色のメモリ。特別おかしなこともないが
その時だった

「お前ら！　まさか！！
ヒッ――ヒィイイィィイイイッッ！！」

「「？」」

道化師は怯えたように走り出すと崖から転げ落ちていった。
二人は少し驚いて崖の下を見る、しかし暗い。
何も見えない……

「おや？　殺そうとしたのがバレちゃったのかな？」

「……もしかして。ゼノン、道化師はメモリを見て…」

フルーラの顔を見て、ゼノンも何が言いたいのか瞬時に理解した。
手に持ったメモリをブラブラと回して虚空を睨みつける。

「なるほどね…なら、なおさらアイツを追いたいけど――」

「ええ。深追いは危険だわ、恐らくもう既にこの世界に来ているんじゃないかしら」

ゼノン達はため息をつく。
そして灰色のオーロラを出現させるとその中に消えていったのだった。

「アグォ……」

崖から転げ落ちた道化師は、地面を虫の様に這いずり回っていた。
もう身なりを気にしている場合ではない！

何故あれがこの世界に！？

「まさか…ッ！　ワタシを始末する気なのか！？　馬鹿な――ッ」

「その通りですよ。トードスツール」

「ッ！？」

既に辺りは夜に変わっていた。
もう月もでている、そんな月に重なる影が一つ

「お前はっ！？」

「私の名はクルス」

クルス、その名を聞いた道化師は叫び声を上げてのた打ち回る。
逃げようとしているのだが体が言う事を聞かないのだ

「やはりッ！　何故だ！？　何故ワタシが！」

クルスと言う可憐な少女は、うんざりするようにため息をつく
そして苦笑、彼女の瞳が道化師を映す。

「貴方はこの世界を滅ぼしにきた筈では？　なのに何ですか、この現状は」

「たっ！確かにワタシはこの世界を滅ぼす事はできなかった！だが前回の功績があるじゃないか！」

「…ッ？　何をおっしゃっているのか…理解できませんが？」

「ハァッ！？」

驚く道化師にクルスはふと思いつく。
尤もそれが彼女にとって信じられない事なのだが

「まさか…知らないんですか？」

「な、何がだ！？」

クルスの道化師を見る目が完全にゴミを見るときのソレに変わる。
いよいよ道化師の心に恐怖が襲い掛かってきた。
逃げなければ――ッ！

「貴方が前回訪れた世界は滅んでなんかいません、
クラウンゲームは人間側の勝利で終わったのです」

「ばっ！！馬鹿なァァアアッッ！」

「おやおや、コレは驚きですね。
まさか担当した世界の現状を把握していないとは」

「ありえんっ！　人間がアレをクリアできるなど！！」

尚も信じようとしない道化師にクルスは苛立ちを覚える。
クルスは舌打ちをすると、道化師にある映像を見せた。

それは道化師がクラウンゲームを仕掛けた世界の映像だった。

「まさか！！」

街を囲んでいた檻は消え去り、人々は楽しそうに笑っている。
檻が消えていると言う事は爆弾が発動しなかったと言う事だ。

そして、そのカメラの前に一人の男が立っていた。
顔は帽子を深くかぶっている為分からないが、明らかにカメラに気づいている。
男は暫く黙っていたが、周りに人がいなくなるのを確認するとカメラの前に移動していった。

『やあ、爆弾をしかけたのは君たちかな？
悪いんだけど、あの爆弾は…』

ぼくが頂いたよ

「なっ！」

『やっぱりどうしてもトレジャーハンターとして
あんなお宝を見逃すことはできないからね。
感謝したまえよ、君たちにはもったいないお宝だ！　アハハハ』

そう言って男は走り去る。
沈黙する道化師とソレを睨みつけるクルス

「二度にわたる世界崩壊の失敗、これだけならばまだ許されたでしょうに…
問題はあの巨大爆弾と言う絶大な物を用意させておいてのあの結果です。
もうあの爆弾は手に入りません。
世界を崩壊させる確実なカードをもっておいてアレとは…」

クルスが天に手をかざすと、その容姿からは想像もつかない程の大鎌が現れた。
その可憐な姿には不釣合いな程の武器、クルスはソレを迷う事無く道化師へと向ける！

「貴方のような無能は、偉大なる我が組織には不要です。
『子供達（チルドレン）』も貴方の様な玩具はいらないと判断したようですよ」

「そんな馬鹿なッ！　頼む！待ってくれ！
いいのか！？　ワタシの知識は組織にとって必要なはずだ！！」

「無能は必要ないんですよ。
正直言いますが、ブラックカードスリーブを作る必要はあったのでしょうかね？
カリスに変身したところでどうにかなる訳でもない。
貴方は楽しいかも知れませんが…
正直、貴方は中途半端なんですよ。全てにおいてね」

命乞いを始める道化師、しかしクルスはそれを聞くつもりはない
もう道化師に狙いを定めているのだ

「大方、このショーを上の方に見せてご機嫌をとろうとしていたんでしょう？
残念、失敗すれば全て無駄になるのですよ」

クルスは優しく微笑んで鎌を道化師の首にかける。
錯乱しながら助けを求める道化師に、もう一度優しく微笑むと――

クルスは思い切り手を引いた。

「さよなら、道化師さん」

静寂が辺りを包む。
その中でクルスは立っていた、地面には二つになった道化師が転がっている。

「終わったのか？」

「ほぅ、綺麗に切り取れたものだなぁ…」

「・・・」

クルスの後ろには三人の男がいた。

体格のいい軍服を着た男、ガル。

メガネと白衣という見るからに科学者の様な男、？6。

そして若い少年だ。クルスは足元に転がる道化師の顔を踏み潰すと、
笑顔を浮かべる

「まあ！　皆さんどうも。どうしたんですか？
各隊の代表たる皆様が何故？」

「近いうちに例の議会が開かれるそうだ。お前も参加者に選ばれた」

「まあ！　嬉しいです！」

クルスは嬉しそうに手を叩いて、微笑んだ。
その様子に男達も笑みを浮かべる
一人だけはうつむいたままだったが……

「クルスゥ…お前の研究は大きな評価を受けたのだ、
それだけの資格があるというもの」

白衣を着た男はルービックキューブをそろえ様と必死なようだ。
時折いきなり面が変わるのは何故だろうか……

一瞬で色の配置が変わる。
不思議な光景だ、しかし誰もその事を問わないわけだが。

「では、皆様まいりましょうか?この世界はもう諦めるしかありません。
一度失敗した世界は何故か異常な力が働いてしまいます。

まあ……このゴミには誇り高き大鷲の紋章を刻む資格は無かったと言う事ですね」

そう言ってクルスは道化師の胴体を何度も切り裂く。
道化師の胸に飾られていた黄金のワッペンが引き裂かれる。

細切れになっていく体、その様を他の男達は楽しそうに見ているだけだった。

ただ一人を除いては――

「・・・」

クルスは灰色のオーロラを出現させ男たちを先に行かせる。

謙虚な態度だ、そう……他人から見れば彼女はとても可愛い女の子

「さあ、貴方もどうぞ？」

「……一つ、聞いてもいいか？」

「・・・？」

若い少年はクルスにたった一言だけ投げかける

「殺す必要はあったのか？」

その言葉にクルスは満面の笑みで答えた。

何も知らない人間が見ればそれは天使の笑顔とまで称されたかもしれない

「もちろんです――」

ＣＯＢＲＡさん！

「・・・」

少年、ＣＯＢＲＡは暗い表情でうつむくと自らもオーロラの中に消えていったのだった。

その場に取り残されたクルスは自らの功績が認められた事が嬉しいのか、ニッコリと微笑む。

そして携帯を取り出した。

「――――もしもし、私です」

『はぁい、クルス』

世界を越える電話、その向こうからは若い女性の声が聞こえてくる。
鼻にかかる甘く妖艶な声、姿は見えないがそうとうの美人なのだろう
声だけで男性を魅了してしまいそうだ

「どうですか？　そちらは」

『ええ、言われた通りにやったわよ。
それにしても素敵な夜、とても美しい月、思わず体が熱くなるわ』

甘く切ない声がクルスの耳に入ってくる。
彼女はクスリと笑うと、会話を続けた。

「ありがとう、優秀な部下を持って私は幸せです。
しかし今回は控えてくださいよ、あくまでも財団の皆様に提供する大切な情報収集なのですから」

ですが、うまくいけば世界が滅ぶようにしておいてくださいとクルスは付け足す。
電話の向こうの相手も了解したようだ。

「一度そちらへ行くつもりです。貴女は戻ってもらっても結構ですので」

『はぁい、了解したわ』

「ええ、ではさようなら――」

クルスはもう一度お礼を言って部下の名前を呼ぶ。

「チェーンソーリザード」

『うふっ、じゃあね』

電話が切られる。
クルスはもう一度黒い笑みを浮かべると、オーロラを出現させて消えていくのだった。

「・・・」

咲夜は学校の屋上から街を見回していた。
ローチはもう居ない、この街……いや世界の崩壊は免れたのだろう。

ホッと胸をなでおろす

「よお」

「…お前か」

椿は少し笑みを浮かべて咲夜の隣に立つ。

咲夜も少し笑うものの二人は何も喋らない。
そのまま二人は暫く何も言わずこの世界を見ていた

「あぁ…えっと…コレ」

椿は下で買ってきたジュースを咲夜に渡す。
咲夜はお礼を言うと小さく呟く

「――――ぅ」

「あ？」

「ありがとう」

「・・・」

椿はそれを聞くと苦笑する。
似合わない、顔がそう語っている。
咲夜は少しムッとしたが、今回は何も言わなかった。

「俺、最高にイケメンだったろ？
これはアレだね、流石にフラグ立つレベルだわ」

「ハッ！冗談キツイなイケメン（笑）さん」

二人はニヤニヤと笑い合う

「ちっ、待ってろよ。今に椿君の魅力でメロメロにしてやるぜ」

「はいはい、せいぜい楽しみにしてるよ」

あくまでも楽しそうに、二人はジュースのフタを開ける。

ブシュウウウウウウウッ!!

「・・・・・」

「フォオォオオ！どうだ！椿くん必殺スプラッシュ――ッ……おいおいって！お前なんで蹴りの構えとってんだ…？

ちょ、おまっ…まさか！いや！嘘だろ！？

おい！聞いてんのか！？なあって――

アーッッ！！」

椿の悲鳴が空に消えていく。二人の関係は、

変わってない様で変わったのか？

変わった様で変わってないのか？

他者からは分からないかもしれない。
でもただ一つ分かることがあればそれは――

「あはははっ！」

「テメェ！笑ってんじゃねーぞ！イデッ！
え？…嘘、ちょっとやだ…割れてるッ！？
おけつが二つに割れてる！？

イヤアアアア！！割られたァァァァ！」

「ははははっ！元々だぞそれは！」

二人は仲がいいと言う事だ

第１０６話　？最後（スタート）？（後書き）

ここでブレイドのカードの説明を少し簡単に

Ａ「チェンジ」
ブレイバックルに装填する事で椿をブレイドに変身させる。

２「スラッシュ」
ブレイラウザーの攻撃力を上げる。再構築の時間が最速で済む。

３「ビート」
腕力が強化される

４「タックル」
突進攻撃を発動する。ちゃんと当てましょう

５「キック」
脚力が強化される

６「サンダー」
電気を発生させる。また、発動しなくてもブレイドが電の攻撃を受けた時に
身代わりになってくれる

７「メタル」
身体を鋼の様に変えて、防御力を強化する。
発動すると解除するまで走れない

８「マグネット」

磁力を操る。

９「マッハ」
高速移動。速さはクロックアップより少し遅い程度、
アクセルベントとは同速

１０「タイム」
時間を操る、今の椿では数秒停止させるのが限界。
時間停止中は何も傷つける事はできず、攻撃すると反射され自分に
返ってくる
しかしコンボの効果では反射されなくなる。
再構築の時間が最も遅い

Ｊ「ジャック」
単体で発動すると、コンボに使ったカードを含めて
全てのカードが再び使えるようになる。

Ｑを経由した場合、ジャックフォームへと変化する
この場合は全てのカードが再構築される
再構築の場合はコンボを発動した時、一番最初に使ったカードは戻
ってこない

Ｑ「クイーン」
対象の体力を回復させる。
ラウズアブゾーバーに装填して使う事で
ブレイドをフォームチェンジさせる

Ｋ「キング」
好きなカードコンボを使用できる。
このカードのみ自動で発動させる事ができる

さらに、このカード自体に高い攻撃力があり
武器として使う事もできる

Q経由でキングフォームに変化させる事ができるが
今の椿にその資格は無いらしい

さらに、カード状態のままでもJ、Q、Kとならば思念で会話ができる

こんなもんかな？
では次もよろしく！

第１０７話　けんか（前書き）

今回の番外編はちょっと番外と言う番外でもないような？

まあ補完って事で

ではどうぞ！

第１０７話　けんか

「おはよう、葵さん！」

「おはよう友里ちゃん！」

「おはよう葵さん、うーん…いい匂い！」

「おはようハナちゃん。ご飯できてるからね！」

「おはようございます葵さん！」

「うん！おはよう里奈ちゃん！」

それぞれが起床してきて徐々に食堂へ集まってくる。
やはり女性陣の方が早く集まるものだと葵は苦笑した、しばらくして徐々に男性陣の姿も見えてくる。

「おはよう…葵さん」

ユウスケが

「おはようございます。葵さん」

亘が

「朝、それは穢れた世界の運命を変えようとあがらう戦士達へ
奇跡の開始をつげる無限にして生命の脈動、おはよう葵さん」

ブレイドが

「おはようございます葵さん。皆もおはよう！」

真志が

「うぃーす、おはよー」

女性陣の中で一番遅い美歩が

「グッドモーニング、葵さん」

双護が

そしてしばらくして全員がそろう

「・・・」

何か、おかしくなかったか？

葵は首を傾げる。

何か違和感を感じる、まあでも取りあえず今は食事の用意が先だろう。

葵は配膳を済ませ挨拶を行った、それぞれは談笑したりテレビを眺めながら食事を始めている。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

しかし、やはり何かおかしい。
なんかうんざりしている様な人達がいた、食事が口に合わなかったのか？

少し不安になる葵だが、直ぐに違和感の正体に気づく。

「ああ、なるほど…」

「あれっ？っかしーな…」

違和感の正体はパンを口に持っていく。
しかしそのパンが口の中に入る事はない、それが不思議なのだろう。
先ほどから違和感は何度もパンを口へと運ぶ、だが食べられない

「何で食べれないんだ？これ…どゆことっ！？
ねぇコレ…ッ、どゆことっ？」

「・・・」

その違和感の向かい側に座っている真志は本当にうんざりしているようだった。
その後も『違和感』は食事ができない事をしばらく不思議がっていた。

なんか……友里がしきりにデルタムーバーで
彼に照準を合わせてる様な気がするんだが……止めた方がいいんだよね！？

そして、ついに耐えれなくなって亘が口を開いた

「あの…変身してっからだと……思います」

「え…」

亘に言われてブレイドは鏡を見てみる。

「かぁー！マジだよコレ！マジンガーだよコレ！
やべー、ヤベッチ無意識だったわ俺ーぇ！

え？何？俺変身してた？
かぁーっ！無意識だったわ！
かぁーっ！」

「・・・」

そう言ってブレイドは変身を解除して椿に戻る。

数分後

「あれっ？っかしーな…」

「・・・」

「かしーなコレマジで…っしーんだけどコレガチで…」

「あの…また変身してますよ…」

「え…？」

亘に言われてブレイドは鏡を見てみる。

「っべー！マジタロスだよコレ！っべーなコレ、ベッチだわぁ！
え？何？俺変身してた？
うわうわぁ、ぜっぜ！きっつぁなかったわぁ！

ちぃー！

きちぃーコレ！」

「・・・」

「先生ェェェェェ！　調子乗ってますアイツー！」

「黙らせてくださいーッ！」

「あ、あはは…」

ブレイドになれたことが嬉しいのか、椿は昨日からもう何回もわざとらしい誤変身を繰り返していた。

とにかく何かもうウザ過ぎるので、みんなはもう爆発寸前である。

「落ち着いて皆、椿君だって頑張ったんだから…ね？」

「甘過ぎです先生！真志なんて昨日から何回ファイナルベント発動しようかどうか迷ったと思ってるんですか！？」

「うっ、うーん……」

アアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッーーーーーー

「「「!?」」」

瞬間椿の悲鳴が学校に響き渡り、一同は何事かと向かう。
そこには、倒れている椿と咲夜の姿があった。

「ふん、調子に乗るなよ阿呆が」

「がくっ……」

やはり椿を止めるのは彼女の役目なのかもしれない。
翼は笑って二人を優しい目で見守るのだった。

「ありがとう皆、すごく助かった。おかげでこの街も平和になったよ」

「ええ、感謝するわ。本当にありがとう」

クロハとダイアナは司達に頭を下げる。
彼らだけではこの世界を救えなかったろう、しかし逆も同じだ。
司達もクロハとダイアナがいなければこの世界を無事に終える事はできなかった。
それぞれは互いにお礼を言い合う。
「今度は僕達が君達を助ける番だね、困った事があれば何でも言ってよ」
「ええ、必ず力になるわ」
そう言って微笑む二人、しかし世界が移動してしまえば会えなくなってしまう。
悲しい話だ、仕方ないとは言え…どうしても寂しさがあるもの。

せめて残された時間くらいは楽しく過ごそうと彼らは思う。
ゼノン達が言うにはあと二日で世界が移動するらしい、

だからそれまでは皆で楽しく過ごそうかと思った時、事件は起きるのだった。

「もうっ……もういいです！！　もう知らないッ！我夢くんなんてッ！！」

大ッッ嫌いッですっっ！！

「――――――」

涙をこぼしながら走り去るアキラと、真っ青になって立ち尽くしていた我夢。

そう、今度はコッチが喧嘩を始めたのだった。
あと二日で世界移動してしまうというタイミングでこれはキツイ。

――と、言う訳で早速理由を聞いてみる

「悪いクロハ…ダイアナ」

「ううん、いいよ。皆仲良くなれるように協力するよ、僕とダイアナもよく喧嘩するからね」

「アレは全部クロハが悪いのよ！もうっ！」

クロハとダイアナも加わりこの問題を何とか解決できないかと考える。

まずは理由だろう、なんで二人は喧嘩をしたのか。

まずはコレに尽きる。

しかし……

「先生助けて！　我夢くんが息してないの！」

「コイツこんなに軽かったっけ…？」

椿と司に抱えられていた我夢。
なんかもう真っ白になってる彼から理由を聞くのは難しいだろうか？

「我夢くん？何があったのか、聞かせてくれるかな？」

「じ…じつは……」

それは、少し前の事。ジョーカー絡みで彼らが奮闘している時の事だった

「我夢くんッ！？」

学校に連れられた我夢を見て、アキラの心臓は止まりそうになった。彼は白い服を着ていたはずだ、だが今彼の服は赤黒く染まっている。

自分の靴下と同じ…血で染まったと言う事だ。

そして何より我夢の顔色はとても悪かった。

だから、一瞬彼が死んでしまったのではないかと思ってしまう。
悲しかった、涙が止まらなかった。

同時に悔しい、自分が何もできない事といろんな感情が混ざり合ってアキラは混乱する。

その後、アキラは我夢が目覚めるまで必死に祈り続けた。
葵が代わるといっても聞かず、我夢の傍で彼が目覚めるのを待った。

既にゼノンとフルーラが我夢の怪我は命に関わるモノではないと言っていた為に少しの安心感があったが、それでも目を離せば彼がどこかに行ってしまうような気がして怖かったのだ。

だから我夢が目覚めたとき、アキラは本当に嬉しかった。

その後、契約のカードで咲夜が戻ったりといろいろあった為
なかなか言えないでいたが、先ほどアキラは我夢にあの時の事を問うた

「どうしてッ、どうしてあんな無茶を！」

「……それが、一番だと思ったんですよ。
すいません、アキラさんに酷い事を言ってしまって」

どうやら我夢はあの時、中々言う事を聞かないアキラに言った事で
怒られているのだと勘違いをしたようだ

「え…いや、それは我夢くんは悪くないですから…
だけどッ、もう無茶しないって約束してください！」

「無茶…ですか？」

「そうですよ！　あんなにボロボロになって……ッ」

我夢は申し訳なさそうにうつむくと頭を下げる。
その行動にアキラは戸惑ってしまった、何か勘違いをしているのか？

「正直、もっとうまくできると思ってたんですけど…
結局僕は時間稼ぎくらいしかできませんでした。

アキラさんの言う通り無駄な血しか流せなかったです、
もっと計算をするべきでしたね、回復の効率も悪かった。

次は――」

「何ですか…ッ　それは……」

「え？」

「無駄な血ってッッ！　効率とか次とか！　我夢くんは分かってない！」

「……ッ？」

我夢は目を丸くする。アキラは少し涙目になって我夢の肩を揺すった。
どれだけ心配したかとか、我夢がいなくなってしまうのではないかとかいろいろな感情を我夢へ必死に訴えかけたのだった。

「心配したんですよ！　私がどれだけ……」

「アキラさん…ありがとうございます」

その言葉を聞いてアキラは安心する。
我夢も嬉しかった、まさかこんなに心配してもらえるなんて……

だけど、我夢は確信していた。

今回の件で――

「だけど、すいません。約束はできないかもしれないです」

「え・・・」

「僕の能力は回復です。今回の戦いで生身の僕が想像以上に時間を稼げたのは
この力があったからです。確信しました、僕の役割は壁です。
この先の世界でも僕が時間を稼――」

「何で…ッ！！　もうッ、いいです！

もう――」

そこで、あの言葉に戻ると言う訳だった。

「なるほどねぇ…ま、それは怒るわな」

真っ白になっている我夢の肩に司は手を置く、
涙目で振り向く我夢にサムズアップを決めると司はしっかりと微笑んだ。

「まかせとけよ我夢ッ！俺がバッチリ仲直りさせてやるからな！」

「づ、づがざぜんばいぃぃぃぃ！」

飛びつく我夢の肩を優しく叩くと、司は歩き出すのだった。
そうだ、こう言うのは先輩が解決してやるものだろう
早速司は我夢に仲直りをする為の行動を教えてあげる

「……なんですか、コレ」

「あのっ、これは…ですね」

刺さるような視線を受けながらも我夢は踏みとどまる。
アキラが何故怒っているのか司から理由を聞く事ができて助かった。
これをあげれば仲直りができる。我夢はそれをアキラに差し出す

「お、おにぎりです！」

「見れば分かりますよ、
どうしておにぎりなんて持ってるんですか…？」

「え……だって…アキラさん、
おなかすいてたから…怒ってたんじゃ……」

「・・・」

ピシャリ、教室の扉がしまってしまいましたとさッッ！

「……え？」

「馬鹿かテメェェえええええええええええええッ！！」

「ディケィィィィィィッ！」

椿の鉄拳が司を吹き飛ばす。
なんかアクション映画みたいに机や椅子やらを巻き込んで司は吹っ飛んでいったが大丈夫かな？

「なーにが、なるほどねぇ（キリッ　それは怒るわな（ドヤァァァだ馬鹿野郎！
あのタイミングで腹減ったからキレる訳ねぇぇだらぁぁあがぁよぉお！
ちったぁ考えてくださいよ破壊者さんよぉお！
より仲壊してどっすんすきゃぁ？」

「すっ！すまん我夢！俺のヨミが外れたみたいだ！」

「ハハハ……いいんですよ…ハハハ……」

さらに色素が薄くなっている様な気がする我夢に、今度は椿が手を添える。

あれ？　何かさっきも同じ光景を見た様な…

いや気のせいだろう

「安心しろ我夢。俺はわかってる、俺は理解している。任せろ」

「づばきぜんばいぃぃ」

飛びつく我夢の肩を優しく叩くと、椿は歩きだすのだった。

そうそう、こう言うのは先輩がチャチャチャイと解決してやるもんだ

椿は早速我夢に仲直りの言葉を教えてあげる

「・・・」

ドアがノックされたので、アキラは少しだけドアをスライドさせて誰が来たのかを見た。

相変わらずナイフの様にするどい眼光。
思わず怯みそうになる、だが引いてはいけないッ！

「よ、よぉ…お前の瞳に、俺のこ、心を合わせてみねぇか？
ほら、生まれた世界に…

ハッピーバースデー――」

「馬鹿！」

ピシャリ！

ガチャリ！

「……え？」

「ウラッシャァ！」

「アンギョン！！」

真志の頭突きが椿をとらえた！
沈む司と椿を完全に見下すと、真志は我夢に微笑みかける。
どうやら彼が先月やった恋愛ゲーム、『マヂで恋するアサルト☆パンチ』では主人公が今の台詞でヒロインと結ばれた様だが……

「辛かったな、我夢くん。馬鹿ばっかりで苦しかったろ？
安心してくれ、オレは我夢の味方だぜ！」

「おれもだよ我夢くん。おふざけは一切なし！」

「安心しろ我夢、俺達三人の作戦は完璧だ」

「じんじざん！ユウズケざん！ぞうござん！」

ユウスケは言う、やはり真正面から自分の想いをぶつける事が大切だと。

双護は言う、やわらかい雰囲気をつくる為に動物の力を借りよう。

「ニャー」

「猫ですか！？」

「ああ、校庭にいたのを引っ張ってきた。名前は聖十字星（イノセント）だ」

「・・・」

とにかく猫をきっかけに会話のタイミングをつかむ、そう言う事だった。

そして真志は言う、少しのユーモアも大事なのだと…

完璧だ、三人は我夢に満面の笑みを投げかける。
え？　これもう仲直りどころかゴールインしちゃうんじゃね？

…並の自信があった。

「さあ、いってこい！」

「はい！」

「アキラさん、僕…ごめんなさい、勘違いしてました。
やっぱりアキラさんや皆さんに心配をかける事こそが……」

「我夢くん、次にふざけられたら私もう一生口聞かないです」

アキラは猫を抱いて扉を閉めた。
立ちつくすのは、つぎはぎだらけの着ぐるみ、ＧＡ☆ＭＵ……

「・・・」

「おかしいな、着ぐるみ大☆作☆戦がまさか失敗するなんて…」

「ありえんッ、俺達の作戦は完璧だったはずだ。
計算に計算を重ね幾度とないシュミレーションを重ねた結果、
あの作戦にいきついたというのに…」

「やっぱり着ぐるみが俺の使いまわしなのがまずかったのかな?
亘くん、何が悪かったと思う?」

「頭です」

固まる三人を無視して亘は我夢の隣に座る。

「やっぱり普通に謝ったほうがいいんじゃないか？」

「う……ううん。そうです…ね」

しかし、いろいろと機嫌をそこねてしまった。
その後も女性陣たちやクロハ達も協力してくれたが、結局無駄だった。

一度出来てしまった溝はなかなか簡単には埋まらない。
話しかけようとしても、どうにも上手くいかなかった。

「ごめんね、力になれなくて」

「いや、いいんだ。こっちこそ悪かった。
せっかく手伝ってくれたのに」

いろいろとその後も努力してみたが、二人の溝は埋まらなかった。
そのまま時間がきてしまい、クロハ達と別れる事になってしまったのだ。

「じゃあな、また会おうや。必ず」

「うん、もし困った事があったら…必ず助けに行くよ」

「期待しておいてね」

「ああ、助かるよ」

同じブレイド組みと言う事なのか椿とクロハ、咲夜とダイアナはすぐに仲が良くなった。
いつか世界が救われたのなら、また会えるのだろうか？

「じゃあね！　絶対また会おうね！」

クロハ達に別れを告げると、学校は光に包まれたのだった。

一方その頃・・・

「ほう、喧嘩か。そなた達はどうだ？
何か喧嘩した事はあるか？」

「ええそりゃありますよ。ねえフルーラ」

「そうねゼノン！」

意外だな、女は目を丸くする。
だが喧嘩の理由が…

「聞いてください！ゼノンはワタシがゼノンに対する愛より、
ゼノンがワタシへ対する愛の方が大きいって言うの！」

「ボクはフルーラを愛している！何よりも！誰よりも！」

「ワタシだってゼノンの事を愛しているわ！」

「ううぅぅうッ！」

「むむぅぅぅッ！」

「「……ヒシっ！」」

「…ここまで目障りな愛も珍しいものだな…」

抱きしめあう二人を冷めた目で女は見つめる。

聞かなければよかったと後悔するがもう遅い、仲直りの話まで計三時間みっちりと女はゼノン達の話を聞かされる事になるのだ。

「しかし……ついに奴らが動き出したか。
あの男も焦っているのではないか？」

話題を変えるために女はその事について触れる。
ニヤリと笑う三人はとても不気味にみえる。

先ほどのような明るい雰囲気は既に消滅していた、いっそう黒い笑みを浮かべてゼノンはソレを見る。

「まあ、ボクはアイツさえ殺せればそれでいいんですけどね。
ご主人様ならどこにいるか分かるんじゃないですか？

フフフ…」

「まさか！私はただ見るだけです、それでいいのだから。

ククククッ！」

知ってるくせに…三人はより深く笑う。

「ディエンドもディケイドに接触したようね、
いよいよ本格的に歯車が動き出すのかしら？」

「私達はどんなことが起ころうとも構わない。そうだろう？
私は視る、そなたらは自由に動く、それでいい」

「やれやれ、相変わらず無関心な人だ」

「まさか、私は暇なだけです。それに…」

ああ、そうだった。貴女は人じゃないんでしたね。
そう言って彼らはまた笑い合うのだった。

第１０７話　けんか（後書き）

次の番外編はダイアナとクロハのちょっとしたお話です

さて、ここでカリスのカードの説明をいれときます

Ａ「チェンジ」
ブレイドと同じ、カリスもターンアップです

２「アロー」
カリスアローの攻撃力を上げる。一応オリジナル
再構築の時間が最速

３「チョップ」
腕力が強化される。

４「フロート」
飛べるようになる

５「ドリル」
脚力が強化される。
ブレイドと同様文字通りの技が放てる

６「トルネード」
風を発生させる。また、風の力を無力化させる事もできる

７「バイオ」
任意の場所からバラの蔓を出現させる

８「リフレクト」
バリアを発生させ、相手の攻撃を反射する
自動で発動できる。しかしどんな攻撃も反射できる訳ではない

９「リカバー」
状態異常と体力を回復する

１０「シャッフル」
ハートの印を出現させ、それを持った相手と自分の位置を入れ替える
印は打ち込んでもいい
相手との距離によって再構築の時間が変わる

Ｊ「ジャック」
ブレイドと同じ効果

Ｑ「クイーン」
単体で使用すると、ミラーワールドや特殊な場所に入れるようになる

Ｋ「キング」
ブレイドと同じ効果

まあこんなもんですね

では次もよろしく！

第１０８話　番外編　？私・カレ？（前書き）

今回はもう番外編ですね
話全然進んでないですし、司達も出てきません
ちょっとした小話みたいなものですかね
ではどうぞ！

第１０８話　番外編　？私・カレ？

「あーあ、いっちゃったね……」

「しょうがないわ、彼らにはやる事があるんだから」

学校があった場所はすでに存在しておらず、
もうクロハとダイアナはどこに学校があったのかすら分からない。
実は心の中でもしかしたら、彼らが世界移動でこの世界を離れたら
記憶まで消えてしまうのではないかと思ったが、そう言う事はない
らしい。クロハは安堵の息をつく、自分達が覚えている限り必ずま
た会えそう気がするからだ。

「我夢くんとアキラちゃん…仲良くしてくれるといいんだけど」

「うん…そうね、でも本当に彼らは凄かったわ。
まさかこんな短時間でスペード、ハートと契約しちゃうなんて…

……」

そうは言ったがダイアナの表情はどこか暗かった。
クロハは何故ダイアナの表情が暗いのか、その理由を理解する。

ダイアナは代々家系でダイヤと契約を結んでいた。
その為に幼い頃から必死に努力して、何年もの日を重ねやっと契約できたのだ。

でも自分以外の三人はいくらアンデッドの性格は違えどたった一日で契約したのだ。

ダイアナはそれが少し羨ましかった、
同時に自分には才能がなかったのではないか？

ネガティブな感情が彼女つつむ

「ダイアナは…凄いよ、僕なんかより…ずっとね」

「ふ、ふん！当然でしょ！
クロハはいいわよね、すごく簡単に契約できて！」

すこし後悔したがダイアナはクロハに背を向けて走り去っていく。
それをクロハはため息混じりに見つめるのだった

『話してしまえばいいだろうに、ヘタレだなお前も』

『めんどくさい話だぜ、カッコつけてないで言っちまえよ』

『コラコラお前達……！』

「あはは…うーん、難しいねぇ」

ギャーギャーと騒ぐアンデッドにクロハは苦笑いを浮かべて頭をかく、

難しい話である本当…

『あまり、褒められたものではないな』

「？」

ダイアナが少し走ったところでダイヤのジャック、ピーコックが話しかけてきた。
不思議そうに首を傾げるダイアナにジャックはため息をつく。

『ダイアナ、いくらクラブの連中がお人よしだからといって――』

『ジャック、いいのか？』

ピーコックの言葉をさえぎる様にしてクイーン、サーペントが会話に参加する。
どうやら何か隠し事をしているようだ、途中で止められるのは非情に気になるし腹がたつ。

ダイアナは少し声を強くしてジャックたちに問いかけた。

『話すのは気が引ける、だが彼が誤解されたままというのは納得がいかん。
ダイアナよ、いくらクラブが甘いからと言って単に人助けを見ただけでは契約はしない』

「え!?　そうなの!」

じゃあクロハはどうやって…

『懐かしい話だ…』

と、言っても我らにはついこの間のように思えるがな

『こんにちは』

山羊の様な者が彼女に優しい声で挨拶をしてくる。
女性……なのだろうか？

少女は少しばかり安心感を覚えるが、やはり容姿が…

「こ…こんにちは」

震える手で父の手をしっかりと握っていたのは、幼い少女ダイアナ。
彼女がいるのは今まで近づくなと言われ続けていたコロシアム。

ダイアナは１０歳の誕生日に父に連れられて始めて彼らと会った。

『ほう、今回は女か』

『なるほど、お母様によく似てらっしゃる』

金色のカブトムシと鳥だろうか、幼いダイアナにはそう見えた。
彼らは自分の両親、祖父、その何世代前から生きている存在。
アンデッドなのだ

『どうか頑張ってください、辛くなったらいつでも相談にのりますよ』

そう言ってクイーンはダイアナの頭を撫でた。
噂に聞いていたよりはずっと優しい感じだった。スートスペード。

『ダイアナ、女であろうが、子供であろうが貴様にもなれるはずだ。
ライダーの資格が在るのならな』

最後にキングが言った言葉、あるのだろうか？
私にも資格は……

そして、また次のスートに挨拶をしにいく。

『ほう、ダイアか……ギラファは頭が固いから苦労するぞ？
わらわに乗り換えたくなったらいつでも待っておるぞ！』

『うふ、どんな風に成長していくのか、楽しみですね』

『ハッ！　俺のブールス、聴いてくか？』

ブールス？　ブルースじゃないのだろうか？

だが、しかしそんな事おかまいなしに笑い合うスートハート達を見て、
ダイアナは複雑な気分になるのだった。

何かこっちがいいような、ダイヤで良かったような……

あ、何か踊り始めた……

父親もめんどくさくなったのか、次のスートに向かう。

『めんどくさい話だが、まあ頑張れよお嬢ちゃん』

『腹が減ってるのか？　オニギリ食うか？』

『大変だと思うが、ダイヤの連中は真面目で正しい連中ばかりだ。
きっと君の力になってくれるよ』

クローバーの人達は皆優しかった。
ちょっとこっちのほうが良かったなとも思ってしまった。

だが、ダイアナはそれを否定する。
変えられないのだから……

そして、本当にダイヤのアンデッドに認めてもらうのは難しいものだった。
アンデッドについての勉強、カードコンボに耐えられる体力をつくるための特訓。

それらは押さないダイアナにとって辛いものだったが……

「お、おはよう……ダイアナさん」

「ダイアナさん……なにか、欲しいモノとかある…？」

明らかに周りの態度が変わっていった、何故？

そうだ怖いのだ皆。

ダイアナに逆らえばアンデッドの力を使って殺されるなどの噂がすぐに広まった。

友人達もだんだんと口数が減っていき、

ついには他人のような振る舞いをされた。

それが一番辛かった、悲しかった。

今まで楽しく遊んでいたのに、もう友達として見てくれないのだから

「どうしたの？　ダイアナ」

「・・・ッ」

だけど、一人だけ……以前と同じように接してくれた人がいた。
それが、クロハだったのだ。

彼はダイアナと遊んでいた一人でそれ以上でも以下でもない友達だった。
だけど周りの人間がなんと言おうとも、クロハだけはダイアナの味方だった。

「・・・」

クロハはダイアナが自分たちを守ってくれる為に努力をしている事を知っていたのだ。

だから彼は・・・その選択をする。

自分の意思をかけて

『君は、どうして私達の力を望むか……
一度、嘘偽りなく話してくれないか？』

タランチュラアンデッドは目の前で立っている少年、クロハに問いかけた。

突然話しかけられたかと思えば、いきなり契約してほしいと来た。
タランチュラはキングとしてクロハに問いかける。

「見ちゃったんです……彼女が泣いているのを」

『？』

クロハは、ある日たまたまダイアナの家を通りかかったとき、
彼女が泣いているのが見えた。

友達が泣いているのは見たくない、
そして、何より彼女は自分達を守る為に泣いているのだ
クロハはすぐに慰め、励まそうと思ったのだが……

「――――ッ！？」

なんて、声をかけていいのか……

どうやって励ませばいいのか全く分からなかった。
ダイアナが泣いているのは契約がらみの事だろうというのはすぐに分かったし、

クロハはその事について考えてみる。

だけど何も分からなかったのだ。

自分は契約者じゃない、彼女の痛みを一パーセントでも理解していないのだ。

そんな自分に彼女に声をかける資格があろうか？

「・・・ッ！！」

だから、彼は決意する。

できる筈だ、自分にも彼女と同じ痛みを共有できる手段が、そして…この街を一緒に守る権利が

『なるほど、つまり君はダイアナと同じ立場に立つ為に……私達と契約を？』

「はい、僕は無力な人間です。
だからスペードの試練には挑めない、挑む勇気も力ない。
ハートの皆さんを認めさせる自信もない、だけど……
クラブの皆さんなら、希望があると思いました」

クロハは自分の感情を包み隠さずキングへとぶつける。
聞けば契約者がダイアナ家だけの時代もあったらしい。

そして時代の中にはスペードとの戦い、歴史が語る契約者の苦悩。
それをダイアナだけに背負わせるのはおかしな話ではないのか？

その選択は正しいのか？

クロハはそうは思わない。

だから自分もダイアナ、世界の力になれるようにクラブの面々を訪ねたのだった。

『話は分かったよ、私が君と契約する条件はたった一つ』

「・・・っ」

『それは、ダイアナと同じ特訓、訓練をする事だ』

「！！」

『彼女が契約に成功したとき、君も契約に成功する。
彼女と同じ思いを君には味わってもらう事になるが、いいかね？』

もとからそのつもりだった。
今さら後悔も、未練もない。クロハは力強く頷き、キングに頭を下げた。

『できるはずさ、君に…ライダーとしての資格があるのなら』

そしてその資格とは、自らの手で掴み取るものなのだと

「はいっ！」

「そんな……それじゃあクロハが言ってた
おばあさんを助けたところを見て、キングが気に入ったって言うのは」

『嘘だな、あの男はお前、いやもしかしたらそれ以上の血を吐いただろう』

キング、ギラファの言葉にダイアナは口が塞がらなくなる。
そう言えば、ある時から彼の言葉には妙に説得力があったような気がする

『お前に心配をかけさせたくないと言って理由を隠していたが……
お前もそろそろ素直になったらどうだ？』

『マスターの幸せを願うのが契約したアンデッドの勤めというものだ』

『もうこの世界は平和になった。
これからもちょっとした事件こそあろうが、
我々の力無しでもこの世界は大丈夫だろう』

ダイヤの面々はダイアナを急き立てる。
尤も、彼女とて気持ちはかたまっていたのだが

「――――私、謝らないと…」

そう言ってダイアナは走り出す。
どうしようか？　まずは謝ろう。

そして……できる事ならば一緒に食事にでも行かない？

そう誘うのもいいかもしれない。

ダイアナは期待と緊張を胸に、クロハを探しに行くのだった。

第１０８話　番外編　？私・カレ？（後書き）

やはりブレイドのライダーは四人並ぶと爽快感がありますね

もっとレンゲルが覚醒した後の話も見てみたかったけど
あれはあれでいいと思います

まあ、今回でブレイド編は完全終了となりました
次の試練までちょっと更新は遅れる……かも

では次もよろしく！

第１０９話　ＳＴＡＲＴ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（前書き）

はい、と言う事で
カブト編、スタートです

でもね、ちょっと次の更新は遅くなるかも
ごめんなさい。この話は予告的な感じですかねｗ？

ではどうぞ！

第109話　START　SPEED　LOVE

『ねぇねぇ！　おばちゃん！』

『おばっ…！　お姉ちゃん！！』

『はーい！　じゃ、お姉ちゃん！』

『んー？　どうしたのかしら？』

『オレ！　大きくなったら正義の味方になるんだっ！』

『へー、すごーい！すごーい！』

『あーッ！　信じてないなぁ！』

『いんやぁ、信じる信じるよお姉ちゃんはぁ。
アンタの将来は多分そう言う関係なんだろうって心から思うわよお』

『本当か!?オレ、頑張る!』

『おう、応援してるわよぉ!ヒーローさん!』

そう言って、二人は笑い合うのだった。

遠い昔の話だ。

「まーゆーちん!」

「どうしたのぉ…美歩ちゃん…？」

「お菓子あげるね！　ほら、おいで」

「わぁい！ありがとぅ！」

真由は嬉しそうに微笑みながら、美歩が差し出したポッキーにかじりつく。
何も喋らずにもぐもぐとポッキーを食べる真由。

全て無くなると物欲しそうに美歩を見上げる。

「……もう一本あげるね」

「ほんとぉ！？　ありがとう……！」

笑顔でまた美歩が差し出したポッキーを食べ始める真由。
美歩は何故か呼吸が荒くなってきている気がするが…

何かヤバイ。
何がヤバイのかは、まだ説明できないが
赤面してハァハァと真由を見る美歩は相当怪しく見える。

「だあああああ！　もう我慢できないっ！
できるかよチキショー！！」

「？」

美歩は真由を思い切り抱きしめると、頬ずりを始める！
だが、真由は特に気にする事もなく。

目を点にしながら尚もポッキーを食べ続ける

「きゃわいいっす！真由にゃんきゃわいすぎるっす！！
アッシはポッキーじゃなくて真由ちゃんを食べた――」

蹴り、それで真由と美歩は引き剥がされる。
顔面から床に倒れる美歩を尻目に真由の体は強く抱きしめられる。

「大丈夫だった真由ちゃん？
怖かったね、あのＨＥＮＴＡＩは危ないからもう近づかないようにね？

おぉよしよし。可哀想に可哀想にね」

美歩を蹴り飛ばした友里が今度は真由を抱きしめる。
同じく頬ずりをしてる時点で同類と言えなくも無いが……

いや、止めておこう。友里は真由の手をとると、一緒にテレビを見ようと提案する。

が、しかし――

「ちょっと待ちなさい！」

「ぐおぉッ！」

友里のツインテールをわしづかみにするのは薫だった。
口を三日月のように吊り上げて、友里を睨みつける。
抵抗は許さない、ツインテールをハンドルの様に操って動きを封じた！！

「つーかーむーなぁ！」

「ふん！　友里、アンタは無害な羊を装っているようだけど…
見えるのよ！アンタのその内に秘めた狼のオーラが！」

「くっ…！！」

「ほら図星ってところかしら？
あぁそうね、アンタはきっと真由ちゃんとスリスリしたいだけ……
つまりそこにいるＨＥＮＴＡＩと同じ！！」

「チッ！」

「ふふふ、そんな欲望にまみれた輩に真由ちゃんは渡せないわね。
さあ真由ちゃん、私と一緒にかまぼこでも作りましょ――」

薫はそこで言葉を止める。
顔には汗が一筋……薫はゆっくりと後ろを振り向く。

いや、だがうまくいかない。
何故？そう、それは…

「ここにきてかまぼこ好きを前面にだしてくるか？
キャラ付け乙としか言いようが無いな薫ぅ？」

「咲夜…ッッ！　やはりアンタかっ」

薫のポニテを掴みながら咲夜はにやりと笑う。
咲夜はこう……なんかうまい具合に…何か、何ていうかせいッ！ってやって薫と真由を引き離した
せいッ！ってやったんだよ。本当だよ

「さあ、真由。もう悪は消滅したのだ、
ワタシと一緒に買い物に行こうか？」

「・・・」

真由が笑顔でその手をつかもうとした時、甲高い声が聞こえてきた。
瞬間、走る戦慄。
咲夜の額に汗がたれる。何だ……この声はッ！？

『まゆちゃん！　ボクと遊ぼうよ』

『まゆちゃん！　ワタシと遊びましょ』

「！？」

「わぁ！」

少し離れた所に熊とウサギのぬいぐるみが居た。
その可愛らしい二体は真由に向かって手招きをしている。

「かわぃぃ！」

「！！」

あとちょっとで咲夜の手に触れられただろうに、
真由はフラフラとそのぬいぐるみの方へと歩いていく。

「真由ッ！」

咲夜から離れていく真由。
やられた…まさかッッ

『独占しようとしてるからだよねぇ』

『いけないねぇー』

熊とウサギはどす黒いオーラを出して咲夜にその言葉をぶつける。
負けた、完敗！　真由はかわいいぬいぐるみに夢中のようだ！

咲夜は膝をつく。まさか…

「二人がかりとはッッ」

「三人ですよ」

「！？」

ぶすりと咲夜の首元に夏美の指が食い込む。
直後笑い転げる咲夜、夏美はそれを見てニヤリと笑った。

しばらくケラケラと笑っていた咲夜も、しばらくすると糸の切れた人形の如く動きを止める。

「やりましたね先輩、ハナちゃん」

「うん！　これで真由ちゃんと遊ぶのはわたし達で決まりね！」

ハナと里奈は物陰から現れて、それぞれのぬいぐるみを真由に手渡す。

吹き替え作戦は上手くいったようだ。

喜ぶ真由と笑う三人、

だが……その時だった。

「ごめんなさい。
やっぱり真由ちゃんと遊ぶのは私一人になりそうです…」

「「!?」」

トントンッ！

夏美の指がハナと里奈をとらえる。
まさかの裏切りである。笑い落ちるハナと里奈。

「私ってなんて悪女なんでしょうか！　アーッハハハハ！
ダーッハハハハ！！　ウェァハハハ――オエッ！！」

「夏美ちゃん！」

「イエス！　さあ一緒に遊びましょうねぇ！」

「ボクにもやって！ボクにもぉ！」

「え？」

夏美は沈黙する。
こんな天使に笑いのツボを押すって…

「できませんッ！グワァ！」

何故か吐血して倒れる夏美。

「・・・！」

しょうがないので、真由は最終的に残った一人に飛びつく。
そんな真由の頭をその人は優しく撫でる。
子猫の様に笑う真由を見て、その人も優しく微笑んだ。

「ふふっ、よしよし」

焦り、それは敗北への片道切符ですよ……先輩方？

「ふふっ」

ニヤリと笑ってアキラは真由の手を握るのだった。

「さあ行きましょうか、真由先輩」

「うん！」

真由先輩、マジ天使。
そう確信した時だった

「あ…」

「あ…」

我夢とバッタリはちあわせしてしまう…

「「あのっ……」」

二人同時に声をかけるが…どうも気まずい。
目を合わせないまま二人は立ち尽くす。

アキラは何を言おうとしたのか聞いてみるが、
彼女の元々である美しくも低めの声が、何か怒っているのではないかと言う錯覚を起こさせてしまった。

結局我夢は軽く謝ってその場を立ち去ってしまう。
どうも前の世界で、あの時以来うまく話せないでいた。

「・・・」

唇を噛むアキラ、しかしすぐに違和感に気づく。
真由の手を掴んでいたのに、ふと気がつけば今自分が握っているのは手じゃなくてぬいぐるみ！

「あ！」

「さぁ真由ちゃん、邪魔しちゃ駄目だからねぇ？
私と一緒に遊ぼうねぇ」

真由を引き連れているのは葵だ。

「葵さん！　真由ちゃんは私と遊ぶんですよ！」

「いや！この美歩ちゃんだね！」

「あたしを忘れんなよ！」

「いや、私が！」

「私！」

やんや、やんやと言い合いをしている女性陣を真由は暖かい目で見守る。

この抗争の原因が自分にあるとは夢にも思っていないだろう。

今日のおやつは何か……とか、皆が平和に過ごせますようになんて考えている。

「あ！」

そんな中、真由は何かに気づくと満面の笑みでそこへ駆けていった。

何事かと女性陣が見てみると、そこには双護がいるではないか。

「お兄ちゃん！　どこ行くのぉ…？」

「真由か、俺は今から自分と言う意識体が何故この世に生を受けた

のか？
今一度世界に問うと言う暗黙の了解を得るため、
そして自我の存在をこの世に受け継ぐため
生命の育みと言う恩恵を得る儀式を行う聖地、つまり自販機に行くところだ」

「よくわからないけど…ボクも行くぅ……」

「ハハッ、いいぞ。何かジュースを買ってやろう」

「うん…！」

そう言って二人は楽しそうにみんなの前から歩き去ってしまった。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「やっぱり、お兄ちゃんが一番なのかしらね」

葵は沈黙する女性陣達を見て、苦笑したのだった。

第１０９話　ＳＴＡＲＴ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（後書き）

先に言っておきますが、この編は少し特殊かもしれません。
何か、勝手に終わってた……って感じになるかも

ではこれで、次もよろしく！

第１１０話　ＣＯＮＴＡＣＴ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（前書き）

はい、と言う訳での更新でございます

ちょっとね、また更新が遅くなってしまうかもしれません

土曜くらいかな、ひょっとしたら。理由は後書きで

ではどうぞ！

第110話　CONTACT　SPEED　LOVE

「ハァ！　ハァッ！　……クソ！」

激しくネオンが交差する夜の世界を女性は息も荒く駆けていく。
肺と体が悲鳴を上げるのを感じるが、それでも足を止める訳にはいかない。
足を止めれば恐らく…

（死ぬ…のよねっ！
ああ、三十超えると体力なくなるってホントだわ…）

どこに逃げればいいのか？女性思考をめぐらせる。
人込み…は駄目。目立ち過ぎる、すぐに見つかって殺されるだろう。
見つかった時点で詰む一歩手前なのだ。

だったらもっと物陰とか…

「！！」

そんな事を考えている暇があったら足を速めるべきだった。
女性は激しく後悔する。

目の前にいる『兵器』は自分を視界に捉えただろう。

見つかった！

危険だと、

最悪だと脳が告げる。
女性はせめてもの抵抗に、ある機械のスイッチを入れた。

「行って！　お願い…ッ！」

虫を模したソレは次々に飛行し、目の前にいる『兵器』を攻撃していく。

マイザーボム、だが彼女は知っている。
この程度で『兵器』が止まる訳がない、あくまで足止めでしかないのだ。
女性はマイザーボムに怯んでいる『兵器』を確認すると、また走り出した。

「…キャストオフ」『Ｃａｓｔ　Ｏｆｆ』

最も聞きたくない単語が不条理にも後ろから聞えてくる。
直後、頬を掠める『兵器』の外装。

リアルに近づく死が、彼女の恐怖を極限まで高めた。
腰を抜かす女性、そしてゆっくりと迫ってくる『兵器』

「お願い！　神也君っ！　正気に戻って!!」

「・・・」

女性は迫る『兵器』に向って必死に声をかけるが、『兵器』の足は止まらない。

女性の声が耳に入っていないと言わんばかりに。
いや、当然だ…『兵器』は意思を持たない。
持ってはいけない。

それは分かっている、だが女性はそんな理不尽な都合を認めたくはなかった。
たった一つの可能性を信じて……

「・・・」

だが『兵器』が足を止める事はなかった。
その代わりに剣を振り上げる、それが振り下ろされれば女性は死ぬだろう。

当然の事だ、それを『兵器』は実行するまで

「クッ！！」

女性は瞳を閉じる。

悔しい、それだけだった。
なんでこんな事になったのだろう…

目の前にいる自分よりずっと幼い、まだまだ子供の彼が…今自分を殺そうとしている。
人間としてではなく、『兵器』として与えられた使命を実行する為にだ

ごめんなさい。貴方達を救う事はできなかった……

女性は目を閉じる、体を切り裂かれるのは怖い。
だが、それ以上に心が痛かった。

「・・・ッ！？」

剣が振り下ろされた音、そして同時に響く…それが何かにぶつかる

音。
女性は自分の体が未だに無事なのを不思議に思い、目をあけた。

「！！」

まず、青。
それが最初に目に飛び込んできた色だった。

よく見れば、青い壁の様なモノが自分と彼の間に存在しているではないか。
その壁の様なモノの中心にはトランプのスペードを連想させる柄が描かれていた。

不思議に思う女性、そして同時に自分の頭上を飛び越える誰かを見る。
その誰かは雄たけびを上げながら青い壁に突っ込んで行った。

そして見る、その人間が壁を通り抜けた瞬間、姿が変わるのを！

「あれはっ！？」

女性は記憶を呼び起こし、今『兵器』と戦っている戦士の情報を探る。

しかし駄目だ、自分が知る限り目の前の戦士に関する情報は持ち合わせていない。

一体自分を助けてくれたあの戦士は何なのか？

『兵器』と似てなくも無いが・・・

「ライダー……インセクトなの？」

「ウラァァァッ！！」

「・・・」

現れた戦士は自らの剣で『兵器』の剣を弾く！

兵器（ライダー）と似ているデザイン。

自分が知らない間にさらに新しいインセクトが完成していたのだろうか？

装備も…大きく違っているようだが…？

「大丈夫ですかっ！？」

「――え？」

ふと気がつくと少年が自分の肩を揺すっていた。
どうも考え事をすると注意力が落ちてしまう。

女性は少年に大丈夫だと言う事を告げるとお礼を述べる

「逃げましょう！　安全な所まで案内します！」

「ありがとう…でも、貴方達は？」

「僕は犬養拓真と言います。うまくは言えないけど敵じゃありません！
信じてください！」

どうせこのままなら確実に死んでいるのだ。
女性は拓真の言葉を信じると、手に捕まり立ち上がる。

「…ドレイク！」

今まで沈黙を保っていたライダー、サソードが声をあげる。
その合図に拓真と女性の前に一人の人間が現れた。

独創的なファッション、だが決しておかしい訳ではない。
むしろおしゃれと言われれば頷いてしまう、そんな男だった。

だが、その表情は無機物、まるでロボットのように平坦なもの。
目にも光はなく、機械的に手を前へかざす。

「！！」

男の手にはグリップの様な物。
そしてそこへ止まるトンボの様な機械、拓真はその光景を見て素早くファイズギアを装着する。

『5』『5』『5』『Ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ』

「変身…」

「変身！」

現れたのは二体のライダー。

ファイズとドレイク、ファイズは素早くメモリを取替えアクセルフォームへ変身する！

司から聞いていたカブトのライダー勢、
その最もたる特徴と言えばやはりクロックアップを除いてはないだろう。

強力な力、ならば…

『Ｓｔａｒｔ　Ｕｐ』

出鼻をくじく！

「キャストオフ」『Ｃａｓｔ　Ｏｆｆ』

ドレイクの装甲が吹き飛び開放される…

筈だった――ッ

「！」

装甲は確かに剥がれた。
しかしその装甲が吹き飛ぶ前に、一つ一つその全てに赤いポインターがセットされ、まるで檻の様にドレイクを閉じ込める！

空中に留まる自らの装甲が邪魔になってドレイクは身動きがとれない。
これではクロックアップを発動した所でなんの意味もない物だった。

「・・・」

だがそれをみすみす許す訳にはいかない。
サソードがいるのだ、

「よそ見たぁ余裕ですな！　椿君かっちーんッ！」

「…クロックアップ」『Ｃｌｏｃｋ　Ｕｐ』

ブレイドの剣を一瞬でかわすサソード。
驚くブレイドに素早く連撃を加えると、ドレイクの元へと移動する。

「！」

しかし、ドレイクの所へはたどり着けなかった。
目の前に真紅の騎士、龍騎が現れ行く手を防いだのだ。

「ヘッ！」

「・・・」

アクセルベントを発動した龍騎は、サソードと同速とまではいかないものの攻撃に追いつくことができる。

足止めには充分だった、しかもブレイドもまたマッハのカードをライズして龍騎に加勢する。
一人では不利だったとしても二人ならサソードと互角の勝負を繰り広げる事ができた。

「ヤアアアアアアアアッッ！」

アクセルクリムゾンスマッシュが放たれ、
装甲を弾き飛ばしドレイクの体にヒットさせていく！

『キング』【ライトニングソニック】

『ストライクベント』

「「ウォラァアアアアアッッ！！」」

龍騎の火炎攻撃とブレイドの高速から放たれる電撃を纏ったとび蹴りがサソードに命中する！

ドレイクとサソードは苦痛の声をあげるでもなく後退すると、これ以上の戦闘は不可能と悟ったのか撤退していった。

既に高速移動が解除された三人に追う術も、勝てる見込みもない。
三人は変身を解除すると、女性を保護する為に、学校へと連れて行くのだった。

第１１０話　ＣＯＮＴＡＣＴ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（後書き）

はい、実はですね。
僕も少しキャラクターの絵でも描いてみようかなと
絶対に駄目ですよ期待なんてしたら。
ちびキャラでごまかすつもりですからね

詳しくは活動報告に書いてみました
まだ書いてみようかななんで……もしかしたら無かった事になんて
事も…

いや、多分大丈夫でしょう
ではこれで、次もよろしく！

第１１１話？　超番外編・イメージイラストの罠（前書き）

※注意！！

まあね、ちょっと前から言ってた挿絵というかイメージイラストを私もやってみました

だけど……ちょっと防衛線というかいい訳を

・まさかのペイント
・ＳＤ風のミニキャラ。等身バイバイ
・安心の白黒。着色？何それおいしいの？
・まあ総じて微妙
・手と足がまる。ドラちゃん憑依
・作者自身イメージが迷走している

などなどの問題がありますんで
どんな絵がきても大丈夫って方だけご覧ください

ではどうぞ！

第１１１話？　超番外編・イメージイラストの罠

「やあ、みんな。ゼノンだよ」

「フルーラよ！」

「突然だけど、この作品には多くの登場人物がいるね」

「誰かは言ってたわ、イメージを大切にしてもらいたいと
答えなんか無い。自分が想像したものが正解なのだと
ドヤ顔で」

「そうだね、だけど……皆が皆そうとは限らない。
キャラの区別がつきませんって人もいる……かもしれない」

「イメージが知りたいって人もいるかもしれないわね」

「…と、まあ面倒な前フリはここまでにしようかフルーラ」

「ええ、そうね。早い話が
キャラクターのイメージイラストがこの先にはあるわ」

「と、言ってもいわゆるチビキャラと言うかミニキャラと言うか
ＳＤキャラと言うか……
服も目も適当な感じなんだけどね」

「ワタシ達二人の会話は言わばクッション、最初に言っておくと……
あんまり……割と上手いものとはいえないわ」

「そうだね、それに答えじゃないとは言え
イメージが壊れてしまう可能性も高い」

「どんなものでも、え……こんな姿だったの？

なーんてガッカリしない自信がある方だけ、この先の観測をお願いしたいの」

「君のイメージが正しいのさ、これは一つのパラレル」

「さあ、ではその約束ができる方だけ下へとお進みくださいな」

「一応今はノープランだったから、　ユウスケと薫だけを開放させたよ」

「「さあ！　覚悟はいいかい！」」

『クウガ』
＞ｉ３２０５０―４０７４＜
『アギト』
＞ｉ３２２５７―４０７４＜
『龍騎』
＞ｉ３４４２３―４０７０＜
『ファイズ』
＞ｉ３４８３０―４０７０＜
『ブレイド』
＞ｉ３５３８７―４０７０＜
『響鬼』
＞ｉ３５６４６―４０７０＜
『カブト』
＞ｉ３６１５９―４０７０＜

「電王は原作キャラだから、イメージが知りたいなら――」
「ピ○○ブとかで検索してね！」
『キバ』
＞ｉ３６１６１―４０７０＜
「いろいろごまかしてるね」

「いろいろごまかしてるわね」

「線がガタガタだね」

「なんか、影もどきが……不気味っていうか……」

「でもまあ、もしかしたら増えるかもしれないよ」

「一応司と夏美を除いたメンバーをやりたいとは言っていたわ」

「まあこんなんだけど、すこしでもイメージの足しにしてもらえたらいいんじゃないかい？」

「ええ、じゃあさようなら！」

「「ばいば～い！」」

第１１１話？　超番外編・イメージイラストの罠（後書き）

はい、という訳でね

まあ……増えていくと思います。
でもあんまり期待はしないでねｗ

まああくまで予定って事で

では次もよろしく！

第１１２話　ＰＡＳＴ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（前書き）

はい、更新ですね。土日…まあ月…くらいはできるかな？

ではどうぞ！

第112話　PAST　SPEED　LOVE

「どうぞ」

「あ、どうも！」

葵は女性に紅茶を差し出す。
女性はそれに口を付けると緊張から開放されたのか、笑顔を浮かべた。

「おいしい！」

「あはは、ありがとうございます」

葵は嬉しそうに笑うとキッチンに戻っていく。
それに入れ替わるようにして彼女は口を開いた。

「さて…と。色々互いに聞きたい事があるみたいだけど…」

女性は既に司達が普通の存在ではない事を見抜いていた。
この不思議な学校、見た事もないライダー。
一時期は『天才』とまで言われた、科学者である彼女の知識的欲求が刺激される。

だが向こうとてコチラの情報が欲しいのだろう。
女性は落ち着きを取り戻すと、ゆっくりと話しはじめるのだった。

「あのぉ、いやしかしその前に亘君……ちょっといいかな」

「……な、なんすかね椿さん」

小声で椿は亘に呟く。
いや、この時点で嫌な予感しかしないんだが

「ぼくはね亘君、女性は皆二十歳を超えるとＢＢＡになるのだと思っていたんだ」

「は、はぁ……」

「だけどね、まずはコレ――
葵さんを見てその定理が愚かな間違いだと気づいちゃった訳なのよ」

「・・・」

「これ、もうどうしようか亘君。あの女の人見てみんしゃいよ！
これっ――ねぇ？　もう椿くん分かんなくなっちゃって」

「いや――」

「見て御覧なさい亘君、あの知的美人の姿を……コレッ、え？
全然椿君ホイホイされるレベルよ？」

「あ…いや、だから――」

「そもそもね、まず包容力と言うかね、そこがあの糞女とは違って見えるね。
だけどその中にある美しさや、かわいらしさのギャップが――」

「はい……はい、いやでも――」

「あははははっ、どうしようか亘君！
椿くんあの人カッコよく助けちゃったよね、
コレっ、フラグ立っちゃうんじゃない！？

あははははっ　参ったなコレぇ！　ねぇ！」

「椿さん……あの人、結婚してますよ」

「・・・え？」

「左手の薬指、指輪してますから」

「・・・」

「・・・」

「後で幼女でも探しにいこーっと！」

（すげぇなこの人……）

「私の名前は新意有美子（あらいゆみこ）。どうぞよろしく」

有美子は学校に居るメンバーに一通りの挨拶をすませる。

「しかし、驚いたわ…まさかココとは全く違う世界があるなんてね」

有美子はそう言ったが特に驚いている様子は無かった。
その事を翼が問うと、有美子は苦笑する。

長い間色々な研究をしているうちに何があってもあまり驚かなくなってしまったのだと。
有美子にとって他世界が存在していると言う事は驚く事だが、心のどこかで、やっぱりと言う納得の念があった。

彼女にとって起こりうる全ての事は等しき現実なのだから。
いち早く受け入れてしまった方がいいのだろう

「だったら…この世界は驚いたんじゃないかな?」

有美子の言葉に一同は皆頷いた…

まず司達がこの世界に来たとき、今さらながら世界の壮大さに驚いたモノだ。
それだけこの世界は異質だった。

まるで映画の撮影に巻き込まれたような非現実感、
それはこの世界の進化しすぎたと言ってもいい科学力のおかげだろう

まず、なんと言っても歩いている人間がいないのが本当に驚いた事だった。
司達は調査の為、この世界を最初探索したのだ。

その時にそれを発見する…

人は、皆カプセルのような物に入っていた。
カプセルは車輪がついている訳でもないのに移動しており、少し宙に浮いている。

人々はその中に入り移動していたのだった。
人々が普通に歩いている自分達に好奇、哀れみ、
見下したような視線を送っているのに不快感を覚える。

業を煮やした司が適当な人間に話しかけ、どう言う事なのかを聞いた。
すると、その男は司達を馬鹿にしたように笑うとカプセルについて説明をはじめる。

男はどうやら司達のことをカプセルも変えない貧乏人だと思っていたのだろう。
それ程カプセルはこの世界における常識のようなものだった。

このカプセルは様々な機能がついており、
自分で移動しなくてもいいし身の回りの事を大抵やってくれる。

いわば生活補助装置だった。

「・・・」

確かに楽そうではある。
だが少しの違和感も感じてしまうのが正直な感想だった。
もうこの世界の人間は歩く事すらしないのだから

その後もこの世界の凄まじい科学力を確認できる物がいくつもあった。

例えば食事だ、誰も調理をしていなかったのだ。
聞けば家庭だとカプセルが全てやってくれるし、店も機械が全てをしてくれるらしい。

運ぶのも機械がやってくれるし、会計もまたしかりだ。
司達は暫くこの街を巡ったが、皆機械に任せている物ばかりだった。

そしてさらに気づく、車が見当たらない事に。

その答えは簡単だった。ゲートと呼ばれる場所が各地にあり、
そこにカプセルで通るとクロックアップシステムが発動して目的の
場所まで一気にいけるのだ。

もはや車などこの世界においては自転車とあまり変わらないもの、
いやカプセルがある以上、完全に要らない物なのだ。

発達した科学、そしてそれを象徴する人の生活。
皆がカプセルに乗り込み疲れを知らぬ生活。

それは…とても素晴らしい事なのだろう

だが、司達には違和感が強く残ったのだが…

「全く同意見だわ…」

しかし、そんな司達の考えを誰よりも理解していたのは有美子だった。

彼女は科学者であり、この街の発達しすぎたと言っても良い科学世界の貢献者でもあるだろう。

……がしかし、彼女はこれが正しい発達なのかどうか疑問に感じていたのだ。

「ところで、貴方を追っていたライダーは何なんですか？」

翼の言葉に有美子はうつむき、唇を噛んだ。
そして、有美子は語り始める、今この世界がどの様な状況なのかを…

楽をしたい、それは人間が常に考えている事だろう。
疲労や負担はできるだけ少なくしたいと…人間は考えていた。
そう、そして様々な楽をする為の道具が開発されていく。

歩くのが疲れた、なら自転車を作ろう。

自転車をこぐのが疲れた、ならば車を作ろう。

車は大きいし維持費もかかるし室内じゃ使えない。
だったらいっそ乗り込むだけで全てやってくれる物を作ろう。

時間こそかかるが、時を重ねるごとに新しい機械が作られるようになっていた。
新しい燃料や物質がどんどん発見されていき、そのたびに人々の暮らしは豊かになっていく。

しかし、一方で人間は堕落しきっていったのだ。
自らの力で動く事もしない、何かをする事すらしなくなったのだ。

なぜなら自分達がやらなくとも全て機械がしてくれるから。

料理、洗濯、掃除、勉強まで…

有美子の様な否定派も最初こそは大勢いたらしいが、
時が経つにつれ否定派もみなくなったらしい。

今もどこかで何か新しい機器が作られているに違いない。
それがこの世界の根本たる姿だった。

だが、その代償がやって来る。

人が研究や実験で発生させた有害な物質が、
虫に触れる事でその虫は異常進化を遂げ、凶暴化する。

それこそがこの世界が生んだ代償、ワーム。

ワームは自らをこんな姿にした人間に復讐するかの様に、人を襲う。
だがもちろん、それをみすみす許す訳にはいかない。

人間はさらにその有害な物質を研究し、改良。
そしてそれをあえて虫に与える事で、『ゼクター』と言われる物を
作り上げたのだった。

ゼクターは人間に勝るとも言われる知識を所持しており、
それぞれ一人の人間を契約者として判断する。

見事契約者に選ばれた人物は、
ゼクターの力で『マスクドライダー』となり力を手にするのだ。
これこそがワームを駆除する為に生まれたライダー。

通称『インセクト』なのだった。

「インセクトのおかげでワームはほぼ全て駆除したわ…
それは、喜ぶべきだと思う…」

「だけど…貴方はそのライダー…インセクトに追われていた」

「ええ……ワームを生み出したのは人。それに気がつくべきだったわ」

本当に恐ろしいのは、こんな物を生み出した人間自身だと…

そう、ワームが死滅した事で世界には平和が戻ってきた。
だがそれは間違いだったのだ。

ワームが居なくなったことで、新たな危機が訪れる。
インセクト及びカプセルを作った科学組織、
通称『ブレイン』の創始者、峰岸創英（みねぎしそうえい）は、
有美子と同じく科学社会否定派の人間だったのだ。

創英は自らもインセクトとなりワームから世界の危機を救った英雄だが、
彼はその戦いの過程で人間に絶望した。

自分達の街、世界が危機に陥っているのに完全に他人に頼っていた人間たち。

警察も駆除機械の設計を依頼するだけで何もしなかった。
他の街人たちも、ワームを倒す機械を作れと罵倒こそ浴びせたが応援などはしなかった。

他人任せ、創英の心に影が灯る。
しかし、彼はまだあきらめなかった。

今回のワーム事件は人間の生み出した有害な物質が原因、
さすがに人間達も自重するかと思われた……

が、しかし――

『ワームを生み出さない機械を作ってくれ』

『有害な物質を生んだブレインは謝罪をしろ』

『新しい機械はまだか？』

『ゼクターを販売してくれ』

これが人間か、これが人間なのか！？
創英は怒り狂った。

自分の命令を無視して開発を続ける人間達、そう。
人間達は理解したのだ。ワームはインセクトが退治してくれる。

もし新しいワームが生まれてもそれを上回る機械を作ればいいと。

いや、作ってもらえばいいと――

創英は理解する、そして決める。

堕落しきったこの人間共はもういらない。
せめて存在するなら自分の言う通りになるモノだけでいいと…

第112話　PAST　SPEED　LOVE（後書き）

はい、ちょっとオリジナルが強いかな
苦手な方はごめんなさい。

今回カブト編での大きな原作との変更点は

・クロックアップ
・キャストオフ、プットオン
・ゼクター
・マスクドフォーム・ライダーフォーム

辺りかな？
やべぇほとんどだ…ｗ

まあちょいちょい説明いれますね
では次もよろしく！

第113話　WHY　SPEED　LOVE（前書き）

うーん、そうですね。すいません明日は多分更新できないかなぁ
次は……水曜かな

ただ多分月曜にアギト組みのイメージイラストをユウスケと同じところ、超番外編に投稿すると思います。苦手な方はスルーしてください

ぶっちゃけ三十分くらいでかけるんですよね、アレｗ

ではどうぞ！

第113話　WHY　SPEED　LOVE

「創英は街の人間全てにブレインコントロールをかけるつもりなのよ。
おそらく…あのカプセルから電波を流してね」

有美子はそれにいち早く気づき、街の人間にカプセルから降りるように言いかける。
しかし誰も相手にはしてくれなかったそうだ。
まあ考えてみれば女性一人が騒いだところで何も変えられないのは分かっているのだが
それでも、若干の不快感は覚えてしまう

「創英の言いたいことは分かるわ。だけどアイツは結局何も分かってない！
あいつは自分を守る兵士として適当な人間を洗脳してインセクトにした！
私の甥も、その友達もッッ！
そんな事が許される筈がない！」

「甥…ですか？」

「ええ、私達の息子みたいなモノよ」

有美子は夫の新意陸矢（あらいりくや）と共に兄の一人息子、つまりは甥と一緒に暮らしていたのだ。
有美子の兄と、その妻は科学実験の失敗で発生した爆発に巻き込まれて亡くなった。
当時まだ幼かった甥を有美子は引き取ったのだ。

その時から有美子は行き過ぎた科学世界に否定的になったのだろう。
甥はそんな有美子の意識を尊重しつつ、立派に成長していった。

正義感の強い夫から影響されたのか、鬱陶しい程正義については熱かった。
特に将来の夢がヒーローだとか正義の味方だとか、ずっと飽きもせず熱く語っていたのは記憶に新しい。

「だけどっ……ある日、友達の子と一緒に誘拐されて…感情を封じられたわ！
私と旦那は必死に創英に二人を解放してくれるように頼んだ。
だけど返事はノー！　旦那は捕らえられて……ッッ！
今も監禁されてる！」

創英は狂ってしまったのだろう、そして世界中の人間を洗脳して世界を支配する。
そんなふざけた事の為に…

「だけど…ッ！　このままじゃ終わらせない！」

「え？」

有美子は創英がブレインコントロールを行う時間を知ることができたのだ。
どうやらまだ洗脳装置は完成しきっていないらしい。
十分野望を阻止できる！

しかし、いろいろと調査をした結果、あの様に追われる身になってしまったが…

そして有美子は協力してくれる研究者と共に
一つの機械をつくりあげることができた。

『リコンファーム』

「それはどう言う機械なんですか？」

「ええ、これは――」

創英のブレインコントロールはカプセルを経由して行われる。
つまりカプセルに乗っていない者には効果は無いのだ。
詳しい事は機械の前で説明すると、有美子は言う。

「どうか、力を貸していただけないかしら！」

有美子は頭を深く下げる。
一同は、頷くと有美子についていったのだった。

「お兄ちゃん……」

「ん？　どうした真由」

「なれるといいね…カブトに……」

「ああ、そうだな。ありがとう真由」

双護は真由の頭を撫でる。

嬉しそうに微笑む真由を見て、双護も笑うのだった。

二人は手を繋いで他愛もない会話を始める。今日食べたご飯がおいしかったと嬉しそうに話す真由を見て、双護は手を握る力を無意識に強めた。不思議そうに首をかしげる真由に優しく微笑むと、小さく呟く。

「真由は俺が守ってやるからな」

「うん！」

二人は手を振りながら歩き出す。

年齢の割に真由の背は低い、二人は親子の様にも見えた。

しかし、そんな微笑ましい光景が街で見える中……

「み、皆うまくいってるかなぁ？　どう思うアキラちゃん」

「さあ……どうでしょうか……」

「りょ、良太郎がついてるんだから大丈夫よ！
そう思わない？　我夢くん」

「そうですね……」

「「……」」

（（き、きまずいぃぃぃ！！））

里奈とハナの汗がまるで滝のように流れ出ている。
さっきから一度も我夢とアキラは目を合わせようとはしない。
何とか会話のチャンスをつくってあげようと二人は奮闘するが、結

果は散々たるものだった。

むしろ、一言一言が我夢とアキラの距離を開けているかのような気がする。

仮面のような笑顔を里奈とハナは浮かべながら、意味も無い会話を二人に振り続けていた。

途中何度、我夢が退出しようとしたことか……

しかしそんな中、我夢は夏美と葵に呼ばれて紅茶を受け取る。

どういう事なのかを聞くと、これをアキラに差し出せばお礼の一つは言われるだろう。

それをきっかけに会話を振れば、気まずさは払拭されて上手くいくのではないかと言う事だった。

我夢としてもアキラとは仲直りがしたい。喜んで紅茶を受け取るのだった。

これを差し出せばきっかけがつくれる。ああ、そうだろう

上手くいけばだが……

「・・・あ」

焦り、ああなんて愚かな事だろうか。我夢は焦りすぎるあまりこけてしまい

紅茶をアキラの胸にぶちまけてしまった。

飲みやすい温度にしてくれていたとはいえ、驚きと熱さで思わず短く悲鳴を上げて立ち上がるアキラ。

それが我夢の焦りをさらに加速させてしまい、暴☆走を引き起こしてしまう……！

「あっ！　あのごめんなさい！！　今すぐ拭きますからッ！！」

「えっ！？」

もにゅ……り

「は？」

「……ッ！！」

赤くなっていくアキラと、青くなっていく我夢。

ゆっくりと、自分でもびっくりするくらい冷静に我夢は現実を直視する。

あれだな、いきなり男の人に胸を触られたら……

「きゃあああああああ！！」

走りさるアキラと、その場に崩れ落ちる我夢。

ああ、仲直りが遠くなる。今度は涙を滝のように流しながら里奈達は確信したのだった。

さて、話は司達へと戻る。

有美子は追われている身だ。
街中には監視カメラが設置されている為、うまく動く事ができない。
結果として到着まで通常の倍以上の時間を使ってしまった。

「ここよ」

有美子は特に何の変哲も無いビルにやってくると、その中に入っていく。
そしてエレベーターに乗ると、なぜか今居る一階のボタンと、開閉のボタンをそれぞれ三回ずつ押した。

「うぉ！」

すると、エレベーターは上ではなく下へと動き出す。

「ドラマみたいですね…」

「まあね、これくらいしないと」

そしてついたのは彼女の研究所だった。
そうとう深いのか、見上げるほど天井が高くにある。

驚く司達を尻目に有美子はなにやら装置を操作し、その機械を出現させた。

「これが…リコンファームよ」

その機械は大きな電波塔の様な姿、そこに人間が乗る所がある不恰好な物。
しかし、これこそが有美子と仲間の作った切り札だった。

「私に協力してくれた人達はもう避難してもらったわ。今は私だけ」

「避難？」

「ええ。カプセルに乗ってもらってるわ。あれなら怪しまれないし…」

だが、カプセルに乗っていると言う事はブレインコントロールの対象と言う事だ。
それを防ぐためにも失敗は許されない。

「創英はカプセルに乗っていない人間は捕獲して軟禁するのよ、だから…」

「なるほど…ところで、私達は何をすればいいんでしょうか？」

「そうね、人探しをしてもらいたいの」

「人探し？」

有美子は頷くと、リコンファームにあるカプセルを指差す。
人一人がギリギリ入れそうな狭さだ。その周りにはなにやらゴチャゴチャと機械がついている。

「あそこにあるカプセルに探して欲しい人間を入れるのよ」

「そうした場合どうなるんですか？」

有美子はリコンファームについて説明をはじめる。
このリコンファームは人が生まれてから今まで過ごしてきた記憶を、全て強制的に思い出させ、自我を取り戻させるという装置だった。

これがあればマインドコントロールをされたとしても力ずくで上書きしなおせる。
記憶の上書きで洗脳を強引に解除するのだ。
洗脳された記憶も思い出す為、事の重大さも皆に伝わる。

「えぇ…それって私達も思いだすんですかぁ？」

美歩がげんなりしながら手を上げる。
全てを思い出すと言う事は……嫌な思い出も思い出すと言う事、少なからずの抵抗があると言うものだ

「いえ、基本的にはカプセルに乗っている人間よ」

その言葉を聞いて美歩はため息をつく、
いろいろと嫌な思い出がある……

「ところで、僕達はどんな人を探せばいいんですか？」

拓真の言葉にそうだったと有美子は笑う。
有美子によればこのリコンファームを起動させるには、
一人の人間を電波塔にあるカプセルに入れなければいけないのだ。

「その人間がコアとなって電波を発信するのよ」

「だれなんですか？　それは…」

「実は…まだ分からないのよ……」

「え！？」

有美子の研究、リコンファームもまた未完全だったのだ。
さすがに短期間での製作だった為に起動がうまくいかないと言う問題が残った。
だが人間に流れている微弱な電気と、ある特定の細胞が起動のスイ

ッチになるということが分かったらしい。
その起動の為の電気を持っている人間を探して欲しいということだった。

「三日前にその電気が流れてる人間がこの街にやってきてね。
本当助かったわ、私の体を改造してでも作ろうと思ってたから。
電気はなんとかなっても細胞まで作ってる時間は無い。
創英がブレインコントロールを行うのは今から十日後の正午、
まだマインドコントロールの電波をカプセルに送る機械は完成していないの。
予定は十日後と言う訳。だけどコッチもそれまでには作れない」

しかし、運よくリコンファームを起動させる条件に一致した人間がやってきた。

という事なのだ

「その人間を探す機械もつくってあるから」

そういって有美子はレーダーの様な機械を取り出す。
なんでもその人間の体内電気を感知して知らせてくれるらしい。

「非協力的な人間だったら無理やり乗せてやるわ！
私は何としてもあの子達を助けたいの！」

気合も充分なのだろう、有美子は力あまってレーダーのスイッチを入れてしまう。

その時だった――

ピピピピピピピピピピピピピピピピピピ！！

「！？」

突如鳴り響くレーダー、何故？
一同はあまりの急展開に沈黙する。

「ど、どういう…？」

「ッ！　貴方達がこの世界に来たのはいつなの！？」

「そ、そう言えば…三日前だったような……」

「！！」

有美子は焦る気持ちを抑えながら、レーダーを司から順に体に当てていく。
そして暫くして、ランプが赤から青に変わる人間が現れた。

有美子は興奮と喜びを言い放つ、この人間こそが探していた。

鍵だと…！

「見つける手間が省けたわ！　本当に良かった！　お願いね！
あなたも起動の為に全てを思い出してもらう事になっちゃうけど
……」

有美子はその子の手を握って微笑む。

「うん……！」

そう、天王路真由こそがリコンファームの『鍵』だった。

第113話　WHY　SPEED　LOVE（後書き）

はい、結構ねアニメとかもよく見るんですけど
ドラマとかも良く見ます

最近はドンキ〇ーテが面白かったかなw？
まあいいやw　ではこれで、次もよろしく！

第１１４話　ＷＡＲ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（前書き）

はい、更新ですね
んー、そうですね次は明日かな。
ではどうぞ！

第１１４話　ＷＡＲ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ

「やったな！
これでその創英とか言うヤツの野望を阻止できるんだろ！？」

一同は喜び合う。どうやらうまくいきそうだと

「……」

だが、一人…一人だけは違った

「有美子さん…一つ、聞いても良いかな？」

「うん？」

「真由も…思い出すのか？　全てを……」

「ええ、まあそう言う事になるわね」

「ボクは大丈夫だよ…？　お兄ちゃん」

「……」

椿と真志、他数名は双護の体から溢れんばかりの異質なオーラに気づいた。

彼のこんな雰囲気は初めてだ。

表情こそいつもと変わらない様に思えるが、何か…言い様のない怖さの様なものがあった。

無表情すぎるのかもしれない。
特別心配そうと言う様にも見えない、何かまるで別の事を考えているようだ。

「どうした双護、心配なのか？」

「……ああ。有美子さん、どうしても真由じゃなきゃ駄目なのか？」

「…そうね、ごめんなさい。でも大丈夫よ、決して有害なものじゃ――」

「他に何か方法はないんですか？どんな事でもいい、他に何か…」

何故か真由をリコンファームに乗せる事を彼は異様に嫌がった。
なんとかして断ろうと彼は食い下がる。
珍しい、確かに心配なのは分かるが今までとは明らかに違う

「お兄ちゃん…ッ！」

「！」

「ボク…皆の役に立てるんだよ…ね…！
じゃあ…絶対…やるから…」

双護は曖昧な表情を浮かべて後ろへ下がった。
しかしまだ彼をとりまく異様なオーラは消えてはいない。

それが少し気になった翼達が彼に理由を聞くが、双護は曖昧な言葉で答えはしなかった。

まあしかし、このままと言う訳にもいかず結局真由を起動の為のスイッチにする事は決定する。

「よし！じゃあ早速――」

有美子は準備に取り掛かろうと歩き出した。
しかし、そこで拓真があるものを見つける。

慌てて大声を出す拓真、有美子の足の裏。
つまり靴の裏に何かが見えたらしい。

有美子は不思議に思って靴の裏を見てみる。

そして、見つけた。

「しまっ――ッッ！！！」

発信機、それを理解した瞬間走る衝撃。

大きくゆれる研究所！

「攻撃されてる！！」

「つまり…泳がされたって事かよッ！？」

一同はそれぞれベルトを構えて地上へと向かう。

恐らく、というか確実にブレインの連中だろう、
発信機にはご丁寧に盗聴機までついているようだ。

と言う事はリコンファームの情報も漏れてしまったと言う事になる。

「やられたっ…！
ごめんなさい！　ずっと気づかなかった」

「いえ…いいんです。
それよりカブトゼクターの入手方法を知っていますか？」

「え？」

あくまでも冷静に双護は問う。
すこし不気味に感じたが、有美子は答えた

「カブトゼクター？　ああ、アレね、あれは確か…
まだ誰も契約していないわ。カブトゼクターは特殊だから…」

「特殊？」

「ええ、インセクトの中でも異質なの。
唯一創英に協力しなかったゼクター、創英も悔しがっていたわ…」

ご丁寧に一番難しいと言う事か、双護は呆れた様に笑う。
この世界では今、大変な事が起こっているようだが自分も変身しないといけない課題がある。

「どうすればソイツと契約できる？　教えてくれませんか」

「愛とか恨みとかどんな感情でもいいから
それを強く念じてカブトゼクターを呼ぶのよ。

それで気に入られれば、おしまい」

「……分かりました。どうも」

そう言って双護はもう何も聞かなかった。
まだ何かを考えているかの様な彼だったが、襲撃の事で誰も気にはとめなかった。

「全軍、包囲」

右目に眼帯をし黒いスーツに身を包むその男、峰岸創英とマインドコントロールされた数人の契約者（インセクト）。

そして、科学が生んだ無数のサイボーグ兵士。

通称ゼクトルーパーは武器を構えビルを取り囲んでいた。

ビルの周りは他の建物もなく、おかげでこれと言った逃げ場もない。
数が多いという事はそれだけで大きな戦力差につながる。

「まさか、そんな機械を作っていたとはな…
さすがは天才科学者といったところか」

もっとも、天才が多すぎたせいでこの街は腐ったのだが…
創英は歯軋りをしてビルを睨みつける

「総員、突撃用意。中にいる真由と言う少女は生け捕りにせよ、
抵抗が激しいならば殺しても構わん」

感情なき兵士達はそれに答えると突撃の用意をはじめる。

「あがらうとは愚かだな。科学者よ、貴様らの罪は清算できるモノではない」

突撃の合図を出すために創英は手を上げる。
走り出すゼクトルーパー達、入り口に向かって一斉に駆けていく

……が

『ファイナルアタックライド』『ファファファファイズ！』

「っ！何だ？」

入り口から赤い光が見えたかと思うと巨大なレーザーが発射され、入り口に向かっていたゼクトルーパー達を一掃した。

驚く創英、あんな兵器を開発していたのか！？

もし自分が少し高いところにいなければ…

「悪いな、速攻でゲームオーバーだ」

「何っ？」

創英が後ろを振り向くと、ファイズアクセルとなったディケイドが手を振り上げているのが見えた。

一撃で気絶させる！

ディケイドはその拳を振り下ろ――

「！！」

しかしその拳は創英には届かない。受け止められたのだ！

『Ｃｈａｎｇｅ　Ｐｕｎｃｈ　Ｈｏｐｐｅｒ』

茶色の体に白い目。
インセクト、パンチホッパーはディケイドの拳を受け止め、弾く。
さらに自らのクロックアップを発動し、同速のフィールドへと立った。

「クッ！」

マズイな、既にコッチは発動してから時間が経っている。
しかし向こうは今クロックアップを発動したのだ。

激しい拳の連撃がディケイドに襲い掛かる。
何とか受け流すがすぐにその違和感に気づいた。

そう、彼らはマインドコントロールによって操られた人形なのだ。
戦いに対する恐怖や、感情が全く感じられない。

「クソッ！」

ふざけやがって！　人間を何だと思ってるんだ！

ディケイドはパンチホッパーの活動を止めるため気絶させることにする。

そしてそれを実行する為上段蹴りを決め、素早くカードを発動させた

『Ｔｉｍｅ　Ｏｕｔ』
『ファイナルアタックライド』『ファファファファイズ！』

アクセルが解除されると同時に足からポインターが発射され、パンチホッパーの動きを止める。

ディケイドはそれに飛び蹴りを決めるために飛び上がった。

「ぐッ！！」

だが、衝撃と火花が走りディケイドは地面に落下する。
何が起こったのか？　あたりを見回すと、ドレイクがコチラに銃を向けているのが見えた。

「ホントに厄介だよ…クロックアップは！」

『カメンライド』『ブレイド』

さらに背中、腹部、胸部と激しい痛みが走る。
パンチホッパーの連撃は止まることを知らない。
ディケイドはブレイドに変わるとカードを発動させる

『アタックライド』『マッハ！』

気づいたことがある。
真志はアクセルベントを使えるが、カメンライドで変身した自分はアクセルベントを使うことができなかった。それだけじゃなくアギトのトワイライトにもなれなかったのだ。

つまり、今ディケイドはマッハとアクセルしかクロックアップに対処する事ができない。
長期戦や乱戦は圧倒的に不利なのだ。

「おらっ！」

「・・・・」

カウンターを決めるがパンチホッパーは何のリアクションも示さない。
それどころか尚も攻撃を仕掛けてくる。
ドレイクの銃撃もかなり厄介だ

「マズイな…」

マッハの時間もいずれは切れる。その前に決着をつけ――

「いッッ！！」

殴られた…本当にこいつ等早すぎなんだよ！

「司！アイツは任せろ！」

そう言って龍騎が走っていく。
アクセルベントを発動させた龍騎はドレイクと対峙し戦いを挑む。

「すまん！真志！」

「司君！」

さらに突風が巻き起こりディケイドに追い風を与える。

対照的にパンチホッパーには向かい風となり動きを鈍らせた！
それこそ本当にわずかなものだが、速度の変化は戦いに大きな変化を与える！
ディケイドの剣が始めてまともにヒットする！

「先生！　ありがとう！」

『アタックライド』『タックル』

マッハの効果が切れると同時にディケイドはパンチホッパーにタックルを仕掛ける。
襲い掛かるゼクトルーパー達を弾き飛ばしながら突進するディケイド。

しかしマッハが切れた今、所詮それは通常より少し速い速度のものでしかない。
パンチホッパーはいとも簡単にタックルをかわすと
ディケイドに止めを刺すため、上空高くへと飛翔する！

『Ｒｉｄｅｒ　Ｊｕｍｐ』

「ウオォォオオオッッ！」

後方で電子音が聞えたにも関わらずディケイドはタックルを止めない！

それと同時各地で爆発が巻き起こる。

デルタがゼクトルーパーを殲滅するために放ったミサイルが原因だった。

爆煙がディケイドを隠し、パンチホッパーの狙いを錯乱させる。

「うらぁぁあぁあああああああああああああああッッ！！」

そんな中、爆煙から一人のライダーが現れる！

猛スピードでパンチホッパーに向かうのはディケイドではなくブレイドジャックフォームだ！

マッハのカードをライズしたおかげでパンチホッパーとほぼ同速になっている！

『Ｃｌｏｃｋ　Ｏｖｅｒ』

「ライダー…パンチ」『Ｒｉｄｅｒ　Ｐｕｎｃｈ』

「チッ！」

『ビート』『メタル』『サンダー』

【ライトニング・スタンビート】

それぞれの高速移動は解除され、同時に強化された拳がぶつかり合った！

第１１４話　ＷＡＲ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（後書き）

はい、まあ前も書いたんですけどクロックアップはディケイド基準で高速移動になってます
まあディケイド基準と言えるのかはちょっと怪しいんですけどね

あとブレイドのオリ技は、メタルで強化した雷パンチですｗ

では次もよろしく！

第１１５話　ＬＩＮＫ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（前書き）

はい、更新ですね

次は土曜…か、日曜ですねぇ

ではどうぞ！

第115話　LINK　SPEED　LOVE

『Ｃｌｏｃｋ　Ｏｖｅｒ』

「！」

一方ドレイクと龍騎もまた互いの高速移動が解除されたところだった。
銃で牽制を始めるドレイク、的確な射撃で龍騎を近づけさせようとしない

『バイオ』

「！」

しかし、そんなドレイクの手にバラの蔓が巻きつき、動きを封じる！

「悪いな、ワタシ達は一人で戦ってるんじゃないんだよ」

カリスはドレイクを引き寄せると思い切り蹴り飛ばす！

機械的な戦士に勝つためには感情から生まれるもの、つまりコンビネーションを最大限生かすのだ！

「トンボってのは…ドラゴンフライとか言うんだろ？」

よろけるドレイクに見せつける様にして、龍騎は一枚のカードを発動させた。

バイザーの瞳が輝き、認識音声が鳴り響く！

「いい機会だ。本物の龍を教えてやるよ」『ファイナルベント』

咆哮と共にドラグレッダーが出現し、龍騎の周りを激しく旋廻する。
龍騎は構えをとると、ドラグレッダーと共に上空へ飛翔した！

「ッ！」

「むッ！」

カリスの手に衝撃が走り、蔓の力が弱まる。
その隙にドレイクは素早くカリスと距離を取ると、龍騎に狙いを定める！

「ライダーシューティング」『Ｒｉｄｅｒ　Ｓｈｏｏｔｉｎｇ』

「ウオォォオオオオッッ！！」

『ファイナルフォームライド』『アアアアギト！』

しかし、龍騎の下からコチラに向かってくるのはディケイドとアギトトルネイダー！

アギトトルネイダーは素早くディケイドの前にやってくると、ディケイドを上空へと跳ね上げる！

タックルを発動したままのディケイドはそのまま龍騎と重なり合った！
感情のないドレイクは特になんの疑問も抱かず、機械的に引き金を引く

「ヤァアアアアアアアア！！！」

ドラグレッダーは通常ならば龍騎の後方で火炎を発射し炎の力を与えるが、
今回は前方で火炎を発射した。

すると、火炎はディケイドに付与され、炎を纏ったタックル。
いや軽い流星のように変わる。

そのままドレイクの必殺技とディケイドはぶつかり合い互いを相殺し合った。

「ダァアアアアアアッッ！！」

「！」

だが、まだ龍騎本人のとび蹴りは終わっていない。
炎を纏ってはいないものの、ドレイクを吹き飛ばすだけの威力はあった。

回転しながらドレイクは何度も地面に叩きつけられる。
流石にコレにはまいったのか、ドレイクはそのまま活動を停止する

「まだだ！　咲夜！」『ストライクベント』

「ああ！分かっている」『チョップ』

龍騎はさらにドラグクローを装着しカリスのところへと走っていく。
二人は頷き合うと、それぞれの構えをとった。

「行って…こいッ！」

カリスはバレーの様に、チョップで龍騎を打ち上げるのだった。

「ウォオオオッ！！？」

「ッ…！」

上空ではパンチホッパーとブレイドの拳がぶつかり合い、互いに弾かれたところだ。
二人はバランスを失い落下していく、そこへカリスに飛ばされた龍騎がやって来た！

『ファイナルフォームライド』『ブブブブレイド！』

それを確認すると、ディケイドはフォームライドでブレイドをブレイドブレードへと変形させる。

そして、龍騎は両足でブレイドブレードを挟むと、そのまま手を反対に突き出してドラグクローから炎を発射する！

「『いっけぇぇえええええッッッ！！』」

炎がジェットの役割を果たし、まるでミサイルの様に飛んでいくブレイドブレード！
そしてそのままバランスを失い落下していたパンチホッパーに突撃する！

弾き飛ばされるパンチホッパーと華麗に着地するブレイド、龍騎。

「フッ！」

「・・・」

一方、少し離れた所ではキバとキックホッパーが戦いを繰り広げていた。
未だにクロックアップを発動しないキックホッパーに恐怖を感じつつも、双方激しい蹴りで戦っている。

しかしゼクトルーパーの銃弾をかわしながらの為、
キバは上手く立ち回る事ができない。

少し早急かとは思ったが、ウェイクアップを発動させる事にする

『ウェイクアァァァプッ！』

「……」

巨大な月が現れ、辺りを夜へと変化させる。

同時にキックホッパーはクロックアップを発動させた。
瞬間消えるキックホッパー、そして体に走る衝撃の雨。
キバの平衡感覚が失われていく。

「グッ！　ガァァア！　キッ……バット！！」

『は、はい！　バッシャーマグナム！！』

激しい蹴りの猛連打でキバットは空中に打ち上げられていく。

「グッゥゥウウ！！」

水流弾がキックホッパーを追尾し着弾するが、確実に防御され大きなダメージにはならない。

「超変身！」

そこにドラゴンフォームに変わったクウガが飛び込んでくる。
もちろんドラゴンが素早さに特化してるとはいえ、クロックアップの前では無力といってもいいだろう。

「わわっ！」

クウガの背後には無数のゼクトルーパーが迫っており、容赦なく銃弾を発射する。
しかしその銃弾がキックホッパーの動きを封じる壁となってくれた。
銃弾をかわすように移動してくるため軌道がつかめる。

クウガはペガサスフォームに変わると、神経を集中させる！

「ハァァアアッ！！」

その隙に攻撃から開放されたキバは、水流弾でゼクトルーパーを打ち抜いていく！
それほどゼクトルーパーに防御力はないようで、一発で動きを封じられる。

「・・・」

そしてクウガは、軌道を予想してペガサスボウガンを振り絞り…

放つッ！

「！」

しかしそれはキックホッパーには当たらなかった。
高速で移動する2つの影がそれを弾いてしまう。

一瞬で分からなかったが、ファイズアクセルとサソードだろう。
二人の戦いが弓矢を消してしまったのだ。

「うわっ！」

危険を感じて、素早くドラゴンフォームに変わると後ろへと跳ぶ。
自分がいた場所にはもう既に大きな衝撃からくる砂煙が巻き起こっていた。

もしあのままあそこに立っていたなら……想像するだけで恐ろしい話だ。

『Ｒｉｄｅｒ　Ｊｕｍｐ』

『バッシャーバイトォォ！』

巨大な水流弾がキックホッパー目掛けて発射される。
そのスピードは異常なまでに速く、クロックアップを発動しているキックホッパーに追いつくほどだ。

「・・・」『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』

水流弾とエネルギーを纏ったとび蹴りが直撃する！
勢いを失ったキックホッパーは大きくよろけバランスを失った。

そこに大きな隙ができる！

「！」

迫るファイズアクセル！

ファイズはサソードと交戦しながらもコチラの様子を見ていた。
そして止めをさせるコチラに狙いを変えたのだ。
ファイズショットにメモリを装填してエンターのボタンを押す！

「ハァアアアッッ！！」

「ッッ！」

アクセルグランインパクトがキックホッパーを弾き飛ばした！
Φのマークと共に砂煙をあげてキックホッパーは活動を停止する。

『Ｒｉｄｅｒ　Ｓｌａｓｈ』

「うっ！」

しかし後ろからサソードの一撃をまともに受けてしまい、ファイズもまた地面に叩きつけられる。

「グッ…」『Ｒｅｆｏｒｍａｔｉｏｎ』

『Ｃｌｏｃｋ　Ｏｖｅｒ』

さらにサソードは倒れるファイズに連撃を浴びせていく。
キバ達が助けに入るがダメージが大きすぎて、ファイズの変身は解除されてしまった。

「拓真！」

止めを刺そうとするサソードにデルタは銃弾を浴びせる。
その隙に拓真はファイズギアを抱えて転がり、デルタの後ろへと回避した。

「ありがとう友里ちゃん！」

「惚れ直してくれていいよ！　さあ、早く変身して！」

デルタは振り下ろされた剣を、左手を盾にして防ぐ。
一瞬がら空きになったサソードの腹部に銃を突きつけると、声を上げた

「チェック！」『Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ』

「！！！」

ゼロ距離からの射撃。
青白いポインターがサソードにセットされ、デルタはそれに飛び込んだ！

ルシファーズハンマーがサソードに命中する！

「！！！」

Δの紋章が浮かび上がると、サソードの変身は解除されその場に倒れ込んだ。
だが勝利の余韻にはひたれない！

「やばっ…」

拓真は焦りながらベルトをセットする。
ゼクトルーパはそんな事をお構いなしに銃を乱射しているのだ
サソードの変身者はもちろん、自分も防御力が上がっていようが生身でアレを受けるのは危険すぎる。

「拓真ッ！」

タイタンフォームになったクウガが拓真を庇い銃撃を浴びる。
激しい銃弾の雨も、タイタンの前ではシャワーにすらならないだろう

「ありがとうユウスケ君！」『５』『５』『５』『Ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ』

拓真は再び変身する為コードを入力する。

しかし…

「ッッ？　拓真？」

クウガは後ろで変身音がしない事を不思議に思う。
そして振り向いたとき、拓真は気絶しているではないか！

「なんでっ！？」

『ちょ！　ユウスケ！！』

「え？」

ふと、気がつけばデルタも倒れている。
何が起こったんだ？　混乱するクウガ、そこに迫る光

『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』

「ッ！」

だがその答えはすぐに明らかになる。
と、言ってもクウガがそれに気づいたときは自らも宙に舞っている時だった。

激しい衝撃と飛びそうになる意識、タイタンフォームでなければ確実に気絶していただろう。

だが、それもつかの間。
さらに何度も激しい衝撃が襲ってくる。

ついにクウガの意識も――

第１１５話　ＬＩＮＫ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ　（後書き）

んー、次でバトル編は終わるかな

後、龍騎のファイナルベントについてですが
炎の力を味方に与えると言う選択肢がとれる……って事ですね

敵にはダメージになり、味方には攻撃力を上げる力になる
なんともゲームちっくですがｗ

では次もよろしく！

第116話　REUNION　SPEED　LOVE（前書き）

はい、更新ですね

まあ…どうだろう、連休は更新できそうかなぁw？

ではどうぞ！

第116話　REUNION　SPEED　LOVE

「!?」

突如気絶していく仲間達。
キバは目の前で起こった事を理解しようと冷静に考える。
恐らくはまだインセクトがいるのだろう。クロックアップによって不意打ちを食らった訳か…

キバは高速で動き回るインセクトに対抗するべく水流弾を発射する。
通常弾のスピードなど子供だましの様なものでしかないが、それでもクロックアップに対処できるのはこの技だけだ。数があればそれだけ動きも鈍る、その隙になんとかしてチャンスを……

『Ｐｕｔ　Ｏｎ』

「え?」

電子音と共に、キャストオフによって吹き飛んだ鎧の破片が辺りから無数に飛んでくる。
破片は水流弾を打ち消しながら確実にコチラに向かって飛んでくるではないか！
キバは向かってくる破片を何とかかわし体勢を整える。

「ぐわぁあああああああッッ！！」

だが背中に物凄い衝撃が走りキバの体は空中に吹き飛ばされる。
さらに、もう一回と衝撃が走り、体はきりもみ状に回転する。

そして見た、肩にバルカンを装備したインセクトがいる事を！

「クッ…」

ドッガのホイッスルを手にしようとするが…

『Ｃａｓｔ　Ｏｆｆ』

「ッ！！　アアアアア！！」

再び電子音が聞こえたかと思うと、装甲が吹き飛び自分にぶつかってくる。
成る程、目の前が真っ白になる。もう数発もらえば自分も……

『旦さん！　任せてくださいっす！』

キバットがベルトから離れドッガのホイッスルをくわえる！
ドッガの装甲なら攻撃にも耐えられるし、トゥルーアイで動きもとらえられるかもしれない

『ギャっ！』

しかしその前にクロックアップを発動した、もう一体のインセクトに弾き飛ばされてしまった。

『きゅう……』

気絶するキバット、それが原因でキバの変身がとかれてしまう。
しまった、と亘は思うだろう。

だがそれを考える前に彼の意識は失われる。
倒れる亘を青い影はジッと見ていた、いや…彼にとってジッとと言う時間は一瞬程度なのだが。

青い影は頷くと、両肩に供えられている『武器』を構え……投げた！

「何だ!?何が起こって――」

ディケイド達もゼクトルーパーの攻撃をかわしながら
クロックアップに対抗しようとするが…もうカードがない。

「ぐあぁあああッッ！！」

「クッ！！」

高速で移動する影と交戦する中、急に青いカッターのような物が飛んできて
ディケイド、カリスの体に命中する。
大きく仰け反る二人…そして気づいた

「峰岸がいないっ！　アイツ…っ！！」

「あいつもそう言えばインセク――グァアアアアアアッ！」

次は龍騎の体が宙に舞っていく。
カードを使おうとしたブレイドもまた激しい攻撃によって妨害されてしまう！

助けようとディケイドは、ゼクトルーパーを振り払いカードを発動する
追尾弾なら…わずかな期待を込めて引き金を引く！

『アタックライド』『ブラスト！』

『Ｐｕｔ　Ｏｎ』

だが、バッシャーの時と同じだ。
装甲がそれを防ぎ、ディケイドに攻撃を加えながら一点に集まっていく。

「なかなか足掻くな、お前達も…」

「っ…」

峰岸もまたインセクトへと姿を変えていた。
手を見れば蜂の様なものが見える、いや姿がどう見ても蜂そのものだ

「ザビーか…ッ」

「っじゃあ、もう一体は…」

会話さえ許されないのだろう。
爆発、吹き飛ぶブレイドと龍騎。
カリスとディケイドが後ろを振り向くと、バルカンを装備したインセクトが見えた。

「やはり…ガタックか！」

「くっ！　司！」

「ああ！」

二人は一瞬、アイコンタクトを取ると、左右それぞれに跳んだ。

それを見てガタックはカリス、ザビーはディケイドのほうへと向かう。

「くくっ、いいのか？　ゼクトルーパー達は下のお仲間の方へと向かっているぞ？」

「ッッ…！」

確かにそうだ。早く、こいつらを何とかしなければ…ッ！

「！」

遠くでアギトの悲鳴が聞える。

見てみれば、サソード、

ドレイク、

パンチホッパー、

キックホッパーがクロックアップで同時攻撃を仕掛けていた。

四人は必殺技でアギトを吹き飛ばす！

防御するものの、絶大なダメージでアギトの変身は解除され

翼は気絶してしまった

「なっ！？」

ドレイク達は気絶していたはずなのに……！？

「ふん、マインドコントロールとは便利なモノだな。
無理やりでも脳をたたき起こす事ができる」

そう言って笑うザビー。もはや他のインセクトの事を人間としては見ていない様だ、彼にとっては兵器と同等なものなのだろう。それがディケイドにとっては不快だった。

「お前っ！　どうしてこんな事をッ！？」

「……貴様が何者かは知らんが、見たのではないか？
この街の人間…いや、豚共を」

「ッ！？」

「やつ等は過ぎた科学力によって堕落の限りを尽くす豚だ。
あの様な有害な連中がこの世界を壊す。
そう、いずれあの様な人間が世界を滅ぼすのだよ」
いらないのだ、あの様な連中。
「その為に彼らには犠牲になってもらった。理想に犠牲はつき物だ」
『Ｃａｓｔ　Ｏｆｆ』
「しまっ――！」

『Ｃｌｏｃｋ　Ｕｐ』

ザビーの姿が消える。
ディケイドは素早くカードに手を伸ばすが…

「残念だったな、お前は…」『Ｒｉｄｅｒ　Ｓｔｉｎｇ』

「！！」

「遅すぎる」

渾身の一突きがディケイドに命中する。
絶大な衝撃が襲ってくる前にさらに数発の攻撃。
それはカリスの方も同じなようだ、ガタックのクロックアップに対抗できず必殺技をモロにくらってしまった。

「がはぁぁあああッッ」

「ぐぅううッッ…」

二人の変身は解除され、地面へとたたきつけられる。

「ククククッ…アチラの方も決着がついたようだな」

「何…ッ？」

ザビーが指差すのはビル。

「まさか…ッ」

「真由ッッ！！」

「お兄…ちゃん！！」

六人のゼクトルーパーはそれぞれ銃を構えて有美子達を包囲していた。
抵抗すればゼクトルーパー達は迷わず有美子達を射殺するだろう。
彼らは機械、心など無いのだから

「くっ…」

それだけではない。有美子の後ろにあるリコンファームを壊されたら終わりだ。
創英の計画は完全なモノへと変わってしまう。
それだけは避けなければ…

『Ｃｌｏｃｋ　Ｏｖｅｒ』

「！？」

有美子の目の前にインセクト、ガタックが現れた。
目的を実行する為に、ガタックはダブルカリバーを構えて有美子達に歩み寄る。

緊張感が漂う中、有美子は声を突如荒げた。

「鏡冶ぃッ！！」

「っ！」

有美子は我を忘れたかの様にガタックへと詰め寄る。
しかしガタックはあくまでも機械的にカリバーを有美子に向けて、
これ以上の接近を拒んだ。

そう、彼こそが有美子の甥。新意鏡冶（あらいきょうじ）

第116話　REUNION　SPEED　LOVE（後書き）

はい、プットオンは純粋にキャストオフの逆バージョンだと考えてください

では次もよろしく！

第１１７話　ＢＬＵＦＦ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（前書き）

昨日始めてＰ４を見ました
いいっすねああ言うのｗ
好きですよ

ではどうぞ！

第117話　BLUFF　SPEED　LOVE

「俺に…近づくな」

「鏡冶…」

「・・・」

ガタックは有美子を一瞥すると、他のメンバーに視線を移していく。
そして、一人の少女ところで視線を止めた。
怯えるその人物を気にする事なくガタックは言いはなつ。

「お前が…真由か。命によりお前を拘束する」

「え…」

「！！」

ガタックはカリバーをしまうと真由に近づいていく。
真由は震えながら一歩後ろに下がる、そして無意識に双護に助けを求めた
目が語る、助けて…怖いと

「オイッ！　真由に近づくなッ！！」

双護は真由をかばう様に立つが、
ガタックは淡々とした様子で双護の首を締め上げると、何のためらいも無く投げ飛ばした。

吹き飛ばされる双護、そのすきにゼクトルーパーは双護を囲む様に立つと一斉に銃を向ける！

「グゥっ…！」

「お兄ちゃん！」

真由は自分にも銃が向けられていると言うのにも関わらず双護のところへ向かう。
先ほどの恐怖は心配へと変わっていた

「・・・」

「真由ッッ！　来るなァァ！」

「！！」

真由は涙を浮かべてオロオロと動き回る。
自分がどうすればいいのか分からない、いつも助けてくれる兄が危ない。
だったら助けにいくのが普通じゃないのか？
でもその兄は来るなと大声を上げる。

「ううぅうぅ！」

ついに耐え切れず、真由はポロポロと涙をこぼしてしまった。
だがガタックは何のリアクションも示さない。

マインドコントロールで彼の感情は氷の様に冷たくなっていたのだ。
むしろ、邪魔だと言わんばかりに手を振り上げた。
間違いない、ガタックは真由を殴るつもりなのだろう――！

「鏡治ィィイイイイイッッ！！」

「・・・」

それが原因なのか、ついに有美子が…キレた

知的な彼女からは想像できないほどの怒声に真由も思わず震え上がる

「こんのッッ！！　馬鹿野郎がァアアアッッッ！！」

「……」

「アンタ今自分が何してるか分かってんの！？
何もしてない人投げ飛ばして、女の子泣かせてッ！！
自分が一番嫌ってた事、自分がやってんじゃねーよッッ！」

しかし、ガタックは何も言わずに真由の手を掴む。

「オイッ！　真由を放せ！！
　ぶっ殺すぞッッ！！」

感情を爆発させながら双護は立ち上がる。
ゼクトルーパーを突き飛ばしながら真由を助けようと走るが、
当然双護を撃ち殺そうとゼクトルーパー達は銃を構える。

いくら防御力が上がっていようとも、連射を食らえば命は無いだろう

しかしその時、以外にもゼクトルーパー達をガタックが静止させた。

「止めろ、俺達は人を殺しにきたのではない…
この少女の拘束、そして機械の破壊だ。

ゼクトルーパーよ、俺の叔母の後ろにある機械を破壊しろ」

「クッ！！」

やはり…そうなるのか！　有美子達は覚悟を決める。

「――――い」

「っ？」

「来いッ！　カブトゼクター！」

双護は手を掲げてカブトゼクターを呼ぶ、
強い思いに反応すると言われるカブトゼクター。

ならば今このタイミングならッッ！！

「・・・ッ！」

だが、何も起こらない。
カブトゼクターが双護の手に収まることも、姿を現す事もない。

「クッ…！」

ゼクトルーパーはそんな双護を気にする事もなくリコンファームへ銃を向けた！

「んま、させねーけどね」『アドベント』

「！！」

しかし、突如誰もいないところから声がしたかと思うと、
地面から白鳥が現れゼクトルーパー達を吹き飛ばしていく。

「まゆちんは渡さねーっての！」

誰もいないと思っていた所からファムが現れる。
クリアーベント、姿を透明にするその力でファムは創英達から逃げてきたのだ。

ガタックは舌打ちをするとカリバーを一つファムに向けて投げた！
ファムはマントでソレを受け止めると、そのままマントを翻す。

すると、ファムの姿が消える！

「・・・」

次にガタックは上へとカリバーを投げる。
瞬間、それを受け止める音が響いた！

ファムはマントの影から上へと跳んでいたのだ。
バイザーでカリバーを弾くが、ガタックはそのまま弾かれたカリバーのところまでクロックアップで移動すると、カリバーを再び蹴り飛ばし、ファムへぶつける。

「クッ…！」

ファムもまた負けじとバイザーを投げ、ガタックへと命中させた。
仰け反る両者、だがファムはバイザーにカードを装填していた。
それが今、発動される！

『アクセルベント』

「ウラァッ！」

加速からのドロップキック。
ガタックはそれを受け止めようと構えるが…

「きゃァッ！！」

そのキックがガタックに届く事は無かった。

「いっ！？」

ファムは撃ち落とされたのだ。

起き上がるファムに突きつけられる銃、

ドレイクだった。

「なっ…くそっ！」

銃を振り切ろうとするが、ファムはそれを諦めた。
横にはサソードが剣をファムに向けていたからだ。

さらにパンチホッパー、キックホッパーが集合しファムは完全に包囲される。
既にクロックアップの限界を超えているが、マインドコントロールが彼らの限界を無理やり突破させる。

一瞬で逆転する立場、詰めが甘かった……

「――はい。分かりました…」

ガタックは通信で誰かと連絡をとると、真由を抱き抱える。
双護が鬼の様な形相でガタックに向かって走り出すが、パンチホッパーによって気絶させられてしまった。

「命令があった。全員今すぐ撤退だ」

『Ｃｌｏｃｋ　Ｕｐ』

一瞬、アレだけいたインセクト達は皆、研究所から姿を消す。
真由は…連れ去られてしまった。
空しい沈黙だけが、研究所を包んでいる。ファムは悔しそうにバイザーを床へ叩きつけると先ほどまで真由が座っていた場所にへたり込んだのだった。

「クッ、化け物が…ッ！　今は一旦引いてやる。
しかし、次は必ず…」

そう言ってザビーはクロックアップを発動して姿を消した。

「うぅ…ッッ」

変身を解除したのは良太郎、電王だ。
ザビーは電王の圧倒的な力を見て、全滅すらありえると判断した。
マインドコントロールをされたインセクト達は撤退命令を出せばそれに忠実に従い、機械を壊してから撤退すると言う機転を利かせる事はないだろう。

それは惜しい事ではあったが、このままでは大切な兵を全て失いかねない。
何より、自身の敗北すらありえる。
大勢の兵がいたとして、ほぼ全てが操作している『兵器』である以上、自分が負ければその時点でゲームオーバーだ。意外だった、まさかこんな化け物が潜んでいたとは……

このまま戦えば負ける。ザビーは苦肉の策として、
最初の命令である真由をさらう事でリコンファームの発動を阻止するだけに止めておいた。

「皆…ッ」

良太郎は辺りを見回す。
気絶している司達、全滅と言ってもいいだろう。

「危なかったわね、貴方が居なければ皆死んでたわ！
クスクス！」

「ッ…」

膝をつく良太郎の前にゼノンとフルーラが現れる。
同時に、それが何を意味するのか、良太郎は悟る。

「もう、危ないのかな…？」

「フッ、分かっているようだね。」

ゼノンが何を言いたいのか、良太郎は分かっていた。
それがどういう事なのか、理解もしている。

しかし、良太郎はその事から目を背けていたのかもしれない

「しかし、考えたね。成る程、確かにザビーが全滅を危機するのも無理はない。

絶大な力をちらつかせればそれは抑止力と言う武器になる。
結果としてザビーは恐れをなして逃げた…という訳かい」

「ハッタリは成功したのかしら。
まあ普通に戦っても貴方が勝っていたでしょうけど」

ゼノンとフルーラは賞賛の拍手を良太郎に浴びせる。
そして、同時に砂のオーロラを発動させた。

彼らが移動する為のものではない、このオーロラは…良太郎に用意されたモノなのだ

「さあ、残る試練はコレを含めてあと2つ。
分かるかい？　コレが最後のチャンスだ、野上良太郎。

次の試練で君が変身すれば…世界は君を『――』の登場人物として記すことになる。

そうなれば……分かるかい？　君もまだお姉さんや、
電車の中のお仲間さんに君の世界の『野上良太郎』として会いたいんじゃないかな？」

「今なら貴方とハナを元の世界に帰してあげられるわ。
でも、次の試練が始まればそれはとても難しい。
どうするの？」

「・・・」

良太郎はうつむくだけで何も答えなかった。
それは迷い、彼の心の中で揺れる葛藤、天秤に掛けられたのは絆と絆。
それは良太郎の心を蝕む毒の様に彼を苦しめる

「…ぼくは、皆と友達になれて…本当に嬉しかった」

「・・・」

「お姉ちゃん…も、言ってたよ。友達は大切にしなさいって」

「つまり…君は、このままディケイド達につくと？」

ゼノンは何故か嬉しそうに笑う。
だが、すぐに真面目な表情へと戻る

「本当の事を言うと、まだちょっと迷っちゃってる。
だけど、ぼくは皆の為に戦う。それは揺るがない」

ゼノンとフルーラは珍しく、本当に真面目な顔に変わっていた。
常に人を小ばかにした様にヘラヘラと笑っていた二人。

その二人でさえ良太郎の判断が正しいのか、間違っているのか分からない。
そのジレンマのようなモノに囚われていた。

「君はその選択からは逃げられない、君は様々な世界で観測された有名人だ。
君の世界は君なしでは成り立たない。

主役の存在する舞台なのに主役が存在しないなど矛盾しているからね」

それがどう言う意味なのか、良太郎もまだ明確には分からない。
しかし、今ココで司達から離れ自分の世界に帰らなければ自分達に

とって大変な事になる。
そう言う事なのだろう。

「もう一度、ハナと話し合って決めればいい。
最初の世界で君に渡した鍵さえあれば、いつでも君たちは自分達の世界へ帰れる」

良太郎はポケットから小さいビー玉のようなモノを取り出す。
それは、一番最初の世界で司達に会う前に彼らに貰った物だった。

それを使えば自分達は帰られるらしい、しかし一度それを使えばもう戻ってくることはできない。

「いずれにせよ、さようなら。『仮面ライダー電王の主人公』　野上良太郎」

「そして、ここには居ない事を残念に思うわ。ヒロイン、ハナ」

ゼノン達は自分達のオーロラを出現させて消えていく。

「・・・」

良太郎は、暫くそのままうつむいたままだった。
だが、しばらくして頷くと、キンタロスを憑依させて司達を抱えるのだった。

第１１７話　ＢＬＵＦＦ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（後書き）

ここで細かな説明を一つ

単に高速移動と言っても
はやり時間操作してなので、つかまれた人間が空気摩擦で燃えることは無いです

では次もよろしく！

第118話　INCREDIBLE　SPEED　LOVE（前書き）

今週は、そうですね…

まあ火に一回更新して

次、金か…土、いけたら日かな？

ではどうぞ！

第118話　INCREDIBLE　SPEED　LOVE

目を、開けた。

見えたのは天井、よく知っている。

学校だ、そう。

学校……

「・・・ッ」

双護はゆっくりと目を開ける。

意識と景色が鮮明になり、彼は今までの事を考える。

死んではいない、つまり誰かが助けてくれたと言う事か。

双護は体を起こし教室へと向かう。

真由は…おそらく

「ごめんッ！　アタシがもっとしっかりしてれば…」

教室に皆が集まり、これからどうするかを決める事になった。
美歩は自分のせいで真由がさらわれたと後悔している様だったが、
別に誰も咎める事はない。

あの状況では仕方ないと、それは双護も同じだった。

別に美歩に対して恨みの感情など欠片もない。

いや、少し違う。双護の心は今、無に近い状態だった。
愛する妹を連れて行かれた事…からだろうか？

それとも――

「取り合えず、真由を助けよう。まずはそれからだ！」

「そうね、おそらく創英は殺す事はしない。
創英はこの街の中心にあるブレインタワーにいるわ。
そこに乗り込めたら…」

皆必死に真由を助けるための作戦をたてている。
しかし、双護は全く別のことを考えていた。

それは、真由が助かった後の事である。

創英がマインドコントロールを行うのは十日後らしい、
問題はそれを行われたら、真由を起動スイッチにしてリコンファームを発動しなければならないと言う事だった。

真由が……生まれてから今日までの事、全てを思い出す。

『全て』だ。

「双護！」

「！」

ふと、気がつけば皆が自分を見ていた。
どうやら話しかけられていたようだ。

「あぁ…すまん、少し考え事をしていた。何だ？」

「ああ、カブトゼクターは呼べないのか？」

「・・・」

喜び、悲しみ、怒り、愛。

なんでもいいから何かを強く想うとソレに応じてやってくると言われているカブトゼクター。

あの創英ですら手に入れることができなかったモノか…

創英は……何を願ったのか

「真由ちゃんへの想いとかは？」

「……実は、もう」

「え…？」

双護は申し訳なさそうに口を開く。
あの時、真由がガタックに捕まったときに双護は真由への思いを胸にカブトゼクターを呼んでいた。

しかし…結果はこうだ。
カブトゼクターは双護の呼びかけには答えず、結果真由を…

「大丈夫だよ、きっと双護君はカブトゼクターに選ばれるから」

「そうね、その時は多分カブトゼクターは寝てたのよ」

翼と葵は双護を気遣って声をかけてくれるが、双護の耳にはあまり届かなかった。
それよりも、自分の心の中である事を確かめたいという思いが膨れ

てきていた。

カブトゼクターは『どんな』思いにも呼応するらしいな。

強い想い、つまりそれは『一番強い感情』と言う事だろう。
人は無意識のうちに感情の優劣をつけている物だ。
自分の中で、今最も強く願っているのが……真由を守りたいと言う事でなかったとしたら？

「先生、皆。今なら呼べる気がする。少し外に出てきていいかな？」

「え？　あぁ、うん分かったよ。誰かについて――」

「いや、いいんです。すぐ戻りますから…」

双護は軽く笑みを浮かべて皆の前から消える。

「・・・」

咲夜はその姿をじっと見ていた。

何か、異質なモノを感じる。

「おう咲夜さん、お前も気づいたのか」

「ああ、何かおかしいな。双護のヤツ…」

椿と咲夜は皆に聞えないように小声でやりとりを交わす。
一番最初に違和感を感じたのはリコンファームで真由が起動スイッチになると気づいたときだった。

その時は妹が心配なだけだとスルーしたが…今回もまたその異質な雰囲気を感じる。

「どうする？　つけてみっか？」

「いや…もう見失った。今から追いかけても無駄だろう」

「最初はイケメンが放つ独特のオーラなんだろうと思ってたが…
どうにも違うみたいなんだよな」

「リコンファームと何か関係があるのか…？」

暫くは考察を続ける二人。
だが、そんなにしない内に双護が戻ってきた。
結果を聞くメンバーに双護は謝る。

そう、駄目だったのだ

「真由を守りたいという想いが…俺には足りないのか…」

そう呟く双護からは、異質なオーラを感じる事はなかった。
椿と咲夜は勘違いだったのかと考える。

それならいいのだが…

「・・・」

その翌日だった。双護が皆の前から姿を消したのは…

「駄目だッ…携帯も繋がらない」

「どこに行ったんだよ！」

「きっと真由ちゃんを助けに行ったんじゃ…」

「それにしても一人で行くってのおかしくない？」

皆いろいろと言い合いを始めるがどうしようもない。
双護は学校からいなくなり、どこに行くか、誰にも伝えていなかったのだ。

変身できない彼がこの世界を一人でうろつくなんて自殺行為だ。
仮に真由を助けに行ったとして、何ができるのだろうか？

司達は今すぐ双護を連れ戻そうと学校を飛び出していく。
そんな中、残るモノも…

「嫌な予感ほど当たるものだな…」

「くそっ、ほとほとイケメンの考える事はわからんぜ俺は」

椿と咲夜は屋上で街を見回していた。
二人はある仮説を立てる、まずそもそもの話

双護は真由を助けにいったのかと言う事だ。

「まず、そこがおかしいっすわな。
正直戦えないアイツが行っても無駄だし、正直一人で行く意味がない。
俺達に迷惑を掛けたくないってのはそれこそ馬鹿な話だろ」

「そうだな。一人で行くのは逆効果だ、それは双護も分かっているはずだろ」

「何より、リコンファームの事もありますしね」

「「！」」

屋上の入り口から我夢が現れた。
彼も双護の異様な雰囲気を感じた一人というわけだ。

そう、リコンファーム。これが何かしらの鍵を握っている事は明白なもの。
そして双護が少しおかしくなったのは真由が起動スイッチだと分かった時。

「これはあくまでも僕の意見なんですけど、
双護さんは真由さんに何かを思い出して欲しくないんじゃないでしょうか？」

「え？」

「覚えてますか？
僕らが出会ったとき、双護さんから言われたじゃないですか」

「「！」」

そう、彼らが始めて顔を合わせた日、双護は皆にある相談を持ちかけていたのだ。
皆すぐに理解して、今まで当たり前に過ごしてきたから盲点となっていた。

「成る程。これはひょっとしてひょっとするな」

「だが、それで何故双護がワタシ達の前から姿を消す？」

そう、分からない。
彼らは頭をかかえ、これからどうするのかを考える事にした

「きゃっ…！」

ガタックは乱暴に真由を地面へと降ろす。
思わず倒れる真由に目もくれずガタックは創英の元へと戻った。

「ご苦労インセクトの諸君」

創英達は一斉に変身を解く。
マインドコントロールによって苦痛等が制限されているとはいえ、長時間に亘るクロックアップの使用は彼らの肉体を確実に蝕んでいた。次々に倒れるインセクト達。

しかしただ一人、鏡冶だけは立っていた。
彼のインセクトとしてのレベルの高さが伺える。そして、同時に…

「うぅうぅっ…」

真由は立ち上がろうとするが、足がすくんで上手くいかない。
だが、ふいに体が軽くなり、すんなり立つことができた。

真由は不思議に思って目を凝らす。
すると、自分を乱暴に降ろした鏡冶本人が自分を支えてくれていたのだ。
不思議に思う真由と舌打ちを放つ創英。

やはり、おかしい。

創英と真由は同時に思う。
鏡治はマインドコントロールが働いているにも関わらず、創英の命令を無視、反発する事がよくある。

おもにそれは善意系の事でだ。
正義感が強いとは聞いていた、しかしマインドコントロールですら封じれない程とは…

さすがの創英もコレには参っていた。
マインドコントロールを強めてもそれは変わらない。
鏡治は今も真由を支えている、これは少し危険かもしれない。

「ガタック、命令だ」

「……はい」

有美子は創英と言う人物をあまり知らない。
研究所で一緒に仕事をしたくらいだ。

だから、彼女は一つ彼について計算を誤っていた。

「その女を殺せ」

創英は、もう普通ではないのだと言う事を

「・・・」

「どうした、聞えなかったか？　その女を殺せと言った」

「……何故」

「なにっ！」

今コイツは何と言った!?
創英は思わずもう一度鏡治に問いかける。
マインドコントロールをしているのだ、こいつ等は命令を忠実に実行する兵器に過ぎない。

しかし――今、鏡治は……

「何故です…」

これが既にありえない事だ。
インセクトは全て洗脳し、自分の言う事だけを聞く人形！

なのにガタック、新意鏡冶は今命令を聞こうとしない。
なんてヤツだ……創英は軽い恐怖すら感じる。

ここまで洗脳が効かない男は初めてだ。
危険な存在に変わるかもしれない、その前に忠誠を誓わせなければ…

「この女は危険だ。
それに…以前から計画していたワーム復元実験は知っているな？」

「……はい」

ワーム復元実験。それは創英が現在進行形で行っている実験だった。
ワームはもうこの世界にはいない、インセクト達が全て根絶やしにしたおかげで。

だが創英は独自の研究でワームを作り上げたのだ。
まだ試作品の為、不安定要素の塊だが時間があれば安定したワームを作り上げる事ができるだろう。

愚かな人間、自らの堕落と言う欲望が生んだワーム。
そのワームによって世界を滅茶苦茶にするのも悪くは無い

ワーム討伐インセクトとして参加していた創英、その時に受けた人間達からの心無い扱い。
それが創英の心を壊していた。

もう彼は自分の目的さえ迷走しはじめていたのだ。

「ワームには餌が必要だ。良質な餌がな…分かるか？

ガタックよ」

「いえ、申し訳ありません…」

「分からないか…その少女を餌にしろと言った」

「・・・」

鏡冶は真由を見る。
怯えている彼女、目には涙が浮かんでいる

「かわいそうです」

「！！」

創英は自分の耳を疑った。
今、コイツは何と言ったのか？

可哀想？

何が？

誰が？

「命令は…絶対だッッ！」

「・・・」

「分かったかッ！」

「はい」

鏡冶は虚ろな瞳で真由を見詰める。

怯える彼女を無表情でしばらく観察すると、その体に手を回した

「嫌ぁ…ッ！！」

じたばたと真由は抵抗するが、鏡治の力には敵わないようだった。
子供の様に抱えられると、真由は鏡治に連れて行かれる

ワーム栽培室へと

「将来の夢は正義の味方だったか？
喜べガタック、お前は正義の為に悪者を殺すのだ…クククッ」

そう言って創英は笑う。やはりコイツは人形だと

「・・・」

しかし創英は気づかなかった。『正義の味方』その言葉を聞いた時、

鏡冶の眼に僅かな光が灯ったのを

第118話　INCREDIBLE　SPEED　LOVE（後書き）

権力ッ財力ッ暴力ッ
これが王者の教えだったのか……

ごめんなさい
なんでもないですw

次もよろしく！

第119話　PROMISE　SPEED　LOVE（前書き）

もうきついっすわｗｗ

ってな訳で次は金曜か土曜だな

ではどうぞ！

第119話　PROMISE　SPEED　LOVE

廊下にいたのは鏡治と、抱えられている真由の二人だけ。

鏡治は最初こそ乱暴に真由を扱っていたが、真由を運ぶときは丁重に扱っていた。

それが真由の心に余裕と、もしかしたら鏡治は悪い人ではないんじゃないかと言う思いを抱かせる。

「お名前は…？」

しかし沈黙

「…？　お名前はぁ…？」

されど沈黙

「ぅぅぅう、あ！　そうかぁ…
ボクは天王路真由ぅ…！　お名前は？」

「……新意…鏡冶」

「うん！　よろしくね…！」

またまた沈黙

「よ　ろ　し　くぅ　ねぇ！」

「暴れるな。……よろしく」

真由は抱えられている間、ずっと鏡冶に話しかけていた。
なかなか答えてくれないものの、鏡冶は黙れとも言わない。

しっかりと答えてくれる、それが嬉しかった。

新意鏡治、歳は…司達と同じだろうか？
女性の様な綺麗な顔立ちだが、我夢の様に女性らしすぎず男性の凛々しさも感じられる。

成る程、有美子の子供ではないとはいえ、
そこらへんは良い所を受け継いでいるのかもしれない。

「ボクね…ハンバーグが好きなんだ…」

「俺も…好きだ……」

「わぁ…一緒だねぇ…！」

「・・・」

真由の独特な雰囲気、そして無邪気さが鏡冶の閉ざされたドアをノックする。

強固で頑丈なそのドアは簡単に開くことはない。

しかし真由はそれを必死にノックしていた。

彼女は無意識だ、ただ普通におしゃべりをしているだけ。

しかし鏡冶にとっては…違うものなのかもしれない。

「将来の夢とかあるの…？

ボクはケーキ屋さんかお花屋さんになりたいな…！」

「・・・」

「鏡治くんは、将来何になりたいのぉ…？」

「俺は……」

何になりたいんだ？

何に憧れていたんだ？

「むぅ…」

真由は鏡治を強く揺さぶる。

ゆれる視界、脳。

そして、一瞬だがその単語が鏡冶の脳を貫いた

「ヒー…ロー」

「え…？」

「正義の…味方……？」

「うわぁ…！　かっこいいねぇ…」

「・・・」

鏡冶の心に不思議な感情が宿る。

それが何かは分からない、ただとても大切な…

自分にとって大事な感情だと言う事は分かる。

「カッコ…いい？」

「うん…！すごいね！　人を守る正義の味方…！」

「ッ…そうか…」

「ボクも守ってくれる…？」

一瞬。その言葉で鏡冶の動きが止まった。

「・・・」

「正義の味方は皆を守るんだよぉ…！」

ノイズが鏡冶の頭を駆け巡る。
これは一体なんなのか…？

「あ…ああ……」

じゃあ、約束と真由は小指を差し出す。
鏡冶は暫くそれを無視していたが、ついに根気負けして真由の小指に自分の小指を絡めた。

「ゆびきりげーんまーん…」

指きった。

簡単で堅い約束、もし嘘をつけば針を千本飲まされる事になるだろう。

ノイズも酷くなっていく。少し気分が悪い

「・・・？」

「クッッ！　命令は…絶対だ」

だが、すぐに鏡治はまた無機物の様に歩き出すのだった。

暫くして薄暗く、檻がある部屋にやってきた。

鏡治は真由を放り投げると檻の鍵を閉める。

「ぁ…ぅ！？」

真由はそこで初めてまともに鏡冶の目を見た。
光が無い、これがマインドコントロール。

元の彼は一体どんな人間なのだろう？

「ッッ……さよならだ。すまない…」

「え？」

そう言って鏡冶は部屋を出て行く。

同時にふと、違和感を感じて…真由は後ろを振り向いた。

「――――ッッ！」

振り向いたことへの後悔、見てしまった。

まじまじと…

「！！」

そこにはワームのサナギ体が居た。

既にコチラに気づいているらしく、ワームはゆっくりと近づいて来ている。

グロテスクなその容姿、小さな手が顔を覆っているかの様な表情は絶望している様にも見える。

だが、本当に絶望するのはワームではない、襲われる側なのだ。
ワームは合計三体、それらが真由を捕食するためにじりじりと詰め寄っていく。
荒い呼吸音、それを発している口で真由は肉塊にされるのだろう。

彼女の心に明確な恐怖が生まれる。
今まで彼女は学校と言う絶対安全の要塞の中にいた。

それが少し申し訳ないと思っていたが、同時に安心していた。
だが今まさに彼女は死と言うモノに直面している。

怖い！

今まで感じた恐怖全てをあわせても今の恐怖に勝てるかどうか。

「ぁぅ…ぁあぁああ…」

立てない、腰を抜かしてしまった。

怖い。

怖すぎて呂律が回らない。
下半身の感覚がない、恐怖で動けなくなるなんて初めてだ。
涙が溢れてくる。

助けて…助けて！必死に助けを求める真由。

皆に、大好きな兄に…

「・・・」

だが、だれもこない。
尚も近づいてくるワーム。

「うぅぅぁあぁぁあああんっ！」

きっとこれは罰、神様が今までの自分に罰を与えたんだろう。
真由は必死に謝る、誰にとも言わずに。

怖い。助けて！

必死に叫ぶ、でも何も起こらない。
近づいてくるワーム。

泣き叫ぶ、泣けばだれかが助けに来てくれるとでも？

「怖いよぉ…怖いよぉぉお！」

神様ごめんなさい。
一生いい子でいますから…助けてください。

もっと皆といたいんです。お兄ちゃんと一緒にいたいんです。
真由は必死に許しを請う、もちろんそんな言葉がワームに届くわけが無い。

無駄なのに…

いや、無駄なのか？

「――――――」

ワームに届くことの無い命乞い。
そう、『ワームには届かない』命乞いなのだ。

「・・・ッ！」

扉の向こう、鏡治の脳裏にフラッシュバックする『何か』

誰かと自分が語っている、鏡治はそれが何か分からずにいた。
さっさと立ち去ってしまいたい、なのに扉の奥で聞えてくる悲痛な
叫びが彼の足を止めさせていた。

『女の子を泣かせるなんて最低だぞ！』

『いいかい鏡治君。
助けを求めている人がいたら、全力で助けてあげなさい』

『鏡治！アンタまた妥協してんの！？
アンタはアンタ！やりたい事やりなさい！』

『鏡治君。優しく生きてこそ、人は価値があるものになるんだよ』

『鏡冶！約束は守りなさい！』

『鏡冶！』『鏡冶くん』

『『優しく、正しく。強く生きて』』

「・・・ッッ！」

鏡冶は頭を抱えてうずくまる。

頭が痛い、ノイズが酷い。

頭の中で映像と音声が何度も再生される。
叔母と叔父が自分に何かを言っている、それに笑顔で答える自分。

わからない。何だコレは!?

何でこんなに苦しいんだ!?

「だすげてぇおにいぢゃん!こわいよぉぉッ!」

「!」

ドアの向こうから悲痛な叫びが聞える。

ないてるおんなのこがいたら…

「つぅ…うぅぅアアアアっ！　ぐぅうう！！」

叔父と叔母の言葉に頷く自分。

自分？

自分って誰だ？

俺か？　新意…鏡冶！？

「俺は…俺はぁぁぁァァアアアアア！！」

俺は…新意ッ！新意鏡冶ぃぃぃ！？

『ボクも守ってくれる？』『カッコいいね』

『鏡冶！アンタは正しい馬鹿になりな！』

『鏡冶君の夢はヒーローなんだって？
君ならなれる！叔父さんが約束するよ』

『目の前で困っている人がいたら
どんな人でも手を差し伸べるのよ？

分かった？』

『正義の為なら努力を惜しむな』『アンタは正しく生きて』

『約束してね？』『アンタ今自分が何してるか分かってんの！？』

『オレ！大きくなったら正義の味方になるんだっ！』

「ッ……！！」

そうか…そうだ！

あれ？　思い出した？

俺は、俺の夢は…俺は！！

『命令は絶対だ！』

「ぐっぅぅぅぅぅッッ！！」

いや、俺は…命令は、絶…対！

なの…か？

『無視すればいいじゃないか。そんなの』

「！」

ふと、頭を駆け巡るノイズではない。
鮮明な声が聞こえた。叔父でも創英でもない男性の声

「あ……」

こわいよぉ！　たすけてぇよぉッ！！

女の子が泣いている。
助けを求めてる…

『お前、あの子と約束してたよな。守るって』

「！！」

約束は…守る。

そうだ…俺は……

俺だッッ！！

『あの子は言ってくれたよな…お前に』

かっこいいって…

「！！！！」

何かが割れる音が聞えた。
頭の中で創英が語りかけてくる、命令は絶対だと。
お前は人形だと！

『お前は……誰なんだよ？』

ああ、そうだ。
すいません創英さん…俺は、人形じゃねぇよ

約束しちゃったな。

あの子と。ああ、そうさ

じゃ、守らないとな。正義の味方ならさ

第１１９話　ＰＲＯＭＩＳＥ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（後書き）

クラヒフォーゼのＰＶを見ました。
んー、まあライジェネはスルーしちゃったんですけどクラヒは買おうかな

だいたい友達も買うんでポチポチやってますｗ
前のオーズではアギト、ブレイド、電王を主に使ってました
昭和ライダー数人でるようなんで、ＲＸに期待しときますｗ
では次もよろしく！

第１２０話　ＡＰＯＬＯＧＹ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（前書き）

はい、どうも！　更新ですね。

まあ次は……どうかな。

やはり、とりあえず土曜。できたら日曜でいきます

ではどうぞ！

第１２０話　ＡＰＯＬＯＧＹ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ

「――ォオオオオオオオオオオオオオッッッ！！！」

鏡治は頭を思い切り壁にぶつける。
痛みが自分と言う存在を再確認させてくれる。
ああ、そうだ。これは俺の痛みだと！
新意鏡治の痛みだとッ！

「ああそうだ…ッ！　俺は新意鏡治！
俺は俺だぁぁぁァッ！」

他の誰でない。ああ、そうさ！
唯一の存在なんだ！

『やっと目覚めたか、遅かったな。ヒーロー』

鏡治に話しかけていたのは幻聴でもなんでもない、現実だった。
ずっと側にいた……

現実だ。

「お前だったのか…てか、喋れたのかよッ！」

『まあな』

鏡治の目の前でガタックゼクターが浮遊していた。
なんか、よく見たら目もついてるじゃないか…
今までずっと無言だったパートナーは、当たり前のように鏡治に話しかけている。

人間と同等、むしろそれ以上の知能を持っていると言われていたゼクター。
しかし、まさか喋れるとは思っていなかった。

『感謝しろよ。
マインドコントロールの効果を弱めてたのはオレだからな』

「お、おう！　サンキュー！
でも取り合えず今はッ！」

鏡治はそう言うと、ガタックゼクターを掴んで走り出した。
約束がある。
破るわけにはいかない！

「うぅぅうう！！」

扉の向こう、薄暗い部屋では少女の助けを求める声が響いている。

腰を抜かしてしまった少女はもう動けない。

徐々に近づいてくる死を受け入れるしかないのか……

もう目の前にワームが迫ってきている。

でも動けない、怖い！

このまま食べられてしまうのだろうか？

助けて！　誰か助けて！！！

「たすけてぇえええ！」

でも、だれも助けてくれ――

「まかせろぉおおぉぉおぉおおおおおッッ！！」

「！」

目の前のワームが爆発して吹き飛ぶ！
驚きで目を見開く真由とワーム。

そして間髪いれず檻の入り口が吹き飛ばされ、真由は誰かに抱きかかえられる。

「！？」

その誰かは、真由をいわゆる『お姫様抱っこ』で安全な所まで運ぶと、優しく頭を撫でた。

真由の瞳の中に、装甲を纏った戦士がいる。
彼は真由に深く頭を下げると、申し訳なさそうにトーンを落として呟いた。

「ごめん、真由ちゃん。
俺が悪かった…俺が馬鹿だったんだよ」

「……？　！！」

真由は一瞬その人が誰か分からなかったが、
キャストオフをしたそのインセクトを見て表情が変わる。

そう、鏡治……ガタックはクロックアップを発動させ、一瞬でワームを消滅させた。
そして、真由を再び抱きかかえると猛スピードでブレインタワーを後にするのだった。

重々な警備システムも、クロックアップの前では無力に等しい。
引っかかる事はあっても、対処の手が来る前にガタックは駆け抜ける！

「……ッ！」

一瞬で変わる景色は、まるで魔法。
真由はガタックを掴む力を強めた。強くしがみついてないと、魔法がとけてしまう気がしたからだ。

儚げで刹那の世界は、まさに真由とガタックの二人だけしかいないのである。

「逃げただとッッ！！
馬鹿な！？　ありえん！！」

「…ワームは全て死んでおり、真由もガタックの姿もありません。
発信機も外されており、完全に連絡がとれない状態です」

「・・・！！！」

創英は怒りと驚きの表情を浮かべる。
マインドコントロールが解除されたのか…有り得ん。
何故、どうしてっ！？

「捜せッッ！　必ず見つけ出すのだ！
場合によっては殺しても構わん！！」

創英は急いで科学班に連絡を取る。
いよいよ鏡治の存在が無視できなくなっていた。
失敗した。こんなことならヤツを殺しておくべきだったかッ！？

「まだ洗脳電波を送る機械は完成しないのかっ！」

結果はイエス、やはりあと九日後予定は変わらない。
創英の心に焦りが生まれる。
この街で絶大な力を持っていたインセクトを支配したと思えば

新たなライダーが現れ

リコンファームの起動スイッチである少女が現れ

インセクトの中でも最強と言ってもいいガタックが裏切った。

非常にマズイ展開だ。最悪のシナリオが紡がれようとしている。

「…ッ」

タワーから見える街、そこにはやはりカプセルに乗っている人間共が見えた。

堕落しきっている。

こんな連中に生きる価値などあるのか？

毎日を無駄に生きているコイツ等に俺を攻める資格があるのか！？

否、無い。

必ず洗脳してよりよき世界に変更するしかないのだ。
こんな腐った世界を自分が変えるしかないのだ!!

「・・・」

かつては自分もインセクトとしてこの街を守った事がある。
しかし傷つき、多くの仲間を失い帰還した我らに待っていたのは賞賛でもない、批判と誹謗中傷の嵐。ワームを生み出したのは我々科学者だ。しかしその原因を尚使い続けている貴様らを…許さない。

創英は拳を握り締め壁を殴りつけた。
必ず……変える。

この世界を――ッ!

「ここまでくれば大丈夫だな」

「ぅ…」

ガタックはブレインタワーから大分離れた所で変身を解除した。
少し大きめの公園だ。ここならば隠れやすいし安全だろう。

もう時間が時間で人もいない。
しかし、この公園も昔はもっと色んな人が遊んでいたらしい。
カプセルが普及し、筋力やバーチャルスポーツと言われる技術が開

発されたせいで段々と公園で遊ぶ人もいなくなったと言う。

「ごめんっ！　許してくれッッ！！」

「…ふぃ？」

鏡治は真由を座らせると、いきなり土下座を決める。
驚く真由、鏡治はしばらく何も言わずに土下座を決め続けた。

「……だ、駄目かっ！　そうだな！じゃあ」

土下座では駄目だと悟ったのか、鏡治は土下寝にシフトチェンジを決める！
だが真由は相変わらず口を開けたまま鏡治を見ていた。

無言の時間が過ぎる。

てかよく考えたら土下寝って何なんだよ。
ふざけてるみたいじゃないか！　鏡治は慌ててもう一度土下座に切り替えた。

しかしジャンプしながらだったので、ジャンピング土下座になってしまう

沈黙の時間が流れる。
なんか凄く失礼なことしてる、鏡治は冷や汗を浮べて頭を上げるのだった。

「本当にごめんッ！
ああ、そうだ、それだけの事を俺はやってしまったんだからッ！」

「・・・ぅ」

「え？」

「ううぅうわぁぁぁん！」

「！」

真由は堰を切った様に泣き出した。
鏡治の表情が強張る、やはり自分のした事が原因でトラウマになってしまったのだろう。

こんないたいけな少女の心に深い傷をつくってしまった。
激しい後悔と罪悪感が鏡治を押しつぶしそうになる……

「わわっ！　ごご、ごめ！
本当にすいませんでしたっ！

どんな罰でも受けるから！　どうか泣き止んでっ！」

「こわかったよぉぉぉお！」

「おぉ！？」

真由は恐怖から解放された事で、安心して泣いてしまったのだ。
自分がそんな事をする資格があるのかどうか迷ったが、鏡治は真由を落ち着かせようと肩を揺する。

「真由ちゃんもう大丈夫だ！　絶対大丈夫！　俺が約束する！」

「うぅ……本当に…？」

「ああ！　えっ…と、ティッシュ持ってる？」

「うん…ハンカチとティッシュは…
いつも持ってなさいって…お兄ちゃんが…」

真由はポケットティッシュを取り出して鏡治に渡す。
鏡治はお礼を言って微笑むと、それで真由の涙と鼻水を拭いてあげた。

ぐしぐしと少し乱暴だった為、鏡治はまたまた土下座を決める。
女の子の扱いなんて分からない。つい親友と同じような扱いをしてしまった。

「あの……本当にごめん、真由ちゃん。
俺、君に酷い事を――――」

自己嫌悪が襲ってくる、もう少しで真由を殺してしまうところだったのだ。
恨まれても、蔑まれても、それこそ刺されようが文句は言えないだろう。

だがしかし、真由はニッコリと微笑んで鏡治の頭をなでた。

それは『許す』と言う何よりの証拠だろう。
一瞬何が起こったのか分からない鏡治だったが、思わず涙が出そうになる。

静かな夜だったが、彼女がとても眩しくみえた。

「ううん、いいの…気にしないで……
鏡治君は約束を守ってくれた。いい人」

「真由ちゃん…」

鏡治はもう一度真由にお礼を言う。

それから真由の話を聞いた、世界の事とかリコンファームの詳細。
そして何よりも兄のこと。

とり合えず鏡治は真由を学校に送る事を決意する。
携帯電話は使えなかった、恐らく創英が妨害しているのだろう。

電話が使えないのなら直接送るか、途中で真由の知り合いをみつけるしかない。
その二つならば、学校の方がいいだろう。

一瞬有美子の研究所に戻る事も考えたが、
あそこまでにはゼクトルーパー達が倍以上控えているだろう。
あまり戦闘はしたくない。学校が安定している訳だ。

いきなり他の世界から来た。
なんて言われたから驚いたけど、そう言えば見た事無いライダーがいた事から納得できた。
それに目の前の彼女が嘘をついているとは思えない。
本当に絶対安全の学校が存在しているのだろう。

しかし、問題もある。

「街中をクロックアップで動き回るとセンサーが反応して見つかっちまうんだよなぁ…

真由ちゃん、学校の場所は覚えてる？」

「えと……」

「うん」

「んと…」

「おお」

「ぉ……」

「ほい」

何か、真由ちゃんの頭から煙が出ている様な気がする。

「覚えてないんだ…な？」

「ごめんね…」

シュンと彼女の眉が八の字になる。

真由の眉……なんちって！

すいませんでした。

鏡治は真由の表情を見てドキリとしてしまう。
また傷つける訳にはいかない！

「あぁ！　いや！　大丈夫大丈夫！
タハハハ！　ああ、そうさ。安心しろよ真由ちゃん！」

「うん…！」

くるるるるるるぅ……

「ん？　なんの音だ？」

「おなか…」

「え？」

「おなか…すいた…」

そう言えばそうだ！
鏡治は手を叩いて、それから彼女に微笑みかける。

「ああ、そうだ。成る程！
よし！　ちょっと待ってろよ真由ちゃん！」

そう言って鏡治は近くにあった自販機に向かう。
この自販機、ジュースだけでなく食べ物も売っているのだ。

さて、鏡治は胸を張る。
このタイミングこそ、落ちきった信頼や高感度の回復。

そして何より真由を助けてあげられる場面だろう。
いっちょ、ビシッと決めて真由ちゃんを喜ばせてあげよう！

ああ、そうさ！　鏡治は何故か自販機に向かって一礼をする。

「うぃっーと！　真由ちゃん、何が食いたい？
何でも言ってみろよぉ！　へへへッ！」

いいの！？　真由の表情がパッと明るくなる。
もちろんとドヤ顔の鏡治。

「ありがとう……！
何でもいいよぉ…！」

「おっけ、何でもね！　さーって……
と……」

あ、そう言えば財布、持ってなかった。

第１２０話　ＡＰＯＬＯＧＹ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（後書き）

フォーゼがカッコよく見えてきましたｗｗ
慣れは怖いですねｗ

あとＥＤが流れたのはテンション上がりましたね。
毎回ライダーのＥＤには必ず一曲、
無性に気に入るヤツが出てくるんで今回も楽しみです。

どうなんだろうな。ダブルはヒートメタル、オーズはプトティラのテーマソングが特に好きですね。
まあいいかｗ　では次もよろしく！

第１２１話　ＤＩＥＴ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（前書き）

明日はできたら更新でいきます

ではどうぞ！

第121話　DIET　SPEED　LOVE

いやな汗がしたたり落ちてくる。

金が……無い

「鏡――？」

「あー、こんなところにーこいしがー！
つまづいちゃったー……なッッ！！」

鏡治は体をひねる様に回転させて倒れる。
自販機の下、ここに…なんか、

こううまい具合に五百円とか何か落ちてたら…嬉しいな！

「・・・」

何もないや！

「真由ちゃん。あのッ…ホントごめん。
俺、金持ってなかった…」

いや少し待て、ガタックに変身してバルカンで吹き飛ばせばいいんじゃ……

いやいやッ！

何を考えているんだ新意鏡治！　そんなのは犯罪だ！
そんな非合法なやり方で手に入れた食べ物を真由ちゃんに渡すなんて言語道断！

反省しろ鏡治！　己を恥じろ！

「くそおおおおおおおおおおおおおおおおッ！」

バチンと両手で頬を叩く！

罰だ、自分に罰を与えなければいけない！

「腕立て百回！　うおおぉぉおおおおおぉおおッ！」

激しく上下運動を繰り返す鏡治を、ガタックゼクターは冷めた目で見ていた。

（何やってんだコイツ……）

五分後

「あ！うん、大丈夫だよ。
ボクちょっとだけなら持ってるから！」

「え…？」

結局百回もできなかったし、食事も真由の金で買う事となった。

何が食いたい？

何でも言ってみろよぉ（ドヤァァァ）とか何とか言ってた自分が情けなくなってくる。

しかし真由もそれほど持ち合わせておらず、結局オニギリ一つしか買えなかった。
本当なら二個は買えたが、真由は鏡治にもお金を分けており自分の分はオニギリ一つのお金しかない事になった。

鏡治は申し訳なさそうにしていたが、お金を返すと言っても真由が聞かなかったので、お茶を買う事にする。

真由はオニギリ一つ、鏡治はお茶。
なんとも地味な夕食が始まる。

「はむっ…！」

「おいしいか？」

「うん！」

その言葉を聞いて鏡治は、まだ口をつけていないお茶を彼女に渡す。

「じゃあ、お茶もやるよ。飲み物がないとキツイだろ？」

「え！？　でも…それじゃ鏡治君……」

「大丈夫だってッ！
俺…あの、今日昼飯いっぱい食ったからさ！
ハハハッ！」

ギュルルルルルルルルルルル……

「・・・」

「・・・」

鏡冶は頭を抱えてうずくまった。

どうすればいい？

今の腹の音はなんて説明すりゃいいんだ！　オイッ！？

いやしかし待てよ…鳴き声にするのはどうだ？
今のは俺の鳴き声なんだよと笑顔で言えば信じてくれるんじゃないだろうか？

いや…嘘をつくのか！？

こんな純粋な真由ちゃんに嘘をつくのか俺は！

できない！　できる訳が――――ッ

「くそおおおおおおおおおおおおおおおッ！」

バチンと（以下略

「鏡冶君……」

「え？　モガッ！！」

突然鏡冶の口に突っ込まれる何か、
租借してみるとオニギリだと言う事が理解できた。

しかし、待てよ。
オニギリは一つだけのはずだ。

なら……

「まゆひゃん！？」

「いいの…鏡冶くんが食べて。
ボク、もう…おなかいっぱいだから……」

分かりやすい嘘。
それでもその好意を受け入れるためには、騙されなければならない。
鏡治はこの日ほど金を持ち合わせていなかった事を恨んだ事はないだろう。

「まゆひゃん…ほめん……」

真由は首を振って微笑む。
しかしすぐにまた泣きそうな顔になってしまった。

「あ…ッ！　ごめん！
ボクッ食べかけ…あげちゃった…！

嫌…だよね……」

「え？　んんっ、いや大丈夫！　大丈夫！
俺、そう言うの気にしねぇんだ！　ハハッ！」

「本当！？」

真由はまたニッコリ微笑むと、今度はお茶を差し出した。

『コレもあげる』

鏡治は申し訳なさそうに笑うが、真由の気持ちを汲むため素直に受け取ったのだった。

「うッ…クッ……！！」

「大丈夫…？」

食事を終えて少しした後、鏡治の体に大きな疲労感が襲ってきた。
やはり今日、幾度となく行ったクロックアップは鏡治の体に大きな負担を与えていた訳だ。

とてもじゃないが、もう一度クロックアップはできないと悟る。

真由も理解してくれて、とりあえず今日は公園で野宿する事になった。

幸い公園にある小さな丘は隠れる所も多い。

そもそも鏡冶ですら駄目なのに、他のインセクト達が動けるわけもない。
たとえマインドコントロールを受けていようが流石に今日はインセクトも追ってはこないだろう。ゼクトルーパーは知能は低い方なので、物陰に隠れていたら見つかる事はない。

二人は特にやることもないので、ベンチに座って夜の空を見ていた。

「昔は星とか月が見えたみたいだけど…
今は工場からの煙でなにも見えないな…」

「ん……お星様…残念だね」

あまり綺麗とは言えない夜。
しかし辺りを包む静寂は、まるで世界に二人だけを残して滅んでしまった様だ。
それが悲しく、切なくも、ある種とても幻想的だった。

だが、このままだと本当にそうなってしまうのではないかと言う怖さも覚える。
鏡治はその沈黙を消すべく、簡単な質問を投げかけた。
静かな夜に鏡治の声だけが存在する、そんな幻想。

「ああ…。そう言えば…真由ちゃんって何歳？」

「？」

「あ！　女性に歳聞くなって叔母さんにいつも言われてたのになぁ！」

鏡治は申し訳なさそうに頭をかく。
だが叫ぶ準備と頬を叩く準備をしたところで、意外な返事がかえってきた。

「いいよ。ボクはね…」

その時、少しだけ真由の表情が曇ったのを鏡治は気がつけなかった。
真由は指で数を数えるような仕草をとった後、小さな声で呟く。

「じゅう…ろく歳……」

「え！？

あ…あぁ、えとゴメン！　何でもないよ」

鏡治の反応が予想通りと言ったように真由はうつむく。

そう、幼すぎるのだ。

彼女の行動、口調はとても同年代……十六歳の少女のソレとは違う。
かけ離れているのだ、尤もそれは真由自身が一番分かっていた事。

「いいの。　ボク…事故で一回記憶が無くなっちゃったんだって」

「え…？」

そう、真由は一度……

第１２１話　ＤＩＥＴ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（後書き）

ガタックゼクターのＣＶはウラタロスです

……ん？

まあいいやｗ

では次もよろしく！

第１２２話　ＱＵＥＳＴＩＯＮ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（前書き）

はい、まあ次は未定ですかね

友達の家でカブトのゲームをやりました。
あのゲーム、地元じゃ中古で９８００円くらいするんですよね
今はどうか分かりませんが、少し昔はすげーなとｗｗ

ではどうぞ！

第122話　QUESTION　SPEED　LOVE

それは、司が初めてディケイドになった世界での事。
双護は皆にある事を相談していた。

明らかに普通じゃない出来事に巻き込まれた、長くなりそうだと理解できる。
隠し通せる訳もない。

「皆…少し、いいか？」

「え？」

双護の言葉に皆は耳を傾ける。
今、真由はトイレに行っていていない、ここしかないと双護は悟ったのだった。
そして意を決して皆にそれを切り出す。

「え？　真由ちゃんが！？」

「ああ、真由は事故で一度記憶を失っているんだ。
幸いそこまで酷いモノじゃなかったから…
『時計』とか『学校』とか記憶していた単語までは消えなかった。

でも、その…今、真由の外見的年齢と精神的年齢には差があるんだ。
食事のマナーだとか対人におけるマナーとか……そういったモノも忘れていた。

もちろん教育をしなおしたおかげでそこまでは酷くない。
だから……もし真由がそう言う『幼い行動』で皆に不快な思いをさせるかもしれない。

その時は…どうか許してほしいッ」

そう言って双護は深く頭を下げる。
皆も驚きこそはしたが、すぐに理解を示してくれて双護も安心していた。

「だけど、真由ちゃんはこの学校でいいのかい？
もっと真由ちゃんに向いてる学校があるんじゃないだろうか？」

翼の言葉に『苦い顔』をする双護。
どうやら特別な事情があるらしい。

そしてその事情は彼らにとってあまり嬉しくない事だと言うことも理解できた。

「親父が無理を言ってこの学校にさせたんだ。
正直…あまり真由のことは世間に知られて欲しくないみたいだから…」

それがマイナスのイメージからか、プラス的なモノなのかまでは皆聞く事はできなかった。
しかし真由は大切なクラスメイト、それでいいと司達は思う。

「よし真由ちゃん！　一緒にプリンでも食べようか！」

戻ってきた真由にユウスケが微笑みかける。
太陽の様な笑顔で頷く真由を見て、双護も安心したように笑うのだった。

どうやら上手くやっていけそうだ。

あまり話したくないことだったのかもしれない。
真由も薄々は気づいているのだろう。
自分の過去が分からない。思い出せない。

今の自分は知識が豊富な小学生といってもいいかもしれない。

方程式は解けても、電車の切符を買うのは自信がない。

難しい漢字が読めても、覚えるのは時間が掛かる

都道府県が全部言えても、夜トイレに行くのが怖かったりする

そう言った『高校生』らしくない毎日に、違和感を感じるのは当然だろう
兄に余計な心配をかけたくないから、記憶のことについては何も言わないが……

きっと自分は少し皆とは違うのだと――

「そうだったのか…ごめん。真由ちゃん」

「ううん。いいの、ボクも分かってるんだ。
だ…から……きっと、お兄ちゃんはボクを…恨んでるんじゃないかって

……怖いの」

恨んでいる？

何故？

鏡治は思わず真由の方を直視してしまう。
そして後悔する、目に涙を浮べた彼女と視線がぶつかってしまったからだ。

泣いている姿に、鏡治の心が揺れる。
なんとかして泣き止んでもらいたい、だけどどうしていいか分からない。

「お兄ちゃんは……ずっと一緒にいてくれた…」

だけどっ、真由の声が震える。

「ボクがいたせいでお兄ちゃんはやりたい事をできなかったんじゃ……ないかって」

兄は、本当に自分によくしてくれた。
だから、嬉しくもあり申し訳なくもあった。
兄はきっといろんな事を犠牲にしていたんだろう。

「お兄ちゃんは……ボクの事が――」

「真由ちゃんッ！そんな事言うなよッ！！」

「！」

真由がその言葉を口にした時、真由は鏡治の腕の中にいた。
鏡治はすぐに我に返って真由を解放するが、真由は暫く口を開けたまま鏡治を見詰めている。

結局鏡治がとった行動は抱きしめると言うありがちな事。
しかし『ありがち』なのはドラマや漫画の中だけだと彼は悟った。
確かに泣き止みこそしたが、好きでもない男にいきなり抱きしめられたらどうなんだろう。

鏡治の顔が青くなっていく。

これ、もしかしてショックで泣き止んだって事!?

「あ！　いや、ホラ！
真由ちゃんの兄貴さ、俺が真由ちゃんを連れて行くとき本気で怒ってたぜ！

俺が言うのもなんだけど、それって真由ちゃんがスゲー大事だからじゃないのか？
ああ、そうさ！　邪魔とか、恨んでたらあんなに怒らないぜ？」

「・・・」

「思い出してみろよ真由ちゃん！
今まで君の兄貴と過ごしてきた日々を！
どうだ？　楽しかったんじゃないか？　楽しかったよな？

真由ちゃんはお兄ちゃんともっと一緒にいたいって思うだろ？
それは兄貴も思ってることなんだよ！

ああ、そうだ！そうに違いないって！」

「本当…？」

「ああ！　約束する！」

そう言って鏡冶は真由に小指を差し出した。
真由はにっこりと微笑むと、鏡冶の指に自分の指を絡ませる。

二人は笑い合うと、約束の儀式を行う。
真由の安心した様な笑顔を見て、鏡冶も微笑むのだった。

そして夜も深くなっていく。

「すぅ…すぅ……」

規則的で可愛らしい寝息を立てている真由を見て、鏡治はもう一度微笑む。

何があってもこの少女だけは守らねばならない…

鏡冶はもう一度気合を入れる。

「うォッしゃアアアアアアアアッッ！！」

『うるさい！　あの娘も起きるぞ！』

「おっとと！」

慌てて口を閉ざす鏡冶、そんな彼にため息をついたのはガタックゼクターだった。

鏡冶は自らの相棒とも言えるゼクターに詰め寄ると、彼女を起こさ

ない様に小さな声で話しかける。

「さっきはありがとうな、助かった」

『まあ気にするな。
それより、俺にはいろいろ聞きたいんじゃないか？』

鏡治は頷く。
気になったのはなにより、何故今まで喋れる事を黙っていたのか？

それとマインドコントロールを弱めてくれたというのはどういう事なのか？

この2つだ。
ガタックゼクターは小さくため息をつくと、鏡治の周りをふわふわと飛びながら呟く。

ゼクター達は全員言語を話す機能が備わっている。
しかしゼクター達は喋る、つまりコミュニケーションを契約者とともるのは止めていた。

余計な情を移しては互いに面倒だからな、そう言ってガタックゼクターは笑う。

その言い方から過去に何かあったのだろうか？
鏡冶には分かるわけもないが、何かそう言う哀愁の様なものを感じた。

ゼクターはインセクトがワームを殺す為に生まれた存在だという事を理解していた。

それは同時に常に命を失う危険があるというモノ。
関わらなければ、痛みは最小限にできる…互いにとっても。

「心があるのか…ガタックゼクターには！」

『ああ、そうだな。俺達はワームと機械の融合した存在だ。
お前らの過ぎた科学が俺達に心、感情と言うモノを与えたのかもしれない。
言語機能を持った事で俺達も関わりと言うモノを知った』

「そうなの…か。
ん、でも俺に話しかけてくれたし、助けてくれたのは…？」

『マインドコントロールの件か、そうだな。
創英のマインドコントロールは中々だが俺達が妨害電波を流せば被害を最小限に抑えることができる。
現にお前はあの娘の言葉で自我を取り戻せたわけだからな。
まあ元々お前は抵抗力が強かったみたいだが』

「え？」

ガタックゼクターは鏡治の頭に軽く体当たりを決める。
思わず小さく声をあげる鏡治。

『馬鹿はマインドコントロールに強いんだよ』

「な、なんだよソレは！」

『ククククッ、まあ怒るな』

「ああそうだな…おう！
助かったぜ！　ありがとう！」

そう言って鏡治は深く頭を下げる。

そして気づいた、妨害電波はゼクターの意思で流す…
なら――

「じゃあ他の皆も…！」

『…そうだな、ゼクターが妨害電波を流した上で
きっかけを与える事ができれば元に戻るかもしれない』

「おお！」

だが…ガタックゼクターは街を見回す。
公園は薄暗く静かだが、街の方は深夜だというのにネオンで昼より明るく照らされ、
機械音や生活音で夜と言う事を忘れさせる。

工場では今も何かが作られ、有害な煙が空を汚していた。

『俺達ゼクターは創英の言っている事に賛同の念があったのかもしれない。

俺達は機械だ、感情こそ持っているがそれを押し出してはならない。

道具に心は不要だからな。

だが、俺達は創英の言っている事に賛同してしまったのさ。

だからこそお前ら心なき人間と契約してこの街の人間共を支配しようと考えた。

まあ唯一カブトゼクターの野郎だけはそれを拒んだ訳だがな。

アイツは自由なヤツさ…』

カブトゼクターだけは、創英の言い分を『興味がわかない』の一言で切り捨てたらしい。

結局彼の前に現れる事もなく、今もどこかを飛び回っているのだろう。

第１２２話　ＱＵＥＳＴＩＯＮ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（後書き）

いろいろな電子音（？）がありますが
ガタックゼクターが一番好きかもしれません。
特に『Ｃｈａｎｇｅ・ＳｔａｇＢｅｅｔｌｅ』の部分がねｗ

時点でディケイドかファイズかな。
絞りきれてないですけどｗ

では次もよろしく！

第１２３話　ＨＡＴＲＥＤ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（前書き）

はい、更新ってなもんで。
次も…未定で。すいません！

フォーゼの敵デザインは結構好きです。
しかし大文字さんパネぇっすｗ！

ではどうぞ！

第123話　HATRED　SPEED　LOVE

「・・・」

鏡冶は空を見上げる。
昔は美しい月と星が見えた夜空、しかし今はよどんでいる。

日々破壊され行く環境と自然、それを保護する機械を作れというクレームが多いらしい。

全く、どこまで機械にたよるのやら……

『この街の人間共は腐りきっている。
堕落が心を廃らせ、人間の質を落とす。
創英が人間に絶望したのも頷ける話だと…俺達は思った。

鏡冶、お前創英の右目…どうなったか知ってるか?』

「いや……」

『昔、ヤツがインセクトとしてワーム殲滅に参加していたとき、
子供を守って…その時に……』

「ッッ…」

今、創英は人間の命をなんとも思っていない様に感じる。

だが昔はそうではなかったのだ。

正義感の強い男だった、だが現実に耐え切れなかった弱い男でもある。

ガタックゼクターは言う。

今の創英は狂っている、だがその原因を作ったのは…

人間だ。

「ああ、そうだな。
確かに自分で歩かない奴らはどうかと思うぜ、俺も…」

だけど――ッ、鏡冶は立ち上がり天に拳を掲げる。

「だけどなッ、それで俺の友達や
こんな無関係な女の子が巻き込まれていいのかッ？

俺の叔父さんや全うに生きてるかもしれない
カプセル使用者が巻き込まれていいのか？

ああ、ちげぇ！　違うよなッ！
そうじゃねぇ！

創英さんの気持ちが理解できない訳じゃねぇさ！
だがなっ、それでこのまま創英さんの計画見逃して！

真由ちゃん巻き込んで…」

鏡治は一緒に拉致された友人を想う。

彼はサソードになっていた。

そして剣を振るう、無関係な人間に――

「神也の未来まで壊す事が許されるのか！？

ああ、違う！　違うぜそれはッ！

俺は認めない！

お前らゼクターがイエスと言おうが、俺はノーと言うッッ！」

『……ああ』

ガタックゼクターはその言葉に頷くと、その場に着地する。

鏡治が我を取り戻せたのは真由の力もあるが、

なによりガタックゼクターがマインドコントロールを妨害した事だ。

それはつまりガタックゼクターが創英の考えに疑問を持ったという事。

ガタックゼクターは人間など皆、堕落しきった愚かな存在だと考えていた。

だが、有美子や鏡治、真由を見てその考えを少し変える。
もしかしたら、人間はまだそこまで捨てたモノではないのかもしれないと

『俺は見てみたくなったのかもしれない。
この世界が変わるのを、今のこの現状を誰かが破壊してくれることを…』

創英は正しきことには犠牲がつきものだと言っていた。
だが、もし…犠牲を出さずに世界を変える事ができたなら…

『お前の叔母やその仲間が…
その希望を叶えてくれるかもしれない…』

「ああ、叔母さんは凄い人さ。
叔父さんだって警官として優秀な人だ。
俺は尊敬してる！」

『そうだな…』

ガタックゼクターはもう創英の考え方に賛同できなくなったのだ。
だから妨害電波を発した。

と言う事だった。

創英を裏切る。
そんな人間じみた行為をする事になるとは……ガタックゼクターは苦笑した。

『お前はこれからどうする？　鏡冶』

「とりあえず真由ちゃんを、絶対安全地帯らしい学校へ送り届ける。
次に神也を助けに行く」

御剣神也（みつるぎしんや）。
鏡冶の友人にして、同じく創英に拉致された者の一人だ。
今はサソードに選ばれインセクトとして操られている。

「サソードゼクターは妨害電波を流しているのかな？」

『さぁな、ヤツも創英の行動に疑問を持ったなら流すかもしれん。
真由と言ったな、あの娘を躊躇い無く
ワームの餌にしようとした創英の行為は俺達の心にそう言った影
を落とした。
サソードゼクターがどうかは知らんがな』

「お前らはコンタクトを取り合えないのか？」

『できる。だが創英の手によって電波を拾われるのがオチだ。
抵抗できるとしても妨害電波を流すだけだな』

「成る程、でもたとえ妨害電波がなくても絶対アイツは助けて見せる！
その為に協力してくれ！　頼むッ！！」

そう言って頭を下げる鏡冶。

『ハッ、馬鹿な男だなお前は』

だが、悪くない。
そう言ってガタックゼクターは彼の周りを飛び回った。

『俺はお前に話しかけた、それはつまりお前に期待してるって事だ。
俺の最後の契約者がお前である事を切に願うよ』

「ああ！　まかせろっ！」

鏡冶はニヤリと笑う。
ガタックゼクターも表情こそ分からないが、笑っていた。

「んッ……！！」

「？」

今まで寝息を立てていた真由が、突如跳ね上がるようにして目を覚ます。
そんなに暑くないにも関わらず、汗が酷い。

鏡冶は真由にどうしたのか問いかける。
どうやら真由は怖い夢を見てしまったらしい、顔が青ざめて小さく震えている。

鏡冶は真由のハンカチを借りると、彼女の額や顔の汗を拭いた。

「安心してくれよ真由ちゃん。
嫌な夢は忘れちまえばいい、楽しい事を考えながら寝るんだ！
そうすれば一発さ！」

「うん……」

そう言って真由は目を閉じる。
しかし、なかなか眠れないようだ…

「そうだな、真由ちゃんは好きなお菓子に囲まれて幸せだ！
これでオッケー！　大丈夫だぜぇ。

真由ちゃんが寝るまで俺が守っててあげるから！
安心して寝な」

「ありが……とう！」

そう言って真由は目を閉じる。
鏡冶の言った事を思ってみる、すぐににやける真由。
そして数分もしない内に眠りに落ちるのだった。

『やるじゃないか』

「叔母さんに教えてもらったんだよ。俺も昔は……な」

両親が亡くなって、昔は本当に寂しかった。
兄弟もいない自分にとって、それはとても――
だから、真由には絶対に双護と再会してほしい。
家族なんだから……

「あぁ、そうだ。お前はさっき道具に心は不要って言ったな」

『ああ、それがどうした?』

「お前は道具じゃない、俺の友達だ。覚えとけよ」

『ハッ！　言うなお前も』

軽く鏡冶とガタックゼクターは笑い合う。

「あーあ…俺も流石に眠いぜ……」

『休めるときに休んでおけ、俺が見ておいてやる。
クロックアップの負担は大きいからな』

「おう…すまん……ありが…とう……」

そう言って、鏡冶も真由と肩を並べて眠りに落ちたのだった。

一方、同じく深夜の街外れ。
そこにゼクトルーパーに囲まれている少年がいた。

名は天王路双護。

『抵抗は…お勧めしない』

電子音がそのメッセージを告げる。
しかし双護は全く動じる素振りを見せず、逆にゼクトルーパー達を鼻で笑った。

「消えろゴミ共。
俺は忙しい、邪魔するならスクラップにしてやるが、どうする？」

それは降伏拒否、ゼクトルーパーは一斉に彼へ銃を向けた。
銃、それはなによりの抑止力。
凶器の中でも上位に入るだろう物に、双護は眉一つ動かさない。

そんなモノ、玩具でしかないからだ。

そう、彼は嘘をついていた。

彼は…

「来い」

その言葉と共に赤い何かが飛翔してきて彼の手に収まる。

カブトゼクター、彼は既にその力を得ていたのだ。

だが、彼はその事を皆に話す事は無かった。

何故か？　それは分からない。

双護は何故、嘘をついたのか？

「…変身」『ＨＥＮＳＨＩＮ』

電子音と共に彼の姿が変わっていく。

いやしかし、彼は嘘をついていないと言えばそうなのだろう。

彼は真由を助けたいという、愛情の想いを掲げカブトゼクターを呼んだ。

だが、それではカブトゼクターは彼の元には現れなかった。

だが、次に別の感情を掲げてカブトゼクターを呼んだ時、カブトゼクターは彼の所へやって来たのだ。

「・・・」

銃弾が発射され、命中するが何も感じない。

マスクドフォームの防御力は凄まじいな、双護は思う。

「キャストオフ」『Ｃａｓｔ　Ｏｆｆ』

真由への愛情ではカブトゼクターを呼ぶことはできなかった。
それは彼の中に愛情を上回る感情があったからに他ならない。

では、その感情は何か？

「クロック…アップ」『Ｃｌｏｃｋ　Ｕｐ』

破壊されていくゼクトルーパー達…

「・・・」

それは愛情ではなく…

「…チッ」

憎悪。

彼の体は本来のカブトのカラー、赤ではない。
黒になっていたのだった。

瞳も黄色になっている。
それは、憎しみの力でカブトゼクターを得たものが変身する物。

この世界では、それをダークと呼称した。

「・・・」

ダークカブトは物言わぬ残骸となったゼクトルーパー達を蹴り飛ばすと、ブレインタワーへと歩き出す

（真由…もし、お前がリコンファームを使うと言うのなら…）

その時は……

双護は唇を噛む。
思わず血が出るくらい強く

（気絶させてでも阻止する）

それがもしできないと言うのなら…

悪い――――

「死んでくれ、真由香」

ダークカブトはクロックアップを発動させその場から消えるのだった。

第123話　HATRED　SPEED　LOVE（後書き）

「おい馬鹿助手」

「なんですのん博士ぇ」

「今回の話数、何か気がつかないか？」

「は？　……ああ！」

「ふん、気がついたか」

「昼ドラ録画するのわすれっちゃった！！」

「・・・」

「マジかよ！　ありえんてぃ！
うわー！　やべって！

恋のマンゴープリン！　あれ楽しみにして――」

「話をきけぇえええええええ！」

「ひぇーん！」

「カウントダウンだらぉぉぉがあああああああ！」

……はい、次もよろしく！

第１２４話　ＦＲＩＥＮＤ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（前書き）

はい、更新ですね。
まあ次は……土曜かな

鏡治の前に現れたのは…？

ではどうぞ！

第１２４話　ＦＲＩＥＮＤ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ

「ううーんっ！　いい朝だなぁ！」

「おはよう…鏡冶君……」

「おう！　おはよう真由ちゃん！」

ギュルルルルルルルゥゥゥゥ……

「「・・・」」

流石におにぎりを半分ずつじゃ腹が減る。
もう有り金もゼロ、朝食は諦めるしか……

「ん？」

あれ？　何かあそこで光って――

「あっ！　あれはッッ！！」

鏡治はスライディングでその光を放つ何かに向かっていった。
そして、それが五百円玉だと言う事を理解する！

成る程、昨日は暗くて分からなかったが、
美しい朝日に照らされたそれは、まさに――――

「ダイアモンドゥ……」

「？」

「これで飯が食えるぜ真由ちゃん！」

「ほんとに！？」

二人は手を繋いでクルクルと回り始める。
二週目からはピョンピョン跳び始めた、相当朝食にありつけるのが

嬉しいのだろう。

結局バンザイをした時にすっぽ抜けて、
池に五百円を落とすまで二人のはしゃぎ合いは続くのだった。

しばらくはショックで防ぎこんでいた二人だが、いつまでも落ち込んで入られない。

二人は一緒に顔を洗って、身支度を済ませる。
真由を学校に送る為にはクロックアップで一気に行った方がいいだろう。

しかし街を通る事になる、街にはクロックアップを感知するセンサ

ーがついている訳だ。

無謀か？　鏡治は頭を抱えた。

他に方法があればそれにしたいところだったが、思いつかないのも事実。

しかしカプセルに乗っていなければそれこそ浮きまくりだ。

「うーん……」

悩む鏡治、そして幸か不幸か？

展開を変える要因がむこうからやってくる。

「！」

「…新意鏡冶、命令を無視するとはどういう事だ？」

公園の広場。
そこを挟んだ向こうに…その男、御剣神也が見えた。

茶色い髪に白いスーツ。間違いない、神也本人だ。
目の色が変わる鏡冶、すぐに真由を物陰に隠すと親友と対峙する。

「神也！　お前ッ…」

「鏡治、僕達は創英様の命令を無視してはいけない
…そうだろう？」

「ッ…？」

神也の様子がおかしい。
前のような無機物さが無く、今彼はニヤリと笑っているではないか。

『成る程、創英め……』

ガタックゼクターは直ぐに理解した。
創英はマインドコントロールの方法を変更したのだ。

感情を殺すのでなく、感情までも操るという事か。
相手の知り合いならばより効果がでる方法だろう。

「鏡治、お前があの少女をかくまっているのは知ってるんだ。
今すぐ渡すって言うなら…創英様もお許しになられるだろう。
いい話じゃないか？」

「ッ！　神也！目を覚ませ！　お前は操られてるんだよッ！！」

鏡治は神也に駆け寄るが、返事の代わりに返ってきたのは回し蹴りだった。
苦痛の声をあげて吹き飛ぶ鏡治を、神也はあざ笑うと再び鏡治を睨みつける
にらみ合う両者。友達との喧嘩……では終わらせてくれないようだ。

「鏡治、お前は余計な事を言わずにさっさと命令を実行すればいいんだよ。

真由と言う少女を殺すだけだ。

なあ、いいだろ？

親友が頼んでいるんだ、さっさと殺して帰ろうぜ？」

「――――んな…」

「あ？」

「ふざけんなッッ！　何だよ殺すって！？

真由ちゃんが何したって言うんだよ！！

お前、冗談でもそんな事言わないヤツだったじゃねーかッ！！」

鏡冶の言葉に神也は舌打ちで返す。
鏡冶はそれから神也に必死で呼びかけた。

元に戻ってくれる事だけを祈って、しかし変わりに何度も殴られ、
蹴りとばされてしまう。

「ガッ！　ふぅっ……ッッ！」

「ハッ、無様だな鏡治ィ！！」

『ＳＴＡＮＤ　ＢＹ』

「……うぅぅッッ！！」

電子音が聞えて鏡冶は後ろへ跳ぶ。
やはり、こうするしかないのか……

「命令に背いた裏切り者は……死ね。変身」『ＨＥＮＳＨＩＮ』

いつの間にか現れたサソードゼクターを、神也はサソードヤイバーへ装填する。

変わっていく肉体。
マスクドフォームに変わったサソードは、何の躊躇いも無く触手を伸ばして鏡冶に狙いを定める！

「くッ――ッ！！」

『鏡冶！』

しかしその触手をガタックゼクターは突進で吹き飛ばす。
一瞬バラバラになる触手、しかしすぐにまた鏡冶に向きを変えるのだろう。
もう迷っている暇はない！

『アイツは操られる！　それを忘れんなッ！』

「あ…ああ…ッッ！　行くぞ！　ガタックゼクター！」

鏡冶はベルトを出現させガタックゼクターを装填する。

「うぉおおおお！！　変身ッッ！！」『ＨＥＮＳＨＩＮ』

鏡冶の体がガタック・マスクドフォームへと変化する。
サソードはまたも舌打ちをすると、ヤイバーを構えて走り出した。

「少し痛いけど…我慢してくれよッ！　神也！」

ガタックはバルカンの照準をサソードに合わせる。
なんとか気絶させる事ができれば！

――しかし、その時だった。
サソードが両手を広げて地面に膝を着いたのは！

いきなりの行動にガタックは動きを止めてしまう。

今まで敵意をむき出しにしていたサソード。
しかし次に顔を上げた彼は、先ほどとはまるで別人の様に戦う事を拒否しはじめた。

「鏡冶ッ！　撃たないでくれ！
今、僕にダメージが入れば脳が破壊されてしまうんだ！！」

「し、神也!?　意識が戻ったのか!」

急に人が変わったサソードに、淡い希望を抱くガタック。

「あ…ッ、ああ!　一時的だが…何とかねぇ…!」

ガタックは急いでサソードの元へと駆け寄る。
大丈夫かと何度も呼びかけるがサソードは苦しそうに呻く。

なんとかして助けなければ、ガタックは必死にサソードに話しかけるが……

「きょ、鏡冶ィィッ!!　うわぁぁぁあああああ!!」

苦しそうにうめき声をあげる親友に、思わずガタックも取り乱してしまう。
心配そうに見守る真由、オロオロと動き回っているところを見ると彼女もパニックに陥っているのかもしれない。

広い公園だ。病院も近くには無い。どうすればいいのか――

「鏡治ィィィ！！」

「ど、どうしたんだ!?苦しいのか?」

ガタックはサソードの肩に手を当てる……

「お前は本当に甘いよ、馬鹿が」

「え――――ッッ」

沈黙。

二人は何も言わず、動かず、その場に佇む。

しかし、サソードの笑い声が沈黙を切り裂いた。
同時に地面へと倒れるガタック

「ククッ！　ハハハハハハ！　甘いんだよお前は」

「あッ――カァッ……」

サソードの頭部についている、サソリの尾を模した角から緑色の液体が滴り落ちる。
見るからに毒々しいその色は、その文字通り猛毒なのだ。
サソードの不意打ちによってガタックの体に毒が注入される。

「こんな、簡単な演技に引っ掛かるなんて…
それでもインセクト最強なのかい？　クハハハ！！」

「と…友…達……は、信じる……モン…だろうが…」

「ハッ、下らない」『Ｃａｓｔ　Ｏｆｆ』

『Ｃｈａｎｇｅ・Ｓｃｏｒｐｉｏｎ』

サソードは装甲を開放してガタックへぶつけていく。
声にならない悲鳴を上げるガタックをもう一度あざけ笑うと、思い切り蹴り飛ばす。

「グアアアアアっっ！」

「安心しろよ、せめて苦しまずに殺してやるからさぁ」

『Ｒｉｄｅｒ　Ｓｌａｓｈ』

「…！！」

剣を構えサソードはガタックに近づいていく。

しかし、その時だった――

「やめてぇッ…！！」

「！」

「あん？」

物陰から真由が飛び出してきて、ガタックをかばうように立つ。
少しの沈黙の後、またサソードは笑い出した。

こんな非力な少女に何ができるのか？

哀れで愚かな行為に嘲笑を、そしてこんな無力な少女に守られるガタックに失笑を投げかける。

「安心しなよお嬢ちゃん、二人まとめて真っ二つにしてあげるからさ。
せいぜいそれまで泣いて泣いて…

惨めに死ねよ」

そう言ってまた、サソードは笑う。
だが、その言葉がまさにトリガーだった。

「ウォオォオオオッッ！！」

「何ッ！？　馬鹿な！！」

ガタックは瞬時に立ち上がり、サソードに思い切り力を込めたタックルを決める。

驚きながら吹き飛ぶサソード。

その視線には猛烈な覇気を纏っているガタックが見えた。

第１２４話　ＦＲＩＥＮＤ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（後書き）

映画はあんまり……
って言うか全然サソード出てきませんでしたねｗ

では次もよろしく！

第125話　SCORPION　SPEED　LOVE（前書き）

はい、更新ですね。なんか軽い予告みたいなモノを
前書きにしていこうかなと

対峙するガタックとサソード

ではどうぞ！

第125話　SCORPION　SPEED　LOVE

「な、何故!?　毒が回って立つことすら難しいはずなのにッ!?」

「ハァッ…ハァッッ!　神也ァ!　お前…」

「くっ!」

完全に立ち上がり、ガタックはサソードに向き合う。
言われなければ、毒がまわっているなんて嘘の様に思えるだろう。

「お前は…ッ!　女の子には無駄に優しかったな…ッッ!!」

絶対に女の子に向かって死ねなんて言わないヤツだった。

でも、今のお前は何だ?
ガタックは一歩足を踏み出す。

全身に焼ける様な痛みが走り、思わず叫びそうになるが歯を食いしばって耐える！

「それがお前の限界か？　違うよなッ！
ああそうだ！　俺だってそうだった。
お前は俺より凄いヤツだ！　絶対に自我を取り戻せる！！
そうだろっ！？」

「…ッ！！　訳の…分からん……事をぉぉッッ！」

サソードは剣を振り回しながら立ち上がる。
だが、ガタックは剣を拳で受け止めると、素早くゼクターの角部分を弾いた！

「キャスト…オフッッ！！」『Ｃａｓｔ　Ｏｆｆ』

「グッ！！」

装甲が弾け、その衝撃でサソードの剣を弾き飛ばした。
サソードはすぐにクロックアップを発動させて剣を拾いに走る！

『Ｃｈａｎｇｅ　Ｓｔａｇ・Ｂｅｅｔｌｅ』

「クロック……アップッ！」『Ｃｌｏｃｋ　Ｕｐ』

ガタックはふらつきながらも、クロックアップでサソードと同じフ

ィールドへと立った。
剣を持ち直し構えるサソードにカリバーを一つ投げつける！

「チッ！」

サソードはそれを弾くと、眼前に迫っていた拳を片手で受け止める。
毒で弱っている筈なのに、その拳はとても大きく感じた。

「神也ぁッ！　どうしたよ？　俺の拳、弾いてみろよッ！」

「…ッッ！！」

手に力を込めるがガタックの拳はビクともしない。

何故だ！　サソードに怒りの感情が芽生える。
こんな弱々しいガタックに何故勝てない？
動かない拳、それは少し時間を掛けても同じだった。

「くぅッッ――――！」

「ウォオオオオオォオオッ！」

「死にぞこないがぁッ！」

ついにサソードは真正面から受け止める事をあきらめ、足を払う事を決断する。
剣で足を突けばいいだけの話、サソードは狙いを定める！

「逃げてんじゃねぇぞ！！　神也アァァアアっ！」

「何ぃ！？」

しかし、ガタックはそれを許さない！
声を出すだけで意識が飛びそうになるが、意地でも倒れるわけにはいかない。
歯を食いしばって、目の前にいる親友だけを視界にとらえる。

「神也ァ！　お前は逃げない男だった！　まっすぐなヤツだった！
思い出せよ！　それで俺をぶちのめせッ！
何、諦めてんだ！？
何妥協してんだよ！　オイッッ！」

何なんだコイツは、サソードの心の中に得体の知れない恐怖感が生まれる。
だが、同時に何かが込み上げてくるのを感じた。
これは危険だ！
サソードはガタックとの距離を空ける事を決意する。

「逃げんなッッ！！　神也！」

「くッッ！　なんだこれはっ！」

逃げるな。
その言葉が異常に引っかかる、逃げてはいけない。
そんな想いが自分の中を駆け回る！

「何で俺の拳が弾けないか分かるか？
それはな、今のお前がお前じゃないからだよッ！
本当のお前ならこんなのすぐに弾けただろうが！
忘れちまったのかよッッ！！」

「う、うぜぇんだよぉおおおおッ！！」

動けない！

どんどん何かが込み上げてくる！

マズイ！　このままでは――ッ！

「お前は…誰だッ！」

「ッッ！！　何ぃィ…？」

「お前は誰だって聞いてんだよぉぉぉぉオオオオッッ！！」

ガタックはサソードを投げ飛ばす！

だが、ここで限界がきたのだろう。
ガタックは糸の切れた人形のように地面へと倒れ、そのまま変身が解除されてしまった。

「あぐぅぁ…がぁぁあ……ッッ！！」

「鏡冶君！！」

苦しそうに呻く鏡冶。
真由は必死に鏡冶に呼びかけるが、鏡冶の体に回る毒は強力。

このままでは死んでしまうだろう。

『クッ！　おそらくサソードゼクターの中に解毒剤があるはずなんだが…』

「！」

それを聞いた真由はサソードに向かって頭を下げた。
止めようとするガタックゼクターを振り切ると、真由はより深く頭を下げる。

「お願いです…鏡冶君を助けて……ください！」

「ッッ！！」

サソードはフラフラと頭を抱えてうずくまる。
僕は…誰だ？

「神也くんは鏡冶くんのお友達なんでしょ…？　お願いします…！
どうかお友達を助けてください……！」

「うぐぅぁあああ…」

真由の透き通った声が神也の頭に響き渡る。
鏡冶は顔を真っ青にしながらも、もう一度呟いた。

お前は、誰だと。

「ぐうぅううう！！！　僕はッ……」

「…あなたは…だぁれ？」

神也の目が見開かれる。
そしてフラッシュバックのように今までの記憶が蘇ってきた。
目の前で苦しんでいる男は…誰だ？

ああ、そうだ。友じゃないかッ！

「僕は…僕はッ！　神也、御剣神也！」

「え…」

「ふっかぁぁぁぁぁあーつ！」

「わ！！」

サソードは勢いよく立ち上がると、そのまま変身を解除する。
そして直ぐに鏡冶のところへ駆け寄ると、その肩を揺すりだした。

「クッ、鏡冶…真由さん。
すまない、僕は何て事を…

サソードゼクター！」

『ミーの尻尾に解毒剤があるでございます！』

ピョンピョンと跳ねてくるのはサソードゼクター。
彼もまた妨害電波を流していたゼクターであり、
そのおかげで鏡冶と真由の説得が神也の自我を取り戻すきっかけになったのだった。

「鏡冶くん…ッッ！」

今度は自分が助ける番だ。
真由は祈るように鏡冶を見詰めるのだった。

「ゲホッ！がはっぁ！」

「鏡冶…君っ！」

『「鏡冶！」』

『鏡冶さーん！』

「・・・」

鏡治が目を覚ますと、自分を囲んでいる真由達の顔が見えた。
彼が意識を取り戻したのを知ると、真由は安心したように微笑む。

「…よかった」

安心したのか、真由の瞳から涙がこぼれる。
そしてその場にへなへなと座り込んでしまった。

鏡治は自分の状況を悟ると、真由に向かって微笑み、涙を拭いてあげたのだった。

そして目の前にいる親友と目を合わせると、互いにニヤリと笑う。
もう一度鏡治は拳を突き出してみる。

すると、それを神也はしっかりと受け止めて弾くのだった。
よく分からない友情表現に真由はクスリと笑い、また笑顔に戻る。

「お互い大変だったね。鏡治」

「ああ、そうだな。神也」

二人は苦笑すると、真面目な顔になる。
これで終わりじゃない。ここからが本番なのだろうから――

『お前、他に妨害電波を流しているゼクターを知ってるか？』

『ミーが知る限りではドレイクゼクターさんしかいませんですね。
後の皆さんは運命に身をゆだねたそうです』

ガタックゼクターはため息をつく。
想像以上に少ないな、ドレイク以外は実力行使しかないのかもしれない。

ホッパーブラザーズとザビーゼクターは創英派と言う訳か…

意見が割れる、これもまた人間らしい事だ。
そんな事を考えながらガタックゼクターはこれからの事を考えてい

た。

『考える』と言う行為もまた、そうなんだろう。
もう自分はただの虫ではない。不思議な気分だ――

『友達同士が戦う世界なんていけないんですね！
ミーは創英さんのお考えにはもうついていけません！』

「こっちもいい迷惑だよ。
鏡治、とりあえずココを離れたほうがいい。
僕、結構お金持ってるから貸すよ」

「ああ、ありがとう！　助かるぜ神也！」

神也は街にあるセンサーを破壊してくれると言った。

とり合えずは別行動だ、まだ創英は神也が裏切った事を知らない。
盗聴機が壊れたのは戦闘で……とでもいい訳できるだろう。

尤も創英はそんなに馬鹿じゃない。
気づかれるのも時間の問題なのかもしれないが

そして、それはゼクトルーパー達も……という事。
だからとにかく一緒に行動するのはマズイ、
かくまってくれる場所とインセクトの情報を渡すと神也は鏡冶達から離れる事を決める。

「死ぬなよ、鏡冶」『お気をつけてー』

「当たり前だ！」「じゃあね…」

二人はもう一度拳を合わせると、笑顔で別れたのだった。

第125話　SCORPION　SPEED　LOVE（後書き）

はい、説明を

ゼクターは喋る事はできますが
ベルトに装填されると会話機能は失われます。
変身すればサポートは受けられないって事ですね

まあ、今回はこんなもんかな
では次もよろしく！

第１２６話　ＨＯＴＥＬ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（前書き）

はい更新です。
次は……いつかな、すいません未定で御願いします

鏡治達は一旦ホテルへと逃げる事に……

ではどうぞ！

第126話　HOTEL　SPEED　LOVE

『これからどうするんだ？』

「神也がセンサーを破壊してくれるまではホテルで隠れる。
できれば他のインセクトの洗脳も解除したいな。

いや、してやるッ！」

鏡治は真由の手を引いて公園から離れる。
もうこの場所がばれている以上、長居は危険だ。
神也に教えてもらったホテルまで走る事にした。

しばらく街の中を隠れながら進んでいき、ホテルへ無事にたどり着

く事ができた。
途中何度も徘徊しているゼクトルーパーに見つかりそうになったが、なんとか回避してここまでやってくる。

ホテルはそれなりに大きく、神也の話をだすとそれなりに大きな部屋を貸してくれた。

「アイツ、金持ちだからなぁ…」

「すごーい！　すごーい！」

聞いた話では、神也を泊める事がホテルにとって大きなステータスになるらしい。
その友達ともなれば、断るわけにはいかないと言うわけか……
しばらく神也も洗脳されて家に帰っていないようだから、きっと両親も心配しているだろう

「でも、神也くんはすぐに目覚めてくれてよかったね……」

『いや、そう言う訳でもないかもしれないぞ。真由』

「？」

ガタックゼクターは真由の肩に着地する。
神也は簡単に洗脳が解けた様にも思えるが……

妨害電波があり、親友が相手と言うなによりの事もあった。

『友達と争うのはとても辛い事……だよな？』

「うん……そうだね」

エレベーターが目的の階についた様だ。
鏡治達は案内の通りに進む。

「きゃはははは！」

部屋についた途端、真由は楽しそうにベッドをトランポリンにして遊んでいた。

「鏡冶君もやってみなよ…ッ！」

「え？」

いくらまだ場所が割れてないとはいえ安心しきるのは危険だ。
ガタックゼクターは少し外を見回る。
とりあえず異常は無いようなので、部屋へと戻る事にした。

『このホテルの周りにはゼクトルーパー達はいなかった――
ぞ…』

「楽しーッ！　うおおおおお！！」

「きゃはははは！！」

ぼよよーん！　ぼよよーんッ！

『・・・おい』

「え？」

固まる鏡冶、夢から覚めたように彼は冷静になるとゆっくりベッドから降りた。
尚も楽しそうに跳ねている真由を達観したように見詰めると、ソファに腰掛ける。

「……」

ふと、鏡冶は冷静に考えてみる。
いくら中身が少し幼いとは言え一応同年代の男と女が同じ部屋に泊まるのは…

これ、いかがなモノだろうか？

真由の家族もそんな事許さないだろう。

鏡治は冷静に頷くと部屋を出て行こうと決める。

「…どうしたの？」

「真由ちゃん、俺…外にいるよ。
なんかあったら呼んでくれよ？」

「どうしてお外にいるの？」

言葉につまる鏡治、素直に言ってしまおうか？
それがいいな、少し迷って鏡治は今思った事を真由に告げる。

尤も真由がその意味を理解するかどうかは別としても、

やはりあまりよろしくないと、しっかり教えるべきだろう。

真由は暫く首をかしげながら鏡冶の話を聞いていたが、
つまり鏡冶が部屋をでていくという結論だけ把握すると、とても寂しそうな顔をした。

涙を目に溜める真由、鏡冶の良心が揺らぐ！

いや、おかしいだろ、逆だ逆！

ここを出て行く方がいいんだ！
鏡冶は首を振ってドアノブに手をかける。

しかし、それを真由が制した。

「!?」

「ねぇ、ボク…気にしないよ？　だから…一緒に遊ぼう？」

「う…うぅん、でもなぁ…
やっぱりご両親とかお兄さんの事考えると」

「・・・」

真由は、うつむいて小さく呟いた。
その顔はとても寂しそう……

「わかった……」

「あ、ありがとう真由ちゃん。
俺、外にいるからさ。別にいなくなったりしないからな？

だから何か用があるなら言ってくれよ」

「…うん」

そう言って鏡治は外に出て行く。
真由はそれをまた寂しそうに見送ると、枕に顔を埋めて沈黙するのだった。

「・・・」

とは言ってみたものの、やはり気になるというのが現実である。
外の廊下にはソファがあり、鏡治は暫くそこで座っていたが……

どうにも真由が心配になってきてしまう。
先ほどまでは楽しそうにはしゃいでいた真由の声が、今は全く聞こえなかった。

鏡冶はつい扉に耳をあてて中の様子を確かめようとしてしまう。

「…なんか、静かだな」

『ストーカーは犯罪だぞ鏡冶』

「うっ！」

そりゃそうだ。

鏡冶は目を閉じてソファに座った……

だが落ちつかない！

真由ちゃんは大丈夫だろうか？

もしかしたら何か困っているのかもしれない！

ああ、でも困ったら言えって言ってあるからな…

いやだがまて、もしかしたら助けを呼べない状況に陥っているのかもしれないッ！

うおおぉおおおおぉっっ！！
それはいけない！　真由ちゃんを絶対に学校に送り届けると誓ったくせに
みすみす危険にさらすなんてッッ！！

どうする新意鏡冶、ここはさりげなさを装って様子を見てみるか？

うんそうだな。それがいい

「ああ、そうだな。よ、良しッ」

『・・・』

「そんな目で見るな！　こ、これは真由ちゃんが心配なだけだぞ！」

ガタックゼクターの冷たい視線を振り払い
鏡治はドアをノックする。

「どうしたの！？」

中から現れたのは笑顔の真由。
鏡治はホッと息を吐く。

大丈夫そうだな、やはり心配のしすぎか

「あぁ、いやぁ困ってなければいいんだ、じゃあまたな」

「・・・」

笑顔でドアを閉めようとする鏡治、
しかし真由の表情は一変して暗くしぼんでしまう。

「ぅ……」

「？」

真由は肩を落としてソファに戻っていった。
鏡治は少し……どうしても気になってドアを少しだけ開けて観察してみる。

目に入ってくる光景。
真由はソファに体育座りで座ると、寂しそうにテレビを見ていた。

「・・・」

『お前、本格的に危険だな』

鏡治はガタックゼクターを軽く叩くと、意を決してドアを開く。
そしてそのまま一気に真由の所まで走っていき、勢いよく飛びついた！

驚く真由に鏡治はニヤリと黒い笑みを浮べ、手を伸ばす！

「元気がない子はこうだ！　こちょこちょ！」

「！！！」

鏡治は真由の体をくすぐっていく。
直ぐに笑い始める真由。

「ふにゃふにゃ！」

「ホレ！　こちょこちょこちょ！」

「キャハハハハ…もうッ…やめてぇ……！」

笑顔になった真由を見て、鏡治は手を離す。

そして笑顔で真由に話しかけた。

広い部屋だ、一人じゃ確かに味気が無い。

「やっぱ、俺もこの部屋にいていいかな?」

「・・・!」

「何かして、遊ぼっか?」

「う…うん!」

真由は満面の笑みを浮かべると、首を大きく振るのだった。

『・・・』

「いやッ、あの……ゴミを見るような目はやめてください」

しばらく真由と遊んでいたら、神也からゼクターを通して連絡がきた。
内容は大きく分けて三つ。

一つ目は、創英のマインドコントロールを行う機械が予定より早く完成しそうという事。

もう一つはこの近くにドレイクがやってくるという事だった。

最後にセンサーはまだ残っていると鏡冶に伝える。

「……ドレイクか、
妨害電波を流してくれているらしいから、助けられるかもしれない」

「・・・」

確か、神也の話しではドレイクに選ばれた風島和希（かざしまかずき）と言う人物はファッションデザイナーだと聞く。自分はこう言う話には疎いが、神也の話によればそこそこな成功者らしい。

しかし、その夢を追っている途中に創英によってインセクトにされたと言う訳か…

他人の夢を邪魔してまで、創英は自らの野望を達成しようと言うのか。
しかし、どうだろうか…神也は知り合いだったからこそ自分の言葉に耳を傾けてくれたが、自分は風島和希とは何の面識もない。果たして上手くいくのか…

「！」

部屋においてあった雑誌を適当にめくってみると、
彼がデザインしたという服が載っていた。
彼は洗脳されなければ今ももっといろんな服を生み出していただろうに

「…ッ」

「鏡冶くん…あのね」

「え？」

真由は少し不安そうに鏡冶の服をつまむ。

「ボクは…どうしてればいいの……？」

「え？　真由ちゃん…は、ここで待っててくれると…」

真由は小さく頷くが、表情は暗い。
その意味が、なんとなくだが鏡治には理解できた。

「…ボク――」

「真由ちゃん、外は危険だから…
どうか分かってくれ」

「う、うん。ごめんね…」

きっとついていきたいのだろう。
なんとなくそう思って声を掛ける。

真由も分かってくれた様なので良しとしよう。
さすがにクロックアップを発動されてしまえば真由を守りきれる自信はない。

真由だけは守りたい、鏡冶は心を鬼にして真由を部屋に残すのだった。

「あのっ、鏡冶くん…」

「ん？」

「その人はね…お洋服が好きなんだよね」

「え？」

鏡冶は手に持っていた雑誌を見て、
真由が風島の事を言っているのだと理解する。

確かにそうなのだろう。

きっと風島は服が、この仕事に誇りを持っているのだと悟る。

「じゃあ…あのね……ちょっとイジワルなんだけど…」

そう言って真由は思いついた作戦を言ってみる。
自分がされたらとても嫌なことだろう。

「そ、そうか！」

成る程、確かにこの作戦なら…！

「いけるかも！　うおおおっ、真由ちゃん、ナイスだぜ！

ああ、そうだ。最高だッ！！」

鏡冶が笑顔に変わるのを見ると、真由も満足そうに微笑んだ。
役に立てて嬉しい。
真由も自分が守られるだけなんて嫌だったのだろう。
少しでも何か力になりたいと思っていたのかもしれない

鏡冶はその作戦を遂行するため、ガタックゼクターに通信を頼む。

「もしもし？　神也か？
ちょっと悪いんだが用意してほしいモンが――」

第１２６話　ＨＯＴＥＬ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（後書き）

とりあえず今期のアニメを一通り見ました。
どうかな、気に入ったのはＺＥＲＯ、Ｐ４、ＷＯＲＫＩＮＧ′！！

…辺りかなｗ
結構コンビで戦う感じの作品が好きですかね

ガッシュは最高でした。

まあいいや、ではこれで。
次もよろしく！

第１２７話　ＣＯＯＰＥＲＡＴＩＯＮ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（前書き）

はい、更新です
次は…まあ水曜か木くらいかな

ドレイクとの対峙

ではどうぞ！

第127話　COOPERATION　SPEED　LOVE

「・・・」

「ガタック、見つけたぞ…変身」『ＨＥＮＳＨＩＮ』

ホテルの近くにある広場で、ガタックとドレイク。
マスクドフォームの二人は対峙し合う。

互いに飛び道具を所持している為、どちらかがいつ発砲するのか。
そしてその隙をつけるんかどうかが大切だろう。

だがしかし、それは唐突だった。

ガタックが変身を解除したのだ。
なんのつもりなのか、ドレイクは銃を構える。

「！」

マインドコントロールを受けているにも関わらず、ドレイクの手が止まった。
そう、変身を解除して現れたのは鏡治。
何もおかしい事はない。ドレイクは簡単に鏡治を射殺できただろう。

しかし問題はその鏡治の服装だった。
見覚えがあるなんてものではない。

それは自分がデザインした…！

「風島さん！　この洋服、見覚えありますよねッ！」

「・・・」

そう、風島和希デザインの洋服。
自分が情熱を、想いを注いだ作品が目の前にある。

ドレイクの心が激しく揺れた、銃を構える手が震える。
そうだ、今無防備な鏡冶を撃てば任務を完了できるだろう。

だが、それは自分の洋服を撃つ、血に染めるという事でもある。

誇りなのだ、自分の証明でもあった。

努力、希望、夢、挫折、喜び、悲しみ、誇り。
なにより…魂がある。
アレを、撃つ？
それは今までの自分を否定する事ではないのか？

気がつけばドレイクは銃を地面へと落としていた。
いつからだろう？　何か、大切な事を忘れていたのは…

「風島さん、いや…貴方は、誰ですか？」

「あ…」

ドレイクは変身を解き、その場に倒れ込む。

俺は誰だ？

「貴方はッ、人を傷つける銃を構える男ではなくッ！

人に喜びを着せる男だ！

そうでしょうッ！　風島和希さん！！」

「！」

風島の眼に光が灯った。

そして、彼はまっすぐに…

凛とした瞳で立ち上がる。

「そう……だな。俺は銃を向ける仕事じゃなく、服を作る仕事してるんだよな」

『……目覚めましたか、風島さん』

彼の横を飛ぶのはドレイクゼクター。

彼もまた妨害電波を流していたゼクターだ。

つまりはもう戦う事もない、鏡冶は安心したようにその場に座り込んだ。

真由が立ててくれた作戦は成功だったようだ

「はぁ……

っしゃあああああ！　やったぜ真由ちゃんッ！」

鏡治はその場に倒れると、拳を空へと突き上げたのだった。

『ミーはいっその事、皆でブレインタワーに乗り込んだほうがいいと思うのです』

『いや、少し前に僕達とは違うインセクト達がやってきましたが、

電磁バリアの前に撤退した模様です。
はやりブレインタワーは防御が堅い、僕達だけでは無理でしょう』
違うインセクト？
ガタックゼクターはそのことをドレイクゼクターに問いかける。
どうやらやってきたのはディケイド達の様だ、真由が捕まっていると思っているのだろう。
一刻も早く真由を学校に届けなければ……
それと、もう一人インセクトが来たらしいが、その情報は全くと言っていい程無かった。
どうやらそのインセクト……
つまりライダーもブレインタワーの前に屈したのだが……
『どちらかと言うと鏡治の叔母に協力するべきだな。
創英は確かマインドコントロールの機械をもうすぐ完成させるんだろう？』

ガタックゼクターの言葉にドレイクゼクターは頷く。
部屋に緊張が走る。

『大規模洗脳装置、通称『赤い靴』
童話の通り足首を切られない限り自分の意思とは裏腹に動いてしまう。
つまり創英さんの言いなりになるように洗脳されてしまうのですよ』

ホテルでは洗脳を解除された契約者とそのゼクター、真由が話し合っていた。
神也も収集命令を何度も無視している。
そろそろ、いやもう裏切った事がばれただろう。

神也は発信機を完全に破壊するとホテルに身を潜めた

「俺ももう壊してしまったからな、創英は気づいただろう」

「でも、もう三人も裏切ったと知れば創英さんも焦るんじゃねぇかな？」

鏡治の言葉にドレイクゼクター同意する。
赤い靴が発動しようが、まだ創英にはリコンファームや自分達。

そして何より真由達の仲間がいる。

今、創英は非常に焦っているだろう。

まして、赤い靴を破壊するという直接的な手段もある。

『ですが、それは反対に手段を選ばなくなる…と言う事でもあります。
もう創英さんは全力で邪魔な僕達を消そうとするでしょうね』

『それで、ホッパーブラザーズも動いてくれればいいんだが…』

三人と三体はため息をつく。
街の人間にカプセルから降りろと言っても聞かないだろうな、それ
ばかりか何とかする機械を作れといわれるに決まっている。

「実は、もう僕は言ってみたよ。
鏡治の言う通りだったけどね結果は……
ちょっと僕も創英の気持ちが分かったモンさ」

「でも、それで創英さんのやろうとしてる事を認めちゃならねぇ！
うおぉおおおお！　絶対認めねぇからなッ！！」

三人は頷く、なんとかして創英のやろうとしている事を止めなければ……

やはり赤い靴の破壊が一番か、
リコンファームを使わなくとも元を断てばいい話だ。

「それに、まずはとにかく真由ちゃんを学校に帰してやりたい。
きっと皆だって心配してるだろうしな……特に、お兄ちゃんとか」

鏡治は真由に微笑みかける、真由もそれを見てニッコリと笑った。

「よし、じゃあまずは真由ちゃんを学校へ送ろう。
センサーはまだ残ってるかもしれないけど、一気にクロックアップで駆け抜ければ…」

だが、ここで一つ問題が浮かぶ。
真由は学校の場所を覚えていないのだ、それではどこに連れて行けばいいのかすら――

『このホテルからは見えないのですか？』

「ん……どだろ…」

その提案に乗ってみる。
最上階に行き、窓から学校が見えないかどうかやってみる。

「あ！」

しばらくは悪戦苦闘していたが、ついに見つけることができた。
尤も、真由以外はその学校を確認する事ができなかった。
感じられない、存在さえしない様に鏡治達には見えただろう。

だが、そこに存在しているのだ。
不思議な話である。

ともあれ、目的は決まった。それぞれは頷き立ち上がる。

しかし、外を見てみればもう大分暗くなってきた。
闇に隠れて動けるのは利点ではあるが、逆にゼクトルーパーはかなりの擬態力を持ってしまう。

視界が制限されてしまうのは厳しい。
一旦今日は休んで明日、決行しようと言う事になった。

「俺はＢＡＲにでも行ってくるかな、お子様はさっさと寝ろよ」

『では、おやすみなさい』

そう言って風島とドレイクゼクターは部屋を出て行く。

「ひゅー！　大人だねぇ！　なあ神――」

「ＺＺＺＺＺＺＺ……ウゴッ……」

『もうミーは食べられないでごんすぅ…ＺＺＺＺ』

「・・・」

『なんでもう寝てんだよッ！　数秒前まで起きてたじゃねぇか！
なんで機械のアイツまで寝てんだよッ！
なんで床で寝てんだよぉぉッッ！！
おかしいだろぉぉがぁぁッ！』

鏡治は苦笑して神也をベッドまで運ぶのだった。

バルコニーでは真由が空を見上げていた。
相変わらず月も星も見えない空、真由はその空をじっと、ひたすらに見つめていた…

「どうしたんだ真由ちゃん。さあ、中に入ろうぜ？」

「……ん」

しかし、真由はその言葉には従わずバルコニーに備えられたベンチに腰掛けた。

鏡治は少し戸惑ったものの、頷き真由の隣に腰掛ける。

「ねぇ…鏡治君。ボク…心配されてるのかな」

「え？」

「ボクね、ママがいないの……小さい時に死んじゃったんだって」

「え…」

「それでね…パパにも…愛してもらえなかったんだ……」

真由は寂しそうに、小さく呟いた。
彼女の胸にあった悲しみ、それを鏡治に打ち明けると言うことは
何よりもの信頼の証。

鏡治はそれを感じて嬉しくもあったが、同時に胸が苦しくなる。
もう少しで、目の前の彼女を殺めてしまうところだったのだ。
その重さが改めて鏡治の心を打つ、重大さを認識させる。

「パパに言われたの…お前は……」

真由はそこから先の言葉をいえなかった。
代わりに眼からは大粒の涙が溢れ、地面に落ちる。

唇をわなわなと振るわせる彼女はとても弱々しく、儚く、寂しげだった。
ほんの一瞬眼を離したら…消えてしまいそうな。
弱い炎のような少女、鏡治はその炎を消したくないと、切に思う。

彼女は父に何を言われたのだろうか？
きっとそれは悲しい事、辛い思い出なんだろう。

「真由ちゃん！　君が何を思っているのか、俺には分からない。
俺と君は出会ってまだ二日くらいの関係だからね。
でもね、真由ちゃん……君のお兄さんや、お友達は違うよな」

「え…」

「お兄さんや友達は真由ちゃんと、たくさんの時間を過ごしてきた。
俺は分かる、いや誓ってもいい。
君のお父さんがどうなのかは分からない。
もしかしたら君に酷い事を言ってしまったのかもしれない。
でもね、君のお兄さんやお友達は本当に君の事を大切に思っている。絶対に！」

でなければ、あんな顔はしない。
自分が彼らと戦った時の記憶がよみがえる。
震える足、ああ…自分は本当になんて事をしてしまったんだ。
何をすれば償えるのか、どうすればいいのか
洗脳されていたんだから仕方ないと思う心もある。
だけど、もし……もし仮に誰かの命を奪っていたら――

自分は、どうしていたんだろう。

「…本当？」

「ああ！　約束するぜぇ！
だって、お兄ちゃんは家族じゃないか！」

そう言って鏡冶は真由の頭を撫でる。
真由は静かに微笑むと、目を閉じて鏡冶にもたれかかった。
目が半開きになって時々力が抜けてる所を見るに、もう眠いんだろう。

「あぁ、そう言えば神也の時、ありがとうな」

「え…？」

「真由ちゃんが協力してくれたからアイツの自我を取り戻すことができたんだ。

ああ、そうさ真由ちゃんのおかげだ！」

「うん…ありがとう、鏡冶…くん……」

「おうっ！」

「……」

「あれ、寝ちゃったか…」

鏡冶は頷くと、真由をベッドに運ぶのだった。

第127話　COOPERATION　SPEED　LOVE（後書き）

いや、しかしね大文字さんマジぱねぇっすわｗｗ
曲のタイミングといい、カッコよかったです

いやーアレはずるいなｗｗ

Ｐ４とかもそうですけど
音楽の力はやはり魅力を増やしますね

この作品も皆さんのたくましい妄想力で
ＢＧＭと挿入歌をバシバシかけちゃってくださいｗ

ではこれで、次もよろしく！

第１２８話　ＢＯＸＩＮＧ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（前書き）

はい、更新ですね
まあ次は土曜かな

「真由を学校に運ぶ……が」

ではどうぞ！

第128話　BOXING　SPEED　LOVE

翌日、空は深く濁っていた。

曇天、雨は時間を重ねる毎に勢いを増していく気がする。
こういう日はあまり外に出たくない気分になる。
だが我がままは言っていられない、早く真由を学校へ届けないと……
それだけが心の中で燻っていた。

「じゃあ、行くぞ」

「「はい！」」

風島の言葉に鏡治達はうなずく。
真由は鏡治に抱えられており、不安と期待を混じらせた表情を浮べ

る。
学校に帰れる。兄に、皆に会える――――かもしれない！

「「「変身！」」」

三人は変身してキャストオフ、クロックアップを発動させる。
そして一気に走り出した！

雨粒は球体のように見え、真由は今まで見た事のない世界を体感する。
永遠に見える美しい世界。
しかし一瞬で儚い世界だ。

「！」

少し走って、本格的に街に入ろうとした時だった。
前に一人のインセクトがたたずんでいる。

パンチホッパー！

「クッ、ゼクトルーパーもいる可能性が高いな！」

「どうするんだぁい？　鏡冶！」

三人はすこし減速して作戦を立てる。

向こうはこちらに気がついている？　いない？

一瞬の判断ミスが命取りになる。

それを判断してか、鏡治はすぐに決断をする――

「…ッ、風島さん！　真由ちゃんをお願いします！」

「！」

ドレイクは一瞬、考えた後に頷く。
そして真由をガタックからあずかった。

鏡治を囮として置いていく。
抵抗はあったが、迷っていられるほどの時間は無い。
その作戦を受け入れ、サソードとドレイクは決断する。

真由はガタックに向かって手を伸ばすが、
すぐにガタックの姿は小さくなって見えなくなってしまった。

「・・・」

「・・・」

対峙し合うガタックとパンチホッパー。
神也と風島からの情報によると、パンチホッパーに選ばれたのは山内俊英、
ボクサーになるのが夢だった高校生らしい。

自分とは違ってリアルに夢を追いかけていた俊英、その姿勢に尊敬を抱かざるをえない。

だからこそ鏡冶は、その夢を諦めてほしくはなかった。
そして何より、思い出してほしかった。

ガタックはカリバーをその場で投げ捨てると、拳を構える！

『Ｃｌｏｃｋ　Ｕｐ』

パンチホッパーもまたそれを理解したのか、構えをとった。
開戦だと言う事、ホッパーは妨害電波を流してはいないらしい。
多少乱暴だが、実力行使しかあるまい。

「行くぜ俊英ぃいいいいいいいい！
俺の拳を超えてみやがれぇえええッッ！！」

雨粒を切り裂き、ガタックはその拳をパンチホッパーに叩き込む！

「ッ！」

だがパンチホッパーは、それを簡単に受け止めると

反撃の一発をガタックへと叩き込んだ！

「ッ！！」

重い、自分と体格の変わらないパンチホッパー。
なのに何て重い拳なんだ――

まるで巨木にぶつかった様だとガタックは呻く。
ゆれる視界、ふらつく世界にさらに数発叩き込まれる。

倒れそうになる体を叱咤し、ガタックは踏み込んだ。

突き出された拳を体をひねるようにして回避すると、
お返しにそのままストレートをパンチホッパーにぶち当てた。

「・・・」

こちらもまた倒れそうにこそなるが、踏みとどまりすぐに反撃をしかけてくる。
両者の拳は互いにぶつかり合い。

激しい衝撃を生み出す！

「ヘッ！　すげぇパンチだ！
効いたぜぇえええええッッ！！」

「・・・！」

「グッ！！」

アッパーがガタックの顎を揺らす。
続いて右フック、左のジャブで連打していくパンチホッパー。

ガタックの上半身は激しいダンスを踊るかの様に舞っていた。

「うぉおおおおおおおお！！」

ガタックが苦し紛れにだしたパンチを体を思い切り反らし回避すると、そのまま渾身の一撃を叩き込んだ！

「うっ…ガフッ！！」

『『Ｃｌｏｃｋ　Ｏｖｅｒ』』

ついに倒れるガタック。
パンチホッパーは止めを刺そうと必殺技を発動する

『Ｒｉｄｅｒ　Ｐｕｎｃｈ』

「…ああ、すげーパンチだ。やっぱ努力してる人の拳はでかいな…」

ガタックは素早く立ち上がると、また大きく振りかぶり殴りかかろうとする。
だが、ライダーパンチの前では無力と言ってもいい。

ガタックは押し合いすらできずに吹き飛ぶと、そのまま鏡冶へと変身が解除された。

『おい！　大丈夫か！？』

「ああ…ッ！　問題ねぇよ！」

鏡冶はガタックゼクターに合図を送ると――

そのまま尚、拳を構えた。

驚くゼクター。当然だ、生身で勝てるわけがない。
死ぬようなものなんだから。

だが鏡冶はあくまでも笑っていたのだ、それが余計不思議で仕方がない。

「ボクサーの拳ってのは凶器なんだろ？」

『？』

挑発的な笑みを浮かべる鏡冶。
もちろんパンチホッパーはそんな事を気にする素振りすら見せずにコチラに向かってくる。

だが、数歩歩いたときだった――

「・・・」

パンチホッパーの動きが止まる。
鏡冶はそれを見計らったかのようにもう一度笑うと、大声を上げて言い放つ。

「ああそうさ！　ボクサーには誇りがある！
振るうのは凶器じゃない、魂だッ！

それが許されるのは…試合だろうよッ！！

そうだろ？　俊英ぃいいいッッ！！」

「・・・」

パンチホッパーはなんの前触れも無く、唐突に変身を解く。
まさにノーリアクション。動揺の素振りも、何も見せずもう一度拳を構える。

『なッ！？』

『これは……』

弾かれたホッパーゼクターは体勢を立て直すと、俊英を見る。
別に妨害電波をながしていた訳ではない。
現に今も洗脳は続いており、命令である鏡冶を殺すと言う事を純粋に遂行しようとしている。

――にもかかわらず俊英は変身を解除した。

何故だ？

『試合は対等に行うものだからな』

『なに……？』

ガタックゼクターは素早くそれを理解した。
俊英は生身である鏡冶に合わせる為に、自らも変身を解いたという事か……

これは戦い、ケンカじゃない。
ケンカじゃ拳は使えないからだ。

彼にとってはこれは試合、向こうが生身ならフェアプレイには変身を解除する必要がある

『完全に洗脳されているというのに……』

『これが人間の底力なのかもしれんぞ』

ホッパーゼクターはガタックゼクターの言葉に沈黙する。
過去に人間に協力した時は確かにこのような人間が多かった。
限界と言う物を知らぬ不思議な存在。

そんな人間に期待を覚えてしまっていた。

だがそれは過去の話。
今は皆、救いようのない馬鹿ばかりと思っていたが…

『俺達は……焦ってしまったのかもしれないな』

『・・・』

目の前では生身のまま二人が殴りあっている。
それを見て、ホッパーゼクターは何を思うのだろうか…？

「ウラァアアアアアアアっっ！」

「・・・」

鏡治はよろける体を起こし俊英を殴りつける。
大きく仰け反る俊英にもう一発拳を、魂を打ち込んだ。

「・・・ッ」

「ゴフッ！！　づっアアアアアア！！」

俊英も負けていない。
ステップと激しい連打で鏡冶を押していく。

舞い散る血が雨に溶けて消えていった。
雨が二人の体を冷やしていく、だが反対に彼らの心は一撃を受ける度、一撃を与えるたびに熱く燃えていく。

「お前の力はそんなもんかよぉおおおッッ!!

ウラアアアアアッッ!」

「・・・ッ」

鏡冶の右フックがクリーンヒットする。
打ち込むごとに俊英の瞳の奥が光るのは気のせいだろうか?

いや、そんな余計な事を考えるのは無粋だろう!

ただ、切に打ち込む！

拳を――――ッ

魂を――――ッッ

叩きつける！！

その様子を二体のゼクターはただひたすらに見つめていた

『焦った…？』

『ああ、今この世界には堕落した人間しかいないと決め付けていた…

愚かなのは、俺達も同じじゃなかったのか？』

『ゼクターは人間の道具、それを忘れ感情的になってしまった…
僕達が愚かか…』

『いや、そうじゃない。
創英も、俺達も…見失っていたのさ。
人間という存在を』

『…人間か、不思議な生き物だ』

「うぉぉォオオオオオオオオオオオッッ！！」

「・・・」

鏡治の拳がしっかりと俊英をとらえた。

決める！

鏡治は大きく踏み込んで持てる力の全てを拳へ込める！！

「――――お……」

『『！』』

自分から声なんて出さない筈なのに――

「……ぉぉおおおおおおおおおおおおおおおッッ！！」

「うらぁあああああああああああああああああッッ！」

クロスカウンター！

鏡治と俊英は魂の十字架を掲げてぶつかり合った！

第１２８話　ＢＯＸＩＮＧ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（後書き）

はい、まあ次から展開が変わってきますかね

なんかウルトラマン、ライダー、ガンダムがコラボするゲームが発表されましたね

どうなのかな、欲しいですけどねｗ

ではこれで、次もよろしく！

第１２９話　ＯＢＳＴＩＮＡＣＹ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（前書き）

はい、更新です。

あのー、まあ基本的には０時投稿なんですけど

ちょっと変わる場合もあったりします。

今回はそんな感じですかね

「鏡治の前に現れた人物」

ではどうぞ！

第129話　OBSTINACY　SPEED　LOVE

「「・・・」」

互いの拳を頬に受け、沈黙する二人。
そしてシンクロするように同時に地面へ倒れる！

『おい！　鏡冶、大丈夫か！？』

『・・・』

ガタックゼクターは鏡冶の周りを飛び回る。

頬を突いたり揺すったりして起こそうと奮闘するガタックゼクター。
それを見てホッパーゼクターも俊英の元へ移動する。
何故か無性にそうしたくなったのだった…

「――――ッ」

しばらくして、鏡治が眼を開けて起き上がる。
まだ顔が痛むのか、表情は硬いが意外にもその口は笑っていた。
簡単に言うと、満足そうだったのだ。

「…ッ、効いたぜ…！

ああ、そうだ。あのパンチは心が篭ってた…」

「……それは、どうも」

『！』

寝転んだまま俊英は呟く。

洗脳が解除されていた事にホッパーゼクターは動揺していた。

妨害電波を流していれば頷けるが、ただ殴りあっただけで洗脳が解除されるなどおかしな話ではないのか！？

「俺の夢と誇りはこんなちゃちな洗脳じゃくずれねぇ」

『夢と…誇り？』

俊英はホッパーゼクターを掴むと、そのままパンチホッパーに変身する。

そして鏡治を見ると、一言だけ礼を言う。

頷く鏡治、言葉は少ないが互いにそれぞれ決着がついた様だ。

「…洗脳装置、赤い靴の完成は近い。気をつけろ！」

『Ｒｉｄｅｒ　Ｊｕｍｐ』

そう言い残してパンチホッパーは跳んでいく。
鏡治はため息をつくと自らも立ち上がった。

足がふらつく、だが早く神也達に追いつかなくては…
鏡治は気合を入れるとよろよろと歩き出そうとし――

「見つけたぞ」

「え？」

衝撃、鏡冶の体が宙に舞う。
景色が二転、三転し鏡冶は地面へと叩きつけられた！

思わず苦痛の声を漏らす彼を、一人の男が見下す。

「新意、鏡冶だな？　今、アイツが言ったことは本当か？」

「ぐっ――っぅ…ぁッ！？」

雨が激しさを増していく。
鏡冶は水でぼやける視界を凝らせ、なんとかその男の顔を確認した。
鈍る思考、冷えていく体。

「あなたは！」

しかし鏡冶の表情が明るいものになる。
そう、彼を見ていたのは――

天王路真由の兄、双護だった。

「あの…前は本当にすいませんでしたッ！
俺…貴方や真由ちゃんに酷い事しちゃって…！！」

鏡治はすぐに体勢を立て直し双護に頭を下げる。
無言でそれを見ている双護、何か不気味な雰囲気を感じた。

どうでもいい、そんな瞳。

「…真由は、今どこに？」

「あっ！　はい！
学校に送り届けてあげる途中だったんすよ！
お兄さんの話は真由ちゃんから聞いています！」

双護は尚、何も言わない。
代わりに先ほどの質問を投げかけた、

赤い靴がもうすぐ完成すると言うのは本当なのかと…

鏡治は首を縦に振る。
大規模洗脳がもうすぐ行われてしまう、真由を送ったらそちらを止めようと決意していたのだ。

「リコンファームもある事だし、希望はありますね！」

「・・・」

「創英は洗脳した人を兵士にする事すら考えてるでしょう！
ああさせね……ぇ？」

そこで鏡治は気づく、よく見れば双護が傷だらけじゃないか！
鏡治は慌てて双護に駆け寄る。

「どどどどうしたんです？　大丈夫ですか！？」

「・・・」

双護はその言葉には答えない。
淡々と自分の思いだけを繋いでいくだけだ。

間に合わなかった…とか、

もう少し時間があれば…とか、

俺はどうすればいい？　とか、

鏡冶には分からない質問を淡々と口にしていく。
もしかしたら鏡冶にすら言っていない、自問なのかもしれない。

鏡冶はその異質な雰囲気に戸惑ってしまう。

その後もしばらく双護はその自問を繰り返した後、鏡冶に向けて呟いた

「リコンファームは使わせない」

「え…？」

雨音がその言葉をかき消した。
だからうまく聞えなかったが、リコンファームを使わせない？
あっけにとられる鏡冶。双護は構わず続ける。

「俺達がこの世界をクリアする為には創英の野望を邪魔する必要がある」

あの案内役らしい二人がわざわざ自分の前に現れてくれたのは助かった。
双護は思う。
怪しい二人だが疑う意味もない、ゼノンとフルーラは双護に密かにコンタクトをとっていたのだった。クリア条件を満たさない限り世界を移動する事はないと…

「あ…えとっ、世界がどうのこうのってヤツ？

な、成る程！　俺も協力しますッ！」

「創英のところに乗り込んでみたが……赤い靴を破壊する事はできなかった。
街の人間にもカプセルを降りるように言ったが…
誰も聞く耳を持たない」

「乗り込んだって!?　だからそんな傷だらけ…で。
そ、創英はもう赤い靴を完成させてるんでしょうか?」

「ああ、だから真由を起動スイッチにしてリコンファームを発動するしかないのかもしれない」

「まあそれが一番いい方法ですから…ね」

双護は首を振る。

「リコンファームは使わせない。絶対にだ！」

「ど、どうしてっ！？」

「リコンファームを使えば真由の失われた記憶が復元されてしまう…

それだけは……さけなければ」

「記憶…？」

双護は唇を噛む、凄い強い力なのか血がにじみ出て地面へと落ちた。

水たまりにとける鮮血。

鏡冶は軽い恐怖すら覚える、それほどまでに双護のオーラは凄いものだった。

このオーラは一体……

「お前が今まで真由の面倒を見てくれたのか…？」

「え！？　あ…まあ」

「すまなかった。妹が迷惑を掛けて…」

「いやぁ全然そんな事は…」

「だが――」

そこで双護は言葉を止める。
驚きで眼を見開く彼に鏡冶は気づくと、その視線を追う。
そしてその先にいたのは――

「おにい…ちゃん？」

「なっ！！　ま、真由ちゃん！？」

真由だった。何故、彼女がここに…

「あ…っと、えと…」

後ろにはサソードがいるではないか、彼は気まずそうに口を開いた。
どうやら真由は自分の事が心配で戻ってきてくれたのだ。

だが、結果としてそれが兄妹の再開となった訳だが……どうにも空気が悪い。
普通感動の再開なら抱き合って喜ぶもんだが、今真由と双護の間には何か違和感のようなモノがあった。
真由はそれを消すために兄に話しかける。

「お、お兄ちゃん…？」

「…真由、どうした？」

「どうして……ボクはリンゴファームを使えないの？」

「ま、真由ちゃん！リコンファームだぜ！」

普段なら笑顔になる双護も今は無表情だった。
いや、むしろ真由を睨んでいたのかもしれない。

「真由、お前は何も心配しなくていい。この世界はきっと大丈夫だから」

「で、でも…」

「でもじゃない、大丈夫。大丈夫だから…お前はもう学校から出るな。
リコンファームには近づくんじゃないぞ」

「ど…どうして…？　ボクだって…皆の役に…立ち、たい…よぉ」

真由は引き下がらなかった。
ずっと心の中では役に立ちたいと思っていたのかもしれない。

双護の言う事ならなんでも聞いていた真由、
しかし今日初めて彼女は双護に抵抗した。

それは喜ぶべき事なんだろうか？

「ッッッ！！！」

そしてそれが双護にとって、どんな感情を与えたのだろうか？
はっきりと、彼は真由を……愛する妹を睨みつけた

「ま、まあまあ！　お兄さん！
ここは抑えよう！抑えましょ！ああ、そうだ。抑えるのが一番だぜ！ははは…」

鏡治は二人の間に割ってはいる。なんか険悪な雰囲気になってないか？

雨は相変わらず彼らを濡らしていく。
それでも真由と双護はじっと見詰め合って…いや睨み合っていた。

「ボク…嫌だ！」

「何？」

「ボク…ッ！　リコンファーム…使う！

思い出…すから…」

「！！」

双護の表情からついに笑みが消えた。
うわべだけでも浮かべていたであろうソレを殺して、双護は真由を睨む。

「真由ッッ！！　お前…！」

「使うもん…ッ！」

「駄目だッ！絶対に許さないぞ！！」

「知らないもんッ！！」

にらみ合う両者、ついに双護は舌打ちをして歩き出した。

止めにはいる鏡冶を無視して真由に近づいていく。

「どうしても…俺の言う事を聞いてくれないんだな？」

「聞かないもん！　絶対…ッ、絶対に聞かないもん！」

双護は眼を閉じる。

そしてもう一度開けたとき、その瞳は驚くほどに冷たいモノだった。
鏡冶は猛烈に嫌な予感を感じる、何か危険な感じがする。

それを危惧してもう一度双護を止めに入る。

「悪いな…」

「え？」

何故あやまるんだ？

そう感じた時にはすでに宙へ吹き飛ばされているところだった。
さっきもそうだ、自分は何に吹き飛ばされたのか？

目を凝らす、すると見えた。

赤い何かが。

第１２９話　ＯＢＳＴＩＮＡＣＹ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（後書き）

多分これ四時くらいに投稿されていると思います

結構まだカブト編はつづくかも……？

ではこれで、次もよろしく！

第１３０話　ＡＮＧＥＲ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（前書き）

更新ですね。はい

ムービー大戦見たいですわ本当

ブラカワニが再登場するって聞いたんですけど本当なんですかね？

あと２号のカラーリングが少し変更されてましたね

そうだな、僕も二号はあっちのほうがしっくりくる…かな？

「現れた双護。だけど……」

ではどうぞ！

あと、後書きで少しフォーゼのネタバレ？書いてます

注意してください

第130話　ANGER　SPEED　LOVE

「鏡治君ッ！！」

「真由……」

地面へ叩きつけられる鏡治。真由が叫も叫ぶしかし、相変わらず双護の目は曇っていた。

真由を直視する事無く、双護はうつむくだけ。

「何て事…するの！？　お兄ちゃん！」

「ッ！！　神也！　真由ちゃんを連れて逃げろ！！」

「えぇ！？」

鏡冶は見た、赤いソレ…カブトゼクターを！

何かおかしい、このままでは危険だ。

サソードは少し戸惑ったが、自らもそれを悟り真由を抱えて走り出した。

今の双護は『普通』じゃない――ッ

「おい、邪魔をするな」

双護は飛翔してきたカブトゼクターを掴み取ると、

いつの間にか腰に装備させていたベルトへとゼクターを装填する。

ゼクターを手に入れていた？

そんな事を考える余裕すらない。

変身する理由がないのに、なぜ彼は今変身した？

それは――ッ

理由があるから？

インセクトは兵器だ。兵器は誰かを傷つける、ならば……
双護は誰かを傷つける為に変身したのか！？

「変身…！」『ＨＥＮＳＨＩＮ』

「ゲホッ、ゲホッ！！変身ッ！」『ＨＥＮＳＨＩＮ』

ダークカブトは素早くキャストオフで装甲を吹き飛ばすと、クロックアップを発動させる。

だが、それはガタックも同じ。
ガタックはダークカブトを落ち着かせようと前に出た。
しかし彼はそんなガタックを躊躇なく殴り飛ばすと、彼の武器であるクナイガン。

つまり銃を真由達へと向けたのだった。

「…ッ！！　おい！　ちょっと待ってくれよ！
何やってんだよッ！」

「あのサソリの足を撃つ、邪魔をすれば貴様も同じ目にあうぞ」

「なっ！！」

ガタックもついに限界を迎える。
自分もあんな事をしておいてどうかとは思ったが、我慢ならなかった。

親友が撃たれる？　それに――

ガタックはダークカブトの足を掴んで邪魔をする！

「オイッ！　分かってんのか！？
真由ちゃんに当たるかもしれないんだぞ！！
それに神也が何をしたって言うんだよッ！！
ああ、そうさ。アイツは撃たれるような事はしてないッ！
誤解があるなら言ってください！」

ガタックはダークカブトが銃を降ろしてくれると思っていた。
いや半ば確信していたのかもしれない。
確かにサソードになら威嚇を込めた意味で一発くらいは……

だけど、真由は生身なのだ。
防御力が上がっているとはいえ、しかし生身でクナイガンを受ければ痛いではすまないかもしれない
妹に銃弾が当たるかもしれないのだ、そんな危険な事をやる訳がない。

そう、確信していたのに…

「真由に…当たるかもしれない？」

確信していたのに…

「それならそれで構わない……ッ」

「ッ！！！！！」

何で…そんな事言うんだよ……

「どうッ…して……」

真由の悲しそうな顔が脳裏に現れる。

『ううん。いいの、ボクも分かってるんだ。
だ…から……きっと、お兄ちゃんはボクを…
恨んでるんじゃないかって……怖いの…』

どうして――ッッ！！

「何でだよッッ！！　真由ちゃんは大切な家族だろうがぁぁあッ！」

ガタックはダークカブトの銃を弾こうと掴みかかる。
だが見事なカウンターを決められてしまい、射撃されてしまう。

火花が装甲から散り、ダークカブトはそのまま蹴りをガタックへ浴びせる。
よろける彼をもう一度射撃すると、ダークカブトはサソードを追うために走り出した。

「…ッ、お前」

「グッ!!」

だが、鏡冶は離さない。
足を掴んでダークカブトを妨害する!

目障りと言わんばかりに蹴りを浴びせられるが、それでも離さない!
どうしても納得できなかったのだ。
鏡冶は真由からいろんな双護の話しを聞いた。

それを話している時の彼女はとても楽しそうだったのを覚えている。

だが、今双護の言葉を真由が聞けば…彼女はどう思うだろう？

考えたくもない、だから無性に腹がたった。

別に兄妹喧嘩くらい何とも思わない。だけど、これは喧嘩じゃない！

どうしてこんな事を？

家族じゃないのかよ！！

「当たったらそれはそれで構わないッ！？

ふざけんなよッ！　なんだよそれ、ああそうだ、おかしいだろッ！！

真由ちゃんのことが大切なんだろ！？

だったら――」

「ああ、大切さ」

ぐっと、拳をつかまれた。
ガタックはそれを弾こうとするが…できない。

できなかった…

「ッ…！」

「大切だよ、真由は…俺にとってな。俺の命より大切な…家族だ」

「だったら…なんでッ…」

ダークカブトは仮面越しにガタックを睨みつける。
それはまさに剣、仮面越しだというのになんて鋭いんだ…

ガタックは思わずひるんでしまう。
その仮面の裏にある意志を感じて…怯えてしまう――ッ

「俺は、真由を愛している。家族としてな、だが…」

「！」

それは小声、おそらくガタックに聞かせる為ではなく。
自分に思い知らせる為だろう。

「真由香を愛した事は…一度もないッ！！」

ダークカブトはガタックを地面へと叩きつける。
そして思い切り踏みつけて動きを封じた。

苦痛の声を放つガタックを無視してダークカブトは銃をガタックに向けて放つ。

一発

二発ッ

三発ッ！

激しく火花を散らすガタックと、それを見つめるダークカブト。

「俺は、真由を守る。どんな手を使ってでもな…

それができないなら、悪いが真由には死んでもらう」

「何ッ…だとぉおおおおおおおおおおッ！」

ガタックはダークカブトの足を弾くと素早く転がって距離を取る。
今の発言でガタックの怒りは頂点に達したのだった。

絶対に、絶対にその言葉だけは言っていけないと。

「訳わかんねぇよッ！！　真由ちゃんに死んでもらう？
何言ってんだお前ッ！　ああ、そうだ！

真由香って何だよ、守るってなんだよ！
矛盾してるじゃねぇか！」

「…お前が知る必要はない」

「ああそうかよッ！だったら全力で邪魔させてもらうぜぇ！

うおおおおおッ！」

ガタックはカリバーを構えて走り出す。
両者クロックアップは既に解除され、現実世界での戦いへ応じる。

ガタックは素早いステップでダークカブトの攻撃をかわすと、蹴りを叩き込んだ。
よろけ倒れこむダークカブトに追撃のカリバーを振り下すッ！

「プットオン」『Ｐｕｔ　Ｏｎ』

「！」

だが辺りから装甲の破片が飛んできてダークカブトの手に集まっていく！
振り下ろしたカリバーは堅い装甲に弾かれ、大きな隙をつくる。
それを狙われ、逆にダークカブトの蹴りを受けてしまった！

「グッ！！」

ダークカブトはマスクドフォームへ戻ると、そのままガタックの首を掴んで持ち上げた。

ガタックもまた抵抗を試みるが、マスクドとライダーではパワー負けしてしまう。
結局、抵抗むなしくガタックは地面へ叩きつけられるのだった。

「キャストオフ」『Ｃａｓｔ　Ｏｆｆ』

ダークカブトの、装甲の破片がガタックに命中していく。

衝撃と痛みで声を上げるガタック！

ダークカブトはガタックに蹴りを入れると、さらにもう一度プットオンを発動させた！

『Ｐｕｔ　Ｏｎ』

「ぐぅううううッッ！！」

「・・・」

破片がガタックを巻き込んでダークカブトに収束していく。

マスクドフォームへ戻ったダークカブトはクナイガンをアックスモードに変えてガタックに攻撃を浴びせていった！

重々しい一撃、このままでは負けるッ！

「あぐぉッ…！　く、クロックアップ！」『Ｃｌｏｃｋ　Ｕｐ』

ダークカブトの攻撃が鈍く変わる。
ガタックは何とかダークカブトの猛攻を避けると、そのまま彼を投げ飛ばした。
そこへドロップキックを決め、さらに大きく吹き飛ばす！

「キャストオフ」『Ｃａｓｔ　Ｏｆｆ』

追い討ちをかけようとしたがキャストオフを発動されてしまい、うかつに近づけなくなってしまった。
すぐにダークカブトもクロックアップを発動させ、二度目の高速戦闘へと突入する。

「ハァッ…ハァッ……ッ！！」

「もういいか？　俺は早く真由に会いたいんだが…」

「ハァッ…ハァッ！　――グッ！
会って…どうするッッ…？」

「気絶させてどこかへ閉じ込めておく。
その後は芝居でもうって皆の所へ戻るさ。
それで創英の野望を潰したあと、真由を迎えにいけばいい」

「グッ…！もし、リコンファームを使わざるを――」

「なにがあってもッッ！
リコンファームだけは使わせない。

どう足掻いても使わなければならないと言うのなら…

真由を、殺す」

「何でなんだよぉおおおおおおおお！！」

ガタックは激しい連打を浴びせるが、その全てをダークカブトはガードしていた。
そして拳を弾くと、回し蹴りを決める。

どんなに思いを乗せて、魂を込めて攻撃しても
弾かれカウンターを決められる。
何が足りないんだッ！　ガタックに焦りと悔しさがつのっていく。

「アグァっ！　ぐぅううッ！　あぁあぁぁあぁ！！」

転がるガタックに浴びせられる銃弾の雨。
すぐにダークカブトはガタックの元まで移動すると、もう一度激しい蹴りの連撃を浴びせた。

「がぁアァ……！！」

「・・・」『ＯＮＥ』

さらに一発、蹴りがガタックのわき腹をとらえる
呼吸が止まり、景色がぼやける。

『ＴＷＯ』

今度は腹部に蹴りを入れる。
苦痛の声をあげるガタック。そこへさらに蹴りがとんでくる。

『ＴＨＲＥＥ』

「ぁぁあ――――ッ……」

力なく倒れるガタックに光を纏ったダークカブトの蹴りが炸裂した

「ライダーキック」『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』

変身が解除され、血を纏いながら鏡冶は落下する。
気絶しているようで、ガタックゼクターは鏡冶を守る為にダークカブトの前に立つ。

しかし、彼はダークカブトに突進をしかけるが
簡単に弾かれてしまった。

地面へ叩きつけられるガタックゼクター、勝ち目がないと悟ったか
上空へ飛翔して飛び去ってしまった。

「・・・」

ダークカブトは気絶している鏡治を見る。
その手にクナイガンを構えて…

「悪いな、本当に……」

彼は、銃口を鏡治に向けたのだった。

第１３０話　ＡＮＧＥＲ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（後書き）

クラヒは毎回進化してますねｗ
今回もサブライダーに超必殺技追加とか！

ＯＰ曲もかっこよかったです
何でもあれがフォーゼの挿入歌になるみたいですね

ただまあ響鬼とキバの扱いがイマイチ悪いんですよねｗ
響鬼は追加ライダーを、キバはガルル達をどうか――！

ではこれで、次もよろしく！

第１３１話　ＬＩＥ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（前書き）

はい、更新ですね
まあ次は……そうだなぁ、多分木曜かな？

フォーゼの軽い感想を後書きに書いてます
まだ見てない方はスルーしてください

ではどうぞ！

第131話　LIE　SPEED　LOVE

あれから少し時間が経ったが、未だに鏡冶は気絶していた。
雨も止む気配はない、ダークカブトは今もじっと鏡冶をみているだけだ。

迷っているのだろう、彼は。

鏡冶を…殺すか、どうかを――

「・・・」

震える手をダークカブトは押さえつける。
ここで迷ってしまっては真由を殺す事など不可能。

そう、もうリコンファームを使わせないなんてできるのだろうか？
破壊する事も考えた。

一度リコンファームのところへ行って、

破壊しようとも思ったが警備ロボットに邪魔されてしまった。

クロックアップ対策は万全らしく、警報がなる中必死に逃げたものだ。

赤い靴もそう、一人では破壊する事は不可能なのかもしれない。

誰かに協力してもらう？

そうだな、始めから素直に理由を話して協力してもらえばなんとかなったのかも知れない。

「ああ、そうか…」

そう言うことだったのか。

今さらになってやっと気づいた。
俺は、いい訳の理由を作っていただけだ。

その気になれば真由にリコンファームを使わせずに創英の野望を打ち砕くことができただろう。

司達と協力し赤い靴を破壊すれば……

だが、自分はその選択を取らなかった。
真由を殺す事は仕方のない事、間に合わなければ真由を殺す。

そう決めていたが、違う。
俺は…最初から真由を殺したかったんだ！

この世界に来て『真由香』を殺すチャンスができた！
俺はそれが嬉しかったに違いない…！！

「――ッ」

鏡治の意識が戻っていく、別に鏡治まで殺す必要はない？
自分はどうしたい？

迷う、イラつく。

「くっ、鏡治……悪いな。
最期に教えてやる、真由と俺は……本当の兄妹じゃ――」

ダークカブトはクナイガンを鏡治に向けた。
しかしその時、笑い声が聞えてくる！

「おいおい、苦悩を経てダークサイド墜ちかよ。
お前やっぱドストライク過ぎるわ、少し俺に属性譲ってくれよ。
右手に魔神とかちょっともう限界きてる気がする」

「……椿」

守輪椿はヘラヘラと笑いながらコチラに近づいてくる。
その隣にはガタックゼクター、どうやら助けを呼びに行ったと言う訳か。

ダークカブトはクナイガンを鏡冶ではなく椿へと向ける。

「へっ、撃てよ。俺は今、幼馴染から受け取ったお守りを内ポケットに入れてんだ。
これあれだ…このお守りがこう……
なんか上手い具合に――」

「銃弾を防ぐ盾になってくれるんだろう…？」

「そう！　それよ！　それね！」

ダークカブトは銃を構えたまま一歩後ろへ下がる。
その時、さらに電子音がなり響いた。

『シャッフル』

「！」

鏡冶の体が消え、代わりにカリスが現れる。
驚くダークカブト、カリスは瞬時にバックステップで距離をとると、
彼に向かってアローを構えた。

「悪いな、まあ少しは冷静になったらどうだ？　天王路双護」

「やられたよ……広瀬」

「悪く思うなよ、イケメン。

ちょっと身長分けてくれよ、変身！」『ターン・アップ』

クロックアップとマッハのカードが同時に発動される。
クナイとブレイラウザーは激しい火花を散らして互いを弾いた。

「・・・」

ダークカブトはそのまま走り去る。
長期戦は不利と思ったのだろうか？

むしろ不利なのはブレイドの方なのだが……

しかし、好都合だ。
ブレイドはため息をつくと、変身を解除する。

「どうしちまったのかねアイツは」

「わからない。だがやはり、リコンファームに関係あるのは確定みたいだな」

椿と咲夜は、もう一度ため息をつくと鏡冶を抱えて学校へと戻るのだった。

――きて

「・・・」

お――――て

「ッ……！」

おきてっ！

「！」

まぶたをゆっくり開けると、明るい光が差し込んできた。
ぼやける景色から鮮明になっていく世界。

そこにいたのは……真由だった。
真由は自分が目覚めたことに気づくと笑顔で微笑む。

癒される、この娘の笑顔は本当に天使のようだ。
鏡治は真由に微笑み返すと、ゆっくりと体を起こした。

学校？　保健室だろうか？
辺りを見回すとそれらしきモノが多く見える。

しかし生活用品やテレビ等、まるで誰かの部屋みたいだ。

「気がついたのね。良かった」

「え…？」

声がして振り向くと、若い女性がいた。
担当の先生だろうか？

鏡冶は頭を下げる。

「ご丁寧にどうも。わたしは空野葵、真由ちゃんの仲間よ」

「えっと……新意鏡冶ですッ！」

葵は鏡冶が無事に目覚めたことを確認すると、軽く状況を説明した。
そして、皆との顔合わせをするように提案する。

「わ、わかりましたッ！」

教室では司達が待っているらしい、鏡治はそこへ移動する事にする。
心配そうに見つめる真由に微笑み返すと、鏡治は歩き出した。

「聖司だ。よろしく」

「ああ！　よろしくッ！」

「鏡治！！」

教室に有美子が血相を変えてやってくる。
有美子は、鏡冶と神也の姿を確認すると涙を浮かべて二人を抱きしめた。

「良かった！　本当に…良かったわッ……」

鏡冶も神也も、すこし照れたようにしていたがしっかりと抱きしめ返すのだった。

「・・・」

家族、そこには愛がある。しかし、双護は言った。彼女を――ッ

（なんでなんだよ……）

その後、とり合えず全員と一通り挨拶を済ませた後、作戦をたてることになった。
皆で創英のいるブレインタワーに突撃するというシンプルで一番有効な方法。
一度この作戦を実行したらしいが、その時は失敗したらしい

『電磁バリアの解除はミーにまかせるですよ！』

「ああ、よろしく頼む！」

そして、しばらく話し合いが続くなか、ふと鏡治は疑問を覚える。
一体双護についてはどうなったのだろう？

そう考えていたら、双護の話題があがる

「双護は確か貴方のところで保護してもらってるんですよね」

「ああ、心配しないでくれ」

「？」

風島は言う、保護？

そうなのか？　鏡治はその事を聞こうとした。

その時、隣にいた少年が小声でささやく

「今はそう言う事にしておいてあるんだ。後で図書室に来てくれ…」

「え？」

少年、椿が小声でそう言う。
成る程、鏡治はそれを理解して、もう何も言わなかった。

その後、解散となり各々は自室やら食堂やらに散らばっていく。
鏡治は言われたとおりに図書室へと向かうのだった。

第１３１話　ＬＩＥ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（後書き）

相変わらず挿入歌のタイミングが秀逸ですねｗ

新ステイツが披露されましたか

スイッチが４０までなら３０が中間って事かな？

しかし大文字先輩もはや別人じゃないですかｗ

まあ来週は駅伝お預けみたいですね

では次もよろしく！

第１３２話　ＴＨＩＮＫＩＮＧ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（前書き）

はい、えっとですね
木曜に更新しようと思ってたんですけど
ちょっと都合が悪くなってしまいまして
今日更新でございます

「図書室に行く鏡治」

ではどうぞ！

第132話　THINKING　SPEED　LOVE

「来たな、ここだぜ新意」

図書室の一角で守輪椿、広瀬咲夜、相原我夢、条戸真志の四人がソファに座っていた。
どうやら双護の暴走を知っているのはこの四人だけらしく、風島や神也に協力してもらい話を合わせてもらっているとの事だった。

「鏡治、どうしちまったんだろうな？」

「リコンファームを使わせたくないとか言ってたからよぉ、ソッチ関係である事は間違いないんだが…」

鏡冶も加わり、五人は双護が何故このような行動に出たのかを考える。
我夢が言うには真由に何かを思い出して欲しくないから…との事だが、
これが恐らく理由なのだろう。

問題はそれを思い出して欲しくないからと言って真由の命までを奪う、その狂気さだった。

双護はあくまでも真由を守ると言っていた。
だが、真由の命すら奪っても構わないという矛盾。

そして、鏡冶はふと思い出す。

「そういえば双護は真由ちゃんの事をたまに、
真由香って…呼んでたな。

ああ、そうだ。それに真由と自分は本当の…
とかなんとか言ってたような」

その言葉に五人の表情が一変する。
まだ意味が分かっていない鏡治は目を丸くするだけだったのだが――

「おいおい、それってもしかしなくとも…」

「あ、ああ……ッ」

「？」

未だに意味の分かってない鏡治、
我夢は焦る気持ちを抑えて説明する。

簡単な話だ。双護先輩と真由は本当の――――

「！！！」

それを聞いた鏡治はいても立ってもいられず、図書室を飛び出していった。
止める椿の声を振り切って、鏡治は全速力で走っていく。

「……やれやれ」

真志は困ったように笑みを浮かべると、
鏡治を追いかけて図書室を後にした。

残された我夢達は少し沈黙するものの、また話し合いを再開する。

「いろいろありましたが、双護先輩の言葉。
真由先輩の事情、真由と言う名前ではなくて真由香、そしてリコンファーム。

なかなかに情報が集まりましたね」

我夢は冷静に思考をめぐらせる。
引っかかるのは真由と真由香、一体どういう事なのか…

「ニャー」

「「「!?」」」

突如猫の鳴き声がして一同は振り返る。
すると、窓をがりがりと引っかく猫の姿が見えた。
集中していたせいなのか、皆全く気配に気づかなかった。

「可哀想に……雨の中じゃ寒いだろう」

咲夜は少し顔を赤らめて猫を図書室へと招き入れた。
タオルで体を少し拭いてあげると、猫はお礼を言うようにもう一度鳴く。

「さ、咲夜……お前――ッ
いくら腹がへってるからって……」

「くわんがな。あんまりふざけた事ばかり言っていると
貴様の尻を日本列島にしてやろうか」

「……え？」

どどどどどう言う事なの？
全く意味が分からない脅し文句に、椿の体は震え上がる。
結局、彼は沈黙して後ろへと下がっていくのだった。

「ん？」

我夢はふと、妙に強い既視感を覚える。
この猫、どこかで見たような……

さらに一冊の新聞が落ちている事に気づいた。
猫が入ってきた窓の近くは、今までの新聞が保管されている歴史の

棚。
誰かが落としたのだろうか？
それとも、ふとした拍子に落ちてしまったのだろうか？
我夢はとにかくその新聞に手を伸ばす。

「？」

ふと、その新聞に書かれている事が目に止まった。
かなり前の新聞の様で、もう廃刊になっている。
そんな新聞が何故？
だがとにかく書いてある事が気になってそれどころではなかった。

「倒壊…設計ミスが原因か……
ブラック企業の噂も…天……」

「ん？どうした我夢？」

新聞を持つ手が震えている。
椿は疑問に思い自分もその記事を見てみる事にした
その事故のことが記されていた。
記事には、数年前に起こった小さな建物の倒壊事件。

「倒壊事故？　ああ、そう言えばあったな。
割と人が亡くなったりして大変だったとか。
んーでも、そんなニュースにはならなかったけ？
設計ミス？　へー、そんな事も言われたのか……
つか、これよく根も葉もない噂を書くって問題になった新聞じゃねーか。
もう発行されてないんじゃなかった？
んで、何々ぃ？　ブラック企業の噂も、天王路グルー…プ……」

椿もまた口を閉ざしてしまった。
そして代わりにもう一度まじまじと記事を見てみる。

だが何度読み返しても、その文字が変わる事はなかった。

「「くっ！　クラス名簿…ッ！」」

「？」

我夢と椿は急いで翼のところへ向かう。
そして、翼にクラスの名簿がどこにあるかを問い詰めた。

翼は、二人の様子に少し驚きながらも
クラス名簿がしまってあるだろう場所を示す。

しかし、そこに名簿はなかった。

「あれ？　おかしいな」

そう言えばいつの間にかなくなっていた名簿。
クラス全員も少ないし、皆もう親しい間なので別に名簿の事など全く気にしてはいなかったのだが……

翼は周りを調べるが結局、名簿はなかった。
無くしてしまったのかと焦る翼だったが、ふと思い出す。
最後に名簿を見たのは……

「あ、そう言えば双護くんが貸してほしいって」

「！！」

「まだ、皆の名前を見てなかったんだけど、
自己紹介もしてもらったし…いいかなって」

双護が最後に名簿を持っていた？
どうして？　名簿なんて何に使うと言うのか――
そう、それは逆に言えば……双護には名簿を手に入れなければならない理由があったと言う事ではないか？

「ま、真由ちゃんの名前は…どうでしたか？」

「ご、誤字とか……は？」

「え？　いや、別に誤字とかはなかったけど。
あ、でも何故か『真由』の『由』の隣が修正テープで消されてたかな

……なんでなんだろう？」

「……ッ！」

最初、このクラスにやってきたのは椿と司達だ。
その時には名簿は机の上に置いてあった。
あの時は、突然の事で知り合いの名前を探すだけだったが……
ふと、考えてみる。

あの時双護達はいつのまにか教室に入っていた。
普通、特別クラスなのかを確認したりはしないのだろうか？
いや、双護の性格が特殊なのは今まで一緒にいて分かった事だ。
だから、確証はない。
だけど、もし……
もし、クラスに一番最初にやってきたのが双護だったら――ッ
そして彼はある事をしてから一度教室を出た？
今までの情報が鮮明にヴィジョンを映していく。
彼は真由を連れずに一度教室にやってきた。そして名簿に簡単な細工をした。
その後、名簿を完全に始末したのだ。
「双護……お前――ッ」

『鏡治ぃ！　いつまでやればいいんだよー！』

「すまん！もうちょっと頑張ってくれ！！」

学校の外、少し離れた公園に鏡治とガタックゼクターはいた。
ガタックゼクターは先ほどから空高く飛翔し、大きく旋廻を続ける。
カブトゼクターに通信を行っているのだ。

「頼むッ！　来てくれ…ッッ！！」

『おい鏡治！　創英に見つかっちまうぞ！！』

「クッ…ああ、そうだな！」

限界か、やはり来てはくれないのか……
鏡治は諦めガタックゼクターを呼び戻した。

明日、赤い靴を発動するらしいという情報が俊英から送られてきた。
もう時間はない、話を聞けば真由はもうリコンファームのリハーサルに向かっているらしい…

「！」

気配を感じて振り返る。するとそこには……

「双護さんッ！」

天王路双護が座っていた。
双護は冷たい目で鏡治を確認すると、小さくため息をつく。

「……さんはつけなくていい」

「……分かった。双護、話があるんだ」

「だろうな、あれだけカブトゼクターに連絡を送っていれば嫌でも分かる」

鏡冶はもう包み隠さず、真正面から双護に向き合った。
にらみ合う両者。どちらも引くつもりはないらしい

「双護、お前は真由ちゃんと…血は繋がっているのか？」

その質問がくるのは分かっていた。
双護は眉一つ動かさずにその問いに答える。

「いや、繋がってない。俺と真由は本当の兄妹じゃないからな」

「…そうかよ。
でも、お前は真由ちゃんを愛しているんだろッ！？」

「ああ、当然だ。神に誓ってもいい、俺は真由を愛している。
兄妹として、家族としてな。
その思いが変わる事は絶対にない、絶対にだ」

だったら！　鏡冶は声をつい荒げてしまう。
いや、荒げずにはいられなかった。

「どうしてッ！　どうして殺すなんて言うんだ!?」

「・・・」

「なあ、双護！　俺達と協力して創英さんと戦おうぜ！
皆で強力して赤い靴を破壊すれば真由ちゃんを

リコンファームに乗せなくていいじゃないか！」

双護は何も言わず地面をみつめていた。
しばらくそのまま二人は沈黙を続ける、そしてふいに双護が口を開いた。

「俺は、迷っていたんだ。真由を生かすか、真由香を殺すか」

「…その、真由香って誰なんだよッ！」

「・・・」

双護はうつむいたまま、小さな声で話し始めた。
まるで鏡治に聞かせるのではなく自分に聞かせるように…

それは決断、思い出すのだ。

彼女の思い出。

そして憎しみを――ッ

水原。それが昔の苗字だった。

「おにいちゃーん！！」

「おいおい！　気をつけろよ樹里！」

妹の樹里が笑いかけてくる。
それは嬉しいがなにやら危なっかしい、いつもそうだ。
樹里ははしゃぐと周りが見えなくなる。
誰かがしっかり見ててやらねば…

「ほら」

「！」

手を差し出す。樹里はニッコリと笑うとその手を握り返してくれた。

「こっちだよお兄ちゃん！」

「あはは、ちょっと待ってくれよ」

樹里も中学一年か。
お互い中学生にもなって妹と一緒に買い物なんてどうかとも思うが

…まあいいだろう。

「お前達は本当に仲がいいな、父さんは少し心配だよ」

「いいじゃないですか、反抗的になるよりはよっぽどいいわ。
ねぇ？」

後ろでは父と母が俺達を見て笑っている。
寛大な父と、優しい母、そして可愛い妹。

俺は幸せなんだろうな。

だが、少し気になる事もある。

「！」

父はその人物を見かけるとすぐに挨拶に向かう。
当然だ、父はその人に仕えているのだから。

「これは社長！　どうも、すみません。お休みを頂いてしまって」

「構わん、お前のほかにも優秀な秘書はおる。
一日くらい好きにするがいい」

父は、天王路グループ社長。天王路剛（てんのうじごう）の秘書をしていた。

――と言っても秘書は何人もいるらしく、

父もあまり自分の仕事については話さなかったのだが。

正直俺は、あまりこの天王路グループが好きではなかった。

なにやら黒い噂があったのだ、週刊誌で読んだときは警察もマークをしているらしいとかなんとか…

まあ噂は噂。俺が気にするものでもないのかもしれない

問題は別にある。

「ほら、お前達も挨拶をしなさい」

「あ、ああ……はい。

すいません。どうも、こんにちは…」

「こんにちは！」

この男の威圧感は苦手だ。
まあ社長と言うのだから当然なのだろうか

「…ああ」

まあ剛はまだいい。問題はコイツだ――ッッ

「こんにちは……」

「こんにちは！」

「・・・」

無視か、人がせっかくしたくもない挨拶をしてやったのに。
腹の立つ女だ。だから嫌なんだよ、お前なんかに挨拶するのはッ

「では行こう」

「はい、パパ」

そう言って剛とソイツは歩いていく。
その時だった。ソイツと樹里の肩がぶつかってしまう。
すぐに謝る樹里だったがソイツは舌打ちをして樹里を睨みつけた。

「行くぞ、真由香」

「ええ、わかりました」

天王路真由香、俺はコイツが大嫌いだった。

天王路剛の一人娘、一応昔からの知り合い。
つまり幼馴染と言うヤツなのだろうか？
とにかく、俺は真由香が大嫌いだった。

金持ちの娘は皆こうなのだろうか？

高飛車で我がままでプライドが高くて、
金があれば何でも手に入ると思っているクソ女だ。

なによりこいつは樹里をいじめていた、小さい時に知り合って遊んだ事もあったが、樹里も大切にしていた玩具を壊したり、気に入らない事があればすぐに権力を振りかざして……

「チッ、樹里。行こうか」

「う…うん」

胸糞が悪い。あんなヤツ、死ねばいいんだよ。

第１３２話　ＴＨＩＮＫＩＮＧ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（後書き）

はい、実はですね。
最初目標にしていたアクセス数（？）にたどり着けました

いやこれも皆さんのおかげですね。ありがとうございます！

これからも頑張っていきますので
次もどうぞよろしく！

第１３３話　ＲＥＳＥＮＴＭＥＮＴ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（前書き）

はいちょっとすいません。日曜の都合が悪いもんで、今日二話更新です
あとまあ続けたほうがグダリ感も少ないかなとｗｗ

と言う訳で過去編、前編でございます。

「双護と真由香」

ちょっとハードかな？
ではどうぞ！

第１３３話　ＲＥＳＥＮＴＭＥＮＴ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ

もう真由香を視界にいれるだけで気分が悪くなる。

だが、最悪な事に俺とアイツは同じクラスだという事。
アイツは気に入らない、暇だからと言う理由で誰かをいじめる。

しかもそのやり方が陰湿で、どこぞの不良に金を渡して代わりにいじめを行わせる。
それを見るのが趣味という腐った女。

正直かかわりたくない。
まあよほどの事がないかぎりは大丈夫だろう、俺とアイツは中学を卒業すればサヨナラ。

それまで耐えればいいだけなのだから…

だが、樹里は違った。
俺が何度止めろと言っても、真由香と仲良くできる筈と聞かなかった

「きっと真由香さんは寂しいだけなんだよ。
だから……ね？」

樹里はそう言って聞かなかった。
俺が何度、どれだけ止めろと言っても樹里は真由香に話かけ続ける。
その度に無視されようが、にらまれようが。

真由香は樹里に手を上げた事もある。
いくら昔の話だろうが、俺はそれを謝らないアイツを許さない

「真由香さーん！」

その日も、また樹里は同じように真由香に話しかけていた。
樹里は家庭科の時間に作ったお菓子を真由香へと差し出す。

覗き見は趣味ではないが、たまたま見かけたので観察してみる事にした。

「・・・」

「えへへ、頑張って作ったんだ。良かったら食べてね」

そう言って樹里は真由香に背を向けて走り出す。

自分の作ったものを食べているところをみるのは恥ずかしいらしい、

樹里のクセみたいなものだった。

俺はそのクセがあったことを心から感謝した。

「……なっ！」

アイツは樹里から受け取ったお菓子を、迷う事無くゴミ箱へ捨てる。
もう我慢の限界だった。

俺は声を荒げてアイツに詰め寄る。

「おい……ッ！」

「…あら、貴方は」

真由香の背はひくい。俺を見上げるようにしていた。
それもまた不快でならない。

「どうして樹里のお菓子を捨てたんだッ！！」

「ああ、コレですか。不味そうだったんで」

「なっ！？」

さも当然のようにコイツはッ…

「あと、言っておいてくれません？　私に話しかけるなって。うざいんですよね、正直。

あの娘、お金が欲しいんでしょうか？

しつこいっていうか、いやしいって言うか」

「――――ッッ！！！」

「それより、貴方けっこうカッコいいね。
どうですか？　私と付き合いません？
クラスの男子ってなんか全員キモイんですよね。
お金もあげますよ？　やっぱ男は顔ですよね。キャハハハ！」

何を……言っているんだこいつは――ッ
本気で言っているのか？
正気なのか！？

「それにしても、あんなみすぼらしいオッサンと
センス悪いババアから貴方みたいなのが生まれるなんて以外ですね。
妹もマジでうざいし、もしかしたら本当の息子じゃなかったりして！
あはははは！」

気がつけば、俺は真由香を突き飛ばしていた。
驚きで眼を見開く真由香に、俺は知っている限りの暴言をぶつける。
本音を言えばその整った顔をぐちゃぐちゃになるまで殴りたかったが、俺の中にあった良心がそれを防ぐ。
今にして思えばなんて浅はかで考えなしの行動だったのか、だが俺は我慢できなかった。
その結果、今度は俺が真由香に睨まれる。
「覚えてろよ…ッ、必ず後悔させてやるからなッッ！！」

そう言って真由香は俺の前から逃げるようにして走り去っていった。
あの時、俺はどんな顔をして真由香を見ていたのか……

その時が初……だったかもしれない。
真由香に明確な殺意が湧いたのは。

翌日、いきなり誰とも知らぬヤツに殴られた。
ゲラゲラと不愉快な笑みを浮かべながら殴りかかってくる。

俺は抵抗しようと構えるが、そこにアイツの姿が見えた。

不愉快な笑みを浮べて、俺を見下してくる。
あの女が――――

「双護さん、抵抗するのはいいんですけど。
ちょっとその前にいいですかね？」

「――――ァ？」

悟る、理解する。
この見知らぬ男はコイツが用意したという事か…

俺の心情を理解したのか、真由香はより下卑た笑みを浮べて続ける。

「妹さん、一年のＡ組みなんですってね」

「……ッ」

「いじめられないか、心配でしょぉ？」

抵抗すれば、分かってるよな？

「ッ！！」

「樹里だっけ？
二度と登校できないようにしてやろうか？　きゃはは！」

「お前ッ！！」

「それだけじゃないよ、ねぇいいの？

私がパパにお前のクソ親父クビにしてくださいってお願いしちゃおうかな？

きゃはは！　どうする？
どうするの、お父さんがお仕事クビになっちゃったら！

キャハハハ！」

ぐっと、歯を食いしばる。
コイツだけは許さない、絶対に許さないッ！

その後も俺はしばらく殴られ続け、真由香が飽きるまでそれは続いた。

最後にアイツは俺の頭を踏んで、そのまま耳元で囁いた。
誰かに言ったら――

「お前の家族、本気でぶっ壊すぞ？」

「おにいちゃん！　大丈夫!?　どうしたの！」

「…ちょっと、変な奴らにからまれてな。
心配しなくていい、もう大丈夫だ」

家族だけは守る。
その為ならどんな仕打ちでも受けてやる。

悔しいがもうそれしかないんだ。

ちくしょう…ッ、ちくしょうッッ！！

「おい双護、コッチへ来なさい！」

「・・・」

翌日、クラスであの女が俺を呼んだ。

真由香の周りではみるからに頭の悪そうな連中がたむろしてクスクスと笑っている。

強烈な不快感を覚えたが、俺は真由香の所へと向かった。

「土下座しなさい」

「……は？」

ギャハハハと不快な笑い声が大きくなる。

真由香は挑発的な笑みを浮かべながら顎で早くしろとジェスチャーを送る。

「……ッッ」

クラスメイトの視線が俺に集中する。
ふざけやがって……ッ！

そう考えていたら、真由香の口が動いた。
言葉は発しないものの、たしかにそう言った

『イモウトガダイジダロ？』

「ッッッ……」

死にたくなる、泣けてくる。

だけど妹がいじめられる
もしかしたらもっとやばい事をしかけてくるかもしれない……

俺が命令に応じると不愉快な笑い声が爆発する。

「本当にいいなりじゃねーか！　ぎゃはは！」

「だっせぇ！！　ははははは！」

「真由香ちゃんすごーい！」

「コイツの親父もパパに同じ事してたよ！
本当親子そろって惨めだねぇ！　キャハハハ！」

殺す、コイツはぶっ殺してやる。
でも、家族だけは……妹は守らなきゃいけない。

俺は誓った。
次の日も、その次の日も、俺はこの女のいいなりにされた。
だが……

「おにいちゃん！　私テストで百点とったよ！　凄くない！？」

「ああ……凄いな」

「えっへん！　あはははは！」

「ははは……」

お前だけは、守らないと。
大切な家族なんだ。大切な……大切な――ッ

「……あのね、お兄ちゃん」

「ん？」

「最近、お父さんの元気がないの。なんか悩んでるみたいなんだ」

「え？」

「お父さん、大丈夫かな…？」

「ああ、大丈夫さ！
そうだ、今度一緒に元気付けてやるか！」

「う、うん！　そうだね！　やっぱお兄ちゃんは頼りになるぅ！」

「ハハッ、調子のいい奴だ」

樹里がいれば耐えられる。
家族なんだ。俺が守ってみせる！

きっとそのうちアイツも飽きて、それで俺は解放されるんだ。
地獄から、アイツから……

だが、その日はやって来た。

それは天王路グループの経営している小さなビルの一つ。
俺の父はある日、社長である剛から家族を連れてそのビルの様子を見てきてくれと言われた。

どうやら家族を題材にしたプロジェクトを進行中らしく、その実験をかねて……と言う事らしい。現に、俺たちの他にも天王路グループの社員が家族で訪れていた。

はしゃぎまわる妹を注意しつつ、俺たちはそのビルを視察する。

しかしその日、事件が起こった。

建物の倒壊。

後に設計ミスが原因だったと疑われたソレは、多くの死者を出したにも関わらず大規模な報道が行われる事はなかった。

だから、人の記憶に残る事はなく。事件が起こった事すら知らない可能性があるだろう。

――しかし

「……ッ！」

眼を覚ます。気絶していたのだろう。

覚えているのは、何か大きな音がしたと思ったら視界が真っ暗になった。

……それだけだ。

何が起こっているのか？
その時は全く分からなかったものだ、そして足を怪我しているのだと理解する。

「……え？」

だけど、足なんてどうでも良かった。
痛みが感じられないのは興奮状態だったからだろう。

俺は見てしまったのだ。

瓦礫に潰されている父を――

「――――ァァァ……」

叫び声すらあげられないほど、俺は衰弱していた。
後になって聞いた話だが、俺は丸二日程気絶していたらしい。
もう体力も気力もなくなっていた。
だが、目の前の状況を受け入れまいと必死に世界を否定する。

あの父が、優しかった父がこうも簡単に亡くなったのだ。
もう会えない、そんな馬鹿な話があってたまるか……

きっと、父の体から流れている赤黒い液体は嘘。
これは夢？

ピクリとも動かない父親。声をかければきっと答えてくれる。
なのに声がでない。

なんで……

どうして……ッッ！！

錯乱する思考。

鳴り響くサイレンの音、救助が来たのだろうか？

「おにい……」

「！」

その時だった。
父に気をとられていて気づかなかったが、目の前に樹里がいるではないか！
瓦礫に足が挟まっているのか？
とにかく顔色が悪い…ッ！
「ゆ――――り…！」
樹里に向かって手を伸ばす。
見れば血が出てるじゃないか！
早く！
早く手当てをしないと！

「お…にいちゃんッッ…」

待ってろ！　すぐに助けてやるからなッッ！！

樹里いいいいッッ！！

「――――！」

だが体が動かない！

どうして！　何で何だよッ！！
早く樹里を病院につれていかなきゃならないんだ！
なのにどうして体がいう事を聞いてくれないんだよ！

体の力が抜けていく、意識がもうろうとしていく！
早く！早く樹里をッッ！！

「痛いよ…おに……ちゃ……」

おい冗談なんだろ！　ドッキリなんだろ！
嘘だよな！　映画でもこんな展開三流だぞ！

だから出てこいよ！　どうせスタッフとかがあざ笑ってるんだろ！
なんで、なんでこんな事するんだよッ！

妹が泣いているじゃないか！！

手の伸ばすのに届かない！
瓦礫がまた俺達の周りに落下してくる。

なんだよこれ、本物なのか――ッ！！

「いたぞ！」

「！」

突如声が聞こえる！

救助だ！　助かったんだ！

俺はその時、確かな希望を感じた。

だが、違ったんだ…それは希望なんかじゃない

「ッ！？」

現れたのは救助隊ではなく、ただの一般人かと思える男だった。
一瞬何が起こったのか分からず思わず沈黙してしまう。

男は俺が気絶していると思いこみ、堂々と通信を始める。

「はい、いました。

――はい、父親も……母親も死んでいます。
妹は瀕死、兄は……気絶しているようですが外傷はないかと……

ええ、はい。わかりました」

母さんも……死んだ？

男は頷くと……

樹里の頭上にある瓦礫のバランスを崩しはじめた。

第134話　MADNESS　SPEED　LOVE

何を…やってるんだよ――――

「――ッ！！！」

声がでない、叫ぼうとしても力が入らなかった。

おい！

おいッッ！

何やってるんだお前！！

ふざけんなッ！　樹里は助けてやってくれ！

頼むッ！

どうして殺そうとするんだよぉッ！

樹里がなにをした！　オイッ！？

やめてくれッ、たのむから止めてくれよぉ！

「人がいたぞぉおおおおお！」

男は白々しい芝居をとると、救助隊の方へ走っていく。

何やってんだよッ！

瓦礫をどけてくれよ！　樹里にぶつかるだろ！！

あああああ止めてくれっ！

お願いだ！

お願いだから樹里を助けて！

俺はどうなってもいいから！

樹里だけは助け――

その時、男がバランスを崩したせいで…

樹里の頭上にあった瓦礫が崩壊して———

「————」

うわアアアああアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアあああああああああああああああああああああああああああああアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアあああああああああああァアアァァアアアアアアアアァァァッァアアアぁぁ

あああああああああああああああああああああああああぁあ
あああああああああああァアアアァァアアアアアッッッ

俺の意識はそこで完全に途切れた。
瓦礫に頭を潰される妹を見なくてすんだのは…幸いなのだろうか？
妹は、父は、母は……こんな、こんな嘘みたいな事で死んだのか？
俺たちの人生ってなんだったんだよ。
こんな結末を迎える為に、毎日苦労して生きてるのか？

どうしてこんな簡単に――――

死ぬんだよ？

「今日から…私がお前の父親だ。分かったな」

「……はい」

結局、俺の家族は全員瓦礫にのまれて死んだ。
文字にしてみればたった一文。それで家族全員が俺の前から消えた。

数少ない親戚は俺を受け入れる事を拒否し、
俺は施設へ預けられる……筈だった。

しかし、それを天王路剛が拒む。
剛は俺を何故か養子にし、跡取りにしようとしたのだ。

何故かは分からん。

だが……天王路の社員の中に…見つけた。

「ッッ！！」

あの男、樹里を殺した……

天王路グループ、表の顔と裏の顔。
俺は焦る心を抑えその男をつけた。

そして、偶然ソイツが同僚と話している所を見つけ、聞いた。

「お前ッ、本当なのか！！　妹の方は見捨てたのかよ！」

「ああ、正直嫌だったよ。まだ子供だった、助けを呼べば救えただろに
俺が殺しちまったようなもんだ…」

「でも、なんで社長はその長男以外を殺すように命じたんだ？」

「秘密を知ったらしいぜ。
あのビルの視察会に呼ばれたのは秘密を知ってしまった人間らしいからな。
家族全員参加も……わかるな？」

「まっ、まさか！　最初から全員殺すつもりで……」

「馬鹿野郎！　声がでかい…！

それで、もし誰か一人男の子が生き残れば
ソイツを連れて来いって言われただけだよ。

あの双護って子が特別なんじゃない、運が良かっただけだ」

「そ、それであの双護って子が唯一生き残ったのか。
社長はその子をどうするつもりなんだ？」

「養子にするらしい。いや、もうしたのか」

「養子！？」

「ああ、わざわざその子の親戚に金まで払って、
孤独になるように仕組んだらしいからな」

「なんでまた…そんな事を」

「狂ってるのさ。
何でも奇跡的状況で生き残った強い運をもつ男が

跡取りにほしいらしいからな。
マジで狂ってる」

「おいおい、あまり大声で話すなよ。
ここだけの話、今回の事件も意図的な設計ミスが原因らしいぞ。
本当の設計書と違う構造にして、あまった金を横領したとか……」

「ろくな人間がいやしねぇな。俺も含めてだが」

「叩けばいろんなホコリがでてきそうだな。
まあ、叩ければの話だが」

天王路の…命令……剛の…訳のわからん理由で樹里は…

死んだ？

いや、殺された。

「双護くんだったか？
可哀想になぁ、社長も酷い事しやがる」

「関係者である以上、運が良かったと考えるべきだろう。
妹さんは…運がなかったのさ。

社長は男尊女卑の念がまだあるからな、お前も知ってるだろ？

社長の娘さんはもう――」

「ああ、あれも運がない話だったな。
社長も発狂してたからな、理由が今なら分かるぜ。
自分の娘に手をかけたようなモノだからか…」

「双護くんが気絶していて良かったよ。もし意識があったなら…」

「社長は今回の事件に関わった人間を全て殺すつもりだった。
設計ミスも隠蔽するように爆弾をつかって倒壊させたらしいからな」

「社長にとって一石二鳥って訳か。
裏の顔をしった人間とその家族を始末できて、
かつ手抜き建築だったビルを破壊できた訳だからな」

「三鳥だよ、いわゆる『奇跡の子』を手に入れたんだからな。

悪魔だよ社長は……

本当にこの世にそんな事件を起こすやつがいたなんて――」

天王路ぃィイィイイイィイイイイイィイイッッ！！

殺す！　殺してやるッ！

ぶっ殺してやるッッ！

覚悟しろよ、俺を見逃したのは大きいぞ。
必ず後悔させてやるッッ！

奇跡の子？

確立？

秘密を知った？

知るか…ッ、知るか知るか知るかッッ！

知るかぁあああああぁぁぁぁあああッッ！！

全員皆殺しだ！

天王路に関わった奴全員ぶち殺してやる！

返せよ、返せよッッ！

返してくれよ父さんをッ！

母さんを！

樹里をぉぉおおおおッッ！

養子？

ああ、上等だぜ、だったらまずお前の娘からぶっ殺してやる！

真由香ァァァアアアアッッ！！

覚悟しろよ、剛！
お前の目の前で真由香を殺してやるっ！

苦しめて、苦しめて苦しめてッッ！！

泣き叫ぶあの女をズタズタにしてやるっ！

『天王路』双護はありったけの憎悪と呪詛の言葉を浮かべながら真由香の部屋へと移動する。

いくら男尊女卑の念を掲げていた剛だろうが、娘は愛していた。
その娘を目の前で拷問して殺してやる。

双護はそう決めて、真由香の部屋へと足を進める。

「そ、双護さま!?」

「真由香…妹に会いたい。通してくれるか?」

「で、ですがッ……」

真由香の部屋の前ではメイドが困ったように立っていた。

ああ面倒だ――ッ

「俺が会いたいと言っているんだ。通してくれ」

「あのっ…剛さまからは通すなと……」

「親父には俺から謝っておく、安心しろ。
俺が全てをかけて守ってやる」

「は…はぁ」

メイドは複雑そうに俺に道を開ける。

さあ、真由香……

まずは四肢を使えなくしてやろうか？
それとも目を潰してやろうか？

いっそ、絞め殺してやろうか？

狂気の喜びに包まれて俺は扉を開く。

どうやって殺してやろう？
何でもいい、お前らが樹里を、父さんと母さんを殺したんだ。

お前らも殺してやる

「……え？」

よく、考えるべきだった。

男達の会話で真由香の話がでていたな…

アレをもっと深く考えるべき…だった。

「・・・」

なんだ、コレは……？

「そ、双護さまっ！？」

中にはメイドがいた。

その隣には…

「あうー…ぁぁ。あー、うー」

これは…誰だ？

「うあー、あああああー……」

だらしなく涎をたらし、まるで赤ん坊のように指をくわえ…
立つわけでも座るわけでもない。

寝転んで、立ち方を忘れたように……

「きゃははは！　くま！　くまさん！」

ぬいぐるみを持って楽しそうに振り回して…

誰だ？

コレは……

「真由香は……どこにいる？」

「え…ッ？」

メイドは困ったように俺の顔を見た。
そうだ、俺は真由香を捜しに来たんだぞ？

こんな赤ん坊みたいなのを捜しに来たんではない…

「だぁー！　だぁ！　きゃはは！」

「あのっ、えと……」

「・・・」

その時、後ろでまた扉が開く音が聞えた。

アイツ、剛…ッ！！

剛は俺に気づくとため息をついてそのままコッチへやってくる。

「ご、剛様！　申し訳ありません！」

「構わん、いずれは話す事だ」

そう言って剛はその『子供』に近づく。

「思い出したかい？　思い出したろうっ！」

「ッ！！」

「！」

剛は強く子供の肩を揺する。
だが、子供は怖がるだけで剛の望む答えを言う事はなかった。

「怖いよぉ！　おじさんだれ！？」

「なっ……！」

「！！！」

何かが破裂するような音が聞えて双護は息をのむ。
見れば剛が子供を思い切り叩いていたのだ。

子供は大きくよろけ、直後大声で泣き出した。
止めに入るメイドを無視して剛は子供に暴言を浴びせる。

お前こそ誰だ！？

娘を返せ！

――と、しばらく憎悪の暴言は続く。
そして剛は諦めたかの様に首を振ると、部屋を出て行くのだった。

「……ぁ」

大声で子供は泣いていた。
メイドに視線を送ると、彼女は恐る恐る口をひらく

「あの事故現場に…いたんですよ。真由香様は…
それで、瓦礫が頭にぶつかってしまって…」

メイドは淡々と、俺と目を合わせずに喋りつづける。
目の前で泣いている女は、瓦礫を頭にぶつけて記憶が消えたらしい。

真由と同じ顔、同じ声…当然だな。
コイツは、真由香なんだから…

「は…ははは……」

笑えてくる。ざまあみろ剛、真由香――ッッ！！

天罰だ。お前らに罰が下ったんだよ！
どうせ真由香があの現場にいたのだって、また俺を馬鹿にする為だろう！？
最高だ！　最高の気分だよ真由香！

お前の負けだ！　そして俺の勝ちだッッ！！
見てるか！？　ほら、俺の勝ちなんだよッッ！！

「ま、真由香さまっ！

ああ、どうか泣き止んでください！」

「うえええええん！！　いだいよぉおおおおお！」

「・・・」

そうだ、これが俺の望んでいた事……

「・・・」

「うえぇえええええええええん！！」

しかし、何か引っかかる。
これは……誰だ？

真由香ではない。じゃあ誰なんだ？

コイツの家族は？
名前は？
歳は？

ん？　コイツが……何をしたのだろうか？

おかしい、何故だ……あれ程。

あれ程殺したいと思っていた。

あれ程憎んでいたのに――――

「大丈夫か？」

「！」

「うぅぅ…！ひっく！」

何故俺は、手を差し伸べているんだ……？

どうして俺は…どうでも良くなっているんだ?

なんで俺は…この女に同情しているんだ?

「親父はちょっと機嫌が悪いだけさ、痛かったな。

大丈夫か?」

「うぅぅうう?」

もう、どうでもよくなっていた。

虚しくなっていたのかもしれない、膨らんだ風船は割れずに萎んでしまった。

「おいおい、実の兄を忘れる奴があるか。真…」

だけど、あの女の名前だけは呼びたくなかった。
それは譲れない、だから…

「真由、俺は双護。お前の兄ちゃんだぞ？

あはは…」

「おにい…ちゃん？」

そうだ、コイツはあの女じゃない。
真由香じゃない、真由だ。俺の…たった一人の家族なんだ！

「おにいちゃん！」

「ああ！」

真由香は死んだ。
剛も苦しめた。

最高じゃないか、俺は真由に微笑むと。
涙を拭いてあげるのだった。

それから、俺は憎しみと悲しみを封印した。
時間は少しかかったがカウンセリングの先生の協力もあってか大分心も楽になった。

それに資産家の息子という生活も悪くないものだ。
好きなものは買えるし、いいものを着れる。

慣れれば有意義なものだった。

剛も俺に最低限の事を教えてくれただけで厳しい教育はしなかった。
剛も愚かな男なのかもしれない。
どこかで天王路グループを変えようと必死だが、所詮は闇にそまった男なのだろうか？

それとも……

天王路グループの勢力も最初よりはるかに落ちてしまい、
今は安定こそしているが最初の頃の栄光はもう見る影もない。

裏の闇とも少しずつだが、疎遠になってきているようだった。
おそらく引いたのではない。見捨てられたのだろうが――

剛は案外優しい男だった。
俺達に心配をかけまいとしていたのだろうか？

なにやら俺に責任が回らないように努力していた。

だが悪い、お前は流石に許せなかった。
一生苦しみ続けろ、それがお似合いだ。

尤も、相変わらず剛は真由には愛情を見せなかった。
だろうな、お前の娘は死んだんだ。

コイツ…真由は俺の妹だ。
俺達は二人だけの家族なんだよ

「おにい…ちゃん…！！」

真由は記憶は駄目だが、知識を失っている訳でなかった。
だから完全な子供ではない、知識面ならば普通の中学、高校一年と同じだ。

「おいおい！気をつけろよ真由！」

妹の真由が笑いかけてくる。
それは嬉しいがなにやら危なっかしい、いつもそうだ。
真由ははしゃぐと周りが見えなくなる。

誰かがしっかり見ててやらねば…

「ほら」

「！」

手を差し出す。真由はニッコリと笑うとその手を握り返してくれた。

そんな、お話。

「笑ってくれてもいい。滑稽だ、俺は愚かだ」

「ッッ！」

鏡治はあまりの迫力に完全に怯んでいた。
自分の世界では考えられない事。

滑稽？

愚か？

何を言っているんだ双護は、鏡治はもう何がなんだか分からない。
真由香と言う人間がいた。そしてその人間は真由になった？

絶望の中に光った、最後に残った希望。
それに双護はすがったのだ。

それは、真由。彼の『妹』

「だけど、答えてくれないか？
鏡治、俺は…彼女を真由として守りたいのか……」

真由香として殺したいのか？

第１３４話　ＭＡＤＮＥＳＳ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（後書き）

はい、とまあ過去編終了ですね。
ちょっと長くなっちゃったかな？

次の更新はごめんなさい未定で
多分、火曜か水曜かなと

では次もよろしく！

第１３５話　ＬＯＶＥ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（前書き）

はい、更新ですね。
次は木曜かな？

でも明日１１１話を更新するかも……

「決断の二対」

ではどうぞ！

第135話　LOVE　SPEED　LOVE

曇天の空、それは彼の迷いのようだった。

「ずっと封印していた感情が目覚めてしまったのかもしれない。
真由香はもう戻ってこない、だから今まで耐えられた。
純粋に真由を愛せた。

だが今リコンファームがあれば、真由を真由香にさせる事ができる」

俺は真由を、真由香に変えたかったのかもしれない。
そして…真由香を、殺したかった。

双護はジッと空を見つめていた。
真由は真由。真由香は真由香、それは分かっていたのに――

今、真由香に会えるかもしれない。ずっと彼女を恨んでいた。
昔も、今もだ。

「俺は復讐を遂げたいと…願ったのかもしれない」

「……真由ちゃんは、お前を慕っている。お前の事が大好きなんだ！」

また、雨が少し降り始めた。
だが二人は気にする事なく立ちつくす
少しでも雨粒が彼らの心を冷やしてくれるのだと信じて。

「頼むッ！　お願いだ！」

鏡治はぬかるむ地面の中、膝をついて頭を下げる。
額に泥をこすりつけるような愚行、情けない姿だと人は嘲笑するのだろうか？
双護は、そんな彼を無表情で見つめる。

「お前はッ！　真由ちゃんの味方であり続けてくれ！

真由ちゃんを愛し続けてくれよぉッ！！」

「・・・」

双護は目を閉じる。
思い出すのは今まで真由と過ごした楽しい日々、それは双護にとってとても大切な思い出だった。

『リコンファームを使えば、真由は真由香の記憶を取り戻す』

思い出すのは今まで樹里と、家族と過ごした楽しい日々。
そして真由香に味あわされた苦痛と屈辱の日々。

それは双護にとって憎悪と憎しみの塊だった。
真由香が、天王路が憎い。

家族への想い……

「真由を愛した二年あまりと、真由香を恨み続けた十二年……」

双護は鏡冶と距離を取る。
雨は激しく、彼らを濡らしていた。

「明日、創英は赤い靴を発動するらしいな。俺は真由を愛している。
もし真由がリコンファームによって真由香の記憶を取り戻したなら、
真由は真由でなくなる。
それは真由を殺す事と一緒だ、
ならばせめて真由は真由のまま…死なせてあげたい」

そして、その時…俺の全ては終わりを告げる

「まさかっ…」

「鏡冶、俺は…真由を殺す。真由を守る為に」

守る為に――ッ？

「なんで…なんだよっ！！　殺す必要なんてねぇじゃねぇか！
ああそうさ！　皆に事情を話して
リコンファームを使わないでくれって言えばいいじゃねぇか！！」

「・・・」

何も言わず、何も表情を変えず。
双護は素早く変身を済ませ、キャストオフで鏡冶を吹き飛ばす。

「今日と明日が変わる境界線の時、
俺はもう一度この場所を通って真由を殺しにくる。
その時、お前がどうするかは……」

ダークカブトはその言葉を言いきる事なく、クロックアップで姿を消す。
鏡冶はしばらく立ちつくしたまま、ふいに倒れた。

「なんで…なんだよッ……どうしてなんだよぉおおおおおッ！」

鏡冶の涙は、雨に溶けていったのだった。

「鏡冶君……」

「真由ちゃん…」

ずぶ濡れになった鏡冶。
その帰りを真由は玄関でずっと待っていた。
真由はタオルを鏡冶に差し出すと、静かに微笑む。

「風邪…ひいちゃう……から」

「……ありがとう」

二人の雰囲気は重い。
真由はどこかで悟っていたのだろう。

鏡冶が今……兄に会ってきた事を。
そして何より何故、兄がコチラへこないのかを。

「ねえ…鏡冶君……」

「・・・」

「おにいちゃんは……ボクの事が…嫌い……なんだよね」

ドキリとしてしまう。

違うと……ただ違う、そうじゃないと大声で言いたかった。

だけど、できない。

できないのだ。

「知ってたんだ。

ううん、詳しくは分からないけど…

前に寝言でお兄ちゃんがボクの事…許さないって……」

真由は言葉を搾り出そうと必死だった。

だが一言一言発する度に目から大粒の涙が零れていく。

真由は双護が自分を愛してくれていると思っていた、だが不安もあった。

何故兄が自分を恨んでいるのか、分からない。

だから怖い。

きっと勘違いなのだろう、夢でなにかやってしまったのだろうと今までは思っていた。

特に気にしてもいなかった、だが明らかに今回の世界での兄の態度……

「ボクおにいちゃんに何かしちゃったのかなぁ……！

だったら許して欲しいよぉ！」

真由はついに泣き出してしまう。
小さな肩を震わせて、必死に堪え様と歯を食いしばって……

だけど、兄の事を思うと涙が止まらなかった。

母親はいなかった。母親と言うものがどういった存在なのかも実感がない。

優しい存在？　甘えたい存在？
そんなの知らない。メイドがいる……

だけど、街で仲良く歩いている親子が羨ましかった。

父親には叩かれて、しきりに同じ事を言われた。

お前は誰だ？

娘を返してくれ！　お願いだ！

お前なんか知らない！

その顔でこれ以上喋るな！

辛かった。悲しかった。確かに父親との思い出なんて思い出せないのも事実だ。

段々と彼は自分を無視するようになり、関わりも無くなっていったが。

酒に酔った父からは、いつまでも罵声を浴びせられた。

違う、そうじゃない。こんなんじゃない！

ドラマやアニメで見た『父親』はもっと優しかった。

こんなの……あんまりだ。

メイドさんや会社の人は、自分に優しくしてくれたけどどこか壁があった。

多分、自分が社長の娘だと言うから遠慮しているんだ。

傷つけたらどうなるか分からないから……干渉は控える。

でも、だけど……

兄だけは違った。

一緒にいろんな事をして遊んでくれたし、

男の子なのにおままごとにも付き合ってくれた。

一緒にいろいろな物も食べたし、好きな物は必ず分けてくれた。

一緒にテレビも満たし、一緒にお風呂にも入った。

一緒に眠ったし、一緒に泣いたりもした。

大切な、大切な家族なんだ。

でも、不安になってきた。
兄は……自分のことが嫌いなんだろうか？

そんなの……いやだ

「おにいちゃんに会いたいよぉおおおぉおおッッ！！」

「……っっ！」

会いたい、それだけ。

だが――ッ　鏡治は理解する。

こんなにッ、真由ちゃんは双護の事を慕っている……

ああそうだ、真由ちゃんにとって本当の家族は双護だけなのだからッ

鏡治の眼にも涙が浮かぶ。

真由は、彼女は……

『俺は真由を助けたいのか、真由香を殺したいのか…』

殺したい程憎んでいた人間と、全てを許してまで愛した人間が同じ体の中にいる。
鏡治はそんな経験がない、だから…分からない。

でも、たった一つだけ

「真由ちゃん、おにいちゃんが好き？」

「うんっ！　大好きだよぉぉ！

だから仲直りしたいよぉぉおお！」

一つだけ分かることがあるのなら……

「じゃあ、仲直りできるように俺が言ってあげるよ」

「本当…？」

この娘には笑っていて欲しいッ！

「ああ！　約束だ！」

「うん！」

誓いの指を絡める。

双護、お前をぶん殴ってでも真由ちゃんへの愛情を呼び出してやる！

覚悟しろよ――――ッ

「真由ちゃん…その、えっと…」

「？」

「好きだ…よ」

「…うん！　ボクも鏡治くん好きだよ！」

鏡冶は手を差し出す。
真由はニッコリと笑ってその手を握るのだった。

まだ外は暗い。

それはそうだろう、もうすぐ時計の針は零を示そうとしているのだから。
まだ皆眠っている時だ、しかし赤い靴はもうすぐ発動される。

司達は今日、ブレインタワーに突撃をしかける作戦だった。
前回は失敗したらしいが、今回は内部に詳しい神也達がいる。

創英の野望を絶対に打ち砕く為に戦うのだ。

そして、同時にリコンファームを発動するかもしれないと言う事がある。
リコンファームが発動すると言う事は、真由が実質死ぬと言う事だった。

「っしゃあああああ！」

鏡冶は気合を入れる。
外は大雨だが彼の心は迷いなく晴れ渡っていた。

悩んで答えが出るか？

ああ、そうだ。でねぇよな鏡冶！
だったらもう真正面からぶつかっていくしかねぇだろ！

双護が迷ってんだったら強引に答えを決めさせるまでよ！！

「ガタックゼクター！」

『ん？』

「頼む！　俺に力を貸してくれッ！」

頭を下げる鏡冶を彼は笑う。

『今さらなんだよお前、本当不思議な奴だな』

「へっ、ほっとけよ」

笑い合う二人、だがそこにもう一つの声が混ざる

「鏡冶…」

「！」

暗い玄関。

それが誰か鏡冶は判断に遅れてしまう。

現に彼は姿を見せなかった、だが声だけはハッキリと聞こえる。

「今、鏡冶の世界では……仮面ライダーは兵器なのかもしれない」

「……ッ？」

そうだ。マスクドライダーはワームを殲滅する為に作られた兵器。
それ以外の物ではない。

「だけど――」

男は言う。

俺達の世界じゃ…仮面ライダーは――

「ヒーローなんだっ！」

「！！」

「双護を…どうか、頼む」

「…ッ！　ああ！」

鏡冶は頷くと玄関を飛び出す。

雨が彼を歓迎した、ああ上等だ。やってやるッッ！！

「そっちもよろしく頼むぜ！　司！」

走り去る鏡治を物陰から司は見る。

驚いたな、まだ少ししか話してないのに…

「……ハッ、俺達も勝たないとな」

司は微笑むと、教室に戻っていくのだった。

第135話　LOVE　SPEED　LOVE（後書き）

wiiのカービィを買いました。
遂にここまで来たかと

感動で目頭が熱くなりましたね、はい

まあぶっちゃけ、最初はカービィの小説書こうと思ってましたw

いやいや、まあいいや。
では次もよろしく！

第136話　LIKE　SPEED　LOVE（前書き）

はい、更新ですね。
ごめんなさい、次の更新は未定で。

一応土日には更新できるとは思うのですが……

「二人の戦い」

ではどうぞ！

第136話　LIKE　SPEED　LOVE

「・・・」

雨は少し勢いが減り、小雨になっている。
双護はその小雨のなかをゆっくりと歩いていた。

傘はささない、何故かそう言う気分だった。

雨が彼を冷やす、冷静にさせる。
彼は何度も自分に問いかける。

真由を愛している?

イエス。

真由を守りたい？

イエス。

真由とずっと一緒にいたい？

イエスだ…

じゃあ、真由香を恨んでいる？

イエス。

真由香を殺したい？

イエス。

真由香と永遠に別れたい？

イエスだ…

彼が全力でリコンファーム使用を阻止しなかったのも、迷いがあったからに他ならない。

ずっと抑えていた、それは苦痛じゃない。

だって、もう永遠にアイツは蘇らないのだから。

もちろん、これからもそうだと思っていたのに。

『おにいちゃん…！』

『おい双護ぉ！　きゃはははは！』

双護は迷っていた。

自分が今、どこを歩いているのか？

真由香を殺す道？

真由を守る道？

分からない、そう分からない。
だけど、真由を殺せば……自分は後悔するのだろうか？
それとも答えを見つけられるのだろうか？

そう、これ以上真由香の幻影に囚われて、真由を愛せなくなるくらいならば…

いっそ……

「・・・」

双護は、ふと足を止める。
向こうから誰かが歩いてくる。
双護はそれが誰なのかを確かめるため、その場に止まった。

「・・・」

鏡治は歩きながら何度も自分に問いかけた。
一歩一歩たしかに踏みしめる彼は、自問を繰り返す

真由を救いたい？

イエス。

真由を守りたい？

イエス。

真由とずっと一緒にいたい？

それは…い、イエスなの…か？

ああそうだ、イエスだろうな。

じゃあ、双護を救いたい？

イエス。

双護と真由を再び元の関係に戻したい？

イエス。

双護にまた真由を愛してほしい？

イエス。

創英を止めたい？

イエス。

この街に、世界に平和を取り戻したい？

イエス。

そう、何度やっても、何を問うてもイエス。

正義の味方に憧れ続けた人生。
これからもそうだろう、ヒーローもんはハッピーエンドが似合う。

いや、そうだ。ハッピーエンドじゃなきゃいけねぇ！
鏡治は切にそう思う。

誰かが泣いて、誰かが悲しんで終わるなんて認められないな。

「・・・」

前で誰かが立ちつくしている。
鏡治はそれが誰か確かめる事もせずにどんどん前に進んでいく。

止めれるか？

止めてみろよ。

ああ、そうだ。止めるぜ俺は

「……真由は？」

「まだ寝てるよ、でも今日にはリコンファームの所へいく。

いつでも発動できるようにな」

二人は一定の距離を保って立つ。

二人の間には短いようでとても大きな距離がある。

友達と言う訳でもない。
双護にとって鏡冶はただ少しの間、妹の面倒を見てくれた人…と言うだけ。

鏡冶にとって双護は少しの間だけ一緒に過ごした少女の兄…と言うだけ。

そう、その程度の関係なのだ。
普通ならばもう関わる事のない関係なのかもしれない。

お別れを言えばもう二度と合う事のない関係なのかもしれない。

だが…しかし。

『おにいちゃん！』

『鏡冶くん！』

この二人の間には…確固たる橋がある。

強靭な架け橋が存在しているのだ！

「・・・」

「・・・」

二人は分かっている。

それを渡らなければどちらも進めはしないのだとッ！

二人が進む先には双方が立っている。どかさなければならないのだ。

「鏡冶、お前…」

「・・・」

「真由が好きか？」

「……ああ、そうだな。多分、いや…好きだ」

「ラブか？」

「さあ、どうだろう？
でも、真由ちゃんといる時はスゲー楽しいんだ。
できればずっと一緒にいたい」

鏡治は笑ってみせる。
双護は少し、ほんの少しだけ微笑んだ。

「ああ…そうだな。
できれば、お前には真由を愛してほしい…
今だけでも――ッ」

「？」

双護の瞳には真由が映っていた。
もっとも、それが真由なのか？　真由香なのかは分からない。

もう一度言おう、いや何度でも言おう。
双護は真由を愛している、だが迷っていた。

真由は愛せても、真由香だけは愛せない。

だから……

「真由を愛してくれ、女として」

「・・・」

鏡治は何も言わずに頷いた。
どちらが真由を……より愛しているのか、確かめたいのだ。

そして同時にそれは決意。
もし自分が勝てば……真由を、真由香を殺す。

今回の事で、自分の歩く道が分からない程に混乱した。
真由香が蘇るかもしれないというだけで、彼女への憎悪でおかしくなりそうだった。

いやもう既におかしくなっているのかもしれない。
このままリコンファームを発動せずに終わったとして、真由を愛せるのだろうか？

また似たような事が起こったら、真由を真由香としてみてしまうのではないだろうか？
真由に、真由香へのどす黒い思いをぶつけてしまうんじゃないだろうか？

それが怖かった。

恐れていた。

真由には常に幸せでいてほしい、悲しい思いをしてほしくない。
だから、せめてその前に……

自分の手で……終わりを、真由を真由のまま終わらせて……

「俺は真由を愛している」

家族として。それはＬＩＫＥ

「俺も、真由ちゃんを愛しているさ」

一人の女として。それはＬＯＶＥ

二つのゼクターが激しい火花を散らしながら飛翔してくる。
いつからか赤い靴、創英、世界は二人の心から消えていた。
彼らの世界にいるのは、双方の愛と――

たった一人の少女。

「俺は真由を守る。守るんだよッ……」

「守る？　ああ、違うぜ双護…救わなきゃならないんだよッ！」

もちろん、お前も！

真由への愛に縛られ、真由香への憎悪に縛られたお前を

「もうこっから先は絶対に誰も悲しませないッ！

俺は…俺はッッ！」

今だけでいいっ！

ならせてくれよ、ヒーローにッ！！

「俺はッ、正義の味方！悲しみを殺す――――ッ
仮面ライダーなんだからよぉおオオオおおおおおおオッッ！」

『ＨＥＮＳＨＩＮ』

「来い、お前に勝てば……
俺は彼女から解放されるんだからなッ！」

『ＨＥＮＳＨＩＮ』

二人は同時に変身して走り出す。
愛と愛がぶつかり合う時、立っていられるのは……

「キャストッッ！！オフッッッ！！」

「キャストオフ…ッ」

『『Ｃａｓｔ　Ｏｆｆ』』

たった数日共に過ごした愚直な愛か？『Ｃｈａｎｇｅ・ＳｔａｇＢｅｅｔｌｅ』

それとも数年間の、迷い始めた愛か？『Ｃｈａｎｇｅ・Ｂｅｅｔｌｅ』

「ウオォオオオオオオォオオオオッッ！
ォオオオオォオオオッッ！！」

「……ッ！」

カリバーとクナイがぶつかり合い、激しい火花を散らした！

二人の瞳には、愛する少女がいる。

その少女を守る為に、救うために……彼らは戦うッッ！

第１３６話　ＬＩＫＥ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（後書き）

変更点をここで一つ。
クナイガンの構造が少し違います。

クナイモード時は連射性に特化した銃に、アックス時は威力を重視した単発式になります。
銃口も位置が少し違うと言う事で。

では次もよろしく！

第１３７話　ＤＵＥＬ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（前書き）

はい、更新ですね。

ごめんなさい、次は未定で

多分明日は１１１話だけ更新しそうかな……

「愛ＶＳ愛」

ではどうぞ！

第137話　DUEL　SPEED　LOVE

「ウラァアアアアッッ！！」

カリバーで舞うように斬りつけていくガタック。
ダークカブトは最小限の動きでそれを防いでいく。

火花が視界を一瞬隠すが、それでもガタックの攻撃はダークカブトには届かない！

「がら空きだ」

「ッ！」

ダークカブトの足払いが決まり、ガタックはそのまま地面へと叩きつけられる。
そこに打ち込まれるだろう銃弾をかわすためにガタックは地面を転がる。

「フッ！」

だがダークカブトのクナイガンはしっかりとガタックを捉えていた。
ガタックは衝撃に耐えながらもカリバーを一つダークカブトに向けて投げる！

放物線を描きながらカリバーはダークカブトに向かった。

「・・・」

だがそれも簡単に避けられてしまう。
同時にガタックの装甲から火花が散る。

しかし――

「プットオン！」『Ｐｕｔ　Ｏｎ』

「何ッ？」

弾かれたカリバーと周りにあった装甲の破片が、ガタックに収束する。
その際に装甲の群がダークカブトにぶつかり、ダメージを与えた。

よろけるダークカブト、そこへガタックバルカンが向けられる

「チッ！」『Ｃｌｏｃｋ　Ｕｐ』

だがバルカンは着弾しない。
ダークカブトはクロックアップを発動させて回避したのだ。

そのままガタックに連撃を仕掛けるダークカブト。
尤もマスクドフォームのガタックは防御力が高く、
大きなダメージは与えられないのだが……

「お前は俺が真由ちゃんを連れて行こうとした時ッ！
全力で挑んできたなっ、殺されるかもしれないのに…！
真由ちゃんのためにッ！」

ガタックはダークカブトの攻撃が当たる感覚から、タイミングを予想して反撃に出る。
しかし虚しくもそれは空振りに終わっていくのだが……
何かがつかめそうで、ガタックの闘志は尚、膨れ上がる。

「あの時はまだ真由香への憎しみを抑えていたからなッ！」

足を中心にダメージを与えていくダークカブト。

ガタックがよろける瞬間を見て、自らもプットオンを発動させる。

「俺にはお前の気持ちはわからないッ！
殺したい程に憎い相手と――ッ！」

マスクドフォームの強力な蹴りを受けてガタックは倒れそうになる。
しかし気合で踏みとどまると、そのままバルカンを発射した！
物凄い衝撃でダークカブトの意識が一瞬とんだが、
彼女の姿を思い浮かべ、歯を食いしばる。

「グッ！」

「殺したい程憎い相手と、愛した人が一緒の体！
そんなの俺には一生わかんねぇよ！」

カブトはクナイガンをアックスモードに変えて振り下ろした。
両者倒れそうに、気を失いそうになる状況の中、にらみ合う。
仮面越しに見る互いの眼。うつる少女――ッ！

「真由は純粋だ。その純粋な心に俺は救われてきたっ！」

「俺もだよッ！！　だったらそのままでいいじゃねぇか！」

『お兄――――』

『おい、双護ぉ！！　お前――』

「チラつくんだよッ、真由香がなぁッ！！」

『『Ｃａｓｔ　Ｏｆｆ』』

「「ぐあああああッッ！！」」

吹き飛ぶ両者、着地を決めたのはダークカブト。
ガタックはそのまま倒れてしまう。

そのガタックに、ダークカブトはクロックアップで一瞬にして距離を詰めた。

地に伏したガタック、隙だらけの体――ッ！！

だがしかしッ！

それこそガタックの狙い！

「ラァァァッ！！」

自らもクロックアップで同速になっていたガタックは
カリバーを重ね合わせ、ハサミのようにカブトを拘束する！

「クッ！」

「お前はッ！　真由香さんを殺して満足するのかよッ」

『Ｒｉｄｅｒ　Ｃｕｔｔｉｎｇ』

「…ッッ！」『Ｐｕｔ　Ｏｎ』

ダークカブトの装甲がガタックを背後から襲う！

その衝撃でガタックはカリバーから手を離してしまった。

ダークカブトは素早くカリバーを蹴り飛ばすと、アックスモードで斬りつける！

「ぐあああぁぁぁあああッッ！！」

「……後悔か、するだろうな。

真由への罪悪感、感じない訳がない」

「だったら……グゥ…ッ！

もういいだろ！　真由ちゃんだけを愛して――」

「俺が、俺と樹里が受けた屈辱！　あの女への憎悪も確かなんだ！」

重い拳がガタックに打ち込まれる。

プットオンを発動する為にガタックは手をゼクターへ向けるがダークカブトはそれを許さない。

クナイガンでガタックの手を弾くと、全力を込めて蹴りを仕掛ける

「グッ！！」『Ｃｌｏｃｋ　Ｕｐ』

ダークカブトの拳が遅くなる。

ガタックはバックステップで距離を空けると、膝をついた。

「ゲホッ！　ゲホッ…！」

腹部を押さえて、ガタックはダークカブトを見る。

愛と憎しみの狭間で彼は葛藤しているのか？

それとも憎しみの先にある後悔さえも受け入れる気でいるのか？

「何がお前をそこまでさせるんだよッ！！」

ガタックのドロップキックはダークカブトを大きく吹き飛ばす。

さらに追撃、地面へ着かせる事のない猛連撃。

「真由香さんへの想いがあっても、お前は真由ちゃんを愛してやってくれよッ！

お願いだ双護！
真由ちゃんはお前しかいないんだよ！」

ダークカブトは瞬間的に手を伸ばす。
無意識の一撃が、一瞬だけガタックの動きを止めた。

その隙にキャストオフを発動させてガタックとの距離を空けた。

「真由香が邪魔するんだよッ！
真由への愛も、思い出も！

全部アイツが邪魔をするんだよ！」

クロックアップによって激しい高速戦が繰り広げられる。
閃光の様に二人はぶつかり合い。
互いの装甲を削りあう。

クナイガンとカリバーでは、ガタックの方が接近戦においては有利だろう。

だがダークカブトはクナイガンを的確に操り、同等の戦いを見せた。
いや同等なのだろうか？

「お前に、俺の気持ちが分かるか？」

「ッ！」

ダークカブトの蹴りがわき腹に叩き込まれる。
呼吸が止まる、ガタックの動きが鈍りその隙にクナイで連撃を決められた。

なんとかカリバーで弾くが、それでも大きいダメージを受けてしまう。

「真由ちゃんへの想い？」

ガタックの心が揺れる。

俺は……真由ちゃんを守りたい。

だから戦っている、双護ともまた仲良くしてほしい……

「……ッ」

確かに真由の事を少し女性として意識した時もあった。
だがそう言う事を抜きにしても守りたい。

その想いに嘘はない。

だけど真由香を自分は知らない、真由香も天秤にかけて戦っている双護に…

想いの強さで勝てるのか？

「グッ！！」

腹部に衝撃が走る。

撃たれたのか？

鏡冶は辺りを駆け回りながらダークカブトに近づいていくが、ダークカブトに軌道を読まれ蹴り飛ばされる。

「鏡冶、お前は…真由を救いたいと言ったな」

「くッ……」

「なら…お前は、その事だけを考えろ」

ふと気がつけばダークカブトが目の前にいた。
踵落としで肩を抉られる、苦痛の声を上げてガタックは踏み込んだ。

そこへさらに襲い掛かるクナイガン、気が飛びそうになるが鏡冶はこらえる。
その眼をダークカブトは見ていた。

「俺も救いたいと言ったな？」

「ガッ……ぐぁ」

ガタックはタックルでダークカブトを押し出すと、カリバーで思い切り突く。
ダークカブトは衝撃でよろけ、その隙に後ろへと跳ぶ。

「……ッ

鏡冶、お前の瞳に…俺を映すな」

「何ッ!?」

「お前は真由の事だけを考えろ、真由だけを守れ。
でなければ、俺には勝てない」

「ッッ！」

『『Ｃｌｏｃｋ　Ｏｖｅｒ』』

ダークカブトはゆっくりとクナイガンをガタックに向ける。

「俺は真由を殺す、お前からしてみれば…悪だ」

「！」

「俺は真由を守る、守る為に殺す。

それはお前にとって…悪になる」

ダークカブトはクナイガンを発砲する事はなかった。
代わりにその瞳で、彼を……

いや真由を見ていた。

ただ、ひたすらに

「お前は俺を倒すんだよ。じゃないと真由を守れない」

「・・・」

鏡治は双護の事も救いたい、傷つけたくないと思っていた。
その甘さを捨てろといっているのだ。

戦う中でダークカブトは気づいた。

ガタックは自分に攻撃をするものの、圧倒的に足りていないモノがある。

「俺は真由を殺す、その思いをこの戦いで変える気はないだろう。
だったら、お前が俺を止めるには…」

「ッ！」

鏡治はその言葉を理解した。
ガタックはダークカブトを見る、しかし彼の瞳に自分が映っていない事を悟った。

駄目なのか？

やるしかないのか？

ガタックは迷う。

救いたいと願う事は罪か？

分かり合えないというのか？

彼女を守りたい、救いたいという共通の願いは届かないのか？

ガタックは拳を握り締める

「鏡冶、お前には…」

ダークカブトは引き金をひいた。

弾丸がガタックの体に直撃する、痛みと衝撃。

なにより伝わるのは……

「お前には、殺意が、覚悟が足りない」

第137話　DUEL　SPEED　LOVE（後書き）

プットオンもキャストオフも強さを調整できます。
その場に落とす事も可能。

クロックアップは体力を消耗するので、無制限ではない

一度のクロックアップ限界時間は、各々の実力で左右されます

まあこんなところかな
では次もよろしく！

第１３８話　ＳＥＣＯＮＤ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（前書き）

はい更新ですね
すいません。ちょっと今回長めかも
結構どこで話を切るか悩みますね。

あとちょっとリアルが忙しくて今週は更新少ないかもしれません

多分１１１話どこかで更新すると思います
あと後書きでフォーゼの軽い感想？
書いてるんで、見てない方はスルーお願いします

「鏡治に覚悟が足りないと言う双護」

ではどうぞ！

第138話　SECOND　SPEED　LOVE

「覚悟が……殺意が足りないだとッ？」

ダークカブトはガタックを殺すつもりでいる。
だがガタックにはそれがない、足りないのだ。
それを彼は覚悟と言う。

「鏡冶、本気で俺を殺しにこい。でなければ…真由は守れない」

「真由ちゃんを…守れないッ！？」

「ああ、そうだ。俺を殺す気がないのなら…」

お前は、誰も護れないーーッ

「！！！」

「本気でこいッ！　新意鏡治ぃイイイッ！」

真由を守る事だけを考える…

「お前を殺す？」

一瞬、まさに気配すら感じさせずにガタックはダークカブトの後ろへ回りこんでいた。
反応する前にカリバーで無数の閃光を刻みつける。
光の嵐はダークカブトを宙へと舞い上げた。
まだ辺りは暗い、そこへ咲く大きな華。

激しく火花を散らすダークカブトはまさに『華』と言うにふさわしいだろう。
ダークカブトが衝撃を感じたとき、もう彼は自分がどこにいるのかすら分からなかった。
ただ、見えるのは青き閃光

『Ｒｉｄｅｒ　Ｃｕｔｔｉｎｇ』

意識が戻った時、ダークカブトは高く持ち上げられていた。
持ち上げると言うよりは挟まれ、担ぎ上げられたといったほうがいいだろう。

もの凄い力と、電子音がしらせたとおり彼の必殺技が拘束力を強める。

抜け出せない。それを理解すると同時にだった。
激しい衝撃に苦痛の声をあげるとそのまま地面に叩き付けられる。

衝撃で足がふらつき、そこへ今度は拳が襲い掛かる。
一撃を受けたと思えば、もう四発は叩き込まれていた。

「――――ッ」

耐えられずにダークカブトは倒れる。
いや……違う。彼はダークカブトが地面へ背中をつける事を許さなかった。

後ろへ回られたのだ。
倒れそうになるダークカブトを彼は蹴り上げると…

『Ｐｕｔ　Ｏｎ』

打ち上げられたダークカブトに次はバルカンの嵐がやってくる。
爆発が終わり、新たな爆発がダークカブトを包んだ。

爆炎のゆりかごはダークカブトを決して逃がさない。

『Ｃｌｏｃｋ　Ｕｐ』

苦し紛れに発動させたクロックアップ。

バルカンの雨は回避できたが
ダメージがでかすぎてしばらくまともに立てなかった。

その後、ダークカブトはガタックにクナイガンで攻撃を与えようと
接近する。

「ッ！」

だが、クロックアップをしているというのにも関わらず、
ガタックはその手でダークカブトの手を掴んだ。

混乱するダークカブトに浴びせられるバルカンの嵐。
近接で連射される高威力の弾丸。

どんなにもがこうとも、衝撃がこようとも
ガタックがしっかりと手を掴んでいるため吹き飛ぶことが出来ない。

耐えられない、耐えられる訳が無い！
防御力に特化しているマスクドフォームにならなければ――

『Ｐｕｔ　Ｏｎ』

装甲がガタックにぶつかり動きを鈍らせる。
ダークカブトはその隙を狙って拳を振り上げるが――

「！！」

「クッ！」

ガタックはその拳を弾くと、さらにバルカンを発射する。
怯むダークカブトに蹴りや拳の猛連撃を加え、さらにバルカンで吹き飛ばす！

「ッッ！」

『Ｃａｓｔ　Ｏｆｆ』

受身を取れずに叩きつけられるダークカブト。
ガタックは装甲を彼にぶつけながら一気に接近する！

そしてカリバーで何度も斬りつけた。
さらにハサミの様にしてダークカブトを拘束するとそのまま大きく振り回す。

ジャイアントスイングをしばらく続け、投げ飛ばすとそのまま自分もドロップキックで跳んで行く！

「ぐぁあああああああッ！」

地面に手をつくダークカブト。
それをガタックは何も言わずに見ていた。

先ほどとは動きがまるで違う。
これが新意鏡治、本来の実力なのか？

「フッ……まさか、ここまでとはな」

「――――ッ……」

ガタックは殺意を開放してダークカブトに襲い掛かった。
『戦いの神』と称される程の力は圧倒的。

だがダークカブトはそれでいいと笑う。
劣勢なのは……どちらか？

「ウォオオオオオオオオッッ！！」

「ハァアアアアアアアアッッ！！」

真由と自分達の命を掛けて二人はぶつかり合う。
ガタックカリバーの激しさは先ほどの比ではなく、ダークカブトも防御が遅れてしまった。

「ウラァァァッッッ！」

「グゥウアァアアア！！」

巨大な十字架がダークカブトに刻まれる。
絶大な衝撃でダークカブトは地面に倒れてしまった。

そこへ振り下ろされるカリバー！

ダークカブトは蹴りでそれを弾くと、起き上がりながらの回し蹴りでガタックの顔面を叩く。

平衡感覚を失ったガタックにここぞと言わんばかりの連続蹴りをくらわせた！

「やっと殺す気になったかッ！
鏡治！　そうだ、それでいいんだよッ！」

「違ぇえええええええええええええええええッ！」

「ッ？」

ガタックが投げたカリバーがダークカブトの眼前にせまる！

なんとか体をひねって避けるが、角の部分にヒットしてしまった。

よろけるダークカブトに掴みかかるガタック。

その瞳には、何が映っているのだろうか？

「決めたんだよッ！　殺すとか殺さないとか甘えてんじゃねぇぞ！」

「何っ！　グッ！！」

ダークカブトの頬に思い切り食い込むガタックの拳！

ゆれる脳と視界。

しかし不思議にもダークカブトは鮮明にガタックを見ている。

「殺す気でこい？　真由だけを見ろ？」

ふらつくダークカブトにさらに拳が炸裂する。

「俺は誰も護れない？」

「ッ！！」

頭突きがダークカブトの脳を揺らす。
ダークカブトはガタックの瞳を見た、見てしまった。

仮面越しのそれはハッキリとダークカブトに向けられているのだ！

「何　俺に忠告してんだよッ、何俺に与えようとしてんだよッ！！
違うよな、違うだろうが！！」

「何だと…ッ」

一歩、ガタックは足を踏み出す。
ダークカブトはその迫力に一歩後ろへと下がってしまった。

与える？

忠告？

「お前は俺に勝つんじゃねぇのかよ！

殺す気なんじゃねぇのかよッッ！」

「当然だ！　俺はお前を殺して真由香を殺すッ！」

「真由ちゃんはどうなんだよっ！　殺すのか！」

「俺は真由を守るんだよっ！」

何だよそれはぁあああああ！
ガタックの両腕がダークカブトに打ち込まれるッ！

「殺意が足りない？　覚悟が足りない？
ああ、そうだ。
足りないだろうよ、俺もッお前もォ！」

「…ッ！！」

アームハンマーをガードしきれず、ダークカブトはそのまま地面へ倒れる。

地面を見るダークカブト。

殺意が足りないと彼に言った。

覚悟がないと彼に言った。

それは果たして……

彼に言った言葉なのだろうか？

「守るために殺す？　ふざけんなッ！　そうやって逃げるつもりかよ！

真由ちゃんを殺す事からいい訳をつくって逃げるのか！？

結局お前は真由香さんへの復讐の為に真由ちゃんを殺すんだろうがッ！

その事実から逃げてんじゃねぇよ！！」

「くっ…」

「お前は心の中で俺に殺されるシナリオすら正当化してるんじゃねーのかッ？

真由ちゃんを殺す事をチラつかせて、俺を煽って！

殺意を呼び出させて殺される！

その結果すらどこかで望んでるんじゃねぇのかッ！？」

「違う…ッ！　俺は真由を…」

「俺の目を見て言えッ！

天王路双護ォオオオオオオオッッ！！」

「くっ！」

クナイガンを正面から受けるガタック。

だが先ほどまでの威力がない、弱々しい一撃ではガタックは怯まない！

彼らは覚悟を決めているのか……

それとも――――

まだ迷っているとでも言うのか？

「お前はまだ迷ってるんじゃないのかっ！
口では何とでも言おうが結局は真由ちゃんと真由香さんの狭間でくすぶってる！

それを無理やり終わらせたくて必死なだけだろッ！！
お前は真由ちゃんを守るとかいいながらッッ

真由ちゃんと目すらあわせてないんだよっっ！」

「俺が真由から逃げてるだとっ！？」

「違うのかよッッ！？
真由ちゃんの目すら見ず、真由ちゃんと関わろうとせず！

何が守るだよッ！　笑わせんなぁあああッ！」

クナイガンを弾く！
思わずそれを目で追うダークカブトに、拳が打ち込まれる

「真由ちゃんがお前をどれだけ愛してるか分かってんのかよッ！」

「お前に…ッ！」

ダークカブトは全てを振り払うように首を振ると、自らも拳をガタックへぶつける。

だがガタックは怯まない。

動じないッ！

「何が……分かるッッ！」

「分かるかよッ！　知るかよッ！
ああ、そうだ。俺にはお前の気持ちは分からない。理解できない！
でも人間なんてそう言う生き物だろうがっ！
誰も他人の気持ちなんてわかんねーんだよッ！
誰も理解してくれない、誰もわかってくれない。
それが世界だろうがぁぁぁあああッ！」

「グッ！　ガァァ！！」

「お前の気持ちなんて俺に分かるかよッ！！
殺したい人間と愛した人間、同じ人なんて辛いよな

……とか言ってほしいのか？

それこそ甘え以外の何物でもないだろうがッ！
いるわけねーんだよ他人の気持ちが完璧に分かる人間なんてッ！

同じ境遇だろうが、同じ体験してようが！
共感できても完璧に理解できるとはかぎらねぇだろうが！！

第一それでお前は満足なのか？
分かってもらえたとして、今俺が理解したとして！

この状況が何か変わるのか！？」

「ッッッゥ！！」

「真由香さんが憎い？　真由ちゃんを愛してる？　だから殺す？

ああ、そうだ！
結局それはお前が真由ちゃんを捨てて
真由香さんへの復讐をとったにしかすぎねぇ！　簡単な話だよなぁぁッ！

なのにお前は真由ちゃんを守るとか訳の分かんねぇ理由かざして！
自分の痛みを少なくしようとしてるだけだろうがぁぁぁぁッッ！
！」

ガタックの拳はダークカブトを大きく怯ませる。
打ち込まれるたびに大きく仰け反るダークカブト！

「極論だろうッ？　お前の真由ちゃんへの愛が恨みに飲み込まれていく！
お前がどんなに苦しもうが真由ちゃんと真由香さんは同じ体！
同じ人間なんだよっ！！
その事から逃げんじゃねぇえええええええ！！！」

「お前はッ！　真由と出会って間もない！
そんな分かったような口をきくなあああああ！」

「理解したくもねぇよッ！　いい加減理解しろよ！！
お前は天王路真由って人間が憎くて殺したいってよぉおおッ！

それ以外の答えはねぇんだよ！」

「違うッ！！　真由を愛しているのは偽りない真実だ！！」

「じゃあ愛しぬけよッッ！　お前から差し出した手だろうが！！
繋いだ手を！　求めた絆を…

お前から放棄してんなよぉぉぉぉぉッ！」

水しぶきを上げてダークカブトは倒れる。

「真由ちゃんはお前に嫌われいないか怯えてた。お前に許して欲しいと泣いた！」

「ッ！　真由……」

「希望なんだよ、絆なんだよ真由ちゃんにとってお前はなによりのッ！
真由ちゃんの気持ちをわかってやれなんて言わないさ。
だけど、これを知って尚、真由ちゃんを殺すかどうかだけは聞かせろッ！」

「・・・」

「命を奪うって事がどう言う事か、お前は分かってんのかよ…ッ！
その絆を、家族を殺すんだぞ！！
もう会えないんだッ！　奇跡でも起こらないかぎりッ！！」

お前は真由ちゃんを本当に愛しているのか？

「当たり前だぁあぁあああぁあああッ！！」

ダークカブトの蹴りがガタックの頭部に向けて放たれる。
いきなりの攻撃にガタックは防御がおくれ、その角で受け止める事となった。

「ぐぅ！」

「もう御託はいい！うんざりだッ！　お前と俺、勝つか負けるだ！」

その言葉にガタックは首をふる。

「そうやってまた目を背けるのかッ！　ああ、ちがうぜ！
お前は今俺に反論の蹴りをぶつけた。

それは真由ちゃんを愛してる証拠じゃないのか……ッ」

「何…ッ！」

「思い出してみろ、もっと根本的な……ああ、そうだ。
お前が思い出すんだ。
一から、真由ちゃんへの…想いってヤツをッ！」

「……ッ！」

ダークカブトはガタックの攻撃をその身に受ける。
だが、倒れなかった。

そして思い出す、真由との日々を…

「憎いか？　真由香さんがッ！？
愛しいか？　真由ちゃんが！

怖いか？　真由ちゃんとこれから生きていくなかで
今回みたいな事がいつ起きるか？

真由香さんの影に、存在に怯えて真由ちゃんを愛せなくなるのが
怖いかッ！？」

拳と拳がぶつかり合い、激しいエネルギーを放出する。

「愛する事が怖いなら、愛さなければいいッ！
そんな都合のいい、いい訳がきくかよッ！！

思い出してみろっ、お前が愛した真由ちゃんは…

お前が守ると決めた真由ちゃんとの思い出はッ、

本当に恨みに飲み込まれるのかよ！！」

「ッ……！！」

真由…との……思い出？

第１３８話　ＳＥＣＯＮＤ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（後書き）

パワーダイザーけっこう活躍しますねｗｗ
でもどうなんですかね、予算の壁が心配ですけど……

本当なのかは知らないけど
ガタキリバも予算がアレで出番少なかったとかなんとか。

まあいらぬ心配かなｗ
では次もよろしく！

第１３９話　ＴＨＩＲＤ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（前書き）

はい、更新です

んー、まあ結構普通に更新できました。
ちょっと忙しくなる時がまだあやふやで

「ガタックＶＳダークカブト、決着の行方は？」

ではどうぞ！

第139話　THIRD　SPEED　LOVE

『お兄ちゃんのお名前はなんて言うの？』

『ああ、双護って言うんだよ』

『そう…ご？』

『ああ、護りたいものが2つあった時、一つに迷う事無く2つ護れるようにって』

『すごいね…！　かっこいいね…！　すてきだね…！』

『フッ、なかなか分かってるな真由は。さすがは俺の……』

『？』

『俺の……』

なんで、何でコイツが死ななくて……俺の家族が死ぬんだよ。

代わりにお前が死ねば良かった。

お前がいなくなれば良かったのに――――ッッ！！

そんな感情がふと脳裏をよぎる。

真由香を真由として接する様になったばかりの頃……

『おにい…ちゃん？　どうして…泣いて…るの？』

『…何でもない』

『待っておにい…ちゃん』

『？』

「うぉおおおおおおッッ！！」

「グッッ！！！　――――ッア……」

ガタックの拳が競り負け、ダークカブトの拳がガタックを吹き飛ばす。

どうしてだろう、一撃を打ち込む度になにか……

『おにいちゃん……かなしい事が…あったらボクが守ってあげるね…』

『え？』

バチンと、恨みの風船が弾けた気がした。

屈託のない笑顔。

アイツとは違う……アイツには絶対にだせない笑顔――

『おにいちゃんが…2つ守るなら……

真由はおにいちゃんを守るの！』

『真由……』

『だから真由と一緒に遊んでくれる？』

『あ、ああ…ああッ！

遊んでやるさ、いつだって…

だって、お前は――――』

俺の妹なんだから。

アイツはもう死んだ。もういない。

だったら、コイツは真由香じゃない。

行き場をなくした……俺と同じ存在だ。

寂しい思いなんてさせないさ。

俺たちは……家族になれる。　強い絆できっと結ばれる筈だ！

俺は、真由を愛する！

愛しぬく！

俺は――――

真由の兄貴になるんだ！！

「クッ！　ぉおおおおお！！」

「ガッ！！」

無茶苦茶に我武者羅にガタックに拳を向ける。
思い出す彼女の笑顔。

愛しぬくか……

過去の自分を思い出して、少し笑ってしまった。

「ズァアアアアアアアアアッッ！！」

ガタックの蹴りとダークカブトの蹴りが同時に炸裂するッ！

また、思い出がフラッシュバックしていく。

『樹里！　泣いてるのか！』

『お兄ちゃん…！』

『お前…泥だらけじゃないか！　どうした！？』

『ううん！　なんでもないのっ！　気にしないで……』

『ブスは泥でパックしないと駄目でしょ！　キャハハハ！』

『えー、真由香ちゃん酷過ぎぃ！　あははは！』

『いいの、いいの。
どうせあいつ等の親はパパの犬なんだから！

何したっていいのー！　きゃはは』

『――ッッ！！』

「ぐうぅぅうううッッ！！」

「うぉらぁァァアアアアアアアアアア！！」

今度はガタックの蹴りが、ダークカブトの蹴りを打ち破り炸裂する。

よろけるダークカブトに発射されるバルカン砲！

ダークカブトは自らの眼前に迫ったバルカンに気づくが、反応が鈍りまともに受けてしまう。

その着弾の瞬間に……

彼女が見えた。

『おにいちゃん……』

『ッ！　どうした真由！　泥だらけじゃないか！』

『あのね……学校のおともだちが…お前は…ち――』

子供は残酷だ。差別と言うことを面白がるらしい。
真由は確かに、『普通』ではない。
だからって……

『真由ッ！　もういい！　もう喋るな！』

『・・・』

『そんな事を言うヤツは俺がぶちのめしてやる！
だからお前は心配するな。
気にするな……』

『…うん』

涙を浮べて胸に顔を埋める彼女が、堪らなく愛しかった。
心が、冷たい心に光をくれる。
彼女がいれば、俺は生きていける。
だから……真由は、笑っていてくれ。

『お前は笑っていてくれ…

お願いだ…お願いだから……』

『おにい……ちゃん？』

『お前は…俺の希望なんだ……全てを失って、得た…

希望なんだよ』

「ッッッ！」

彼女を想い、撃ったクナイガンの弾丸。
それはガタックバルカンの銃口に侵入し、そのまま爆発させる。

肩を押さえうずくまるガタックに、そのまま渾身の回し蹴りを決めた。

「ぅうううッッ！！」

どうして……

『真由香！　お願いだ！
もう樹里をいじめないでくれっ！
樹里を傷つけないでくれ！』

『きゃはははは！
じゃあもう一回土下座でもしてもらおっかなー！』

『土下座をすれば樹里には手を出さないって誓ってくれるのか！？』

『うーん、まあいいかな……

――って本当にやるんだ！

きゃはは！　だっさー！』

『これでいいだろッ！

もう樹里には……手を出さないでくれッ！』

『んー…そんな約束したっけ？

きゃはは！』

『ッッ！！』

「ラァアアアアアアアアアアッッ！」

ガタックはよろけながらも、もう一方のバルカンでダークカブトを

射撃する。
両者は大きく吹き飛び、地面へと背をつけた。

ガタックもダークカブトも度重なる
キャストオフ、プットオン、クロックアップの使用で体力、精神力
共に限界のはずだ。

……だが彼らは戦う。その瞳の先にいる人間を直視するために。

「うぅぁあああああッッ！」

本当にどうして……

『真由、誕生日おめでとう』

『ありがとう…おにぃちゃん！

――――わぁ！　くまさんだぁ…！』

『おめでとうございます真由香さ……

あのっ！　失礼しました！　真由さま！！』

『『『おめでとうございます！』』』

『ありがとう！』

『生まれてきてくれて……』

ありがとう

『おにいちゃん…いちご…あげるね』

『フッ、どうした？
真由はいちごが好きなんじゃないのか？』

『おにいちゃんは…もっとすきだから……』

『…そうか、ありがとう。
じゃあメロンと俺はどっちが好きだ？』

『……考える』

『アハハハっ…勝てるといいんだが』

本当に、何で……どうして……

「「キャストオフッッ！！」」『『Ｃａｓｔ　Ｏｆｆ』』

両者、おそらくコレが最後のキャストオフになるだろう。
ダークカブトとガタック、二人のライダーは限界を超えて走り出す。

ゴールの向こうで微笑む彼女。

双護も、鏡治も。彼女にまた会う為に――ッ

『双護、お前は私の人形なのよ。妹が大事なら私に服従しなさい！』

なあ、なんで……なんだよ。

「アアアアアアアアッッ！！」

「クッ！」

ガタックカリバーが蒼き閃光を描きながらダークカブトの装甲に直撃する。

『おにいちゃん！　ボク…おにいちゃんの事大好き！』

誰か教えてくれよ、なんで……

「ッ！　はぁああッッ！」

「ウオオオオオオオオオオオオ！」

しかしダークカブトはその攻撃を耐えていた。
そして反撃の回し蹴りでカリバーをガタックの手から吹き飛ばす！
そしてさらにクナイガンでカウンターを決めた！

紅き閃光がガタックの装甲を抉る！

『妹がゴミなら兄貴もゴミって事かな？きゃはははは！』

なんで、なんで、なんで……

「ぬるいんだよぉおぉおおお！！」

「グッ…ぅぅ！」

ガタックは踏み込み、頭突きをダークカブトに決める。
ふらついたところを狙い、ガタックはクナイガンを弾いた。

両者の武器はおおきく離れ、地に落ちる。

もう拾いにいく事はしない、必要もないッッ！！

『ボクね…ボク…おにいちゃんの妹で良かった…！』

なんで――――ッッ

「こんなに辛いんだよぉおぉおおおおぉッッ！」

「！」

カブトの連撃がガタックを吹き飛ばす。
どうしようもなく。ただどうしようもなく――

悲しくて。

虚しくて。

辛かった。

とめどなく流れる涙はダークカブトの視界を奪う、しかし彼女の姿だけはハッキリと視えた。

笑っている彼女、怒っている彼女、泣いている彼女…

今までいろんな彼女の表情を見てきた。

「双護ぉ……」

「ッ…」

少しでも気を抜けば両者はすぐに気を失うだろう。
だから、終わりにする。
終わりにするのだ。

「俺は次の一撃を……真由ちゃんへの想いと共に放つ！」

「何……？」

「全てを……込めてッッ！！」

ガタックとダークカブトは互いに距離を空けて立ち止まる。
真由への想いを込める。

つまり決着をつけると言う事だろう。

「……いいだろう、俺も真由への想いを全て込める」

そして、勝つ。

もう一度、二人は彼女を『み』た

「俺は真由ちゃんを――」『ＯＮＥ』

「俺は真由を――」『ＯＮＥ』

救う『ＴＷＯ』

守る『ＴＷＯ』

『『ＴＨＲＥＥ』』

「ウォォオオオォォォオォオオオオオッッ！！」

「ハァァアアッッ……――ッ！」

二人の瞳に映る少女は、微笑んでいた。

だって、二人が大好きだから。

「ライダァァァアッッ！！　キィィィクッッッ！！」

「ライダーキックッッ！！」

『『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』』

二人も、彼女が好きだから。

『鏡冶くん！』

『おにいちゃん！』

「「真由ゥゥウゥゥウウゥゥウウウウゥゥウウッッ！！」」

激しい光が、彼らの瞳に映るのだった。

第１３９話　ＴＨＩＲＤ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（後書き）

次回、決着でございます。

はい、と言うかクラヒフォーゼまでもう一ヶ月きりましたか……

うん、どうなんでしょうね。
まあクラヒはW以外は買ったんですけど、そろそろ響鬼さんぼっちなのとコンプリートフォームに召喚機能をつけてほしいもんですけどねｗｗ
せめて伊吹鬼だけでも……ッ

あと、ウルトラマン、仮面ライダー、ガンダムのコラボシリーズ。
コンパチヒーローズですか。

あのグレイトバトルで、見事ディケイドが平成枠に入りました！

いや、やっぱりディケイド小説書いてる身としては嬉しいですね。
ロストヒーローズ？　には既にオーズとダブルがいますから、多分でないんじゃないかと思っていたら……

まあ、コンプリートが出てくれたらもっといいんですけどね

まあ今回はこの辺で。では次もよろしく！

第１４０話　ＳＩＳＴＥＲ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（前書き）

はい更新です
明日はどうかな、お話じゃない方を更新……するかも

「双護対鏡治……ついに」

ではどうぞ！

第１４０話　ＳＩＳＴＥＲ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ

真由、彼女の為に……

全てを乗せた、全てを賭した一撃がぶつかり合う！！
そのエネルギーは、眩い光の奔流を放ちながら尚も拡大していった。

「ウオォオオォォオォオオォォオオッッ！！」

「ハァァアァァアアアアァァアッッ！！」

二人は更にエネルギーを込める。
この肉体が壊れようが構わないと言わんばかりにッッ！！

二人は全てを乗せていく！

二人は彼女の為に、全てをエネルギーに変えた。
勝利を、愛を望む彼らは互いに一歩も引かず、ぶつかり合うだけだ。

「――――ッ」

ダークカブト、いや双護は泣いていた。
何故なのかは彼にもわからない。

悲しいのか？

嬉しいのか？

自分ですら理解できない涙が溢れていた。
彼女のへの想いは尚も力に変わり光となる。

「――――ッ！」

ガタック、いや鏡冶は笑っていた。
何故なのかは彼にもわからない。

双護の真由への想い、
その強大さがわかって嬉しいのか？

彼の真由を想う気持ちは力に変わり光となる。

「「ハァアアアアァァアアアアアアッッッ！！」」

真由の為に二人は全てをぶつける！

そして、その時だった。

「ッ！」

「！！」

何か、大きな音が同時に聴こえて、二人は見る！
互いの角、そこに光の線が何本も現れたのを！

そう、ガタックが投げたカリバーが。

ダークカブトのキックがそれぞれの角にヒビを入れていたのだ。

ライダーキックのエネルギーは角を経由して足へと送られる。
つまりこのまま力を込めれば……

「ウォオオオオオオッッ！」

「ハァァアアアアアッッ！」

だが、二人はそんな事がなかったかのようにエネルギーの供給を続けた。

ただひたすらに、一心に真由への想いを込め続ける。

ぶつかり合う脚と脚はまだ均衡を保っていた

だが――――

終わりが訪れる。

「ッッ！！」

「・・・」

砕け散る音が聴こえた。

それが意味する事はたった一つ。

戦いが、終わると言う事。

「俺の……勝ちだ」

「・・・」

ごめん。勝てなかったよ

「俺の…負けだな」

先ほどの激闘が嘘の様に辺りは静まり返っていた。
今はもう辺りも明るく、雨の音だけが二人の耳に刺さっている。

「・・・・」

倒れていたのは……

ダークカブトだった。

角が砕け散っており、その横ではガタックが立っている。

「……どう言う事だ」

ダークカブトの変身が解かれ、双護は口を開く。

ガタックも変身を解除し、鏡治へと姿を変えた。

そして、双護は納得がいかないと鏡治を見る。

自分が負けたからでない。

鏡冶のキックが当たる瞬間、鏡冶は確かに呟いた。

『俺の…負けだな』

「ふざけるな、お前の勝ちだ。俺は負けたんだよ……」

「いや、違うぜそれは…」

「ッ？」

鏡冶は力なく座り込む。
まるで、何かに負けたように悔しそうにしながら――ッ

「角が壊れたのはお前が真由ちゃんを想う力。
エネルギーが強過ぎたからさ…

だからダメージを受けていた角が耐えられなくなって壊れたんだよ。
俺も全力込めてたんだけどなぁ…」

悔しいぜ…そう言って鏡冶はうつむいた。
それを聞いて双護も腕で目を覆う。

「お前は…勝ったんだよ」

「・・・」

しばらく二人は無言でうつむいていた。

雨で良かった、おかげで涙が見えない。二人は切にそう思っただろう。

だが、鏡治は意を決して立ち上がる。

「うしっ、じゃあ勝ったのは俺って事で…」

そして…

「何ッ！？」

「勝ったのは俺だ、大人しく言う事聞けよ」

鏡冶は双護を担ぎ上げ、おんぶをするとそのまま歩き出した。
驚く双護だが、鏡冶は気にしない。

「どういう…つもりだ？」

「真由ちゃんに会ってもらう。お前の答えは、それから決めろ」

「っ…！」

双護はもう動けない。覚悟を決めるしかないのだった。

『ファイナルアタックライド』『ディディディディケイド！』

『Ｒｉｄｅｒ　Ｊｕｍｐ』『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』

キックホッパーとディケイドの必殺技がぶつかり、弾き合う。
今、ディケイド達はブレインタワーに突撃をしかけていた。

前回は電磁バリアによって失敗に終わったが、今回は神也たちの強力もあってか。
バリアを突破し創英と赤い靴がいる最上階へと向かっていた。

無数のゼクトルーパー。
実験によって生み出されたワームのサナギ体群と激しい戦闘を繰り広げながらディケイド達は最上階へと向かう。

途中ゼクトルーパー達を足止めし、ディケイドに道を譲る為に仲間達は次々にディケイドと別れていった。

そしてまた――――

「兄さん！」

「どうしたっ！？」

「ここはボクが引き受ける」

ディケイドの前にキバが立つ。
もうキックホッパーの後ろにある階段から最上階に行けるのだ。

一刻一秒を争う状況、この提案は素直にのんでおくべきなのだろうが……

「ボクは大丈夫だから、さあ早く！」

「でも…！」

「ボクが兄さんに嘘ついた事あった？」

「それは…ッ」

「でも兄さんはボクに嘘をついたよな、ウニは栗が進化した生き物だって。
　ボクがあれをドヤ顔でクラスメイトに披露した件でゆっくり話し合う？」

「あばよぅ！　気をつけてなッ！」

『カメンライド・クウガ』『フォームライド・クウガ・ドラゴン！』

「・・・」

ドラゴンの跳躍力で一気にキックホッパーを飛び越え
階段を駆け上がっていくディケイド。

それを見てキバはやれやれと苦笑する。

「・・・」

反面、そんな彼を見向きもせず
キックホッパーはディケイドを追う為、階段に向かう。

しかしそれを水流弾が邪魔する。
無数のソレはキックホッパーを追尾し、衝撃を与えていった！

「お前はボクとダンスを踊るんだよ、キバット！」

『がってんッス！　ウェイクアーップゥ！』

空間にヒビが入り、音をたてて割れる！

ウェイクアップ、キックホッパーの瞳に巨大な月が映った。
バッシャーフォームへと変わったキバは、そのままマグナムをキックホッパーに向けて発射する！

「・・・」『Ｃｌｏｃｋ　Ｕｐ』

クロックアップを発動するパンチホッパー。
だがウェイクアップによって強化された水流弾は確実にパンチホッパーを追尾し、どこまでも追いかけるッ！

とはいえ、クロックアップに勝つことはできない。
このままならキバは負けるだろう。

それはキバ自身が分かっている事！

「キバット！　バッシャーくん！
アレで行こう！　一気に決めるよ！」

『りょーかいッス！』『了解だよ！』

「いっけぇえええええええええ！！」

キバが思い切り地面を叩く！

すると、地面がまるで水面のように揺らめき、
一気に大量の水が現れて辺りを湖に変えたではないか！

「！」

キバは水面に立っているが、キックホッパーはそうではない。
腰まで水に浸かってしまうのだ。

クロックアップも水の抵抗力で少し速度が落ち、水流弾を上手く防げない！

そして、月の色が美しい緑に染まる！！

『ウェイクアップバッシャーっス！』

「ぐうううぅうううぅッッ！」

想像以上に力を消費するな…ッ！

キバは長時間の使用が無理と悟ると、決着をつける為バッシャーマグナムをキバットに噛ませる！

『バッシャーバイトっス！』

キバを中心に水の竜巻が巻き起こる！
そしてその上部では巨大な水流弾が形成されていった。

キバはそれをキックホッパーに向けて――――

発射するッッ！！

水に拘束されているキックホッパーは、ライダージャンプを発動し回避を試みるが……

「！」

水流弾はその軌道を変えてキックホッパーに向かっていった。
皮肉にも空中では身動きがとれない。

キックホッパーはそのまま水流弾を真正面から受けるのだった。

「よしっ！」

キバはウェイクアップを解除し膝をつく。
同時に、ステンドグラスの様に変質したキックホッパーが落ちてきた。

キバはそれにデコピンと言うやる気のない一撃を加える。
すると、キックホッパーの外装は粉々に砕けて――――

ホッパーゼクターと洗脳されていたであろう人が地面へと倒れるのだった。

第１４０話　ＳＩＳＴＥＲ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（後書き）

はい、と言う事で
近いうちに活動報告も更新するかもしれません

ってか、この小説ぶっちゃけＲ１５って程でもないのかな？

では次もよろしく！

第１４１話　ＦＡＭＩＬＹ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（前書き）

はい、更新ですね。
もう後、大体三話くらいでカブト編は終わりですかね。

「キバ達の前に現れたのは……」

ではどうぞ！

第141話　FAMILY　SPEED　LOVE

『やりましたね亘さんーッ！』

「ああ、そうだねサンキュー！　キバット。
バッシャーくんもありがとう、助かったよ」

『またいつでも呼んで下さいね！』

そう言ってバッシャーマグナムはホイッスルに戻ると、キバのベルトへ装填される。
キバは洗脳されていた人を安全な場所へ移動させ、ディケイドを追う為に階段に向かう。

『――――ン』

「……ん？」

『どうしたんスか？』

キバはそこで足を止めると、辺りを見回す。

別におかしいところはない。

どうしたのだろうか？　キバットは不思議そうに問いかけた。

「何か今、聞えなかった？」

『ほえ？』

「――――ッッッ！！！！！」

その時だった。

突風、いや暴風と言ってもいいだろうか？
物凄い風がキバの体を吹き飛ばす！

一瞬の出来事にキバは何も対処できずに吹き飛ばされてしまった。
そのまま風に呑まれて、キバは一階下のホールまで移動してしまう！

「いっつッ！！」

「亘くん！？」

ゼクトルーパー達を倒し、合流しようとしたメンバー達がキバに気づく。

どうしたのか一同が不思議に思うと、階段の上からその音声が聞えてきた

『ヒート・トリガー！』

「「「「！！」」」」

電子音と共に階段を下りてきたのはダブル、ゼノンとフルーラだ。
ダブルはトリガーマグナムをクルクルと回しながら笑っている。

相変わらず何を考えているのか分からないが、変身して現れる時点で何か嫌な予感がする。
――と言うか、嫌な予感しかしない。

ダブルはそのまま一同を見回すと、もう一度。

今度は鼻で笑った。

「やあ、久しぶりだね。皆ボクに会いたかったんじゃないかい？」

「ん？　いや、別にそんな事は――――」

『もう！　照れ屋さん！　そんな貴方には銃弾をプレゼント！』

「…は？」

そう言ってダブルはブレイドに向けてトリガーマグナムを発射する。

「うっぉおおおッ！？

あぶッ！　あぶねーっ！！」

ブレイドの後ろで炎の弾丸が破裂する。避けなければ…

『テへっ☆手が滑っちゃった！』

「嘘つけぇえええッ！　弾丸プレゼントとかほざいてたろうがッ！」

『嘘じゃないもーん！　ねぇゼノン？』

「ああ、そうともこの天使が嘘つくわけないだろう？
ちょっと手が引き金に行っただけだもんねぇ？」

「いや、それを撃ったって言うんだよッッ！！」

何か……何か凄いうざいポーズをとりながらダブルはブレイドを嘲笑していた。
当然怒るブレイドなのだが、ふとカリスが声をあげる！

「お！　おい椿！」

「あん？　何だよ咲夜！」

「お前…ッ！」

「あ？　用がねぇな…ら……」

ブレイドはふと、違和感に気づく。

何か…熱い。

下の方が凄く熱い。

落ち着け椿、そう言うときは冷静に原因を調査するもんだろ？
じゃあ、簡単だよ。
何が起こっているのか、その目で確かめればいいんじゃないかな？

と、言う事で。
ブレイドはその方向を目で追ってみることにした。

何か……こう

「・・・」

「つ、椿…？」

「――てる」

「え？」

「おしりが燃えてるゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥッッ！！」

「ぎゃあああああああああああ！」

ブレイドのお尻が炎上していた！！

走りまわるブレイド！

逃げ惑うライダー達！

笑うダブル！！

尚も燃えさかるブレイドのお尻ッッ！！

Ｌｅｔ＇ｓ、キャンプファイアー！！

「アーハハハハ！　見てごらんフルーラ、あれが尻火系男子だよ！」

『うーん、やっぱりファッションは奥が深いものね！』

そう言ってケラケラとダブルは笑う。

しかし、彼らが攻撃を仕掛けてきたと言う事は……

「そ、そこを…通してくれないか？」

「それは……できないねぇ？」

この人数を前にしてもダブルは余裕を崩さない。

正直、いくらダブルだろうとこの人数を相手にして全員を抑えられるとは思えない。

……と、言う事は何か策があると言う事なんだろう。

ダブル、ゼノンとフルーラは自分達よりかなり上位にいる存在だろう。

電王を気にかけていたところを見るにライダーとしては一般的だとして、どんな手を使ってくるか分からない。

クウガたちは結局動けない状況に陥ってしまった。

「聡明な判断ですね」

「！！」

クウガ達がダブルを突破する事を諦めた時、
ゼノンとフルーラではない、別の声が聞こえた。

それでクウガ達は確信する。

ダブルには、まだ仲間がいるという事なんだと。

「どうしても、通してくれないのかッ？」

もちろん、黙っているだけなんてできるわけも無い。
ディケイドが危ないのだから。

しかし、相変わらずダブルは笑っていた。
銃をクウガ達に向け、芝居がかった声のトーンで喋りだす。

「主役の登場を待たずして始めるクライマックスはないだろう！？

フフッ……」

『安心してくれないかしら？
危なくなったら通してあげるから……ね？』

悔しいが、従うしかないのかもしれない。
クウガ達は構えを保ったまま、その場に立ち尽くすのだった。

「真由ちゃん……大丈夫？」

「ぅ……！」

こくりと真由は頷く。
彼女は今、リコンファームのカプセルの中にいた。

もし創英が赤い靴を発動させれば
すぐにリコンファームを起動できるようにと……

「・・・」

真由の表情は暗い、結局兄もいないし鏡冶もどこかに行ってしまった。
やはり不安な気持ちが強いと言う事だろう。
不安そうに有美子や他のメンバーを見やる。

「大丈夫よ真由ちゃん、そんなに固くならないで」

「うん！　安心してよ！　真由ちゃんはしっかり守っちゃいますから！」

有美子の言葉に真由は笑みを浮かべる。
護衛に来ていた友里も静かに微笑んで真由に微笑みかけた。

頷く真由。
最後にもう一度だけ、不安を殺す為に家族の姿を思い浮かべる

「おにい――」

そして真由が口を開いたとき、その姿が見えた。

「……え？」

「お、遅くなってゴメンっ…！！」

「……っ！！」

真由の表情が変わる。
そこには鏡治と……

兄がいるではないか！

「鏡治！？　アンタ何やって――！」

「ほれっ！　双護！」

「・・・ッ」

鏡治は双護を降ろすと、地面へ倒れ込む。
激闘の後に双護を担いでしばらく歩いたのだ、もう立つことすらできないだろう。

有美子の問いかけにも、適当に相槌をうつだけの様だ。

「おにいちゃん……」

「……ッ」

「おにいちゃんっ！」

真由はカプセルから飛び出ると、そのまま双護に飛びついて……

泣いた。

彼女のぬくもりが双護の体に伝わる。
小さい体だ。より儚げに見える。
あの時、守ると誓った彼女の姿だ……

「あいだがっだよぉぉ！」

「真由……ッ」

真由は双護を強く抱きしめるが、双護は複雑そうな表情でそれを見

ていた。

正直、今の自分に彼女を抱きしめる資格があるのだろうか？

彼女はずっと自分を信じてくれた。

だが、自分は……どうなんだ？

恨みの感情をあらわにして彼女を捨てようとした自分に……

彼女を愛しぬけるかどうか迷ってしまった自分に……

「双護ォ！」

「！！」

鏡冶はもう一度、ハッキリと双護に問いかけた。

「お前の答えは…どっちなんだよッ！！」

「！！」

「ああそうさ、簡単な話だろうがッ！！」

俺の…答え……？

「真由ちゃんを抱きしめるか、そうじゃないか。
それだけだろッッ！！」

「！」

『双護ッッ！』

鬼の様な形相で真由香が俺を睨みつけている。
俺もアイツには最高の憎悪をぶつけてやる。

最悪の気分だ……

『――――――――！』

天使の様な形相で真由が俺に微笑みかけてくる。
俺も真由には最高の笑顔で微笑んで笑う。

真由は……

『双護ッ――！』

真由といた時間は…とても、楽しかった。

『――――ちゃん！』

家族を失った俺と、全てを無くした真由。
手を差し伸べたとき、俺は後悔はしてなかった筈だ。

『双――！』

最初こそ真由香を重ねてしまう時はあったが、すぐに理解する。
真由香と真由は違うと…
たとえ外見は同じでも違うと分かるんだ！

『―にいちゃん！』

真由がいれば、俺の世界は幸せだった！

『――――――！』

どんなに誰かを恨んでも、どんなに誰かを憎んでも
樹里は……父さんも母さんも帰って来ない。

でも俺はここにいる。真由はここにいる…ッ！

真由は……真由も俺も生きているんだ！！

『おにいちゃん！』

俺は多くの物を失った。だが、得たものもある。

ただ一緒にいるだけで良かった。

ただ一緒に笑ってくれる人がいるだけで幸せだった。

彼女は、俺の恨みを殺してくれた。

出会った瞬間に、奇跡は始まっていたのかもしれない。

「真由……ごめん」

「うぅぅ……！！」

どれだけ自分は迷ったんだろう。

だけど、たったこれだけ……

この間だけ彼女に会っただけで――――

心に光が灯った。

「ごめん……ごめんなぁ真由ぅッ！」

「おにいぢゃぁぁぁあぁぁぁああんっ！」

二人は強く抱きしめあって泣いた。
後悔、懺悔、愛情、全てを抱いて……彼は泣いた。

「俺が…ッ、俺が悪かったんだ！
俺が…つまらない事で迷ったから！
お前を見てやれなかったから…ッ！！」

はじめから彼女の手だけを握っていれば良かった。
それだけだった。

「ボクおにいぢゃんに嫌われぢゃっだのかと思ったよぉぉおお！」

「そんな事ないっ……そんな事…あるもんか」

真由香のノイズが消えていく。
目の前にいるのは、家族だ。

大切な…大事な、たった一人の家族…ッ

「俺がっ、悪かった…
許してくれっ！
許してくれぇ……！！」

「・・・」

どんなに謝っても許すしてもらえるとは思えない。
自分のエゴで真由を殺そうとまで考えた自分が、今さらなにを――

「真由ちゃん…」

「！」

だが、鏡冶は真由と双護の肩を持って強く言う。
彼の瞳には、一片の迷いすらない。
強く、澄み渡っていた。

「双護は、真由ちゃんを大切に思うあまり……
ちょっと真由ちゃんにとって酷い事をしようとしたんだ。
だけど、お願いだ……どうか、許してやってほしい」

「…？　うん、わかったぁ！　もう酷い事しちゃ駄目だよぉ！

おにいちゃん！！」

「ごめんッ、ごめんな真由ぅ……」

二人は泣いた。全ての感情を込めて。

真由は、誰にも代われない唯一で特別な存在なのだから

第１４１話　ＦＡＭＩＬＹ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（後書き）

フォーゼまだ見れてないんですよね。
結構三年コンビが好きかもｗｗ

そう言えば、久しぶりに友達の家でカブトのゲームやらせてもらいました
今にして見れば、割とマイナーキャラって言うかコアなキャラも多かったですねｗ

ではこれで、次もよろしく！

第１４２話　ＴＲＵＴＨ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（前書き）

はい、更新ですね。
ちょっとＲ１５を外しました。

まあ別にあってもいいんですけど。
Ｒ１５な内容を期待されると……ねｗ

タグ詐欺はやばいですから、とりあえず外します

ただ、かなりえぐい描写がある話は、出てくるのでその時はワンクッション置いて、別に説明話をつくる時があるかも

それでは本編

「答えを見つけた双護」

ではどうぞ！

第142話　TRUTH　SPEED　LOVE

「叔母さん、リコンファーム使うの…少しだけ待ってくれない？」

おば……さん……だと？
有美子はゆっくりと口を動かす、言葉を出したわけではない。
しかし、鏡治はしっかりと頷いた。

「おおおおおねえさん、リリリコココン――――」

顔面を蒼白させた鏡治を見るに、いつもこんな感じなんだろう。
鏡治はふらふらと出口へ向かっていく。

「でも赤い靴が発動してしまえば、使わざるをえないわよ」

「それでも、待ってほしい。
ああそうさ、赤い靴は俺が破壊する！」

そう言って、しっかりと笑う鏡治。
有美子もまたそれを聞くと、ニヤリと笑って甥の背中を叩いた。

痛がる鏡治を見てさらに笑うと、今度は背中を優しく押す。

「行っておいで。んで、世界を守ってちょうだいね
正義の味方さん？」

「ははっ、俺なんかまだまだだよ」

そう言って、鏡治は走り出した。
有美子は微笑むと、リコンファームのスイッチを切ったのだった。

「ガタックゼクターッ！」

『お前、動けるのかよ』

アレほどの激闘があったにも関わらず、まだ鏡治は戦おうと言うのか。

思わずガタックゼクターも聞き返す。

彼の瞳に映る鏡治は、しっかりと笑っていた。
面白い、ガタックゼクターは思う。
瞳を見るだけで、鏡治の答えが分かるようだ。

「キャストオフは最小で抑えて、残りを全部クロックアップにまわす。
ああ、そうさ。この新意鏡治、ここで止まる訳にはいかねぇんだよ！」

そう言って鏡治はタワーを見る、頂上では…司達が戦っているに違いない。
早く加勢しなければ。鏡治が決意した時――

「鏡冶！」

「！」

声がして振り向くと、そこには双護が立っていた。
彼もまた曇りのない目で、鏡冶をジッと見る。

ああ、そうだ。答えはもう分かっている。
彼が何を言おうとしているのか……鏡治は理解した。

「俺も行く。いや、いかなきゃならないんだ」

「…ッ、動けるのかよ？」

少し意地悪に笑ってみせる鏡治。

反面、双護はいつもの様に笑う。いつもの彼だ。

『天王路』双護、彼は笑っているのだ。

「フッ、キャストオフを最小で抑えて残りをクロックアップにまわす。

俺は、ここで止まる訳にはいかない」

その言葉に鏡冶は笑う。

成る程、確かに止まれないな。

そこで気づいた、双護の頬がはれている。

どうしたのか聞く鏡冶に、双護は笑みを浮かべて答えた。

「フッ、真由に思い切り殴ってもらった」

「えっ！？」

目を丸くする鏡治に、双護は言った。
もう二度と見失わないように、もう二度と迷わない様に。

もう二度と……道を間違えないように。

「なかなか強烈な一撃だったよ、流石は俺の妹だ。
そう思わないか？」

「ははは！いいねぇ！　俺も欲しいよ妹が！」

二人は頷いて天に手をかざす。
そこへ二体のゼクターが契約者の下へと飛翔する！
青き閃光を描くのはガタックゼクター！
そして、まるで太陽と重なる様に飛翔するカブトゼクター！！

『お前、今恨みじゃなくて愛情でオレを呼んだな？』

「・・・」

カブトゼクターが初めて双護に向かって口を開いた。
それは……つまり――

「合格か？　カブトゼクター？」

『何があったか知らねぇけど、合格も合格よ。
オレが家族愛に弱いの知ってた？』

「ふっ、それはよかった」

しかし、カブトゼクターは不思議だと言う。
分からないと双護の周りを飛び回る。

『今まで色んな人間をオレは見てきた。
でも、その全てが何かを決めて、俺の力を欲した連中ばかりだった。

黒か白、はっきりと分かれてる連中だ。

だけれど、正直お前はグレーに見えた。
どれが正しくてどれが間違ってるのか分からない。

ただ、何となく…お前を始めてみたとき、
人間ってヤツがどういった経緯で黒か白に染まるのか……

見てみたくなったのよ』

カブトゼクターは双護の周りをちょろちょろと飛び回る。
彼を確かめる様に。

『お前は二転、三転と迷って白と黒の狭間を行った

……今、お前の色は何色なんだ?』

真由を愛するか、恨みを封印して割り切ったのか？
愛するとは言え、またこんな事がおこってもおかしくない。
そのとき、本当に彼は今の色を保ち続けるのか？？

それをカブトゼクターは知りたかった。

今の彼は、白色なのか？
それとも黒色で割り切っているのか？

そして、双護は迷わず答えた。

「ゴールデンだ」

『……本当、お前は不思議な人間だよ』

『天王路双護だけじゃないさそれは』

『んー？』

ガタックゼクターは人間と言うモノを考えていた。
愚かで哀れな生き物かと思えば――

そうでないと思ったり、やはりそうだと思ったり。

『人間は言葉じゃ表せない何かを持ってる。
それが俺は興味深いと思った。
もっと人間ってヤツを観察したいと思ったね』

『その何かってヤツ、なんとなーくだけど
オレも分かる気がするよ』

ガタックゼクターは頷く様に体を動かすと、鏡治の手に収まった。

『コイツは馬鹿だ、だけど愚かじゃない。
創英は人間を見限った。

それは俺達もだ。
だが辛抱強くなってみたら…なかなか面白いぞ』

「どういう事だよッ！　もういいや！いくぜ、相棒！」

『はいはい、しっかりやれよ』

「ったりめぇだ！　変身んんんんッ！」『ＨＥＮＳＨＩＮ』

ガタックに変わる鏡冶。
カブトゼクターはもう一度笑って、双護の方へと体を向けた。

『ふぅん、まあオレも創英の考えは分からなくはなかったけど。
めんどくさいのよね、何かそう言うの』

「人間は愚かな生き物だと言う事は分かっているさ、俺もそうだ。
だが愚かでも俺達は生きている。

家族の為……だとかな」

『その家族をお前は殺そうと考えた。
だけど今、お前はその家族を守る為に戦おうとしてる。

ああ、不思議だねぇ』

「力を貸してくれカブトゼクター。
俺にはお前の力が必要なんだ、真由を…皆を助けるためにッ！」

『別人みたい変わるな人間ってのは。
まあ、成る程……確かに退屈しなさそうだぜ』

そう言ってカブトゼクターは双護の手に収まる。

「助かる…」

『いやいや、今度は間違えんなよ相棒！
もっと気楽にいこうぜ？』

調子のいいヤツだ。双護は笑ってカブトゼクターを装填した。

「変身！」『ＨＥＮＳＨＩＮ』

双護は愛情の力を込めてカブトに変わる。
そう、恨みの力ではない。愛の為に！！

カブトの目が黄色から青に変わっていた。

雨は不思議と止んでいた。
相変わらず空はよどんでいる、しかし……

太陽は赤く輝いていた。まるで、彼の姿の様に――

「さあ、いくぜ！」

「フッ！　ああ！！」

『『Ｃａｓｔ　Ｏｆｆ』』

一方……

「ぐわぁあああああああああああッッ！！」

ディケイドの体にザビーの必殺技が炸裂する。
既にアクセルとマッハは消費していた為に、この戦いはディケイドが完全に不利なものだった。

ザビーの後ろには赤い靴が設置おり、既にチャージを始めている。

名前の割にはシンプルなデザインの機械。

そこから、あと数分もしない内に洗脳電波が放たれるのだろう。

その前になんとしても破壊しなければならないが…

「クッ！」

カードに手を伸ばそうとするが、ザビーはそれを許さなかった。

クロックアップから何とか隙を見出そうとするも、猛攻がそれを阻止する。

『Ｒｉｄｅｒ　Ｓｔｉｎｇ』

「ッ！！　アアアアアアアアアア！」

またもザビーの必殺技。
ここまでの力を出せるのは…創英とて負けられないと思っているからに他ならない。

だがそれを許す訳には――ッ！

「いかないんだよぉおッ！」

ライドブッカーソードを振り回す。
だがソレは虚しく空を斬るだけで、すぐにザビーの攻撃がディケイドを吹き飛ばした。

「終わりだ、ライダースティング！」『Ｒｉｄｅｒ　Ｓｔｉｎｇ』

ザビーはディケイドに止めを刺すため、走り出すッッ！！

（そろそろヤバイかな…？　いや、最悪もう死んでるかも……）

限界、タイムアップだ。ダブルはため息をついて銃を下ろす。
それに気づいたクウガ達が階段に向かって足を動かした時……

それよりも先に2つの影が階段を駆け上がっていった。
まさに、一瞬。

「！」

赤と青のソレを見て、ダブルは変身を解いて笑うのだった。

「ッ！！」

「！」

『『Ｃｌｏｃｋ　Ｏｖｅｒ』』

ザビーの攻撃はディケイドに届く事は無かった。
クナイとカリバーがそれを弾いたからだ！！

そう、つまり……

「貴様らぁッ！」

「鏡治！！　それに…！！」

ガタックと……そこにいたのは、紛れもないカブト。
愛の力で変身した彼のカラーリングは、本来の青い目に赤い体。

紛れも無い、仮面ライダーカブト！

「もう、決めたのかよ？　進む道は」

「司っ！？　気づいていたのか！」

「いや、何となく」

「そう…か。ああ、そうだな。
安心してくれ、俺はもう道を間違えないッ！
絶対にだ」

ディケイドは頷く、そしてカブトが差し出した手をしっかりと握る。

「創英さん、悪いけどッ！！
アンタの野望もここまでだぁぁッ！」
「なにっ！」
ガタックの投げたカリバーが、赤い靴に向かって飛んで行く。
しかしバリアが張ってあるのか、カリバーは赤い靴には届かない！！
「しゃらくせぇぇぇぇぇえええッッ！」
『ＯＮＥ』『ＴＷＯ』『ＴＨＲＥＥ』

『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』

ガタックの光を纏った蹴りがカリバーに直撃し、そのままシールドをぶち破る！

カリバーは深く赤い靴に突き刺さり、そのまま赤い靴を破壊させた！！

「ば、馬鹿なッ！」

こんなに簡単に破壊されるのかッ！？

あれだけ時間をかけ、あれだけ想いを込めたのに！！

こんな簡単にッッ！！

それはまるで感情の様。
どれだけ恨んでいたと思っていても……

たった一瞬笑顔を見るだけで、それは間違いだったと理解できる様に。

「許さんぞぉおおぉぉおおッッ！！」

ザビーはクロックアップを発動してディケイド達を狙う！

ガタックもクロックアップを発動して対抗しようとするが、

流石に連続しては無理がある。

すぐに解除され、ザビーの連撃を受ける事となる！

「双護！　人間は生きている内で必ず道に迷う生き物さ！」

ガタックを助けるために動き出すカブト。

そんな彼にディケイドは声をかけた。

「司……」

ディケイドはそのカードを手にする。

そう、開放されたカブトのカード！

「だがな、必ず人間は自分が進むべき道を見つける！
でもそれは一人じゃ無理かもしれない。
誰かに助けられたり、誰かに教えられたりしながら
でも、必ず見つけるのさ」

『ファイナルフォームライド』

「それが、天の道ってやつだろッ！」

『カカカカブト！』

「天の道か、悪くないッ！」

ディケイドとカブトは笑い合い、拳を重ねあった。

瞬時、カブトの体が光り輝き、巨大なカブトゼクターに変わる。

Kデュアルゼクター（カブト）！

第１４２話　ＴＲＵＴＨ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（後書き）

はい、と言う訳で
次でカブト編、本編は終わりですね。

カブトはライダーのデザインがシンプルなのに、すごくカッコイイのが凄いですね。

何気にザビーが好きですね。
蜂ってのが中々どうして気に入ってます。

では、この辺で。
次もよろしく！

第１４３話　ＮＥＸＴ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（前書き）

はい、更新ですね。
ちょっともう早めに更新して、キリを良くしておこうかなと！
……と言う訳で、カブト編ラストでございます。

「カブト・デュアルゼクター」

ではどうぞ！

第１４３話　ＮＥＸＴ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ

ディケイドはデュアルゼクターに備えられている
三つのボタンの中から、一番目を押した。
すると角が光り輝き、電子音が響く！！

『ＯＮＥ』『ＡＬＬ・Ｃｌｏｃｋ　Ｕｐ』

オールクロックアップ。
クロックアップを発動できない筈のディケイド。
そして既に使い果たしてしまったガタック。

二人の速度がクロックアップ中のザビーと、同速に変わる！

それがデュアルゼクター一番目の能力。
仲間と認識した者に、クロックアップを発動させる力！

「なんだとっ！」

「ウラァッ！！」

向かってきたザビーをディケイドは殴り飛ばす！
そして、素早く金色のカードを発動させた！

「全てを、終わりにしようッ！」

『ファイナルアタックライド』『カカカブト！』

猛スピードでデュアルゼクターは、上空へと飛んで行き見えなくなってしまった。

そして同時に、ディケイドの真下。
地面にカブトの紋章が浮かび上がる。

「ハァァアア……ッ！！」

ディケイドはその中で、構えをとってゆっくりと息を吐く。
徐々に溢れていく光。
相当の力を込めているのだろう、見ればすぐに分かる。

「ふざけるなぁぁあああッッ！」

ザビーは必殺技を発動させて、ディケイドに突っ込んでいく！
何か大技が発動する前に殺すため、ザビーは走り出した。

ガタックはそれを止めようと自らも走り出すが…ッ、間に合わない！

ザビーはディケイドに触れ――

「『ヤァアアアアアアアアアアッッ！！』」

「があああああああああああああああ！！」

「！」

だが、ザビーが地面に浮かび上がったカブトの紋章に触れた瞬間、上空からデュアルゼクターが突進してきてザビーを弾き飛ばした！

大技なんて無い。

向こうから仕掛けさせるのがこの技の特徴である。

「カウン……ターだった…の……ッか！」

ザビーの変身が解かれ、創英は気を失う。

赤い靴も完全に破壊されており、創英の野望は完全に終わりを迎えたのだった。

その後、創英自らの手によって監禁されていた有美子の夫や研究員達も無事に救出された。そして創英は法によって公平に裁かれる事となったらしい。刑務所へ送られる際、彼は記者達に告げたと言う。

『私は人間であるがゆえに人間を見誤った。
絶望と憎悪。後ろへ下がり続けていた私が、愛と希望を背負った人間。

それが例え少年であったとしても
前へ進み続けた人間に勝てる訳などなかったのだ』

彼はこの戦いで何を思い、考えたのだろう。
それは彼以外誰にも分からない。

その後、彼は何かを悟ったようになり落ち着きを取り戻したと言う。
暴れることもなく、礼儀正しい態度を守っていたらしい。

未来の話だが、彼は出所の瞬間まで、真面目に過ごしていた。
彼は……その中で――――

進むべき道を見つけられたのだろうか？

あっけない最後だろう、だがこれは終わりではない。

始まりなのだ

「創英は裁判の後に、刑に処せられるらしいわよ」

「彼のやった事は間違っているが僕らに非がない訳ではない。今回の問題で、僕達自信が変わらなければならないのだろう」

有美子と夫の陸矢は連日報道されている創英のニュースを見て、切にそう思う。

さすがに今回の事で過ちに気づいた人間は、すこしでも環境や自分達の愚かさを正そうとしているようだった。カプセルから降りる人達もちらほらと出てきている。

「案外皮肉なものね……」

有美子はため息をつく。

創英が犠牲となったことで創英の野望は叶おうとしているとは……

だがまあこれから少しづつこの世界はよくなっていくのだろうと、二人は安心したように笑った。

しかし、気になる事もある。

「ところで、鏡治…あんた皆にお別れ言ったの？」

「え…あぁ…うーん」

「言って…ないのかい？」

ソファに座っていた鏡治は複雑そうに頷く。
そう、もう司達がこの世界にいる理由もない。
そして今日は学校が世界移動を行う日、簡単に言えばお別れの日なのだ。

「どうにもそう言うのは苦手で……」

鏡治はそう言って自分の部屋に戻ろうとする。
いつもの彼より明らかにテンションが低い。

どうやら、彼は今日。
初めての失恋を味わうようだ――

「・・・」

「・・・」

有美子と陸矢は少し寂しげに頷きあい、鏡冶を呼び止めた。
不思議そうに目を丸くする鏡冶に、二人は告げる。

「鏡冶、あんたはもう立派に一人で立ってんのよね。
今回の事で本当に分かったわ」

「だから…鏡冶くん、君には後悔しない生き方をしてほしい」

今、鏡治が本当にしたい事は何か？
二人は問いかける。

いつか、こんな日がくるとどこかで思っていた。

そして知っていた。
もう彼は、自分の手を離れ走り出している事も

「え……？」

扉が勢い良く開く音が聞えて、鏡冶はそちらに視線を移す。
すると、そこにいたのは……

「きょうずぅいいい！　サソードタクシー営業スタート！」

「……は？」

仮面ライダーサソード、つまり神也が変身した状態で立っていたのだ。

「ッ！　世界移動か…」

学校の周りが光に包まれて景色が崩れていく。
世界が移動していくその様を、双護たちはクラスから見ていた。

「結局、鏡冶くんとはお別れをいえなかったね…」

翼の言葉に皆はうつむく、今回は鏡冶や有美子にいろいろと助けられた。
できればちゃんとお別れを言いたかったが、どうやら向こうもいろいろと忙しいらしい。

国のお偉いさん達に質問やらなんだのと、とても抜け出せる状態ではないようだ。

「・・・」

「っ！　真由？」

ふいに、真由が双護の手を握る。
彼女にしてはそれなりに力強いものだった。

そして、それより驚いたのは……

「真由……」

真由は泣いていた。

寂しそうなその顔、彼女の淡く、自覚すらなかったろう初恋は終わりを告げたのだ。

尤もそれは恋と言うほどのものではないかもしれない。

それでも彼女にとって、鏡治は少しだけ特別な存在だったのかもしれない

「・・・」

皆そんな真由につられて涙を浮かべる。

世界が変われば……もう、鏡治とは――

「？」

そんな中、葵は翼が少し驚いた様に笑みを浮かべている事に気づいた。
翼も葵に気づくと後ろを指差す。

（後ろ？）

葵は不思議に思いながらも後ろを振り向いた。
何があると言うのだろう、この状況で驚くなんてよっぽどの事じゃないと……

「！」

そこにはイマジン達がいる訳だが、
なにやらプラカードを持ちながら複雑そうに話し合っていた。

どうやら出るタイミングが分からないのだろう。

そこで葵もその事に気づいた。

『うそ！』

葵は小さく翼に向かって呟く。
翼は頷くと、わざとらしく咳払いをした。

翼の方を振り向く司達、そして見えた。

そいつが……

「え？」

「あ…えと…」

完全に出すタイミングを迷走したイマジン特性プラカード。
そこには『どっきり』と書かれた一文が。

そしてイマジン達の後ろで気まずそうに立っていたのは……

「お前ッ！！」

双護ですらつい大声で叫んでしまう。
それに気づいた真由は涙を拭いて、後ろを振り向く。

「あー…あのっ、そのなんて言うか…
ああ、そうだ！　お手伝いしたくてさ！

た、大変ご迷惑をおかけするかもしれないのですが…

よ、よろしく！」

「！！！！」

真由は気づいた時にはもう走り出していた。
涙、笑顔、いろいろな物を混ぜて走る。

そして思い切り彼に抱きついた。
いや、飛びついた。

まさにタックルとも言えるだろう真由の突進に、彼はうめき声を上げ、苦しそうに笑う。

「だはは、よろしくな真由ちゃん！」

「うん！　うんっ！
よろじくね！　ぎょうじぐん！」

涙で顔をふやけさせながらも、真由は新メンバーを快く迎え入れたのだった。

こうして、新しい仲間がクラスに増えましたとさ！

そして、物語は新たな文を刻み付ける。

どこともつかぬ書斎、いや図書館のような場所に男はやってきていた。

それなりに歳はいっているだろうか？

眼鏡にフェルト帽という身なり。男は椅子に座っている女を見つけると、声をかける。

「新意鏡治が新たに加わったか…」

「正義に燃える男か…そなたも昔はそうだったのではないか？」

皮肉めいた女の言葉に、男は少しだけ眉を動かす。
だがそれだけだった。男は女の言葉を受け流すと、また視線を『その本』に向ける。

「彼の影響力はどの程度だ？」

「あー、ガタックはですねぇ……」

女の代わりに、後ろのソファで座っていたゼノンが口をひらく。
隣では相変わらずフルーラが、彼の腕に自分の腕を絡ませて笑っている。

よく飽きないな、男は切に思う。
いや、これが愛なのか？　男は余計な考えを捨てると、ゼノンの話に集中する。

「ガタックは鮭弁当でいうなら……オマケおかずのから揚げってところかな。
　別に問題ないですよ、世界が彼の埋め合わせをする程の重要人物じゃない」

その言葉に男は頷き、同時に野上良太郎に視線を移す。
鏡冶を中心にじゃれ合っている司たち、その中で彼はとても楽しそうだった。

「だが、彼はそうではない。

…だろう？」

ゼノンはニヤリと笑って頷いた。

「野上良太郎は、鮭弁当で言う鮭（しゅやく）だからね。

どう思います？

鮭弁当って書いてあるのに鮭が入ってなかったら」

「最悪ですね、鮭は神が生んだ食べ物ですから」

ゼノンの言葉に答えたのは、男でも女でもフルーラでもない。
大量の本に囲まれて姿は見えないが、それは会話に参加していた。

今、この書斎には5の生ある者がいるのだ。

男と女、ゼノンとフルーラ。

そして彼。

「次の世界で良太郎が変身すれば
主軸である電王の世界は彼を切り捨てます。

関わりすぎたんですよ、電王は。

世界は彼の帰還をまってくれない、新たな『電王』を主役として
追加するんです」

新しい鮭。まさにＮＥＷって所かな。ゼノンはそう言って笑う。

「ああ、でも勘違いしないでね。
ボクらはちゃんと世界に戻る鍵を渡したんですけど」

「良太郎とハナはディケイド側につくのかしら？」

野上良太郎とハナ。
男は複雑な表情を浮かべ、二人を見る。

いくら数々の激闘を繰り広げたとは言え、まだ子供だ。
若干の罪悪感を男は感じていた。

しかし、それは女達の嘲笑でかき消される。

「まあ尤も電王が消えれば
ディケイド達も相当困る事になるんだけれどね」

クスクスと笑うゼノン達、男は少しため息をついて椅子に腰掛けた。
実に、正論だと。

「申し訳ないとは思うがコチラとしては電王の力を失うのは痛い。
彼ら、そして司は稀に見る素材だからな」

「このディケイドとか言うヤツでしょうか？

フフフ、成る程。
確かに異様な力を持っている様だ」

女は手に持っていた紅茶を置いて、司をまじまじと見る。

ディケイド、それが彼らの切り札。

そう、『ディケイド』が切り札なのであって……

聖司。選ばれたのは幸か、それとも？

想像しただけで笑えてくる。

「そなたも、確かコレには関わっているのではなかったか？

ゼネ――」

「その名は捨てた。今の私に名前はない」

「これは失礼しました、ククク…」

女は少し小馬鹿にしたように笑い、男に謝罪した。

いや、訂正しよう。

女は謝罪の言葉を述べただけであって、誤る気などさらさら無かっ

た。

むしろ、お礼を言ってほしいくらいだ。
不快と言う感情を呼び出してあげたのだからと。

「名前などに意味はない。そう思わないか？」

「成る程、成る程。確かにそうだ」

だが名前が無いと言うのはいろいろと不便なモノ。
女は男に新しい名前を求める。

尤も、女にとってはどんな名前をつけるのかが少し気になるだけで、
男に名前がないと言う事はどうでもいいのだが

呼ぶだけなら、『おい』だの『そこの』だの

種類には困らない。

「そうだな……」

そんな女の心情を悟ってかどうかは知らないが、男は適当に周りを見回す。
無数の本が存在している中で、適当に一冊の本を手に取った。
男はその本を適当にめくり、一人の登場人物を見つける。

これと同じでいい。
男はそう言って女に新たなる名前を告げた。

「適当な男だ。では、聞こうか？
そちらはどうなのだ、ナルタキ」

「やつ等は協定議会を予定より早く行うつもりだ。
コチラとしても一秒でも多くの正義を生み出さなくては……」

「正義の定義とは個人によって異なるモノだが、まあいいだろう。
そなたが私を召喚した時点で
私はそなたに協力しなければならない」

ナルタキが頷こうとした時、本の影から声が聞こえてくる。

「ナルタキさん、気をつけたほうがいい。
彼女は協力はすると言ってますが――
邪魔しないとは言っていません」

その言葉にゼノンとフルーラは声を出して笑う。
確かにそうだ、そう言う人だと二人は自らの主人をあざ笑った。

ナルタキはため息をつく。
女を見てみれば何食わぬ顔で紅茶を飲んでいるではないか。

「ふん、期待しているぞ魔女よ」

魔女と呼ばれた女はニヤリと笑って、クッキーに手を伸ばす。

「私は観劇の魔女、私は暇を潰すだけ。

そなた達の存在が私にとって

少しでも退屈を紛らわせるものとなる様に期待しています」

そう言って魔女はもう一度、司達へ視線を移した。

そして『その本』の題名をもう一度確認する。

十の存在が紡ぐ物語、あと一つの試練を成功させればそれは具現化される。

「さあ、残る試練はあと一つ…どうなるのか？」

ナルタキ、ゼノンとフルーラ、本の影に隠れていた者はオーロラを出現させて書斎を離れる。

魔女はくすくすと笑うと、読んでいた本を閉じ目を瞑った。

次の試練まで、少し休ませてもらおうか。

魔女が本を閉じた事で、彼女達が『ずっと読んできた』本の題名が大きく晒される。

その本の名前、題名は……

『Episode DECADE』

第１４３話　ＮＥＸＴ　ＳＰＥＥＤ　ＬＯＶＥ（後書き）

カブト編、本編終了でございます。
以前から言っていた、ライダー以外の作品キャラ
分かった人は分かったんじゃないでしょうか。

どうしても知りたい人は
「観劇　魔女」で検索してくださいｗ

それで一番上にでてくるだろうピク〇ブ百科事典を見てもらえれば
作品と、名前、能力が分かると思います。

とは言え、結構オリジナル入ってるんですけどね。

ただ一つ注意が。
その作品はかなりクセが強く、大体の人はラストがモヤモヤすると
思うので（勘違いしないでね、僕はファンですよ）

その作品をおススメする事はちょっと止めておきます。

では、これで

次もよろしく！

第１４４話　番外編　出会いは突然（前書き）

はい、カブト編完全終了ですね。

まあ次は近いうちに
響鬼編の注意書きとプロローグを足したものを更新すると思います。

そこからちょっと話の整理とかしたいんで、
一週間程度お休みしたいと思ってますね。

あとすいません、今回のラスト付近は自分でも何書いてるのか分からなくなりました（爆

ではどうぞ！

第１４４話　番外編　出会いは突然

「――――っておわぁ！！」

「ぎゃあああああ！」

ブルースペイダーとオートバジンがすれすれで通り過ぎる。
校庭には、いたる所にカラーコーンが置かれていた。

青い空、白い雲、響く悲鳴。
校庭では砂煙が何度も巻き上がっている。

普段聴こえていた先生の声や、音楽の授業から聞こえてくる楽器の音は全く無い。
代わりに、バイクのエンジン音が耳に入ってくる。

そう、定期的に彼らはバイクの練習をしているのだ。
仮にも彼らは仮面ライダー、ライダーなのである。

バイクを操ってこその称号を名乗るに値するだろう。

ゼノン達が言うには、記憶がどうのこうのと……

ややこしい話の様だが……つまり、司達はバイクには乗れる様になっている。

だが、技術面までは磨かなければ上達する事はない。

そして、それは戦闘にも同じ事が言える。

最低限戦えるようにはしてくれるが、そこからは自分達で特訓しないと駄目と言う訳だ。

だから、こうやって頻繁にバイク練習。

また、模擬戦闘で鍛えなければならない。

尤も、それなりに楽しんでいたりするのだが…

「はんッ、こんなもんかな」

「流石ですね……負けましたよ」

そう言ってニヤリと笑うのは薫だ。
彼女はクラスメンバーの中でもバイクの運転技術がトップクラスってなものである。

最初はユウスケの後ろにしがみ付いていただけだったが、いつのまにかトライチェイサーは彼女の物と言ってもいい程に定着していたのだった。

ユウスケも、久しぶりに乗ったときはゴミ箱の中につっこむと言う失態を晒してしまい。以後は彼女にトライチェイサーの運転を任せていた（洗車は熱心にしているが……何故か着ぐるみを着て……）

そんな彼女の後を追うのはいつも決まってアキラだ。
彼女もまたバイクの技術が高く、薫には勝てないものの、いつも二人がトップにきていた。

「またやろ、アキラ。今日はもうこの辺にしとかない？」

「はい、そうですね」

そう言って二人は楽しげに会話しながらバイクを駐車しに向かう。
それを地面に伏したまま椿と拓真は見ていた。

「無様だな」

「お前もな」

「グッ……」

同じく、バイクから転げ落ちた咲夜は唇を噛むのだった。

「葵さーん！　これどこ持ってけばいいですか！」

「あぁ、うん。それは皆のお皿に二つずつお願いね」

「わっかりましたァァァ！」

そう言って鏡冶は猛スピードで配膳を行っていく。
これには葵も大助かりだ、帰ってきた鏡冶にお礼を言うと紅茶を差し出す。

「ごめんね、手伝ってもらっちゃって」

「いんやぁいいんすよ、俺もこれくらいやらないと！」

「そんな気負いしなくていいのよ？
わたしは戦えないから、せめてこれくらいはしないとだから…」

鏡治が加わってから一週間がたった。
鏡治は葵と違ってみんなとの接点がそれ程ない。

やはりなれるのに時間がかかるかもしれないとの配慮なのか、ゼノンとフルーラは十日間の時間を彼らに与えた。

転送された世界は自分達の世界と同じような現代風の街並。
ゼノンとフルーラが言うにはこの世界に化け物はいないらしい。

つまり、よほどの事がないかぎりは戦闘になる事はないと言う事。
鏡治の事もあるが、我夢をリラックスされる事も大切だろう。

ライダーになれていないのは、彼だけなのだから。
まあしかし、我夢はそれ程緊張していない様にも見える。少なくとも、与えられた休暇はそれなりに楽しんでいるようだ。

「うぃーす鏡治、早いなお前」

「おお！　まあな！」

起きてきた真志に挨拶をかわす。
流石に一週間が立てば、ぎこちなさは消えて、鏡治もクラスに溶け込む事ができたようだ。

真志は鏡治と葵に挨拶を交わすと、椅子に座ってパンをほお張りはじめた。

「おはよう鏡治くん」

「ああ！　おはよう！」

拓真とも挨拶をかわす鏡冶。

「おはよぉ…！」

「おはよう！　真由ちゃん」

真由が笑顔で鏡冶に駆け寄ってきた。
満面の笑みの真由を見て、真志と拓真は小声で話し始める。

「ん、やっぱ鏡冶と話す時の真由ちゃんは
いつもと少し雰囲気が違うな」

「あはは、やっぱり初恋ってヤツなのかな？」

「真由ちゃん本人も気づいてない程度だろうが、いやいや」

ニヤリと笑いながら二人はコーヒーに手を伸ばす
その時だった――

「鏡冶、おはよう」

「おう、おは――」

『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』

「え……っておわぁあああああああああああ！！」

「「ブゥゥゥゥゥゥゥッ！！」」

コーヒーを吹き出す拓真と真志。

いや、無理も無いのかもしれない。

光を纏った回し蹴りが、鏡冶と真由を引き剥がすように襲い掛かったのだ！

なんとか回避した鏡冶！

そしてそこにいたのは・・・

「鏡治、言い忘れてた事があるんだ。
このクラスにはおはようのライダーキックと言う習慣が――」

「あるわけねぇだろぉぉぉおおお！！
朝に必殺技ぶっぱなすってどういう事だよ！！」

カブトはやれやれと手を上げて変身を解除する。

「安心しろ、あてるつもりはなかったぞ……多分」

「当たり前だ！」

双護はヤレヤレと笑って席につく。
何故か残念そうなのは……まあ、気のせいだろうね。多分

「ってか今多分って言わなかったか…？」

冷や汗を浮かべながら鏡治と真志は席に戻った。
拓真はニッコリと笑いながら言う、きっと双護は真由と鏡治にやきもちをやいているのだと。

なんだ、そう言うことだったのか。
鏡治は胸を撫で下ろし、双護に笑いかけた。

「安心してくれお義兄さん！　真由ちゃんとはまだそんな仲じゃ――」

「お義兄さんと呼ぶなぁぁぁぁぁああ」『ＨＥＮＳＨＩＮ』

「くっ！　しかたないのか！」『ＨＥＮＳＨＩＮ』

「せんせー、また鏡冶達が校庭の真ん中で遊〇王やってますー！
あれ変身する意味あるんですかー？

校庭まで出て行く意味あるんですかー？」

「ないと思う」

シスコンに覚醒した双護とのバトルもあるが、鏡治はもうしっかりクラスになれているようだ。
翼は安心したように笑う。

とうの真由も少し雰囲気が変わるものの、鏡治と皆との接し方はそれほど変わらない。
双護も一安心だろう。

……多分

「それにしても、本当についてきて大丈夫なのか？」

「ん？」

帰って来た鏡治を司が出迎えた。

確かに鏡治が仲間になってくれた事はありがたい。
強力なクロックアップを持っているわけだし、何より鏡治の性格には突貫力もある。

なにより皆も喜んでいるわけだし、司も嬉しいのだが……

まあやはり、そこは気になるわけで

「ああ、協力させてくれッ！
司達の世界が危ないなんて知っちまったらほっとけないっての！」

確かに有美子達と別れるのは少し辛い。
だが永遠の別れではない、鏡治の前に一度ゼノン達が現れたのだが、その時に彼は言った。

全てが終われば、また鏡治は元の世界に帰れる。

必ず――

それに、ゼノン達にとっても鏡治加入は嬉しい誤算だったらしい。

だから、鏡治は後悔していない。

との事だった。

「わかった。とまあ、改めてよろしく」

「ああ！」

司と鏡治は、固い握手をかわすのだった。

そんなこんなで時間が経ち、残る休みはあと一日となった。
それぞれは最後の休暇を満喫するために遊びに

でかける者。

寝る者。

学校で過ごす者と別れていった。

しかし、そんな彼らの心の中にある違和感。

そう、まだあの問題が解決していなかったのだ。
それで少し皆、もどかしい感じになっている。

「・・・」

「・・・」

目を合わせない、話さない。
そんな日が続く、我夢とアキラの喧嘩。

ブレイドの世界から二人の口数は減り、
カブトの世界では結局数回、しかも少ししか喋らなかった。

時間が経てば経つほど気まずさは増していき、遂に我夢とアキラは
話さなくなってしまったのだ。

二人の表情は暗い、司達が話しかければ笑顔をうかべるが
一人でいる時は必ず複雑な表情をしているのだ。

「何とかしてやりたいが……」

あれからどんな手をつくしても上手くいかない。

遠慮みたいなものがあったのだろう。
なにせ一度は盛大に失敗してしまった身、今さら何ができようか？

「もう一度、着ぐるみ大作戦でいくのはどうだ？」

「絶対に止めてください」

こんな感じである（尤も、着ぐるみ作戦で二人の仲がよくなる事は絶対に無いのだが）

なんとなく壁が大きくなっていって
二人の距離は大分遠くなってしまった。

なんとかしてやりたいと思うが、もっと事態を深刻にしてしまうのではないかと怖いのも事実だ。咲夜が言うには我夢の話をアキラは聞いてくれないらしい

「うぅぅ、どうしたらいいんでしょうか……」

我夢の周りの空気がどんどん黒くなっていく。

このままじゃ安心して休暇を過ごせない、もう一度なんとかしよう！

司達が心に決めた時、その男が真っ先に我夢の肩に手をおいた。

「どうしたんだ我夢くん？」

「ッ！　鏡冶さん！」

「なんかあったのか？　俺でいいなら相談にのるぜ！」

「……じ、実は――――ッ」

一方、咲夜はアキラに直接話していたのだが……

「アキラ、なんとか我夢を許してはくれないか？」

「咲夜先輩…ッ、許すもなにも、私は――――」

「おじゃましまあああああああああああす！！」

「「ひっ！」」

ぶち破る、まさにその言葉が妥当だろう。

女性陣がおもに使っている教室に鏡治が入って来た。

目を丸くする二人をよそに鏡治は歩いてくる。

我夢をつれて。

「きょ、鏡冶!?」

「・・・ッ!」

アキラは我夢の姿を見ると、目を反らしてしまう。
それは我夢も同じで、また二人の間に見えないが大きな壁が現れる。

だが……

「アキラちゃん!　手ぇ出してくれ!」

「え！？」

「ささッ！」

「あぁぅう…は、はい」

おずおずとアキラは自分の手を鏡冶に向かって差し出す。

何をどうするのか？

アキラは不思議そうに自分の手を見る。

鏡冶は頷き、お礼を言うと…

「え！」

「なっ！！」

『やれやれ……』

強引なヤツだ。ガタックゼクターは呆れた様子でそれを見る。
鏡治は、物凄いスピードで我夢の手をとりアキラの手と重なり合わせた。

つまり強制的に握手をさせたのだった。

驚く二人、もちろんすぐに手を離そうとするが鏡治がガッチリと掴んでいる為に手を離すのは無理だった。

「きょ！　鏡治さんっ！」

「……ッ！！」

慌てる二人を見て鏡治は口を開く。
鏡治はまず、アキラに視線を移した

「アキラちゃんはどうして怒ってるんだ？」

「べっ！　別に怒ってなんか……」

鏡治は頷いて次は我夢を見る。

「じゃあ、我夢くんが怒ってるんだな」

「いや！　僕は全然……ッ」

また頷いて鏡治は目を閉じる。

二人は二人とも怒ってないという

「じゃあもういいな」

「「え？」」

「最近二人は何かぎこちなかったからさ。

でも、もういつも通り過ごせるんだよな？」

鏡治は、すこし笑みを浮べて二人に問いかけた。

いつも通り？

「「・・・」」

我夢とアキラは一瞬互いに目を合わせるが……

どうもまだダメの様で、直ぐにまた目を反らしてしまった。

鏡治は言う、普通の二人ならそんな事はない筈だと。

尤も、鏡治は普段の二人の様子を知らないわけだが……

しかし、その鏡治でさえ今の二人の様子がおかしいと言う事が分かるのだ。

「――――す」

「え？」

「私が悪いんです」

遂に、耐えられなくなったのかアキラが声を震わせながら我夢を見た。

戸惑う我夢、アキラは目に涙を溜めて言う

「私が変な意地を張ってしまったせいで……

我夢くんは何度も謝ってくれたのに……ッ」

「アキラさん……」

鏡治は真顔に戻ると、ゆっくりと頷く。

「大丈夫さ、アキラちゃんだって悪くねぇ。
ああ、そうさ誰も悪くないんだ」

「でも、私……

どうしても我夢くんの考えてることが納得できなくて！」

「ッ！」

我夢が言った言葉。
自分の役割は盾、それが納得できなかったのだ。

自己犠牲が最良の選択だと、彼は言う。
ならば、その彼を想う人たちはどうなる？

まるで自分には何の価値もないみたいな言い方。
そんなのはおかしい筈だ。

「だけど……私は――――ッッ

ただ素直に我夢くんが心配だから、

そんな事言ってほしくなかったって言えばよかったのに……

私は……」

「そっ！　そんな事ッ！！」

正直に話したアキラ。
ならば自分も素直になるべきだろう、我夢はアキラの瞳を直視する。
普段の彼ならできない行動だが、今はただ素直に彼女を見ていた。

「すいません…本当に軽率で馬鹿な発言でした。
僕達は皆で一緒に帰るんです。

平和になった元の世界に……」

「は、はい！」

「ごめんなさいアキラさん。僕を許してくれますか？」

「も、もちろんです！
私も……許してくれますか？」

「はい！」

笑顔になる二人を見て、鏡治も安心したように笑う。

「ああそうだ。じゃあ、仲直りの握手な！」

そして鏡治は自分の手を二人から離す。
我夢とアキラは少し戸惑いこそしたが、しっかりと握手を交わして笑い合った。

「強引な男だなお前は」

そう言いながらも咲夜は鏡治に向かって拍手を送っていた。
自分じゃそんな行動思いもつかなかった。

なかば無理やりだろうとも、二人は仲直りして笑い合っている。

『今頃気づいたのか？　コイツは強引だぞ』

「へっ！　ああそうさ。
多少の強引さが壁をぶち破るってもんよ！」

「あ！」

教室から出てくる鏡治を見て司達の表情が強張る。

どうなった!?

目で語りかける司達に、鏡治は爽やかに笑って返した。

「!!」

そして次に出てくるのは笑顔の我夢とアキラ。
楽しそうに談笑している二人を見て、司達は歓喜と尊敬の声をあげる

「うおぉおおおおお!

鏡治さんかっけぇえええええ!!」

「マジ鏡治△鏡治△!　惚れた!　イケメンすぎる!!」

「くっ、流石だな鏡冶……」

「いやぁ、俺はなんにもしてないぜぇ。ああそうさ」

満足そうに笑う鏡冶、さて何か食べに行こうか？
鏡冶は爽やかに歩き出す。

「鏡冶さん！　何か奢ります！
いや奢らせてください！　回るおすし行きましょう！」

「馬鹿野郎！　鏡冶さんがそんなモノで満たされる訳ないだろ！
回らない方行くぞ！」

「回らない！？　回転しない！？
ノーローリング！？！？」

がやがやと騒ぎながらも、我夢とアキラの仲が戻ってよかったと皆は喜び合う。

すこし後ろにいる当の本人達も、少し前までのが嘘の様に楽しそうだった。

「我夢くん…」

「はい？」

「これからも……ずっと『お友達』でいましょうね！」

「・・・」

「「「「――――」」」」

「え？」

我夢が真っ白になって倒れたのは言うまでもない。

ずっとお友達。

一生お友達？

永遠オトモダチ……

友達って……友達か。
それ以上にはなれないんですよね。

「いやいやね、あれは別に深く考える必要ないって！」

「そうだぜ我夢！　きっとアキラも純粋な気持ちでだな」

「だと…いいんですけど」

大きな公園、その脇道でげんなりした様に我夢はため息をついた。
それを励ますようにユウスケと真志はにこやかな笑顔を浮かべている。

我夢は二人の言葉に笑みを浮かべると、お礼を言った。

とはいえ、テンションは心配する様に低い訳だが……

「よしよし、じゃあまあどっか遊びに……い――――」

「ん？　どうしたんだ？」

真志がいきなり立ち止まって、なにやら深刻な表情を浮かべていた。
ユウスケと我夢は不思議に思って真志の視線を追う。

「・・・？」

何か遠くの方で赤い何かが……

「って！　あれ人じゃないか！」

「え！？」

赤い髪の少女が倒れている。
血が出ていない事から、外傷はない様だが……

いや、倒れているなんて普通じゃない。

「た、助けにいくぞ！」

三人は急いで倒れている人のところへと向かったのだった。

「いやぁーワリーね！

飯奢ってもらっちゃって！　たははは！」

「「「・・・」」」

「おなか空いてやばかったんだよぉ！　アハハハ！」

目の前でもりもり食料を摂取している少女を
三人はただただ口を開けて見ているだけだった。

どうやら空腹で倒れていたらしく、ファミレスで少女にご馳走してあげる事になった訳だが……

「すんませーん！
追加でハンバーグランチ七つお願いしまーす！」

「なっ！　七つ！？」

先ほどから少女は追加注文を取りまくっている。
いや、既にテーブルには何枚、何十枚もの空き皿が重なって……

奢ってやるとは言ったが……

「クソッ、こんなことなら食べ放題にしとくんだった……」

「おれ、もうお金ないんだけど……」

顔が青くなっていく真志達。
だが少女は気にする事なくパカパカと食料を口に運んでいく。

というか既に少女の体に入る限界を超えている様な気がしてならないのだが。

「あ、つうか……あんた等名前は？」

少女はユウスケのエビフライを摘み取ると、口へ運んだ。

え？　それ…ッ　え？　あれ？
それおれのエビフライだよね？　え？　え？
なんで？　なんで普通に食べちゃうの？　え？

なんて視線を送るユウスケのスープを少女は飲み干し、もう一度彼らの名前を聞いた。

「じょ、条戸真志……」

少女は真志のハンバーグを一口で頂くと、わかったと笑った。

「オデのエビフライ……

じゃなくて、小野寺ユウスケ」

「あ、相原我夢です」

「うっし！　覚えたぜ。
いやぁ、助かったよ本当に。
マジでやばかった、オレは朱雀。よろしくな！」

豪快に笑って少女は尚も食料を取り込んでいく。
というか、いろいろ凄い。
なんかハンバーグなんて二口で消えてるし、から揚げなんて飲み物みたいに取り込んでいく。

――の、割には太っていないときた。
露出が多めの服なので腰はさらけ出されている訳だが、くびれがしっかりと確認できる。

一体これだけの食料はどこへ行くのか……

「あのっ、朱雀さん……」

「朱雀でいいぜ、どうした？」

「そろそろ、僕らのお金が……」

「え？」

朱雀は我に返った様に手を止める。
そしてその髪と同じ赤色に顔を染めた、ブンブンと手を振りながら謝り始める朱雀。

「や、やべーっ！
まーた加減しないで食っちまった！
たはは、ワリーワリー！

いっつも言われてるんだけど……」

そう言って朱雀は伝票を申し訳なさそうに真志達に差し出した。

「は？」

「あー…その、なんて言うか
オレ、金持ってないのよ」

「・・・ッ」

「今度、会ったらさ。
ぜってーお礼すっから……あとよろしくッッ！！」

「え！？　ちょ！」

「ごちそーさんッッ！！」

朱雀は軽やかな動きで椅子から飛び降りると、そのまま走り去っていく。

残される三人と伝票……

「ゆ、ユウスケさん、真志さん！！」

我夢の声が裏返り、完全な高音に変わる。
嫌な予感しかしない。

真志とユウスケの足がガタガタと振るえはじめる。

朱雀はドリンクバーの様に料理を食べていた。
もちろんハンバーグはドリンクじゃない。

「何…？　どうしたのッ？」

「これ、見てください」

我夢は顔を真っ青にして、ユウスケと真志に伝票を見せる

「「――――」」

三人の色素がもうどこかへ消えてしまったのではないかと思うくらい。彼らは真っ白になるのだった。

「んんんんんんんんんんんんん！？！？！？」

ビターンッ！

三人は糸の切れた人形の様に地に伏せる。

「きゃああ！　お客様？

ちょ！　お客さまぁあああああああ！！」

ウエイトレスの悲鳴が店内に響き渡る。

ユウスケの手元には赤い血文字……もといケチャップ文字がダイイングメッセージの様につづられていた。

『七万円……』

ユウスケ達が七万もの大金を支払っている頃……

「バーゲンもう始まってるみたいだよ！」

「ふぅん、まあでも焦らない、優雅にいきましょ」

「そうですわよ友里さん。焦りは禁物なのです」

そう言って友里、薫、美歩の三人はデパートの洋服売り場に到着した。
中々小さなコーナーと言えど良質でおしゃれなモノがあるかもしれない。

三人は人々が群がる売り場へとやってくる。

「では皆さん、用意はいいかしら？」

「もちろんですわよ、まいりましょうか？」

「ええ――――ッ」

「「「しゃぁぁぁあアアアァァァァァアアアアアアアア！！

！」」」

先ほどの優雅さ（）が嘘の様に三人は咆哮をあげて人の群に突っ込んでいく。

「どけやぁあああああああああああ！！」

「うらぁあああああああああああ！！」

「これはあたしがとったんだよおぉおおおおぉおお！！」

鬼の様な形相で服を奪い合う女達、尤も薫たちも同じな訳だが……

まるでそれは、ピラニアの群れに落とされた肉の様。

群がる女性達は、あっという間に服を買い占めていく。

「よっしゃぁぁああ！　とったぁあああ！」

「チッ、何もとれなかったわ……」

「結構かわいいじゃん、はやくお金払ってきなよ」

結局服を買えたのは美歩だけのようだ。
美歩は、はやく清算を済ませようと歩き出す。

だがその時だった。
その泣き声が聞えてきたのは……

「うぅぅうぅぇぇっぇえええ！　もう何にも残ってないぃ！」

美歩達はその悲痛な声がした方向を振り向いた。

そこにいたのは、残念そうにしている……女性。
自分達より少し上程度だろうか？　だけど雰囲気が大人の女性だ。
思わず息をのむ三人。

どうやら服を見に着たらしいのだが、もう売り切れと言う訳だ。

しかし驚くべきは……

（け、けっこう……いやかなり綺麗ね……）

（胸でかっ！　腰ほそっ！　うらやましぃぃッ！！）

（……なんか、エロい）

三人はその女性のなめ回す様に見ていた。
はたから見ればかなり怪しいヤツだったろうに……

だが、悲しそうにうつむいてる女性を見て、美歩達は申し訳ない気分になってしまう。

「あ、あのぉ……」

「うん？」

「これ、よかったら……余り物なんですけど……あははは」

「え！」

美歩は自分の持っていた服を女性に渡す。

「で、でも！　悪いわ」

「いやいやいいんすよ。
アタシら別に買う気はなかったんですから」

「あら……そうなの？」

ブンブンと首を振る三人。
それを見て女性の表情が輝く！

「ありがとぉぉ！　けっこうかわいい服じゃない！」

女は美歩から服を受け取ると
三人にもう一度お礼とウインクをしてレジへと向かうのだった。

残された三人は、尚も女性をジッと見つめる。

「服は買えなかったけど――――」

「いいもの見たね」

ニタァァァ……三人はいやらしく笑うと、学校へと帰っていくのだった。

薫達が妖艶な少女に見とれていた頃……

人気のない地下道で女の子の様な少年が男たちに囲まれていた。

薄暗い地下道、通る人もいない。
少年を助ける人もいないと言う事だ、まさに絶望的状況だろう。

「おい、お前どこみて歩いてんだ？」

「あの……ッ！　――――ぃ！」

「あ？　聞えないんだけど？」

そう言って男は少年の胸ぐらを掴む。
少年は怯えているようで、足をガタガタと震わせて目に涙を浮かべる。

それを滑稽だと男たちは笑った。

「ハハ！　だせーなコイツ。

まあいいや、ねえ君？
俺達お金持ってないんだよね、ぶつかったのは仕方ないからさ

せめて慰謝料払ってよ」

「ぇぇえ……」

そんな無茶苦茶な、当然嫌がる少年。
しかし、そんな彼の頬を軽く男は叩く。痛みと恐怖が少年の心に襲い掛かる！

「それで許してやるっつってんだ。
さっさと金だせよ、ぶん殴るぞ」

「ぁぅ……」

少年はブルブルと震えて固まってしまう。

怖い。

怖い！

そしてその時だった

「あ？」

一人の男に誰かがぶつかる。
一体誰が？　男は舌打ちをしながら振り返った。
振り返ってしまった。

「づぅあああああああああああああああ！」

「！！」

男にぶつかった少年は、突如腕を押さえて地面へと倒れこんだ。
悲痛な叫びに男たちも思わず目を見開く。

「ウッ！　あああああああ！　出てくるなぁぁぁ！
お前は血を求めるなァァアアアア！」

「な、何だコイツ！？　きもちわりぃい！」

少年は腕を押さえて白目をむいている。
体を大きく震わせている少年に、男たちは寒気を覚えた。

「お前ら逃げろっぉおお！
早くぅうぅ！
じゃないと俺ももう抑えられないぃいいいいい！」

「はぁっ？」

「あああああああああああああああああああああああ！！」

「何だこいつマジできもちわりぃい！」

男はとっさ的に蹴りで少年の腹を抉った。
苦痛の声を漏らしながらも、少年はなおも叫び続ける。

「くそっ！　くそッ！！」

男たちは少年を囲んで蹴りの嵐を浴びせる。

「いでででっ！　ちょ！　おまっ！
……じゃなかった。

やめろぉおおおおおおおお！
アイツが目覚めるうぅぅうぅう！！」

何か、素が出た様な気がした。
それを男達も感じ取ったようで、ニヤリと笑いながらもう一度少年の腹部を抉る。

「うるせぇよっ！」

「あ…ぁ……」

どうしてこんな事をするんだ！？
少年、リラは理解できない。
人が人を傷つけるなんて…

でも、とにかくあの人を助けなければ……

「君達！　何をやってるんだ！」

「ッ！！

やばいッ警察だ！　逃げるぞ！！」

「！」

突如現れた警官に男たちは驚き、そのまま走り去る。
何故こんな人気の無い場所に？
リラは混乱するが、助かったことは幸いだった。

「君達大丈夫か！？」

「ええ、まあ」

「？」

リラは疑問に思う。
さっきからアレだけ苦しんでいた少年が
冷静に警官と話し合っているのだ。

警官をうまく言いくるめて、少年はリラの手を取って走り去った。

「いててっ！　あのくされＤＱＮ共……ッ！！
　あああイラつくッ！！
　全員将来禿げろよクソ！」

「だ、大丈夫ですか！？　あのッ……腕は？」

「ああ、大丈夫さ。腕？　ああ、あれ演技ね」

「えぇ！？」

少年は涼しい顔でメガネの位置を直す。

「お、いたいた！　おーい、良太郎！」

少年、椿は向こうの方で手を振っている良太郎と合流する。
警察を呼んでくれたのは良太郎だった。
椿は良太郎に、愚痴をこぼすと何事も無かったかのように歩き出す。

「あなた、大丈夫？」

「あ、はい……あの、本当にありがとうございました。
ぶつかった人が怖くて…」

「気持ちはすごくわかるよぉ」

良太郎の隣を歩いていたハナにリラはお礼を言う。
良太郎も幾度となく体験した話だ、共感できるのだろう。

「ここでいいのか？」

「あ、はい！　もう大丈夫です。ありがとうございまし――」

そこでリラは気づく。
道路を挟んで向かいの歩道に男の子が歩いていた。

問題はその上だ、マンションのベランダにあった植木鉢が強風によってバランスを崩したのだ！

「危ない！！」

「！」

リラの言葉に椿達もソレを理解する。
植木鉢はもう落下する寸前！！

「エース！　頼む！」『ターン・アップ』

椿はすばやくエレメントを発射し、植木鉢を弾いた。
一瞬で他の人には見えなかっただろうが、リラはしっかりと見てしまう。

「そ、その力……ッ」

「ん？　あはは……内緒だお！」

そう言って椿達は走り去ろうとする。
だが、リラはどうしても一言聞きたかった。

「待ってください！
どうしてあの時、その力を使わなかったんですか！？」

「んー……この力は、
そう言う事の為に使うもんじゃないからだな（キリッ」

そう言って椿達は走り去る。

その背中をリラは目を見開きながら見ていた。

「力の……使い方……？」

リラは小さくなっていく椿たちを見て、グッと自分の胸を掴む。
発作を抑えるようにしながら、彼は少し微笑んで踵を返した。

椿達が銀髪の少年と知り合っている頃……

「どう…？　里奈ちゃん、楽し…い？」

「はい！　ありがとうございます真由先輩！」

「よかった……」

真由は里奈の車椅子を押しながらいろいろな店をまわって行く。
後ろから見守る双護の目も温かい。

普段はあまり外に出られない里奈、そんな彼女に少しでも楽しんでもらおうと真由は張り切っていた。

もちろん亘も、どうしてもついていきたいと言っていたがたまにはこう言うのも悪くないだろう。

「！！」

立ち止まる三人。
しばらく歩き回っていると豪邸を見つけたのだ。

周りの景色に不釣合いな程の凄さの為、三人は思わず足を止めてしまう。

まるで漫画やアニメにでもでてきそうな程の家だ。

「すごいね……」

「うわぁ、一度こんな家に住んでみたいなぁ」

「……フッ」

そこで里奈は気づく。
そういえば双護達は・・・

「双護さんもこんなお家なんですか？」

「まあ、もう少し小さいさ」

「へー！　すごいですね！」

「今度遊びにきてね……」

三人は笑顔でその場所を去ろうとする。
その時だった、風が吹いたのは。

「あ！」

「ッ！」

屋敷から帽子が飛んできた。
風のせいで飛んできたのだろう、双護はカブトゼクターに合図を送

って帽子をキャッチさせる。

『どうだぁ双護、今の俺のキャッチは何点だったよ？』

「フッ、確かに卵焼きはおいしいな」

『洗濯機でプリンは作れないに決まってるだろッ！』

「『……ナイス！』」

「・・・」

ど、どういう事なの…？

会話の意味が全く分からない。

里奈はハイタッチ（？）を決める二人（？）の謎会話を理解するのを諦めると、帽子を屋敷の人に返すよう提案する。二人もそれに賛成し、恐る恐る屋敷の門を潜った。

「すいませーん、誰か……」

誰かを呼ぼうと思った時だった。
庭の方で一人の少女が紅茶を飲んでいたのだ。

その儚げで優雅さが溢れる空気、
そして美しい深い…まるで海の様な色をした髪が風になびいている。

少女は双護達に気がついたのか、のんでいた紅茶を置いて立ち上がる。

「……あら、この場所が分かるという事は――」

いえ、何でもありませんわ。
そう少女は言って、視線を帽子へと移した

「その帽子……拾ってくださったのですね！」

「あ…うん！　どうぞ！」

真由はパタパタと走って行き、少女へ帽子を渡す。
少女はお礼を言うと、そのまま三人を手招きする。

「私はマリン、さあどうぞお座りください。
お礼に紅茶とケーキをご馳走しますわ」

ケーキと言う言葉に三人は目を輝かせる。
マリンも笑って、小さなティーパーティは始まるのだった。

「本当にありがとうございます。お気に入りの帽子なんですの」

マリンは言う。

飛んでいってしまった時はどうしようかと思ったらしい。

とりあえず執事が帰ってきてから探しに行こうと思っていたようだ。

「し、執事ですかぁ」

やっぱりお嬢様って本当にいるんだなぁ。

里奈は目の前にあるケーキや紅茶を見てしみじみ思う。

どれこれも自分が今まで食べたことのない様な……

何かこうキラキラしている気がする。

今まで至高の一品だと信じて疑わなかったコンビニのスペシャルショートケーキ。それを幸せそうに食べていた自分を考えて何か寂しくなってしまった。

だが、同時にお姫様の様なマリンに出会えてこみあげる嬉しさと言うものもある。

まあ尤も、双護や真由はこのケーキと同レベルの物を頻繁に食べているため、特に何も思っていなかった様だったが……

「でも、かわいい帽子ですね」

「……」

沈黙。

「……え？」

どうして沈黙するのか、里奈は焦る。
まさか、実は自分だけ美的センスがおかしいのだろうか？

プルプルと震えるマリン。
里奈は体から嫌な汗が噴き出るのを感じた。

やばい、もしかしてＮＧワードだったのか？

素直にかわいいとは思う、しかしもしかしたらマリンは気に入っていなかったとかそう言うオチか！？

双護さん助けて……ッ　あ、駄目だわ。寝ちゃってるわ

ごめんなさい！　里奈がそう言おうとした時――ッ

「わかりますのッッッ！？！？」

「！？」

マリンは里奈の手を掴んで顔を思い切り近づける。
驚く里奈と、目を輝かせているマリン。

「この帽子、かわいいですわよねッッ！！？？」

「え……！？　えと……うん！」

コクコクと首を振る里奈に、マリンはとびっきりの笑顔を浮べた。

「そうですか、そうですか！
なんてすばらしいセンスをお持ちなのかしら！」

満足そうに笑ってマリンはしばらく里奈を褒めまくっていた。
まあ褒められて悪い気などしない。

里奈は照れくさそうに笑う。

「このイチゴおい……しいね」

真由は真由でケーキに夢中の様だ。
だがしかしこれも――

「すばらしいッッ　ですわッッ！！」

「ふぃ……？」

「そうですの……ッ　そうなんですのよぉ。
そのケーキはイチゴに特別なこだわりがあるんですの」

確かに、里奈もイチゴが特別おいしいと感じていた。

「なのに……ッ　なのにアイツらはぁぁ……
何を食べても上手いしか……ぁぁ」

どうやら、彼女の知り合いは彼女の趣向を理解できない連中らしい。

なかなか苦労しているのだろう。

「・・・」

真由はそんなマリンを見て手をスッと差し出した。

「？」

「お友達……なろ？」

「え？」

今度は、ボクがケーキをご馳走するから。

そういって真由は微笑む。

「い……いいんですの？」

「うん！　お友達！」

マリンは笑顔で頷く。
もちろん里奈も双護もだ。

しばらく四人はそうやって楽しく談笑するのだった。

そんな彼らが優雅に過ごしている頃。

「すみません、ご迷惑を……おかけして」

「いや、別にいいんです。　ねぇ？亘くん」

「はい、気にしないでください」

拓真と亘は、偶然出会った少年、タイガの荷物を持っていた。
どうやら食材や生活用品を揃えていたようだが、一人で運ぶにはいくらなんでも無理がある。

すぐに手伝おうという事になったのだった。

「でも凄いですね、この量……」

「はい、お嬢様や他の皆さんのお食事の為に……」

「へー、大変ですね」

『皆さん』そしてタイガの身なりから察するにどこかに仕えているのだろうか？

それともそう言うバイトなんだろうか？

拓真たちはいろいろと考えてみるが、直接聞くのもどうだろうか？そんなこんなで聞けないでいた。

「本当にありがとうございます。今度お礼をさせてください」

「え！　いやいいですよお礼なんて」

「でも……」

「いやいや！」

「だけど……ッ」

「いやいやいや！」

※その後三十分この下りが続きました。

その内、亘と拓真が妥協してお礼の約束を取り付ける。
少しタイガの話を聞いていたが、どうやらお互い苦労しているらしい。

「頑張りましょうね」

「お互いにね」

「踏ん張ろうね」

そう言って三人は笑う。
彼らは美しい夕日をバックに歩いていくのだった。

しかし、平和な事だけでは世界は回らないのかもしれない。
悲しいが、戦いの輪廻は繰り返されるのだ。
彼らの……様に

「くっ！」

「ふふっ……」

頬を伝う汗を感じる。
人気のない広場で、二人の少年が対峙している。

分かっている、相容れぬ存在だと。

認め合えないのだとッ！

分かり合う事は……無いのだとッッッ！！

「また会ったね、司」

「ああ、そうみたいだな。海東！」

司と海東、二人の男はにらみ合い。

相手の出方を伺う。

一歩間違えれば、それが即敗北に繋がる極限の状態。
彼らの実力は均衡している、ならば――ッ

勝敗を決する一番の要因。
それは、どちらが先に仕掛けるか。

なのではないか？

「「――――っっ！」」

そして、両者は動き出す！

「「うおぉぉおおおぉぉおおおおッッ！！！」」

「「ジャンケンポン！」」

司はグー、海東はチョキ――ッッ

大いなる巨岩は、切り裂く洗礼をただ沈黙させるのみ。

「っしゃあああぁぁあああああ！！」

そう、彼は勝ったのだ。

運命、それは世界を揺るがす要因の一つでしかない。

彼は勝ったのだ。

何度でも言おう、司は勝ったのだ。

「ちょ！　なん……でッ」

崩れ落ちる敗北者。
愚かな負け犬に何を吼える資格があると言うのか、凡夫に哀れな祝福など似合わない。

無慈悲な末路しか許さぬ決意。

それすらも、破壊者はあざ笑うのか？

「じゃあな海東！
何でこの世界にいるのかはわかんないけど、どうせ教えてくれないんだろ？

じゃあめんどくさそうだからいいや！
ばいばーい、お宝……アレ？

あ、まあいいや」

「ま、待ちたまえ司！　もう一度だ！」

「えー、何でだよ。俺、勝ったじゃん」

「だれが一回勝負って言ったの！　ほら、いくよ」

仕方ない。司は手を差し出す。

それはまさに神でさえも運にゆだねし悪戯がごとく勝敗を決する。

通称・じゃんけん。

彼らの戦いは、既に握りこぶしと言う巨岩……

いや意思を構えた時点で始まっている。

示すのは答え。

全てを切り裂く刃。それはまさに閃光（チョキ）

あるいは、大いなる宇宙でさえ包み込む有限にして無限の抱擁（パー）

はたまた、恐れを知らぬ唯一の真実、抗う事すら認めぬ彗星（グー）

果たして、結果と言う舞台に立つのはどの役者か？

それは時間の追従を許した神のみぞが知る。

しかし神よ、何故あなたはこんな戯曲を記したのだろうか。

何故、彼らは戦っているのだろう?

誰も分からない。いや本人達ですら分からない。

運命とは残酷だ。
ただ司はコンビニへ漫画を買いに行っただけ。

ただ海東は裂けるチーズを買いに来ただけ。
できればおでんも買っちゃおうかな、ちょっと贅沢かな。

いやでも玉子が食べたいな。なんて事も彼は考えていただろう。

されど、出会ってしまった。
しかし、出会ってしまったのだ。

交わる事のなかっただろう二人、しかし出会った。
ならば、戦わなければならない。

それが彼らの答え。それが彼らの真実。

てか私は何でこんなどうでもいい事をダラダラと長文で書き綴っているのか。

ううん、そんな事はどうでもいい。
私はただ、ただ彼らの戦いをここに記すまで。

ジャンケンポン！

放たれた言葉に意味はない。
それはただ理由と言ういい訳を世界に容認させるだけのつまらないノイズ。

司はパー、海東はチョキ…それだけが欲しい。
それだけを迷える子羊に与えてやってくれ。

「まあこれが当然の結果なのかな」

海東は感じていた。我こそが勝者なのだと。
我こそが舞台で踊る事を許された英雄なのだと。

確信していたのかもしれない。

「……一回目で止めとけばよかった」

後悔と言う檻に縛られし愚者。
彼もまた舞台に立つべき一人なのだろう。

ならば、彼は知っているはずだ。次に自分が紡ぐべき言葉を――

「海東、もう一回だ」

「えー、今ぼくが勝ったのに……」

「ふーん、にげるんだー？」

「あ、そう言う事言うんだ。
あ、そう言う事言っちゃうんだ」

再び構える二人。

それでいい。

それがいい。

こうして二人は意味のない戦いを、一時間繰り返したのだった。

「ふっ、次に会うときはぼくの仲間と共に
総攻撃をしかけてあげるよ。

覚悟したまえよ」

「んー。あ、十円たりないなぁ。夏美に両替してもらお」

「きいてよッ！」

「え？　ああ、うん。俺も負けないぜ！」

こうして二人は別れたのだった……
本当に何で彼らは戦っていたのだろうか？

そうやって、彼らの休暇は終わっていくのだった。

帰って来た彼らは皆、口を揃えて言う。

『今日、凄い人に会ったんだ』

第１４４話　番外編　出会いは突然（後書き）

説明をここで

カブト・デュアルゼクター

三種類の能力を任意で発動させることができます。
クウガゴウラムとは違い、自らの攻撃力は低いので単体では敵を倒す事は難しいです。

鏡治は、ゼノン達からガタックエクステンダーを支給されました。

はい、こんなところかな。
では次もよろしく！

第１４５話　大切な注意&プロローグ（前書き）

はい、詳しくは本文で。

次回更新は結構先なんで、プロローグを今見ないというのもアリかもしれません

ではどうぞ！

第１４５話　大切な注意&プロローグ

はい、どうも。

今回は前書きが長いので本編の中に入れました。

この話から見る方も、今まで見てくれている方も
ちょっと注意書きがありますので、それを見て欲しいなと！

今回から響鬼編です。
この後にある話はプロローグ的なもので、本編が本格的に始まるのは……

まあそうですね。ちょっとリアルが忙しかったり、話の整理をしたいので
すいません、次の更新は一週間か……まあちょっと長い期間が空くかもしれません

予定としては……そうですね。まあ七日か、そこら辺あたりかなと！

で、ですね。

すいません、長くなりまして。

今回の注意書き、それは本格的なゲストキャラクターの登場です。

簡単に言うと仮面ライダー以外の作品からキャラが登場すると言う事です。
魔女もそうなんですがね。

もう隠す意味もないので、明かしますが『鬼太郎』のキャラクターが出てきます。
妖怪と言えば……やはり彼らをちょっとどうしても出したかったので。

ただ、これが本当に申し訳ないんですけどパラレル色が強いです。

もちろん僕は二つの原作のファンなのですが
オリ設定の多さ故、ちょっと原作ブレイク的な物が入ってしまうかもしれません。

だからクロスって程じゃなく、響鬼編の世界に出てくる鬼太郎達と考えてもらえると助かります。
1～5期のどれかではなく、オリジナル設定の彼らと言う事ですね。

あとすいません、キタネコ要素ありです。

人によってはクロスや改変に嫌悪感を覚える方もいると思います。
一応タグに鬼太郎の名前は入れようと思うので……
もしタグから来て、そう言うオリジナル設定やクロスが苦手な人はバックをお願いします。

今まで見てくれた方で、そう言う事に嫌悪感を覚える方は本当に申し訳ありません！
どうか、広い心で見ていただけると助かります。

では、分かったと言う方は下へスクロールをお願いします。

最後の試練。
彼らはクリアできるのでしょうか……

E

i
s

d

E

C

D
E

?

「……何だ？」

どこともつかぬ書斎。
その扉が開き、ナルタキがその姿を見せた。

相変わらずのフェルト帽とメガネは、ある意味歴史を感じる。
まるで明治時代辺りからタイムスリップでもしてきたようだ。

魔女はそんなナルタキを確認するとニヤリと笑う。

「そなたにとって悪い知らせがある」

「何ッ？」

そなたにとって。ナルタキはまずその言葉に顔をしかめた。

自分にとってであってコイツにとっては面白みが増す何か……と言ったところか。

嫌な予感がする。

できれば聞きたくはない言葉だ。

ナルタキは苦い顔を浮べて詳細を求めた。

魔女はニヤついているが、コチラにとっては本当に重大な事なのだろう。

「ククククッ……フフフ……」

彼女の性格を考えて、またナルタキはため息をつく。

魔女はコチラが苦労している姿をみるのが好きらしい。

大変結構な性格だ本当に。ナルタキはもう一度詳細を求めた。

魔女は頷くと、その本をナルタキに差し出す。

ナルタキはその本の題名を確認すると顔色を変えた。

それを見て、また魔女は笑う。

「司……ディケイド組みか」

「エピソードディケイドは既に完成を迎えようとしていた。

そこにきて――――」

魔女は言葉を止めてナルタキに問いかける。

続きが気になるか？　……と

「早く教えてもらおうか。茶番に付き合う程、暇じゃないのでね」

「それは残念」

ナルタキはもったいぶる様に振舞う魔女に若干の苛立ちを覚える。

しかし魔女にとってはそれが目的なのだから、一々反応していては埒があかない。

だからナルタキは沈黙を続けた。

魔女は少し期待はずれな回答にふてくされると、
もう引き伸ばしは無駄だと悟ったのか、素直に口にする。

「簡単に言おうか？　この試練で女が一人死ぬ」

「……ッ！」

今度はナルタキの反応が予想通りなのか、魔女はクスクスと笑った。
残念と言う反応と、ディケイドでなくて良かったと言う非情な感情に自己嫌悪を浮かべたナルタキ。

それを女は滑稽だと笑う。

「惜しいな、ここまで誰一人欠ける事はなかったが……」

「前回……は壊滅的だったな。前々回は誰一人欠ける事はなかったか。

流石に確立は低いものだ」

ナルタキは深いため息をつく。
若い命が散るのは彼とて心苦しいものだ。

なんとか助けてやりたいものだが…

「どうにもならないのか？　できる事ならゼノン達に……」

「そなたが仕掛けておいてよく言えたものだな、ククククッ」

だがメリットがない訳ではない、女はナルタキにそう囁く。

『メリット』

その言葉にナルタキの動きが止まる。
ああ、なんと言う事か。
魔女の囁きにナルタキはつい耳を傾けてしまった。

「メリット？」

「女の死がトリガーになる可能性が非常に高い。
死を持って仲間は覚醒する。
ありきたりな展開だが世界はそれを物語として認めると言う事です」

やめておきなさい、魔女の言う言葉を鵜呑みにしては駄目。

――などと、幼い子供達は絵本の中でそれを知っただろう。

絵本の中の『世界』でそれを学んだだろう。

しかし、この魔女はそう簡単なものでもない。

ナルタキは迷う事無く、話しに乗ることにした。

「試練を簡略にでき短縮できると言うことか」

その通り、魔女は笑う。

死ぬらしい少女を見捨てる事で、試練を早急に打ち切れると言う訳だった。

そうすれば彼らの目的であるエピソードディケイドは完成を向かえる。

一人を犠牲にするだけでいい……？

「・・・」

ナルタキは迷う。
少女を見捨てる事で結果、多くの人間を救える可能性がでてくるのだ。

それは彼の目的。

反面、少女を助ける選択を選べば最悪全滅さえありえる。
それだけは避けたい、ディケイド組みはナルタキにとって切り札なのだから。

たった一人の命……

「……こちらからは干渉は控える様に、今まで通りでいく」

「ククククッ！　少女より『物語』をとりましたか」

ナルタキは眉をひそめ女を睨んだ。
鋭いオーラだったが、魔女は声をだして笑う事を止めただけで、口はつりあがったままだ。

「しかたあるまい。
一人の命を犠牲にすれば試練を簡単に終わらせられるのだから。
しかし何故貴様は少女が死ぬ事を知った？」

「すこし暇だったから予言をやってみただけです、結果は言ったとおりだ。
彼女は百パーセント死ぬ。
残念です、私も」

敬語混じりにクスクスと女は笑った。
こう言うヤツだ、本当に気まぐれだったのだろう。
しかし予言は本物。

少女は死ぬのだろうな、ナルタキは既に理解していたので特に何も言わずに背を向ける。

一人、減るくらいならば計算の内だ。
しかも少女。むしろこれは運が良かったと考えるべきか？

「・・・」

一瞬、そんな事を考えてしまった自分を戒めるナルタキ。
心の中で誰かも分からぬ少女に謝罪すると、足を速めた。

「どこへ？」

「一度、やつらの動きを見てくる」

そう言ってナルタキは書斎から出て行く。

女は特に視線を移す事はなかった。
そのままティーポットに手をかけると、新たな紅茶を入れるだけだ。

綺麗な赤がカップに注がれていく。
魔女はそれをつまらなさそうに見ていたが、注ぎ終わると小さく笑って『友人』を呼んだ。

「死に慣れるという事は恐ろしいですね」

話を聞いていたのか、彼は少し含んだ言い方をした。
どうやら少女が死ぬ事が納得できないようだ。

甘いとは分かっている。
自分が助ける事も……恐らくはないだろう。

魔女が予言した事は真実。それは理解していた。
だが、それでも……何かしらの希望は欲しいものだ。

「決断を迫られたとき
冷静に考えられる様になる事は利点か欠点か？

ククク……」

本棚の影から現れた友人に、魔女は紅茶を差し出す。
友人はお礼を言って紅茶に舌をつけた。

二人はしばらく無言で紅茶を飲んでいた、少し笑みを浮かべたまま。

「ゼノンとフルーラには言ったのですか？
彼らは担当者に情を移すクセがある」

「それは、そなたもだろう？」

確かにそうだ、でも割りきる時は割り切りますよ。
友人は言う。

今回も……どうしようもないのなら――

諦めるべきだろう。

「いや、また独断で命令を無視されては困るからな
彼らには言ってはいませんよ」

友人は笑みが増した魔女を見て、自分もまた静かに笑う。

嘘だな、彼女はゼノン達に命令はするが強制はしない。
どの様な結果になろうとも彼女にとっては関係ないのだから。

ただ暇が潰れるかそうでないかの差でしかない。
それは世界でさえも、命でさえもそうだろう。

ナルタキに協力こそするが、あくまでも彼女は自由だ。

「私は世界がどうなろうが、それをありのまま受け止める。
それが観測者としての義務だからです。

私がいくら言葉を、行動を起こそうとも
テレビの中にいる人間には何も影響がないのだから！」

「……だが『眼』は違う、そうでしょう？」

「私はただ視るだけ、その眼がどこへ向かおうとも…私は構わない」

女はそう言って、またクスクスと笑いだすのだった。

楽しいですか？　友人は問いかける。

「さあ？　しかし、暇はつぶれる」

だから、退屈させないでほしいものだな。

魔女はそう言って、また口を吊り上げるのだった。

「行くのですか？」

「ん？　ああ見送りにきてくれたのかい」

「ふふっ、嬉しいわ！」

そう言ってフルーラは友人を撫でる。
新たな世界に降り立とうとするゼノンとフルーラ。

彼らを見送りに友人が現れたのだ。
いや、もちろんそれだけではないのだが。

友人は、ナルタキに与えられた課題の話を二人に振った。
まるでそれは、宿題をやってきたかどうか友人間で確認しあう子供の様。
しかし、そんな簡単なものでもない。

「私は全て済ませましたよ。そちらはどうです？」

「ああ、カブトの時は仕事も少なかったからね。その間にやっておいたよ」

「龍騎勢は……どう言う判断を？」

「・・・」

友人の言葉にゼノン達は意味深な笑みを浮べる。

複雑な表情だ、じらそうとしていた事を当てられて

気まずく笑っているかの様に――

「リサイクル……ですね？」

「流石だわ、その通りよ。北岡秀一、秋山蓮、佐野満、霧島美穂」

そして――

「ほう、まさか城戸真司ですか」

「ははは、先に言わないでくれよ」

ゼノンは苦笑する。
友人は頬を膨らませるフルーラに謝罪すると、再び話の続きを求めた。

咳払いを一つ。
フルーラは手を上げ、声を高らかにして芝居がかった口調をつくる！

「彼等は再び舞台に上がる選択をしたの！」

「ほう……」

「ボク達も彼らにはもう関わらないでいて欲しかったんだけど……
ナルタキさんが一度声をかけてみろっていうからさ」

仕方なかったんだよ、そう言ってわざとらしく泣きまねをしてみせるゼノン。

しかし、急に真面目な顔に戻るとゼノンは一言だけ追加する。

「本当に、関わらないでいてほしかった。
関わらなければ、幸せなままだったのに」

成る程、友人は頷くと再び笑みを浮べた。

「それが、彼らの強さですよ。
だからこそ、彼らの物語は英雄として伝えられるのです」

「……かもしれないね」

「それにしても、城戸真司は不思議な存在ですね。
彼と野上良太郎は何故……？」

恐らく、パラレルワールドがより『神々』に観測されているからか。
友人は心の中で考察を広げる。

それをゼノン達は笑みを浮べて観察していた。
友人のクセだ、他人と話しているのに考え事を始めれば周りが見えなくなる。

「もういいかな、出発しても」

「おっと、これは失礼しました。お気をつけて」

友人に別れを告げ、笑顔で消えていく二人。
彼はその姿をジッと見ていた。

（さて、彼らも……私も、知らない事が多い）

ナルタキと彼女は知っているのでしょうね。
友人は少し自虐的な笑みを浮べて踵を返す。
知る必要は無い、しかし気になるのも事実。
まあ正直、自分はゼノン達よりは魔女側に近い。
彼女に直接聞けば答えてはくれるかもしれないが……

（ふむ、それはそれで味気ない）

その時だった。
ゼノン、フルーラと入れ替わるようにして新たな来客が訪れる。

「おや、貴方ですか。お早いですね、まだ時間は掛かりますよ」

現れたのは、男と一匹。
成る程、確かにオーラが少し違う。
友人は来客を確認すると頭を下げた。
男もそれに気づいたのか、彼の言葉に答える。

「別にいいさ。女性を待たせるのは俺の趣味じゃない」

『ほう、面白い場所に出たな』

現れた男はキザに笑ってみせる。
友人は呆れた様に微笑むと、大切なゲストを部屋に案内する事にした。

「よろしければ、後で一曲お願いできますか？
コーヒーもご馳走しますよ」

「ふふん、いいだろう。
野郎に捧げる曲はないが、まあお前は特別だからな」

そう言って、ゲストは友人を乱暴に撫でる。
その後に、これまたカッコをつけた様に笑う。

「ただし、コーヒーはやめてくれ」

「ああ、そう言えば苦手でしたっけ
これは失礼」

友人は軽い謝罪を述べると、来客と共に消えていくのだった。

第１４５話　大切な注意&プロローグ（後書き）

確か鬼太郎の５期にはダブルやフォーゼの脚本家さんも参加してたんですよね

まあどの話かは分かりませんがね

では今回はこれで

次もよろしく！

第１４６話　始（前書き）

はい、更新です。思ったよりは早くできました
しかしすいません！

今週、まあ来週もかな？
とにかくちょっと忙しいので更新は遅れてしまいます。

なので次は日曜安定かなと。
今日は少し長めか……な？

あとすいません！
最初に言っておきますと響鬼編、途中いきなり無駄に長い過去編入ります。
あと、バトルはいつもよりは少なめ……かも？

ではどうぞ！

第１４６話　始

突然だが君は、妖怪と言うモノを信じるだろうか？

『完全否定』

『非現実的』

『存在証明』

『都市伝説』

ああ……なぜ、簡単にいないと決め付けるのだろう？

常識的に考えていないから？

ではその常識が間違っているとしたらどうだろう。

君の知らない世界があったとしたら……どうだろう？

存在するかもしれない。
もしかしたら彼らにも社会と言うものがあるかもしれない。

もしかしたら今君の知っている人の中にいるかもしれない。

無いと言い切れるかい？
君の常識なんて本当に信用できるのかい？

君は世界の何を知っているんだ？

見た事がない？

世界中を君は探したのか？

もしかしたら君の隣の部屋にいるかもしれない。

行ってみたけどいない？
彼らも生きているんだ、動くにきまってる。

だから今は下の部屋にいるかもしれない。

おやおや、このままじゃいつまでも終わらないね。

ではもう一度聞こう。君は……本当に妖怪はいないと言えるのだろうか？

巨大な水晶がその部屋にはあった。
部屋と言うには岩肌が荒々しい壁や、生活用具がない為に、
見たところ普通の部屋ではないようだが……

そしてただのガラス球にも見えるソレ。
異様なオーラを放っており、禍々しくも見える。

そしてその怪しげなガラス球を囲む様にして、大勢の人達が立っていた。
年齢はバラバラで、中には――

人間とは思えない容姿の者もいた

「おぉ！」

ガラス球の中に、濁った影が浮かび上がってくる。
その影はしばらく時間を置いた後、徐々に人間の形を模していった。

そして、色がついて鮮明になっていくではないか。
水晶の周りに居た者達のざわつきが増す。

それほどまでにこの影が気になるのだろうか？

「……っ」

そして、影は完全な人間となり水晶の中に完成した。
静寂を保っていた室内はもはやどこにもなく、今は大声で誰かと誰かが叫びあっている様にも思える。

中に現れたのは制服を着た少女。
それだけが映っている。

この少女について人々は騒がしく言い合いをしているのである。

しかし、特に変わったところなど無い様にも見える。
そんなにこの少女は何かを持っているのだろうか。

「静まれッッ！！」

「「「！！」」」

老人ともいえるだろう男の一声で、場は再び沈黙を取り戻す。
それは紛れもない、圧倒的な力の差。

権力の差。

立場の差。

この一声で彼の力がどれだけ程の物かを伺える。
男は水晶に映る少女を寂しげな目で見つめると、ため息をついた。
だが、同時にハッキリと言ったのだった。

「この少女が……花嫁だ」

「「「「！！！」」」」

再び場がざわつき始める。
男自身は目を閉じていたが、周りをよく見てみると。

信じられないと言う目で男を見る者。
涙を目に浮かべているもの。
反面笑みを浮かべているもの。

そして、無表情の者と様々な表情がそこにあった。
誰しもがこの少女に対して同一の感情を持っていない。そんな様子だった。

そして、皆が揃って花嫁と言われた少女を見る。

「お待ちください総大将ッッ！
まさか、この少女を花嫁として差し出すおつもりですかッ！！」

男の言葉が納得いかないと言うように、一人の男が前に出た。
しかしこの男、明らかにおかしい。

この男が『人間』と言って誰が信じるだろうか？

男は一言でいうのなら――
黒い羽が特徴……我々がよく見かけるであろう鳥類、カラスだった。

カラスが服を着て立っている。
そして言葉を発している。

普通ならば大騒ぎになる事なのだが、
その場にいた者達は、カラスに対しては無反応だった。

代わりに、カラスが男に詰め寄ったのが驚いている様だった。

「その通りだ鴉天狗。
皆の者！　この少女を捕らえ、ここに連れてくるのだ！」

「なっ！！」

男の言葉に数名の者は頷き、姿を消す。
鴉天狗と呼ばれた男は信じられないと言った眼で総大将を睨んだ。

そう、睨んだのだ。

それがどれだけ危険で無知で無謀な事なのか、烏天狗は分かっているのだろうか？

「お止めください！　どう言う事か分かっているのですか！？」

「お前こそ分かってんのか？　ああ？」

「！」

そんな中、一人の女。
ヒトツミが鴉天狗の肩に手を置いた。

鮮やかで美しい茶色の髪。

ショートヘアーに映える美しい髪飾りと美しい着物。
その下はアレンジが加わっているのかスカートの様なものになっている。

顔は可愛らしいが、半面着物は大きく胸元がはだけているせいで美しさと妖艶さが増している。

さらに美しい足と肩。

普通の男ならば彼女とすれ違った場合、必ず振り向くだろう。
そんな彼女とにらみ合う鴉天狗

「どう言う事だッ？」

「言ったとおりさ、鴉天狗ちゃんよぉ？」

そう言ってヒトツミは水晶に映っている少女を顎でしゃくった。
鴉天狗は、ヒトツミから発せられる花の香りに混じった血の臭いに顔をしかめる。

本人は正当防衛の為にと言っていたが果たして…

「花嫁を差し出さなかったらどうすんだってハァナァシッ！
あの惨劇を繰り返すのかぁ？」

「グッ…それは……」

「お前さんの仲間も何人死んだと思ってるのさ？
ありゃ化けモン、アタシらと同じ存在だけれども話しすら通じな

い。

そんなヤツが救済の手を差し出してくれたのさ！
これを受けない手はないだろうにぃ」

「そのとおりだ鴉天狗よ。
心苦しい話だがあの惨劇を二度と繰り返さぬよう
我々は努めなければならない」

総大将とヒトツミの言葉に、周りからは賛成の声が少しずつあがる。
しかし尚も鴉天狗は反抗し続けた。
汗が酷い、彼も相当緊張しているのだろう。

「ですが総大将ッ！
私達は人間との信頼と友好を掲げてきました！
その人間を裏切る事になるのですよッ！」

「か、鴉天狗さん落ち着いてくださいッ！」

興奮する鴉天狗を長髪の少年が抑えた。

鴉天狗の言い分は分かる。

だが具体的な解決法がない限り、鴉天狗の言っている事は甘い理想論なのだ。

「離してくれ天邪鬼（あまのじゃく）ッ！

それでもッ！

それでも私は人間を裏切るような事はしたくないのだ！！」

甘い考えと言うのは分かっている。

だがそれでも人間との共存の為、彼は抗議を続ける。

そう、彼らは人間ではないのだ。

そして彼が無意識に言った言葉――

『裏切り』

その言葉に気まずい雰囲気が流れる。
分かっていた言葉、しかし誰もソレをあえて言わなかったのだ。
まさにそれは一番のＮＧワードと言うにふさわしいから。

「鴉天狗よ、お前の言いたい事は分かる。
だが、もし邪神が再び怒り狂った時、我々の力で邪神を止められるのか？」

「それは……」

鴉天狗は歯を食いしばる。
悔しいが、総大将の言っている事に反論できない…ッ

周りにいる者達も、反論の言葉がないから黙っているに違いない。

正論すぎる言葉には対抗できない。
言葉をぶつける事すらできないのだと。

「いや……鴉天狗の言う通りだ」

「え？」

しかしふと、弱々しい声が聞こえた。
それは鴉天狗の言葉に賛成する声、つまりは味方。

鴉天狗は急いでその声がした方向を探す。
どこか分からずにしばらく探した後、見つける。

茶色い髪で左目が隠れている少年を……

「なッ！！！」

探しても見つからないはずだ。
その声の主は少し離れた所にあった岩の中、正確には岩に埋め込まれていたのだから。

体は半分以上が岩に埋め込まれていて、両腕も埋まっていた。
まさに磔の様に少年は拘束されているのだった。

「鬼太郎殿！　あぁ何て事だ……ッ」

急いで鴉天狗は鬼太郎と呼ばれた少年を助ける為に岩へと駆け寄る。
だが、何をしてもそこから少年を助け出す事はできなかった。

そしてもう一人。長髪の少年、天邪鬼も驚きに目を見開く。

「鬼太郎…ッ！！　どういう事なんですか！？」

天邪鬼は顔を青くして総大将に問う。
しかしその事に答えたのは、総大将ではなくヒトツミだった。

「そこの幽霊族のガキは鴉天狗、んでお前と一緒のことを言っていたのさ。
皆で力を合わせて邪神を倒そうなんて馬鹿な考えをね。

だから封印させてもらった。
絶大な力を持ったヤツは何をするか分からないからねぇ？」

「なっ！」

その言葉に、岩に埋め込まれていた鬼太郎と言う少年が目を開いた。
大分弱っているようだが、その気迫は凄まじく。
思わず優勢にたっている筈の、ヒトツミの笑みを引きつらせる程だった。

「馬鹿な考え？
お前は分かっているのかヒトツミ。

今はまだ人間の少女を一人捧げればいいと思っているだろうが…
それは違う。

必ず邪神は要求を引き上げる、必ずだ！
その時、ボク達は…妖怪も人間も本当の意味で滅びを迎える事になるぞ……」

弱々しい声だが、少年はしっかりと総大将とヒトツミを睨みながら言う。
まるでそれは警告の様。

そう、彼らは人間ではない。
『妖怪』と言う種族なのだ、人間と共存し…助け合う。

だが今その秩序が崩れつつあるのだ。

「そん時はそん時だろう、やばくなったら行動すればいい話さ。

それとも何かい？
アンタらは一人の人間差し出しゃいい話をややこしくするつもりなのかね？」

ヒトツミの言葉に鬼太郎は首を振る。

「ボク達は人間を支配しているんじゃない、共存しているんだ…ッ！」

その言葉に再び烏天狗の目が光る。

「鬼太郎殿の言う通りだ！
神隠しと言うやり方で人を花嫁にするなど…間違っている！
花嫁の家族、友人、そしてなによりこの社会全体をッ！
……裏切る事になってしまうのですよ！」

今度は二人の言葉にちらほらと頷く者が出てきた。
しかし、それを総大将は一括する。再び静まり返るその空間。

静寂があたりを包み、再び総大将が静かに話し出す。

「鬼太郎、鴉天狗、お前達の言いたい事は痛いほど…分かる。
我らは人間を守り、人間も我らを守り、互いに共存を誓った関係だ。

その人間を我ら妖怪社会の存続の為、
裏切る事となったのは本当に残念に思う」

だが、しかし――総大将は水晶に視線を移す。

「しかし、私は総大将として…全ての妖怪と人間を守る義務がある。
この少女一人を犠牲にすれば……邪神は静まるのだ。

もし、花嫁を差し出さなければ邪神は怒り狂うだろう。
その時多くの血が流れることになる。

たとえ我々が力を合わせたとして、
邪神に勝てる可能性がどれ程あろうか？

恐らく、勝つ可能性と全滅の可能性。
圧倒的に勝つ可能性は少ない、ならば非情に心苦しいところだが
……

この少女には犠牲になってもらう他はないッ！」

その言葉に反応して各地で賛成の声があがる。
その声につられて、迷っていた妖怪達も徐々に意思を固めていく。

その事に苦い表情をうかべる鴉天狗と少年。
もはや彼らに賛成する者は十人いるかどうかかもしれない。

「鬼太郎、そなたをこの様な形で捕らえておく事を謝罪しよう。

だがそなたの考えは危険だ。
邪神に敵対すればただでは済まんだろう。
勝てばよいが負ければ取り返しがつかなくなる」

そう言って総大将はヒトツミに合図を送る。
ヒトツミは頷くと指をならして二人の妖怪を呼んだ。

「瑠璃姫、鏑牙」

「はい」

「・・・」

ヒトツミに呼ばれ現れたのは、針金の様な髪に鋭い眼光を持った少年と
西洋の様な洋服に身を包んだスタイルのいい女性だった。

二人はヒトツミの前へ移動すると、膝をつく

「こいつ等にこの幽霊族の坊やの面倒をみてもらう。
お前らは安心して少女を連れて来なッ！」

ヒトツミの命令じみた言動に皆困惑する。
しかしその言葉に従う者が一人、二人と現れて、遂には殆どの者たちが目的を遂行するために走り去っていった。

「鴉天狗、天邪鬼これは集団……世界の意見だ。
悪いがお前にも選択してもらおうか」

鴉天狗達は理解する。
これは選択ではない、命令だ。
もし協力を拒めば自分も岩の中へ…

「天邪鬼、鴉天狗……ッ」

「「！！」」

少年の眼が語る。

それを読み取ると、鴉天狗と天邪鬼は無言で頷いた。
そして総大将に向かって命令を遂行すると伝えると、黒き翼を広げて飛び去った。
天邪鬼もまた姿を消す。しかし残されたのは四人。

総大将とヒトツミ、鏑牙と瑠璃姫。

総大将は準備があると言って場を離れる。
完全に彼がいなくなるのを確認すると、鬼太郎と言う少年は再び眼を開けてヒトツミを睨みつけた

「何が……目的だ？」

「あん？」

ヒトツミは何故か楽しそうに笑ってその瞳を見つめる。

鬼太郎はその表情を見て確信した。

コイツは味方ではない、妖怪の事も人間の事も考えていないのだとッ！

「まさか…邪神を出現させたのは……ッ」

「いんやぁ、あたしらじゃないよぉ！
あたしらは坊やと同じさね。

そう、同じさぁ」

そう言ってヒトツミはケラケラと笑う。

そしてそのまま踵を返すと、歩き去ってしまった。

そう、彼女はもうこの『世界』に用はないのだから。

「ほんじゃあ後は頼むよ鏑牙、瑠璃姫ぇ？
しっかり坊やの面倒を見てやりな。

完全に岩の中に封じられた親父さんの分までねぇ！」

手を振るヒトツミ。
鬼太郎は無言でそれを見ていたが、彼女が扉に手をかけた時、最後の言葉を彼女に送る。

「面倒を…見る？　監視の間違いだろ？」

「……」

「うふふッ！」

ヒトツミの代わりに瑠璃姫が笑う。
ヒトツミはもう一度無言で手を振ると、完全に姿を消してしまった。

のこされた鬼太郎は、瑠璃姫と鏑牙に視線を移す。

「お前達は、花嫁についてどう考える？」

「私は素敵だと思いますよ。儚く、それでいて美しい」

「余計な話だ。俺には必要ない」

瑠璃姫は瞳を潤ませ、鏑牙は淡々と呟く。
双方は花嫁について特に何も言う事はないらしい。

鬼太郎は諦めたようにため息を吐くと、そのまま眼を閉じた。
この封印石は想像以上に強力の様だ。

襲ってくる疲労に耐え切れず、彼の意識はそこで途切れたのだった。

第１４６話　始（後書き）

クラヒフォーゼ買いましたｗ
いやぁ、やっぱＲＸカッコイイですわ

さて、今回はこの編で
次もよろしく！

第１４７話　恋（前書き）

緊急更新ってなもんです。

理由としましては、ちょっとごめんなさい。日曜の更新が危うくなってきたと言う事で、今日更新しました。

ちょっと予定がコロコロ変わるんですよね。

だから申し訳ないんですが、更新予告はあんまりあてにならないかもしれません

そこはご了承ください！

ではどうぞ！

第147話　恋

「ご苦労さまです。
ヒトツミ様、おかげで舞台を整える事ができました！」

「お！　出迎えたぁ気が利くね」

ヒトツミに向かって膝をつき頭を下げるのは、可憐な少女クルス。
クルスはヒトツミを尊敬の眼差しで見つめると、もう一度深く頭を下げる。

誰もいない部屋、そこへ漂うは黒い意思。

ヒトツミはつい口を吊り上げてしまう。
近い未来を思い、彼女はその光景に狂気混じりの笑みを浮べた。

「やはり貴女をスカウトした私の目に狂いはありませんでした！」

それはクルス、彼女もまた同じ。
様々な感情の本流、彼女は尊敬の眼差しでヒトツミを見る。

「だろう？　ははははっ！
ああ、後これ…中々気に入ったよ」

そう言ってヒトツミは着物をめくって裏側の生地をクルスに見せた。
そこにあったのは、金色の大鷲を模した刺繍。
クルスはそれを見ると、ますます目を輝かせる。

「素晴らしい……！」

「しっかしねぇ、次はもっと暴れられる役回りを与えて欲しいもんさね。
期待してるよ？　お・嬢・ちゃ・ん？」

「はい！　頑張ります！
それと……」

クルスは影に溶けるかのごとく立っていた少年、ＣＯＢＲＡに頭を下げる。
そして照れた様にはにかみ、お礼を言った。
その姿はまさに『可愛らしい少女』そのものだ。
誰しもが彼女の愛らしさに目を、心を奪われるのだろう。
それは、彼女が人間……ならの話しだが。

「ＣＯＢＲＡさん、ご協力ありがとうございました！」

ＣＯＢＲＡ（コブラ）。それがその少年の名前だった。
それは毒を持ち、圧倒的な威圧で君臨する蛇の仲間。
そのコブラと同じ名である。

だが名前の割にはＣＯＢＲＡと言う少年は普通の格好だった。
どこにでもいる少年、普通の服に身を包み、誰が見ても彼が『特別』とは思わないだろう。

少しハーフの様な顔立ちに、何か儚げな雰囲気がある少年だった。

「そうそう！
いやぁ、コイツがいなかったらもっと時間かかってたよぉ」

ヒトツミもＣＯＢＲＡに向かって乱暴な拍手をおくる。
だが彼はは不愉快そうに顔をしかめ顔を反らした。

事実、不愉快だったのである。
だが二人には照れているようにしか映っていなかったようだ。

「僕は…やる事をやっただけだ」

「ご謙遜を！　ではヒトツミ様、ＣＯＢＲＡ様！
後はデータを取るだけですので、どうかお先にお帰りください！
財団の豪島様にはこちらから報告結果を入れておきます！」

クルスは太陽の様に微笑むと、パタパタと走り出した。
それを見てヒトツミは笑う。

だがそれは子供を見守るような暖かいものじゃない。
額に汗を浮かべて……だった。

「ありゃりゃ、嘘ついちまったよ。ハハハ！」

「・・・」

「アンタがいなけりゃあの幽霊族の坊やを倒す事はできなかったかもしれない。
とんだ化け物がいたもんさ、いやぁ助かった助かった！」

豪快に笑うヒトツミを冷めた目でＣＯＢＲＡは見つめる。
だが、彼は少し戸惑った後に口を開いた。

「お前は…どう思う」

「んん？　何が？」

全てだ。

そう言ったＣＯＢＲＡ、ヒトツミはニヤリと笑って壁にもたれかかる。

大きくはだける着物が露出を増して、彼は思わず目を反らした。

それを青臭いとヒトツミは大笑い。

ますます機嫌が悪くなるＣＯＢＲＡをさらに馬鹿にすると、ヒトツミは答える。

「んまあ、率直に言えば微妙だわ。

こんな、ちまちましたやり方は性に合わないね」

「そうか……」

「でも、この世界を選んだ事は評価してやってもいいさ。
人間と妖怪の共存？　ハッ、反吐が出る。
人間なんざあたしらの餌だろうに」

「……ッ」

一瞬表情が緩んだＣＯＢＲＡだったが、また険しいモノに変わってしまった。
それに気づいたヒトツミは、またケラケラと笑い出す。

どうやら、彼は甘いガキと言う訳か。
ヒトツミは内心でＣＯＢＲＡを馬鹿にしつつ、しかしどこか共感していたのかもしれない。
彼の問いかけに、しっかりと答える判断を下した。

「んな目で見るな見るな。だははは！
全部の人間がそうって訳じゃないさ、あたしも心ってもんがある。
気に入った人間なら助けるし、喰らわねぇよ」

「……なるほど、少しは安心できそうだな」

「気持ちは分かるさ。
あの女、クルスっつったか？　ありゃヤバイね」

ヒトツミはわざとらしく鼻を鳴らして臭いを嗅ぐ動作を行う。
そしてまたわざとらしく鼻を押さえて手を振った。

「あたしも他人様の事なんざ言えた義理じゃねぇが、
あの女……血の臭いが尋常じゃない。

しかもこれは幼子だな。あの女、一体何人殺したのか？
くひひひっ、あたしだって子供を喰らうのは躊躇うもんだがねぇ！」

しかしヒトツミは、やはりどこか楽しそうだった。
それを冷めた目でＣＯＢＲＡは見つめると、自分達もオーロラを出現させて消えていくのだった。

世　　シ

ソ

テ

界

ハ

女

彼

殺

ス

ヲ

「・・・」

ククククッ！！

「・・・」

我夢は美しい月に照らされた中庭にいた。
この世界の月明かりはとても明るく、とても切ない。

蒼い光が中庭を照らし、すこし怖い程の静寂を保っている。

我夢は自分以外の人間が全て消えてしまった様な感覚に陥った。
世界中、広い世界に自分ただ一人が取り残された様な――

寂しさ。空しさ。悲しさ。

涼しい風は、より深く心に響く。

息すらも忘れるほどに静かで綺麗な夜だった。

「眠れないんですか？」

「ッ！」

中庭の入り口から涼しい風と共にアキラが現れて、我夢に声を掛ける。

まだ仲直りしてから間もない為に、

二人の距離にはどこか、ぎこちなさがある様に感じた。

それを証明するかの様にアキラは我夢の隣に座るものの、少し間隔があいている。

「そ、そうですね…あはは」

「・・・」

まだ少し気まずいものだ。
アキラも我夢も何も言わずにしばらくは時間が過ぎていった。

だが、ふいに我夢が口を開く。
別に沈黙に耐えられなかったからではない。
誰かに、自分がたった一人取り残されないよう――
話を聞いて欲しかったのだ。

「僕は…響鬼になれると思いますか?」

「・・・」

今まで全ての試練が成功という結果に終わり、いよいよ自分を残すだけとなった。
絶対に失敗してはいけない。

深く考えてはいけないのだと我夢は思うが、それでも少し緊張してしまう。
いや、もちろん皆がこのプレッシャーと同じ物を背負い、そして変身した。

それは本当に凄い事なのだと我夢は思う。

そして、自分は……どうなんだろう。

分かっている。こんな事を考えていても……

だが、やはり最後と言うプレッシャーは大きかった。自分が間違えれば――

どうなる……？

「――――え？」

うつむく我夢だったが、ふと何かに包まれる。
気づけばアキラに抱きしめられていたのだ。

「！！！」

真っ赤になって驚く我夢に、アキラは顔を近づける。
いや近づけるなんてものじゃない。

唇と唇の距離は一センチあるかどうかだろう。
冷静さを失って慌てる我夢をよそに、アキラは静かに囁いた。

「やっと、気づいたんです。
我夢君…私は、あなたの事が……」

「え！？　あのッ？？？！？！？？！！？」

アキラは目を閉じて、自分の顔を我夢に思い切り近づけ――

「！？！？？！？！？！？！？」

飛び上がるように起きるなんて、漫画だけかと思っていたがどうやら違うらしい。
とにかく布団から跳ね上がるように起きると、今の事が何なのかを確かめる。

先ほど、自分は制服を着ていた。
だが今はパジャマだ……

「……っ」

唇にはなんとなくな感触があるような、ないような……

――と言うか、今自分がいる所が中庭でない事から察するに、今のアレは夢なのだろう。

「ゆ……夢…！？」

落ち着け、落ち着くんだ。
必死に胸を押さえて冷静さを取り戻そうとするが、心臓の鼓動は増すばかりだ。

全く、なんて夢を見るんだろうか…

「ん～～……どうしたのぉアキラちゃん…」

「え？　あ、あのっごめんなさい真由先輩」

「眠れないのぉ…？　眠れないんだねぇ…

あ、そっかぁ…おトイレに行きたいんだねぇ？

いいよぉ、ついて行ってあげるねぇ」

「え？　あ！　う？」

そう、あの夢を見ていたのはアキラだった。
隣で寝ていた真由は眠い目を擦って立ち上がる。

アキラは戸惑いながらも真由について行くのだった。

とにかく混乱が酷い。なんとかして落ち着かなければ――ッ！

「むにゃ……」

真由はふら付きながら扉の前に立っていた。

と、言ってももちろんアキラはトイレがしたい訳ではないのでただボーっと座っているだけ。

そんな事よりさっきのは何だったのか、それだけが気になっている。

「おてては……ちゃんとぉ…洗わないと……ダメな…んだよぉ」

消え入りそうな声を聞いてアキラは我に帰る。

すぐに眠そうな……というか既に眠っている真由を抱えると寝室として使っている教室へと戻っていく。

だが、アキラの頭の中はそれどころではない。

先ほどの光景が一体なんなのか。何を意味するのかを必死に考えているのだ。

ああ、気のせいだろうか。唇が熱い気がする……

「す、すいません真由先輩。おやすみなさい」

「うぅぅん、おやすみなさい……」

アキラは頷くと、自分も目を閉じる。

だが

「・・・」

アレはなんだったのか！？

「・・・」

唇にのこる感触は？

「・・・ッ！！」

眠れないッ！！

全然眠れないッ！

無性に気になって全然落ち着かないッッ！！

「…っ」

時計を見る、時間は……一時だ。

そしてふと周りを見てみると、一つだけ布団が空になっているではないか。

女性陣はいつも集まって寝ているので誰かがいないという事になる。

誰がいないのだろうか、暗くてよく分からない。

「・・・」

完全に目がさえてしまった。

ちょうどいい、誰かを探しにでもいこうかな。

アキラはそう決めると、立ち上がるのだった。

「あ、あれ？　アキラちゃん、どうしたの？」

「ええ、ちょっと眠れなくて……となりいいですか？　ハナさん」

「あはは、いいわよ。どうぞ」

適当に外に出てみたら、屋上でハナが座っているのが見えた。
なにやら寂しげで深刻な表情をしていたが、アキラが隣に座ると彼女の表情は和らぐ。

「綺麗ですね……」

「うん、本当に……」

二人は屋上で月を見上げる。
この世界の月は驚くほどに美しく明るい。

二人はしばらく月をぼんやりと眺めていたが、ふいに口を開く。

「どうしてハナさんはここに？」

「あ……うん。ちょっと考え事をね。アキラちゃんは？」

「じ、実は――」

一瞬、話すかどうか迷ったが自分じゃどうしようもできない。
アキラはハナに相談する事を決めた。
夢の内容が妙に引っかかって気になるのだと。

「あはは、分かる分かる。
夢でそうなっちゃうとどうしても現実で意識しちゃうよね」

「あれ？　という事はハナさんもあるんですか？」

「……え　ゞ！？」

ハナは顔を強張らせてアキラから目をそらす。

「な、ないわよ？」

「嘘です」

一秒もないんじゃないかと思うアキラの返し。

「う……ま、まあとにかく！
まずそもそもアキラちゃんは我夢君をどう思っているのか。

そこからだと思う」

「弟とか……単なる友達ですよ」

「そんなまた一瞬で……」

もっと何か……こう、男と女的な意味だとハナから言われてアキラはもう一度我夢を思い浮かべる。

アキラは考える。
我夢のことをそんな風に考えたことなど無かったが――

「ッ！」

つい思い出してしまってアキラは唇を押さえた。
その様子を見てハナも苦笑しながらため息をつく。

「いろいろ、大変よね本当に。自分の思いに気づくのも」

「？」

さてと、そう言ってハナは立ち上がりアキラに手を差し出した。

「もう遅いわ。はやく寝ましょ？」

「は…はい……」

アキラは複雑そうにその手を掴むのだった。

「・・・」

ハナはそのつないだ手をジッと見る。
そう、これでいい。これでいいんだ

（良太郎、わたしは決めたよ……）

この手は離さない。

第１４７話　恋（後書き）

クラヒフォーゼなかなか面白いです。
中々使えそうなネタも多いと言うかなんというか

しかしタッグの同じ行動をとる機能あるならコンプリにまず使っとけば……

いやいやこの辺にしときましょうか
では次もよろしく！

第１４８話　離（前書き）

どうも、ちょっと滑り込み更新ですかね。

映画を見に行ってきました。
感想は一週間後くらいに書こうかなと思ってます。

本当におもしろかったです。
迷っている人は是非見に行ってみてください！
ダブルファンの人にもおススメです

では本編どうぞ！

「動き出す物語」

あ、あとすいません。後書きは凄く微妙にこの作品のネタバレ含んでるんで一応見たくない人は後書きとばしてください

一番最初の下りのヒントだしてます。
すごく微妙なんですけどねｗ

第１４８話　離

「ナルタキ、見つけましたよ。
この世界なら城戸真司達を再び龍騎に変身させる事ができるでしょう。
絶大な力を持つ原典（オリジナル）にして龍騎の再構築（ストーリー　リ・イマジネーション）を行った世界。
こんな条件のいい世界はもう見つけられないと言ってもいいかもしれません」

魔女は書斎にてナルタキに一冊の本を渡す。
受け取ったナルタキも、思わず強張るくらい……その本はある種、神々しいオーラを放っていた。

あきらかにそこらへんにある本とは違う異質さ。
ナルタキは慎重にページをめくっていく。

震える手を隠しながらもナルタキは確かに頷き、しばらくした後に本を閉じた。

「成る程、確かに龍騎と全く違うが、全く同じといってもいいな」

「こんな条件がそろっているのは、やはり仮面ライダー龍騎くらい

かと」

ナルタキは本を魔女に返すと、近くの椅子に座りため息をつく。
彼らが読んでいた本は普通じゃない。

いくらこの書斎に長く居るナルタキであろうと、その疲労を軽減する事はできないのだ。

「龍騎の問題はどうにかなりそうだ。後は……」

「この試練ですか」

そうだ。ナルタキは頷く。
しかし、その後に複雑な表情をして言葉を付け足した。

その口調は静かで、何も感情を込めようとしない、こめたくないと言う様子だった。

「尤も、この試練は簡単に終わりそうだがな」

「・・・」

もう一度ため息をはいて立ち上がる。
少し休む、そう言って書斎を出て行くナルタキを魔女は何も言わずに見ていた。

そうやってナルタキが出て行った後に、魔女はニヤリと笑う。

「結局、そなたを苛むのはいつも甘さか」

いや、それとも……半端な優しさか？

「どちらにせよ、決断の強さは持たなければな」

魔女はもう一度笑うと、紅茶に手を伸ばすのだった。

「じゃあ、もうカイは……」

「ああ、死んだ。
イマジンもあいつ等以外は皆消滅したらしい」

「・・・・・」

夜の校庭、その隅で良太郎が誰かと話していた。
人目もつきにくい場所。ましてこの時間におきている人はいないだ

ろう。

深刻な表情から、彼らにとってとても大事な事なのだと分かる。

「じゃあ……もうぼくの世界は平和……なんだね」

「……まあ、少なくともイマジンにおびえる事はないな」

良かった。

良太郎は微笑む、それを少年は複雑な表情で見ていた。

「野上、俺にも今お前らがどういう状況になっているのか全くわからねぇ。

だけど戻らなくちゃヤバイってのだけは分かる。

お前はどうするんだ?」

「・・・ッ」

「俺の前に現れたあの二人、普通じゃない。
現に今俺はお前と会えた訳だからな、だがそれも少しの時間だ。
もう一度聞くぜ、お前はどうするんだ？」

「侑斗……ぼくは――」

良太郎は、目の前にいる桜井侑斗（さくらい ゆうと）の言葉に沈黙した。
いや、以前の彼なら沈黙していただろう。
まだ迷いがあったから。
だけど、今は――

「彼らと一緒に戦うよ」

「……ッッ！！」

侑斗は少し驚いたように目を見開くが、すぐに苦笑する。

そういうと思ってたよ、そんな言葉をかけられて良太郎は目を丸くした。

「そうだな、お前はもう関わっちまったんだ。途中で逃げ出すのは……らしくないか」

正直、姉が悲しむと言えれば……まだ、可能性はあったのだろうか？いや、自分だって知ってしまった以上、無責任な事はいえない。

それに、自分も全く関係ないとはいえないらしい。

「できれば俺も協力してやりたいが――」

「ううん、侑斗は姉さん達を守ってあげて。みんな、大切な人なんだ」

「野上……」

侑斗は複雑な表情で頷く、そして良太郎にソレを差し出した。
驚く良太郎に説明する、赤い髪と青い髪の二人組みが言っていた。
世界にはちゃんと別のゼロノスがいて、ちゃんとソレも存在しているのだと。
侑斗はソレに力を込める、すると不思議な事に侑斗の体とソレが鈍く輝きだした。
しばらくすると光はやみ、侑斗は満足気に頷く。

「あの二人組みが言ったとおりだな、コレに力を込めると……」

侑斗の説明で良太郎はなんとなく理解する。
なぜ今まで普通の生活を送っていた司達が変身できた途端、戦いのセンスに目覚めたのか。

「これを、アイツに渡してくれ……それと、コイツを頼む」

「！」

侑斗の隣から現れた者を見て、良太郎は信じられないと言う表情を

浮かべる。
だが侑斗と、その者は『いいんだ』と、首を振った。
今までの話を聞いて、侑斗はその決断をした。
いや、もっと前からしていたのかもしれない。これから始まろうとしている事は『イマジンとの戦い』と言う。彼らの戦いだけでは済まない程、強大なものなのかもしれない。
そんな考えが、いつしか侑斗と彼の中でなかば確定しつつあった。
だから、その選択をする。その選択を決断したのだ。

「俺はもう俺一人で戦える。いや、俺は一人じゃない……」

受け入れてくれる者、そして教える者ができて。

「侑斗はぼくらの世界に必要だから……でもぼく達は――ッ」

良太郎は侑斗を説得しようと口を開く。
しかし言葉を遮ったのは他ならぬ侑斗自身だった。

「必要さ。お前だって、アイツだって…な」

「！」

侑斗は良太郎の決断を受け入れる。
彼らが決めた事だ、もう自分が何を言う事もない。
だからせめて……せめてすこしでも自分たちが助けることができたら。
それは、侑斗と彼の決断。

「よろしく、野上！」

「だけどッ！」

尚も拒もうとする良太郎を、侑斗は少し小突いた。
呆気にとられる良太郎に、彼は強く強調して言い放つ！

「いいか、俺はお前らとさよならするつもりはない！
お前らもそのつもりだろうな！」

「うぅ……もちろん。でもッ！」

だったら何も言うな！

そう言って侑斗は強引に良太郎とその者を押し出した。
それは彼らの絆。
たとえ離れ離れになろうとも、たとえ世界が彼らの絆を壊そうとも、
屈っしはしない。

「じゃあ、またな野上それに…お前も」

またな。

文字通りまた会えるであろう人に使う言葉。
それを合図にしてなのか、侑斗の背後に砂のオーロラと三つの影が
現れる。

「そろそろ時間だわゼロノス、お別れはすんだのかしら?」

「安心してくれていいよ、コレは永遠の別れなんかじゃない。
多分……ね。フフフッ」

「またね……ですか。成る程。
お話した通り、あの件もありますのでね」

侑斗は現れた三つの声に答えると、少し疲れた様にため息をついた。

ゼノンとフルーラ……だろうか？
向こう側の映像が乱れすぎていて全く誰か分からないし、シルエットもめちゃくちゃだ。

かろうじて声で分かる程度だった。
それにあと一人？　だれかいるのだろうか？

聞き覚えのない声が聞こえる。
女性のような？　いや男性かもしれない。不思議な声だった。

「そろそろ時間か……」

「ハナさんには会ったの？」

「ああ、さっき居たからな……」

侑斗が渡した力は何よりもハナの為と言ってもいいかもしれない。
全然意識していないとは言え、一応は自分の子供……なのだから。

「なんだかな……」

侑斗はため息をついて背を向ける。
そしてもう一度、また会えるさ……と、再会をすると言う事を前提とした挨拶を交わす。

「ゆう……と」

良太郎の隣にいた者は、思わず彼を呼び止めてしまう。
本当は離れたくない、別れたくはない。

だけど、これは別れなどではないのだと。
もう一度侑斗は叫んだ。

「しつこい！　じゃあまたな！」

声が震えているのは……きっと

「ちゃんと……しいたけは食べるんだぞ！」

「あああうるさい！　分かってるよ！」

乱暴に手を振って侑斗はオーロラの中に消えていった。
それを二人は名残惜しそうに、でも清清しく見送る。

「本当に……良かったの？」

「ああ、いいんだ。その方が侑斗も喜ぶ
野上もよろしくな！」

そう言って彼は良太郎を抱きかかえて、どこから取り出したのか。
飴を一つ彼の口に入れた。甘い香りと、優しい風味が広がって思わず良太郎は微笑む。

「……ありがとう」

「あははは、よろしく！　野上ぃ！」

その時、拍手が聞こえてきて二人は振り返る。
そこにはゼノンとフルーラ。二人がオーロラの向こうからコチラに来ていた。

「「はじめまして野上良太郎！」」

Ｅｐｉｓｏｄｅ　ＤＥＣＡＤＥ八番目の適合者！

「ビビョ～ゼェェ♪」

朝、鼻歌交じりで葵は朝の食事を用意していた。
最後の試練と言う事ですこし豪華にしてみたのだが……みんなは喜んでくれるだろうか？

「う～ん」

でも少し用意に時間がかかるかもしれない。
間に合うだろうか？　もう少しでみんなが起きてくるだろうに……

「手伝います！」

「え？」

急にそんな声が聞こえて葵は振り返る。
そこにいたのは――――

「ど、どなた……？」

この日、新しいメンバーが加わることになるのだった。

第１４８話　離（後書き）

この作品、一応オールライダーは目指すつもりです。
出番の多い少ないは別としてね。

って事で一番最初の龍騎の下りになってきます
どう言うことなのか……それは後々に

ではこの辺で、次もよろしく！

今日のお相手はホシボシでした
それじゃあ次回も、カメンラーイッ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9823s/

仮面ライダー　Episode　DECADE

2011年12月11日19時47分発行